

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第23集

堂 畑 遺 跡 III

福岡県うきは市吉井町新治所在遺跡の調査

上 卷

2005

福岡県教育委員会

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第23集

堂 畑 遺 跡 III

福岡県うきは市吉井町新治所在遺跡の調査

上 卷

2005

福岡県教育委員会



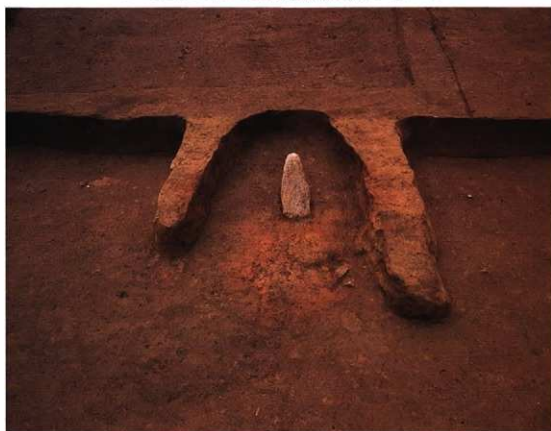
1 鷹取山頂から堂畑遺跡を望む（南西から）



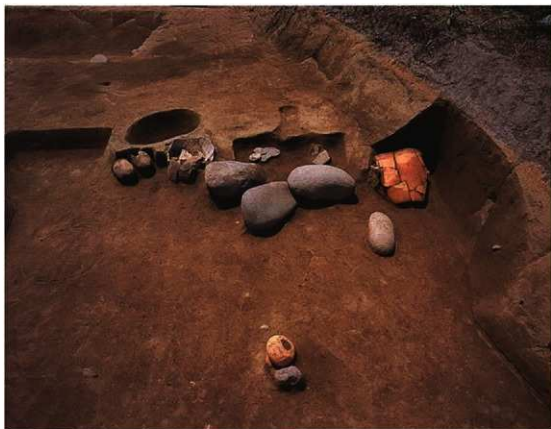
2 堂畑遺跡から東を望む（右中央の森が月岡・日岡古墳）



1 2区第2面152号竪穴住居跡出土状況(北から)



2 2区第2面166A号竪穴住居跡カマド(東から)



1 3区第1面196号竪穴住居跡カマド（東から）



2 2区第2面20号溝（A群）出土状況（北から）



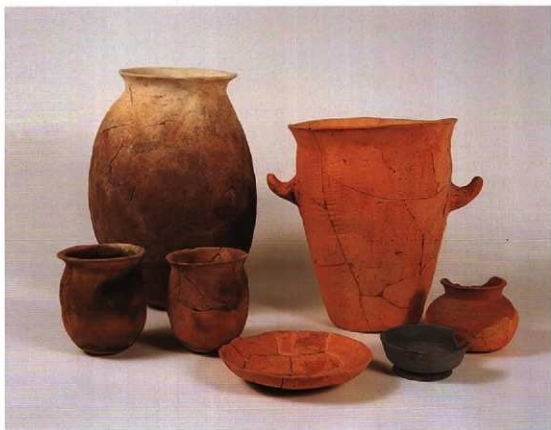
1 2区第2面20号溝出土土器



2 2区第2面148号竪穴住居跡出土土器



1 2区第2面152号竖穴住居跡出土土器



2 3区第1面196号竖穴住居跡出土土器



1 2～5区出土磨製石器



2 116号ピット出土青銅器

序

福岡県教育委員会では、国土交通省九州地方整備局の委託を受けて、一般国道210号浮羽バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しております。昭和54年に調査を開始し、既に同バイパスの調査を終了したうきは市（旧吉井町・旧浮羽町）・久留米市（旧田主丸町）の一部の区間では一般供用されています。

本報告書は平成12～14年に発掘調査を実施した、うきは市吉井町新治（旧吉井町大字新治）に所在する堂畑遺跡3・4次調査の記録で、堂畑遺跡としては第3冊目にあたります。

遺跡は筑後川と耳納山脈に挟まれた緑豊かな田園地帯に所在しています。本調査でも弥生時代から奈良時代に至る各時代の集落跡を確認することができ、当地における人々の生活の様子が歴史的広がりをもつことを各種の生活活動の痕跡、出土遺物を通じて明らかにすることができました。

本書が地域文化の研究や文化財愛護思想の普及及び学術研究の一助となれば幸いです。

発掘調査及び報告書の作成に当たり、御協力、御助言いただきました方々にここで深甚の謝意を表します。

平成17年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森山 良一

例言

1. 本報告書は、平成12～14年（2000～2002）年度に福岡県教育委員会が国土交通省九州地方整備局の委託を受けて実施した、一般国道210号線浮羽バイパスの建設に先立つ堂畑遺跡3・4次の埋蔵文化財発掘調査記録で、一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書の第23集となる。
2. 本書に記録した堂畑遺跡は、一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財調査第4地点にあたり、福岡県うきは市吉井町新治（旧浮羽郡吉井町大字新治）に所在する。なお、吉井町は平成17年3月20日に同郡浮羽町と合併し、うきは市として市制を施行したため、浮羽郡は消滅した。
3. 堂畑遺跡の発掘調査は平成8・9・12～14年度に実施しており、報告書は平成14年度（2002）に一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第17集「堂畑遺跡Ⅰ」、平成15年度（2004）に同第20集「堂畑遺跡Ⅱ」を刊行しており、本書で第3冊目にあたる。
4. 本書に掲載した遺構図は今井涼子・小澤佳憲・大庭孝夫・坂元雄紀・飯田澄江・石橋丸子・上村智美・原紀代・原田智也（九州大学科目等履修生）・山口由美子が作成した。なお、使用した方位は全て座標北（G. N.）である。
5. 本書に掲載した遺構写真は今井涼子・小澤佳憲・大庭孝夫・坂元雄紀が、遺物写真は石丸洋（九州歴史資料館）・北岡伸一が撮影した。なお、空中写真は（有）空中写真企画に委託した。
6. 出土遺物の整理・復元作業は九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所において、坂元雄紀の指導の元を実施した。出土遺物の実測は調査担当者のほかに平田春美・柳町陽子・久富美智子・田中典子・坂田順子・若松三枝子・寺岡和子・粟林明美・橋之口雅子・堀江圭子・荒川妙・西室彩子・中川陽子・西原節子・能登原孝道（九州大学大学院）が行った。製図は担当者のほか、豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行い、土山真弓美・安水侑子・山田智子・辻清子が補助した。
7. 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所に保管している。
8. 本書の執筆はⅢ-7-(3)の金銅器（鉄滓以外）を能登原孝道、Ⅳ-1・2を榑古環境研究所、Ⅳ-3を別府大学文学部平尾良光・淀川奈緒子氏、独立行政法人海洋研究開発機構谷水雅治氏、(財)元興寺文化財研究所、その他を大庭・小澤が行い、編集は橋之口雅子・石橋真佐子・小澤の協力を得て大庭が行った。

目次

[上巻]

巻頭図版
序
例言
目次
図版目次
挿図目次
表目次

I. はじめに	1 (大庭)
1. 調査の経過	1
2. 調査の組織	3
II. 位置と環境	5
III. 発掘調査の記録	9
2. 3次調査2区検出遺構と遺物	9 (小澤・大庭)
(1) 第1面の遺構と出土土器	9
(2) 第1面ビット・遺構面	123
(3) 第2面の遺構と出土土器	133
(4) 第2面ビット・遺構面	250
3. 4次調査3区検出遺構と遺物	254 (小澤・大庭)
(1) 第1面の遺構と出土土器	254
(2) 第1面ビット・遺構面	330
(3) 第2面の遺構と出土土器	333
(4) 第2面ビット・遺構面	349
4. 4次調査4区検出遺構と遺物	353 (小澤・大庭)
(1) 第1面の遺構と出土土器	353
(2) 第1面ビット・遺構面	364
(3) 第2面の遺構と出土土器	365
5. 4次調査5区検出遺構と遺物	366 (小澤)
(1) 第1面の遺構と出土土器	366
(2) 第2面の遺構と出土土器	369
(3) 第3面の遺構と出土土器	372
6. 3・4次調査表採・側溝等出土土器	373 (大庭)
7. 石器・石製品・土製品・金属器	377 (小澤・大庭・能登原)
(1) 石器・石製品	377
(2) 土製品	386
(3) 金属器	391

[下巻]

目次
図版目次
挿図目次
表目次

IV. 自然科学分析	397
(1) 樹種同定	397 (古環境研究所)
(2) 種実同定	400 (古環境研究所)
(3) 鉛同位体分析	403 (淀川・平尾・谷水・元興寺文化財研究所)
V. まとめ	409
1. 堂畑遺跡出土の須玖Ⅱ式土器群	409 (小澤)
2. 堂畑遺跡におけるカマドの在り方について	413 (大庭)
3. 堂畑遺跡周辺における7世紀後半～8世紀末の土師器の変遷について	417 (大庭)
4. 堂畑遺跡における集落の変遷について	421 (大庭)
付編 浮羽高校所蔵三牟田出土石刻について	426 (大庭)

図版目次

巻頭図版	1	1	鷹取山頂から堂畑遺跡を望む（南西から）		
		2	堂畑遺跡から東を望む（右中央の森が月岡・日岡古墳）		
巻頭図版	2	1	2区第2面152号竪穴住居跡出土状況（北から）		
		2	2区第2面166A号竪穴住居跡カマド（東から）		
巻頭図版	3	1	3区第1面196号竪穴住居跡カマド（東から）		
		2	2区第2面20号溝（A群）出土状況（北から）		
巻頭図版	4	1	2区第2面20号溝出土土器		
		2	2区第2面148号竪穴住居跡出土土器		
巻頭図版	5	1	2区第2面152号竪穴住居跡出土土器		
		2	3区第1面196号竪穴住居跡出土土器		
巻頭図版	6	1	2～5区出土磨製石器		
		2	116号ピット出土青銅器		
図版1	1	2	2区第1面全景（空中写真、西から）	2	2区第1面西側（空中写真、上が北）
	3	2	2区第1面中央（空中写真、上が南）		
図版2	1	2	2区第1面東側住居跡集申部分（空中写真、上が北）		
	2	2	2区第1面東端（空中写真、上が北）		
	3	2	2区第1面西側全景（西から）		
図版3	1	79・80・78号竪穴住居跡（南から）	2	78号竪穴住居跡カマド（南から）	
	3	79号竪穴住居跡（南から）			
図版4	1	80号竪穴住居跡（西から）			
	2	81号竪穴住居跡、3号孤立柱建物跡・1号槽跡検出状況（東から）			
	3	82号竪穴住居跡（南から）			
図版5	1	82号竪穴住居跡カマド（南から）	2	83号竪穴住居跡（南から）	
	3	87号竪穴住居跡（東から）			
図版6	1	87号竪穴住居跡カマド（東から）	2	88号竪穴住居跡（北東から）	
	3	79・80・89号竪穴住居跡（西から）			
図版7	1	90号竪穴住居跡（南から）	2	90号竪穴住居跡カマド（南から）	
	3	91号竪穴住居跡（南から）			
図版8	1	91号竪穴住居跡カマド（南から）	2	92号竪穴住居跡（南から）	
	3	93号竪穴住居跡（南から）			
図版9	1	93号竪穴住居跡カマド（南から）	2	94号竪穴住居跡（南から）	
	3	95号竪穴住居跡（南から）			
図版10	1	95号竪穴住居跡カマド（南から）	2	96号竪穴住居跡（南から）	
	3	97号竪穴住居跡（南から）			
図版11	1	98号竪穴住居跡（南西から）	2	99号竪穴住居跡（南東から）	
	3	101号竪穴住居跡（南から）			
図版12	1	102・138号竪穴住居跡（東から）	2	102号竪穴住居跡カマド（東から）	
	3	103号竪穴住居跡（東から）			
図版13	1	103号竪穴住居跡カマド（東から）	2	104号竪穴住居跡（南から）	
	3	104号竪穴住居跡カマド（南から）			
図版14	1	106号竪穴住居跡（西から）	2	106号竪穴住居跡カマド（西から）	
	3	107号竪穴住居跡（西から）			
図版15	1	107号竪穴住居跡カマド（西から）	2	108・130・139号竪穴住居跡（南から）	
	3	108号竪穴住居跡カマド（南から）			
図版16	1	109号竪穴住居跡（南から）	2	109号竪穴住居跡カマド（南から）	
	3	109号竪穴住居跡カマド煙道部（北から）			
図版17	1	110・111・115号竪穴住居跡（南から）	2	110号竪穴住居跡カマド出土状況（西から）	
	3	111号竪穴住居跡カマド完備状況（西から）			
図版18	1	112号竪穴住居跡（西から）	2	112号竪穴住居跡カマド（西から）	
	3	113号竪穴住居跡（南から）			

図版19	1 113号竪穴住居跡カマド出土状況 (南から)	2 118号竪穴住居跡カマド完掘 (南から)
	3 113号竪穴住居跡カマド断ち割り状況 (南から)	
図版20	1 114号竪穴住居跡 (南から)	2 114号竪穴住居跡カマド (南から)
	3 115号竪穴住居跡カマド (南から)	
図版21	1 116号竪穴住居跡 (南から)	2 118号竪穴住居跡 (北から)
	3 120号竪穴住居跡 (西から)	
図版22	1 121号竪穴住居跡 (北から)	2 122号竪穴住居跡 (西から)
	3 123号竪穴住居跡 (北西から)	
図版23	1 125・126号竪穴住居跡 (南から)	2 125号竪穴住居跡カマド (南から)
	3 128号竪穴住居跡 (南から)	
図版24	1 128号竪穴住居跡カマド (南から)	2 129号竪穴住居跡 (東から)
	3 129号竪穴住居跡カマド (東から)	
図版25	1 130号竪穴住居跡カマド (西から)	
	2 131号竪穴住居跡、7号掘立柱建物跡完掘状況 (東から)	
	3 131号竪穴住居跡カマド (東から)	
図版26	1 132号竪穴住居跡、8号掘立柱建物跡 (東から)	
	2 132号竪穴住居跡カマド (東から)	
	3 133・134号竪穴住居跡、36号土坑 (南から)	
図版27	1 133号竪穴住居跡カマド (南から)	2 134号竪穴住居跡カマド (南から)
	3 135号竪穴住居跡、36号土坑 (東から)	
図版28	1 135号竪穴住居跡カマド出土状況 (東から)	2 135号竪穴住居跡カマド完掘 (東から)
	3 136号竪穴住居跡 (東から)	
図版29	1 137号竪穴住居跡 (南から)	
	2 137号竪穴住居跡カマド天井石出土状況 (南から)	
	3 137号竪穴住居跡カマド完掘状況 (南から)	
図版30	1 138号竪穴住居跡 (東から)	2 138号竪穴住居跡カマド (東から)
	3 139号竪穴住居跡 (南から)	
図版31	1 139号竪穴住居跡カマド (南から)	2 140号竪穴住居跡 (西から)
	3 140号竪穴住居跡土層 (北西から)	
図版32	1 3号掘立柱建物跡検出状況 (南東から)	2 3号掘立柱建物跡完掘状況 (南東から)
	3 4号掘立柱建物跡検出状況 (東から)	
図版33	1 4号掘立柱建物跡完掘状況 (東から)	2 6号掘立柱建物跡 (南東から)
	3 7号掘立柱建物検出状況、131号竪穴住居跡検出状況 (東から)	
図版34	1 1・2号櫓跡検出状況 (南東から)	2 1・2号櫓跡完掘状況 (南東から)
図版35	1 20号土坑 (南から)	2 21号土坑 (西から)
	3 22号土坑 (南から)	
図版36	1 25号土坑 (南から)	2 26号土坑 (北から)
	3 27号土坑 (南東から)	
図版37	1 29号土坑 (西から)	2 30・31号土坑 (北西から)
	3 32号土坑 (西から)	
図版38	1 33号土坑 (北西から)	2 34号土坑 (北から)
	3 37号土坑 (北東から)	
図版39	1 2区第2面全景 (空中写真、東から)	2 2区第2面西側 (空中写真、上が北)
	3 2区第2面東側 (空中写真、上が南)	
図版40	1 152~155号竪穴住居跡 (空中写真、上が北)	
	2 9・10号掘立柱建物跡 (空中写真、上が北)	
	3 4・5号円形周溝状遺構 (空中写真、上が北)	
図版41	1 141号竪穴住居跡 (南西から)	
	2 142号竪穴住居跡 (南西から)	
	3 142号竪穴住居跡カマド (南西から)	
図版42	1 142号竪穴住居跡出土状況 (北から)	
	2 143・144・145号竪穴住居跡 (南東から)	
	3 146号竪穴住居跡 (北から)	
図版43	1 147号竪穴住居跡 (南から)	2 148号竪穴住居跡 (南から)
	3 148号竪穴住居跡出土状況 (北東から)	

図版44	1	148号竪穴住居跡階段状遺構（南から）	2	149号竪穴住居跡（南西から）
	3	149号竪穴住居跡カマド（南西から）		
図版45	1	150号竪穴住居跡（北西から）	2	151号竪穴住居跡、44・45号土坑（北西から）
	3	152・153号竪穴住居跡（北から）		
図版46	1	152号竪穴住居跡出土状況（北から）	2	152号竪穴住居跡カマド出土状況（北から）
	3	152号竪穴住居跡カマド完掘状況（北から）		
図版47	1	154号竪穴住居跡（南から）	2	154号竪穴住居跡カマド（南から）
	3	155号竪穴住居跡（北東から）		
図版48	1	156号竪穴住居跡（南から）	2	156号竪穴住居跡カマド（南から）
	3	157号竪穴住居跡（南から）		
図版49	1	157号竪穴住居跡カマド（南から）	2	158・159号竪穴住居跡（南から）
	3	158号竪穴住居跡カマド（南から）		
図版50	1	159号竪穴住居跡カマド（南から）	2	160号竪穴住居跡・11号竪立柱建物跡（南から）
	3	160号竪穴住居跡カマド（南から）		
図版51	1	161号竪穴住居跡（東から）	2	164号竪穴住居跡、10号竪立柱建物跡（西から）
	3	166A・166B・167号竪穴住居跡、SX05（東から）		
図版52	1	166A号竪穴住居跡カマド半掘状況（東から）	2	166A号竪穴住居跡カマド完掘状況（東から）
	3	166B号竪穴住居跡跡上層（西から）		
図版53	1	167号竪穴住居跡カマド（南から）	2	9号竪立柱建物跡検出状況（東から）
	3	9号竪立柱建物跡完掘状況（東から）		
図版54	1	11号竪立柱建物跡（東から）	2	38号土坑（北から）
	3	39号土坑土層（南から）		
図版55	1	39号土坑（南から）	2	40号土坑（東から）
	3	41号土坑（東から）		
図版56	1	42号土坑（南から）	2	44号土坑（北から）
	3	46号土坑土層（南から）		
図版57	1	46号土坑（南から）	2	47号土坑上層（西から）
	3	47号土坑（西から）		
図版58	1	48号土坑（南から）	2	49号土坑（北から）
	3	50号土坑（西から）		
図版59	1	51号土坑（西から）	2	52号土坑（北から）
	3	53号土坑（北から）		
図版60	1	54号土坑（北から）	2	55号土坑（南東から）
	3	15号溝（南から）		
図版61	1	15号溝土層（南から）	2	20号溝B群出土状況（北から）
	3	20号溝C群出土状況（南から）		
図版62	1	20号溝A群出土状況（北から）	2	20号溝中央土層（東から）
	3	24号溝出土状況（西から）		
図版63	1	24号溝出土状況（東から）	2	24号溝土層（東から）
	3	25号溝北土層（北から）	4	25号溝南土層（東から）
図版64	1	4・5号円形周溝状遺構（北から）	2	4号円形周溝状遺構北土層（西から）
	3	365号ピット（東から）		
図版65	1	3区第1面全景（空中写真、南東から）	2	3区第1面全景（空中写真、上が北）
	3	3区第1面東（空中写真、上が北）		
図版66	1	169号竪穴住居跡（南から）	2	169号竪穴住居跡カマド（南から）
	3	171号竪穴住居跡（東から）		
図版67	1	173・176号竪穴住居跡、60号土坑（東から）	2	173・176号竪穴住居跡カマド（東から）
	3	176号竪穴住居跡カマド（東から）		
図版68	1	174号竪穴住居跡（南から）	2	177号竪穴住居跡（南から）
	3	177号竪穴住居跡カマド（南から）		
図版69	1	178号竪穴住居跡・59号土坑（南から）	2	181・183・184号竪穴住居跡（南から）
	3	181号竪穴住居跡カマド（南から）		
図版70	1	182号竪穴住居跡（南から）	2	182号竪穴住居跡カマド（南から）
	3	184号竪穴住居跡カマド（南から）		

図版71	1	185号竪穴住居跡（南から）	2	185号竪穴住居跡カマド（南から）
	3	187～189号竪穴住居跡（西から）		
図版72	1	187号竪穴住居跡カマド（西から）		
	2	187号竪穴住居跡カマド1 煙道部掘り込み完掘状況（西から）		
	3	187号竪穴住居跡カマド2 煙道部掘り込み完掘状況（西から）		
図版73	1	189号竪穴住居跡カマド（西から）	2	190号竪穴住居跡（西から）
	3	190号竪穴住居跡カマド（西から）		
図版74	1	193・194号竪穴住居跡（南から）	2	193号竪穴住居跡カマド（南から）
	3	196号竪穴住居跡（東から）		
図版75	1	196号竪穴住居跡カマド（東から）		
	2	196号竪穴住居跡カマド室内出土石製紡錘車出土状況（東から）		
	3	197号竪穴住居跡（南から）		
図版76	1	197号竪穴住居跡カマド（南から）	2	200・201号竪穴住居跡（東から）
	3	200号竪穴住居跡カマド（東から）		
図版77	1	201号竪穴住居跡カマド（南から）	2	202号竪穴住居跡（南から）
	3	202号竪穴住居跡（南から）		
図版78	1	203号竪穴住居跡（南から）	2	203号竪穴住居跡カマド（南から）
	3	204号竪穴住居跡（東から）		
図版79	1	205号竪穴住居跡（南から）	2	205号竪穴住居跡カマド（南から）
	3	206号竪穴住居跡（東から）		
図版80	1	206号竪穴住居跡カマド（東から）	2	207号竪穴住居跡（南から）
	3	208号竪穴住居跡（南から）		
図版81	1	208号竪穴住居跡カマド出土状況（南から）	2	208号竪穴住居跡カマド完掘状況（南から）
	3	209号竪穴住居跡（南から）		
図版82	1	209号竪穴住居跡カマド（南から）	2	210号竪穴住居跡（南から）
	3	210号竪穴住居跡カマド（南から）		
図版83	1	211号竪穴住居跡（南から）	2	211号竪穴住居跡カマド（南から）
	3	213号竪穴住居跡（南から）		
図版84	1	213号竪穴住居跡カマド（南から）	2	214号竪穴住居跡（西から）
	3	214号竪穴住居跡カマド（西から）		
図版85	1	12号獨立柱建物跡、59号土坑（南から）	2	56号土坑（南から）
	3	62号土坑（東から）		
図版86	1	66号土坑（北北西から）	2	28号溝北十層（北から）
	3	28-1号溝南上層（北から）		
図版87	1	29号溝北上層（南から）	2	29号溝中央上層（北から）
	3	33号溝中央十層（北から）		
図版88	1	3区第2面全景（空中写真、上が北）	2	3区第2面全景（西から）
	3	226・227号竪穴住居跡（南から）		
図版89	1	226号竪穴住居跡カマド（南から）	2	228号竪穴住居跡カマド（東から）
	3	229号竪穴住居跡（南から）		
図版90	1	230号竪穴住居跡（南から）	2	231号竪穴住居跡（東から）
	3	231号竪穴住居跡カマド（東から）		
図版91	1	232号竪穴住居跡（北から）	2	1号竪穴遺構（北から）
	3	74号土坑（北から）		
図版92	1	75号土坑（西から）	2	81号土坑（南西から）
	3	37号溝土層（東から）		
図版93	1	4区第1面全景（北から）	2	4区第1面北（南から）
	3	216～219号竪穴住居跡（南東から）		
図版94	1	217号竪穴住居跡カマド（南東から）	2	218号竪穴住居跡カマド（南東から）
	3	68号土坑（北東から）	4	70号土坑（南から）
図版95	1	4区第2面全景（北から）	2	4区第2面全景（南から）
	3	39号溝土層（東から）		
図版96	1	5区第1面全景（東から）	2	41～44号溝土層（西から）
	3	5区第2面全景（東から）		

図版97	1 82号土坑（北から） 3 SX06上層（東から）	2 82号土坑土層（南から）
図版98	1 41～45号溝土層（第2面時、西から） 3 5区東壁土層（第3面時、西から）	2 5区第3面全景（東から）
図版99	1 47号溝完掘・上層（西から） 3 5区西トレンチ北壁土層（南東から）	2 5区西トレンチ全景（西から）
図版100	78～81号竪穴住居跡出土土器	
図版101	90・93・95～97・106号竪穴住居跡出土土器	
図版102	108・109・112～115・120号竪穴住居跡出土土器	
図版103	120・121号竪穴住居跡出土土器	
図版104	121・123・129・133・134号竪穴住居跡出土土器	
図版105	134・135・137号竪穴住居跡出土土器	
図版106	21・22・26号土坑出土土器	
図版107	27・29・30号土坑出土土器	
図版108	37号土坑出土土器	
図版109	33号土坑、18号溝、2区第1面遺構面等出土土器	
図版110	2区第1面遺構面等、117・142・145・147号竪穴住居跡出土土器	
図版111	148号竪穴住居跡出土土器	
図版112	148・151・152号竪穴住居跡出土土器	
図版113	152号竪穴住居跡出土土器	
図版114	152・157・162・164・166A・166B号竪穴住居跡出土土器	
図版115	166B号竪穴住居跡、38・40・44号土坑出土土器	
図版116	44・55号土坑、20号溝（1）出土土器	
図版117	20号溝出土土器（2）	
図版118	20号溝出土土器（3）	
図版119	20号溝出土土器（4）	
図版120	20号溝出土土器（5）	
図版121	20号溝（6）、24号溝（1）出土土器	
図版122	24号溝出土土器（2）	
図版123	24号溝（3）、25号溝出土土器	
図版124	25号溝、4号円形周溝伏遺構、SX05出土土器	
図版125	SX05、2区第2面ビット、365号ビット出土土器	
図版126	2区第2面等、171号竪穴住居跡出土土器	
図版127	185・187・196号竪穴住居跡出土土器	
図版128	197・200・202・207号竪穴住居跡出土土器	
図版129	215号竪穴住居跡、28・29・33号溝出土土器	
図版130	3区第1面遺構面等、226・229号竪穴住居跡、3区第2遺構面等出土土器	
図版131	3区第2面遺構面等、表採・側溝出土土器	
図版132	石器・石製品（1）	
図版133	石器・石製品（2）、土製品（1）	
図版134	土製品（2）、製塩土器、鉄器（1）	
図版135	鉄器（2）、耳環、鉄滓（1）	
図版136	鉄滓（2）、青銅器	

挿図目次

[上巻]

第1図	堂畑遺跡の位置	1
第2図	周辺地形分類・遺跡分布図（1/50,000）	6
第3図	周辺遺跡分布図（1/10,000）	7
第4図	調査区周辺地形図（1/2,000・1/100）	8
第5図	堂畑遺跡遺構配置図（1/600）	折込
第6図	2区第1・2面住居跡切り合い関係図	9

第 7 图	78号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	10
第 8 图	78・79 (1) 号整穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	11
第 9 图	79・80号整穴住居跡実測図 (1/60)	12
第 10 图	79~81号整穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	13
第 11 图	81・82号整穴住居跡実測図 (1/60)	15
第 12 图	82・83・87~93 (1) 号整穴住居跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	17
第 13 图	83・87・88号整穴住居跡、87号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)	19
第 14 图	89・92・94号整穴住居跡実測図 (1/60)	20
第 15 图	90号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	21
第 16 图	91号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	23
第 17 图	93号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	25
第 18 图	93 (2)・94号整穴住居跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	27
第 19 图	95・100号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	29
第 20 图	95・96号整穴住居跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	31
第 21 图	96・98号整穴住居跡実測図 (1/60)	33
第 22 图	97号整穴住居跡実測図 (1/60)	34
第 23 图	97~99・101号整穴住居跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	35
第 24 图	99・101号整穴住居跡実測図 (1/60)	36
第 25 图	102号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	37
第 26 图	102~104・106・107 (1) 号整穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	38
第 27 图	107 (2) ~111号整穴住居跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	39
第 28 图	103号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	41
第 29 图	104号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	43
第 30 图	106号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	45
第 31 图	107号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	47
第 32 图	108・130号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	49
第 33 图	109号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	51
第 34 图	110号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	53
第 35 图	111号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	55
第 36 图	112号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	56
第 37 图	112・113号整穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	57
第 38 图	113号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	59
第 39 图	114号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	61
第 40 图	114~116号整穴住居跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	63
第 41 图	115号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	65
第 42 图	116・117・119号整穴住居跡実測図 (1/60)	66
第 43 图	118号整穴住居跡実測図 (1/60)	67
第 44 图	120号整穴住居跡実測図 (1/60)	68
第 45 图	120号整穴住居跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	69
第 46 图	121・122号整穴住居跡実測図 (1/60)	70
第 47 图	121号整穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	71
第 48 图	123・124号整穴住居跡実測図 (1/60)	73
第 49 图	122・123・125・126・128号整穴住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	75
第 50 图	125・126号整穴住居跡、125号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)	76
第 51 图	128号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	77
第 52 图	129号整穴住居跡・カマド、136号整穴住居跡実測図 (1/60・1/30)	78
第 53 图	129~133号整穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	79
第 54 图	131号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	81
第 55 图	132号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	83
第 56 图	133~135号整穴住居跡実測図 (1/60)	85
第 57 图	133~135号整穴住居跡カマド実測図 (1/30)	87
第 58 图	134・135・137号整穴住居跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	89
第 59 图	137号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	91
第 60 图	138号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	92

第 61 図	138~140号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	93
第 62 図	139号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	95
第 63 図	140号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	97
第 64 図	3号竪立柱建物跡実測図 (1/60)	98
第 65 図	3・4・8号竪立柱建物跡、1・2号榿跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	99
第 66 図	4号竪立柱建物跡実測図 (1/60)	100
第 67 図	6・7号竪立柱建物跡実測図 (1/60)	101
第 68 図	8号竪立柱建物跡実測図 (1/60)	102
第 69 図	1・2号榿跡実測図 (1/60)	103
第 70 図	20~24号土坑実測図 (1/40・1/30)	105
第 71 図	20・21 (1)号土坑出土土器実測図 (1/4)	106
第 72 図	21 (2)・22号土坑出土土器実測図 (1/3・1/4)	107
第 73 図	23・26号土坑出土土器実測図 (1/3・1/4)	109
第 74 図	25~27、29号土坑実測図 (1/30)	111
第 75 図	27・29号土坑出土土器実測図 (1/4)	113
第 76 図	30~33号土坑実測図 (1/40・1/30)	115
第 77 図	30・31・33・35・37 (1)号土坑出土土器実測図 (1/3・1/4)	116
第 78 図	37号土坑出土土器実測図 (2) (1/4)	117
第 79 図	37号土坑出土土器実測図 (3) (1/3・1/4)	118
第 80 図	34~37号土坑実測図 (1/30)	119
第 81 図	16・18号溝出土土器実測図 (1/4・1/3)	121
第 82 図	2区第1面ピット出土土器実測図 (1/3・1/6・1/4)	125
第 83 図	2区第1面遺構面等出土土器実測図 (1) (1/4)	127
第 84 図	2区第1面遺構面等出土土器実測図 (2) (1/4)	128
第 85 図	2区第1面遺構面等出土土器実測図 (3) (1/4・1/3)	129
第 86 図	2区第1面遺構面等出土土器実測図 (4) (1/3)	130
第 87 図	2区第1面遺構面等出土土器実測図 (5) (1/3)	132
第 88 図	117・119号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	135
第 89 図	141号竪穴住居跡実測図 (1/60)	136
第 90 図	141~143・145号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	137
第 91 図	142号竪穴住居跡・土器出土状況・カマド実測図 (1/60・1/30)	138
第 92 図	143・144号竪穴住居跡実測図 (1/60)	139
第 93 図	145・146号竪穴住居跡実測図 (1/60)	141
第 94 図	146・147号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	143
第 95 図	147・148号竪穴住居跡実測図 (1/60)	145
第 96 図	148号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)	146
第 97 図	148号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)	147
第 98 図	148 (3)・149号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	148
第 99 図	149号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	151
第 100 図	150・151号竪穴住居跡実測図 (1/60)	153
第 101 図	150・151 (1)号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	154
第 102 図	151号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/4)	155
第 103 図	152号竪穴住居跡・カマド東側土器出土状況・カマド実測図 (1/60・1/40・1/30)	157
第 104 図	152号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)	158
第 105 図	152号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)	159
第 106 図	152 (3)~154号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	160
第 107 図	153・155号竪穴住居跡実測図 (1/60)	162
第 108 図	154号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	163
第 109 図	156・161号竪穴住居跡、156号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)	165
第 110 図	161号竪穴住居跡北壁土坑実測図 (1/30)	166
第 111 図	156~159号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	167
第 112 図	157号竪穴住居跡・カマド・住居跡東端遺状遺構実測図 (1/60・1/30)	169
第 113 図	158号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	171
第 114 図	159号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	173

第115图	160・168号整穴住居跡、160号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30).....	175
第116图	160~164 (1) 号整穴住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	176
第117图	164号整穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/4)	177
第118图	162~165号整穴住居跡、162号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30).....	178
第119图	166A号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	179
第120图	166B号整穴住居跡・伊跡実測図 (1/60・1/30)	181
第121图	166A・B (1) 号整穴住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	182
第122图	166B (2)・167号整穴住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	183
第123图	167号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30).....	185
第124图	9号掘立柱建物跡実測図 (1/60).....	186
第125图	9号掘立柱建物跡柱穴断面実測図 (1/30).....	187
第126图	9・10号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	188
第127图	10・11号掘立柱建物跡実測図 (1/60).....	189
第128图	38~41号上坑実測図 (1/30).....	191
第129图	38号土坑出土土器実測図 (1/4)	193
第130图	40・43・44 (1) 号土坑出土土器実測図 (1/3・1/4)	194
第131图	44 (2)・46~48号土坑出土土器実測図 (1/3・1/4)	195
第132图	42~45号土坑実測図 (1/30・1/40)	197
第133图	46・47号土坑実測図 (1/40).....	199
第134图	48~50号土坑実測図 (1/40・1/30)	200
第135图	49~52・54・55号土坑出土土器実測図 (1/4・1/3)	201
第136图	51~54号土坑実測図 (1/30).....	203
第137图	55号土坑実測図 (1/30).....	204
第138图	15・16・20・25号溝土層実測図 (1/30).....	206
第139图	15号溝出土土器実測図 (1/4・1/3)	207
第140图	20・25号溝実測図 (1/60・1/120).....	208
第141图	20号溝土器出土状況 (A群) (1) (1/30).....	209
第142图	20号溝土器出土状況 (B群) (2) (1/30).....	210
第143图	20号溝土器出土状況 (C群) (3) (1/30).....	211
第144图	20号溝出土土器実測図 (1) (1/4).....	213
第145图	20号溝出土土器実測図 (2) (1/4).....	215
第146图	20号溝出土土器実測図 (3) (1/4).....	216
第147图	20号溝出土土器実測図 (4) (1/4).....	217
第148图	20号溝出土土器実測図 (5) (1/4).....	219
第149图	20号溝出土土器実測図 (6) (1/4).....	220
第150图	20号溝出土土器実測図 (7) (1/4).....	221
第151图	20号溝出土土器実測図 (8) (1/4).....	223
第152图	20号溝出土土器実測図 (9) (1/4).....	224
第153图	20号溝出土土器実測図 (10) (1/4).....	225
第154图	20号溝出土土器実測図 (11) (1/3・1/4).....	226
第155图	20号溝出土土器実測図 (12) (1/4).....	227
第156图	20号溝出土土器実測図 (13) (1/4).....	228
第157图	24号溝・土層実測図 (1/60・1/30)	231
第158图	22・23・24 (1) 号溝出土土器実測図 (1/3・1/4)	233
第159图	24号溝出土土器実測図 (2) (1/4).....	234
第160图	24号溝出土土器実測図 (3) (1/3・1/4).....	235
第161图	24号溝出土土器実測図 (4) (1/4).....	237
第162图	24号溝出土土器実測図 (5) (1/4).....	238
第163图	24号溝出土土器実測図 (6) (1/4).....	239
第164图	24号溝出土土器実測図 (7) (1/4).....	240
第165图	25号溝出土土器実測図 (1) (1/4).....	242
第166图	25号溝出土土器実測図 (2) (1/3・1/4).....	243
第167图	4・5号円形周溝状遺構 (1/60).....	245
第168图	4・5号円形周溝状遺構出土土器実測図 (1/4)	247

第169回	SX05出土土器実測図(1/4).....	249
第170回	365号ピット実測図(1/30).....	250
第171回	2区第2面ピット・365号ピット出土土器実測図(1/3・1/4).....	251
第172回	2区第2面遺構面等出土土器実測図(1)(1/6・1/4).....	252
第173回	2区第2面遺構面等出土土器実測図(2)(1/3).....	253
第174回	3区第1・2面住居跡切り合い関係図.....	254
第175回	169・170・179号竪穴住居跡、169号住居跡カマド実測図(1/60・1/30).....	255
第176回	169～172号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4・1/3).....	257
第177回	171・172号竪穴住居跡実測図(1/60).....	259
第178回	171号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(1/4).....	260
第179回	173・176号竪穴住居跡、176号住居跡カマド実測図(1/60・1/30).....	261
第180回	173～179号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4・1/3).....	263
第181回	174・175・178号竪穴住居跡実測図(1/60).....	265
第182回	177号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	267
第183回	181・183・186号竪穴住居跡実測図(1/60).....	268
第184回	181・182・184・185号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4・1/3).....	269
第185回	182号竪穴住居跡、181・182号住居跡カマド実測図(1/60・1/30).....	271
第186回	184号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	273
第187回	185号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	275
第188回	187号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	277
第189回	187～190・192～195号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4・1/3).....	278
第190回	188号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	279
第191回	189号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	281
第192回	190・192号竪穴住居跡、190号住居跡カマド実測図(1/60・1/30).....	283
第193回	193・194号竪穴住居跡、193号住居跡カマド実測図(1/60・1/30).....	285
第194回	195・196号竪穴住居跡実測図(1/60).....	287
第195回	196号竪穴住居跡カマド実測図(1/30).....	288
第196回	197号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	289
第197回	196号竪穴住居跡出土土器実測図(1)(1/3).....	290
第198回	196(2)・197号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4・1/3).....	291
第199回	200号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	293
第200回	200～202(1)号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3).....	294
第201回	202(2)～206号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4・1/3).....	295
第202回	201号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	297
第203回	202号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	299
第204回	203号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	301
第205回	204号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	302
第206回	205号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	303
第207回	206号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	304
第208回	207号竪穴住居跡実測図(1/60).....	305
第209回	207～210・213号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4・1/3).....	307
第210回	208号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	309
第211回	209号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	310
第212回	210号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	311
第213回	211号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	312
第214回	213号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	313
第215回	214号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	314
第216回	214・215号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3).....	315
第217回	215号竪穴住居跡実測図(1/60).....	316
第218回	12号竪立柱建物跡実測図(1/60).....	317
第219回	12号竪立柱建物跡出土土器実測図(1/3).....	318
第220回	56・58～61号土坑実測図(1/60・1/30).....	319
第221回	58・60・62・63・67号土坑出土土器実測図(1/3).....	320

第222図	62~64・66・67号土坑実測図(1/30).....	321
第223図	28・29・32~34号溝土層実測図(1/30).....	323
第224図	28号溝出土土器実測図(1/4・1/3).....	325
第225図	29・32・33(1)号溝出土土器実測図(1/4・1/3).....	326
第226図	1・33(2)・34号溝出土土器実測図(1/4・1/3).....	327
第227図	3区第1面ビット・遺構面等(1)出土土器実測図(1/8・1/4・1/3).....	331
第228図	3区第1面遺構面等出土土器実測図(2)(1/3).....	332
第229図	226・227号竪穴住居跡、226号住居跡カマド実測図(1/60・1/30).....	335
第230図	226・227・229・230号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4・1/3).....	336
第231図	228・230号竪穴住居跡、228号住居跡カマド実測図(1/60・1/30).....	337
第232図	229号竪穴住居跡実測図(1/60).....	338
第233図	231号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30).....	339
第234図	232・233号竪穴住居跡実測図(1/60).....	341
第235図	231~233号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3).....	342
第236図	1号竪穴遺構実測図(1/60).....	343
第237図	72~75号土坑実測図(1/30).....	345
第238図	72・74・76・79~81号土坑出土土器実測図(1/4・1/3).....	346
第239図	76~80号土坑実測図(1/30).....	347
第240図	81号土坑実測図(1/30).....	348
第241図	37・38号溝土層実測図(1/30).....	349
第242図	37・38号溝出土土器実測図(1/4・1/3).....	349
第243図	3区第2面ビット・遺構面等出土土器実測図(1)(1/4・1/3).....	351
第244図	3区第2面遺構面等出土土器実測図(2)(1/3).....	352
第245図	4区第1・2面遺構切り合い関係図.....	353
第246図	216・219号竪穴住居跡、217号住居跡カマド実測図(1/60・1/30).....	355
第247図	216~220号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3).....	357
第248図	217・218号竪穴住居跡、218号住居跡カマド実測図(1/80・1/30).....	359
第249図	221・222号竪穴住居跡実測図(1/60).....	360
第250図	223号竪穴住居跡実測図(1/40).....	361
第251図	221・223号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4・1/3).....	361
第252図	68~71号土坑実測図(1/30).....	363
第253図	69~71号土坑出土土器実測図(1/3).....	364
第254図	4区第1面ビット・遺構面等出土土器実測図(1/3).....	364
第255図	236号竪穴住居跡実測図(1/60).....	365
第256図	39号溝土層実測図(1/30).....	366
第257図	5区遺構配置図(1/200).....	367
第258図	82号土坑実測図、41・42・45・46・47号溝土層実測図(1/60).....	368
第259図	82号土坑、41~45号溝、SX06(1)出土土器実測図(1/3).....	371
第260図	SX06(2)・遺構面等出土土器実測図(1/3).....	372
第261図	表探・朝溝等出土土器実測図(1)(1/4・1/3).....	375
第262図	表探・朝溝等出土土器実測図(2)(1/3).....	376
第263図	石器・石製品実測図(1)(1/2・2/3).....	379
第264図	石器・石製品実測図(2)(2/3・1/2).....	381
第265図	石器・石製品実測図(3)(実大・1/2).....	383
第266図	石器・石製品実測図(4)(1/2).....	385
第267図	石器・石製品実測図(5)(1/3).....	387
第268図	土製品実測図(1/2).....	388
第269図	製塩土器実測図(1/3).....	389
第270図	鉄製品実測図(1/2).....	392
第271図	116号ビット実測図(再録)(1/4).....	393
第272図	青銅器実測図(実大).....	394

[下巻]

第273図	炭化材断面顕微鏡写真	399
第274図	イネ炭化果実写真	402
第275図	青銅器X線分析図(1)	404
第276図	青銅器X線分析図(2)	405
第277図	鉛同位対比の比較図	408
第278図	堂畑遺跡出土の須玖Ⅱ式土器(1/6)	411
第279図	カマド分類図(1/60)	415
第280図	堂畑遺跡周辺における土師器変遷図(1/12・1/6)	419
第281図	堂畑遺跡遺構変遷図(1)(1/600)	折込
第282図	堂畑遺跡遺構変遷図(2)(1/600)	折込
第283図	三牟田出土石剣実測図(2/3)	426

付図

第284図	堂畑遺跡遺構配置図(1)(3・4区)(1/200)
第285図	堂畑遺跡遺構配置図(2)(1区)(1/200)
第286図	堂畑遺跡遺構配置図(3)(2区)(1/200)

表目次

第1表	浮羽バイパス調査遺跡一覧	1
第2表	白玉計測表	383
第3表	石器・石製品・土製品・金属器一覧表(1)	395
第4表	石器・石製品・土製品・金属器一覧表(2)	396
第5表	樹種同定結果	398
第6表	イネ炭化果実計測値	401
第7表	種実同定結果	402
第8表	堂畑遺跡出土青銅片(堂畑遺跡3次1区P116出土)の鉛同位体比値	406
第9表	口縁部各位形態の出現頻度	410
第10表	口縁部形態の時期別出現頻度	412
第11表	堂畑遺跡カマド一覧表(1)	415
第12表	堂畑遺跡カマド一覧表(2)	416

I. はじめに

1. 調査の経過

一般国道210号線は大分県大分市と福岡県久留米市を結び、九州を横断する主要幹線であり、古くから豊後街道としてこの地域の幹線道路であった。

福岡県久留米市(旧田主丸町を含む5市町、平成17年2月合併)・うきは市(旧浮羽郡旧浮羽町・旧吉井町、平成17年3月合併)において、国道210号線は市街地中心を東西に貫く対面2車線の道路となっているが、歩道も狭く交通混雑が頻繁に起こっている。そこで、交通混雑の緩和と交通事故の減少、沿道環境の改善などを目的として、昭和48(1973)年度に事業化されたのが浮羽バイパスである。

浮羽バイパスは久留米市田主丸町上原(旧田主丸町大字上原)から、うきは市浮羽町山北(旧浮羽町大字山北)に至る総延長約14.0km、幅員19～28mの第3種第1・2級道路である。現在までうきは市の一部区画、約8.8kmを暫定供用している。

この浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財保護の対応は、昭和47(1972)年2月3日付で建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所(現国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所)から福岡県教育庁管理部文化課(現総務部文化財保護課)あての、「一般国道210号浮羽～田主丸



第1図 堂畑遺跡の位置

第1表 浮羽バイパス調査遺跡一覧

地点	町名	工区と地点名	遺跡名	対象面積(㎡)	発掘調査面積(㎡)	調査年度	報告年度	報告書番号
1	浮羽	9.日本	日本	19,000	16,800	S81	H4・5	6・7集
2	吉井	7.塚原	塚原	18,479	12,768	S54～57・58～61	S37～59・82	1～5集
3	吉井	7.塚原	—	5,100	—	試掘のみ H16	—	—
4	吉井	6.7.三平田	空堀	12,700	9,790	H8・9・12～14	H13・15・16	17・20類・本冊
5	吉井	6.新吉	仁子南門地	8,400	3,000	H7～9	H11・12	12・14集
6	吉井	6.新吉A	稲崎A	6,200	1,600	S82	H9	9集
7	吉井	6.稲崎B	稲崎B	4,300	520	S82	H9	9集
8	吉井	6.新吉	—	2,400	—	試掘のみ H1	—	—
9A	吉井	5.6.上菅A	塚町・大塚	21,000	18,000	H1・2	H5	8集
9B	吉井	5.6.上菅B	豊取五反田	14,000	7,420	H2・5・8	H9・10	9・10集
10	田主丸	5.稲崎A	新堀政経	25,000	11,800	H8～12・16	H11～13	13・15・16集
11	田主丸	5.稲崎B	新堀二ノ上	20,000	18,300	H6～9	H10	11集
12	田主丸	5.稲A	—	15,200	—	—	—	—
13	田主丸	5.京塚	松門寺A	15,000	2,200	H11	H13	18集
14	田主丸	5.野田A	玉田	14,800	1,900	H15	—	—
15	田主丸	5.野田B	大野・H誌	10,800	5,710	H12・13	H14・15	19・21集
16	田主丸	5.野田C	日誌2・3次	13,500	1,200	H14・15～	H16・17～	22集
17	浮羽	7.畑口	—	2,400	—	試掘のみ	—	—
18	浮羽	—	—	28,400	—	—	—	—
19	浮羽	—	—	16,600	—	—	—	—

間バイパス建設予定地内の文化財の有無について」との調査依頼に始まる。これによって、旧吉井町塚堂遺跡の発掘調査を昭和54(1961)～57(1964)年度まで4ヵ年にわたって実施した。

その後、昭和61(1986)年4月2日付けで福岡国道工事事務所から再度「埋蔵文化財の分布調査について」との調査依頼が県教委あてに出され、文化課は塚堂遺跡を除く計16地点で発掘調査必要箇所が存在する旨を回答している。

平成10年には県教委の機構改革により文化財保護課内で受託調査担当係(調査第二係)が係として独立し、受託調査事業の事業計画を策定する中で、改めて浮羽バイパスの分布調査を行った結果、既調査地点を含む計19地点の発掘調査必要箇所の存在を確認し、平成12年度に福岡国道工事事務所に回答した。現在、この回答にもとづいて福岡県教育庁総務部文化財保護課を調査主体として、順次用地買収が完了した地点より試掘調査・本発掘調査が実施されている(第1表)。

堂畑遺跡は、福岡県うきは市吉井町新治(旧浮羽郡吉井町大字新治字堂畑・柿木畑・大月)に所在し、浮羽バイパスと県道吉井恵蘇宿線が交差する「三牟田」交差点の東西にわたって分布する。平成8・9年度には県教委が調査主体となり、県道西側約2,200㎡の本調査を行い(1・2次調査)、その成果は平成13年度に報告書を刊行している(重藤輝行編 2002『堂畑遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第17集)。

平成12～14年度には、県道から東約320m、面積10,500㎡の本調査と1・2次調査西の未調査地点(5区)180㎡の調査を行った(3・4次調査)。最初に調査を着手した1区の調査成果は、昨年度『堂畑遺跡Ⅱ』に収め(大庭孝夫編 2004『堂畑遺跡Ⅱ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第20集)、本書は残りの2～5区の調査成果を収めており、堂畑遺跡としては第3冊目浮羽バイパス建設に起因する堂畑遺跡の整理報告としては最終冊にあたる。

調査においては、5区では3層の遺構面、1～4区でもほぼ全体で2層の遺構面を確認したため、実際の調査面積は14,000㎡を測り、遺構も竪穴住居跡218棟、掘立柱建物跡9棟、土坑68基、溝44条、円形周溝状遺構5基、竪穴状遺構1基、ピット多数などを検出し、出土遺物量は現場段階でパンケース400箱に達する内容となった。報告段階においても本報告書掲載点数は1979点、堂畑遺跡Ⅰ・Ⅱ報告令も合わせると3678点という膨大な量となる。

3次調査当初段階では、三牟田交差点西は平成10年にバイパスが仮開通し、東は既に三牟田



堂畑遺跡遠景(北から)



雪の日の堂畑遺跡(西から)

交差点東約400m部分まで工事がほぼ終了し、仮舗装している状況であった。そのため福岡国道工事事務所は、この間約400m区間の平成14年度内での開通を目指しており、県教委としてもそれに合わせた対応が求められた。県道近くには未買収地が存在したため、この未買収地以外の部分について、平成12年度7月に確認調査を行い、県道より東350m区間は複数面存在し、かつ遺構密度が高いことを確認した。そのため県教委は、未買収地の解決を待たずに本調査を実施することとし、浮羽バイパス10地点の本調査終了後に引き続き4地点（堂畑遺跡、第1表参照）の調査に入ることとなった。まず県道から約80m離れた場所から調査を開始し（1区）、順次東に向かって調査を進めた（2区）。平成13年度中には県道東の用地買収が終了したため、平成14年度当初からこの部分の調査を開始し、5区は4区調査終了後の平成14年9月～10月まで調査を行った（第4図）。



作業風景

なお、2区東端の県道との間約50m区間は、2区の調査状況からさらに東へ遺構が広がることが予想されたが、この箇所は周囲の田より1mほど高く土を盛っており、遺構面まで掘削すると排土が膨大な量になり予算、期間の面で厳しいこと、すでに仮舗装された県道を挟んだ東部分の試掘調査の結果から、この箇所まで遺構が存在しないと回答していること、2区北東端で北西～南東方向に流れたと思われる、埋土から近世以降に属する大きな旧流路を確認し、この未調査区内東側は旧流路により遺構が壊されていると考えられることから、やむなく調査を断念した。

調査日誌は昨年度報告の『堂畑遺跡Ⅱ』に掲載しているため、そちらを参照されたい。

2. 調査の組織

発掘調査及び整理・報告書作成の関係者は下記のとおりである。

国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所（平成16年度より福岡国道事務所）

	[平成12年度]	[平成13年度]	[平成14年度]	[平成15年度]	[平成16年度]
所長	森 将彦	森 昌文	森 昌文	増田 博行	増田 博行
副所長	兼武征二郎	有働 伸幸	小串 正志	小串 正志	後田 徹
	田中 義高	田中 義高	百田 国広	徳留 忠	徳留 忠
建設専門官			池田 正		
建設監督官	有家 信義	浅井 博海	浅井 博海	内田 智規	内田 智規
調査第2課長	赤星 文生	久野 隆博	久野 隆博	上村 一明	小椎尾 優
			上村 一明		
調査係長	大板 謙	大板 謙	大板 謙	長友 浩信	長友 浩信
			長友 浩信		
専門調査員			島川 浩一	島川 浩一	相島 伸行
国土交通技官	松山ひろみ	佐藤 博信	佐藤 博信	立石 洋和	立石 洋和
工務課長	後藤 昌隆	末岡 彰	末岡 彰	田中秀之進	田中秀之進

工務第一係長	古木 英昭	山口 隆	山口 隆 竹水 浩	竹水 浩	竹水 浩
工務第二係長	川内 学	川内 学	川内 学	山下 正昭	山下 正昭

福岡県教育委員会（教育庁総務部文化財保護課）

	[平成12年度]	[平成13年度]	[平成14年度]	[平成15年度]	[平成16年度]
総括					
教育長	光安 常喜	光安 常喜	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	森山 良一	森山 良一	三瓶 寧夫	三瓶 寧夫	清水 圭輔
総務部長	岩木 誠	三瓶 寧夫	松本 通憲	清水 圭輔	中原 一憲
文化財保護課長	柳田 康雄	井上 裕弘	井上 裕弘	井上 裕弘	井上 裕弘
参事	井上 裕弘				
参事兼課長技術補佐	橋口 達也	橋口 達也	橋口 達也	川述 昭人	川述 昭人
参事兼課長補佐		平野 義峰	久芳 昭文	久芳 昭文	
課長補佐兼管理係長		平野 義峰			
課長補佐					安川 正郷
参事補佐兼調査第一係長	佐々木隆彦	佐々木隆彦	佐々木隆彦	小池 史哲	小池 史哲
参事補佐兼調査第二係長	児玉 真一	児玉 真一	児玉 真一	中間 研志	中間 研志
庶務					
参事補佐兼管理係長			古賀 敏生	古賀 敏生	
管理係長		三笠ひとみ			稲尾 茂
事務主査	吉武 祐二	井上 雅之	宮崎 志行	宮崎 志行	宮崎 志行
主任主事	鎮守 俊明	鎮守 俊明	鎮守 俊明	木竹 元	石橋 伸二
	佐藤 雅二	秦 俊二	秦 俊二	秦 俊二	末竹 元
調査・報告					
参事補佐兼調査第二係長	児玉 真一	児玉 真一	児玉 真一	中間 研志	中間 研志
技術主査		飛野 博文			
主任技師	今井 涼子 進村 貞之	今井 涼子		今井 涼子 進村 貞之 小澤 佳憲 大庭 孝夫	小澤 佳憲 大庭 孝夫
技師		小澤 佳憲 大庭 孝夫	小澤 佳憲 大庭 孝夫 坂元 雄紀		坂元 雄紀

調査及び整理期間中には、元福岡県文化財保護指導委員の金子丈夫先生、前指導委員の東興了先生、現指導委員の安達照眞先生、また地元である吉井町教育委員会の小河誠嗣・平川祐介・江島尚子・樋口秀大氏、浮羽町教育委員会寺島克史氏、田主丸町教育委員会丸林慎彦・江島伸彦氏、北筑後教育事務所生涯学習課の重藤輝行氏には現地説明会・親子発掘体験事業や中学校発掘体験事業、他の発掘調査に関する様々なことを進めるにあたり大変お世話になりました（厲害きはすべて調査当時のもの）。

3年にも及ぶ調査には多数の方々が作業員として参加されました。調査は悪天候、悪条件での作業も伴い、これら多くの作業員の皆様の御尽力なしには無事に調査を完了することはなかったと思います。ここに深甚の謝意を表します。

II. 位置と環境

堂畑遺跡は、福岡県うきは市吉井町新治（旧浮羽郡吉井町大字新治字堂畑・柿木畑・大月）に位置する。遺跡の所在するうきは市は、平成17年3月20日に浮羽郡吉井町・浮羽町が合併し、市制を施行した新市である。うきは市は福岡県の南東部に位置し、西は久留米市（旧田主丸町）、東は大分県日田市と接する。市域は面積107km²、人口約34,000人を測り、南には東西に屏風のように連なる水繩山地と両側に広大な沖積平野を形成する筑後川で、市の南北を区切られる。うきは市の耳納山麓では葡萄や柿などの果樹栽培、平野部では稲作を中心とする農業などの一次産業が盛んであるが、近年では江戸時代の町並みを残す吉井の町並みや葛籠（つづら）地区の棚田などを中心とする観光振興にも力を入れている。

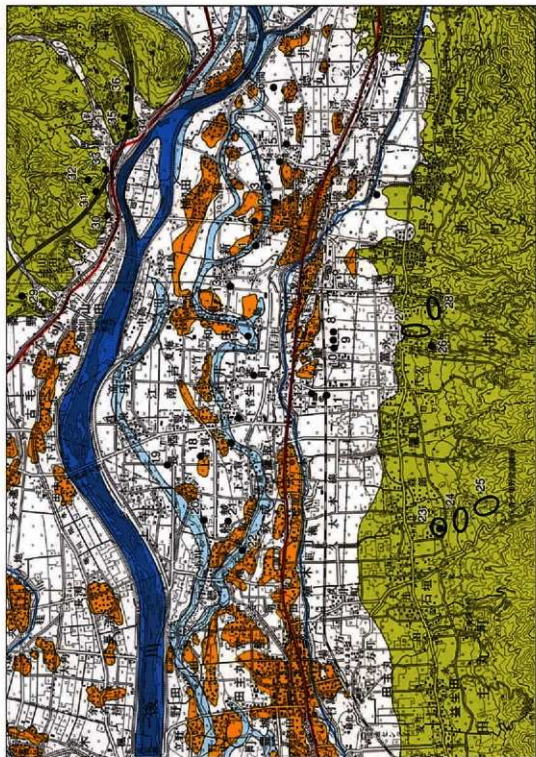
うきは市吉井町は久留米市から日田市へと至る豊後街道の宿場町であり、江戸時代中期には商品作物の栽培・加工及び筑後川の水運を利用した作物などの集散や「吉井銀（よしいがね）」と称された有力商人の活動により繁栄し、町並みにその面影を良く残すことから、平成9年には国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。現在の町並みは明治2年（1869）の大火を契機に、それまでの草葺から瓦葺塗屋造の町屋へと変化し、町が最も栄えていた大正期に形成されたものである。保存地区ではこれら250件の伝統的建造物と屋敷庭園及び川沿いの樹木について、保存の処置が取られている。

町の北を流れる筑後川は阿蘇外輪山に源を発し、筑紫平野に出会うと緩やかな蛇行を繰り返しながら西流し、久留米地峡部で流れを西南に転じ、福岡・佐賀の県境を曲流しながら有明海に注ぐ、九州第一の河川である。筑後川両側に形成される筑紫平野は、福岡県側では筑後平野といい、背振山地と水繩山地を結ぶ久留米地峡部を境として、上流を両筑平野、下流を南筑平野と呼ぶ。吉井町が位置する両筑平野は筑後川及びその支流によって形成された、ほぼ三角形を呈する平野となる。

この三角形の平野の大部分は、弥生時代以降に成立した、いわゆる「新期沖積層」にあたる。この「新期沖積層」は、弥生時代に入ると筑後川による両筑平野の沖積作用はほとんど終わり、周辺の丘陵から流れる河川による沖積作用が盛んになって形成されたものであり、上層は砂・シルト・粘土から構成され、堂畑遺跡も同様の地盤を呈する。堂畑遺跡の周辺では縄文時代後期以前の遺構・遺物などは確認されず、堂畑遺跡が立地する場所は弥生時代以降に形成された自然堤防上にあたると思われる。

この自然堤防は洪水で氾濫した水が、両側にあふれて流速が急に落ちるため、運ばれてきた土砂が堆積して造られるものであり、特に巨瀬川と筑後川本流の間には大小多くの旧河道が存在し、両側には同様の自然堤防が存在する。この旧河道の中で現在も水をたたえる美津留川は、堂畑遺跡を取り囲むように西に流れ、遺跡が位置する自然堤防もこの美津留川によって形成されたものと考えられるが、堂畑遺跡中央部と仁右衛門畑遺跡は粘質土系の地山であるのに対し、堂畑遺跡西側は砂・シルト層が地山である。このことは第4図の断面図を参照にすると、自然堤防上でも場所によってかなりの凹凸があり、この凹凸が遺構の在り方にも大いに関係すると考えられる。

なお、遺跡の歴史的環境については、「堂畑遺跡」Ⅰ・Ⅱに詳細に説明しているので参照されたい。

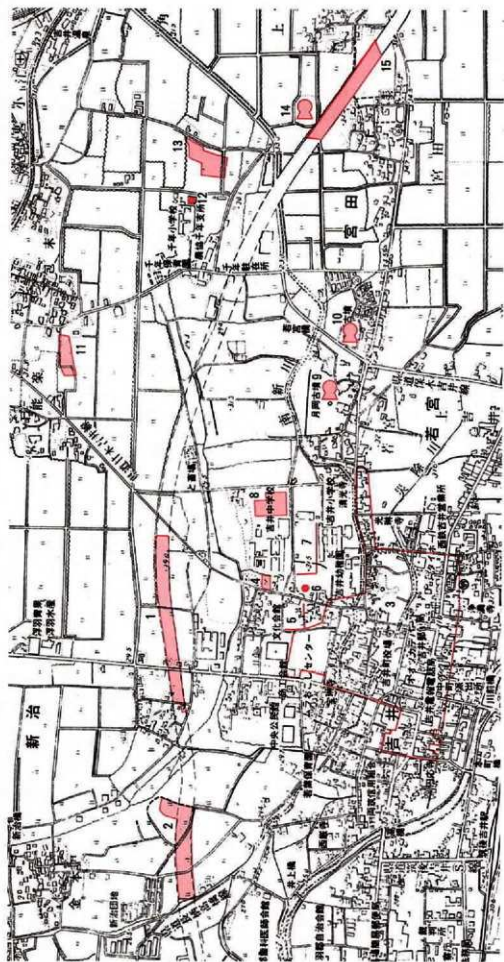


凡例

	田河川
	自然堤防
	台地—山麓
	河川
	遺蹟

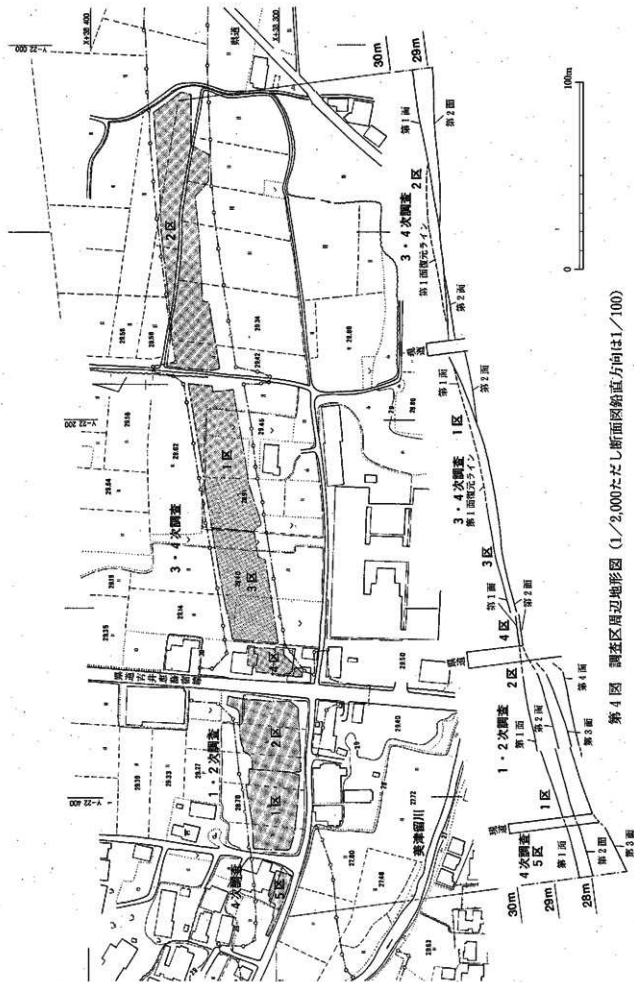
- A
1. 仁右衛門河遺跡
 2. 北園地区遺跡
 3. 吉井中学校遺跡
 4. 月岡古墳
 5. 日岡古墳
 6. 尾宮遺跡・塚宮古墳
 7. 尾宮西文庫遺跡
 8. 吉井水手木遺跡
 9. 吉井牧場遺跡
 10. 宮本牧場遺跡
 11. 宮本中學校遺跡
 12. 竹重遺跡
 13. 水塚古墳
 14. 在島地区遺跡
 15. 大塚遺跡
 16. 瀧尻五区田遺跡
 17. 船橋高原遺跡
 18. 瀧水地区遺跡群
 19. 千代入遺跡
 20. 船橋—ノ上遺跡
 21. 船橋宮ノ上遺跡
 22. 龜王遺跡
 23. 大塚古墳・大塚古墳群
 24. 清長橋古墳群
 25. 船橋平原古墳群
 26. 法華原遺跡
 27. 尾形原古墳群
 28. 東園形原古墳群
 29. 新屋古墳
 30. 原郷八幡宮古墳
 31. 大迫遺跡
 32. 本陣古墳
 33. 外之路遺跡
 34. 北流宮原古墳遺跡
 35. 船木宮原遺跡
 36. 主波巻ノ木遺跡

第2圖 周辺地形分類・遺跡分布圖

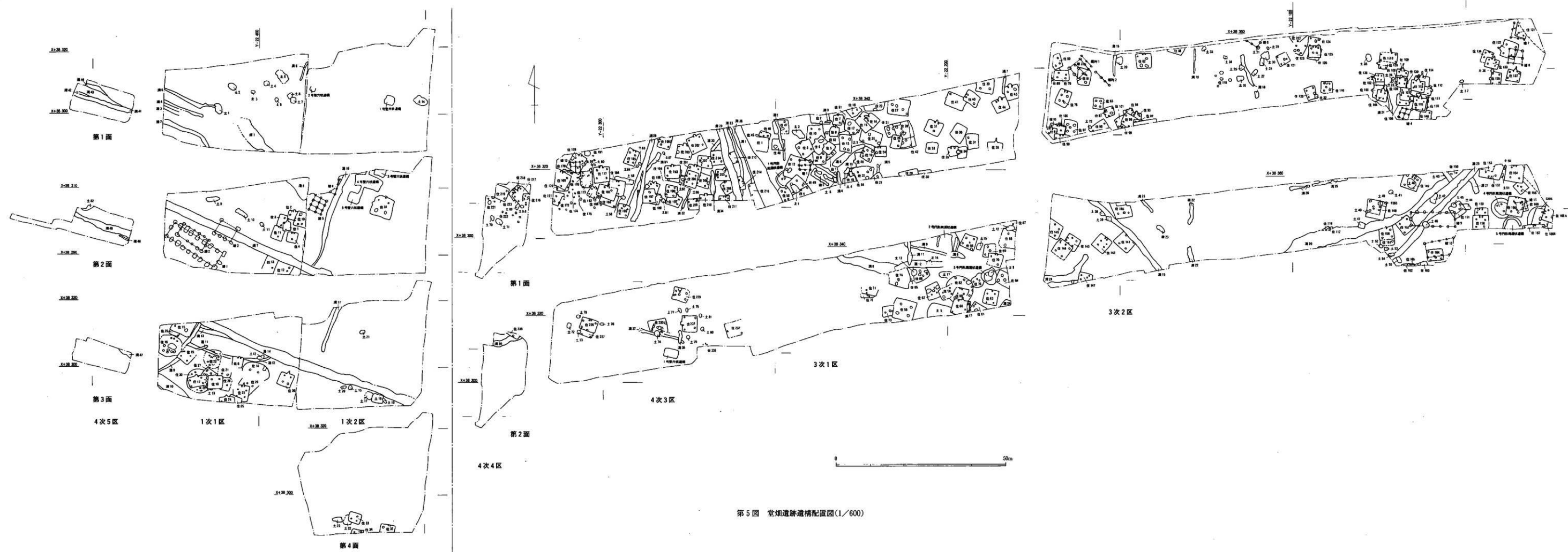


- 1. 堂畑遺跡
- 2. 仁右衛門恒遺跡
- 3. 吉井町伝統的建築物群保存地区
- 4. 正圓遺跡第1地点
- 5. 正圓遺跡第2地点
- 6. 小塚古墳
- 7. 吉井中学校遺跡第1地点
- 8. 吉井中学校遺跡第2地点
- 9. 月岡古墳
- 10. B.月岡古墳
- 11. 千年西田遺跡
- 12. 千年今丸遺跡
- 13. 千年小森遺跡
- 14. 塚堂古墳
- 15. 塚堂遺跡

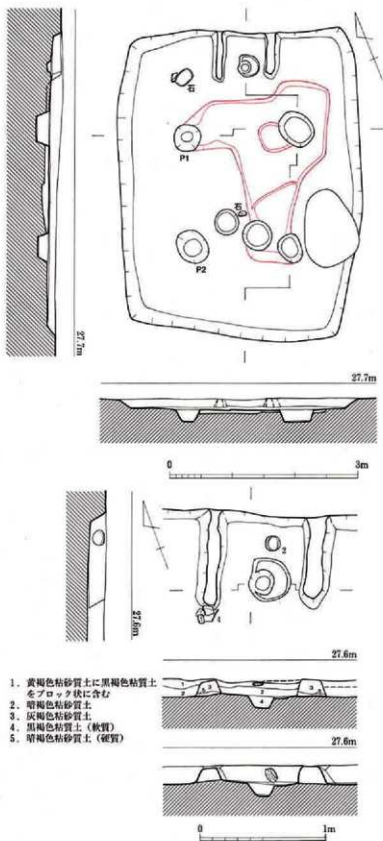
第3図 周辺遺跡分布図 (1/10,000)



第4図 調査区周辺地形図 (1/2,000ただし断面図鉛直方向は1/100)



第5图 堂遗址遗迹配置图(1/600)



第7図 78号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

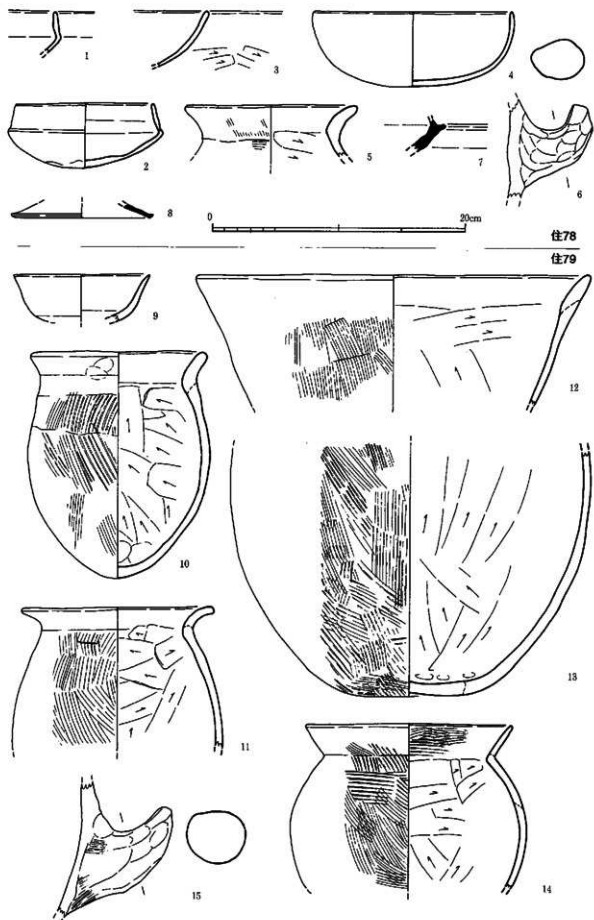
の15号溝北半分・20号溝西側は第1面で検出していたが、残りの部分は第2面で検出したため第2面の遺構とし、20号溝に切られる117・119号住居跡も第2面の遺構とした。一方15号溝に切られる16号溝は2号柵跡柱穴を切ることから、81号竪穴住居跡、3号掘立柱建物跡、1・2号柵跡も本来なら第2面の遺構になるが、ピット等他の遺構がどちらの面に属するかという問題が出てしまい、また遺構図にも不整合な箇所が出てくるために16号溝は第1面として報告する。このような現象が起こったのも2区中央が削平されているということの裏付けとなろう。

2区中央以外は東南隅では6世紀後半～7世紀初頭の住居群、東中央では密に切り合った7世紀末～8世紀後半の住居群を検出した。この住居群の遺構の残りは良く、トンネル状の煙道部を持つカマドなど良好な資料を得ることができた。2区西側では古墳時代前期・後期、7世紀後半～8世紀後半の住居群を多数検出している。第1面で検出した遺構は竪穴住居跡56棟、掘立柱建物跡6棟、土坑17基、溝4条などである。

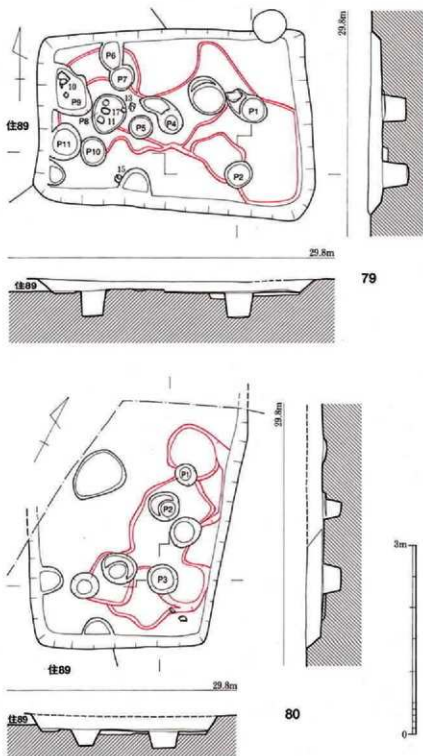
a. 竪穴住居跡

78号竪穴住居跡 (図版3、第7図)

2区西側の調査区端部に検出した。平面形は南北4.8m、東西3.8mの長方形で北壁中央部に内接型のカマドを付設する。主軸方位は北で、やや東側に振れる。壁の深さは15cmほどで、主柱穴はそれぞれ深さ20cm程度と浅いものの、住居跡の中央に



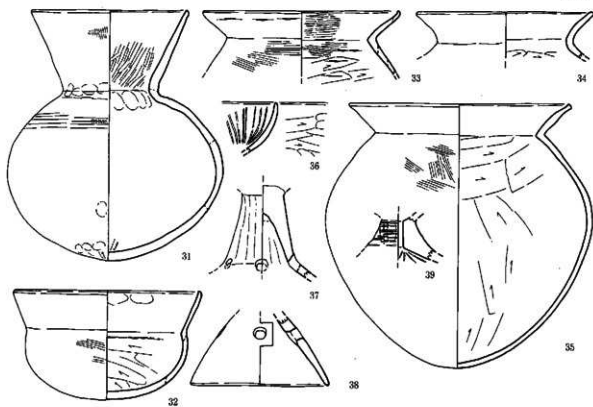
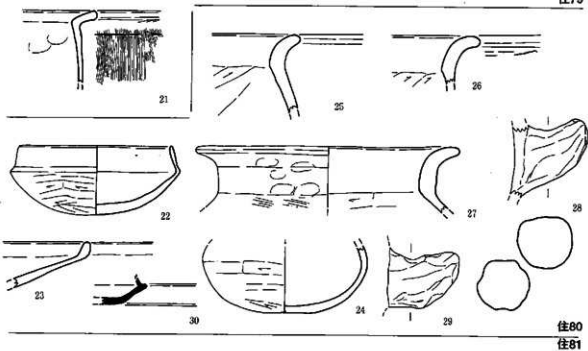
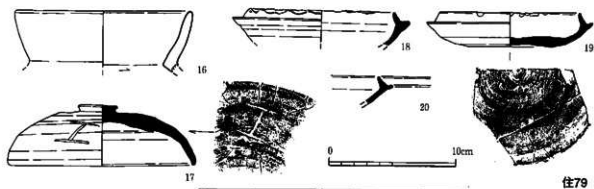
第8图 78·79(1)号竖穴住居跡出土土器実測図(1/3)



第9図 79・80号竪穴住居跡実測図(1/60)

やや寄った位置で4基とも検出できた。中央に不整形の床下掘り込みを確認した。出土土器から7世紀初頭前後のものであろう。

カマド(図版3) 住居跡北壁中央部に、袖が直線的に伸びる内接型のカマドを検出した。明確な焼面は確認できなかった。燃烧部の中央やや手前側に小ビットを確認し、支脚の抜き跡と考



第10图 79~81号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

えて調査を行ったがやや浅く、確実ではない。カマド内からは須恵器模倣杯のほぼ完形品を1点検出した(第8図2)。カマド埋土は大きく2層に分層できたが、いずれも住居跡の埋土と共通するものであった。カマド内から焼土がほとんど検出されておらず、天井が崩落していない、あるいは天井崩落土が上層に堆積していて削平により失われたものか。

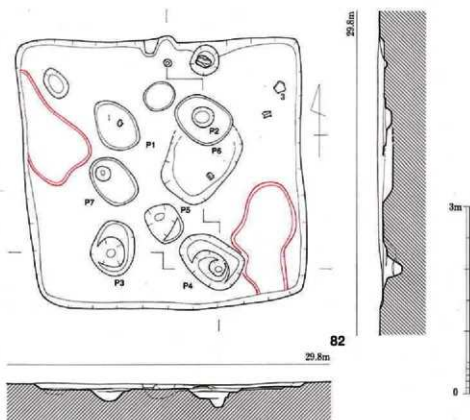
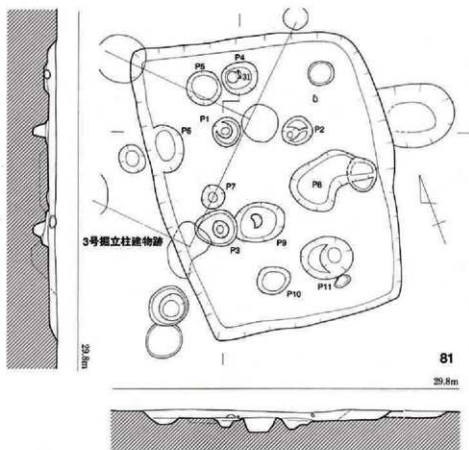
出土土器(図版100、第8図1~8) 1~6は土師器である。1・2は須恵器模倣杯である。1は口縁部片のみが残り、2はほぼ完形である。いずれも丸底の底部と内傾して直線的に伸びる口縁部を持ち、境界には段を形成する。2のみ口径が判明し、11cmを測る。全体的に摩耗しているが口縁部には横ナデ、底部にはケズリ痕が確認できる。3・4は半円形の器形を持つ碗である。いずれも調整は内面ナデ、外面は胴部下半から底部にかけてヘラケズリ、口縁部付近は内・外面ともに横ナデを施す。4のみ口径が判明し、16cmを測る。5は小形の変形土器の口縁部片である。胴部形状は不明だが、おそらく菌状の胴~底部を持つものであろう。口縁部は横ナデ、胴部内面はケズリ、外面には横方向にハケメを施す。6は瓶の把手である。良く上方に伸びる形状で、外面全体に指ナデ調整を施す。

7・8は須恵器である。7はかえりを有する杯身の口縁部片である。小片であり径は不明。8は高杯の脚部片か。端部が上方に短くはねる器形を持つ。

79号竪穴住居跡(図版3、第9図)

2区北西隅で検出した竪穴住居跡である。89号住居跡と切り合い関係を持ち、本住居跡が新しい。東西が長軸で4.4mを測り、短軸である南北は2.9mを測る。深さは20cmほどが残存していた。調査時には気づかなかったが、下層に別の竪穴住居跡が存在しており、床面の確定が難しかったため、やや掘りすぎた可能性がある。また、床面で多数のビットを検出したが、これらの多くは下層遺構の埋土を部分的に掘り込んでしまったものであろう。したがって、支柱穴の確定は難しく、断面で図示したビットもおそらく本来の深さよりも深くなっていると考えられる。出土土器から7世紀初頭前後に位置づけられる。

出土土器(図版100、第8・10図9~20) 9~16は土師器である。9は杯である。高杯の杯部の可能性もある。全体に摩滅しており調整等は不明。口縁部径は10.8cmを測る。10・11・13は変形土器である。10はやや窄まりの強い底部を持つもので、器形からは弥生時代末~古墳時代初頭の在地系の変形土器とも見られるが、出土遺構から7世紀のものとした。11は胴部が菌状を呈する小形の変形土器である。口縁部は如意状に外反する。13も同様の器形を持つものであろうが、大形品である。これらの資料は、いずれも内面ケズリ、外面ハケメ調整を施しており、口縁部は横ナデにより仕上げている。12は瓶の口縁部片であろう。バケツ状の胴部を有するもので、把手が付いていたものであろう。外面ハケメ、内面ケズリ調整を施し、口縁部は横ナデにより仕上げる。14は球形の胴部と短く直線的に外反する口縁部を持つ壺形土器である。調整は胴部外面ハケメ、内面ケズリ、口縁部外面にもハケメ痕が良く残るが、内面には横ナデを施す。15は瓶の把手である。比較的真っ直ぐに斜め上方に伸びる形態のものである。17は小形丸底壺の口縁部であろう。口縁部のみが残り、内・外面ともに横ナデ調整を施す。口縁部径は14cmを測る。これらのうち、14・17は古墳時代前期の資料、その他のものは7世紀代の資料であろう。



第11图 81・82号竖穴住居跡实测图 (1/60)

17～20は須恵器である。17は杯蓋である。半球形の胴部とボタン状のつまみを有し、天井部外面に回転ヘラケズリが残る。天井部に「エ」字形のヘラ記号が認められる。11径は14.8cmを測る。18～20は杯身である。いずれもかえりを有するもので、深さが浅い資料群である。19の底部にはヘラ記号が確認された。口径は18・19が判明し、18は11.3cm、19は11.2cmを測る。このうち、18・19は意図的に口縁部を打ち欠いている可能性がある。これらの資料はいずれも7世紀初頭前後に位置づけられよう。

80号竪穴住居跡（図版4、第9図）

2区北西隅で検出した竪穴住居跡である。89号住居跡と南側で切り合い関係を持ち、本住居跡が新しい。住居跡の1/3ほどは西・北側の調査区外にあり、長軸の長さは確定できない。短軸は略東西方向で、残存部で3.1mほどを測る。深さは25cm程度である。主柱穴は南側の2基を確認でき、深さは25cm程度である。床面からはその他にいくつかのピットを確認したが、これは本住居跡に伴うものではないだろう。このほかに不整形の床下掘り込みを検出した。深さは最も深い場所でも10cm足らずである。埋土は暗褐色粘砂質土で、下層にはやや明るい色の堆積土が確認された。出土土器から7世紀初頭～前半代に位置づけられる。

出土土器（図版100、第10図21～30） 21は弥生中期須玖Ⅱ式の甕形土器の口縁部である。混入品であろう。外面ハケメ、内面ナデ調整を施す。小片で口径は不明。

22～29は古代の土師器である。22は須恵器模倣杯である。丸底から胴部までゆるやかに湾曲しながら立ち上がり、口縁部は屈曲して内傾しながら直線的に伸びる。底部外面はヘラケズリ、内面はナデ、口縁部は内・外面ともに横ナデ仕上げ。23は碗形土器である。丸底から直線的に開き、短く屈曲するものであろう。24は小形の甕形土器の胴部であろうか。外面にケズリ痕が認められる。25～27は甕形土器の口縁部片である。いずれも丸底の底部と甕形の胴部を持つものであろう。如意状に外反する口縁部のみが残存する。28・29は甕の把手である。いずれも比較的短い。

30は須恵器の杯身である。口縁部にかえりを有するもので、深さはかなり浅い。これらの資料は、21をのぞくほとんどが7世紀初頭～前半代のものである。

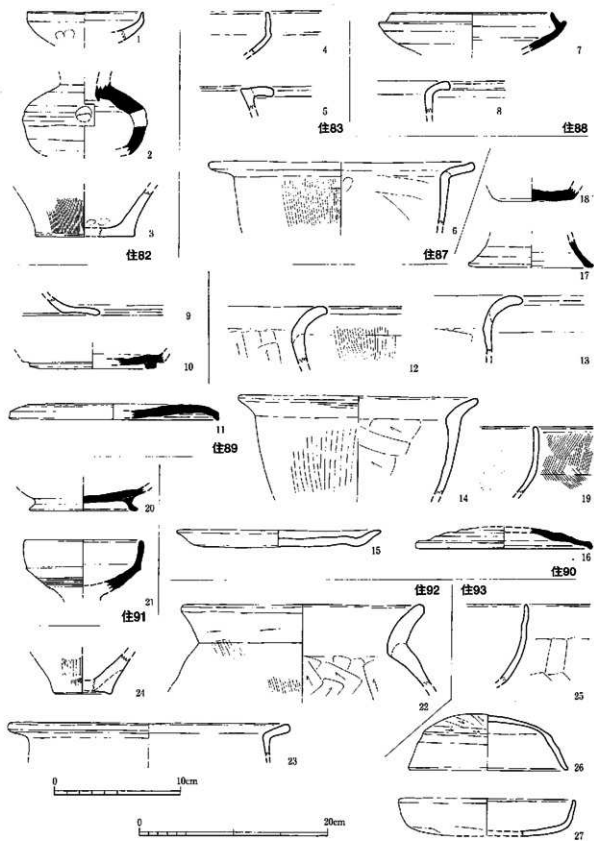
81号竪穴住居跡（図版4、第11図）

81号竪穴住居跡は2区東端中央やや北寄りに位置する住居跡で、北東には1・2号櫓跡が存在し、3号掘立柱建物跡に切られる。南北4.8m×東西3.9m、深さ15cmの北壁側がやや広がる長方形住居跡である。

第9図では住居平面が北西に傾き、住居主軸で断面図を作成していないように見えるが、P1～3がピット形態から主柱穴になると考えられ、P1-2とP1-3が直角となる軸を住居主軸にし、断面図を作成したことによるもの。P2-11を主軸に考えた際には住居壁と平行になるが、P1-2・3が直角になることから後者を優先した。

床面では13基のピットを検出し、P4からは中形の直口壺がピット床面直上から出土（第10図31）。埋土は暗灰褐色砂質土。当住居跡は、出土土器から古墳時代前期前半の時期となる。

また、覆土から磨製石斧（第263図12）が出土している。



第12図 82・83・87～93(1)号竪穴住居跡出土上器実測図
 (3・5・6・8・19・23・24は1/4他は1/3)

出土土器（図版100、第10図31～39） 当住居跡出土土器は布留系土器のみ出土した。31は中形の直口壺である。口縁部外面には縦ハケがわずかに残り、口縁部内面全体にはミガキを施したのか。外面肩部には縦ハケのち粗い横ハケを施し、外面肩部以外はナデで最終調整したのか。底部外面にはケズリが、内面には工具痕が残る。底部外面には黒斑あり。口径12.2cm、器高19.9cm、最大胴部径16.0cmで、色は黄橙色。32は小形丸底壺である。口縁部は内湾気味ながらも直線的に外傾し、端部をやや内向き上方につまみ出す。胴部外面はハケのちナデ、内面胴部以下はケズリを施す。外面には黒斑あり。口径15cm、器高8.7cm、色は暗黄褐色を呈する。

33～35は布留甕である。33は口縁端部を上方につまみ出し、口縁部外面には粘土継ぎ目痕が残り、口縁部内面にはハケを施す。外面には二次加熱痕、頸部外面には黒斑あり。色は黄橙色～橙色を呈する。34は口縁端部を外側に若干つまみ出すもので、外面にはススが、内面には炭化物が付着する。色は黄褐色。35は口縁端部を内上方につまみ出し、外面頸部近くにはハケが残り、内面は頸部までケズリを施す。外面にはススが付着する。口径17.4cm、器高21.0cm、色は黄褐色～褐色を呈する。

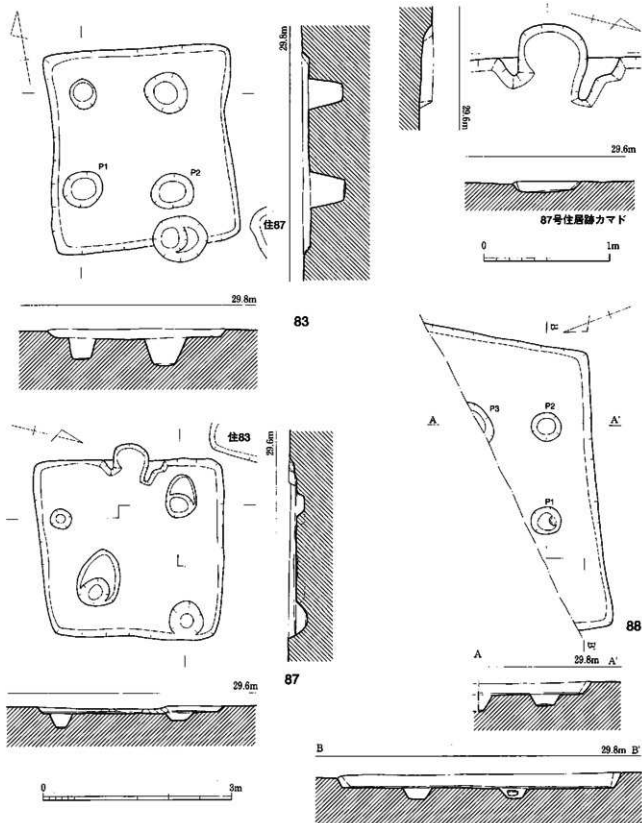
36は精製直口鉢で、外面は口縁部近くまで太いミガキ状の丁寧なケズリ、内面には暗文状のミガキを施す。色は灰黄褐色。37は高杯脚部で脚柱部外面はケズリ、内面は工具ナデのちナデで調整し、焼成前に外から穿孔を4つ施す。外面にはススが付着。色は暗黄褐色。38・39は畿内系小形器台脚部。38は生乾き状態で外から4つ穿孔する。外面には二次加熱痕があり。色は黄橙色～橙色。39は杯内面底部と脚内上面とが貫通するもの。貫通部は幅6mmで、工具ナデで調整。脚柱部外面は細かい横ミガキを施し、内面は工具絞り痕が残る。外面にはススが付着する。色は黄褐色。

82号竪穴住居跡（図版4、第11図）

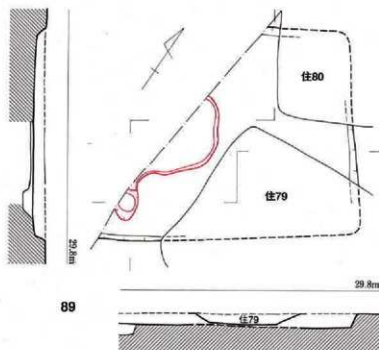
82号竪穴住居跡は2区東中央の北端に位置する住居跡で、周囲には住居跡・遺構とも少ない。座標北が住居主軸と一致し、北壁中央にはカマドが付設される。南北4.3m×東西4.4m、深さ7cmのほぼ正方形住居跡で、埋土は暗灰褐色砂質土。住居床面では10基のピットを検出し、P1～4が主柱穴となると考えられるが、P1は深さ5cmと非常に浅いため自信がない。住居西と南東隅で床下掘り込みを検出した。

カマド（図版5） 調査当初はカマドの存在に気づかず、袖大部分を掘り飛ばしてしまった。残存する左袖は壁から25cm突出するが、奥壁から35cmの場所に径10cm、深さ3cmと浅い支脚抜き取り痕を検出したことから、左袖先端部も掘り飛ばしてしまったと考えられる。カマド奥壁が住居壁からわずかに突出する形態で、やや燃焼部が狭くなると推測できる。カマド埋土は焦土・炭が少量混じる暗褐色砂質土で、黄灰褐色砂質土で袖を構築する。

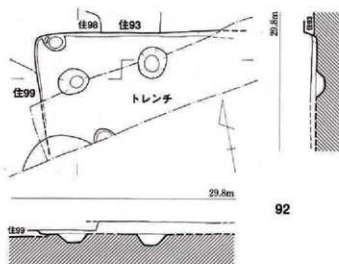
出土土器（第12図1～3） 1は布留系精製小形器台杯部。口縁端部はわずかに外反する。杯部下部にはケズリ痕がある。色は灰黄色を呈する。2は須恵器甕体部で、外面にはナデ凹線が認められる。体部中央には焼成前に外から1ヶ所穿孔する。色は暗灰色。3は弥生中期甕底部で、色は灰黄褐色を呈する。図示した出土土器は3点であるが、2から当住居跡の時期は古墳時代後期後半と思われる。



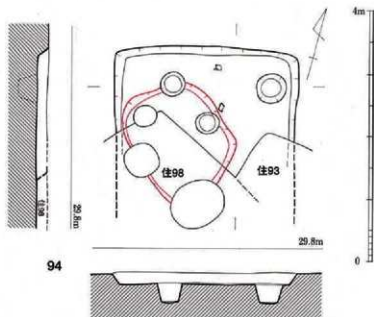
第13図 83・87・88号竪穴住居跡、87号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)



89



92



94

83号竪穴住居跡 (図版5、第13図)

2区西側の中央やや南寄りで検出した住居跡である。平面形態は南北3.2m、東西3.0mのわずかに南北に長いほぼ正方形を呈し、壁の残存深さは15cmほどとやや浅い。床面から、深さ40cmほどを測る柱穴を4基検出した。主柱穴の可能性が高いが、やや配置がずれており疑問が残る。床面からカマド等は検出されなかったが、埋土や検出面から古墳時代後期以降の住居跡である可能性が高い。また、P2から磨製石斧(第264図22)が出土している。

出土土器 (第12図4・5)

4は須恵器模倣杯身の口縁部片であろう。底~胴部は平たい半球状を呈し、口縁部境で屈曲して口縁部は直立する。小片で径は不明。

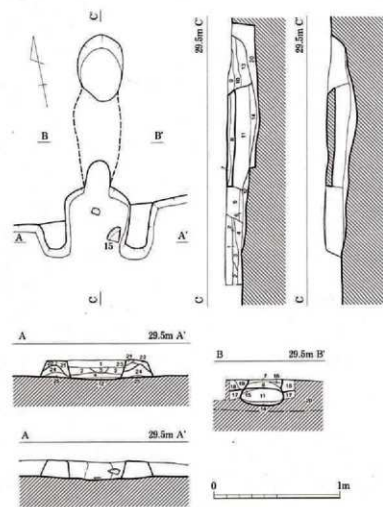
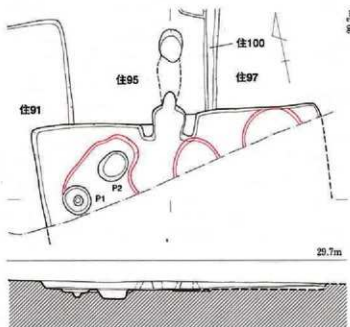
5は弥生中期須玖Ⅱ式土器の甕形土器の口縁部片である。鐮先状の形状を有し、小片で径は不明。混入品であろう。

87号竪穴住居跡 (図版5、第13図)

87号竪穴住居跡は、2区東側中央やや南寄りに位置し、83号住居跡と北西隅で接する住居跡で切り合い関係は不明。東西2.8m×南北2.9m、深さ12cmのほぼ正方形の住居跡で、西壁中央にカマドを付設する。床面上ではピット4基検出したが、位置は多少気になるものの、いずれも主柱穴になると考えられる。埋土は暗灰褐色砂質土。

カマド(図版6、第13図) 西壁中央に付設されるカマドで、壁から右袖が44cm、左袖が23cm突出する(右袖

第14図 89・92・94号竪穴住居跡実測図(1/60)



1. 暗黄褐色砂質土に青灰色粘質土ブロック混じる (炭少ない)
2. 1に炭・焦土少し含む
3. 暗灰褐色砂質土に炭・焦土多く混じる
4. 1に焦土や多く混じる (2よりも若干湿じる)
5. 暗茶褐色粘質土に焦土非常に多く混じる [カマド構築土が崩壊したもの (後)]
6. 暗茶褐色粘質土 (焦土含まない、粘性が強い) [カマド床面堆積土]
7. 暗茶褐色粘土に焦土若干混じる
8. 暗茶褐色粘土に焦土多く混じる
9. 暗黄褐色砂質土+暗赤褐色砂質土ブロック、焦土・炭少量含む
10. 8より暗赤褐色砂質土ブロック多く混じる
11. 8より焦土ブロック状に混じる。炭も多く含む [カマド構築土が流入したものか]
12. 暗灰褐色粘質土に焦土、炭多く混じる、粘性が強い [床面塗り替え、床貼り土]
13. 11に青灰色粘土ブロック少量混じる [カマド構築土が流入したものか]
14. 11に炭ブロック含む、焦土も多く暗い [煙道部堆積土]
15. 暗茶褐色粘土 (焦土) (壁面に粘土を貼り付けたもの)
16. 8より焦土を含まない [壁で覆われた土]
17. 暗黄褐色砂質土に青灰色粘土ブロック少量混じる
18. 17より明るく、砂質が強い
19. 18より暗く、粘性がある
20. 地山 (明黄褐色砂質土)
21. 暗黄褐色砂質土に炭・焦土多く混じらない
22. 暗黄褐色砂質土に炭少量混じる
23. 暗黄褐色砂質土
24. 暗黄褐色砂質土に青灰色粘土ブロック多く混じる
25. 24より暗く、粘土ブロックの割合が少ない

第15図 90号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

は左袖と同じ形態の袖であった可能性が高く、掘り間違い)。燃焼部は壁から25cmほど突出し、燃焼部幅45cmほどの丸みを帯びた形態になる。焼面は確認できず、床面付近の埋土には焦土・炭が多く混じていた。袖はやや粘性のある土を使用して構築する。

出土土器(第12図6) 図示できる土器は1点のみである。6は弥生中期跳ね上げ口縁鉢。内面には工具ナデのちナデ調整。色は灰黄色。山土土器は弥生中期土器が主体であるが、土師器が少量で出土しており、古墳時代後期後半以降の住居跡になると考えられる。

88号竪穴住居跡(図版6、第13図)

88号竪穴住居跡は、2区東の北端に位置する。東側には19号溝が存在するが、周囲に住居跡はない。住居北側大部分が調査区外で、南壁部分で東西4.5m、深さ25cmを測る。東・西壁の状況からやや北側に壁が広がる平面形態になるか。床面では3基ビットを検出し、P1・2は主柱穴になる可能性もあるが、柱間が154cmと住居規模からすると短いため不安が残る。埋土は茶褐色砂質土。

出土土器(第12図7・8) 図示できた土器は2点のみで、7から当住居跡の時期は古墳時代後期後半になるものか。7は須恵器杯身11縁部。外面下部には回転ヘラケズリ痕が認められる。色は灰色。8は弥生中期壺口縁部。口縁端部は下向きになり、色は橙褐色。

89号竪穴住居跡(図版6、第14図)

2区北西隅で検出した。79号・80号住居跡と切り合い関係を持ち、これらより古い。また、住居跡の西側半分ほどが調査区外に出ている。このため、本住居跡は大きく破壊されている。住居跡の規模は短軸のみ確認でき、南北方向で3.4mを測る。残存深さは25cmほどで、埋土は上層が明褐色粘砂質土、下層が暗褐色粘砂質土層であった。主柱穴の可能性のあるビットを南西隅に確認した。深さは20cmほどである。中央南側に不整形の床下掘り込みを確認した。埋土は暗灰褐色砂質土層で堅く締まり、地山とよく似ていた。出土土器から、8世紀代(前半～中葉)のものと考えられる。

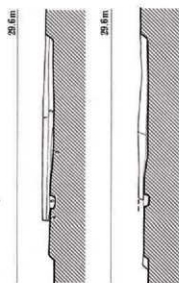
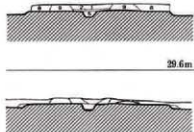
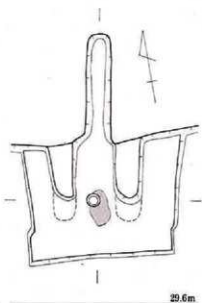
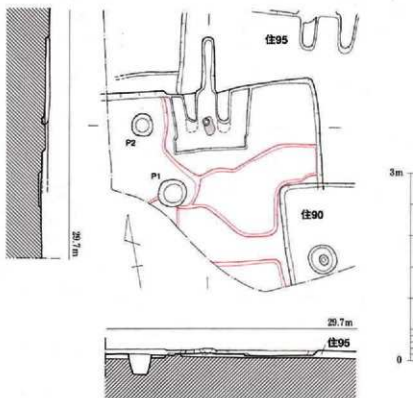
出土土器(第12図9～11) 9は土師器高杯の脚部である。屈曲して広がる端部のみが残存する。

10・11は須恵器である。10は高台を有する杯身の底部片である。平底と高台部のみが残存し、高台の断面形は長方形を呈する。11は杯蓋である。つまみ部を除く部分の形状が判明し、平坦に伸びて端部を短く屈曲させる形態を持つ。いずれも8世紀前半～中葉に位置づけられる。

90号竪穴住居跡(図版7、第15図)

90号竪穴住居跡は2区南西隅に位置し、91・95・97・100号住居跡を切る、2区第1面南西隅住居群の中で最も新しい住居跡。住居南側は調査区外のため、現状で東西4.6m、南北1.6m以上、深さ13cmを測る。北壁中央には煙道部がトンネル状となるカマドを付設し、住居埋土は暗黄褐色砂質土。床面には2基のビットを検出したが、形状からP1が当住居跡の主柱穴と考えられる。床面下では3ヶ所掘り込みを確認した。

カマド(図版7) 北壁中央に位置するカマド。袖は右袖では45cm、右袖では29cm突出するが、壁に対してやや傾いた状態でカマドを設置しているために、カマド主軸を基準にすると両袖と



1. 暗茶褐色砂質土（炭・焦土含む）
2. 明黄褐色粘土+1（炭・焦土多く含む）〔カマド壁、天井部構築土〕
3. 暗灰褐色砂質土+明赤褐色粘土（粘土面が広がる）〔カマド造り直し後の貼床〕
4. 明赤褐色焦土（壁面）
5. 暗赤褐色粘質砂（焦土で、炭ほとんど含まない）〔支脚抜き痕ベツト内にカマド構築土が入ったもの〕
6. 暗茶色褐色砂質土（住居覆土）
7. 暗黄灰色砂質土（さらさら）〔掃き土〕

0 1m

第16図 91号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

も同じ程度突出する形態となる。燃焼部床面では明確な焼面は確認できなかったが、断面図を取った場所では燃焼部幅40cm、奥壁から袖先端部まで55cmを測る。134号住居跡と同様にカマド内には長さ10cm程度、厚さ1cm未満の薄い板石が床面直上に複数存在したが、調査当初ではカマド構造に関係しないものと思い掘り進めたので図示できないが、火の使用と関係するものか。

燃焼部は奥壁側が隅丸の平面形態になる。燃焼部は煙道部との段差がなく、煙道部床面は燃焼部床面から緩やかに下降し、煙道部中央から煙道門に向かって緩やかに上昇する。煙道部平面形は点線で示すように煙道門にむけて徐々に広がりながら、煙道門先端部から65cm付近で最も広がり、そこから煙道口に向けて幅が徐々に狭くなる。燃焼部奥壁から煙道口ビット先端部までの長さが1.2m、トンネル状になる煙道部で最も幅広い場所で幅37cm、高さ17cmを測り、煙道部断面は楕円形状になる（C-C層）。またC-C層断面図から、煙道部は天井部を残し、トンネル状に掘削したのではなく、17～19層の掘り方部分まで当初掘削し、17、18・19層と粘性の強い土で煙道部壁を構築する。最後に焦土・炭が少量混じった粘土である7・8・16層で天井を構築したことが土層から推定できる。

しかし、トンネル部分の空間を保持するためには、どのような工法をとったのかは調査技量不足のため分からなかったが、福岡県朝倉町・杷木町に所在する外之隈遺跡V区3号住居跡カマド煙道部では板状圧痕を検出し、壁面に土止め板を使用して粘土を張り、天井部も板を被せてその上から粘土を被覆したと想定されている（小田和利編 1996『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告40』福岡県教育委員会 P73・74）。煙道部断面が外之隈遺跡では長方形ということは、当カマドの状況とは大きく異なるものの、現段階では外之隈例のような工法を取ったと考えておきたい。

このような断面円形の煙道部を持つ当遺跡の住居跡は、2区102号住居跡・131号住居跡、3区187号住居跡カマド1・2が存在する。時期も6世紀末～7世紀初頭、8世紀後半とバラバラであるが事例が少ないことから、構築方法や使用形態も含めて今後の検討課題である。

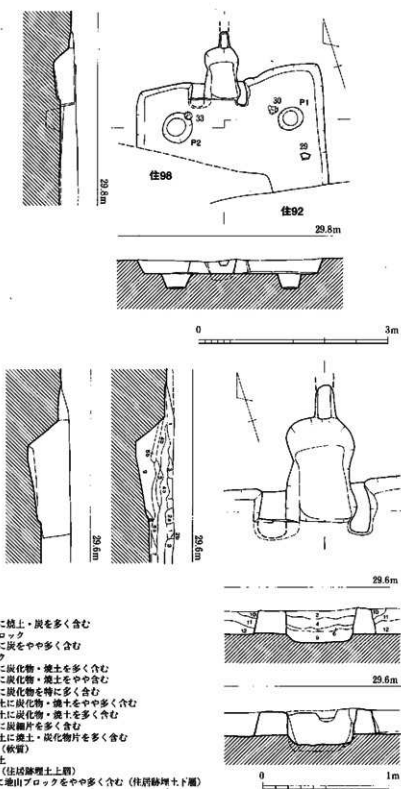
煙道口は検出段階で炭が充填されたビットとなっており、土層からトンネル煙道部内部とは異なる堆積状況を示す。これはトンネル煙道部が焦土・炭により詰まってしまう、カマドとして使用できなくなってしまったためによるものと予想される。15はカマド内出土。覆上から砥石（第267図48）、製塩土器（第269図7）が出土。

出土土器（図版101、第12図12～16）12～14は土師器甕である。12は外湾する口縁部で、頸部までヘラケズリを施す。色は淡茶褐色。13は直立する胴部から強く外湾する口縁部で、外面にはスガが付着する。色は茶褐色。14は短く直線的な口縁部を強く外反させた小形甕で、胴部には粗い縦ハケを施し、内面頸部までヘラケズリを施す。色は茶褐色。15は土師器皿で、カマド出土のもの。底部はヘラ切りのちなデ調整。口径16.1cm、底径13.2cm、器高1.4cmで、色は灰黄褐色。

16は須恵器杯蓋で、口縁部が嘴状になるもの。口縁部はかなり歪み、外面には灰が付着。口径は14cmを測るが、歪みのため自信がない。色は灰色。17は須恵器高杯脚裾部。小片のため径に自信がない。色は淡灰色～灰色。18は須恵器壺底部。底部にはヘラ切り痕が残る。色は灰色。

19は弥生後期鉢口縁部で、端部は丸く取め、内外面はハケで調整する。色は暗黄褐色。

出土土器から当住居跡の時期は8世紀後半になるか。



第17図 93号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

91号竪穴住居跡（図版7、第16図）

91号竪穴住居跡は2区南西隅に位置し、90号住居跡に切られ、95・100号住居跡を切る。住居西・南が調査区外であるが、北壁中央に付設されたと考えられるカマドから規模を推定すると、東西3.3m（推定）、深さ5cmのやや南北に長い住居跡となるか。住居床面は5cmほど全体

的に下げすぎてしまい、カマドが浮いたように図示されているが、カマド床面が本来の床面の高さである。床面からは2基のピットを検出した。P1は深さでは主柱穴としても良いが、位置がカマドに近すぎることがやや気になる。他の主柱穴は検出できなかった。住居埋土は暗茶褐色砂質土。カマド部分以外の住居ほぼ全体で床下掘り込みを確認した。

カマド(図版8、第16図) 北壁中央に付設されたと考えられるカマド。両袖とも壁から50cmほど突出するが、硬化面の位置からもう15cmほど南に長かったものと考えられる(破線で示す)。奥壁から40cmの位置に径10cm、深さ4cmの浅い支脚抜き取り痕があり、その周囲には硬化面が形成されている。支脚抜き取り痕の位置で燃焼部幅30cmとやや幅狭いカマドとなる。奥壁から煙道部が85cm北に延び、幅は20cmと煙道部先端までほぼ同じ幅となる。煙道部床面は煙道部先端に向かってやや上向きに傾斜する。煙道部と燃焼部とが段差を持たない、当遺跡では数少ないカマドである。

出土土器(第12図20・21) 20は須恵器杯身で、踏ん張る高台を持つ。杯部内面は回転ナデのち不定ナデを施す。色は灰色。21は高杯杯部で、口縁部と体部との境にはナデによる鈍い稜が認められる。杯底部にはカキ目を施す。色は灰色。出土土器から7世紀後半の住居跡となるか。

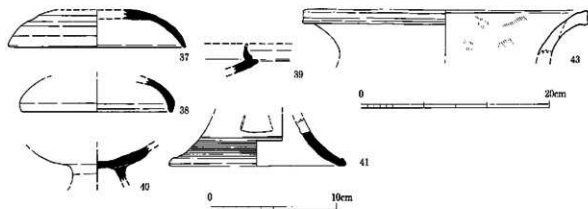
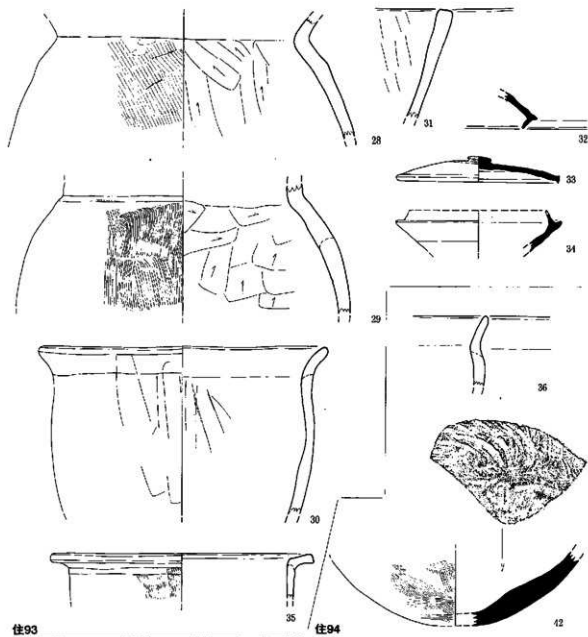
92号竪穴住居跡(図版8、第14図)

2区西寄りの南側で、焼土を多く含む黒褐色土が不整形に広がっている場所が確認された。当初は谷状地形に堆積した包含層と判断したが、住居跡が複雑に切り合っている可能性もあると考え、トレンチを設定して土層断面を観察したところ、住居跡の壁の立ち上がりと思われる不整合面を確認した。また、焼土が多く混じる部分とは別に、突出型のカマドと考えられる焼土のかたまり部分も確認したため、表面の精査を行って、遺構の検出につとめた結果、92・94・98・99・101号の6棟の竪穴住居群の切り合ったものであると把握された。ただし、この住居跡群については上層が極めて類似していたため線引きに難航し、やや自信のないところである。

このうち、92号住居跡は93・98・99号竪穴住居跡と切り合い関係にあり、これらよりも新しい。この住居群全体の中でも最も新しい住居跡である。住居跡はそのほとんどが南側の調査区外に広がっており、本調査区内では北西コーナー部分のみが検出された。しかし、検出当初98・99号住居跡との先後関係を間違えて、これらの住居跡と切り合うこのコーナー付近を破壊してしまっていたため、本来の形状を把握できたとは言い難く、住居跡の規模も不明である。残存深さは30cm程度で、主柱穴の可能性のあるピットを北西隅に1基のみ確認したが、深さは15cm程度と極めて浅い。埋土には先述のように焼土が認められるが、本住居跡付近ではそれほど多くない。なお、この焼土は個別の住居跡にともなうものであるというよりはむしろ住居跡の埋土の上層に薄く広がるように堆積していた。出土土器と切り合い関係から、本住居跡は7世紀代(初頭～前半)に位置づけておきたい。

出土土器(第12図22～24) 22はやや球状に近い胴部を持つ甕形土器である。如意状に外反する口縁部のみが残る。胴部内面はケズリ、外面はハケメ、口縁部は内・外面ともに横ナデ調整を施す。

23・24は弥生時代中期須玖Ⅱ式土器の甕形土器である。23は屈曲口縁、24は底部片である。



第18圖 93(2)・94号竪穴住居跡出土土器実測図(35・43は1/4、他は1/3)

93号竪穴住居跡 (図版8、第17図)

92号住居跡の北側にこれに切られる住居跡である。また、98号住居跡とも切り合い関係にあり、これより古い。住居跡の南半分をこれら二つの住居跡に破壊されており、残された北側の壁の中央部分に突出型のカマドを検出した。主軸方位は北で、やや東に振れる。住居跡の規模は東西方向のみ判明し、およそ3mほどを測る。残存する部分の深さは20cmほどである。主柱穴と思われるピットを北壁に沿って2基確認できた。深さはいずれも25cm程度である。埋土は暗褐色粘砂質土で、焼土や炭化物をほとんど含まない。また、最下層には地山ブロックを含むやや色調の明るい土層が確認された。履土から磨製石包丁(第264図23)が出土したが、混入品と考えられる。

カマド(図版9) 北壁中央部に突出型のカマドを検出した。掘り込み部分の規模は上面で幅45cm×奥行55cmほど、これにさらに袖部の長さ約40cmほどがあるので、幅に対して奥行が長い燃焼部を持つ。燃焼部の最奥には煙道部の掘り込みが確認されたが、削平が著しく25cmほどしか確認できなかった。埋土は9層に細分されるが、最下層(9層)は焼土を含まずやや軟質の砂層であり、これを埋土と判断してよいものか疑問が残る。地山を掘りすぎた可能性も残る。これに対し、4層～6層までは炭化物や焼土を多く含み、カマドの天井部が崩落したものと考えてよいだろう。出土土器等から、7世紀初頭前後に位置づけられるものであろうか。

出土土器(図版101、第12・18図25～35) 25～31は土師器である。25は碗形土器の口縁部であろう。胴部外面にケズリを施し、内面と口縁部は摩耗によりはつきりとしなが、ナデ仕上げであろう。26は須恵器模倣杯蓋である。やや丸みを帯びた天井部から、明瞭な屈曲部を経て直線的に斜め下方に垂下する口縁部へと至る。天井部上面にヘラケズリ痕が明瞭に残る。27は小形の杯である。平坦な底部から屈曲して、口縁部はわずかに内湾しながら直立する。28～30は甕形土器である。28・29は甕状の胴部を持つ甕の胴部片である。いずれも内面ケズリ、外面にハケメ調整を施す。29は胴部の膨らみが弱く、バケツ状の胴部を有するものである。頸部のしまりも弱い。内・外面に板ナデのちナデ調整を施す。31は甕または鉢の口縁部であろうか。直線的に伸びる口縁部のみが残る。

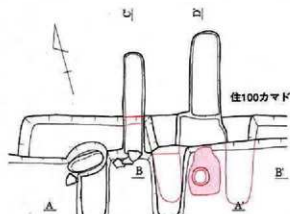
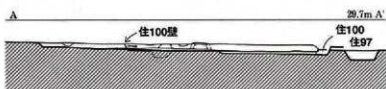
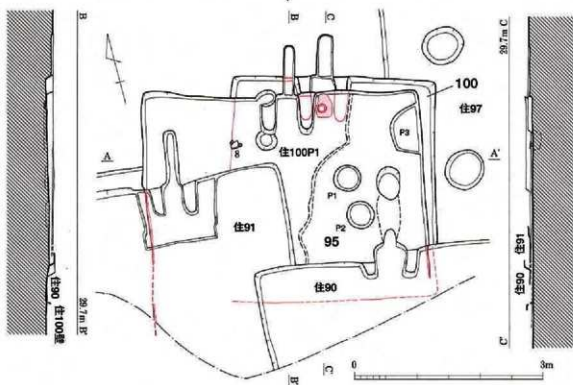
32～34は須恵器である。32は口縁部にかえりを持つ杯蓋である。口縁部のみが残存する。比較的天井部の高さがある資料である。33はボタン状のつまみを持ち、天井部から口縁部にかけて直線的に伸びて端部を下向きに小さく屈曲させる資料である。外面の全体に回転横ナデを施す。34はかえりを持つ杯身の口縁部片である。

35は弥生中期須玖Ⅱ式の甕形土器の口縁部片。直角に屈曲して端部を四角に収める。

これらの資料は時期的にやや幅があり、33などは8世紀代の資料であるが、主体は7世紀初頭前後にあるものと考えられる。

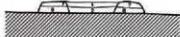
94号竪穴住居跡 (図版9、第14図)

92～94・98・99・101号の切り合いを持つ住居跡群のうち、最も北に位置する竪穴住居跡である。93・98号住居跡に南側を切られ、一連の切り合い関係の中で101号住居跡と並び最も古く位置づけられる住居跡である。住居跡は北側半分ほどが残存しており、東西幅が2.9mほどを測る。壁の残存深さは20cmほどである。主柱穴の可能性のあるピットを北側で2基検出し、と

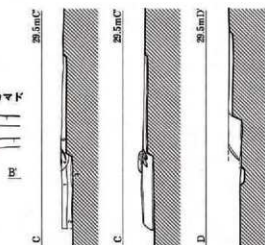


住95カマド

A 29.5m A'



A 29.5m A'



B 29.5m B'



C 29.5m C'



D 29.5m D'



0 1m

1. 暗黄灰色砂質土に灰色粘質ブロック
少量混じる
2. 1+暗赤褐色砂質土ブロック(灰土)少量混じる
3. 2に黒土ブロック含む
(2より多い)
4. 暗赤褐色粘土(灰土)+灰褐色粘質土ブロック+灰多く混じる
5. 暗黄灰色砂質土+灰褐色砂質土ブロック多く含む、暗赤褐色砂質土ブロック(灰土)多く混じる(カマド煙道部天井層土)
6. 暗黄灰褐色砂質土に暗灰色粘土ブロック少量含む
7. 暗黄灰褐色砂質土に暗灰色粘土ブロック少量含む
8. 7より粘性が強い

カマド壁
天井部構築土

カマド煙
道部天井層土

構築築土

第19図 95・100号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

もに30cmほどの深さを測る。中央やや西寄りに、不整形の床下掘り込みを確認した。出土土器と切り合い関係から、6世紀後半に位置づけられよう。埋土中から、土禾(第268図14)が出土した。

出土土器(第18図36~43) 36は土師器の鉢である。半円状の胴部と短く外反する口縁部を持つものであろう。

37~42は須恵器である。37・38は杯蓋である。天井部から口縁部にかけて緩やかに内湾する資料である。いずれも天井部を欠失する。口径は37が14cm、38は12cmである。39はかえりを有する杯身の口縁部片である。かえり部が直立して比較的長く伸びる。40は高杯の杯部片である。41は脚部片である。41には方形または三角形の透かし孔が確認できる。これらの資料はおおよそ6世紀後半に位置づけることができる。

43は混入品で、弥生時代中期の茶口縁壺の口縁部片であろう。口縁部が短く、特徴的である。口縁端部上面に強いナデを行い、端部を上方にやや引き出す。須玖Ⅱ式のなかでも新相に位置づけられよう。

95号竪穴住居跡(図版9、第19図)

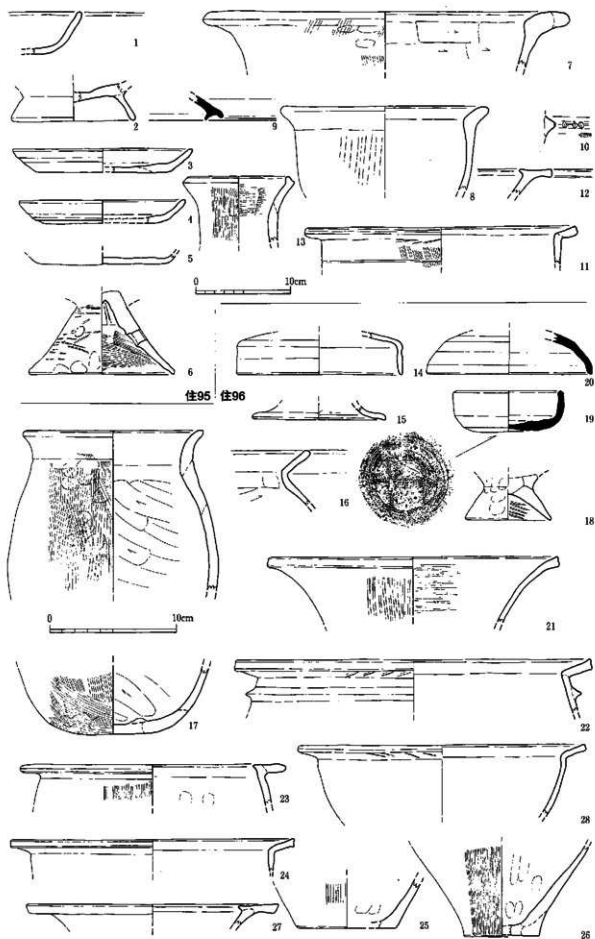
95号竪穴住居跡は2区南西隅に位置し、90・91号住居跡に切られ、97・100号住居跡を切る。南壁は90・91号住居跡に切られ壊されてしまったために、現状では南北3.6m以上×東西4.5m、深さ10cmを測る。北壁中央にカマドを付設し、床面ではビット4基検出したが、100号住居跡と床面の高さがほぼ同じため、カマドに切られるビットは100号住居跡に属し、その他のビットも当住居跡に属するかどうか不安。P1からは9世紀後半ごろの土器が出土しており、P1は上層から切り込むビットとなる。埋土は暗黄灰色砂質土で、住居東側で床下掘り込みを確認した。覆土から投弾状石製品出土(第265図46)、管状土錘(第268図1)が出上。

カマド(図版10) 100号住居跡カマドを壊して造られたカマド。図では黒が当住居跡カマドと100号住居跡カマドの一部、赤が壊された100号住居跡カマド袖を示す。当カマドは左袖基部を切り込むビットにより壊されており、両袖とも壁から65cm突出し、焼面は検出できなかったものの、断面図の位置で燃焼部幅35cm、奥壁部分で幅30cmと狭い燃焼部である。燃焼部床面の8cm上から煙道が北側に80cmに延び、幅18cmとやや狭い印象を受ける煙道部で、煙道部床面は先端に向かってわずかに上向きに傾斜する。

出土土器(図版101、第20図1~13) 1は土師器杯で、口縁端部を丸く収める。内外面は摩滅のため調整不明。焼成はやや甘く、色は茶褐色。2は黒色土器碗で、杯部内面を炭化させるもの。色は杯内面黒色、他は黄褐色。3~5は土師器皿である。3は口径14.3cm、器高1.9cmで、内外面は摩滅のため調整不明。色は橙褐色。4は口径13.2cm、器高1.8cmで、底部にはヘラ切り痕が残る。焼成は甘く、色は橙褐色を呈する。5は底部ヘラ切りのちナデを施す。色は橙褐色。P1出土。1~5は上層からの混入品。

6は小形器台脚部で、外面には細かいミガキがわずかに残り、内面下部にはハケ、内面上部は工具絞り痕が残る。焼成前に外から3ヶ所穿孔する。外面にはススが付着。胎土は細粒が多く、色は褐色~暗褐色を呈する。

7・8は土師器甕である。7は強く外湾する器壁が厚い口縁部で、内面頸部までヘラケズリ



第20図 95・96号竪穴住居跡出土土器実測図（10～13・21～26は1/4、他は1/3）

を施す。外面にはハケのち横ナデを施し、黒斑が認められる。色は橙褐色～暗黄褐色。P3出土。8は小形甕で、胴部外面には粗いハケを施し、胴部内面には工具痕が残る。外面にはススが付着。色は暗黄褐色。9は須恵器杯蓋口縁部。色は灰色。

10～13は弥生土器で、10・12は床下掘り込みから出土。10は弥生後期壺突帯片。ハケ状工具で密に刻目を施す。色は黄褐色。11は弥生中期跳ね上げ口縁壺。直立する胴部に、短く外折する口縁部が付き、端部はナデにより凹線状になるもの。頸部下には凹線が1条巡る。頸部外面にはハケ工具痕が残る。色は暗黄茶褐色。12はやや外傾する弥生中期高坏口縁部。器表は非常に荒れる。色は黄褐色。13は弥生中期器台上部片で、外面は縦ハケのち、口縁部は横ナデを施す。内面口縁部下は横ハケ、屈曲部は縦ナデで調整。色は灰黄褐色。

切り合い関係と9から7世紀前半～7世紀後半の住居跡になるか。

96号竪穴住居跡（図版10、第21図）

2区西側の南端にあり、南側の半分以上に調査区外に伸びる。22号土坑と切り合い関係を持ち、これより古い。住居の規模は東西幅のみが確認でき、5.5mを測る。床面からは多くのピットを検出したが、確実に住居跡に伴うものかどうかは定かではない。北壁中央部のやや南側に焼土が散乱していたが、量的に少なく、カマド等を確認することはできなかった。また、この場所に床下掘り込みが検出された。出土土器と切り合い関係から、7世紀代（前半か）に位置づけられよう。不明土製品（第268図12・13）が出土している。

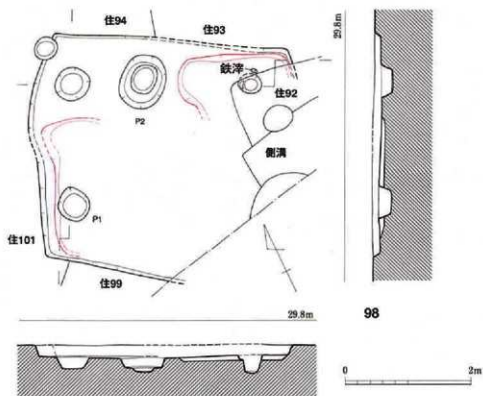
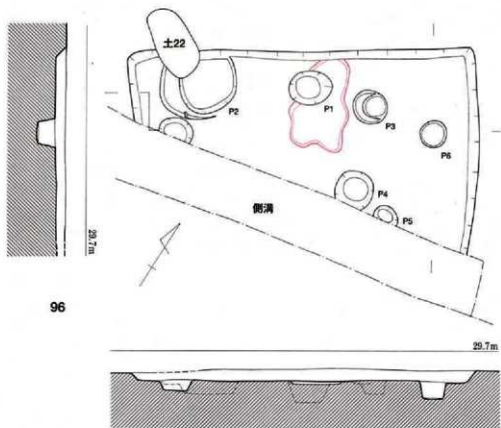
出土土器（図版101、第20図14～28）14～18は土師器である。14は須恵器模倣杯蓋である。平坦な天井部から直角に屈曲して下方に伸び、口縁部に至る。全体に摩滅して調整は不明。15は高杯の脚部である。屈曲して広がる先端部のみの資料である。16は布留式甕の口縁部片である。17は蕨状の胴部を持つ小形の甕である。外面ハケメ、内面ケズリ調整を施し、口縁部は横ナデ仕上げ。上半と下半が接合できなかったが、同一個体であろう。18は古墳時代初頭の在地系の脚付甕の脚部片であろう。

19・20は須恵器である。19は天井部から口縁部まで緩やかに湾曲しながら伸びる杯蓋である。天井部にわずかに回転ヘラケズリが残る。口径は13.2cmを測る。20は杯身である。底部が平坦で口縁部が直立する。径は8.7cmと非常に小さい。底部にヘラ記号が認められる。

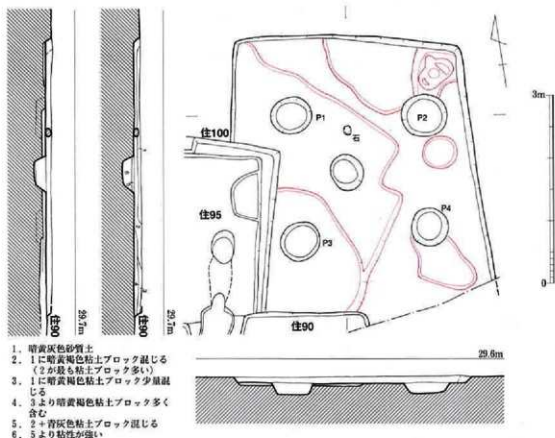
21～28は弥生土器である。21は素口縁壺の口縁部片である。外面は縦方向、内面は横方向に丁寧なヘラ磨きを施す。口唇部はナデにより窪ませる。22～24はバケツ状の胴部を持つ甕の口縁部片である。22・24は口縁端部をわずかに上方に跳ね上げ、23は鋤先状の口縁部を持つものである。口径は22が飛び抜けて大きく、38cmを測る。大形品のためであろう、口縁直下に断面三角形の突帯を付ける。ほかの2点は30cm弱である。25・26は同型の甕の底部片である。27は高坏の坏部の口縁部片であろうか。28はやはり屈曲口縁を有する鉢形土器である。口縁端部はわずかに跳ね上げ気味に処理する。これらは弥生時代中期後半須玖Ⅱ式土器のなかでも新相に属する土器群である。

97号竪穴住居跡（図版10、第22図）

97号竪穴住居跡は2区南西隅に位置し、90・95・100号住居跡に切られる。南壁は調査区外、



第21図 96・98号竪穴住居跡実測図

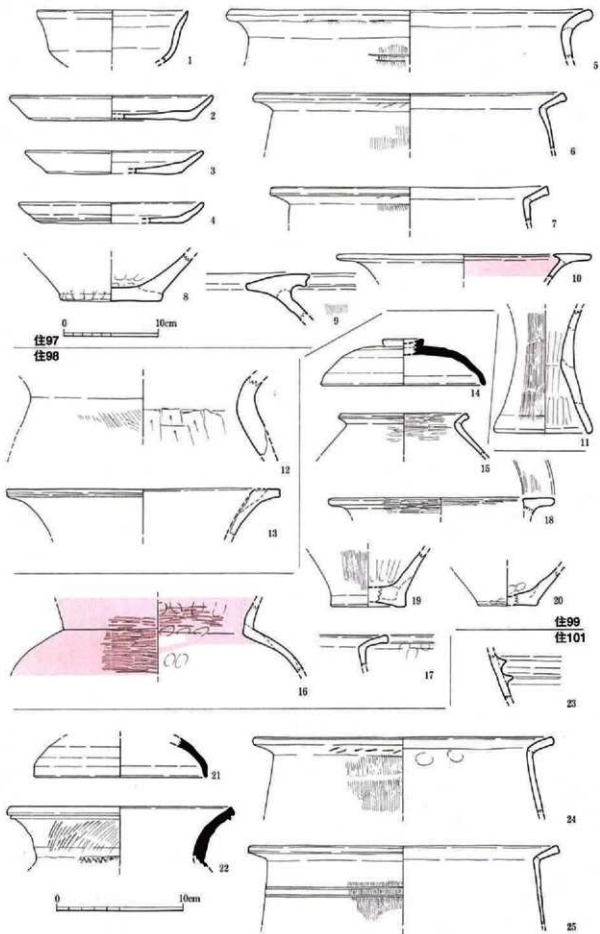


第22図 97号竪穴住居跡実測図 (1/60)

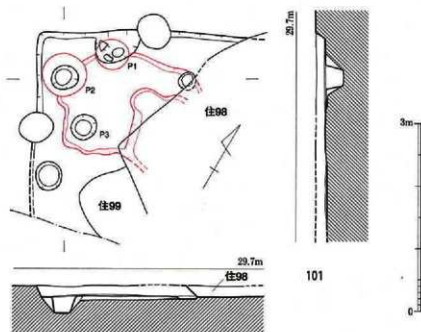
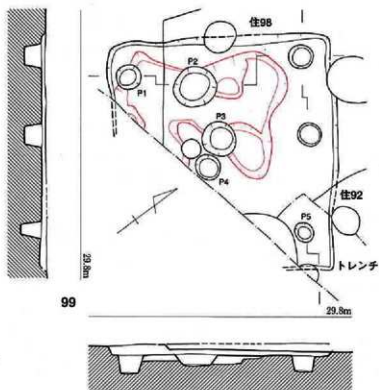
西壁南半分は新しい住居跡に切られるが、残存部分で南北4.6m以上×東西3.8m、深さ10cmのやや南側が広がる住居跡になる。住居床面では5基のピットを検出し、中央のピットが埋土に炭が混じるピット、P1～4が支柱穴になる。床面下ほぼ全体で掘り込みを確認した。8・10はP4から出土。

出土土器(図版101、第23図1～11) 1は土師器高杯杯部。口縁端部を鋭く上方につまみ出す。内外面摩滅のため調整不明。色は橙褐色。2～4は土師器皿。2・4は橙褐色、3は灰褐色を呈する。2は摩滅のため内外面調整は不明。口径16.1cm、器高2.0cm。3の底部はヘラ切り痕が残る。内外面には二次加熱痕・ススが認められる。口径13.6cm、器高1.6cm。4の底部はヘラ切り後に回転ヘラケズリを行う。口径14.7cm、器高1.6cm。5は土師器甕で、強く外湾する口縁部を持ち、端部は丸く収める。口縁下には2条の浅い凹線が確認できるが、下の凹線は途切れ途切れのため全周しないと思われ、上の凹線も全周するかどうかは小片のため不明。色は灰黄褐色を呈する。

6・7は弥生中期跳ね上げ口縁甕。6の口縁端部はやや肥厚する。外面頸部にはハケ工具痕が残る。色は黄褐色。7は口縁端部をナデで面取りする甕で、外面にはハケ及びハケ工具痕が残る。色は暗茶褐色。8は弥生中期甕底部で、外面は摩滅のため調整不明。色は黄褐色。9は弥生中期大形甕口縁部。内傾する鋤先口縁で、内外面とも火を受けており、器表は剥離が顕著である。色はこげ茶。10は弥生中期高環口縁部で、内面には丹がわずかに残存し、外面は摩滅がひどいため現状では確認できないが、外面も元々丹塗りしたものか。生地は灰黄褐色を呈す



第23図 97~99・101号竪穴住居跡出土土器実測図
(5~10・13・15~20・23・24は1/4、他は1/3)

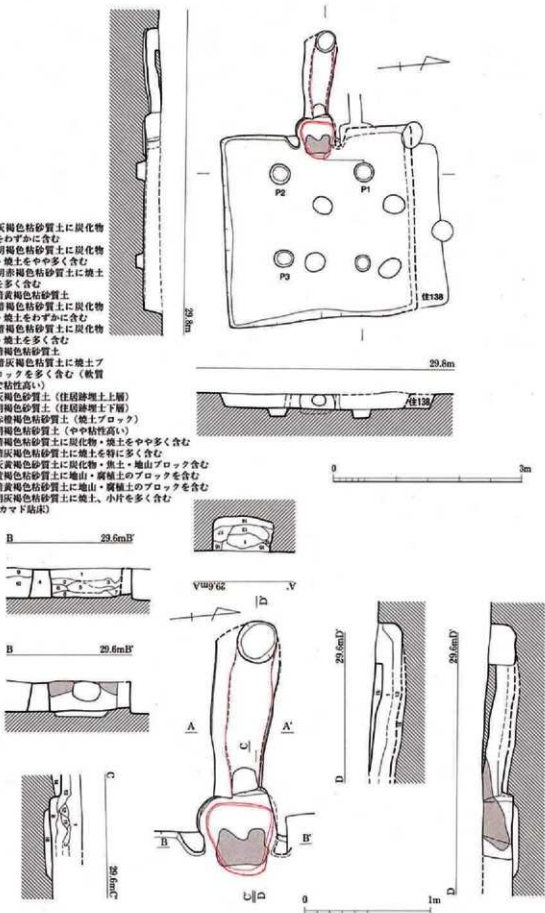


第24図 99・101号竪穴住居跡実測図 (1/60)

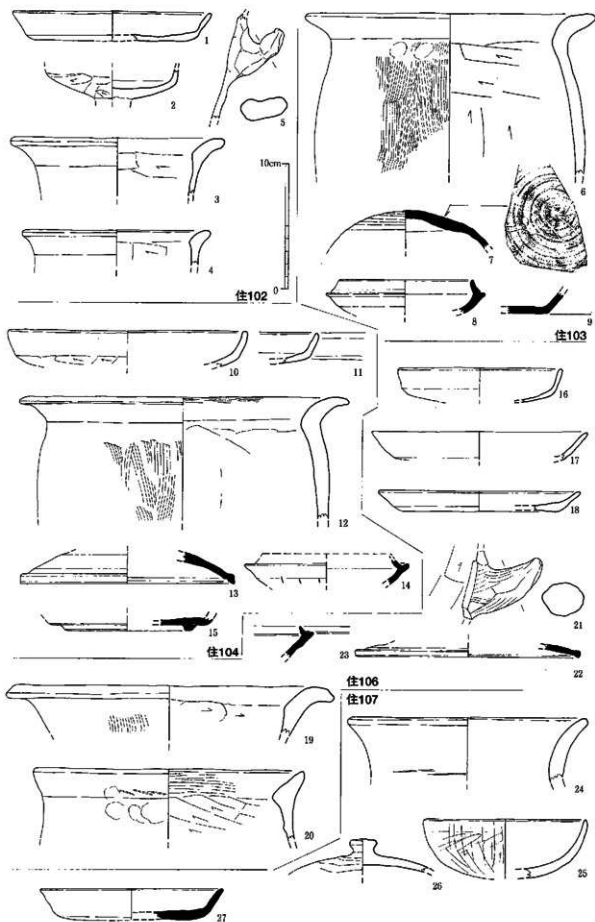
る。11は弥生中期器台である。内面上部に工具痕残る。色は黄茶褐色。

3・4・6が住居床下掘り込み出土であり、特に3・4の存在は取り上げラベルを書き間違えた可能性もある。住居形態や切り合い関係、中央の炉状ピットの存在から弥生中期後半の住居跡の可能性もあるが、古墳時代後期以降の土器の出土が多く、調査当初は炉と考えた中央の

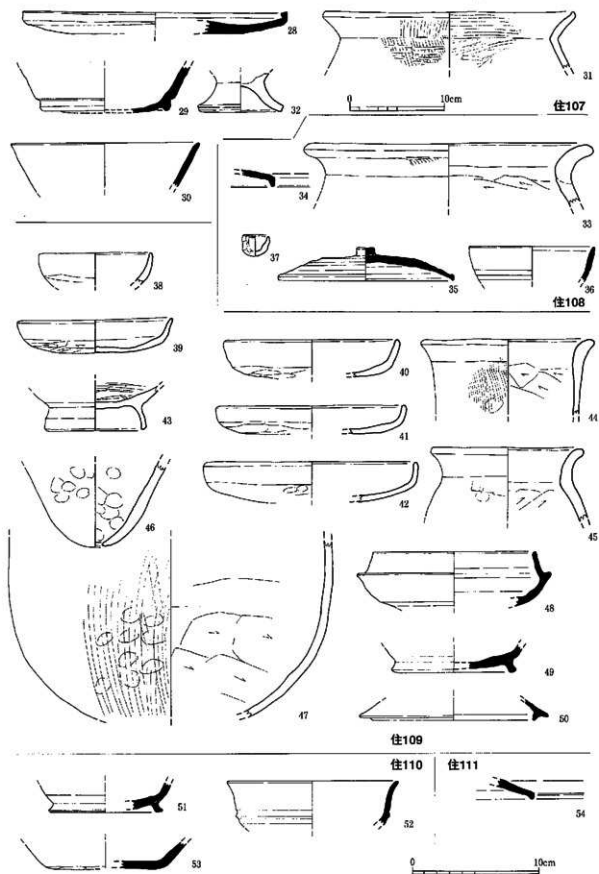
1. 灰褐色粘砂質土に炭化物をわずかに含む
2. 明褐色粘砂質土に炭化物・焼土をやや多く含む
3. 明赤褐色粘砂質土に焼土を多く含む
4. 暗褐色粘砂質土
5. 暗褐色粘砂質土に炭化物・焼土をわずかに含む
6. 暗褐色粘砂質土に炭化物・焼土を多く含む
7. 暗褐色粘砂質土
8. 暗灰褐色粘質土に焼土ブロックを多く含む(軟質で粘性高い)
9. 灰褐色粘質土(住居跡埋土層)
10. 明褐色粘砂質土(住居跡埋土層)
11. 赤褐色粘砂質土(焼土ブロック)
12. 明褐色粘砂質土(やや粘性高い)
13. 暗褐色粘砂質土に炭化物・焼土をやや多く含む
14. 暗灰褐色粘砂質土に焼土を特に多く含む
15. 灰褐色粘砂質土に炭化物・焦土・地山ブロックを含む
16. 黄褐色粘砂質土に地山・腐植土のブロックを含む
17. 暗灰褐色粘砂質土に地山・腐植土を含む
18. 明灰褐色粘砂質土に焼土・小片を多く含む(カマド跡床)



第25図 102号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第26图 102~104·106·107(1)号竖穴住居跡出土土器実測图(1/3)



第27图 107(2)~111号竖穴住居跡出土土器実測图 (31・32は1/4、他は1/3)

ピットが炉でないとする、1・5から古墳時代後期後半の住居跡の可能性が高くなる。とするとカマドは西側にあったものか。

98号竪穴住居跡（図版11、第21図）

92～94・98・99・101号の切り合いを持つ住居跡群のうちの一つである。92～94・99号住居跡と切り合い関係を持ち、92号住居跡に破壊され、その他の住居跡を破壊する。平面形はややいびつな長方形を呈し、規模は東西4.2m、南北3.8mほどを測る。床面からは主柱穴と考えられるピットが3基確認され、このほかに不整形の床下掘り込みも検出された。埋土中から、第270図21の鉄滓が出土した。出土土器から時期を断定するのはやや困難であるが、切り合い関係から7世紀初頭以降でこれからそれほど離れない時期と考えられる。

出土土器（第23図12・13）12は古代の土師器である。歯形の胴部を持つ甕の頸部片であろう。13は弥生時代須玖式の鋤先口縁部の口縁部片である。

99号竪穴住居跡（図版11、第24図）

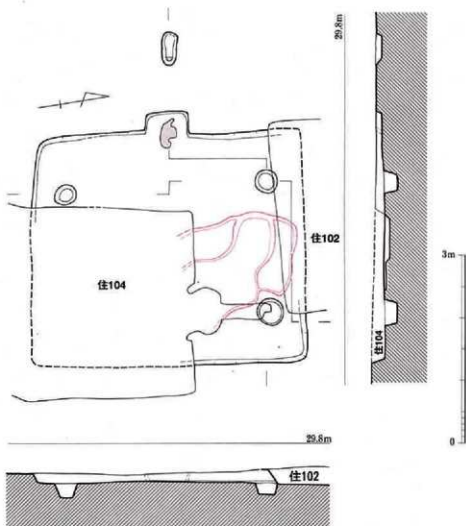
92～94・98・99・101号の切り合いを持つ住居跡群のうち、92・98・101号と切り合い関係にあり、92・98号に破壊され、101号に先行する。また、南側は調査区外に伸びている。平面形はほぼ正方形になるものとみられ、規模は3.6m×3.7mを測る。床面からは多くのピットが検出されたが、本住居跡に伴うものかどうかは不明である。また、不整形の床下掘り込みも検出された。出土土器と切り合い関係から6世紀後半～末前後に位置づけられよう。

出土土器（第23図14～20）14は須恵器の高杯の蓋である。天井部から緩やかに湾曲しながら口縁部へと至る器形を持ち、ボタン状のつまみを有する。6世紀後半～7世紀初頭前後の資料と考えられる。

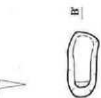
15～20は弥生中期須玖式土器である。15は以東系の無頸壺の口縁部片である。内・外面ともに細かい横方向のヘラ磨きを施す。16は壺の頸部片である。外面は横方向に細かいヘラ磨きを施し、内面は頸部が指整形のち横方向のヘラ磨き、胴部が指ナデ仕上げ。ヘラ磨きを施した部分に丹塗りを施し、内面の胴部上半にまで及ぶ。17は屈曲口縁の甕形土器の口縁部片である。端部は四角く収める。18は鋤先口縁を有する高杯の口縁部か。内・外面と口縁部上面の平坦部に細かい横方向のヘラミガキを施す精製品である。19・20は甕形土器の底部片である。これらはいずれも弥生時代中期後半の資料である。

100号竪穴住居跡（第19図）

100号竪穴住居跡は2区南西隅に位置し、90・91・95号住居跡に切られ、97号住居跡を切る住居跡。住居大半が新しい住居跡により壊されているが、西・南壁の下端の一部が検出できたことから、南北3.6m×東西3.2m、深さ10cmのやや南北に長い小型の住居跡となる。北壁中央やや西寄りにカマドを付設するが、95号住居跡カマドと重なって位置するために、煙道部以外の残りは非常に悪い。床面の高さも95号住居跡とほぼ同じであるため、ピットもP1以外は不明。床面掘り込みも確認できなかった。埋土は暗黄灰色砂質土。出土土器は図示できないが、主体は弥生中期土器で、少量の土師器を確認している。



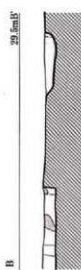
1. 暗灰褐色粘砂質土に地山ブロック小片含む（住居跡埋土上層）
2. 暗灰褐色粘砂質土に炭化物小片や含む（住居跡埋土下層）
3. 暗灰褐色粘砂質土に炭化物・焼土を多く含む（軟質で粘性高い）
4. 暗茶褐色粘砂質土
5. 暗灰褐色粘砂質土に炭化物小片含む
6. 灰黄褐色粘砂質土に白黄色粘土ブロックを含む
7. 黄褐色粘砂質土に炭化物を特に多く含む



A 29.5m A'



A 29.5m A'



0 1m

第28図 103号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

カマド 北壁中央からやや西寄りに位置し、煙道部と両袖の基部以外は95号住居跡により壊される。奥壁から40cmの所に支脚抜き痕を確認し、抜き痕周囲には焦土・炭の広がりを確認したことから焼面と考えられる。焼面の状況から袖は壁から70cmほど突出し、燃焼部は支脚抜き痕部分で幅35cm、奥壁で幅30cmを測る。燃焼部床面の8cm上から煙道が北に68cm延びるが、95号住居跡と比べ幅24cmと広い。煙道部床面は先端に向かって床面が若干上がる。袖は暗黄灰色砂質土に青灰色粘土ブロックが混じるもので構築される。

101号竪穴住居跡 (図版101、第24図)

92～94・98・99・101号の切り合いを持つ住居跡群のうち、最も西側に位置し、最も古く位置づけられる住居跡のひとつである。東壁のすべてを98・99号住居跡に破壊され、南壁は調査区外にあるため、規模を知ることはできない。床面からは4基のピットを検出したがいずれも本住居跡に伴うものかどうか定かではない。また、不整形の床下掘り込みも確認された。出土土器と切り合い関係から、6世紀後半～末に位置づけられよう。

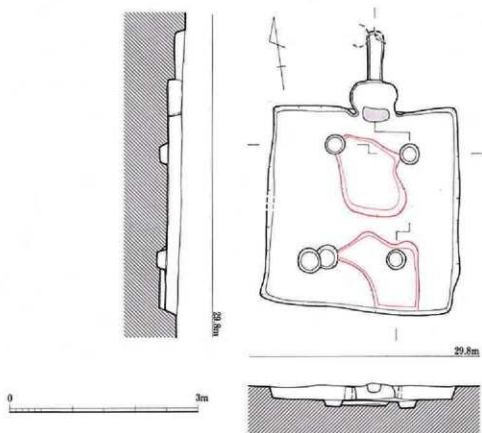
出土土器 (第23図21～25) 21・22は須恵器である。21は杯蓋である。全体に湾曲した器形であり、口縁部のみが残る。22は小形の甕の口縁部片である。口縁端部を肥厚させて1条の沈線刻画。これらは6世紀後半～7世紀初頭頃の資料であろう。

23～25は弥生中期土器である。23は成人用大形甕棺の口縁下部の突帯貼付部分と考えられ、傾きから丸みを帯びた甕棺の系列と判断される。24・25は屈曲口縁を持つ甕形土器の口縁部片である。いずれも口唇部を四角く収める資料である。これらはいずれも須玖Ⅱ式土器であり、中期後半に比定できる。

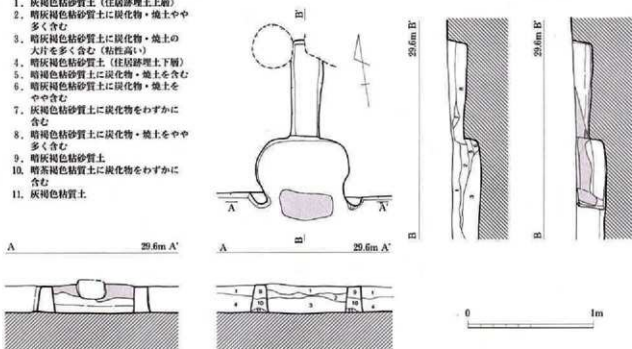
102号竪穴住居跡 (図版12、第25図)

2区東寄りの南側に位置する。103・138号住居跡と切り合い関係にあり、これらより新しい。隣接する138号住居跡と東壁ラインがほぼ一致しており、138号住居跡の東壁部分も本住居跡のものとして誤認してしまった。また住居跡の規模が似通っていたために西壁延長部分も138号住居跡のものを本住居跡のものとして誤認してしまった。このため、138号住居跡のカマドを本住居跡のカマドの造り替えであると把握して調査を進めてしまった。この結果、138号住居跡の存在に気づかず、一緒に掘り進めてしまい、本住居跡の北壁の大部分を失った。点線で示した部分が本住居跡の本来の北壁の位置であろう。カマドは西壁に突出型のものを付設しており、主軸方位は東西で長さ3m、幅も3mほどを測るほぼ正方形の住居跡である。残存深さは25cmほどであった。支柱穴は4基確認でき、いずれも20cmほどと浅い。出土土器と切り合い関係から、8世紀前半に位置づけられよう。

カマド (図版12) カマドは住居跡の西壁中央部に突出型のものが付設されていた。突出部の幅30cm、奥行15cmで、袖の長さは10cmほどを測る。平面形は不整形を呈する。奥壁から西に煙道部が伸びていたが、残存状況が非常に良く、トンネル状に伸びた煙道部を土層で良好に確認することができた。長さは105cmほどを測る。煙道部の先端には径30cmほどのピットが掘られていた。煙出しの煙突の基礎部分であろう。なお、煙道部の下層には別の住居跡のカマドが存在しており、この埋土を本住居跡のカマドの埋土と誤認して掘り進めてしまったが、土層の



1. 灰褐色粘砂質土（住居跡埋土上層）
2. 暗灰褐色粘砂質土に炭化物・焼土をや多く含む
3. 暗灰褐色粘砂質土に炭化物・焼土の大片を多く含む（粘性高い）
4. 暗灰褐色粘砂質土（住居跡埋土下層）
5. 暗褐色粘砂質土に炭化物・焼土を含む
6. 暗灰褐色粘砂質土に炭化物・焼土をや含む
7. 灰褐色粘砂質土に炭化物をわずかに含む
8. 暗褐色粘砂質土に炭化物・焼土をや多く含む
9. 暗灰褐色粘砂質土
10. 暗茶褐色粘質土に炭化物をわずかに含む
11. 灰褐色粘質土



第29図 104号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

検討の結果本カマドの埋土は図示したようになると判断した。燃焼部の埋土は大きく1層、2～7層、8層の大別3層に分層でき、2～7層がカマド袖・天井の崩落土、8層がカマド床直上に堆積した灰層と考えられる。1層は住居跡埋土の9層と類似しており、カマド天井部が崩落したあとに住居跡の埋没にともなって堆積したものであろう。煙道部の埋土は煙道内が大きく2層に分層できるほか、煙道付設時に周囲をやや広く掘り込んで埋め戻した層として、14～17層が分層できた。この範囲を平面図上では実線で示し、煙道として使用された空間を点線で示している。燃焼部は「凹」字状に焼面が形成されており、中央奥側の凹んでいる部分に支脚がおかれていた可能性を推測させる。また、カマド奥壁と煙道部上面にはススが附着して変色している部分が認められた。

出土土器(第26図1～5) 1～5は古代の土師器である。1は器高の低い杯である。平底から屈曲して短く斜めに伸びる口縁部を持つ。底部はヘラ切り痕が残る。2は高杯の杯底部である。外面にヘラケズリ痕が残る。3・4は小形の甕形土器の口縁部片である。短く如意状に外反する口縁部のみが残る。バケツ状の胴部を持つものであろう。5は甕の把手部分である。これらの資料は8世紀前半代に位置づけられよう。

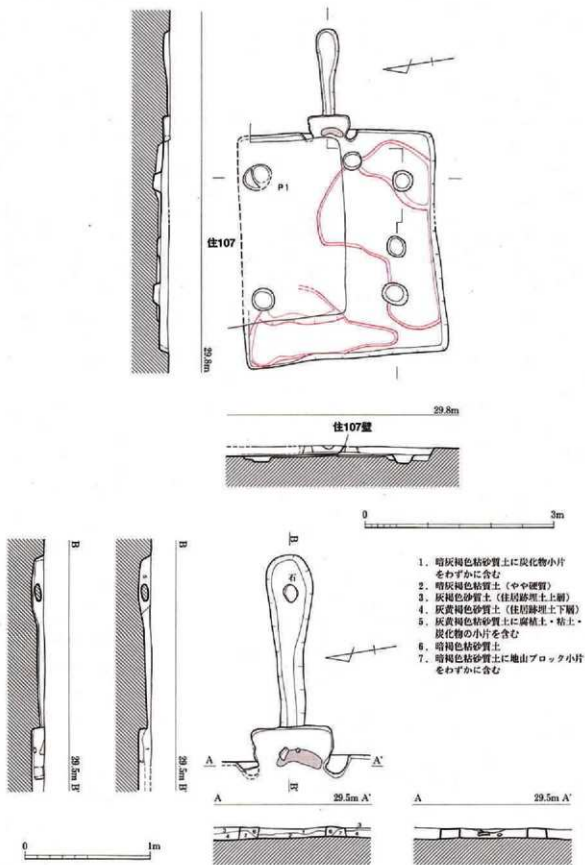
103号竪穴住居跡(図版12、第28図)

2区中央やや東寄りの南側にあり、上述102号住居跡の南に隣接する。102号住居跡に北側を、104号住居跡に南東側を破壊されている。西壁のみがほぼ完全に残っており、この中央部に突出型のカマドを付設する。主軸は東西方向で長さ3.7mを測り、幅は南北方向で4.3mを測る。壁の残存深さは深いところでも20cm未満である。主柱穴は南東部を除く3基が検出されており、深さは25cm前後を測る。北側の床面に不整形の床下掘り込みが検出された。出土土器は少ないが6世紀後半～7世紀初頭に位置づけられ、切り合い関係と矛盾しない。

カマド(図版13) 住居跡の西壁ほぼ中央部に突出型のカマドを検出した。突出部は幅70cm、奥行き30～35cmを測る幅広の長方形で、袖は検出できなかった。しかし焼面が突出部から住居側にかけて広がっており、本来は10～20cm程度の袖が存在したものであろう。突出部の70cmほど先に、幅20cm、長さ50cm、深さ10cm程度の長楕円形の掘り込みが確認された。埋土に炭化物小片を含んでおり、煙道部の先端と考えられる。突出部の埋土は大きく3層に分けられ、上2層は住居跡の埋土と共通する。最下層は軟質で粘性が高い灰黄褐色土で、カマド床面直上に堆積した灰層と考えられる。したがって、本カマドの廃絶時には灰の掻き出しは行われず、天井部が崩落する前に住居跡とともに埋没したものと考えられる。

出土土器(第26図6～9) 6は古代の土師器であり、甕形の胴部を持つ大形の甕形土器の胴上半～口縁部片である。外面ハケメ、内面ヘラケズリ痕をよく残す。

7～9は須恵器である。7は杯蓋である。天井部から緩やかに湾曲しながら伸びる。天井部の広範囲を回転ヘラケズリにより調整する。天井部外面にヘラ記号を有する。8はかえりを有する杯身の口縁部片である。かえりは太く短い。口径は10.6cmを測る。9は杯の底部片であらうか。以上の資料は、9をのぞいて6世紀後半～7世紀初頭に位置づけられよう。



第30図 106号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

104号竪穴住居跡（図版13、第29図）

2区中央やや東寄りの南側にあり、上述103号住居跡の南にあってこれを切る住居跡である。西側で21号溝と切り合いを持ち、本住居跡が新しい。住居跡の全形が残り、北側の壁に突出型のカマドを付設する。主軸は南北方向で長さ3.2mを測り、幅は3.1mでほぼ正方形を呈する。住居跡の中央部と南側で不整形の床下掘り込みが確認された。住居跡の壁はおよそ20cmほど残っていた。主柱穴は4基とも確認されたが、深さは15cm前後と浅く、やや疑問も残る。出土土器と切り合い関係から、8世紀前半に位置づけられよう。また、覆上から製塩土器（第269図1）、住居跡付近遺構面から砥石（第266図50）、土鍾（第268図2）が出上している。

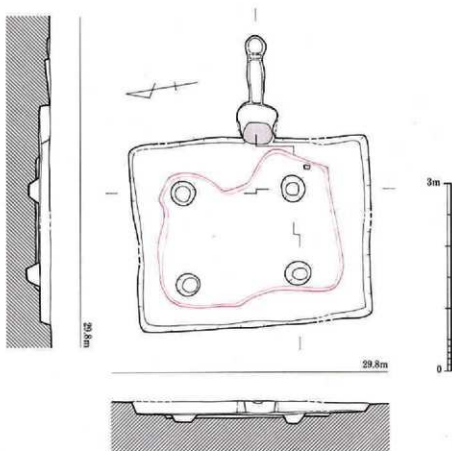
カマド（図版13）住居跡北壁に突出型のカマドが確認された。突出部の掘り込みは最大幅75cm、奥行45cmほどを測り、平面形態は丸みをおびる点が特徴的である。このため、袖も逆「八」字状に付けられ、長さも5～10cmと短い。壁も天井に向かって湾曲する状況が良く残存していた。また、奥壁から北に向かって直線的に幅30cm、長さ80cm程度の規模の煙道部が確認された。煙道部は先端ほどに深くなっており、最浅部は10cm、最深部は17cmほどを測る。この傾斜は煙突から燃焼部に雨水等が流入しないための工夫であろう。両袖の先端部に挟まれた中央部分に焼面が確認されたほか、燃焼部から煙道部にかけての両壁にススの付着による黒変部分が広く確認された。燃焼部の埋土は大きく3層に分かれ、最下層には暗灰褐色の粘性の高い土が厚く堆積する。灰層の可能性が高いが堆積が厚すぎ、天井部が崩落して灰層に多く混入したものと思われる。この上に住居跡の埋土と同質の土が堆積しており、本カマドはカマド天井部が徐々に崩落して灰層と混じりながら堆積し、その上から住居跡の埋土が流入したものか。

出土土器（第26図10～15）10～12は古代の土師器である。10・11はほぼ同型の杯の口縁部片である。平坦な底部から屈曲して短く直線的に伸びる口縁部を有する。底部はヘラケズリ、口縁部は横ナデ調整であろう。12はバケツ状の胴部を持つ人形の壺形土器である。如意状に反する口縁部が残る。

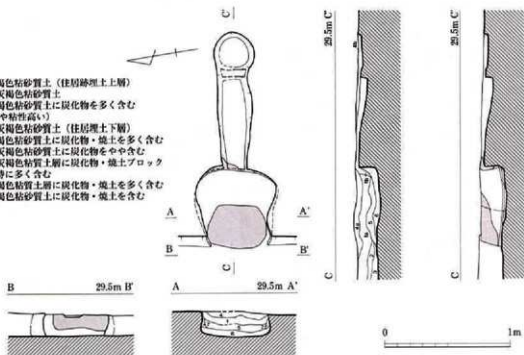
13～15は須恵器である。13は杯蓋である。平坦な天井部から緩やかに屈曲して口縁部へと至り、口縁部を短く屈曲させる器形を持つ。口縁部径は17cmを測る。14はかえりを持つ杯身の口縁部片である。かえりは斜めに長く伸びる。口縁部径は13cmを測る。15は高台を持つ杯の底部片である。高台の断面形は逆台形状を呈する。以上の資料は大きく6世紀後半のものと8世紀前半のものに分かれ、大半は8世紀代のものである。

106号竪穴住居跡（図版14、第30図）

2区中央やや東寄りの南側で確認された。上述の102～104・138号住居跡の切り合いの西に隣接し、107号住居跡に北側を大きく破壊されているほか、カマド煙道部分が東側に隣接する115号住居跡を破壊して造られており、107号住居跡より古く115号住居跡より新しい。主軸はカマド位置から東西方向に設定でき、長さは3.9mを測る。幅は南北方向で3.2mほどを測り、主軸方向にやや長い長方形を呈する。主柱穴は南側に2基、北側にも107号住居跡の床面から2基検出されたが、いずれも10cm前後と極めて浅く疑問が大きい。壁は15cm前後が残存していた。床面からは不整形の床下掘り込みが2カ所確認された。出土土器や切り合い関係から、8世紀中頃と考えられる。



- 1a. 灰褐色粘砂質土 (住居跡埋土上層)
- 1b. 明灰褐色粘砂質土
2. 暗褐色粘砂質土に炭化物を多く含む (やや粘性高い)
3. 暗灰褐色粘砂質土 (住居埋土下層)
- 4a. 灰褐色粘砂質土に炭化物・焼土を多く含む
- 4b. 暗灰褐色粘砂質土に炭化物をやや含む
5. 暗灰褐色粘砂質土層に炭化物・焼土ブロックを特に多く含む
6. 暗褐色粘砂質土層に炭化物・焼土を多く含む
7. 暗褐色粘砂質土に炭化物・焼土を含む



第31図 107号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

カマド(図版14) 住居跡の東壁中央部に突出型のカマドが検出された。突出部分は幅65cm、奥行25~30cm程度で、袖は内向きに15cmほどが確認されたが、袖部を合わせても燃烧部の奥行は40cm程度で、幅の広い長方形状を呈する。奥壁から東側に140cmの長さを持つ煙道部が確認された。深さは奥壁に隣接する部分が3cm程度に対し、先端部に行くほど深くなって最深部は10cm程度を測る。煙突部に該当する部分の床面から円礫が出土したが、煙突部分から落ち込んだものであろうか。燃烧部の埋土は2層に分けられたがいずれも住居跡埋土と似ており、煙道部の埋土も共通する。

出土土器(図版101、第26図16~23) 16~21は古代の土師器である。16~18は杯である。16は径が小さく口縁がやや直立するが、17・18は底径が大きく口縁部が斜めに伸びて短い。19・20はバケツ状の胴部を持つ甕形土器の口縁部片である。いずれも内面にヘラケズリを施し、特に20はヘラケズリによって内面に著しい凹凸ができています。21は甕の把手である。

22・23は須恵器である。22は杯蓋である。天井部から口縁部までほぼ水平に伸び、端部を屈曲させる。23はかえりを持つ杯身の口縁部片である。かえりはやや短い。以上の資料は、一部を除いておよそ8世紀中頃に位置づけられよう。

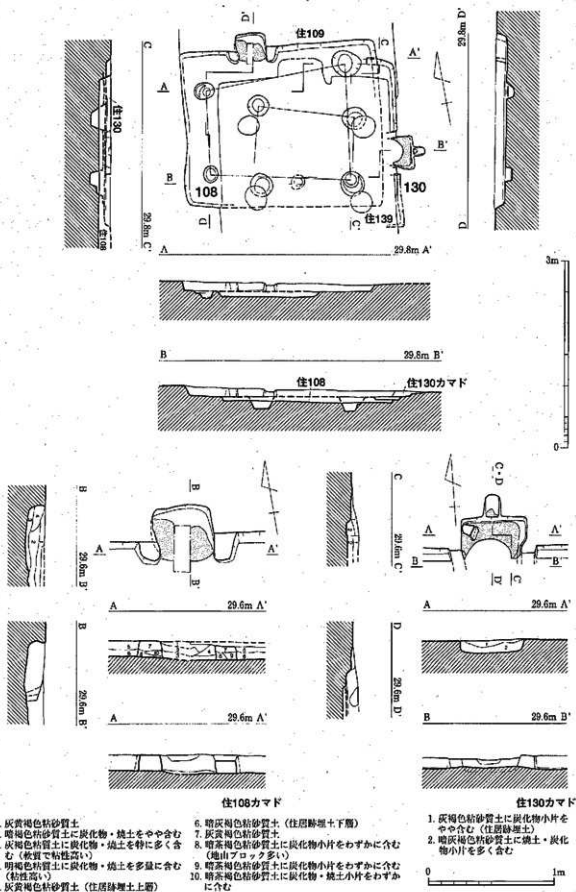
107号竪穴住居跡(図版14、第31図)

2区中央やや東寄りの南側で確認された。106号住居跡の北側にあり、これを大きく破壊するほか、113号住居跡と北東隅でわずかに切り合い関係を持つが、先後関係は不明である。住居跡のほぼ全形が判明する資料である。106号住居跡と同様に東壁のほぼ中央部に突出型のカマドを持つ。床面からは4基の支柱穴のほか、中央部に大きな床下掘り込みを検出した。壁の深さは20cm、支柱穴の深さは深いもので20cm、床下掘り込みは深い部分で6~8cmほどを測る。出土土器や切り合い関係などから、8世紀後半に位置づけられよう。

カマド(図版15) 東壁のほぼ中央に突出型のカマドを確認した。掘り込みは奥行80cm、幅60cmの不整形円形を呈し、袖は確認できなかったが、焼面がほぼ突出部内に収まることから、ごく短いものであった可能性が高い。両側壁は上方に行くほど内側に向かって傾斜しており、天井部へと連続していたのであろう。燃烧部の両側壁と奥壁の上部に被熱やススの付着による黒・赤色の変色部分が認められた。奥壁部分から東側に70cmほど伸びる煙道部が確認され、その先には径30cmほどの煙突の基礎部分が確認できた。この煙突の基礎部分の床面は煙道の最奥部の床面より一段高くなっていた。また煙道部の深さは手前が2~3cmに対し奥では10cm近い深さがあり、徐々に奥に向かって傾斜していた。燃烧部の埋土は大きく4層に分層でき、最下層の6層は燃烧部の奥側のみに堆積していた。おそらく使用中に天井部や壁が剥落したもののか。この上に灰層と考えられる粘性の高い5層が堆積していた。

出土土器(第26・27図24~32) 24~26は土師器である。24は蒔形の胴部を持つ甕の口縁部であろう。25は小形の椀形土器である。外面は全体にケズリを施し、焼成後にヘラ記号状の模様を付ける。26はつまみを有する杯蓋であり、須恵器模倣杯蓋であろう。外面の全体にヘラケズリを施す。

27~30は須恵器である。27は須恵器の小皿である。器高が低く、平坦な底部から短く斜めに伸びる口縁部を有する。径は14.6cmを測る。28は高杯杯部である。平坦な底部から短く直立す



第32図 108・130号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

る口縁部で、口縁端部は平坦に面取りする。径は21cmを測る。29・30は高台を有する杯であろう。29は底部が下方に湾曲して、高台よりも低い位置にくるが、これは焼成時のゆがみによるものであろうか。30は直線的に斜め上方に伸びるII縁部のみが残る。これらの資料はやや時期幅が認められるが、主体は8世紀後半代に位置づけられよう。

31・32は弥生後期中葉の下大隈式土器に含まれる資料であろう。31は「く」字口縁の壘の口縁部である。II縁部は内・外面ともにハケメ、胴部外面はタタキのちハケメ、内面には不定方向のハケメが認められる。32は脚付壘の脚部であろう。いずれも混入と考えられる。

108号竪穴住居跡（図版15、第32図）

2区中央やや東寄りの住居跡が多く切り合う中の一つである。本住居跡の周囲は特に多くの住居跡が切り合っており、本住居跡と直接的に切り合う住居跡として109・130・139号住居跡が挙げられる。これらのうち、本住居跡に先行するものとして109・130号住居跡が、本住居跡よりも新しいものとして139号住居跡が挙げられる。しかし、130・139号住居跡と本住居跡はわずかにずれただけでほぼ重なっていたために、検出時にこれらを単一の住居跡と誤認して調査に着手してしまい、このため139号住居跡の北半分を掘りすぎてしまうとともに、本住居跡の北東部の壁の一部を失ってしまった。このため、東壁の検出ラインはやや自信がない。本住居跡は北壁の中央やや西寄りに突出型のカマドを有する、主軸長（南北）2.5m、幅（東西）3.1mのやや幅の広い長方形の住居跡である。壁の残存深さはおおよそ20cm弱を測り、主柱穴は4基を確認し、いずれも10～15cmの深さを有する。埋土は2層に分かれ、両層ともやや灰色がかった（暗）褐色の粘砂質土である。住居跡の時期は出土土器・切り合い関係から8世紀前半に位置づけられよう。また、覆土から磨石と思われる破片（第266図58）が出土したが、混入であろうか。

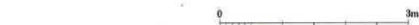
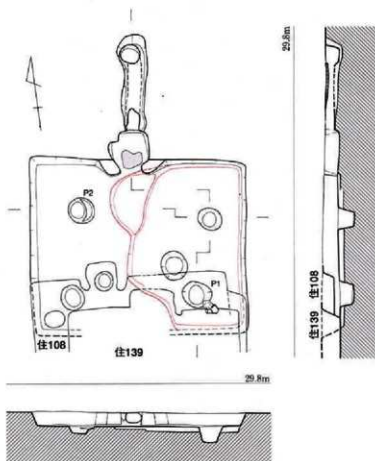
カマド（第32図） 住居跡北壁に突出型のカマドを検出した。検出状況ではカマドの位置が中央からやや西寄りになっているが、東壁のラインにはやや自信がなく、本来もっと西寄りであった可能性もあり、この場合カマド位置がより中央に近づくことになろう。突出部は奥行25cm、幅45cmで、15cmほどの袖が付く小規模なものである。床面は広い範囲に焼面が形成されていた。埋土は大きく3層に分けられ、最下層はカマド床直上に堆積した灰層、中央の2層は炭化物や焼土を含んだ天井の崩落層か。最上層は住居跡埋土（下層）と類似する。

出土土器（図版102、第31図33～37） 33は古代の土師壘である。甬状の胴部を有するものであろう。如意状に外反する口縁部のみが残る。37は腕を模倣した手握ねの小形土器である。

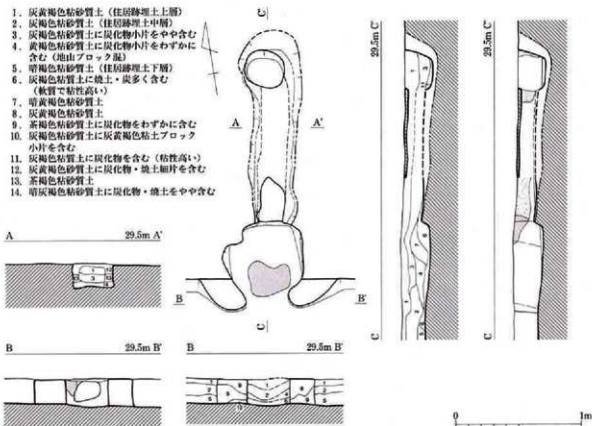
34～36は須恵器である。34・35は杯蓋である。34は短く屈曲するII縁部付近のみが残る。35はほぼ全形が判明する資料である。やや高さのあるボタン状のつまみ部から緩やかに湾曲しながら口縁部に至り、口縁端部は、わずかに肥厚させる。36は高杯の杯部であろう。杯部下方に2条の沈線を施す。これらの資料は、おおよそ8世紀前半に位置づけられよう。

109号竪穴住居跡（図版16、第33図）

2区中央部やや東寄りで重なり合う住居跡の一つである。108・130号住居跡と直接的な切り合い関係を有し、これらのすべてに切られる。139号住居跡を加えた切り合い関係の中で最も



1. 灰黄褐色粘砂質土 (住居跡埋土上層)
2. 灰褐色粘砂質土 (住居跡埋土中層)
3. 灰褐色粘砂質土に炭化物小片をやや含む
4. 黄褐色粘砂質土に炭化物小片をわずかに含む (畑山ブロック混)
5. 暗褐色粘砂質土 (住居跡埋土下層)
6. 灰褐色粘質土に焼土・炭多く含む (軟質で粘性高い)
7. 暗黄褐色粘砂質土
8. 灰黄褐色粘砂質土
9. 茶褐色粘砂質土に炭化物をわずかに含む
10. 灰褐色粘砂質土に灰黄褐色粘土ブロック小片を含む
11. 灰褐色粘質土に炭化物を含む (粘性高い)
12. 灰黄褐色粘砂質土に炭化物・焼土細片を含む
13. 茶褐色粘砂質土
14. 暗灰褐色粘砂質土に炭化物・焼土をやや含む



第33図 109号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

古い住居跡である。北壁の中央部に突出型のカマドを持ち、主軸を南北とすると長さ2.8m、長さ3.4mのやや幅の広い長方形を呈する。壁の残存深さは30cm程度を測る。床面から主柱穴が4基検出され、いずれも深さ25cm程度であった。また不整形の床下掘り込みも検出された。出土土器や切り合い関係から、7世紀末前後に位置づけられよう。また、埋土中から、図版136-31の鉄洋が出土した。

カマド（図版16）、住居跡の北壁の中央部に、突出型のカマドが付設されていた。突出部は幅60cm、奥行45cm程度で、長さ20cm程度の袖が逆「八」字状に付設されており、燃焼部の全体形はややいびつな円形を呈する。両袖のやや内側に焼面が形成されており、両壁と奥壁の上部はスス付着により黒色に変色していた。突出部の埋土は大きく1～3層、4・7層、6層の大別3層に分層でき、最下層の6層はカマド床面直上に堆積した灰層、4・7層は天井部等の崩落層、1～3層は住居跡と共通する埋土である。カマドの奥壁から煙道が北に向かって延びていた。煙道部の延長は110cmを測る。煙道部の残存状況は良好で、トンネル状に伸びている状況を土層断面で確認することができた。この煙道ラインを点線で表現した。また、煙道付設時に周囲をやや広く掘り込んだ痕跡も確認され、これを実線で表現した。煙道は先端に向かって斜めに傾斜しており、その先端には煙突の基礎と考えられるピットが確認された。ピットの径は30cmほどを測り、床面は煙道の最深部よりさらに一段深くなっていた。煙道部の埋土は大きく2層に分けられ、いずれも住居跡の埋没と同時に形成されたものであろう。

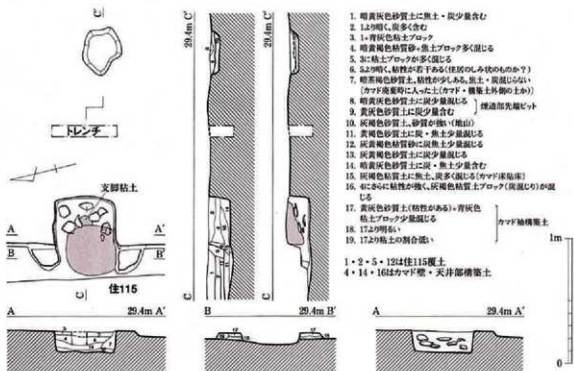
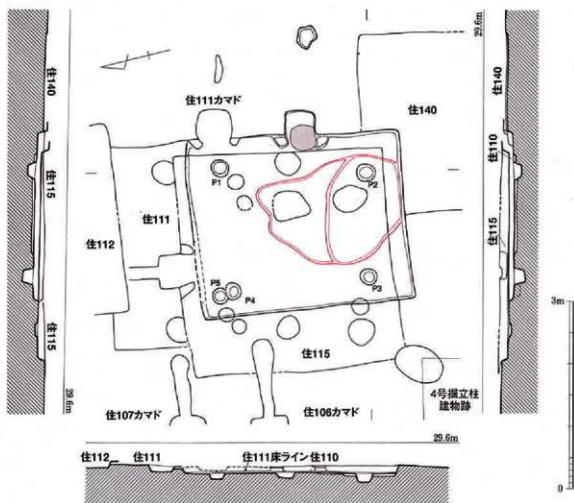
出土土器（図版102、第27図38～50）38～47は古代の上器である。38～42は碗形土器である。口径は最小の38が8.8cm、最大の42が17.1cmを測り、バリエーションに富むが、基本的な形態は同一で、調整も共通し、いずれも底部外面がヘラケズリ、口縁部が横ナデにより整形される。43は8世紀後半の黒色土器であろう。高く細い高台を有し、内面をヘラミガキにより調整する。44・45は小形の甕形土器である。44はバケツ状の器形を有するもので、45は胴部がやや膨らむ甕状の胴部を有するものである。いずれも胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリ、口縁部内・外面が横ナデにより調整される。46は底部に穿孔が認められ、小形の甕であろうか。47は大形の甕の胴部である。

48～50は須恵器である。48はかえりを有する杯である。かえりが上方に長く伸び、古式を呈する。6世紀中葉に位置づけられよう。49は高台を有する杯の底部片である。高台はやや長く、比較的古い形式である。50はかえりを有する杯蓋である。径が12.8cmと比較的小形である。これらの資料は一部を除き7世紀末前後のものと思われる。

110号竪穴住居跡（図版17、第34図）

110号竪穴住居跡は2区東中央南、切り合いが激しい住居跡集束区東に位置する。111・115号住居跡に切られ、140号住居跡を切る。後の111号住居跡でも記述しているが、111号住居跡との切り合いについては東壁が両住居とも一致するため、前後関係の把握が非常に難しかったが、111号住居跡は当住居跡カマド袖上部を壊すことから、111号住居跡→110号住居跡という関係が把握できた。

当住居跡は111・115号住居跡により大きく壊されるが、111・115号住居跡より当住居跡床面の方が低いため、住居形態が確認できる。東壁中央にカマドを付設し、東西3.8m×南北3.1m、



第34図 110号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

南壁で深さ14cmを測る東西に長い長方形住居となる。床面ではピットを5基検出し、P1～4が主柱穴となる。住居南側では掘り込みを確認した。埋土は暗灰褐色砂質土。

カマド(図版17) 東壁中央に付設されるカマド。東壁に付設されるカマドはこの住居集中区以外では当遺跡では少ない。両袖上部は111号住居跡により壊されるが、両袖とも壁から24cmほど内向きに突出し、高さ5cmほど残る。奥壁から15cmの場所には、径10cmほどの支脚を固定したと考えられる円形の粘土が存在するため、土器などを支脚に使用したことが分かる。この支脚前面と両壁の濃いトーンで示した箇所は、赤変・硬化が認められた範囲であり、この硬化面前面には焦土・炭が広がる焼面がある。この硬化面は奥壁と近すぎることはやや気になる。焼面幅は断面図の箇所幅50cm、奥壁はやや円形に湾曲する平面形態になる。カマド支脚周囲では床面から浮いた状態で土器が出土した(出土土器は土師器であるが、胴部片で接合できなかったため、図示していない)。奥壁から1.1m東に40×33cmの埋土に炭を含むピットが存在する。ややカマド主軸から南にずれることは気になるが、位置・深さから当カマドの煙道部先端の煙道口になると考えられる。煙道部がトンネル状になると考え、カマドとピットとの間にトレンチを入れたが、煙道部の痕跡は認められなかったことから、煙道部の大半は削平されてしまったと思われる。煙道口ピットの破線で示したラインは本来のピット床面ライン(掘り過ぎて)、土層図の1・2・5・12層は111号住居跡覆上を示す。51はカマド煙道口ピット、52はカマド内出土。カマド内から製塩土器が2点出土(第269図4・8(8は煙道部より))。出土土器(第27図51～53) 51は須恵器杯身で、端部を外側につまみ出す踏ん張った高台で、丸みを帯びた杯底部に貼り付ける。色は灰色。52は須恵器高杯杯部で、口縁端部を外反させるもの。杯体部外面には2条のナデ凹線が認められる。色は灰褐色。53は須恵器壺底部で、底部はヘラ切りのちナデ調整。外面にはススが付着。色は茶色～暗灰褐色。

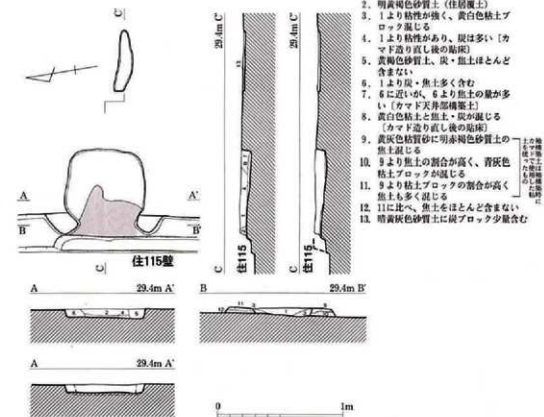
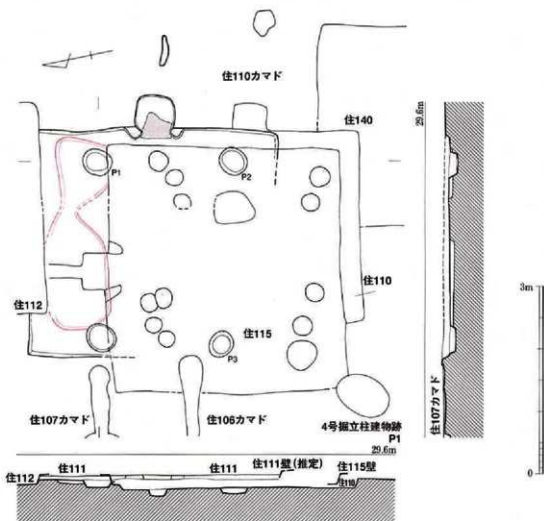
出土土器と切り合い関係から7世紀末～8世紀初頭の住居跡となる。

111号竪穴住居跡(図版17、第35図)

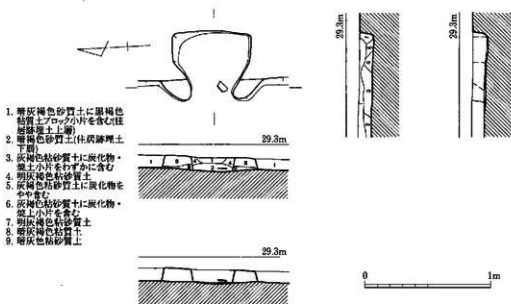
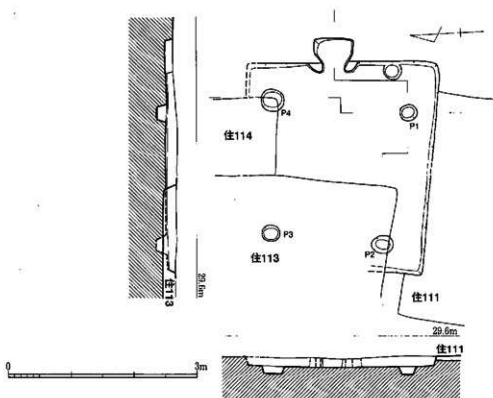
111号竪穴住居跡は2区東中央南、住居跡集中区東側に位置する。112・115号住居跡に切れ、110・140号住居跡を切る。調査当初は切り合いの前後関係が分からず、特に110号住居跡との切り合いは東壁が両住居とも一致するため非常に難しかったが、110号住居跡カマドが当住居跡に切られることから、111→110号住居跡との切り合い関係が判明した。

東壁中央にカマドを付設し、112号住居跡により北壁、115号住居跡により住居南側大半が壊されるが、床面レベルが当住居跡より低い115号住居跡調査時に検出したピットの中で、位置的に当住居跡主柱穴になると考えられるピットを確認した。東西3.6m×3.9m、深さ6cmのほぼ正方形の住居跡で、埋土は明黄褐色砂質土。住居北側で床下掘り込みが認められた。覆土から製塩土器(第267図9)が出土。

カマド(図版17) 東壁中央に付設され、右袖が15cm、左袖が18cmほど内向きに突出する袖を持つカマド。袖は焦土を多く含む粘質土で構築しており、他の住居跡で使用した粘質土を袖に再使用したものか。カマド前面の段差は115号住居跡調査時の掘り間違いによるもの。奥壁から30cmの場所に硬化面があるが、この硬化面は奥壁側左が突出することから支脚に壺などを使用したことを示すと考えられる。



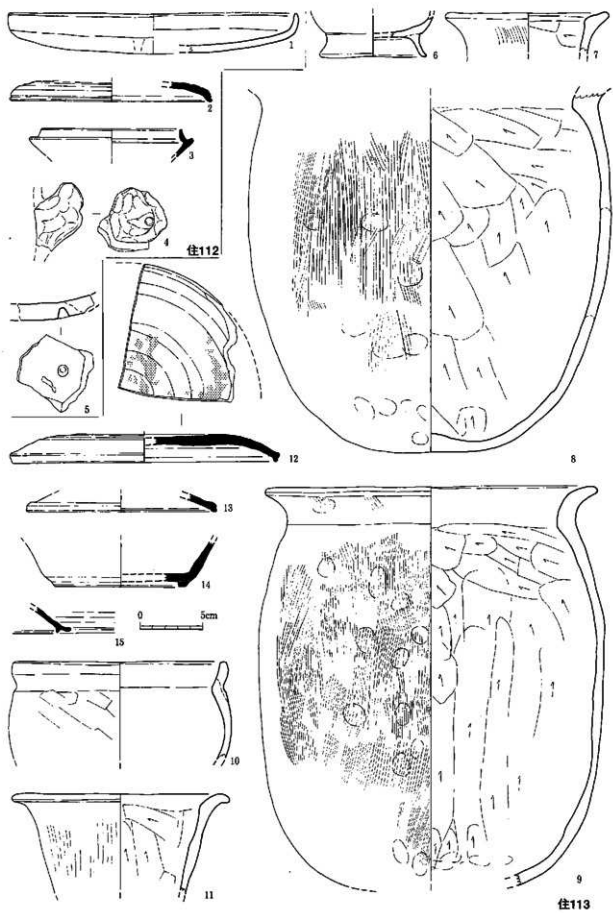
第35図 111号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第36図 112号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

燃焼部はこの支脚推定位置で幅63cm、奥壁部で幅50cm、袖先端部からの奥行が70cmを測り、平面形態は円形状にやや丸くなる。奥壁から47cm 東に50×12cm、深さ3cmの、埋土に炭ブロックが混じる細長い溝状のものを検出した。カマド主軸よりはやや南にずれることは気になるが、カマドの煙道部の一部となると思われる。

出土土器(第27図54) 図示できるのは1点のみである。54は嘴状の須恵器杯蓋口縁部。色は灰色。1点のみで断定はできないが、出土土器から当住居の時期は8世紀中頃か。



第37图 112·113号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

112号竪穴住居跡（図版18、第36図）

2区中央やや東寄りで重なり合う住居跡群のうち、最も東側で切り合う住居群の一つである。南側で111号住居跡を切り、西・北側で113・114号住居跡に切られる。東壁の中央部に突出型のカマドを持ち、主軸は東西方向で住居跡の長さは3.4mを測る。幅は北壁をトレンチで破壊してしまっただけ正確には把握できないが、およそ3.1mほどを測る。主柱穴は4基とも確認できるが、深さは15cm程度と浅い。埋土は大きく2層に分層でき、上層が暗褐色砂質土、下層が暗褐色砂質土である。出土土器や切り合い関係から、8世紀前半～中頃に位置づけて良いだろう。

カマド（図版18） 住居跡の東壁中央部に突出型のカマドを検出した。突出部は幅60cm、奥行40cmほどを測り、逆「八」字型に長さ15cmほどの袖を付設して燃焼部を囲い込む。焼面等は確認できなかった。埋土はやや複雑であるが、1層、4～7層の大きく2層に分層でき、上層は住居跡の埋土と共通、下層は焼土と炭化物の小片を多く含み、天井や両壁の崩落土層と考えられる。

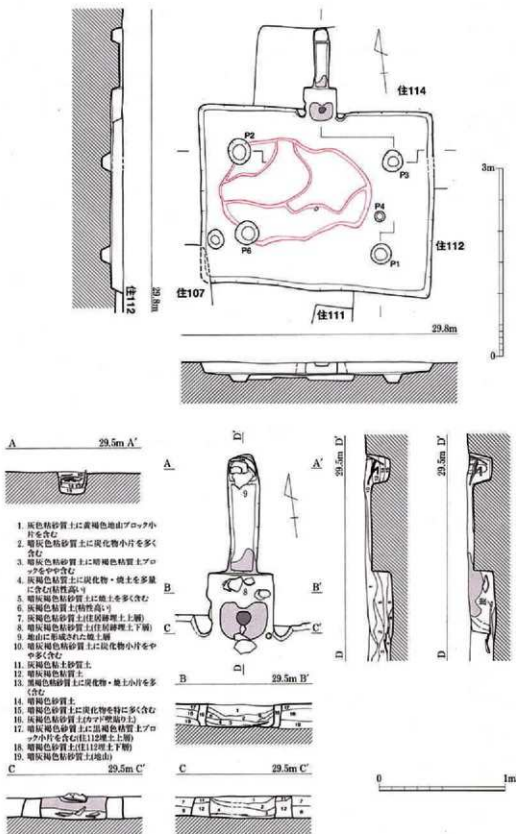
出土土器（図版102、第37図1～5） 1・4・5は土師器である。1は大形の杯である。底部はわずかに湾曲しながら広がり、短く屈曲して口縁部に至る。調整は前面ナデ仕上げ。4は瓶の把手である。外面が被熱により赤変している。5は甕形土器の底部であろうか。外面に焼成前の非貫通穿孔が認められる。

2・3は須恵器である。2は杯蓋の口縁部片である。器壁が厚く、口縁端部の屈曲は明瞭ではない。3はかえりを有する杯蓋の口縁部片である。かえりはやや短く、上方に伸びる形状を呈する。以上の資料は時期的にやや幅があるが、1・2は8世紀代に位置づけられ、住居跡の時期をここに想定したい。

113号竪穴住居跡（図版18、第38図）

2区中央やや東寄りで重なり合う住居群の一つである。112号住居跡を南側で、114号住居跡を北側で破壊し、107号住居跡とも南西隅部が重なり合っているが、先後関係は把握できなかった。北壁の中央部に突出型のカマドを付設し、主軸方向は南北方向で長さ3.1m、幅は東西方向で4.1mほどを測る。残存する深さはおよそ15～20cm程度である。床面からは4基の主柱穴とビット、不整形の床面掘り込みが検出された。主柱穴はすべて15～20cmの深さであった。出土土器と切り合い関係から、本住居跡は8世紀中葉に位置づけられよう。また、ビットから製塩土器（第269図10）が出土している。

カマド（図版19） 住居跡の北壁ほぼ中央部に、突出型のカマドが検出された。突出部の掘り込みは幅55cm、奥行45cm程度で、長さ10cm程度の袖が付設される。燃焼部は隅部が直角のほぼ正方形である。床面の広い範囲に焼面が認められ、中央部が非常に良く焼けて硬化面を形成していた。この硬化面の奥に半円形に赤化しない部分があり、おそらくここに支脚がおかれたものであろう。また、両壁と奥壁の上部には被熱とススの付着により赤・黒色化した部分が広がり、煙道部に行くにつれて暗紫色へと変化していく。奥壁の中央部には長さ80cmほどの煙道部が続いており、その先端部には径30cm弱、深さ20cmの小ビットが検出された。煙突の基礎部分であろう。この小ビット内には、底部を除去して縦に分割された甕の半分（第37図9）が奥壁に



第38図 113号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

沿っておかれていたようであり、ピット壁の崩落を防ぐ目的があった可能性もあるが、カマド廃棄後に投入された可能性も残る。また、このピットの最下層には炭化物が堆積していた（この炭化物の樹種はツギ属である。詳しくはIV-1参照）。一方、カマド燃焼部からは第37図8の甕形土器が検出された。完形に復元できるものではなく、カマドの埋没時に混入あるいは廃棄されたものであろうが、灰層の直上に張り付くような状態で出土しており、天井部の崩落よりも前、住居跡の埋没以前におかれたものと考えられる。燃焼部の埋土は大きく4層に分層でき、このうち最下層はカマド床直上に堆積した灰層、中間の2層はカマド天井部の崩落層、最上層は住居跡の埋土と類似しており、同一層と判断される。また、本カマドの燃焼部を横方向に裁ち割ったところ、カマド袖に厚さ5cmほどの粘土質の土が張り付けられているのが確認された。（第38図16）おそらくカマドの壁を補強するために施された工夫であろう。

出土土器（図版102、第37図6～15）6～11は土師器である。6は8世紀後半の黒色土器であろう。断面が細長い高台を持つ杯である。7・11は小形の甕形土器である。バケツ状の胴部を持つもので、如意状に外反する口縁部が残る。8・9は大形の甕形土器である。8はカマド燃焼部から割れた状態で出土し、9はカマド煙道部の先端から出土した。いずれも菌状の胴部と如意状に外反する口縁部を持つもので、内面ヘラケズリ、外面ハケメにより調整を行う。10は小形の甕形土器であろう。球状の胴部を持つものと考えられる。

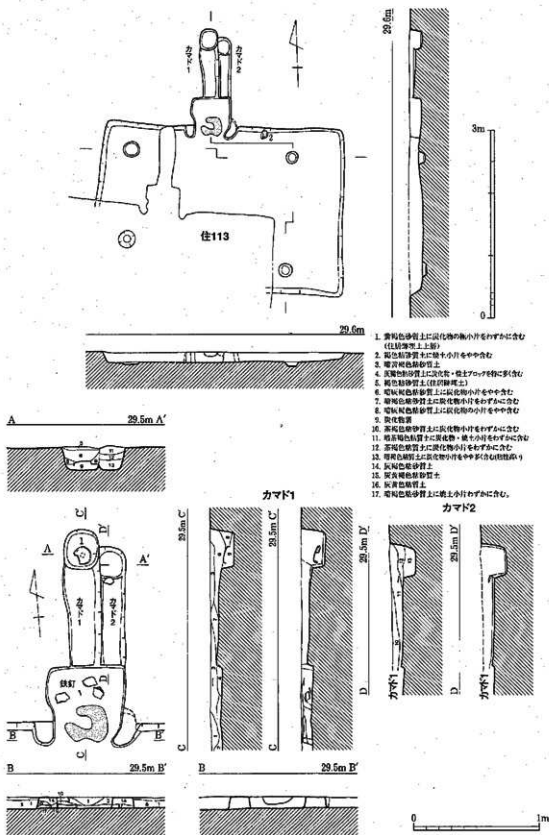
12～14は須恵器である。12・13は端部が短く内側に屈曲する杯蓋である。天井部が平坦で、屈曲して斜め下方に伸びるものであろう。口径は12が21cmと大きく、13が15cmと小形である。12は内面が摩耗しており、所々に炭が付着することから（図でトーンで示した範囲）転用硯と考えられる。14は高台付の杯である。高台の断面形は平行四辺形状を呈する。15はかえりを有する杯蓋の口縁部片である。これらの資料は、一部を除いて8世紀中葉に位置づけられる。

114号整穴住居跡（図版20、第39図）

2区中央やや東寄りで重なり合う住居群の一つである。113号住居跡に南側を大きく破壊されている。住居跡の北壁中央部やや西寄りに突出型のカマドを確認し（カマド1）、さらに周囲を精査して、このカマドに破壊された別のカマドをこの東側に検出した（カマド2）。この東側のカマドに対応する住居跡を探したが検出できず、床面が同一レベルであること、このカマドが本住居跡のほぼ中央に位置することなどから、このカマドも本住居跡に付設されたものと考えることが妥当と判断した。

従って、本住居跡にはまずカマド2が付設され、その後これが埋め戻されてそのすぐ西側に新たなカマド（カマド1）が付設されたものと判断した。ただし、本来はカマド2が付属する別の住居跡が本住居跡とほぼ同じ場所にあって、これが本住居跡の掘削時に完全に破壊された可能性も残る。

住居跡の壁は15cm程度が残存していた。主柱穴は、ピットを住居跡の床面から3基と113号住居跡の床面から1本の計4基を確認することができたが、深さはどれも非常に浅く、これらが主柱穴となるかどうか判断に迷うところである。住居跡の主軸は南北方向で2.0m、幅は東西で4.3mを測り、やや横に長い長方形を呈する。カマド奥壁付近から、第270図16の鉄製の釘が出土した。出土土器と切り合い関係から、本住居跡の時期をおおよそ8世紀前半におくこと



第39図 114号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

がでしよう。

カマド1(図版20) 住居跡の北壁中央部やや西寄りに付設された突出型のカマドである。突出部は奥行50cm、幅65cmで、逆「八」字型の長さ15cmほどの袖を付設し、これによって造られた燃焼部は奥の2隅がほぼ直角の正方形を呈する。両袖のほぼ中間に焼面が形成されており、この焼面の中央部に円形に変色していない部分が確認された。ここに支脚がおかれていたものであろう。奥壁から北側に長さ80cmほどの煙道が付設され、さらにその先端に径35cmほどのピットが掘られていた。このピットは煙突の基底部と考えられるが、煙道部の床よりもさらに10cmほど深く掘削されていた。ピットの底からやや浮いた位置から第40図1の椀が出土したが、逆位でありやや浮いていることから、埋没時に混入あるいは意図的に廃棄されたものであろうか。この椀から下層にはほぼ炭化物のみから形成された層が堆積していた(この炭化物の樹種はアカメガシワである。詳細はIV-1参照)。燃焼部の埋土は大きく1・3層、2層、4層に分けられ、1・3層は住居跡の埋没時の流入土、2層は天井部の崩落土、4層はカマド床直上に堆積した灰層であろう。

カマド2 カマド1の東側に隣接し、これに燃焼部を大きく破壊されていた。このため燃焼部はカマド1の東側袖部の付け根にわずかに確認されるのみであった。これに対し、煙道部は比較的良く残っており、長さ65cmほどの煙道部の先端に径30cm弱のピットが掘り込まれている状況が確認できた。この煙道部の構造はカマド1の煙道部の構造と非常に良く類似していた。

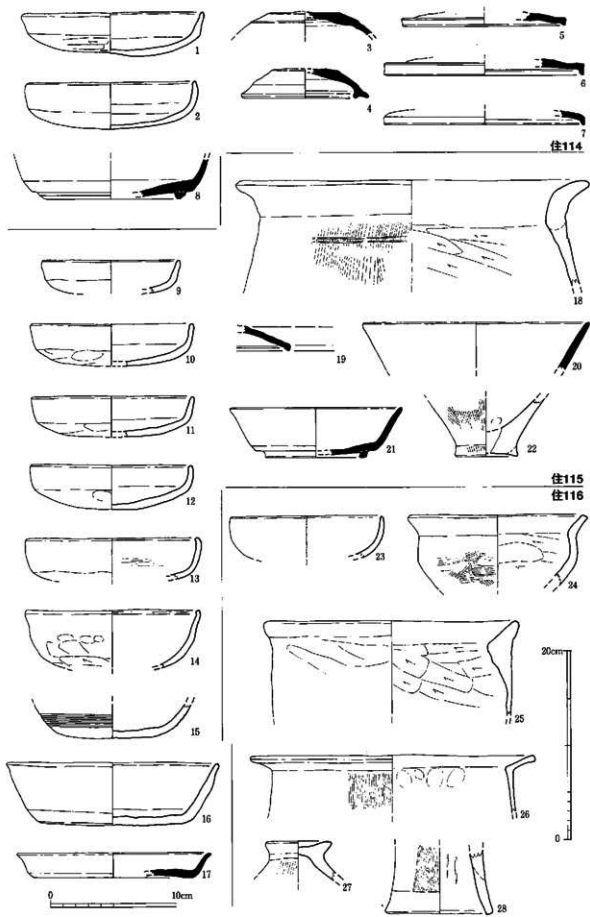
出土土器(図版102、第40図1~8) 1・2は土師器の椀である。いずれもやや丸みを帯びた底部から屈曲して口縁部は上方に短く伸びる。底部外面にヘラケズリ痕が残る。径は1が14.6cm、2が13.8cmを測る。

3~8は須恵器である。3は丸みを帯びた杯蓋の天井部である。つまみが付かないタイプである。4は口縁端部にかえりを有する杯蓋である。つまみ部の有無は不明。径は7.8cmと小形である。5~7は天井部が平坦に伸びて口縁端部を下方に短く折り曲げるタイプの杯蓋である。いずれもつまみ部は欠失しているが、ボタン状の平たいつまみが付いたものであろう。径は5が13cm、6と7が16cmを測る。8は高台を有する杯身である。底部は平坦で、屈曲して斜め上方に伸びて口縁部に至る。高台の断面は不整形な平行四辺形状を呈する。以上の資料は8世紀前半のものが最も多い。

115号竪穴住居跡(図版20、第41図)

115号竪穴住居跡は2区東中央南、住居跡集中区東側に位置する。110・111・140号住居跡を切り、106号住居跡・4号獨立柱建物跡に切られる。107号住居跡カマド煙道部と住居北西隅で接し、切り合い関係があったかも含め不明であるが、107号住居跡の方が新しい住居跡になると思われる。

調査当初は110・111号住居跡との切り合いの前後関係が分からず、トレンチなどを入れ確認した(カマド東にトレンチが残る)。住居北壁中央にカマドを付設し、南北3.8m×東西3.9m、深さ12cmの正方形住居となる。当住居跡床面は110号住居跡床面より低い、111号住居跡よりは高くなる。床面ではピットを6基検出し、P1~4が主柱穴となる。P5は埋土に焦土が混じる。カマド南と南壁沿いで住居床下掘り込みを確認した。埋土は暗茶褐色砂質土。



第40図 114~116号竪穴住居跡出土土器実測図 (26~28は1/4、他は1/3)

カマド 北壁中央に位置し、袖が壁から28cm やや内向きに突出するカマド。煙道部先端は112号住居跡に壊される。カマド床面では焼面は認められないが、カマド前面には炭が広がる(破線の範囲内)。燃焼部幅は50cm で、袖先端部から奥壁までの奥行きは65cm を測る。燃焼部床面の10cm 上から幅20cm の煙道が北に60cm 以上延びる。

出土土器(図版102、第40図9~22) 18は土師器甕で、頸部下には2条の凹線が認められるが、全周するかどうかは不明。色は橙褐色。P5出土。9~16は土師器杯である。9~14は杯底部を手持ちヘラケズリで調整し、色は9・16が黄褐色。10・13が灰黄褐色~茶褐色、11・12・14が橙褐色、15が橙茶色を早する。11の内面には二次加熱痕あり。13内面にはミガキが残る。14は口縁端部を内側に肥厚させるもの。外面には指押さえ痕が良く残る。15は外面下部にカキ目を施すもの。16は口径16.6cm のやや大形のもの。底部外面は回転ヘラケズリを施す。胎土にはやや多く細粒を含む。

17は須恵器皿。口縁部が外反し、底部はヘラ切りのちナデ調整。色は暗灰色。19~21は須恵器杯で、19・20は色が灰色、21は青灰色を呈する。19は杯蓋口縁部。20は杯身口縁部であるが、小片のため径は不安。21は高台付杯身で、底部はヘラ切りのちナデ。

22は弥生土器甕底部で、やや上げ底で、厚い底部のもの。色は茶褐色~暗黄褐色を呈する。出土土器から住居の時期は8世紀中頃と考えられる。

116号竪穴住居跡(図版21、第42図)

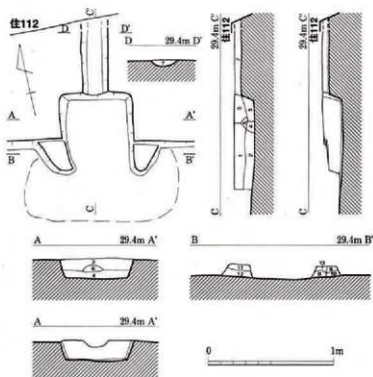
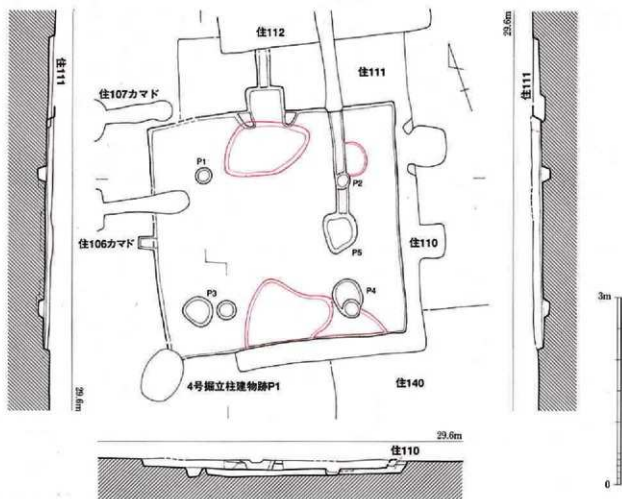
2区中央部南側で検出された。117・119号住居跡・20号溝と切り合い関係を持ち、これよりも新しい。平面形態は南北3.4m、東西3.2mのほぼ正方形を呈する。床面からは4隅に柱穴が検出されたほか、中央部に小ピット、北壁中央部に大略方形の土坑が検出された。四隅のピットはいずれも深さ20cm 前後を測り、主柱穴と判断して良いだろう。カマド等は確認できなかった。出土土器と切り合い関係から、8世紀代(前半~中頃か)のものであろう。覆土から磨製石包丁(第264図24)が出上している。

出土土器(第40図23~28) 23~25は土師器である。23は碗である。底部から口縁部まで緩やかに湾曲するタイプである。口縁部径は12.1cm を測る。4は鉢形土器である。底~胴部は半球状を呈し、口縁部は短く外反する。外面ハケメ、内面ケズリ調整が認められる。25はバケツ状の胴部を有する小形の甕である。如意状に外反する口縁部付近が残る。胴部内面を細かくケズリ込み、凹凸が著しい。以上の資料はおおよそ8世紀代におくことができようか。

26~28は弥生土器である。26は甕形土器の口縁部である。屈曲して平坦な口縁部を形成する。外面ハケメ、内面ナデ、口縁部付近は内・外面ともに横ナデ仕上げ。27は甕蓋のつまみ部である。天井部はやや内湾し、端部が突出する。口縁部に向けて強く開く。28は器台である。外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。いずれも須玖Ⅱ式に含まれる。

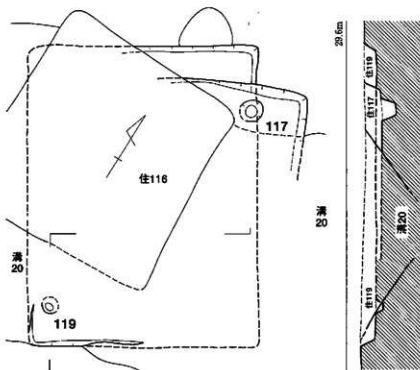
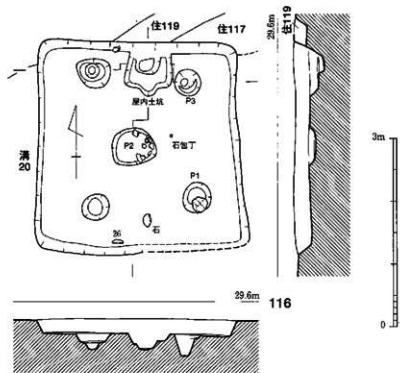
118号竪穴住居跡(図版21、第43図)

118号竪穴住居跡は2区中央西寄り中央に位置し、周囲には25・26号土坑が存在する。住居は削平がひどく、P4南に南壁下端の可能性もある線を図示しているが、自信がない。検出段階でまず明赤褐色砂質土が埋土の炉を確認したため(図のトーン)、周辺に主柱穴がないか精査



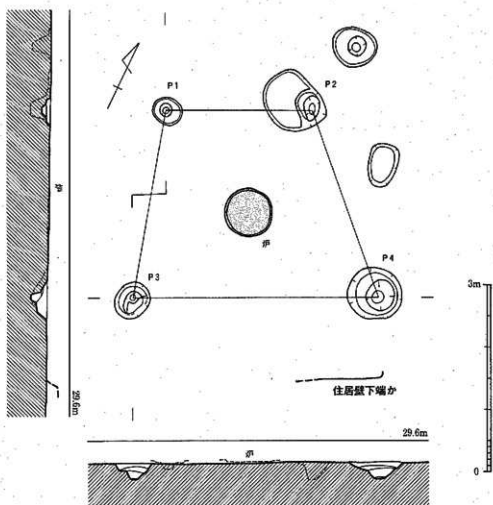
1. 暗茶褐色砂質土に炭ブロック少量混じる
2. 1より砂質が強く、焦土ブロックも混じる
3. 暗茶褐色砂質土に焦土・炭ブロック少量混じる
4. 3より砂質が強く、やや暗い
5. 暗黄灰色砂質土に焦土少量含み、砂質が強い
6. 明黄褐色砂質土（粘性あり）
7. 暗黄灰色砂質土に焦土・炭ブロック少量含む
8. 暗黄褐色砂質土に黄褐色粘土ブロック少量含む
9. 暗黄褐色砂質土+黄褐色砂質土ブロック（砂質が強い）
10. 9より砂質が強い（黄褐色砂質土ブロックの割合が高い）
11. 8より粘土ブロックが多く含む
12. 11より砂質が強く、粘土ブロックが少ない
13. 8より砂質が強い

第41図 115号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第42図 116・117・119号竪穴住居跡実測図 (1/60)

したところ、P1～4が主柱穴の住居跡になることが分かった。柱間は北側が狭く、南側が広いので、線で繋ぐと台形状になる。P1～4はほぼ同じ深さのため主柱穴と判断したが、P2東にも主柱穴となりうる規模のピットが2基あるので図示した。削平のため、検出段階で本来の床面より下がってしまっており、また検出面は南に傾斜するため、東西の断面図では炉が浮いたものとなる。出土土器で図示できるものはない。



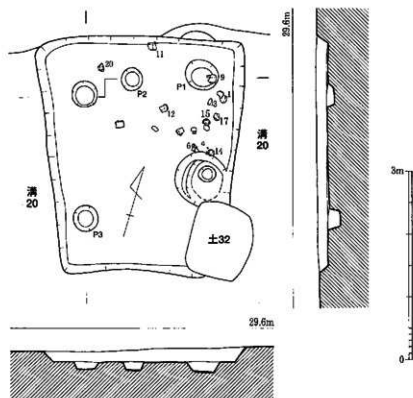
第43図 118号竪穴住居跡実測図 (1/60)

120号竪穴住居跡 (図版21、第44図)

2区中央部の南側で検出した。平面形態はややゆがんだ台形状を呈し、規模は東西が最大3.3m、南北が3.7mを測る。南東コーナー付近を32号土坑により破壊されるほか、ほぼ全体が20号溝と切り合い関係を持ち、本住居跡が新しい。壁の残存深さは20cmほどを測る。床面からは5基のピットが検出されたが、これらのうちいくつかは主柱穴となると考えられる。住居内からはやや大きな土器片がいくつか出土したが、いずれも床面からは浮いていた。第270図14の鉄製手鐲が出土したほか、鉄滓が出土した。出土土器と切り合い関係から、7世紀初頭のものと考えられる。また、履土から剥片石器(第264図4)が出土したが、混入であろうか。

出土土器(図版102・103、第45図) 1~12は古代の土師器である。1~4は半球状の形態を持つ碗形土器である。いずれも底部外面にケズリ痕(または板ナデ)を残し、口縁部は内・外面ともにナデ調整を行う。胴・底部内面は1・3・4がナデ、2はヘラミガキ痕が認められる。5は類似の形態を持つが壁がやや直線的な碗である。外面に広い面積を持つケズリ単位が多く認められる。6・7は高杯である。6は半円状の杯部と、直線的に開きながら伸びる脚上部が残存する。7は脚下半部の資料である。屈曲して外に開く脚端部が残存する。

8は球胴の短頸壺である。口径が14cmを測る小形品である。9も同じく球胴の短頸壺であろう。こちらは大形品である。10・11は菌状の胴部を有する甕形土器であろう。いずれも口縁



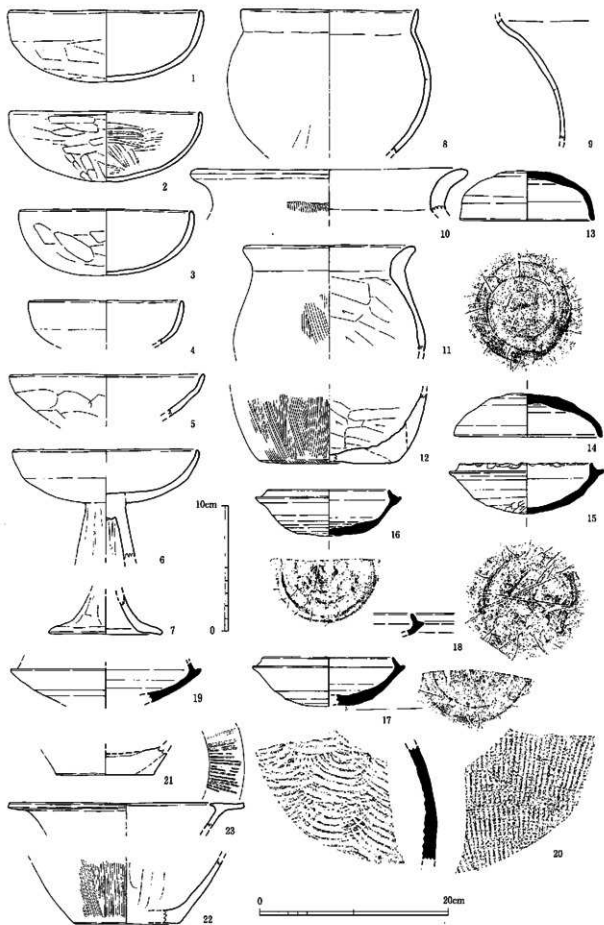
第44図 120号竪穴住居跡実測図 (1/60)

部片で、10は口径22cmを測る大形品、11は13.6cmを測る小形品である。12も同様の甕であろうか。底部のみ残存するが、平底であり注目される。13～20は須恵器である。13・14は口縁部にかえり等を持たない杯蓋である。いずれも丸い天井部からゆるやかに下方に伸びる口縁部を持ち、13は境界にやや屈曲を有する。14は天井部にヘラ記号が認められる。径は13が10.4cm、14が11.4cmを測る。15～19は口縁端部にかえりを持つ杯身である。いずれもほぼ同様の器形を有し、丸底から伸び上がって口縁部にいたり、反転して内傾しながら外湾しつつ短く伸びるかえり部を持つ。15は口径を打ち欠いている。15・16・17が天井部にヘラ記号を有する。径は15が10.3cm、16が11.7cm、17が12.0cm、19が15cmを測り、18は小片のため不明。20は大型の甕の胴部片。内・外面にタタキを施し、内面は背海波、外面には格子目が明瞭に残る。以上の土器群はおおよそ7世紀初頭に位置づけられよう。

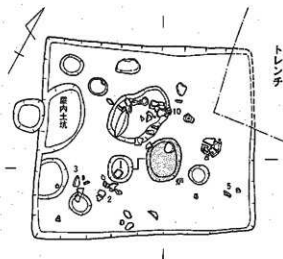
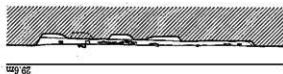
21～23は弥生土器である。21は甕形土器の底部片である。底部はやや大きく、平底である。内面がやや剥離する。22はおそらく樽形土器の底部片であろう。外面ハケメ、内面ナデ調整。23は鋤先口縁高環の口縁部片である。鋤先部上面の平坦面の端部に強いナデを施してわずかに跳ね上げ様の意匠を施す。上面の全体に細いヘラ状工具によって放射状の暗文を施す。以上は弥生中期須玖Ⅱ式に位置づけられ、新相を呈する。

121号竪穴住居跡 (図版22、第46図)

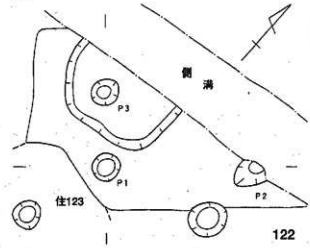
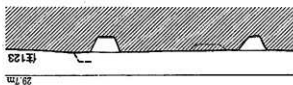
121号竪穴住居跡は2区ほぼ中央に位置し、周囲には30・31号土坑、123号住居跡が存在する。住居北東隅は試掘トレンチにより壊されているが、南北3.2m×東西3.5m、深さ10cmのほぼ正



第45図 120号竪穴住居跡出土土器実測図 (21~23は1/4、他は1/3)



121



122

第46図 121・122号竪穴住居跡実測図 (1/60)

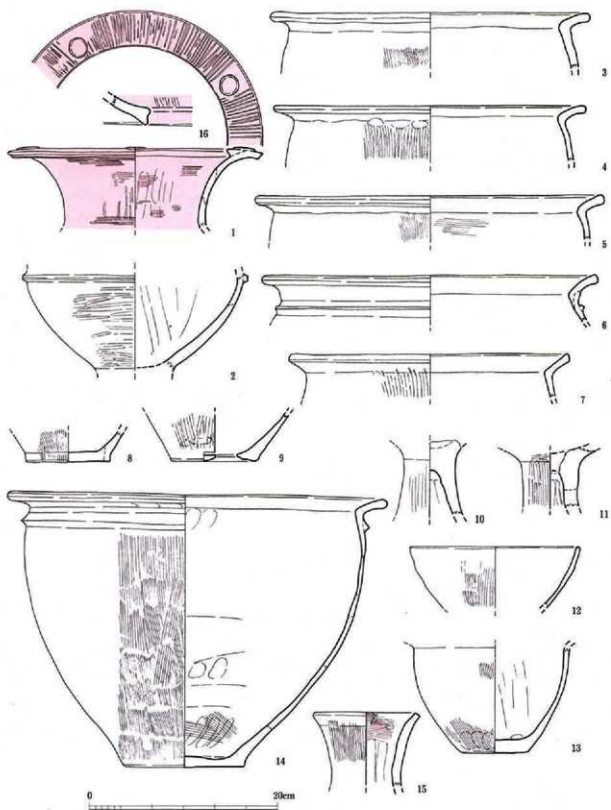
色は白黄褐色～灰黄褐色。5の内面頸部は横ハケのちナデで調整。外面には二次加熱痕が残る。色は灰黄褐色～黄橙色。6は外面頸部直下に三角突帯を貼り付けたもので、張る胴部に「く」の字の口縁が付く。色は灰黄褐色～こげ茶。7は口縁上端部に上に跳ね上げたもので、胎土には角閃石が多く含み、色は茶褐色を呈する。8・9は甕底部である。8は底部外面にス

方形の住居跡となる。住居覆土から多くの上器・石が出土したが、床面から若干浮いて出土したことが多い。住居埋土は暗茶褐色砂質土。床面では8基のピットを検出し、住居中央南のトーンで示したピットは、暗黄褐色砂質土に明赤褐色砂質土ブロックが混じる埋土の炉となる。いずれのピットも浅く支柱穴は確定できない。住居西壁沿いに1m×0.3m、深さ7cmの屋内土坑がある。6・13・14はP1出土。また、覆土から凹石(第266図56)と石皿(第267図60)が出土している。

出土土器(図版104、第47図)

1は緩やかに外反する鑊先口縁壺口縁部で、口縁端部は下がり、口縁外端部は跳ね上げ気味となる。口縁上端部には4ヶ所門形浮文を貼り付け(2ヶ所残存)、浮文間は暗文状ミガキを密に施す。口縁部外面はハケ後縦ミガキ後、口縁部と頸部付近は横ミガキ、内面は横ハケのちナデを施す。内外面は丹を塗布する。口径27cm。2は外面胴部中位にM字突帯を貼り付けた壺で、底部に脚が付く特殊なもの。外面は幅のある横ミガキ、内面は板ナデのちナデで調整。外面には黒斑あり。色は黄橙褐色。

3～9は弥生中期甕。3～6は口縁端部がやや下がり気味になるもの。3は器壁がやや厚めで、端部は丸く取める。焼成はやや甘く、色は灰黄褐色。4は外面にスが付着。



第47图 121号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/4)

が付着するもので、色は黄茶褐色。9は底部中央を焼成後外から打ち欠き、穿孔したものの。外面には黒斑があり、色は黄橙色。

10・11は丹塗高杯脚部上部である。いずれも胎土には細粒が多い。10の外面は二次加熱を受け器表が荒れるが縦ミガキのち丹を塗布し、内面はナデ紋り痕が認められる。生地は暗黄茶褐色。11の杯外面は横ミガキ、脚部には縦ミガキが残り、内面にはナデ紋り痕が残る。生地は白黄褐色。

12は直口鉢で、色は灰黄色。13は外折する口縁部を持つ鉢で、底部はやや厚め。内面には縦ナデ痕が残る。色は褐色～灰褐色。14は口径40.5cm、底径13.0cm、器高28.6cmの口縁部直下に三角突帯が付く大形鉢で、外面は縦ハケ、内面底部はハケ調整、胴部は板ナデ後ナデ調整。外面口縁下と内面底部には炭化物が付着する。色は茶褐色。15は器台で、内面には丹が一部付着するが、全体に塗布したのではなく、何らかの原因でたまたま付着したものか。色は橙褐色。

16は外面丹塗りの高杯か筒型器台脚部で、端部はナデで凹線状に窪む。外面には縦ミガキを施し、その他はナデ調整。生地は黄褐色。出土土器から住居の時期は弥生時代中期末になる。

122号竪穴住居跡（図版22、第46図）

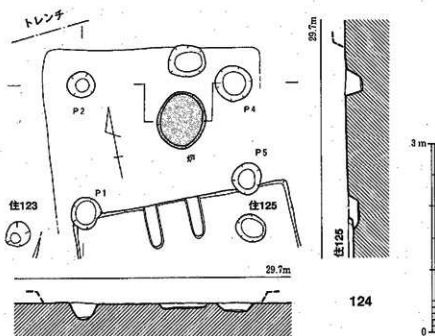
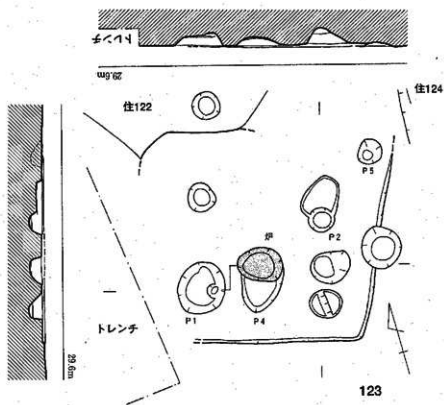
122号竪穴住居跡は2区中央北端に位置し、123号住居跡に切られる。この付近は削平が激しく、当住居跡も西・南壁下端のみ検出し、また住居北東側が調査区外のため、住居形態は不明。床面ではピットを3基検出し、P1・2は主柱穴の可能性が高く、4本柱の住居跡になるか。P3は形状から住居床下掘り込みの可能性もある。

出土土器（第49図1） 図示できる土器は1点のみである。1は外折する口縁部を持つ弥生中期甕で、端部はナデで面取りする。色は黄橙色。

123号竪穴住居跡（図版22、第48図）

123号竪穴住居跡は2区中央北寄りに位置し、122号住居跡を切り、124号住居跡との切り合い関係は不明。122号住居跡の項でも先述したが、この付近はかなり削平されており、最も残りのよい南東隅で壁が5cmほどしか残っておらず、北・西壁は検出できなかった（122号住居跡を切るラインは住居北東隅のある程度の位置を示しているが、下端とするには自信がない）。埋土は暗黄褐色砂質土で、床面では8基のピットを検出し、トーンで示したものは埴となる。埴の埋土は茶褐色砂質土に明赤褐色砂質土が少量混じるもので、埴が住居跡南にやや偏ること、P1・P2が主柱穴になる可能性が高いことなどから、現在検出した住居輪郭は長方形住居跡の竪穴部で、ピットの位置関係から東西にベット状遺構が付く住居跡になる可能性も考えられるが、出土土器から弥生中期末の住居であり、長方形住居とするには躊躇する。

出土土器（図版104、第49図2～7） 2は最大径が胴部中位の丸みを帯びた大形壺胴部で、外面には低平な三角突帯を5条貼り付ける（4条残存）。以東系の大形壺と考えられ、直口の口縁部となるか。突帯貼り付けのち横～斜めのためミガキを外面すべてに施し、内面はナデ調整。外面には炭化物付着。色は暗茶褐色～灰黄褐色。P1・5出土。3～5は弥生中期甕で、3の色は茶褐色。4は強く外折する長い口縁部で、端部を肥厚させるもの。器壁は薄く、外面口縁下には工具痕が残る。色は灰黄褐色。P1出土。5は底部で、外面には二次加熱痕あり。色は黄



第48図 123・124号竪穴住居跡実測図 (1/60)

橙褐色～黒褐色。

6は弥生のミニチュア土器で、平底の鉢状を呈する。外面には黒斑が認められ、色は灰色～黒色。

7は土師器裏把手で混入品。内面にはケズリ痕が残る。色は灰黄褐色。

124号竪穴住居跡（第48図）

124号竪穴住居跡は2区中央北端に位置し、125・126号住居跡に切られるが、123号住居跡との切り合い関係は不明。ほとんど削られており、北・西壁下端のみわずかに確認したため、住居規模は東西方向の3.5mしか分からない。北壁近くに46×40cm、深さ8cmの埋土が明茶褐色砂質土の灼を確認した。床面では5基のピットを確認し、P1・2・4・5が主柱穴の4本柱の住居跡になる。埋土は暗黄褐色砂質土。出土土器で図示できるものはない。

125号竪穴住居跡（図版23、第50図）

125号竪穴住居跡は2区中央やや北寄りに位置し、124・126号住居跡を切る。カマドを北壁中央に付設し、カマド・住居主軸は座標北と一致する。南北3.4m×東西3.5m、深さ8cmの正方形住居で、埋土は暗黄褐色砂質土。126号住居跡と床面の高さがほぼ一致するため、床面には126号住居跡のピットも含む8基のピットが存在するが、埋土と位置関係からP1～4が当住居跡主柱穴であると判断した。P4と126号住居跡P1が切り合い、図面上では後者のほうが新しいというようになっているが、調査段階で切り合い関係を誤っていると思われる。住居床下には掘り込みを確認した（黒破線）。

カマド（図版23）北壁中央に位置し、両袖が壁から65cmほど突出する袖（右袖先端部はやや掘り過ぎ）を持つカマド。奥壁から50cmとやや離れた場所に深さ8cmと浅い、支脚抜き取りピットが存在し、ピット前面には15cmほどの円形の硬化面を形成する。支脚抜き取りピットと硬化面の位置から、袖はさらに南へ延びていたものと考えられ、先端部は住居廃絶時に壊してしまった可能性が高い。この支脚抜き取りピット中央で燃焼部幅が0.47cmで、奥壁でも幅はほぼ同じになる。

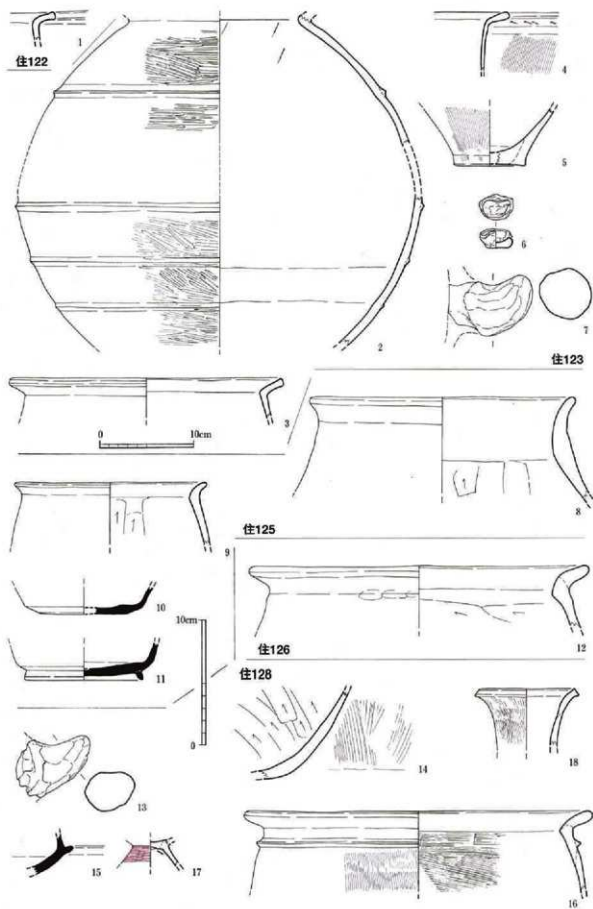
出土土器（第49図8～11）8は口縁部が緩やかに外反する甕というべき土師器甕で、胎上には細粒多く含み、色は茶褐色。9は短く外反する口縁部を持つ土師器甕で、内面は頸部まで縦へラケズリを施す。外面には二次加熱を受け、器表が荒れる。色は外黄橙色、内はこげ茶色を呈する。

10・11は須恵器杯。10は底部にへら切りが残る。色は灰色。11は住居床下出土で、短く踏ん張る高台端部を丸く取めるもの。

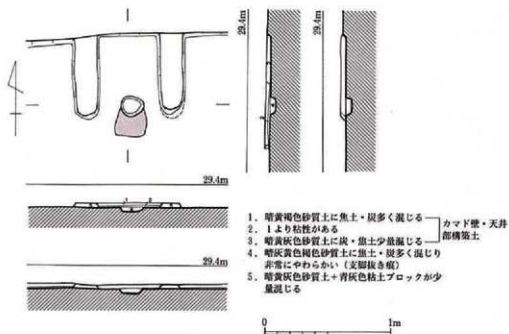
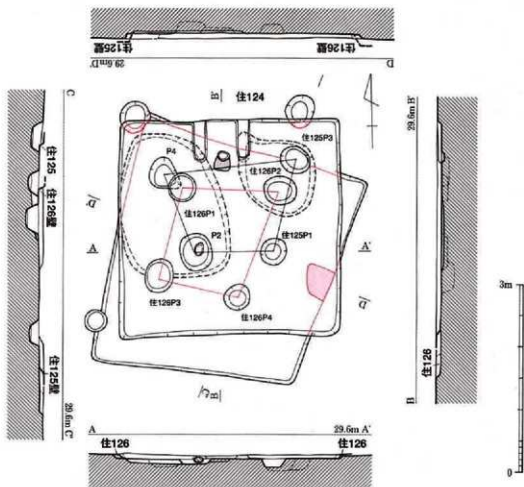
出土土器から7世紀末の住居跡となる。

126号竪穴住居跡（図版23、第50図）

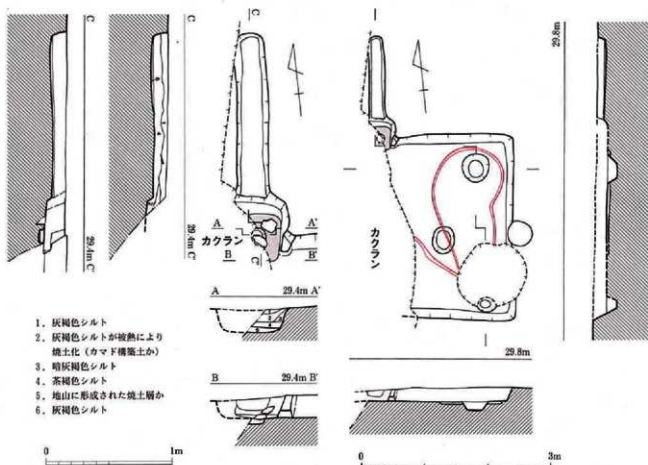
126号竪穴住居跡は2区中央やや北寄りに位置し、124号住居跡を切り、125号住居跡に切られる。住居跡南と北東隅以外は125号住居跡により壊されているが、125号住居跡と床面の高さが変わらないことから、住居下端部分を検出できたため、東西3.6m×南北3.6m、深さ8cmの正方形住居となることが分かった。住居東壁中央には焦上・炭の広がりを確認したため、カマド焼面であると判断した。袖は壊されていたが、焼面幅から燃焼部幅が約50cmのカマドであったことが推定でき、125号住居跡カマドと近い形態であったことが予想される。主柱穴はP1～4で、125号住居跡の説明において先述したように、P1と125号住居跡P4の切り合いは間違っている。主柱穴間はカマド側の方がやや広く、柱穴間を線で繋ぐと台形状になる。このことは



第49図 122・123・125・126・128号竪穴住居跡出土土器実測図 (7~15は1/3、他は1/4)



第50図 125・126号竪穴住居跡、125号住居跡カマド実測図(1/60・1/30)



第51図 128号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

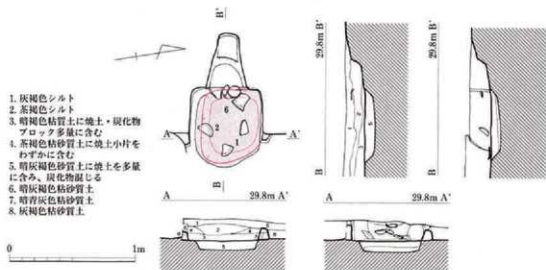
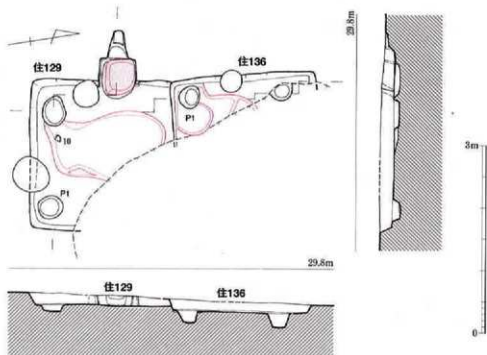
125号住居跡主柱穴でも確認でき、住居上屋形態と何らかの関係があるものか。埋土は暗黄灰色砂質土。出土土器からは時期を確定することができないが、125号住居跡より前のあまり離れない時期の住居跡となるか。

出土土器(第49図12) 図示できるものは1点のみ。12は端部を丸く取めた短く外折する口縁部の土師器甕。色は白黄茶色。P2出土。

128号竪穴住居跡 (図版23、第51図)

調査区中央やや東寄りで見出した住居跡である。西側半分ほどを攪乱により大きく破壊される。北側に突出型のカマドを有し、住居跡の横幅はこのカマドを中軸として折り返すと4.4mほどを測るものと考えられる。南北は2.9mほどで、本住居跡は東西に幅の広い長方形を呈する。床面からはピットと床下掘り込みを検出した。ピット配置にやや疑問があるが2基ほどが主柱穴の候補と考えられる。出土土器から7世紀初頭頃に位置づけられる。埋土中から、鉄滓が出土した(図版136)。

カマド(図版24) 北壁に突出型のカマドを検出した。掘り込み部の西側半分ほどが攪乱により破壊されていた。掘り込み部の奥行は30cm、幅は推定で40cmほどを測り、10cmほどの短い袖を持つ。奥壁から煙道部が真っすぐに130cmほど伸びていた。燃焼部の中央に支脚を立てるための小ピットを検出した。このピットの周囲は被熱により広く変色していた。埋土は大きく3層



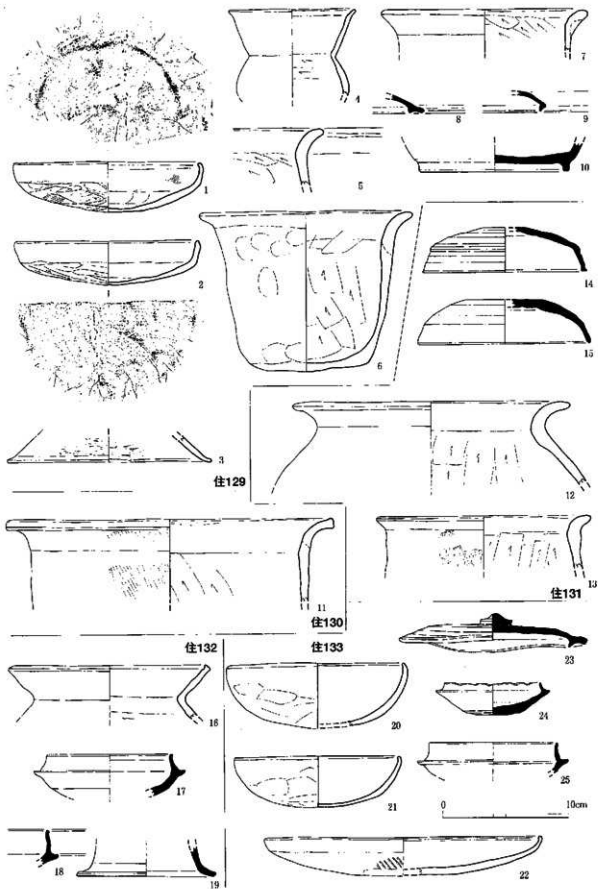
第52図 129号竪穴住居跡・カマド、136号竪穴住居跡実測図(1/60・1/30)

に分層でき、1層は住居跡埋土、2層はカマド天井の崩落土、3・4層は住居跡の埋土と類似する。

出土土器(第49図13~18) 13・14は土師器である。13は甎の把手。短く小形である。14は大形甎の底部片であろう。おそらく歯状の胴部形状を持つものと考えられる。外面ハケメ、内面ケズリ調整。

15は須恵器である。かえりを有する杯身の口縁部片である。かえり部が比較的直立する。以上の資料は7世紀初頭~前半を前後する時期のものか。

16~18は弥生土器である。16は須玖Ⅱ式の大形甎の口縁部片である。「く」字状に屈曲し、口縁端部は丸く収める。口縁部上面を強くなで、わずかに跳ね上げ状の変化を付ける。口径37cmを測る大形品であり、口縁部下に断面三角形の突帯を巡らせる。17は弥生時代末~古墳時



第53图 129~133号竖穴住居跡出土土器実測図(1/3)

代初頭の小型器台であろうか。外面は横方向の細かいヘラミガキを施し、丹塗りを行う。18は須玖Ⅱ式の器台である。天地にはやや白信がない。内面ナデ、外面ハケメ調整。以上は混入であろう。

129号竪穴住居跡（図版24、第52図）

2区中央東側の北寄りで見出した住居跡である。東側の大半を攪乱によって破壊されており、残された北壁も136号住居跡によって破壊されていた。西壁の中央部に突出型のカマドが付設されていた。住居跡の主軸は東西方向で、規模は2.4mを測り、幅は北壁を破壊されているため正確には測定できないが、カマドが中央に付設されていたと考えたと2.4mほどに復元されよう。小規模な正方形の竪穴住居跡と考えられる。壁の残存深さは20cm弱を測り、支柱穴と考えられるピットは南西・南東隅に2基確認されたが、深さは10cm程度と極めて浅い。中央部に不整形の床下掘り込みが確認された。出土土器から、8世紀前半とみてよからう。また、住居跡付近遺構面から管玉（第265図45）が出土している。

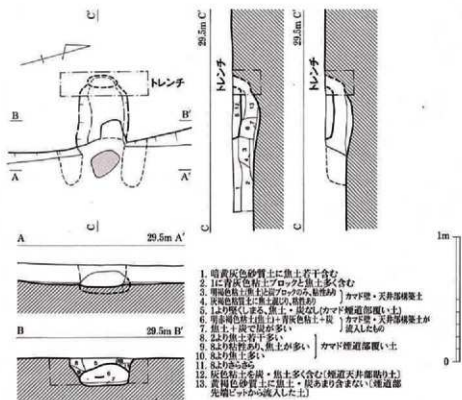
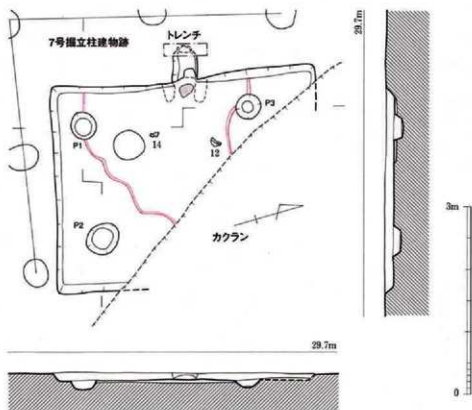
カマド（図版24） カマドは西壁の中央部に突出型のカマドが付設されているのが確認された。突出部は奥行35cm、幅55cmで、長さ10cmほどの小さな袖が付設されていた。カマドの床面全体を一段深く掘りくはめて焼土を多く含む砂質土で埋め戻しており、この上に焼面が形成されていた。カマドの奥壁には煙道が付設されていたが、このカマドの煙道は特徴的で、床面とほぼ同じレベルで25cmほど伸びたあと、一段上がって通常の煙道部へと続いていたが、この一段高い部分は削平でほとんど失われて20cmほどが残っているのみであった。燃焼部の埋土は3層に分層でき、最下層には焼土と炭化物の小片が多く含まれる暗褐色土が堆積していた。天井部が崩落したものであろう。

出土土器（図版104、第53図1～10） 1～7は土器である。1・2は椀形土器である。わずかに丸みを帯びた底部から、屈曲して短く上方に伸びて口縁部に至る。底部外面には全体に板ナデが施され、口縁部は横ナデ、内面はナデにより調整される。3は高杯の脚部であろう。内・外面にごく細い原体による横方向の細かいヘラミガキが施される。4は小形丸底甕である。小さい球状の胴部を持ち、口縁部は長く伸びてわずかに端部が外反する。外面、内面の口縁部はナデ、胴部にはケズリ痕が認められる。5～7はバケツ状の胴部を持つ小形の甕である。5・7は如意状に外反する口縁部のみが残り、6はほぼ全形が判明する。いずれも胴部内面にケズリ調整を施し、外面は摩耗するものもあるがおそらくナデ仕上げであろう。口縁部は内・外面ともに横ナデ仕上げ。以上のうち、3・4は古墳時代初頭に位置づけられ、その他は8世紀代のものであろう。

8～10は須恵器である。8は口縁端部のかえりの明瞭な杯蓋、9はこれが退化して屈曲状になった杯蓋である。いずれも小片のため径等は不明である。10は高台を有する杯身の底部片である。高台はやや高い。以上のうち8・9は7世紀代、10は8世紀代に位置づけられよう。

130号竪穴住居跡（図版25、第52図）

2区中央やや東寄りで見出した重なり合う住居群の一つである。109号住居跡を切り、108・139号住居跡に切られる。特に108号住居跡とはほとんど重なり合っており、この結果本住居跡はその大



第54図 131号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

半が破壊されて、東壁部分が一部残存するのみである。この残存する東壁のほぼ中央部に突出型のカマドが検出された。住居跡の残存深さは10cm程度と浅く、主柱穴も本住居跡に付属すると思われるものは検出できなかった。住居跡の規模は幅のみ確認でき、2.7mを測る。出土土器、切り合い関係等から、8世紀前半前後に位置づけられよう。

カマド(図版25) 住居跡の東壁ほぼ中央部に突出型のカマドを検出した。突出部は幅50cm、奥行25cmを測る長方形で、袖は108号住居跡により大きく削平されており5cm程度が残る。中央部をピットにより大きく破壊されているが、残存する床面はほぼ全体が被熱により変色しており、両袖の一部も被熱とススの付着により赤・黒色に変色している。奥壁の中央部に煙道が検出されたが、大きく削平されており20cm弱が残るのみであった。埋土は2層に分層でき、下層はカマド天井の崩落土、上層は住居跡埋土と同質のものと考えられる。

出土土器(第53図11) 11は土師器の人形壺あるいは鉢の口縁部片である。バケツ状あるいはやや膨らんだ形の胴部を持つものであろう。本地域では出土例が少なく位置づけは難しいが、8世紀代のものか。

131号竪穴住居跡(図版25、第54図)

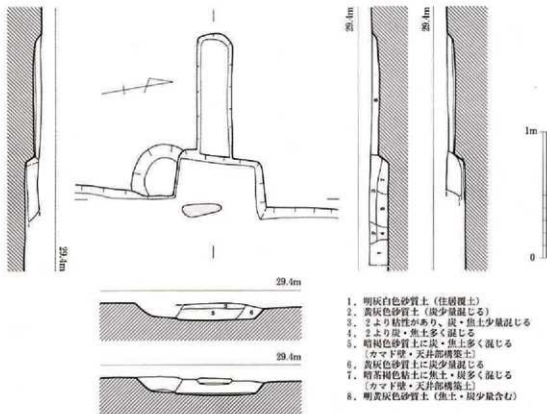
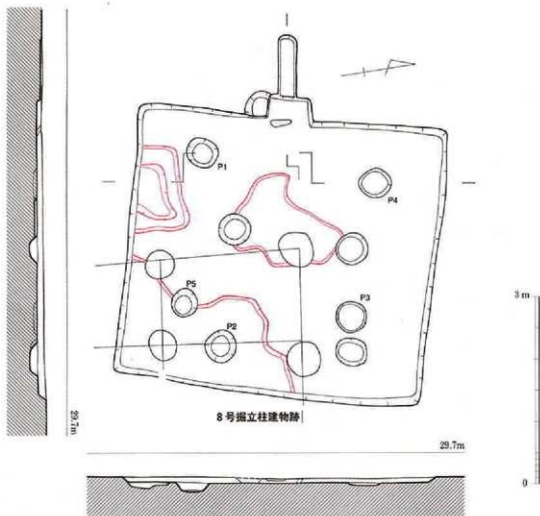
2区北東隅、132号竪穴住居跡北に位置し、7号掘立柱建物跡に切られる。住居北東部がカクランを受けるが、カマドを西壁中央に付設する、東西3.3m×南北4.2m、深さ12cmの南北にやや長い住居跡となる。床面では3基のピットを検出し、そのいずれも主柱穴の4本柱の住居跡となる。住居中央において掘り込みを確認した。

カマド(図版25) 調査当初はカマドの存在に気づかず、住居西壁中央床面で焦土の広がりを確認したためカマドの存在を気づいたものであり、袖も掘り飛ばしてしまった(破線は袖想定ラインを焼面から推定)。燃焼部幅は32cmと燃焼部がかなり狭くなる。煙道部は平面では検出できなかったため、壁から40cmほど離して南北トレンチを掘ったところ、その東壁断面で煙道の存在を確認した。このことから燃焼部が壁前面のみであり、トンネル状の煙道部のみ壁から突出する特異な形態のカマドとなる。煙道部は長さ50cmほどになり、煙道部の立ち上がりはトレンチ内に収まるもの。(トレンチで煙道口の正確な形状は不明、煙道口の想定を点線で示す)。煙道部床面は燃焼部と段差がなく、緩やかに下降し、煙道部中央から緩やかに上昇し、煙道口付近になると煙突状に急に立ち上がる形態となる。トンネル状の煙道部は燃焼部付近で幅40cm、高さが17cmほどの幅広いもので、埋土は燃焼部近くは焦土を多く含み、煙道口付近は焦土・炭がわずかに混じるもの。

出土土器(第53図12~15) 12・13は土師器甕である。12は強く外湾するII緑部で、II緑端部は外方につまみ出すもの。色は橙褐色。13は短く外折するII緑部で、II緑部内外には二次加熱痕・ススが認められる。外は黄褐色、内は橙色を呈する。

14・15は須恵器杯蓋である。14は口縁端部をナデで面取りし、外端部を外につまみ出したもので、天井部との境には弱い稜が認められる。口径13.0cm、器高3.5cm。色は灰色~黒灰色。15は端部を丸く取めた口縁部で、内面天井部には当て具痕がわずかに残る。口径13.8cm、器高3.5cm。胎土には細粒をやや含み、色は暗灰色。

出土土器から古墳時代後期後半の住居跡となる。



第55図 132号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

132号竪穴住居跡 (図版26、第55図)

2区東端中央に位置し、周囲には131・137住居跡が存在し、8号掘立柱建物跡に切られる。カマドを西壁中央に付設し、東西4.4m×南北4.9m、深さ10cmのほぼ正方形の住居となる。埋土は黄白色砂質土に暗灰褐色砂質土が混じる。床面では8基のピットを検出したが、P1～3・5が位置から主柱穴となると思われるが、P1は深さが浅く、自信がない。住居中央及び南壁～東壁において掘り込みを確認した。

カマド (図版26) カマド南に上層ピットが切り込んでいたため、左壁の残存状況が悪い。袖は住居の残りが悪いため、検出できなかった(掘り飛ばしたか)。奥壁から40cmほどの場所に細長い硬化面を確認した。この硬化面部分で幅70cmとかなり幅広い燃焼部を持つカマドである。奥壁中央から西に97cmの長さを測る煙道部は燃焼部床面から8cmの高さに位置し、先端まで幅が30cm弱の真っ直ぐ延びるものとなる。煙道部床面は先端に向かってわずかに上昇する。

出土土器 (第53図16～19) 16は布留系甕で、口縁端部を内上方につまみ出す。色は白黄褐色。

17・18は須恵器杯身。17は小形品で、口縁部をわずかに外反させ、端部はナデで面取りする。色は暗灰色。18は焼成が甘く、色は白灰色。19は須恵器高杯脚解部。外折する脚解端部は丸く収める。色は暗灰色。

出土土器から古墳時代後期後半の住居跡となる。

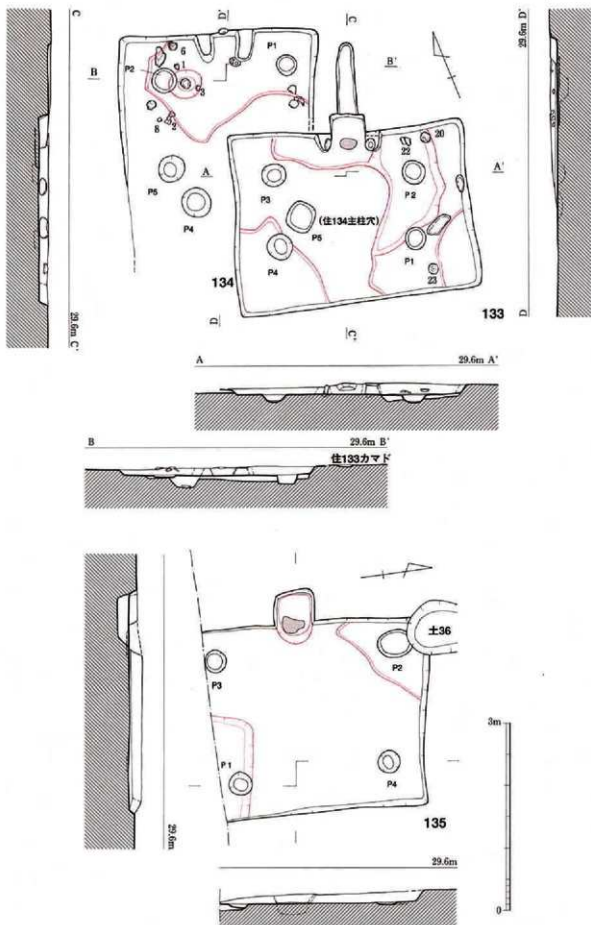
133号竪穴住居跡 (図版26、第56図)

133号竪穴住居跡は2区東端中央、8号掘立柱建物跡西に位置し、134号住居跡を切る。南北2.9m×東西3.9m、深さ20cmの長方形住居で、埋土は暗黄灰色砂質土に黄白色砂質土が混じるもの。北壁中央にカマドを付する。住居床面ではピットを5基検出し、P1～4は4本柱の主柱穴となるが、P5は位置から134号住居跡のピットである。住居西側では、北側に土師器杯身(20)、南側に須恵器杯身(24)と南北に相対する位置で出土したことから、意図的に置かれたものと考えられる。住居南西隅、北～東で住居掘り込みを確認した。

カマド (図版27、第57図) 住居北壁中央に付設する煙道部が長い形態のカマド。左袖には袖石が残存し、右袖には袖石掘り込みピットのみが残るが、ピット上部の広がりから、元々袖石は残存していたが、重機による表土剥ぎの際に引き抜いてしまったと思われる。137号住居跡と同じく、深さ10cmの掘り込みピットを掘って袖石下部を固定し、その後袖石外側を土で盛り、袖を構築したことがB-B曹7土層から分かる。左袖石先端部は欠けるが、137号住居跡から本来はもう10cmほど高かったと予想される。両袖中央で楕円形を呈する焦土の広がりを検出したが、支脚抜き取りピットは精査したが確認できなかった。この部分で袖間は53cmを測る。カマド燃焼部の平面形態は正方形を呈し、袖石中心部から奥壁まで48cmを測る。

煙道部は長さ114cmを測り、燃焼部床面から高さ8cmの位置から延び、燃焼部側で幅32cm、煙道部先端で幅20cmほどの先端部に向かって徐々に狭くなる。煙道部床面は先端部にむけて緩やかに上昇する。

出土土器 (図版104、第53図20～25) 20～22は土師器杯。20・21は口縁端部を内向きにつまみ上げたもので、体部～底部外面は手持ちヘラケズリを施す。色はいずれも黄褐色。21は口径13.2cm、器高4.0cmの完形品。22は低平な杯で、口径22.0cmを測る。外面底部にはタキ痕が



第56図 133~135号竪穴住居跡実測図 (1/60)

残るため、タタキの手持ちヘラケズリで調整することが分かる。色は白黄褐色～薄い橙色。

23は須恵器杯蓋で、大きく歪むもの。宝珠つまみはやや低くなり、かえりは受部端部がやや延びるもの。色は灰色。24は口径7.6cm、器高2.5cmの完形の小形須恵器杯身で、口縁部は打ち欠く。色は暗灰色。25は須恵器杯身で、口縁端部はわずかに外反させる。受部以下は灰が付着する。色は黒灰色。

出土土器から7世紀末の住居跡となる。

134号竪穴住居跡（図版26、第56図）

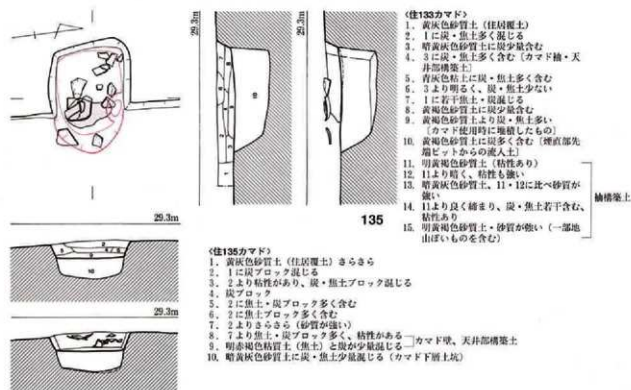
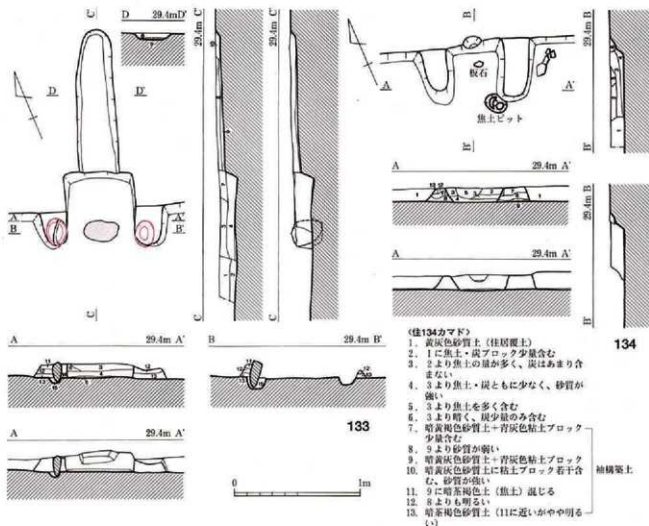
134号竪穴住居跡は2区東端中央、8号掘立柱建物跡西に位置し、133号住居跡に東側を切られる。住居南側は重機の表土剥ぎの際に下げすぎてしまい、南壁は下端も検出できなかった。南北3.5m以上×東西3.1m、深さ10cmの南北に長い長方形住居である。北壁中央に袖が短いカマドを付設する。床面ではビット3基検出し、133号住居跡P5は当住居跡の主柱穴と考えられることから、P1・3・5と合わせて、4本柱の主柱穴となる。埋土は黄灰色砂質土。住居北側で掘り込みとそれに伴うビットを確認した。

カマド（図版27、第57図）北壁中央に付設されたカマドで、右袖で51cm、左袖で44cm 壁から突出する、袖が壁から長く突出するタイプのカマドの中では、袖が短い部類に属する。深さ3cmと浅い焦土ビット（袖石掘り方ビットではない）が右袖先端部に接して存在することから、袖先端がカマド廃棄後に壊されたものではないことが分かる。焦土の明確な広がりも検出できない。奥壁から8cmほど手前の位置に図示した石は、厚さが1cm未満の薄い石であり、この1枚の石以外は図示する前に取り上げてしまったが、5枚ほど床面に貼り付けた形で検出した。検出状態から敷き詰めた状態ではなかったが、90号住居跡カマドからも同様の状態で出土（図示なし）したことから、火の使用に関係するものであることは間違いないであろう。奥壁中央で半円状の煙道部切り込みを確認した。燃焼部床面からの高さ8cmの高さに位置し、壁から6cm突出する。

出土土器（図版104、第58図1～10） 1・2は土師器高杯。1は外傾する口縁部と底部との境には弱い稜が付く。胎土は精良で、色は薄い橙色。2の脚部は弱く内湾する。脚柱部内外面はケズリを施す。色は黄褐色。3・4は土師器甕で、いずれも緩やかに口縁部が外反する。3の胴部外面は縦ケズリのちハケで調整。口縁部外面には黒斑あり。色は橙褐色。4は口径14.0cm、器高13.2cmを測り、内面には粘土接合痕が良く残る。外面にはススが付着。色は橙褐色。5は直立する口頸部から口縁部が外折する土師器壺。外面調整は摩滅のため不明で、胴部内面はケズリを施すが摩滅のため単位不明。胎土は精良で、色は橙色を早する。

6～9は須恵器杯。6は口縁部を弱く外反させる蓋で、外面天井部には「V」の中央に長い線を入れたヘラ記号を施す。口径11.6cm、器高3.7cmを測り、外面には薄く灰がかかる。色は暗青灰色。7～9は身で、8・9は口縁部を打ち欠き、7・9は外面に灰がかかる。7は底部はヘラ切りのちナデを施す。外面底部にはヘラ記号が1本のみ残るが、全形は不明。色は暗灰色。8は完形品で、底部はヘラ切り後、ナデ調整。色は灰色。9は外面底部に2本線のヘラ記号が残るが、全形は不明。色は灰色。

10はカマド内出土の弥生後期の小形脚付壺。長く延びる脚部で、端部は外につまみ出し、



第57図 133~135号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

やや上げ底になるもの。外面には黒斑と二次加熱痕が認められる。色は暗茶褐色～黒色。混入品。

出土土器から7世紀末の住居跡となる。

135号竪穴住居跡（図版27、第56図）

135号竪穴住居跡は2区東中央の南端、133・134号住居跡南に位置し、36号土坑（埋土から新しいものか）に住居北西隅を切られる。南側は調査区外であるが、西壁中央に造られたと思われるカマドから反転すると、東西3.1m×南北4m（推定）、深さ22cmの長方形住居になると考えられる。床面には主柱穴が4基存在するが、そのいずれも検出段階で図面・写真を取ってしまい、その後掘ったピットの正確な深さは記録していないため不明。埋土は暗黄灰色砂質土で、住居北西と南で掘り込みを確認した。古墳時代後期末の住居跡になるか。

カマド（図版28、第57図）住居西壁中央に位置したと考えられるカマドで、袖は確認できなかった（掘り飛ばしてしまった可能性が高い）。燃焼部北壁がやや広がる平面形態で、奥壁から50cmほどの位置で焼痕を確認した。この部分で燃焼部幅54cmを測る。燃焼部内では壺一個体が床面から浮いたバラバラの状態出土した（12）。カマド床面下にも焦土・炭が続くため掘ったところ、80×53cm、深さ28cmのカマド下層土坑となった。埋土からこのカマドに伴うものと考えられ、カマド設置前の湿気抜きなどの用途が想定されるか。

出土土器（図版105、第58図11～13）11は小形土師器甕で、口縁部の外反度は弱い。外面には二次加熱痕、口縁部内面には炭化物が付着する。色は橙褐色。12は大形長胴甕胴部で、カマド内出土。胴部下部は粗いハケ、胴部上部は細かいハケと異なる種類のハケ原体を使用しており、胴部中位では後者の細かいハケが前者を切る。外面にはスス、内面下部には炭化物が付着する。色は黄茶褐色～灰褐色。

13は須恵器杯蓋天井部で、天井部最上部はヘラ切りのちなデ調整。色は灰色。

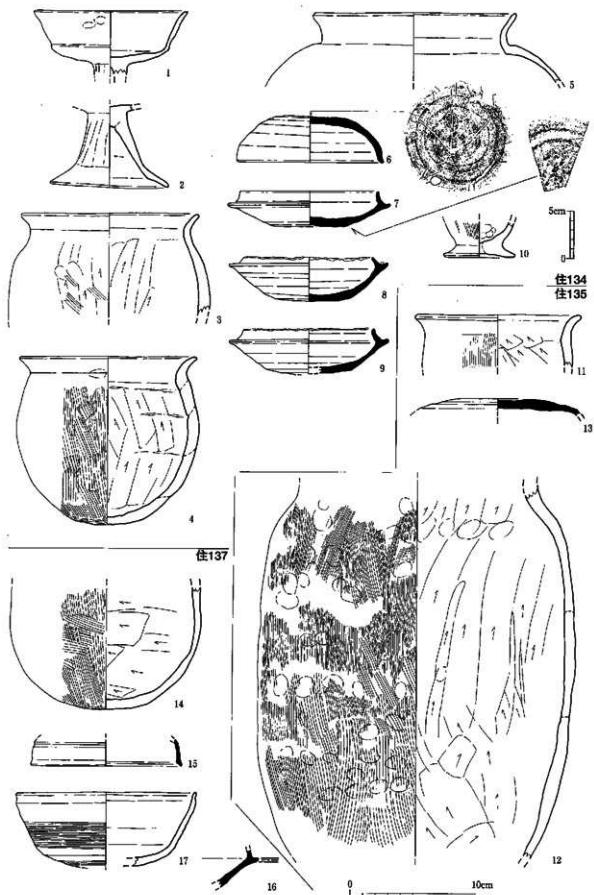
出土土器から古墳時代後期末の住居跡となるか。

136号竪穴住居跡（図版28、第52図）

2区中央やや東寄りの北側に位置し、129号住居跡の北側にあってこれを切る住居跡である。東側は掘乱により大きく破壊されている。壁の深さは15cmほどで、主柱穴と考えられる深さ20cmほどのピットを南東・北東の2箇所を確認した。出土土器は土師器の小片を確認したが、図示できるものはない。切り合い関係から、8世紀前半以降に位置づけられる。

137号竪穴住居跡（図版29、第59図）

137号竪穴住居跡は2区東南端、8号掘立柱建物跡南、135号竪穴住居跡東に位置する。住居形態は西壁部分で南北3.5m、東壁部分で南北3.2m、東西4m、深さ20cmの西壁部分がやや長い長方形住居跡となる。北壁中央に袖石、天井石も残るカマドを付設し、埋土は暗黄褐色砂質土。主柱穴は住居四隅に位置するが（P1・2・4・5）、柱穴位置が壁に近い。カマドに対する南壁中央には埋土が灰黄褐色砂質土の三角形のカマド対面土坑が存在し、南北0.8m×東西1m、深さ15cmを測る。北壁中央、西側で住居掘り込みを確認した。



第58圖 134・135・137号竪穴住居跡出土土器実測図 (10は1/4、他は1/3)

カマド(図版29) 北壁中央に位置する残りの良いカマドである。石製支脚がカマド奥壁から20cmのやや奥壁に近い位置に存在し、その根元を燃焼部側で幅12cm、厚さ4cmの粘土で固定する(支脚周辺のトーンで表す)。袖は右袖で35cm、左袖で22cm壁から突出し、両袖とも燃焼部側に袖石が残る。両袖石とも深さ15cmの掘り込みピットで固定しており、ピットに袖石を入れ固定した後、外側に土を盛り、袖とすることがC-C曹7土層から分かる。両袖石上端と接し、中央でVの字状に割



137号竪穴住居跡カマド復原写真(南から)

れた形の天井石を検出し、天井石下部は赤変するほどよく焼けた状態であった。カマドの焚口部分の寸法は袖石間50cm、焚口の高さは25cmを測る。燃焼部はこの焚口部分より20cmほど奥の支脚前面部に位置し、支脚固定粘土周辺とその右壁が赤変する(濃いトーンで示す)。天井石下の焚口では掻き出したと考えられる炭が広がった状態で検出し、この部分を薄いトーンで示している。

支脚部においても焚口部と同じ幅50cmで、奥壁でも幅は同じである。支脚も幅20cm、深さ6cmのやや楕円形の掘り込みピットで固定するが、袖石のものとは比べ浅い。このことから支脚周囲を固定する粘土は支脚掘り込みピットが浅いため、不安定となった支脚石を支えるためにこのような厚い粘土を施したと考えられる。煙道部は燃焼部床面から22cm高い位置から北に長さ1.1m延びる。煙道部幅は燃焼部側で27cm、煙道先端部で18cmと先端に行くにつれ細くなるもので、煙道部床面は先端に向けてわずかに上昇する。14はカマド内出土。

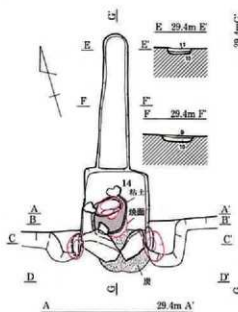
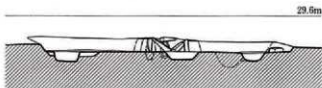
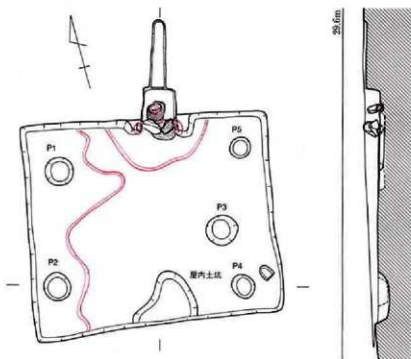
出土土器(図版105、第58図14~17) 14はカマド内出土の土師器底部~胴部片。内面は粗いケズリを施す。外面には二次加熱痕あり。

15は須恵器杯蓋で、口縁外端部を外につまみ出し、口縁下端部はナデで面取りしたため窪む。天井部との境には稜がほんのわずか残る。色は黒灰色。16は須恵器杯身。焼成は悪く、色は白灰色と瓦質を呈する。17の成形技法は須恵器であるが、焼成・色調は橙褐色~白黄褐色と土師器そのものである杯であり、おそらく須恵器の焼け損じのものか。口縁端部をわずかに外反させ、体部外面中位と底部には幅3mmの太い7条のカキ目を施す。焼成は土師器としては良好。

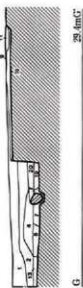
出土土器から7世紀初頭の住居跡となる。

138号竪穴住居跡(図版30、第60図)

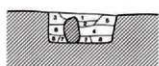
2区中央やや東寄りの南側に著しく切り合いを持つ住居跡の一つであり、最も西側の一群に属する。102号住居跡に南側半分を大きく破壊されており、また調査時に住居跡の範囲を誤認したために北壁の一部を破壊してしまったが、他の部分は良く残っており、西壁のほぼ中央部に突出型のカマドを確認した。主柱穴は住居跡の中央部に集まるように4基が確認され、いずれも15~20cmほどの深さであった。また、住居跡の壁は20cmほどが残されていた。出土土器や切り合い関係等から8世紀前半に属すると考えられる。



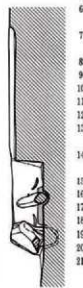
D 29.4m D'



A 29.4m A'

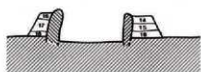


B 29.4m B'



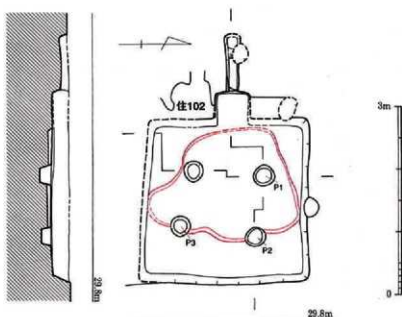
A 29.4m A'

C 29.4m C'

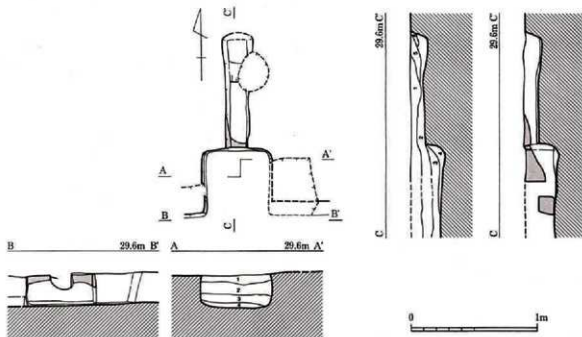


1. 暗赤褐色砂質土 (泥・無土少量含む)
2. 黄灰色砂質土 (泥・無土少量含む)
3. 褐色砂質土 (無土)+青灰色粘土ブロック
4. 暗赤褐色砂質土 (無土) に粘土ブロック少量混じる
〔カマド壁、天井部構築土〕
5. 2 に無土・泥が混じる
6. 暗赤褐色砂質土に無土がやや多く混じる
〔カマド壁、天井部構築土〕
7. 暗赤褐色粘土 (無土)+暗灰白色粘土
〔支脚固定粘土〕
8. 2 + 無土+泥ブロック (カマド使用時の地盤)
9. 暗赤褐色砂質土に泥少量含む
10. 9 より泥が多い
11. 9 に泥が10より多く混じる } 煙道加壁、天井部構築土
12. 4 より粘りが強く、泥があまり混じらない
13. 暗赤褐色砂質土に泥が多量に混じる
〔泥をかきだしたもの〕
14. 暗赤褐色砂質土に粘土ブロック混じる、
砂質が強い
15. 14 より強い
16. 15 より粘性がある
17. 暗赤褐色砂質土、砂質が強い
18. 16 より粘性がある
19. 8 より泥の量が多く、無土が少ない } カマド座敷後、
20. 4 より泥の量が多く、無土が少ない } 最中に混入した土
21. 灰褐色粘質砂

第59図 137号竈穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

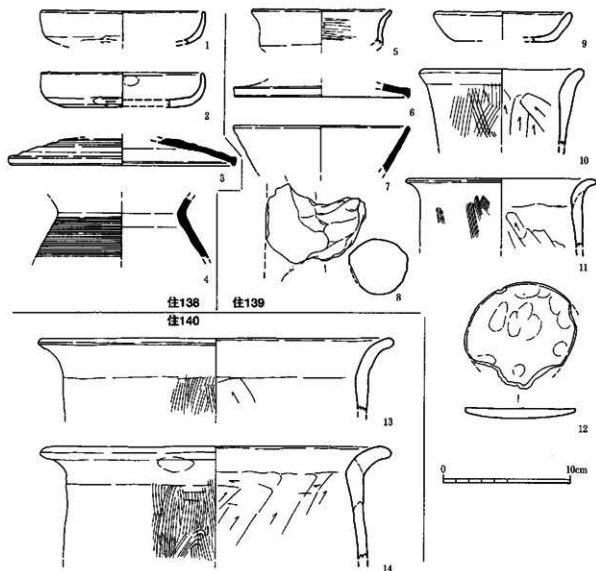


1. 灰黄褐色シルトに炭化物をわずかに含む
2. 暗黄褐色シルトに炭化物・焼土小片を少量含む
3. 暗褐色粘質土に炭化物・焼土を多量に含む(カマド構築土の崩落か)
4. 暗褐色粘質土に焼土を多量に含む(粘性高い)
5. 灰褐色粘砂質土に炭化物を非常に多く含む
6. 茶褐色砂質土に炭化物をやや含む



第60図 138号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

カマド (図版30) 西壁中央部に突出型のカマドを確認した。102号住居跡の調査時に検出に失敗して本カマドの北壁のほぼ全部と南側の袖部付近を大きく破壊してしまったが、その他の部分は良く残っていた。掘り込みは幅55cm、奥行50cmほどのほぼ正方形と推測される。側壁と奥壁の上部はススの付着により黒紫色に変色していた。燃焼部の埋土は大きく4層に分層でき、



第61図 138～140号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

上2層は住居跡の埋没時の流入土、第3層はカマド天井部の崩落土、最下層にはカマド床直上に堆積した灰層に炭化物と焼土小片が混入した層が堆積していた。奥壁からは煙道が95cmほど伸びており、深さは10～15cmほどが残存していた。

出土土器(第61図1～4) 1・2は小形の土師碗である。いずれも底部は平底で、屈曲して短く直立する口縁部を持つ。底部外面に板ナデ痕が認められる。口縁部は横ナデ調整。

3・4は須恵器である。3は口縁部が短く屈曲する杯蓋である。天井部から緩やかに湾曲しながら伸び、ボタン状のつまみを有するものであろう。4は短頸壺の頸部であろうか。胴部外面にカキ目を施し、頸部の屈曲より上は内・外面ともにナデ仕上げ。以上の資料は8世紀前半に位置づけられよう。

139号竪穴住居跡（図版30、第62図）

2区中央やや東寄りの南側に切り合いを持つ住居跡の一つである。108・130号住居跡と直接的な切り合い関係を有し、これらより新しい。109号住居跡を加えた一連の切り合い関係を有する住居跡群の中で最も新しい住居跡である。切り合い関係が激しかったために検出が難しく、当初108・130号住居跡を含めて一つの住居跡として発掘を進めたため、本住居跡の東・北壁の多くを失ってしまった。北壁のほぼ中央部に突出型のカマドを付設する。壁の残存深さはおよそ20cm程度である。主柱穴は四基確認され、深さはやや差があるが15cm～25cm程度を測る。中央部に不整形の床面掘り込みを検出した。出土土器と切り合い関係から8世紀中葉に属するものと考えられる。

カマド（図版31）北壁のほぼ中央部に幅70cm、奥行30cm程度の幅の広い長方形の突出部を掘り込み、10cm 弱の短い袖を付設したカマドである。住居跡の床面と同レベルで焼面を検出したが、その下層がさらに掘削でき、3cmほど深い部分でもう一つの焼面を検出した。下層の焼面が古く、これを埋めて新たに形成された焼面上層のものであると考えられる。埋土は細別8層、大別3層に分けられ、上層で焼土や炭化物を含まない1層が住居跡の埋没と同時に流入した埋土、下層の2～4層・6～8層がカマド天井・袖の崩落土、最下層の5層が古い床面を埋め戻した層である。

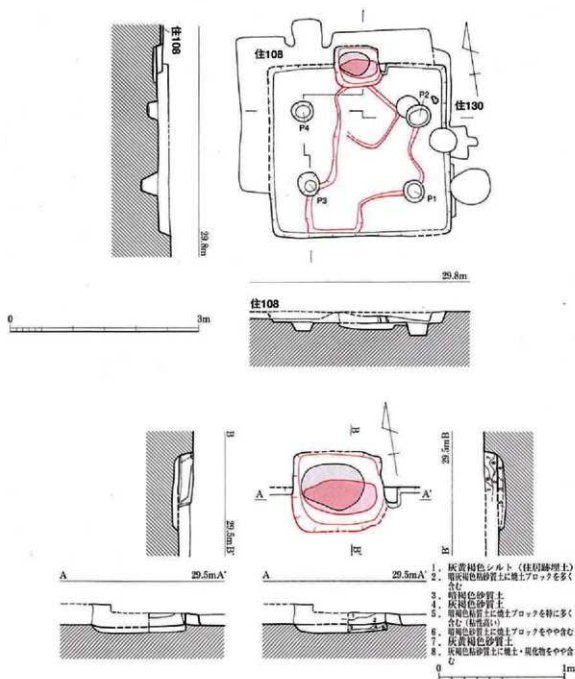
出土土器（第61図5～12）5・8～12は土師器である。5は高杯の杯部であろうか。屈曲部から直立してやや外反する口縁部までである。内面に横方向のヘラミガキが認められる。8は瓶の把手である。9は小形の皿である。底部はケズリ調整が施される。10・11は小形の甕の口縁部片である。丸底とバケツ状の底部、如意状に短く外反する口縁部を持つものであろう。12は小皿か。口縁部の立ち上がりがほとんどない、やや珍しい器形である。底部外面に使用痕が認められる。

6・7は須恵器である。6は口縁端部に短い屈曲部を有する小形の杯蓋である。口径は12cmを測る。7は杯の口縁部である。斜め上方に直線的に伸びる。以上の資料は、およそ8世紀中葉に位置づけられよう。

140号竪穴住居跡（図版31、第63図）

2区中央やや東寄りで、南側の調査区外との境界に検出された竪穴住居跡である。北側に110号住居跡に破壊される。本住居跡は削平が著しいため残存深さが極めて浅く、数cm程度しか壁が残っていないかったが、壁を観察したところ、遺構面の検出時に遺構面から30cmほどを重機によって削平しており、本来はもう30cmほど上までが残存していたことがわかった。（図版参照）ただし、この面では埋土と地山との土質の違いが不明瞭であり、遺構の検出は困難であったであろう。主柱穴は北東部のピットは深さが15cmほどあって候補としてあげられるが、南西部のピットは極めて浅く、このほかにも主柱穴と考えられるピットを検出することはできなかった。東壁でカマドを検出した。1/3ほどが調査区外にあるために規模は正確には把握できないが、長軸は3.2mほどを測り、幅はカマド部分で折り返すと4mほどとなる。出土土器と切り合い関係から、7世紀後半代の住居跡か。

カマド 住居跡の東壁に、突出型のカマドを検出した。カマドの右側の側壁と袖は、調査区外



第62図 139号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

にあって検出することができなかった。また、左側も袖部分がピットによって破壊されていた。突出部の掘り込み幅はおよそ60cmほどを測り、奥行は30cmほどを測る。当初、カマド本体は調査区外に存在していたが、カマドを検出したために急遽煙道部分まで調査区を拡大した。このため、この付近についてはほぼ本来の遺構面から調査を行うことが可能であった。カマド壁の残存高さは最も残りのよい部分で25cm以上を測り、埋土は細別12層、大別3層に分けられ、上層の1・2・9層は住居跡の埋土とほぼ共通し、下層の3～5・10・11層は焼土を多く含むカマド天井部の崩落層と考えられる。また、左側の側壁には厚さ5～10cm程度の粘土質の

貼り土を確認できた。カマド壁の補強を意図したものであろう。燃焼部の全面に赤色の堅く締まった土を確認した。地山が被熱により赤変したものであろうか。このほか、奥壁と側壁にススの付着による黒変を確認できた。奥壁の先端からは煙道が延びていた。80cmを測る煙道の残存状況は良好で、トンネル状に残る部分を良好な状況で検出した。またその先端には径20cmのピットを確認した。煙突の基礎部分であろう。煙道敷設時の掘込ラインは地山と区別できず確認できなかった。

出土土器（第61図13・14） 13・14はいずれも丸底とバケツ状の胴部を持つ土師器の甕である。如意状に外反する口縁部のみが残る。7世紀後半～8世紀代の資料であろう。

b. 掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡（図版32、第64図）

3号掘立柱建物跡は2区北西隅に位置し、81号住居跡を切る、2×2間の総柱建物跡。調査当初は建物の存在に気づかず、81号住居跡を先に掘削したため、P5・7・8はその影響を受け、下げすぎてしまった。建物主軸方位は北に対して42°西に振れる。東西方向の総長は420cm（14尺）で、柱間寸法は210cm（7尺）の等間となる。南北方向の総長は400cm、北から心々距離で190cm（6尺）、210cm（7尺）を測り、想定企画よりP9はずれている。柱穴掘形は径0.7m前後の円形で、深さは20cm前後である。柱穴内には径20cm前後の柱痕跡が認められるが、柱痕跡はいずれも上方が広がるため、柱は抜いたものと考えられる。柱痕跡周囲には暗灰黄褐色～暗褐色砂質土が堆積する。方位から古墳時代後期末の可能性が高い。

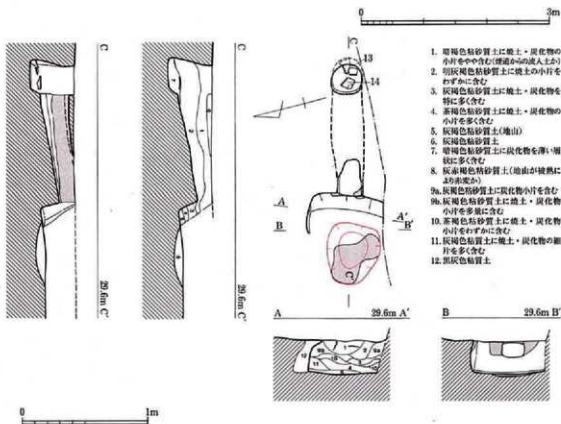
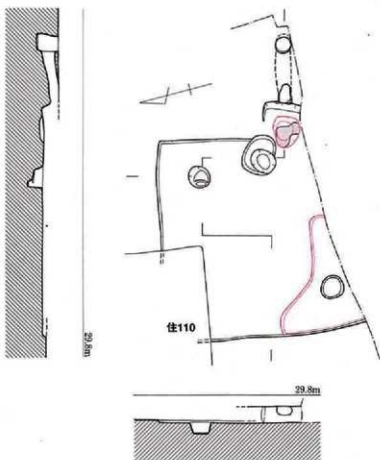
出土土器（第65図1～6） 1は低平な土師器杯身。外面には二次加熱痕あり。色は外淡橙褐色、内灰黄褐色。P7出土。2～6は弥生土器で混入品。2は低い三角突帯が付く壺胴部。色は灰黄褐色。P8出土。3・4は弥生中期壺口縁部。3は外面にスス付着。色は外黒色、内褐色を呈する。P5出土。4は跳ね上げ口縁部で、色は橙褐色。P8出土。5は後期壺口縁部で、外面にはスス付着。色は暗橙褐色。P7出土。6は鼓形の器台上部片で、色は灰黄褐色。P3出土。他に図示できないが、P4から土師器破片が出土している。

4号掘立柱建物（図版32・33、第66図）

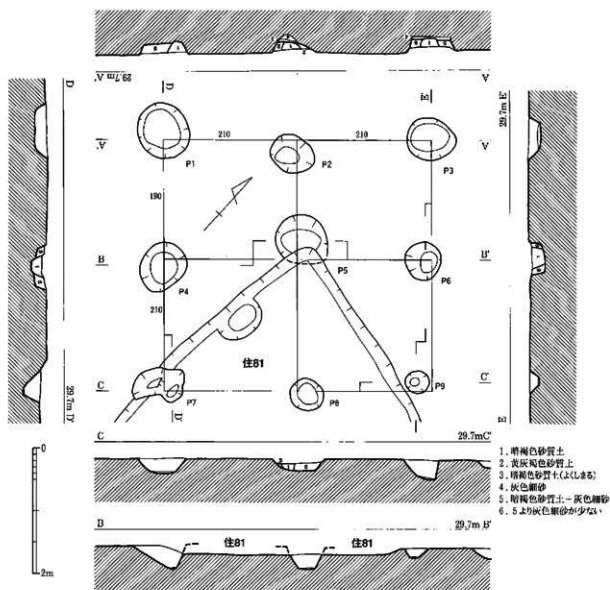
2区中央部やや東寄りの南側で検出した2×2間の掘立柱建物跡である。柱穴のうち南東端の一つは調査区内では検出できなかった。また、北東の柱穴が115号住居跡と切り合い関係にあり、本建物が新しい。平面形はいびつな正方形状を呈し、柱間距離は心々で60～75cmほどと大きく幅がある。柱穴検出時に埴土に柱痕らしき跡が認められたが、土層の検討の結果柱を抜いた際に表土が流入したものであることが判明した。出土土器と切り合い関係から、8世紀中葉～後半に位置づけることが可能であろう。

出土土器（第65図7～9） 7は土師器碗である。平坦な底部と短く内湾する口縁部を持ち、杯部が非常に浅い。口径は16.4cmを測り、大形である。

8・9は須恵器の杯蓋である。8はかえりを有する杯蓋の口縁部片である。かえりは比較的退化しており、口縁端部とほぼ同じ高さとなる。宝珠型のつまみを有するものか。径は13cmを測る。9は杯蓋の天井部である。口縁端部が欠けており、全体形は不明。これらの資料はやや



第63図 140号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



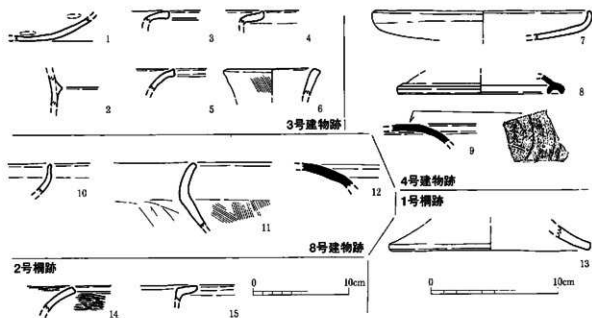
第64図 3号掘立柱建物跡実測図(1/60)

時期幅があり、7世紀後半～8世紀前半に位置づけられる。

6号掘立柱建物跡(図版33、第67図)

6号掘立柱建物跡は2区中央北端に位置し、周辺には121号住居跡、30・31号土坑が存在する。建物北側は調査区外のため、1×2間しか検出できなかったが、柱間から考えて2×2間の総柱建物跡の可能性が高い。建物主軸方位は座標北に対して33.5°東を向く。東西方向の総長が350cmで、柱間寸法は東から心々距離で178cm、172cmの6尺の等間、南北方向P2-3間は心々距離で160cmを測る。柱穴掘形は径0.5m前後の円形で、深さは30cm前後である。柱穴内には15cm前後の柱痕跡が認められ、この周囲には暗黄褐色砂質土が堆積していた。出土土器で図示できるものはない。

方位から3号掘立柱建物跡と同じ古墳時代後期末か。



第65図 3・4・8号掘立柱建物跡、1・2号窯跡出土上器実測図
(2~6・14・15は1/4、他は1/3)

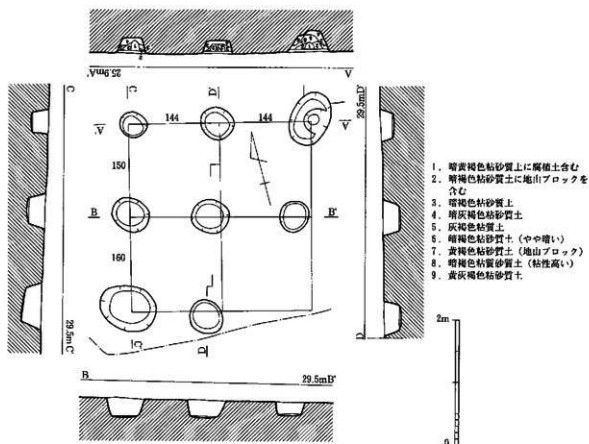
7号掘立柱建物跡 (図版33、第67図)

7号掘立柱建物跡は2区北東隅に位置し、131号住居跡を切る。2×2間の総柱建物跡になるが、カクランを受けており、建物北東部の柱穴3基が壊される。建物主軸方位は座標北に対して14.5°東を向く。東西方向の総長が446cmで、柱間寸法は東から心々距離で186cm(6尺)、220cm(7尺)、南北方向は総長454cmで、北から心々距離で210(7尺)cm、244cm(8尺)とばらばらで、建物平面形態も全体的に歪んだ形態となる。柱穴掘形は径0.5m前後の円形で、深さは20cm前後である。柱穴内には10cm前後の柱痕跡が認められ、P3・P4は上層から柱を抜いたと考えられる。柱穴内の柱痕跡周囲には暗黄褐色～褐色砂質土が堆積していた。出土土器で図示できるものはない。切り合い、位置から133・134号住居跡に伴う建物跡となるか。

8号掘立柱建物跡 (第68図)

8号掘立柱建物跡は2区東端中央に位置し、132号住居跡を切る、2×2間の総柱建物跡。建物主軸方位は北に対して4.5°東を向く。東西方向の総長が396cmで、柱間寸法は東から心々距離で236cm(8尺)、172cm(6尺)、南北方向の総長は404cm、柱間寸法は北から心々距離で214cm(7尺)、190cm(6尺)を測る。P5・9は想定企画よりずれる。柱穴掘形は径0.6m前後の円形で、深さは0.2~0.3m前後である。柱痕跡は認められず、覆土は暗黄褐色砂質土の単純埋土である。切り合い、位置から133・134号住居跡に伴う建物跡となるか。

出土土器(第65図10~12) 10は土師器杯で口縁端部をわずかに外反させるもの。内外面ナデ調整。色は黄褐色。P3出土。11は刺く外反する土師器甕口縁部で、外面には二次加熱痕あり。色は橙茶色～暗褐色。P6出土。12は須恵器杯蓋で、外面天井部頂部はヘラ切り後ナデ調整。色は灰色。P9出土。



第66図 4号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

c. 柵跡

1号柵跡 (図版34、第69図)

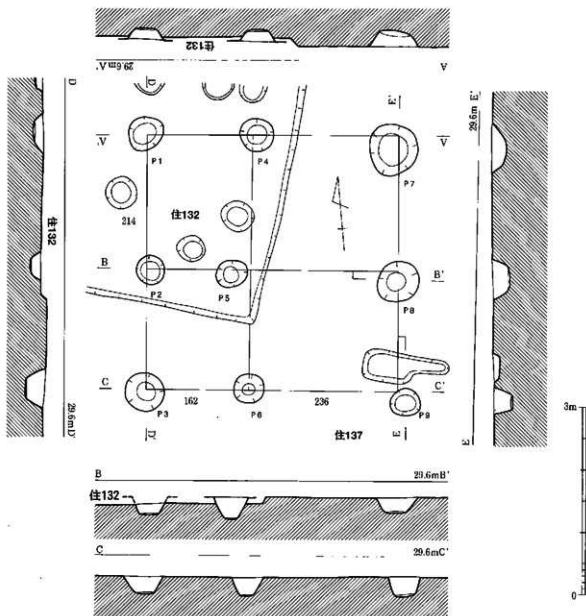
1号柵跡は2区北東隅、81号住居跡北に位置する。当初は掘立柱建物跡柱穴かと考え、周辺を精査したが伴う柱穴は検出できず、また2号柵跡と同一の柵跡になるとも考えたが、主軸がずれることから別の柵跡と判断した。2間規模の東西方向の柵跡で、主軸が43.5°西に振れる。総長は418cm (14尺)で、柱間寸法は西から心々距離で214cm、204cmの7尺の等間となる。柱穴掘形は径0.5m前後の円形で、深さは15cm前後である。柱穴内で柱痕跡と思われた灰褐色砂質土を確認したが、いずれも大きさがバラバラなことから、柱が抜かれた跡に上層に堆積した土が柱痕跡に見えたと考えられる。P6の灰褐色砂質土の在り方から径12cm前後の柱が想定される。

当柵跡は柱間寸法・方位などから3号掘立柱建物跡に伴う柵跡と考えられ、2号柵跡との関係は柱間寸法や主軸はずれるが、当柵跡に近い時期のものになる可能性が高い。

出土土器 (第65図13) 13は底径16cmを測る土師器高杯脚部。色は暗茶褐色～橙褐色。P6出土。

2号柵跡 (図版34、第69図)

2号柵跡は2区北東隅、81号住居跡北に位置し、東端のP1は16号溝に切られる。1号柵跡



第68図 8号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

で先述したように1号柵跡と同一の柵跡にならないと判断した。3間規模の東西方向の柵跡で、1号柵跡と同じく主軸が 43.5° 西に振れる。総長は544cm(18尺)で、柱間寸法は西から心々距離で194cm、180cm、170cmと若干ばらつきがあるものの6尺の等間となる。柱穴掘形は径0.5m前後の円形で、深さは15cm前後である。1号柵跡と同じく柱穴内で柱痕跡と思われた灰褐色砂質土は柱が抜かれた跡に上層に堆積した土と考えられ、P1・2の灰褐色砂質土の在り方から径10cm前後の柱が想定される。

1・2号柵跡は主軸が35cm(1尺)ほどずれるため、別遺構としたが、埋土や堆積状況、柱穴規模は非常に近く、何らかの関係するものと思われる。両柵跡とも3号掘立柱建物跡に関連する柵跡の可能性が高い。

出土土器(第65図14・15) 14は弥生小形壺口縁部。内外面にはミガキを施し、色は黄橙褐色。

P3 出土。15は口縁部がやや内傾する弥生小形甕か鉢口縁部で、内外面は摩滅が激しい。色は茶褐色。P3 出土。14・15は弥生上器であるが、1号櫛跡からは土師器が出土していることから、いずれも混入品と思われる。

d. 土坑

20号土坑 (図版35、第70図)

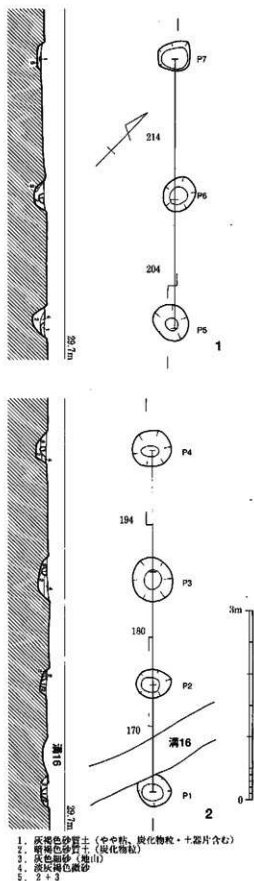
20号土坑は2区北東端、82号住居跡西に位置し、15号溝に切られる。15号溝は第1面で北側、第2面で南側を検出したために第2面の溝として報告しているため、当土坑も本来は第2面に属する遺構である。土坑西側は15号溝に切られるが、現状で長軸163cm×短軸144cm以上、深さ16cmの西側が狭くなる平面形態のもの。床面には弱い凹凸があり、東壁は緩やかな傾斜となる。当土坑下層の第2面で146号住居跡を検出し、146号住居跡出土土器も弥生中期後半と時期も同じであり、146号住居跡覆土上層はレンズ状堆積であったことから、住居跡上層を過って掘ってしまった可能性が高い。

出土土器(第71図1~4) 1は水平近くまで外折する弥生中期甕口縁部で、頸部下に2条の浅い凹線を施す。色は褐色。2は弥生中期鉢で、短く強く外折する口縁部を持つ。口縁端部はナデで面取りする。外面は工具ナデのちナデで調整。色は橙褐色。3は甕底部で外面はやや粗いハケで調整。色は灰黒色。4は器台上部片で、色は灰黄褐色。

土坑の時期は出土土器から弥生時代中期後半である。

21号土坑 (図版35、第70図)

21号土坑は2区中央やや西寄り、6号掘立柱建物跡上層に位置する。表上剥ぎの際に土器が集中して確認されたために、当土坑周囲のみ高く残して調査を行った。検出面が高いため、耕作の影響をかなり受けていたことから、遺構検出は非常に難しく、土器出土状況を参考にプランを確定したため、平面形にはやや不安が残る。長軸158cm×短軸149cm、深さ23cmの円形の土



第69図 1・2号櫛跡実測図 (1/60)

坑で、埋土は灰白色砂質土を呈する。床面は平らであり、壁の立ち上がりはあまり急でない。覆土から多量の土器が出土した。

出土土器（図版106、第71・72図5～20）5は弥生中期無頸甕で、口縁部外面以外はハケで調整。色は黄茶褐色。6は外面丹塗りの甕底部で、外面には縦ミガキを施す。生地は黄褐色。

7～19は弥生中期甕。7は口縁部を水平まで外折し、端部をやや跳ね上げるもの。外面にはススと黒斑が認められる。色は灰黄褐色。8・9は口縁部を水平まで外折し、口縁端部が下がる甕。8の口縁部内面はハケで調整。外面上位には炭化物痕が点在する。色は黄褐色。9は口縁外面端部にハケ工具による浅い刻目を施すが、残存する破片から刻目は全周しないことが分かっており、分割状に施された可能性もある。胴部内面は工具ナデで調整し、外面にはスス、内面には炭化物が残る。外は灰黄色、内は橙褐色。10は胴部が丸みを帯びた甕で、口縁端部を丸く収めるもの。内面頸部付近は工具ナデ痕が残る。色は黄褐色～淡黄褐色。11・12は跳ね上げ口縁甕。11は口縁部内面もハケで調整。色は灰黄褐色。12は端部がナデにより凹線状に窪む。外面にはススが付着。色は暗黄褐色。13は端部がナデにより強く窪むもの。色は黄褐色。14・15も跳ね上げ口縁甕。14の頸部内面には、ハケ工具始点痕や工具痕が残る。色は黄褐色。15は口縁部内面にも横ハケを施し、底部はわずかに上げ底になる。色は灰黄褐色。16～19は甕底部であり、17はやや厚い底で、19はわずかに上げ底になる。18は外面に黒斑、19は外面にススが認められる。いずれも色は灰黄褐色～黄褐色を呈する。

20は鉢で、器壁が薄い平底を持つ。胎上には細粒を非常に多く含み、色は外灰黄色、内黒灰色～灰色を呈する。

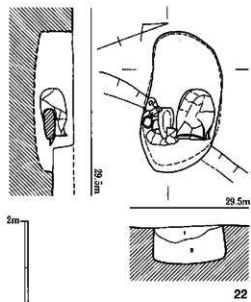
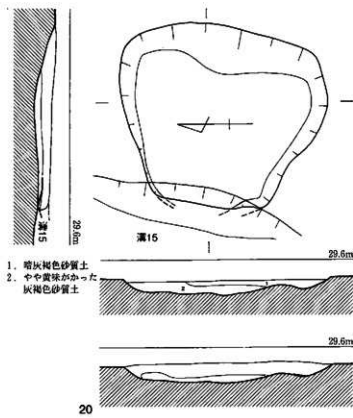
出土土器から当土坑の時期は弥生中期後半となる。

22号土坑（図版35、第70図）

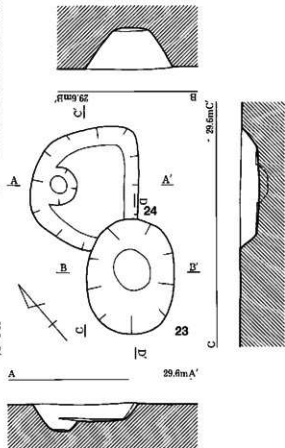
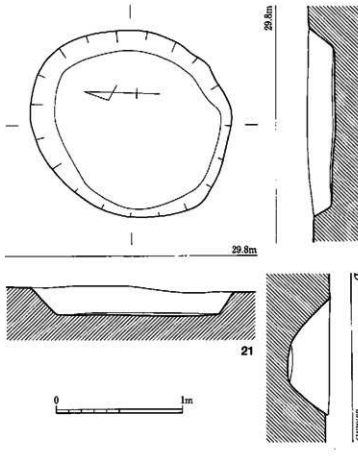
2区西側の南端にあり、96号住居跡と切り合い関係を持ち、本上坑が新しい。当初、切り合い関係を96号住居跡が新しいものと考えて調査を行っていたが、22号土坑から出土した土器が96号住居内まではみ出していたため、切り合い関係を訂正した。平面形は主軸を略東西方向にもつややゆがんだ長楕円形を呈する。掘削中に下層から弥生土器がまとまって出土しはじめたため、床面を掘り抜いて下層遺構を調査しているものと判断して調査を中断した。のちに第2遺構面を調査中に、本遺構の下層に当たる部分から弥生時代中期の24号溝を検出している。このため、土坑の正確な深さは把握できなかったが、上層から判断して表土から30cmほどに底面があったものと考えられる。西寄りの底面よりやや上層から、ほぼ完形の甕形土器（第72図24）を横位で検出した。床面直上におかれていたものであろうか。

出土土器（図版106、第72図21～24）21は弥生土器である。鋤先口縁甕の口縁部である。口縁部は比較的直立する。内・外面ともにナデ調整を行う。下層の24号溝に属する土器であろう。

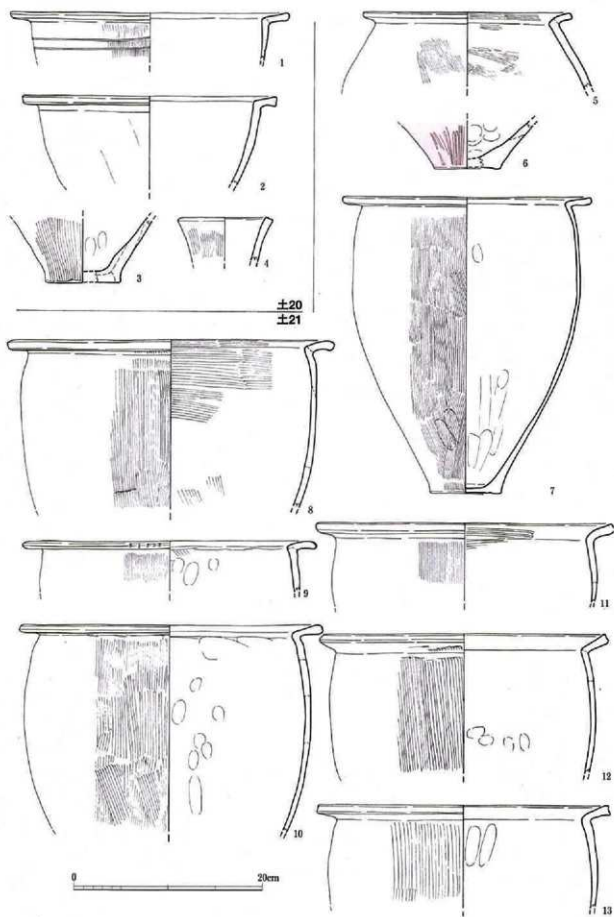
22～24は土師器である。22は高杯の杯部、屈曲部から上位の口縁部片である。外面ハケメ、内面には縦方向のヘラミガキ痕が認められる。23は小形の短頸甕である。胴部は球胴で、頸部ですぼまり、短く外反する口縁部を持つ。胴部外面はハケメ、内面はケズリ、口縁部付近は横ナデ調整を行う。24は大形の甕形土器である。甕状の底・胴部、如意状に短く外反する口縁部を持つ。胴部外面は指ナデ後ハケメ、内面はケズリ、口縁部は内・外面ともに横ナデ調整を施



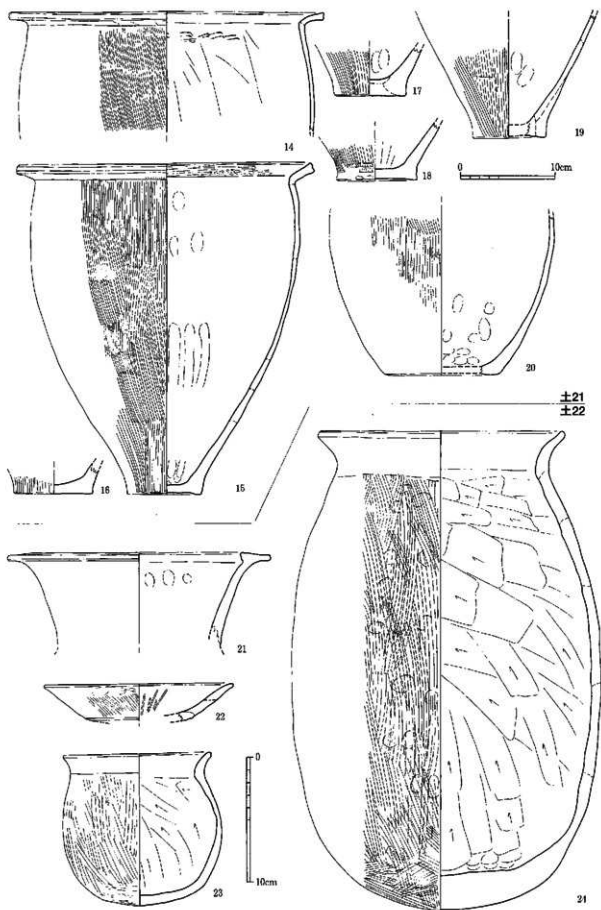
1. 暗黄褐色粘砂質土
2. 暗褐色粘質土に腐蝕土を含む



第70図 20~24号土坑実測図 (20は1/40、他は1/30)



第71图 20·21(1)号土坑出土土器实测图(1/4)



第72図 21(2)・22号土坑出土土器実測図(23・24は1/3、他は1/4)

す。これらはおおよそ7世紀代に位置づけられよう。

23号土坑（第70図）

23号土坑は2区東中央の住居集中区の138・139号住居跡に挟まれた場所に位置する。24号土坑を切り、長軸92cm×短軸69cm、深さ34cmの長楕円形を呈する土坑となる。壁の傾斜は緩やかに立ち上がる。

出土土器（第73図1） 1は土師器杯で、外面底部にはヘラケズリを施し、内面は黒化する。色は外灰黄褐色、内黒灰色。

24号土坑（第70図）

24号土坑は2区東中央の住居集中区の138・139号住居跡に挟まれた場所に位置する。23号土坑に南側を切られるが、現状で長軸96cm以上×短軸85cmの楕円形土坑となる。床面西側には深さ10cmほどのピットがあり、それ以外の床面は平らである。出土土器で図示できるものはない。

25号土坑（図版36、第74図）

25号土坑は2区中央、18号溝下に位置し、同溝を切る。長軸156cm×短軸126cm、深さ40cmを測り、東壁が突出する三角状の土坑となる。北・東側にはテラスがあり、床面は平らである。南北壁に比べ、東西壁は緩やかに立ち上がる。土層はレンズ状堆積になることから、徐々に覆土が堆積したものと思われる。出土土器で図示できるものはない。

26号土坑（図版36、第74図）

26号土坑は2区中央、周囲には118号住居跡、25～27号土坑、18号溝がある。長軸200cm×短軸149cm、深さ19cmの西側が広がる楕円形土坑。北西にテラスがあり、床面は平らである。東壁は急に立ち上がるものの、その他三方の壁は緩やかな傾斜となる。埋土は暗灰黄褐色砂質土。土坑西側で、土器・石が床面近くから出土した。

出土土器（図版106、第73図2～13） 2は弥生大形壺頸部片。頸部外面には三角突帯を付ける。外面にはスス付着。色は灰黄褐色～灰褐色。3は口縁部が欠損する無頸壺で、外面底部付近は縦ミガキ、その上は横ミガキを密に施す。内面中位以上は工具ハケ（ナデ）痕が残る。外面全体と内面頸部まで丹を塗布し、内面一部にも垂れた丹が残る。外面には黒斑・ススが認められる。生地は白黄茶色。

4～11は弥生中期壺。4・5は端部を丸く収めるもので、4の外面にはススが付着する。5の口縁端部は肥厚し、頸部内端部はやや突出する。4の色は外こげ茶色、内暗黄褐色～灰褐色。5の色は外褐色、内黄茶褐色。6～9は跳ね上げ口縁壺で、6・9は黒斑、7はスス、8の外面は二次加熱痕、内面に炭化物痕が認められる。6は胴が張らないもので、端部はナデにより凹線状に窪む。胎土には細粒・角閃石多く含み、色は灰黄褐色～黒灰色。7の胎土も角閃石多く含み、色は灰黄褐色。8・9は口縁端部の跳ね上げが強いもの。いずれも灰黄褐色を呈する。10・11は甕底部。10は薄い底部で、外面には黒斑あり。色は暗茶褐色。11は底部側の外面調整

を後に行うもので、外面にはスス付着。色は黄橙褐色。12は器台下部で、外面には二次加熱痕・ススが付着する。色は黄茶褐色。

13は布留系高杯脚部で、混入品。焼成前に外から3ヶ所穿孔したもの。脚柱部内面はナデ調整。色は黄茶褐色。

当土坑の時期は出土土器から弥生中期末の時期になる。



27号土坑完掘（南西から）

27号土坑（図版36、第74図）

27号土坑は2区中央、18号溝東に位置す

る。検出段階から土器の存在を確認でき、当初は竪穴住居跡になるかと考え掘り下げたために、南・北壁以外は壁上部を壊してしまった。長軸205cm × 短軸112cmの長楕円形を呈し、深さ18cmを測る。土坑床面は中央やや南の最も深くなる箇所に向かって緩やかに傾斜し、東・南壁も緩やかな傾斜となる。埋土は暗茶褐色砂質土。土坑内から土器が多く出土したが、いずれも床面から少し浮いていた状態で出土。

出土土器（図版107、第75図1～10） 1の頸部は締まり、鋤先口縁部が水平となる須玖Ⅱ式古段階の広口壺。頸部外面は緩ハケ調整。胎土には角閃石多く含み、色は黄褐色。

2～7は弥生中期甕で、2～4・5・7は跳ね上げ口縁、5・6は丸く収めた口縁端部が下がるもの。3は外面に二次加熱痕あり。色は灰黄褐色～橙褐色。4は胴が丸く張るもので、口縁端部を丸く収め、口縁上端部をわずかに跳ね上げる甕。外面には細かいハケを施す。色は外灰黄色、内は黄橙褐色。5は黄茶褐色。6の外面には黒斑があり、色は白黄褐色～灰褐色。7は鉢の可能性もある。外面にススが付着し、色は灰黄褐色。

8は口縁端部を跳ね上げた丹塗鋤先口縁高杯で、外面はミガキを施していたが摩滅し、内面には細かい横ミガキ、口縁上端部には分割暗文ミガキを施す。生地は橙褐色。9・10は鼓形の器台。9の色は淡黄茶褐色。10は上部径10.6cm、底部径13.5cm、器高15.7cmを測る。外面には黒斑・ススが付着。色は黄褐色～暗灰色。

土坑の時期は出土土器から弥生中期末半になる。

29号土坑（図版37、第74図）

29号土坑は2区中央北寄り、6号掘立柱建物跡東に位置する、長軸101cm × 短軸78cm、深さ4cmの残りが非常に悪い小形土坑。平面は長楕円形を呈し、床面はほぼ平らとなるが、壁の立ち上りの状況などは削平がひどいため不明。床面上からは土器がまとまって出土した。

出土土器（図版107、第75図11・12） 11・12は弥生後期甕。11はくの字に強く外折する口縁で、径7.2cmの小きな平底を有する。口径24.6cm、器高32.7cmを測り、口縁部外面以外の内外面はハケ調整。口縁端部はナデで面取りする。外面にはスス、内面には炭化物付着。胎土にはやや細粒を多く含み、色は暗灰黄褐色。12は胴が張らない小形甕。口縁部の屈曲にはまだ丸みが残り、胴部内面は上部はハケ調整、下部は工具ナデ、底部付近はナデ調整。外面にはスス・内面

には炭化物が認められる。口径13.5cm、器高14.5cm、底径5.0cm。色は灰黄褐色。

出土土器から弥生時代後期中頃（下大隈式古段階）の土坑。

30号土坑（図版37、第76図）

30号土坑は2区中央北寄り、121号住居跡西に位置し、31号土坑を切る。この付近は浮羽バイパス内で調査した堂畑遺跡の中で最も標高が高い場所となるため、土坑上部は大きく削平される。南東隅が突出する長軸235cm×短軸207cmの楕円形の上坑で、床面は北側が3cm前後一段下がり、深さが10cmほどになる。図示した土器は南東側は床面直上で出土しているが、北側は床面から少し浮いた状態で出土した。

出土土器（図版107、第77図1～4） 1～3は弥生後期型。1は緩やかに反外する口縁部端部は丸みを持ち、胴が張らない器形となる。外面下部は工具ナデのちナデ、内面下部もハケのちナデで調整。色は暗黄褐色～暗橙褐色。2の口縁部外面には指押さえ痕が残る。外面には二次加熱痕・ススが認められる。色は外黒～黄茶褐色、内灰黄茶褐色。3は丸みを帯びる底部。外面には黒斑あり。色は暗灰黄褐色。

4は底径5.8cmの小さな平底を持つ鉢。外面には二次加熱痕・黒斑が認められ、胴部内面は二次加熱により黒斑が薄くなる。径18cm、器高12.3cm。色は橙褐色。

当土坑の時期は出土土器から弥生時代後期中頃（下大隈式古段階）のもの。

31号土坑（図版37、第76図）

31号土坑は2区中央北寄り、121号住居跡西に位置し、30号土坑に切られる。30号土坑で先述したように、土坑上部は大きく削平される。土坑西側は30号土坑により壊されるが、現状で長軸223cm×短軸100cmの長方形を呈し、床面は北側に向かって緩やかに傾斜する土坑となる。南西側が一段下がる図となっているが、この窪みは深さ3cmと非常に浅く、床面の傾斜も考えると床面を少し掘り過ぎていると思われる。

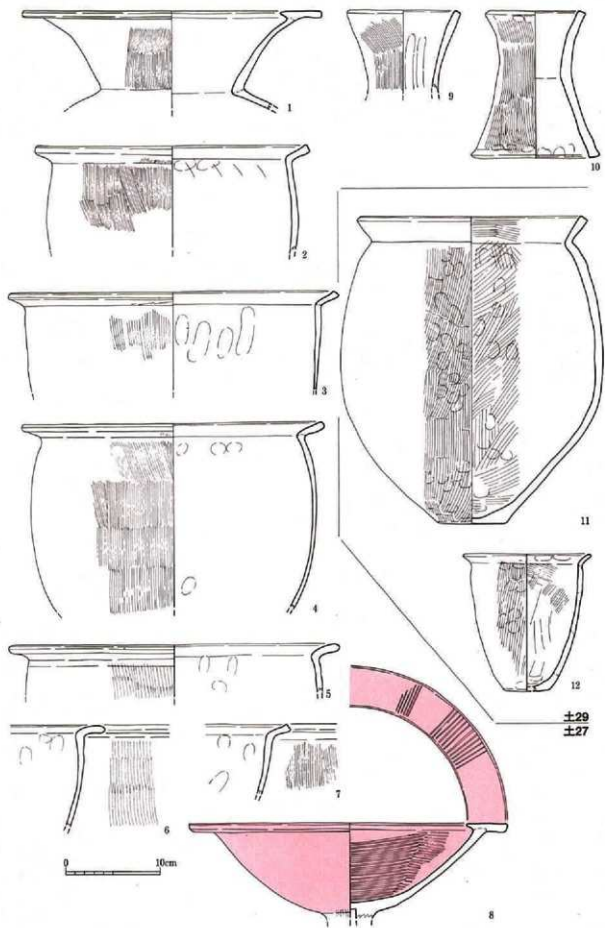
出土土器（第77図5） 5は弥生中期直口鉢で、内面はナデ調整、外面には黒斑あり。外は黄褐色、内は淡橙褐色。

32号土坑（図版37、第76図）

2区中央南側にあり、20号溝・120号住居跡と切り合い関係を持っており、これらより新しい。平面形はややゆがんだ隅丸長方形を呈し、南北1.2m、東西1mほどの規模を測る。底面はほぼ平坦で壁は直立する。土師器、須恵器の小片が出土したが、図示できる資料はなかった。切り合い関係から、7世紀初頭以降に位置づけられる。

33号土坑（図版38、第76図）

33号土坑は2区中央西の北端、19号溝東に位置する。調査当初は断面に柱痕跡状のものが見られたため掘立柱建物跡柱穴の可能性も考え、周辺を精査したが他の柱穴は確認できず、土坑として報告する。長軸130cm×短軸100cmの平面形は隅丸方形を呈するが、床面プランの主軸と平面プランの主軸が一致しないため、図では床面プラン主軸を土坑主軸としている。北側には



第75图 27·29号土坑出土土器实测图 (1/4)

テラスがあり、壁は急に立ち上がる。埋土は灰黄褐色砂質土。

出土土器（図版109、第77図6・7）6は弥生中期丹塗無頸蓋で、器表は二次加熱によりポロポロとなるが、外面頸部と口縁部内面にはミガキがわずかに残る。生地は橙褐色。7は丹塗高坏脚部で、坏内面底部が一部残存する。外面は細かい縦ミガキ、内面には絞り痕が残る。生地は橙褐色～黒色を呈する。

当土坑の時期は出土土器から弥生中期末になる。

34号土坑（図版38、第80図）

34号土坑は2区中央北やや西寄り、18号溝西に位置する。土坑床面西側で柱痕跡の可能性もあるピットを確認したため、掘立柱建物跡の可能性を考え周辺を精査したが、同じ建物跡柱穴と考えた33号土坑とは1間分としてはかなり離れており、また大型建物跡であるなら15cmほどの柱痕跡もかなり細く、他の柱穴も確認できなかったことから土坑として報告する。長軸120cm×短軸76cmの北西隅が突出する長方形土坑で、床面には当初柱痕跡と考えた深さ12cmの浅いピットがある。北・南壁では緩やかな傾斜となる。出土土器で図示できるものはない。

35号土坑（第80図）

34号土坑は2区東中央西寄り、128号住居跡西に位置する。土坑の東西壁と南西隅3ヶ所に径50cmほどのピットが切り込む。長軸225cm×短軸162cmの長楕円形土坑で、床面は北側に向かってわずかに傾斜するが、北側は一段深くなり、その東西はさらに一段深くなる。東側の最も深い部分で検出面から40cmを測る。覆土から磨石が出土（第266図59）。

出土土器（第77図8～13）8は土師器杯で、外面底部はヘラケズリを施す。色は淡橙褐色。9・10は土師器甕口縁部。9は内面に炭化物痕が残り、色は橙褐色。10は外面に二次加熱痕が残り、色は淡橙褐色～黄橙色。11は小形土師器甕把手である。焼成はやや甘く、色は淡橙褐色。

12は須恵器杯壺口縁部で、口縁端部は丸みを帯びる。色は灰白色。13は緩やかに外反する須恵器杯身口縁部。外面には灰がかかり、色は暗灰色～灰白色。

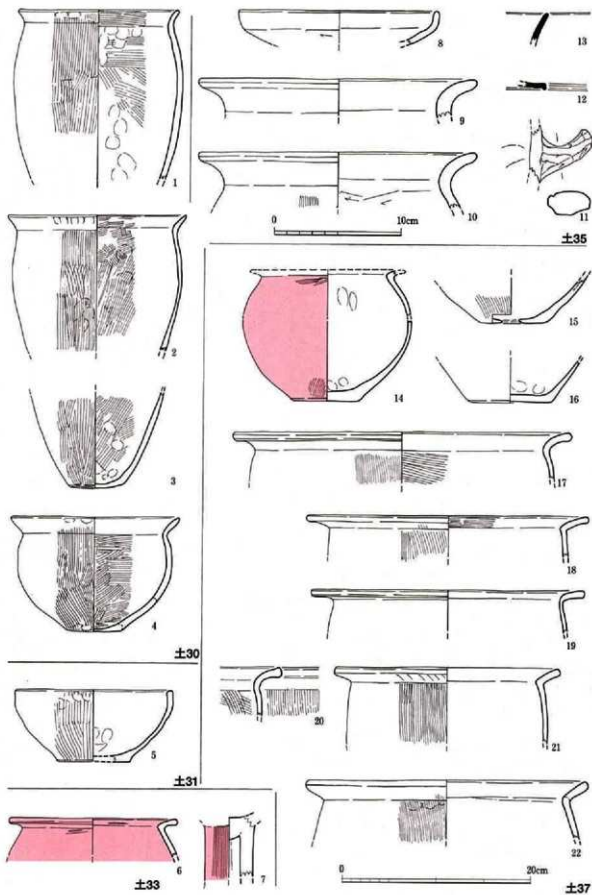
当土坑の時期は出土土器から8世紀後半になる。

36号土坑（第80図）

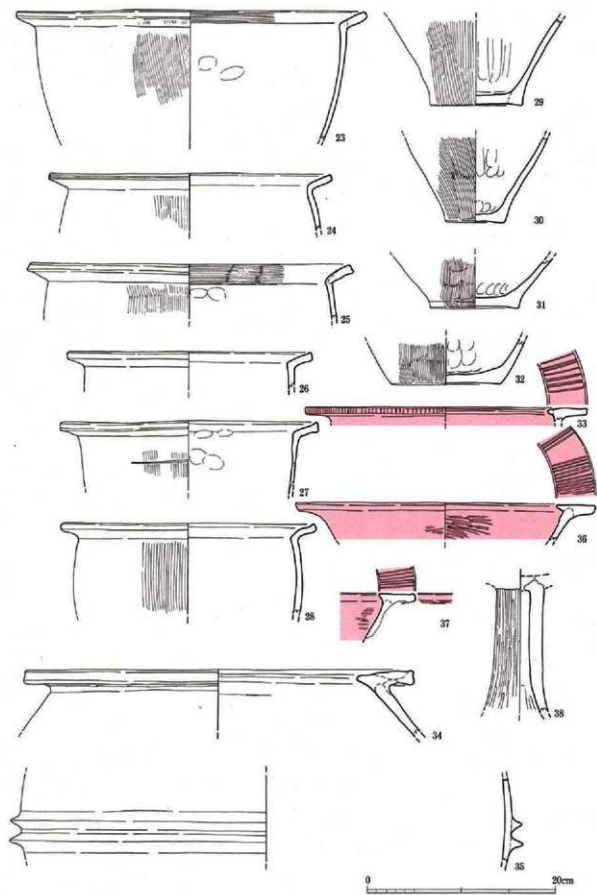
36号土坑は2区東中央やや南寄り、133・134号住居跡南に位置する。135号住居跡北西隅を切る土坑で、長軸119cm×短軸89cm、深さ26cmの長楕円形を呈する。床面は平らである。埋土は住居跡などの埋土と大きく異なる灰褐色砂質土であることから、かなり新しい時期のものと思われる。出土遺物は確認できなかった。

37号土坑（図版38、第80図）

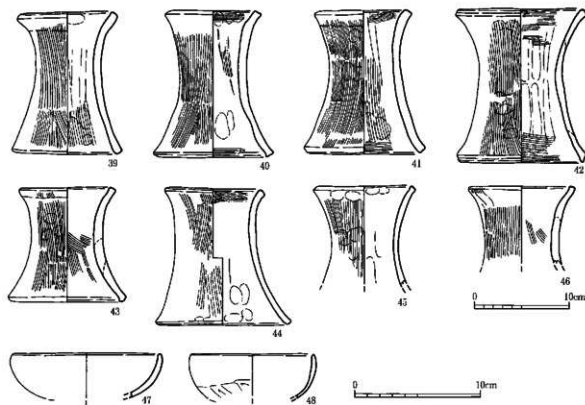
37号土坑は2区東中央南端、135号住居跡西に位置する。表土剥ぎの段階から多数の土器を確認していたが、埋土と地山の区別が非常に難しく、掘り過ぎてしまった部分もある。土坑床面は西側が1段下がり、1段下がった部分の東壁は緩やかに傾斜し、そこから掘り飛ばした東壁に向かってさらに緩やかに傾斜する床面であったと考えられるが、東壁付近は壁とともに床



第77图 30·31·33·35·37 (1)号土坑出土土器实测图 (8~13は1/3、他は1/4)



第78图 37号土坑出土土器实测图(2)(1/4)

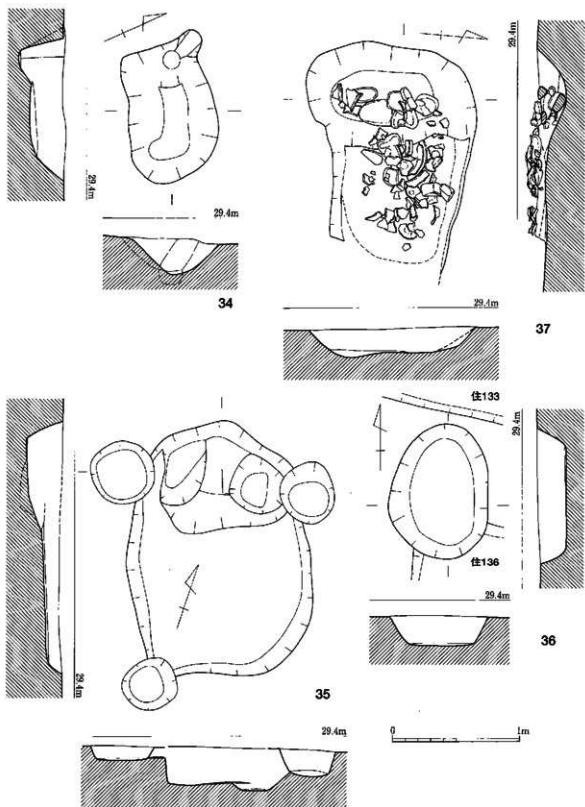


第79図 37号土坑出土土器実測図(3) (47・48は1/3、他は1/4)

面も掘りすぎてしまっている。東壁の位置は土のしみななどからおおよその規模は分かり、長軸190cm程度×短軸146cmの長楕円形土坑になると考えられる。深さは最も深い一段下がった西側で24cmを測る。埋土は黄灰色砂質土。土坑覆土からは西側に落ち込んだ状態の多量の土器・石を検出し、遺物は若干床から浮いて出土した。土坑の形状と遺物の出土状況は1区17号土坑、2区38号土坑と類似する。

出土土器(図版108、第77図14~22、78・79図) 14は弥生中期丹塗無頸壺で、口縁端部は欠損する。外面頸部下にはミガキ、外面底部にはハケが残る。底部外面には黒斑あり。生地は黄褐色。15・16は平底の壺底部。15の底部中央には焼成後に外から打ち欠き穿孔を施す。外面には二次加熱痕、内面には炭化物が付着。色は淡灰黄褐色。16は甕・鉢底部の可能性もある。内外面ナデ調整。底部外面は黒化する。色は黄褐色～暗灰茶褐色。

17~28は弥生中期壺口縁部である。17~20は口縁端部が下がるもの。17は頸部が丸みを帯び、内面頸部下はハケ調整。外面にはスガが付着。色は外灰黄褐色、内黄褐色。18の口縁部内面はハケ調整。色は白橙褐色～暗黄褐色。19の口縁部は水平近くまで外折するもので、口縁上部には二次加熱痕あり。色は暗橙褐色～黄褐色。20は口縁端部を跳ね上げ、頸部が丸みを持つ。頸部以下は内外面ハケ調整。21~25は口縁端部をナデで面取りするくの字形口縁甕。21の色は灰黄褐色。22・24は胴が張る器形となる。22の色は外黄褐色～黒灰色、内茶褐色～灰黄褐色。23は大型鉢の可能性もあるもの。口縁部内面もハケ調整。色は黄褐色。24・25は口縁端部がナデにより凹線状に窪む。24の色は淡橙褐色を呈する。25の口縁部内面はハケ調整。色は黄褐色。26~28は跳ね上げ口縁甕。26の色は淡灰黄褐色。27は外面頸部下のやや離れた位置に全



第80图 34~37号土坑实测图 (1/30)

周しない凹線を施す。外面は二次加熱により器表が荒れる。口縁部内面には黒斑あり。色は褐色～黄褐色。28は口縁端部を強く跳ね上げ、色は橙褐色。29～32は壘底部。30は外面に二次加熱痕、スス、31は外面にスス附着する。29は淡灰黄褐色、30は橙褐色、31の外灰橙褐色・内橙褐色、32は灰黄褐色～黒色を呈する。33は精製丹塗の鋤先口縁壘口縁部。口縁外端部には浅い刻目を密に施し、口縁上端部には2条を1単位とする暗文を施す。色は暗赤褐色。34・35は大形甕。34はやや内傾し、頸部内面が突出する口縁部で、口縁上端部にはススが附着。外頸部と内頸部下には粘土接合痕あり。色は黄褐色。35は高い三角突帯が2条残る甕胴部で、色は外灰黄色～黒色、内は淡黄褐色。

36・37は口縁部が水平の丹塗精製高坏。内外面はミガキ、口縁上端部は分割暗文を施す。深さのある坏部となる。生地は橙褐色。37は外面口縁部以下のほとんどは剥離するが、内外面ミガキ、口縁上端部は暗文を施したことが分かる。生地は暗灰黄色。38は高坏脚柱部で、坏部側には擬口縁が残り、杯部と脚部は粘土充填接合していることが分かる。脚柱部内面はナデ調整。胎土には多く細粒を含み、色は茶褐色～淡黄褐色。

39～46は鼓形器台。39・41は完形品で、39は口径10.5cm、器高15.2cm、底径11.6cm、41は口径10.2cm、器高15.2cm、底径12.7cmを測る。40～42は口縁部及び底部内面は横ハケ後ナデを施し、屈曲部が縮まらない44は口縁部のみ横ハケが残る。42以外の内面屈曲部付近は工具ナデのちナデ調整で、40・41・43・46はハケ痕が残る。39外面にはスス、40・43は黒斑、46は二次加熱痕が認められる。色は39黄褐色、40暗黄褐色、41茶褐色、42・44・45黄橙褐色、43灰黄褐色、46橙褐色～黄褐色を呈する。

47・47は土師器杯で混入品。47は摩滅のため内外面調整不明。48の杯外面底部は手持ちヘラケズリを施す。いずれも色は淡橙褐色～橙褐色を呈する。

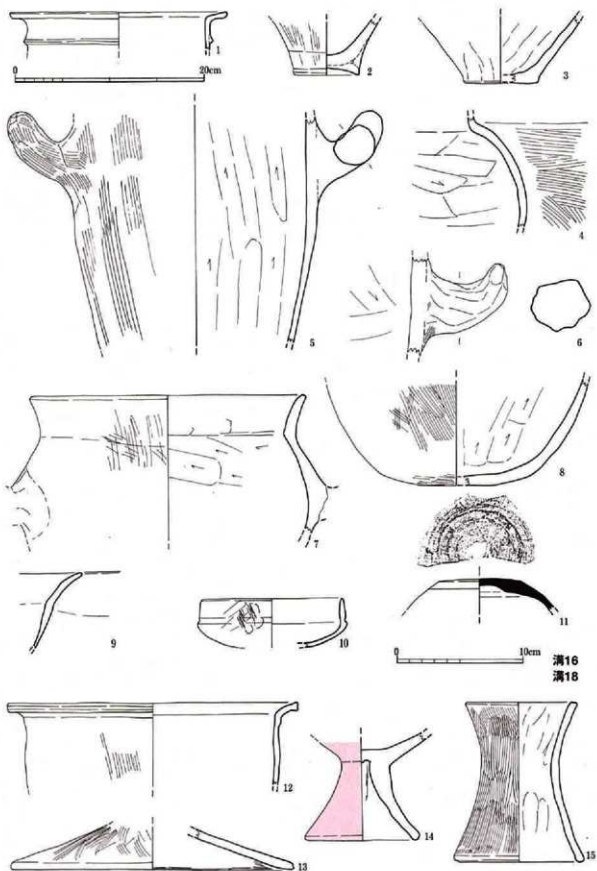
当土坑の時期は出土土器から弥生時代中期末になる。

e.溝

16号溝（第138図）

16号溝は2区西北端に位置するやや東に振れた南北溝で、2号槽跡を切り、15号溝に切られる。調査時は第1面の溝として調査したが、当溝を切る15号溝南は第2面で検出したことから15号溝は第2面の遺構とし、当溝は2号槽跡を切ることから第1面の遺構として報告する（遺構図に不都合が生じるため）。この付近から2区中央にかけては削平を受けており、本来は下層遺構である弥生時代の堅穴住居跡などを第1面で検出したことから、第1・2面が分りにくくなってしまっている。溝北側は調査区外であるが、現状で長さ11m以上、北側で幅100cm・深さ15cmほど、南側で幅50cm・深さ10cmほどの規模となる。床面は南側が高くなる。上層岡は溝中央で作成した。出土土器から当溝は古墳時代後期後半に属する。溝覆土から磨製石包丁（第264図29）、蔽石（第266図55）、石皿出土（第267図62）が出土。

出土土器（第81図1～11） 1～3は弥生土器である。1は甕の口縁部である。直角に外反する口縁部のみ資料である。口縁部直下に一条の突帯を付す。端部はわずかに跳ね上げ口縁の影響を受けるが四角く収める。口縁部径は23cmとやや小形である。2は甕の底部である。厚みは薄いが上げ底である。外面にハケ日痕を明瞭に残し、内面はナデ仕上げ。粘土帯接合痕が認



第81图 16・18号溝出土土器实测图 (1~3・12~15は1/4、他は1/3)

められる。3は壺の底部であろう。外面は板ナデ、内面は指により単位の長いナデを施す。色調は橙褐色を呈する。これらはいずれも須玖Ⅱ式の範疇に収まる資料群である。

4～8は古代の土師器である。4は壺形土器である。小片のため径は復原し得なかった。球胴部上半とよく締まる頸部付近のみが残存する。外面ハケメ、内面はケズリ。5～7は把手付甕であろう。5は径と傾きにやや不安があるが、図示したような形態と判断した。おそらく頸部がやや強くすばまる菌形の



16号溝土層（南から）

胴部を持つものか。外面ハケメ、内面はケズリ調整を施し、把手部分にもハケ目痕がよく残る。6もおそらく5と同様の器形を持つと思われる甕の把手部分のみの資料である。胴部外面はハケメ、内面はケズリを施し、把手部分は指ナデ。7は扁平な胴部形状を持つものであろう。把手部分は失われているが接合部が残る。外面はハケメのちナデ、内面はケズリを施す。外面にランダムな筋状の工具痕が残る。8は甕の底部である。菌形の胴部を有する大形甕であろう。外面にハケ目痕、内面にケズリ痕がよく残る。内面底部のみナデ仕上げ。9は椀または鉢の口縁部片であろう。器壁が薄く、椀か。半球状の胴部上半と、屈曲して緩やかに伸びる口縁部のみが残る。胎土が軟質で摩耗が著しい。10は須恵器模倣椀である。平坦な底部から湾曲して立ち上がり、口縁部はまっすぐ上に伸び、胴部との境界に沈線状の段を施す。内・外面ともに丁寧なナデ仕上げであるが、外面の一部にヘラ状工具で傷を付けた後ナデで消した痕跡が認められる。これらの資料のうち、5～8、10は7世紀代（前半か）の資料であろう。

11は須恵器の杯蓋である。おそらくかえりを有するタイプであり、天井部が平坦で、身の可能性も残る。天井部外面にヘラ記号を有する。天井部～肩部の外面には回転ヘラ切り痕が残る。7世紀初頭の資料であろう。

18号溝

18号溝は2区中央に位置し、25号土坑に北側溝中央を切られる。2区中央部は浮羽バイパス路線内における堂畑遺跡の中で最も標高が高い場所であったため、著しい削平を受けており、溝床面の深い部分を北・南に2ヶ所に分かれた状態で検出できたにとどまる。北側溝北の遺構面には溝床面の土のしみが残っており、北側に向かってさらに延びていたものと思われる。北溝は現長さ9.7m、幅100cm前後、深さ5cm、南側は西南隅をトレンチにより壊されるが、長さ2.1m、幅110cm、深さ10cmを測り、床面には凹凸があることが分かる。溝主軸はやや北西—南東方向に振れる。北溝南側床面にはビット3基が切り込み、このビットとその周囲から土器が出土した。南溝北のビットも溝に伴う可能性がある。埋土は灰褐色砂質土。出土土器から当溝は弥生時代中期後半の時期になる。

出土土器(第81図12～15) 出土資料はいずれも弥生土器である。12は甕形土器の胴部上半から口縁部にかけての資料である。口縁部は直角に外に開くが屈曲部は明瞭ではない。口縁端部上

面には強いナデを施してわずかに端部を跳ね上げさせる。外面はハケメ、内面はナデ仕上げ、口縁部付近は丁寧な横ナデ仕上げ。径は30.7cmを測る。13は壘蓋である。端部から中位までが残る資料であり、残存部はほぼ直線的に伸びる。端部はわずかに上方に湾曲させて四角く収める。外面にハケメ、内面にナデを施す。14は高坏である。坏部の底面、脚部との接合部分がやや薄いためやや疑問があるが、外面の全体に丹塗りの痕跡があり、弥生土器と判断した。全体に摩滅していて調整は不明瞭だが、坏部内面と脚部内面にナデ痕跡が確認される。色調は灰褐色でわずかに橙色を呈し、胎土は細砂粒を多く含んでそれほど精良ではない。精製器種とするにはためらわれる。15は器台である。外面ハケメ、内面ナデ調整を施し、端部は上下とも四角く収める。これらはいずれも須玖Ⅱ式の範疇でとらえられる資料群である。

19号溝

19号溝は2区中央北端西寄りに位置する南北溝で、周辺には88号住居跡、33号土坑が存在する。2区中央部は浮羽バイパス路線内における堂畑遺跡の中で、最も標高が高い場所であったため削平が激しく、当溝も長さ7.2m、幅44cm、深さ3cmしか残っていない。出土土器で図示できるものはない。

21号溝

21号溝は2区東中央南西寄りに位置するやや北西側に振れた南北溝で、103・104号住居跡に溝北端を切られる。現状で長さ7.6m以上、幅70-110cm、深さ15cm前後を測る。溝北端は4基のピットに切れ、104号住居跡床下では溝を検出できたものの（深さ2cmほど）、103号住居跡では住居床面の方が深いため、全く検出できなかった。103号住居跡北側の102・138号住居跡でも溝の痕跡は確認できず、また138号住居跡北側までは延びないため、全体の規模・形状は不明。溝南側では焼石が複数まとまって出土した。出土土器で図示できるものはない。

(2) 2区第1面ピット・遺構面

ピット出土土器（第82図）

1は弥生中期広口壺口縁部。口縁端部はナデで凹線状に窪む。外面は縦ミガキ、内面は横ミガキを施す。色は黄褐色。2は口縁部が短く外折する甕で、口縁上端部は窪む。外面にはスス附着。色は黄橙褐色。3・4は弥生中期高坏坏部でいずれも水平で短い鋤先口縁を持つが、口縁内面端部の突出度は弱い。内外面にミガキを施す。3は黄橙褐色、4の外橙褐色、内黄褐色。5は鼓形の器台下部で、色は黄褐色。

6は土師器杯で、底部はヘラ切りのちナデを施す。色は淡褐色。

7は須恵器杯蓋天井部で、天井部頂部外面はヘラ切りのちナデを施し、ヘラ切りの際に端に残った粘土塊あり。口縁部との境には工具による浅い凹線が廻り、内面天井部には厚い灰が認められ、天地反対に焼成したことが分かる。胎土には細粒をやや多く含み、色は青灰色。8は須恵器大形甕頸部～胴部片。頸部～胴部で上下重なっている部分は、接合できなかったが調整状態や器形から重複する部分を示している。頸部～胴部外面は平行タタキのち縦タタキを一部位施し、内面の頸部付近は同心円文状の当て具痕のち平行タタキを使用。胴底部近くの外面は円

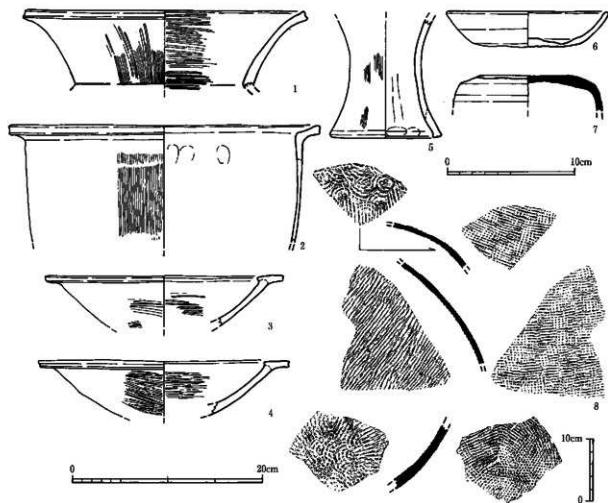
形状にタタキを施し、内面は同心円文状の当て具痕のち平行タタキを行う。色は外赤褐色、内灰褐色を呈する。

遺構面等出土土器（図版109、第83～87図）

1～8は弥生中期壺である。4・5以外は鋤先口縁となる。1・3は口縁内端部の突出が弱い、鋤先が退化気味になる口縁部。1の口縁部は水平となる。色は灰黄褐色～橙褐色。2は口縁上端部が窪み、頸部は締まるもの。口縁部外面にはススが付着し、内面には横ミガキが残る。色は橙褐色。3は直線的な口頸部で、口縁部は外傾するもの。色は暗灰色。4は直口広口壺口縁部で、頸部外面には三角突帯を付ける。口頸部外面は突帯を貼り付ける際の工具痕が残る、口縁部外面はナデ調整。色は灰黄褐色～茶色。5は大形直口壺で、頸部外面には三角突帯を貼り付ける。胴部外面は直線的なナデを施し、口頸部・肩部内面には工具痕が残る。口縁部内外面には黒斑があり。胎土には角閃石を多く含み、色は黄褐色～黒色を早する。6～8は外湾する口頸部の壺。6は外傾する口縁部内外面はハケのちナデ調整。外面頸部には三角突帯を貼り付ける。外面全面、内面頸部以上は丹塗を施す。7・8は口縁上端部を跳ね上げるもので、7の外面にはススが付着し、8の外面には黒斑あり。7の色は灰黄褐色～黄橙褐色。8は頸部外面に三角突帯を貼り付け、肩部外面は粗いハケで調整。色は黄褐色～黄橙色。9は壺蓋で、対角線状に2ヶ所ずつ（計4ヶ所）焼成前に外から穿孔する。内外面工具ナデのちナデ調整。天井部内面は工具絞り痕が残る。色は灰黄色。10は強く張る小形壺胴部で、胴部最大径箇所には三角突帯を貼り付ける。色は灰黄褐色～灰色。

11は弥生中期甕蓋。色は黄橙褐色。12～31は弥生土器甕。12・13は短く強く外折する跳ね上げ口縁甕。12の外面にはススが付着。色は灰黄褐色～褐色。13の内面にはハケかキズか区別できない痕跡が残る、色は灰黄褐色を呈する。いずれも2区中央から出土。14～16は口縁端部がやや下がるもの。14は口縁上端部が窪む鋤先口縁甕で、色は灰黄褐色を早する。15の色は淡橙褐色～橙褐色。16は口縁上端部にはハケ工具による刻みが3ヶ所残存するが、全周しない。外面にはススが付着。色は褐色。17～20は跳ね上げ口縁甕。18は口縁端部がナデにより凹線状に窪む。胎土には細粒を多く含み、色は灰黄色～黄褐色。19は頸部からやや下がった位置に三角突帯を貼り付ける。外面にはスス付着。色は外褐色、内は黄橙褐色。20～22は胴が張る器形となる。20は内面が黒化する。色は白黄褐色～黒色。21は短く強く外折する口縁部を持ち、色は橙褐色～灰色。22の色は黒灰褐色。

23～26は弥生中期甕底部。23・24は外面にスス、内面に炭化物が付着。25・27は黒斑あり。23の底部内面には工具痕が残る。色は橙褐色～黒褐色。24は外面が二次加熱により剥離するもので、色は黄茶褐色～こげ茶色。25の色は暗黄褐色。26の色は褐色。27は後期中頃の甕底部。色は外灰黄褐色、内茶褐色。28は後期大形甕から剥離した突帯。突帯端部にはハケ工具による刻目を密に施す。甕との接合面にはハケ調整を行い、貼り付けやすくする。色は黒灰褐色～黒色。29はやや大形鋤先口縁部で、色は灰黄褐色。30は胎土に細粒を多く含む鋤先口縁大形甕で、色は灰黄褐色。31は口縁部が内傾する大形甕で、胎土には細粒を多く含み、色は黄橙色を呈する。32は弥生中期甕片に鋭利なドリルで外から穿孔したもので、使用形態は不明。色は褐色。33は低脚の高環脚部か。坏部底面は残存し、坏部の割れ口は掘口縁となる。脚部内外面は



第82図 2区第1面ビット出土土器実測図 (6・7は1/3、8は1/6、他は1/4)

ナデ調整。色は黄褐色～黒色。胎土は弥生時代もの。34は外傾する高杯口縁部。口縁上端部をわずかに跳ね上げ、口縁上端面には17条ほどを1単位とする分割暗文を施文し、内外面はミガキと丹塗りを施す。内面にはスガが付着する。生地は暗褐色。

35・36は土師器杯である。35は115号住居跡付近遺構面出土で、底部にはヘラ切り痕が残る。色は橙褐色。36は底部をヘラ切り後ナデ調整。口径12.0cm、底径7.0cm、器高3.2cmを測り、色は淡黄橙色。37は土師器皿で、口径14.0cm、底径9.4cm、器高1.6cmを測り、外面には黒斑あり。色は橙色～白黄橙色。

38は布留系高杯杯部で、口縁部と杯部下部との境には稜が付く。口縁部内外面にはやや雑なミガキを施し、杯部下部外面にはケズリのちミガキを施す。色は黄褐色～赤茶色。39は吉備系高杯杯部で、杯下部との境には突帯を貼り付ける。内外面は細かいミガキを施す。色は橙褐色。40は口径14.4cm、底径11.4cm、器高11.0cmを測る土師器高杯で、杯部は口頸部との境に稜が付く、口縁端部はやや内向きにつまみ出したもの。杯部外面底部はヘラナデ、脚柱部内外面はヘラケズリを施す。色は黄橙色。41・42は器種不明土師器。41は上部割れ口に剥離痕が認められることから脚部と考えられる。内外面は横ナデ調整。焼成はやや甘く、胎土は精良、色は黄橙色を呈する。42は上下が生きているもので、側面には粘土剥離痕が認められることから杯部

と脚部の接合部片になるか。胎土は精良で、色は白黄褐色。

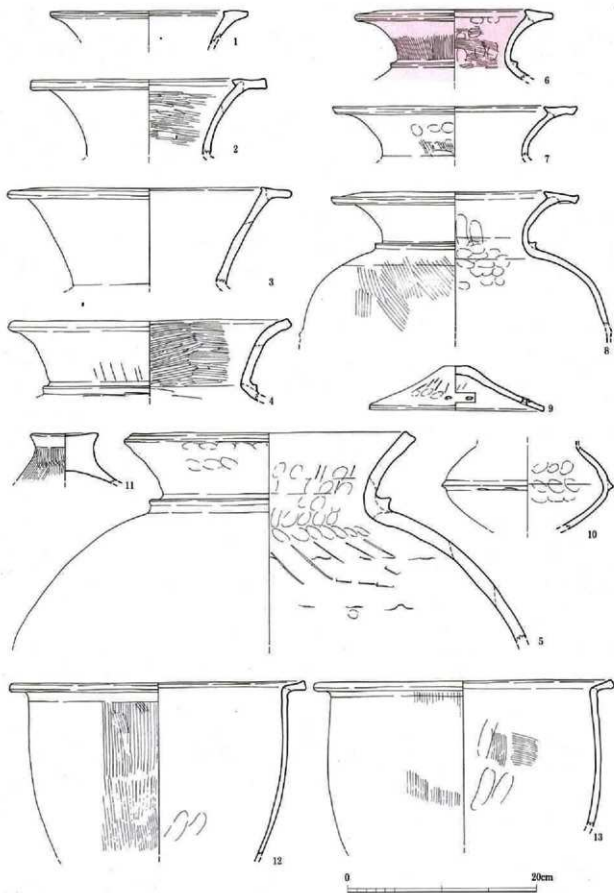
43は脚付小形丸底壺で、外面にはわずかにミガキが残る。杯部外面には二次加熱痕・スス、内面には炭化物が残る。脚は低脚になると考えられ、脚部内面はミガキ調整。胎土は精良で、色は外白黄褐色～灰褐色、内こげ茶。44は小形丸底壺で、内外面はミガキ調整。焼成後に全面炭化したため、色はこげ茶～黒色を呈する。

45～50・52～54は土師器壺である。45は布留壺で、外面頸部からやや下がった位置に凹線があり、全周するものか。色は外灰褐色、内黄褐色。46は強く外湾する口縁部で、115号住居跡付近遺構面出土。色は淡橙褐色。47・52～54はいずれも内面頸部までヘラケズリを施す。47・53の内面頸部は横ケズリのち縦ケズリで調整する。47の外面には二次加熱痕がある。色は茶褐色。48は調整が良く残る小形壺底部で、外面にはススが付着する。色は外黄茶褐色、内こげ茶色。49は壺底部で、色は外暗褐色、内は淡黄褐色。50は外面が二次加熱により器表が荒れたもので、内面には炭化物が付着する。色は外灰黄色～茶褐色、内は橙色。51は甌底部か。底部端部が細いことが気になるが、底部端部は横ヘラケズリを施すため、甌と判断した。色は灰褐色～橙褐色。52は肩部内面最終調整が縦・横方向両方見られる珍しいもの。色は淡橙褐色。53は短く太い口縁部で、色は黄褐色。54の外面は二次加熱痕が残る。細粒多く含み、色は茶褐色～灰茶色。55は山陰系鼓形器台下部で、屈曲部上下には突帯状の鈍い稜が付き、器台上部との割れ口は擬口縁となる。外面はハケのち部分的に集中するミガキ、器台下部内面は縦ハケ、器台上部内面はミガキを施したもの。生乾き状態で外から4ヶ所穿孔。色は褐色。

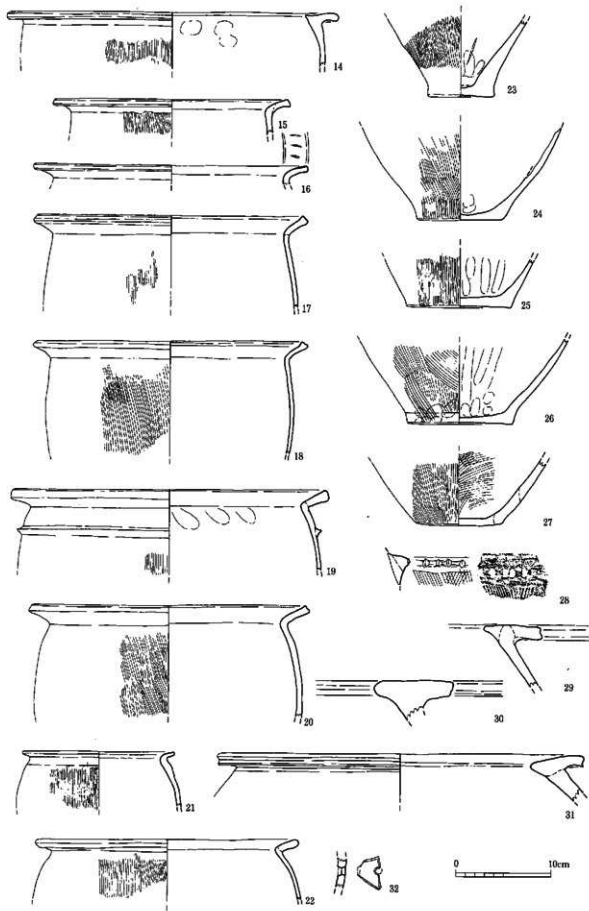
56～69は須恵器杯蓋。56・64・65は外面が灰かぶり、胎土は57・58・63・66～68がやや細粒を含み、色は56・58～60・65・69が青灰色～灰色、57・62～64・67が暗灰色～黒灰色、61が灰褐色、66は外が橙褐色、内が橙色となる。56は口縁端部をわずかに外反させるもの。天井部外面には2本線のヘラ記号があるが、全形は不明。57は104号住居跡付近遺構面出土。58は天井部外面に「×」のヘラ記号あり。内外面は回転ナデによる鈍い凹凸が顕著。59は口縁端部をわずかに外反させるもの。外面にスス付着。60は天井部外面に「×」のヘラ記号あり。61は口縁内端部が凹線状に窪む。62は天井部外面に「×」のヘラ記号あり。63の天井部外面には「人」状のヘラ記号あり。64は口縁端部をわずかに外反させ、天井部との境にナデにより2条の凹線を巡らす。天井部にはヘラ切り後、「×」のヘラ記号を施す。65は口縁端部をわずかに外反させ、天井部に「×」に横線を一本足したヘラ記号を刻む。66・67はかえりの付く小形蓋。66のつまみは欠損する。焼成は悪く、赤焼け状態である。67は丸いつまみが付く蓋で、天井部外面には三股に横2本の線が入るヘラ記号を施す。68・69は嘴状の口縁部を持つ杯蓋。68の口縁端部は外反し、天井部外面にはヘラケズリが残り、やや低平な宝珠つまみが付く。69の天井部外面はケズリのちナデ調整。つまみが付くかどうかは不明。

70・71は天地に白信がないもので、杯蓋の可能性もあるもの。70は底部に1本線先端が3股に分かれる形のヘラ記号を施す。色は青灰色。71は底部に3股のヘラ記号を施す。胎土には細粒をやや多く含み、色は白灰色。

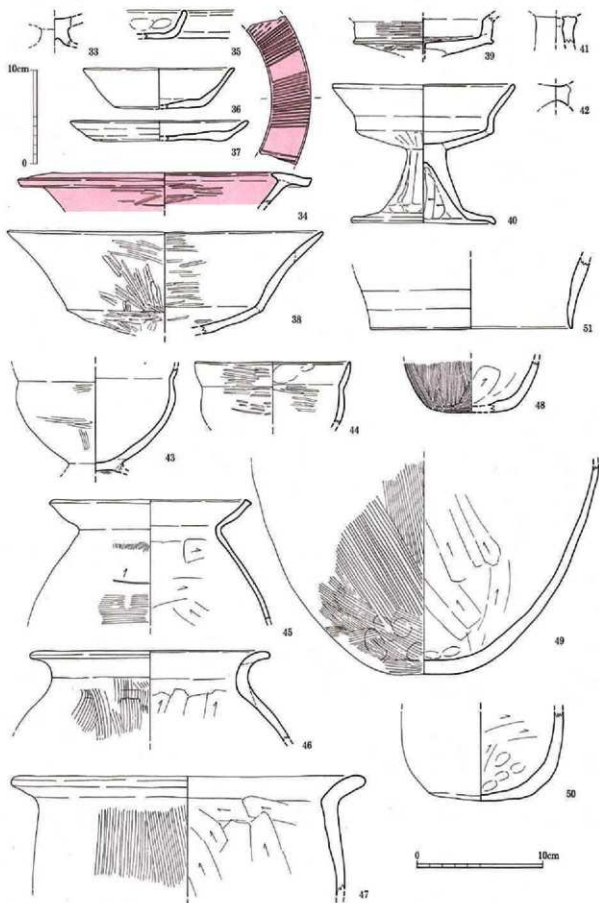
72～81は須恵器杯身。72・74・76・77は受部以下の外面に灰が付着。72・74・75・78～81は青灰色～灰色、73・76・77は暗灰色を呈す。74・76は口縁端部を打ち欠くもの。72・75・76・78は104号住居跡付近遺構面、77は115号住居跡付近遺構面出土。72は口縁端部を打ち欠いたも



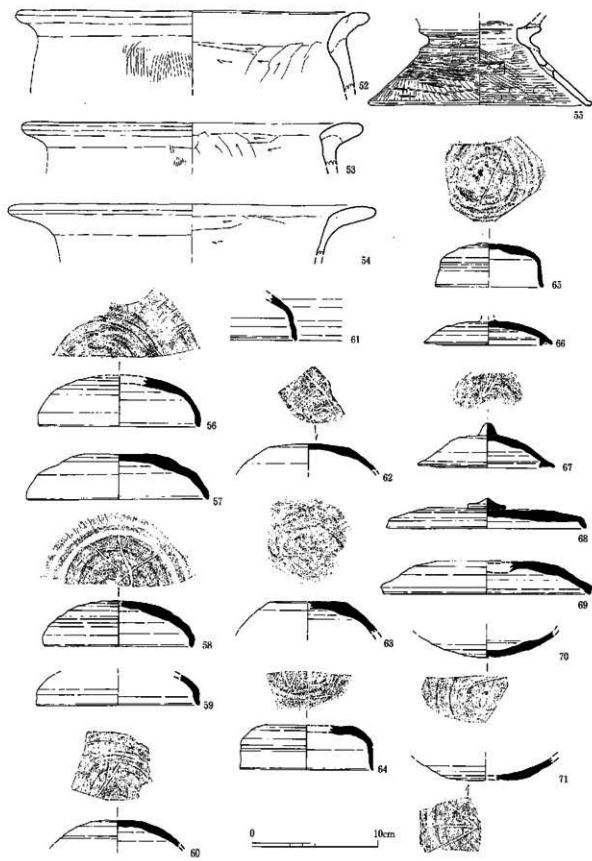
第83图 2区第1面遺構面等出土土器実測図(1)(1/4)



第84图 2区第1面遺構面等出土土器実測图(2)(1/4)



第85图 2区第1面遺構面等出土土器実測図(3)(33・34は1/4、他は1/3)



第86图 2区第1面遺構而等出土土器実測図(4)(1/3)

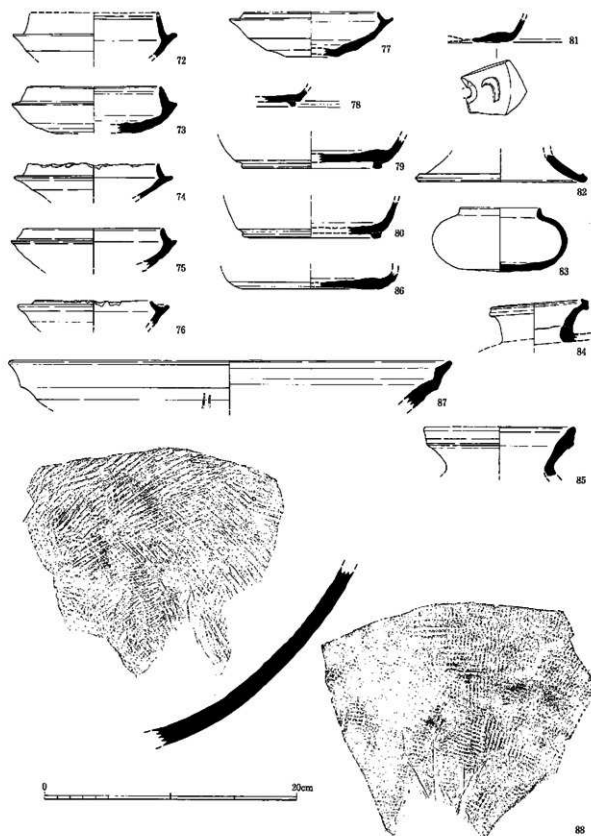
のか。やや長い立ち上がりを持つ。73は器壁が厚い。75・77の胎土は細粒を多く含む。78～80は須恵器高台付杯。79・80の底部にはヘラ切り痕が残る。81は底部中央に焼成後に打ち欠いて穿孔したものの。底部にはヘラ切りの際に掻き取った粘土が付着する。焼成は甘い。

82は須恵器高杯脚部で、上部割れ口には透かし孔がわずかに残り、3つ程度透かし孔があったものか。胎土には細粒をやや多く含む、内外面に灰がかかる。色は外灰黄色、内暗灰色。83は須恵器小形短頸壺で口径6.2cm、器高5.0cm、底部はヘラケズリのちナデで調整。外面には厚く灰がかかる。色は外灰白色～黒色、内灰白色。84は平瓶口縁部。口縁外端部はナデで面取りしたため凹線状に窪み、上端部は内向きにつまみ出す。内面には粘土接合痕が残る。色は暗灰色～黒色。85は提瓶口縁部で、焼成は甘く、色は褐色を呈す赤焼け須恵器。86は壺底部か杯で、底部外面はナデ、底部立ち上がりはヘラケズリを施す。色は灰色。

87は復元口径35.0cmの二重口縁須恵器甕Ⅱ縁部。口縁端部はやや外上方につまみ出す形態で、外面の口縁部と口頸部、平らな内面口縁上端部と口頸部との境には鋭い稜が付く。Ⅱ頸部にはハケ工具による刺突文が2本あるが全周しないもの。この刺突文は分割されて施文された可能性もある。内面には灰がかかり、色は外紫褐色、内灰黄色。この二重口縁甕Ⅱ縁部は当遺跡Ⅰ区遺構面からも出土する（『堂畑遺跡Ⅱ』Ⅱ第124図76）。

この甕については石木秀啓氏がまとめており（石木秀啓 2004「九州の須恵器生産一特に8世紀以降を中心として」『第7回西海道古代官衙研究会資料集』）、石木氏によると87は第Ⅲ類、『堂畑遺跡Ⅱ』76は第Ⅰ類に分類され、第Ⅰ類は8世紀後半、第Ⅲ類は9世紀前半に時期比定されている。上記資料に掲載された資料と比較すると87は口縁上端部が内傾する点は気になるが、肥後反籠田A窯跡出土資料と形態的に近い。76は口縁外屈曲部が凹線状になることは気になるが、大牟田市勝立窯跡群片平・善徳5号窯跡出土資料と類似する。旧浮羽郡内では旧田主丸町船越高原遺跡においてもⅡ類が出上しており（斎部麻矢他編 2000『船越高原遺跡Ⅰ』第104図71）、当地域出土須恵器が牛頸窯跡だけではなく、筑後南部・肥後北部地域からの搬入も考慮に入れなければならないことを示している。

88は大形甕胴下部片で、外面は6条1単位とする縦方向のち横方向の平行タタキ、内面下部は同心円文の当て具痕が残るが、その上からタタキ6条1単位の斜め方向の平行タタキを施す。外面には灰がかかり、色は灰色～黒色を呈する。



第87图 2区第1面等出土土器实测图(5)(1/3)

(3) 第2面の遺構と出土土器

第1面の最初で述べているが、2区中央・北東部の第1面の遺構は削平され、本来は第2面の遺構を第1面で調査しており、例えば第2面15号溝が第1面16号溝を切る不整合な形になっており、また第2面遺構全体図を見ると2区中央が空白になっている。ということは2区中央が元々かなり標高が高かったことが予想され、また15号溝南側を第2面で検出したことから、2区中央部から東南、西南に向かって傾斜する地形が復元できる(第4図参照)。

遺構全体図を見ると第2面東調査区外まで遺構が延びていることが分かるが、この2区東側は当初遺構確認できなかったとして調査区外としていたが、調査を進めていくと2区東側にも集落が延びることが分かったが、調査期間・予算の制約のため、3・4区の調査を優先させたため調査できなかった。検出した遺構は竪穴住居跡31棟、掘立柱建物跡2棟、土坑18基、溝8条、円形周溝状遺構2基、不明遺構(SX05)1基である。

a. 竪穴住居跡

117号竪穴住居跡(第42図)

2区中央部南側で検出された。119号住居跡・20号溝を切り、116号住居跡に切られる。ほとんど全体を20号溝に破壊されており、規模等は不明である。北東隅の唯一残された部分の床面から支柱穴と思われるピットを1基検出した。出土土器から弥生時代中期後半～末に位置づけられる。

出土土器(図版110、第88図1～13) 出土遺物はすべて弥生土器である。1は素口縁壺の口縁部片である。口縁端部は内面にやや強めのナデを施して端部をわずかに引き上げる。外面に細いヘラ状工具により3mm 間隔で縦方向に暗文を施す。内面には横方向に細かいヘラミガキを施し、内・外面ともに丹塗りを行う。2は壺形土器の底部片である。底部径が小さく、上方に向かって広がる。外面は摩滅によりやや不鮮明だがナデ、内面も指頭圧痕が残るナデ調整か。

3はごく小形の甕形土器である。直角に折れ曲がる短い口縁部を持つ。外面にはヘラミガキ痕が認められ、丹塗りを施す。精製器種であろう。4～10は甕形土器の口縁部片である。口径は25cm～31cmとやや幅があるが、ほぼすべての外面はハケメ、内面ナデ調整を行う共通性の高い一群である。口縁端部は丸く収める4・5、わずかに跳ね上げ口縁状に仕上げる6・8、跳ね上げ口縁の7・9・10が認められる。11は把手付の甕形土器と考えられる。把手は長径が一辺2cm以上を測る大略長楕円形で上方に向かって斜めに伸び、現代のバケツの弦状になるものか。12は成人用甕棺のいわゆる丸みを帯びた一群である。橋口編年のKⅢb式に該当する。口縁部は鋸先状に仕上げる。同一個体と考えられる破片に、胴部突帯が1条確認できたが、小片のため図示できなかった。これらの資料は弥生時代中期須玖Ⅱ式の新相に位置づけられよう。

119号竪穴住居跡(第42図)

2区中央部南側で検出された。116・117号住居跡・20号溝に破壊される。特に20号溝は本住居跡のほぼ中央部を横断するように破壊しており、本住居跡は溝の北側と南側にわずかにその一部が残るのみである。弥生時代中期後半に位置づけられる。

出土土器(第88図14・15) 14・15は甕形土器で、14は口縁部片である。ほぼ直角に折れ曲が

り、端部を跳ね上げ口縁状に処理する。15は底部片で、径が広く薄底で、樽形甕の底部の可能性もある。以上の資料は弥生時代中期須玖Ⅱ式に属する。

141号竪穴住居跡（図版41、第89図）

141号竪穴住居跡は2区西中央、142号住居跡東に位置し、15号溝に住居東側を切られる。15号溝東側で東塚を検出できなかったことから、15号溝内で壁が立ち上がり、カマドも15号溝内にあったものと予想される。主軸は北東で4.2m以上×5.2mの方形（おそらく正方形に近い形）の住居跡となる。この付近は第1・2面の遺構面の高さの差が小さく、壁が良く残っている部分でも5cm程度しか残存していない。床面では8基のピットを検出し、P1～4が主柱穴の4本柱の住居跡となる。埋土は黄灰色細砂。住居北、南壁部分で掘り込みを確認した。住居規模・主軸方位から古墳時代後期後半の住居跡となるか。

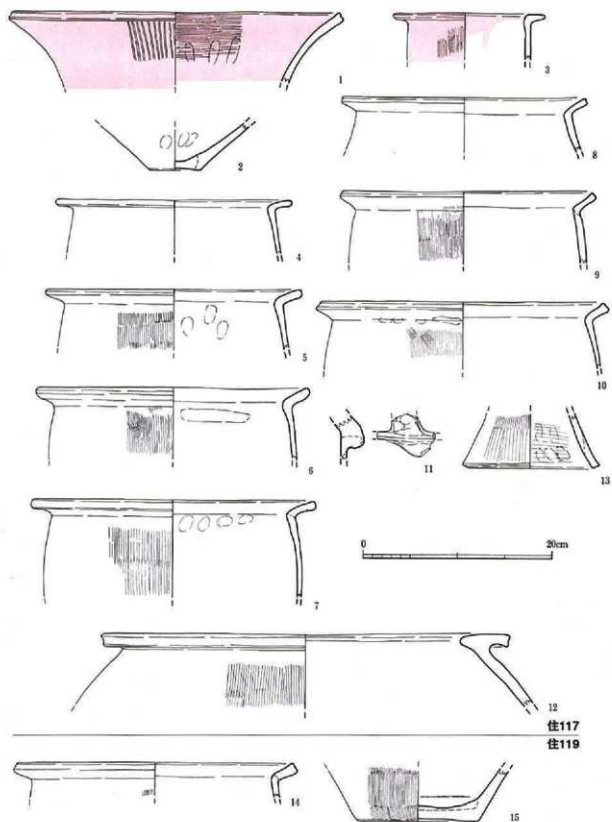
出土土器（第90図1～5）1は須恵器杯。底部外面はヘラ切りのちなデ調整。色は灰色。2は須恵器甕胴部片で、外面は格子目タタキ、内面は同心円文の当て具痕が残る。外面には灰をかぶり、色は灰黒色。3は弥生中期鏝先口縁壺口縁部。外面にはスス付着。色は外灰黒色、内灰黄褐色。4は弥生中期甕底部で、底部外面には黒斑が認められる。色は橙褐色。5は弥生後期壺口縁部。外は淡褐色、内は褐色を呈する。

142号竪穴住居跡（図版42、第91図）

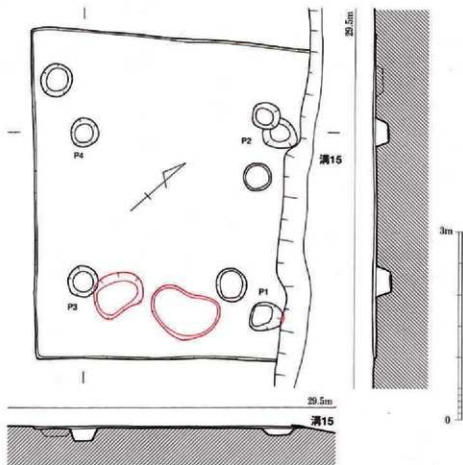
142号竪穴住居跡は2区西中央に位置し、西には141号住居跡が存在する。143・144号住居跡を含むこの付近は1面目と2面目の高低差が元々なく、1面目の遺構の影響（しみ）を避けるために表土剥ぎで下げすぎたために、最も残っている壁で3cmと非常に残りが悪くなってしまっている。北壁中央にカマドを付設し、南北4.4m×東西4.2mのほぼ正方形の住居跡となる。住居南東隅の床面直上で土器・石が出土したため、個別の図で示す。床面では8基のピットを検出したが、深さ・位置からP2・3・5・7が主柱穴となる。住居西側で掘り込みを確認した。埋土は黄灰色粗砂。

カマド（図版41）北壁中央に位置し、壁から右袖で58cm、左袖で67cm突出するが、やや右袖が短いことから袖先端部を掘り過ぎた可能性がある。奥壁から25cmの位置に石製支脚を確認し、石製支脚は25×15cm、深さ13cmの掘り込みピットで固定され、支脚前面には焦上が広がる焼面を検出した。支脚は東南方向に傾くが、重機などの影響を受けたものではなく、傾いたまま使用したもの。支脚部分で焼面幅は45cmを測り、奥壁でも幅は変わらない。

出土土器（図版110、第90図6～12）6は低平な土師器杯底部。外面は手持ちヘラケズリを施す。色は黄橙色。混入品か。7・8は土師器模倣杯。7は蓋で、鈍い稜を持つ。色は白黄茶色。8はやや内傾する口縁部で、底部外面は手持ちヘラケズリで調整。色は橙褐色。9は土師器高杯杯部で、緩やかな稜を持つ。外面には二次加熱痕と黒斑が認められる。色は黄橙色～黒色。P4出土。10は土師器高杯脚部で、脚柱部内面はケズリを施す。色は橙色。P6出土。11は緩やかに外湾する口縁を持つ土師器甕。色は淡橙褐色～灰褐色。12は器壁が厚い小形土師器甕で、口縁端部を丸く収める。外面には二次加熱痕、口縁部内面にはススが付着。色は暗茶褐色。P2出土。出土土器から古墳時代後期後半の住居跡となる。



第88图 117·119号竖穴住居跡出土土器実測図(1/4)



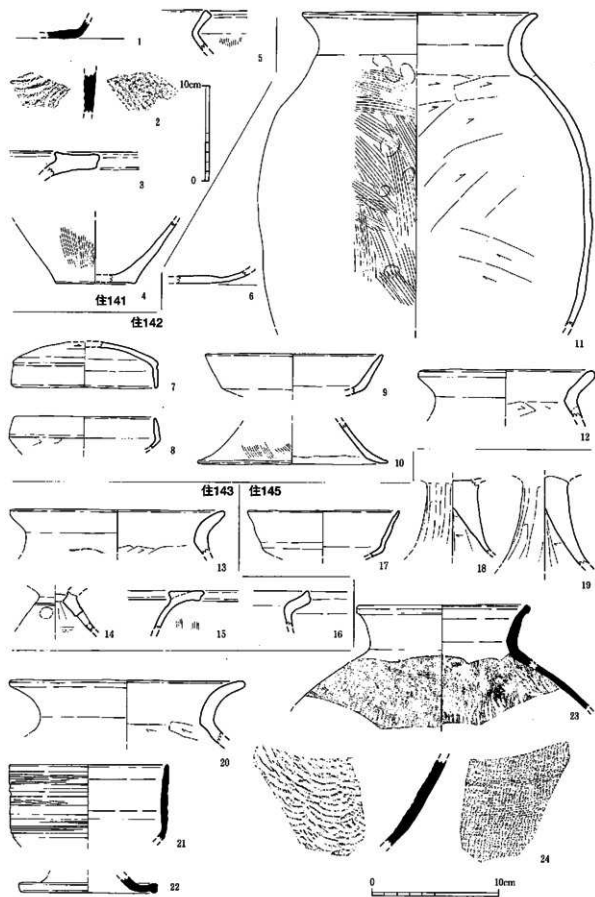
第89図 141号竪穴住居跡実測図(1/60)

143号竪穴住居跡 (図版42、第92図)

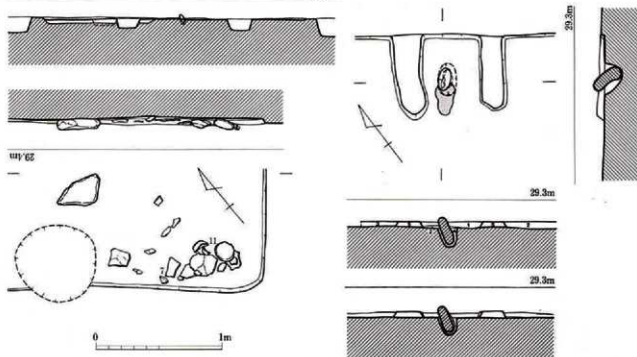
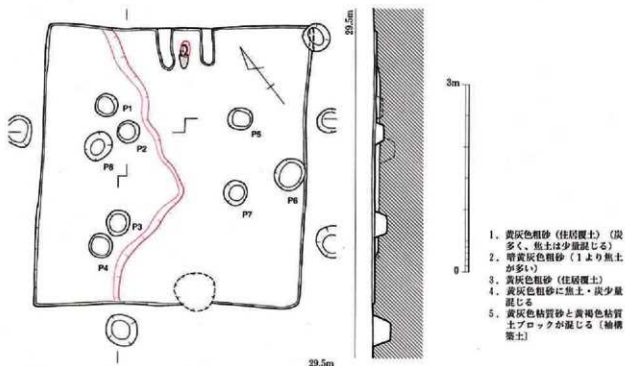
143号竪穴住居跡は2区西端中央に位置し、144号住居跡に切られる。カマドを西壁中央やや北寄りに付設し、東西3.9m×南北4mの正方形住居跡で、壁は残りの良い場所で4cmを測るが、検出面が南に傾斜するために、カマド南側の壁は下端のみ検出した。床面では5基のピットを確認し、P1～3・5が支柱穴の4本柱の住居跡となる。住居北側には掘り込みが存在する。埋土は黄灰色砂質土。

カマド 住居西壁やや北寄りに位置するカマドで、右袖は壁から65cm突出するが、左袖先端部は1面目ピットにより大きく壊される。奥壁から30cmの位置に径20cm、深さ5cmの支脚抜き取りピットが存在し、その前面には焦土・炭が広がる焼面が形成されている。燃焼部幅は支脚抜き取りピット部分で52cm、奥壁部で幅50cmを測る。カマド埋土は黄灰色砂質土に焦土・炭が混じる土であり、支脚付近は焦土・炭の割合が高い。支脚抜き取りピット内埋土は北側に焦土・炭が集中して混じていた。両袖は黄灰色粘質砂で構築される。

出土土器 (第90図13～16) 13は土師器甕口縁部で、外面には二次加熱痕、内面には炭化物が付着。外面頸部下には工具痕あり。色は褐色～黄褐色。14は小形の土師器高杯脚部か。焼成前に3ヶ所穿孔し、その上に全周しない凹線を施す。脚部内面は工具痕やハケで調整し、杯部とは粘土を充填して接合したものか。色は白黄褐色。15は口縁上端部が水平な弥生中期鋤先口縁壺口縁部。頸部外面にはハケ目が残る、口縁上端部には黒斑あり。色は黄褐色。16は弥生中期跳ね上げ口縁壺口縁部。頸部外面には工具調整の際の段が残る。色は白黄褐色。



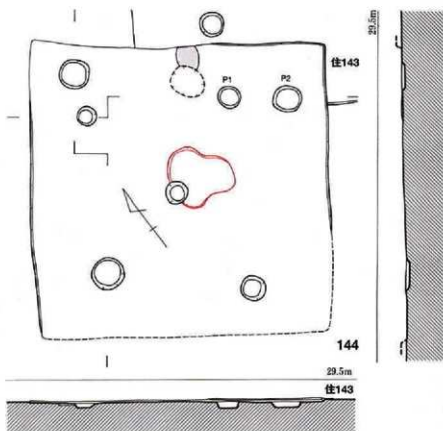
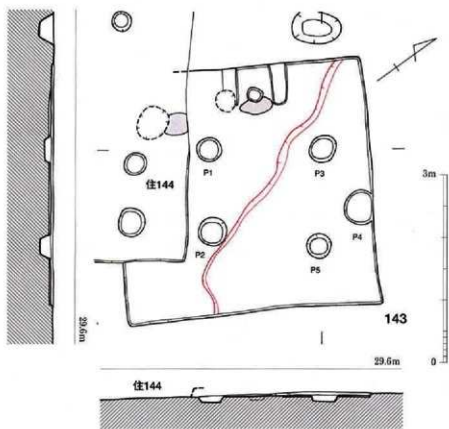
第90图 141~143・145号整穴住居跡出土土器実測図 (3~5・15・16は1/4、他は1/3)



第91図 142号竪穴住居跡・土器出土状況・カマド実測図 (1/60・1/30)

144号竪穴住居跡 (図版43、第92図)

2区西中央、145号住居跡南に位置し、143号住居跡を切る住居跡。壁は北東隅で2cmほど残り、南壁は下端も検出できず点線で推定範囲を示すこととができないほど、残存状況は良くない。北壁中央のトーンで示した箇所は焦土・炭が広がっていることからカマド焼面であると判断できるが、カマド規模・形態とも残りが悪く不明。床面からは6基のピットを確認したが、



第92图 143・144号竖穴住居跡実測图 (1/60)

いずれも浅く支柱穴とは断定できない。住居中央で掘り込みを確認した。出土土器で図示できるものはないが、覆土から土師器・弥生時代中期土器が出土している。

145号竪穴住居跡（図版42、第93図）

145号竪穴住居跡は2区西端中央、143・144号住居跡北西に位置する。住居北西隅～西～南中央にかけては調査区外になる。住居壁は4cm程度しか残っておらず、カマドは第1面のピット等によって壊されており、焦土の広がり（焼面）のみ確認した。住居北壁は下げすぎてしまい、下端しか検出できなかった（住居北側の段は掘り間違い）。住居規模は南北4.5m、東西はカマドの焼面部分で反転すると5mほどになるやや東西に長い住居跡となるか。住居床面ではピットを9基検出し、P1・2は位置・深さから支柱穴になると考えられ、4本柱の住居になる可能性が高い。焼面の位置から袖が長く伸びるタイプのカマドになると考えられる。埋土は暗黄褐色砂質土。住居北側から刀子（第270図12）が出土。

出土土器（図版110、第90図17～24）17～19は土師器高杯。17は鈍い稜が付き、杯外面下部はケズリを施す。色は外黄褐色、内橙色。18・19は脚柱部で、内外面はケズリ調整。いずれも色は橙褐色～黄褐色。19はP6出土。20は土師器甕口縁部で、強く外湾する口縁部を持つ。色は淡黄褐色。

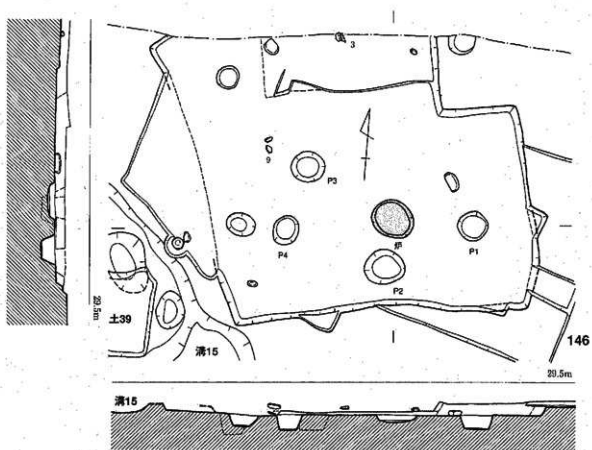
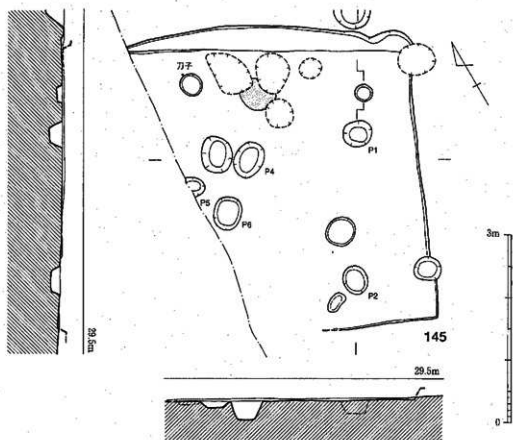
21は須恵器杯。体部外面にはカキ日を施すが、このカキ日の上から5条のナデ凹線を施す。色は灰色。22は須恵器高杯脚柱部。端部を下につまみ出す。色は灰色。23はやや外傾する須恵器直口壺口縁部で、口縁部は玉縁状に肥厚させる。肩部外面は縦方向の平行タタキのちカキ目、内面は同心円文の当て具痕が残る。色は灰色。24は須恵器甕胴下部片。外面は縦方向の平行タタキのちカキ目を施し、内面は同心円文の当て具痕が良く残る。色は外灰黒色、内青灰色。P5出土。

出土土器では、22が7世紀末まで下がると考えられるが、17や住居形態から古墳時代後期後半の住居跡となるか。

146号竪穴住居跡（図版42、第93図）

146号竪穴住居跡は2区西中央北に位置し、周囲には38・39号土坑が存在し、15号溝と住居南西隔壁で接する（出土土器から15号溝が新しい）。住居埋土は竪穴部中央部が灰黄色細砂、壁近くが黄褐色細砂とレンズ状堆積を示していたが、壁際の埋土と地山の境が非常に分かりづらく、何度も下げては検出するという作業を行ったために、西壁の大半を掘り飛ばしてしまった（下端推定ラインを破線で示す）。東西5.1m×南北4.8mのやや北側が広がる住居跡であり、住居東側には南北3.2m×東西1.2mを測る突出部が存在する。住居北側では高さ5cmのベット状の高まりを検出したが、ベッド西側は掘り飛ばしてしまい、図中の破線は推定ラインを示している。

住居竪穴部中央よりやや南東寄りに、埋土に炭が多く混じる灰褐色砂質土の炉を検出し、その東西のP1・4は深さと位置から支柱穴になると考えたが、P4はやや伊から離れた位置にあること、他に支柱穴候補のピットが複数あること、また出土土器から弥生中期後半の住居跡となることから2本柱の住居となるかは不安が残る。覆土から柱状片刃石斧を転用した礫石を確



第93图 145・146号竖穴住居跡実測図(1/60)

認した(第264図18)。

出土土器(第94図1~16) 1は弥生中期広口直口壺。口縁部外面は暗文状の縦ミガキ、内面は横ミガキで調整。色は橙褐色。2は壺底部で、底部外面は工具により「×」字状に刻む。

3~9は弥生中期甕口縁部。3は口縁上端部を若干跳ね上げるもので、頸部からやや下がった位置に低平な三角突帯を貼り付ける。色は外灰褐色、内橙褐色~褐色を呈する。4は外面に二次加熱痕が認められる。色は茶褐色。5~7は口縁端部がやや下がるもの。5は内面頸部以下にもハケ日が残る。色は淡橙褐色。6は外面に二次加熱痕あり。色は外赤褐色、内は黄茶色。7・8は跳ね上げ口縁甕。7の色は橙褐色、8の色は白黄茶色を呈する。9は短く外折する甕口縁部で、口縁上端部はわずかに跳ね上げたもの。外は橙色、内暗褐色を呈する。10~12は甕底部。10・12は外面には二次加熱痕、内面には炭化物が認められる。10はやや厚めの底部で、外は橙色、内は灰褐色~こげ茶色を呈する。11の色は外灰黄褐色、内灰黒色。12の色は外橙色~褐色、内黄褐色~こげ茶色。

13は弥生中期丹塗高环脚柱部。内面にはナデ絞り痕が残る。生地は茶褐色を呈する。14は丹塗高环脚部で外面は縦ミガキ、内面はナデで調整。生地は白灰黄色。15・16は鼓形の器台。15の色は暗黄橙褐色。16の内面下部には工具痕が残り、外面には二次加熱痕とススあり。色は黄橙褐色。

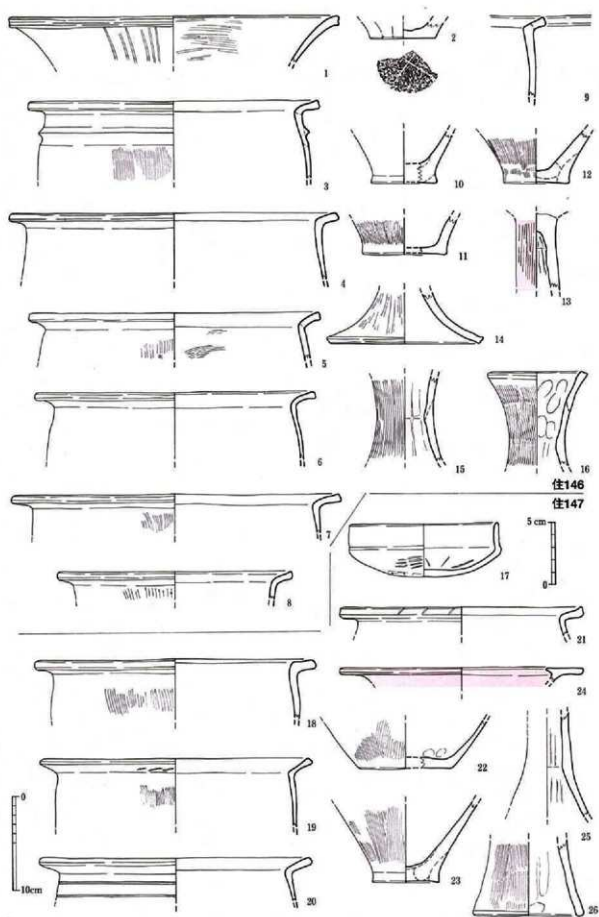
147号竪穴住居跡(図版43、第95図)

147号竪穴住居跡は2区南西端、142号竪穴住居跡南に位置し、24号溝を切る。調査時には24号溝埋土と地山の区別が非常に分かりづらく、周辺も全体的に下げていったため、後で147号住居跡の存在を気づいた時には、西壁と北壁の一部を飛ばしてしまっていた。住居跡は東西4mを測り、住居南半分は調査区外であるため、住居規模・形態とも不明。住居床面ではピット5基を検出し、位置・深さからP1~3は主柱穴になると考えられ、4本柱の住居となる。東壁にはトーンで示した範囲に焦土・炭が広がるが、位置からカマドではない。埋土は暗灰黄色砂質土。覆土には多くの弥生土器が混じるが、埋土や17の存在から古墳時代後期後半の住居跡になると考えられる。住居北・東には147号住居跡北・東包含層が存在する。覆土から刀子(第270図9)出土。

出土土器(図版110、第94図17~26) 17は土師器模倣杯身。底部外面はタタキのち手持ちヘラケズリ、内面は工具ナデのちナデで調整。色は黄橙色~橙褐色。

18~21は弥生中期甕口縁部。18は水平近くまで口縁部を外折し、端部は丸く収める。外面には二次加熱痕が残る。胎土には細粒を多く含み、色は外灰褐色~橙褐色、内橙褐色を呈する。19は口縁端部をわずかに跳ね上げる甕で、頸部外面には工具痕が残る。外面には二次加熱痕があり、色は茶褐色。20は外面頸部下に2条の凹線を巡らせるもの。外面には二次加熱痕が認められる。色は茶褐色~黄褐色。21は跳ね上げ口縁甕で、口縁外端部にはヘラ工具による浅い刻目を施すが、全周するかどうかわ不明。外面にはスス付着。色は黄橙色。22・23は甕底部。22は底部外面に黒斑、初痕2ヶ所あり。色は黄褐色。23は外面が二次加熱を受ける。外は褐色、内は黄褐色~黒色を呈する。

24は口縁上端部が水平の鋤先口縁丹塗高环口縁部。口縁上端部は器表が荒れているため、暗



第94图 146・147号竖穴住居跡出土土器実測図（17は1/3、他は1/4）

文を施したかどうかは不明。胎土には細粒を多く含む。25は高坏脚柱部。外面は摩滅のため、調整不明。内面は工具ナデ後ナデ。胎土には細粒を非常に多く含む、色は灰茶色。26は器台下部。色は橙褐色。

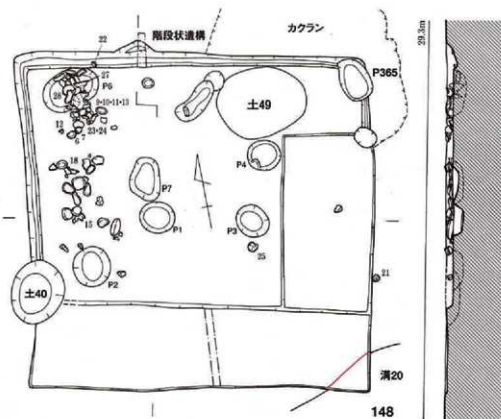
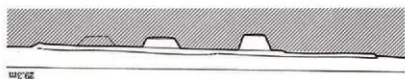
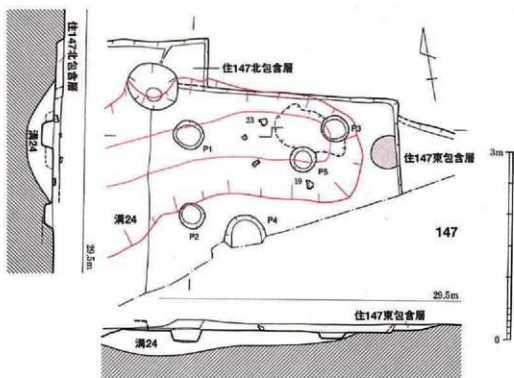
148号竪穴住居跡（図版43・44、第95図）

148号竪穴住居跡は2区東の西寄りに位置し、40号土坑・365号ピットに切られ、住居南東隅で20号溝を切る。49号土坑との切り合い関係は、当初48号土坑は当住居跡屋内土坑と考えていたが、49号土坑から古墳時代後期の土器が出土したことから、49号土坑が新しい。また40号土坑・365号ピットは住居壁を丁度切るように位置することから、住居廃絶行為と何らか関係すると思われる。

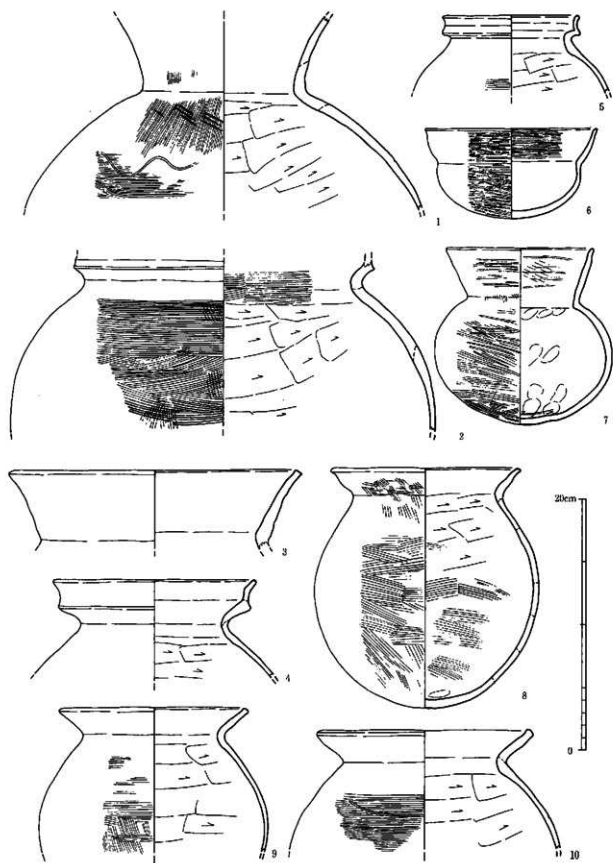
住居形態は南北5.4m×東西5.4mの正方形で、南壁と東壁の一部には幅1.3～1.4mのベッド状遺構が付く。このベッド状遺構は、図では東のベッドが一段低いが、調査時に掘りすぎてしまっており、元々は南と同じ10cmほどの高さになると考えられる。また住居竪穴部の深さが15cm程度と削られているために、このベッド状遺構も元々は更にか高かったものか。竪穴部壁際には埋土が黄灰色細砂に暗黄褐色細砂が混じった、幅20cm前後、深さ4cm前後の壁周溝が巡り、壁北西隅から1.8mの場所には、幅0.6mの三角状の突出部を確認した。この突出部には平坦なテラスも存在することから住居に伴う階段の可能性が高いが、土層では確信を持てなかった。住居床面では7基のピットを検出した。当初は2本柱の主柱穴を持つと考えたが、住居形態が正方形であることから4本柱の住居跡になると考えられるか。炉・主柱穴とも確認できなかった。竪穴部西側で床面直上から土器・石を多量に検出した。住居埋土は暗黄褐色細砂。

出土土器（図版111・112、第96・97、98図21～27）1は畿内系直口壺。外面頸部にはハケ調整前のタキ痕が残り、肩部からやや下がった位置に1条の波状文を施す。内面頸部近くまでヘラケズリを施し、口頸部外面には横ナデ前の縦ハケが残る。内面頸部付近は黒化する。色は灰黄褐色～こげ茶色。P2出土。2は山陰系二重口縁壺。やや寸胴の器形で、内面頸部には横ハケを施す。外面には黒斑あり。色は黄褐色～こげ茶色。P2出土。3は畿内系直口壺で、口縁内端部はやや上方につまみ出すもの。口縁部外面には二次加熱痕あり。色は黄橙色～灰黄褐色。覆土下層出土。4・5は山陰系二重口縁壺。4は口縁端部を折り曲げるもので、外面肩部にはスス付着。色は暗灰茶色。5は小形品で、口縁部を外湾させるもの。胴部外面には横ハケ、黒斑あり。色は黄橙色。6は精製小形丸底甕。やや内湾する口縁部で、胴部の張り弱い。外面は細かいハケの横ミガキ、口縁部内面は横ミガキで調整。外面にはススが多く付着。色は橙色。7は畿内系小形丸底甕で、外面は二次加熱を受け、器表が荒れる。口縁端部を弱く外反させ、胴部外面にはハケの複雑な横ミガキ、口縁部内面はハケの横ミガキを施す。色は灰黄褐色～黒色。8はV様式系甕。口縁外端部は弱く外につまみ出したもので、胴部内面下部はハケ、胴上部は頸部までヘラケズリを施す。外面には二次加熱・スス・黒斑あり。胎土には細粒を多く含む、色は黄橙色を呈する。

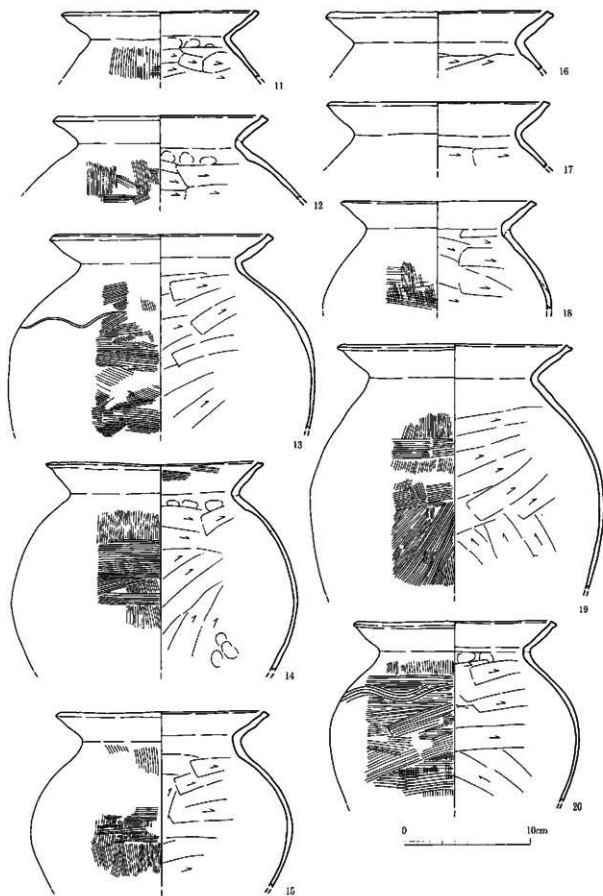
9～20は布留系甕。いずれも口縁内端部をつまみ出し、上端部はナデで面取りする。9・13・14・19は外面に二次加熱痕・スス、10・11・15～18・20は外面にスス、20は外面に黒斑、9・13は胴部内面に炭化物が認められる。9の色は灰茶色～黒茶色。10の外面肩部には1条の波状



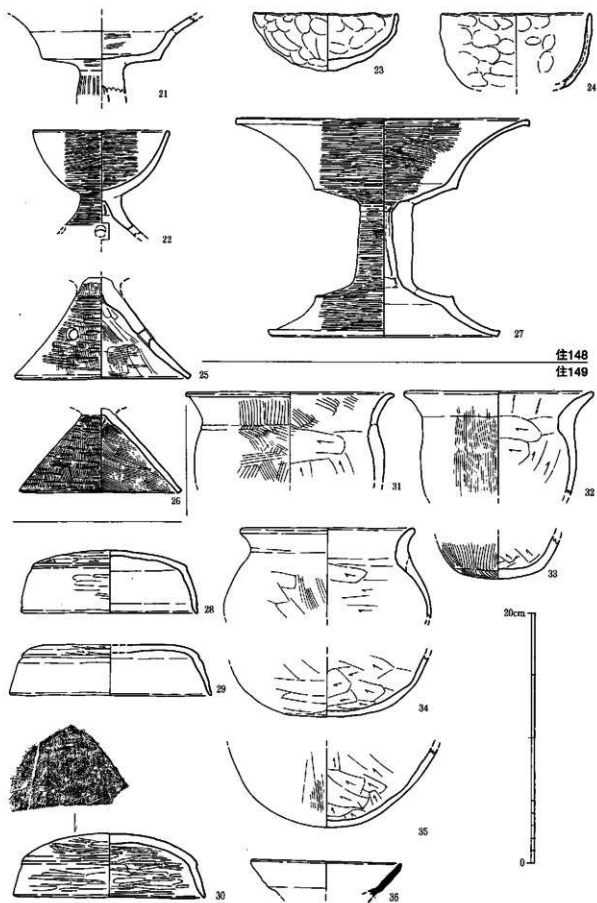
第95図 147・148号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第96图 148号竖穴住居跡出土土器実測图 (1) (1/3)



第97图 148号窑穴住居跡出土土器实测图(2)(1/3)



住148
住149

第98图 148(3)·149号竖穴住居跡出土土器実測图(1/3)

文が認められるが、全周しない。胎土には細粒を多く含み、外はこげ茶色～橙褐色、内面褐色～灰黄褐色を呈する。11の色は淡黄褐色～黒色。12の色は灰黄褐色。13は肩部外面に1条の波状文を施すが、全周しないもの。14は口縁部内面にもハケが残り、色は黄褐色～褐色。P1出土。15の色は外淡黄褐色、内黄褐色。16の色は橙褐色～灰褐色。P7出土。17の色は暗茶褐色～黒色。18の色は黄褐色～黒色。19は頸部内面から下がった位置までしかヘラケズリを施さないもの。外は褐色～灰褐色、内は黄褐色。P6出土。20は外面肩部にハケ工具により4条の波状文を施す。色は白黄褐色。P6出土。

21は畿内系有段高杯で、内外面にはミガキを施す。脚柱部外面には粗な縦ミガキ、内面は工具絞り痕が残る。色は橙褐色～灰褐色。住居東壁外出土。22は畿内系精製碗形高杯。杯部内外面、脚部外面には細かいミガキを施す。脚部には焼成前に外から4つ穿孔し、内面には工具絞り痕残り。外面にはススが付着し、色は黄褐色～茶褐色。

23・24は粗製鉢。内外面には指押さえ痕跡が良く残る。23の外面には黒斑が、24の外面には二次加熱痕が残る。23は完形品で、色は黄褐色、24は褐色を呈する。25・26は畿内系小形器台脚部で、いずれも外面は縦ハケのち粗い横ミガキを施す。25は杯部との接合面にハケを施し、接合しやすくしたもの。脚部内面上部は工具絞り痕、下部はハケのちナデ調整。焼成前に外から3ヶ所穿孔する。色は橙茶褐色。26は精製品で、脚部内面は工具絞りのちハケ調整。内外面にはスス付着。色は黄褐色。27は畿内系有段器台で、強く外反する口縁下端部は下につまみ出す。口径23.2cm、器高17.2cm、底径18cmを測る。外面及び杯内面には密に横ミガキを施す。脚柱部内面には工具絞り痕がよく残り、脚裾部内面は剥離が顕著である。脚部外面には黒斑あり。外は橙褐色、内は黄褐色。

出土土器から古墳時代前期前半の良好な一括資料であり、布留系土器が出土する遺構の中では、旧浮羽郡内で最古段階に位置付けられるものである。また、畿内系精製土器群は胎土・調整などから搬入土器と考えられるものもある。

149号竪穴住居跡（図版44、第99図）

149号竪穴住居跡は2区東中央北端に位置する。周囲の住居跡とはやや離れた場所に位置し、住居下層には48号土坑が住居にすっぽり収まる状態で存在する。カマドの主軸を住居の主軸に据えると、北壁以外は南西方向に歪む方形の住居跡になる。住居規模は南北4.6m×東西5.1m、深さ30cmを測る比較的残りの良い住居跡で、北西隅が調査区外となる。住居北壁やや東寄りにカマドを付設し、P1～4が支柱穴となる。住居西壁には掘り込み、東側には下層ピットが存在する。埋土は暗黄灰色細砂。覆土から剥片石器（第263図5）が出土した。

カマド（図版44）北壁中央からやや東に位置する、全体的にやや丸みを帯びたカマドで、両袖とも壁から75cmほど突出する。袖は粘土と砂で互層状に構築しており、袖に粘土が使用されていることがはっきり分かる数少ないもの。奥壁から16cmの場所に石製支脚が存在し、支脚は25×20cm、深さ10cmの掘り込みピットで固定し、また支脚前後は少量の粘土でさらに固定する。この掘り込みピット埋土下位にも焦土と炭が少量混じるため、少なくとも1回は支脚を造り直した可能性が高い。支脚支脚前の濃いトーンは硬化面を示し、この硬化面は非常に硬化している。その前面と右側の薄いトーンで示した部分は焦土が広がる範囲を示している。燃焼部

は袖先端部で幅60cm、支脚部分で幅52cmと奥壁側が徐々に狭くなる平面形態となる。カマド内埋土は支脚付近が黄灰色砂質土に焦土・炭が多く含む土で、床面に近いほど粘性が強くなる。奥壁中央には喉から7cm、半円形に突出する短い煙道部が付く。この煙道部埋土は下層が黄褐色砂質土に焦土が多く、炭が少量混じる土、上層が暗黄褐色砂質土に焦土・炭が少量混じる土（煙道部上面の崩れた土か）である。支脚前後から土師器甕（34）が出土し、28・34・35もカマド内出土。カマド右袖外から完形の土師器壺が出土したが、整理の段階で所在不明となっているため実測図を図示できない。

出土土器（第98図28～36） 28～30は土師器模倣杯蓋。いずれも口縁部と天井部との境に鈍い稜を持ち、口縁部は弱く外反する。28の天井部外面は手持ちヘラケズリ、口縁部外面にはヘラミガキを施す。口径13.8cm、器高10cmで、内外面黒塗り。色は橙褐色。29の低い天井部外面は手持ちヘラケズリを施す。色は橙褐色。30は丸みを持つ天井部で、内外面にはヘラミガキを密に施す。口径15.2cm、器高5.1cmを測る。天井部外面には焼成後鋭利な工具により、「井」に縦1本足したヘラ記号を施す。色は橙色。

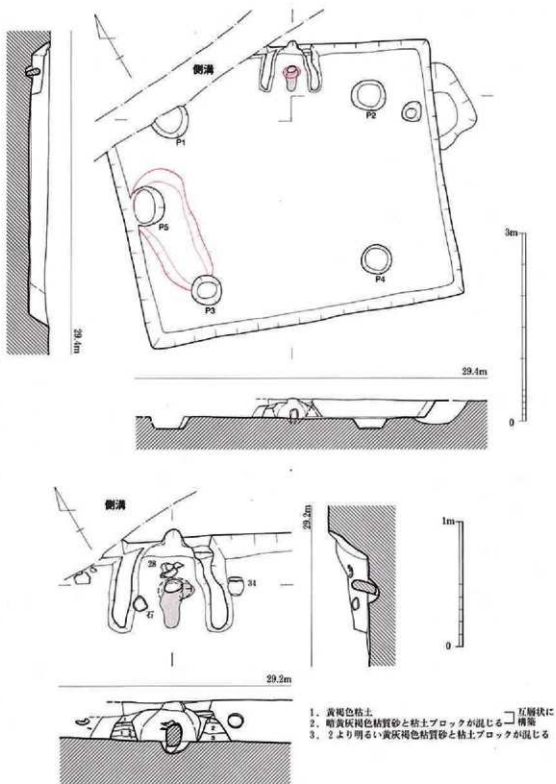
31～35は土師器甕。31・32は胴が張らない器形。31は口縁部内面にハケを施す。胴部外面には二次加熱痕が、内面には炭化物が付着。色は橙褐色～暗茶褐色。32は口縁部内面に工具痕あり。外面には二次加熱痕、口縁部内面にはスス、胴部内面には炭化物が付着。色は外橙褐色、内暗橙褐色～黒茶色。33は底部で、外面には二次加熱痕・ススあり。色は褐色～黒褐色。34は下部がやや歪むため岡上復元していないが、調整・胎土などから同一個体と考えられる。胴部外面は工具ナデで調整し、外面には二次加熱痕・スス、内面には炭化物が付着。色は暗茶褐色～黒色。35は壺底部。外面には高温の二次加熱の影響で、釉状のガラス質が付着する。色は暗茶褐色。36は須恵器隴口縁部。色は灰色。

当住居跡の時期は出土土器から古墳時代後期後半になる。

150号竪穴住居跡（図版45、第100図）

150号竪穴住居跡は2区東中央北端に位置する。20号溝を切り、43号土坑に切られる。住居北側半分は調査区外であり、住居規模は不明。住居西側に高さ4cm、幅1.2mのベッド状遺構が存在することから、長方形住居跡になると予想される。床面ではピット2基を確認し、P1は位置・深さから2本柱の主柱穴の一つになると考えられる。覆土から石皿が出土した（第267図61）。

出土土器（第101図1～6） 1は口縁部が外傾する鋤先口縁広口壺。頸部外面には低いM字状突帯を貼り付け、外面肩部、内面頸部にはハケが残る。外面全体と内面頸部まで丹塗りを施す。2は弥生中期壺底部。底部には黒斑あり。色は灰黄褐色～黒色。3は胴が張る甕で、口縁部内面はハケで調整。色は灰黄褐色。4は口縁部が口径の大きさにしてはかなり長くなるもので、口縁内端部を内側につまみ出す丹塗鋤先口縁甕。口縁部は水平まで外折し、外端部は下がり気味となる。口縁上端部には5cm前後を1単位とする丹を塗布し、塗布の際のハケ痕跡が良く残る。外面にはスス・黒斑あり。口径22.6cmで、生地は灰黄褐色。5は弥生中期高坏脚柱部で、内面には紋り痕が残る。色は外橙褐色、内灰黒色。6は器台で、外面はタタキ、内面はハケのちナデで調整。色は淡橙褐色。ベッド付長方形住居跡、出土土器や切り合い関係から弥生時代



第99図 149号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

中期末の住居跡と考えられる。

151号竪穴住居跡 (図版45、第100図)

151号竪穴住居跡は2区東中央、25号溝東側に位置し、9号獨立柱建物跡、45号土坑に切ら

れ、44号土坑を切る。南北3.8×東西4.2m、深さ32cmの方形住居で、住居の南から西にかけて高さ4cmのベッド状遺構を検出した(地山整形のベッドの可能性が高い)。埋土は暗黄灰色細砂であるが、地山・44号土坑埋土と非常に土質が近かったために、南壁の一部を検出時に飛ばしてしまい、44号土坑との前後関係が床面まで下げないと分からなかったために、44号土坑出土土器と混ざってしまった。周間の段は検出時に掘り下げた段で、掘り間違えたもの。床面ではピット2基を検出したが、主柱穴・炉とも不明。覆土から剥片石器(第263図6)が出土。

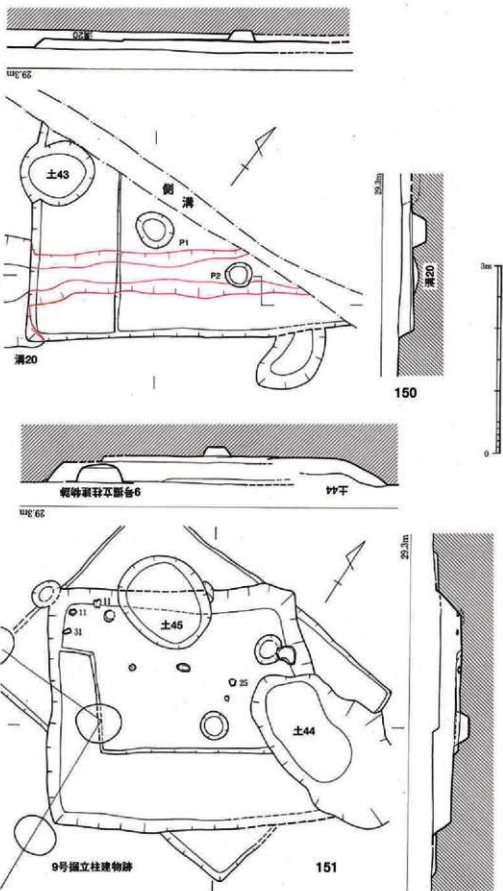
出土土器(図版112、第101図7~12・第102図) 7は大形の山陰系二重口縁甕で、肩部外面は縦ハケの横ハケを施し、胴部外面にはスス付着。色は白黄茶色。8は完形の畿内系直口壺で、口径17.1cm、器高36.3cmを測る。外面肩部には工具による1条の凹線を巡らす。外面には黒斑2ヶ所あり。色は灰黄色~黒色。9は精製直口鉢。内面底部には工具痕あり。色は橙褐色。10は畿内系小形器台で、杯部・脚部外面はミガキ、杯部内面もミガキを施したか。脚部内面上部は工具ナデ、下部はハケで調整。脚部には焼成前に外から3ヶ所穿孔する。色は橙褐色。

11は弥生中期鉢。破線で全形を復元するが、推定復元にはあまり自信がない。胴部中位には三角突帯を貼り付け、外面は横ミガキで調整。頸部外面には工具痕が残り、内面底部は工具ナデで調整。外面には黒斑があり、色は灰黄褐色。12は無頸壺の口縁部がない器形の鉢で、外面はミガキ、内面にはナデの稜が良く残る。色は灰黄褐色。

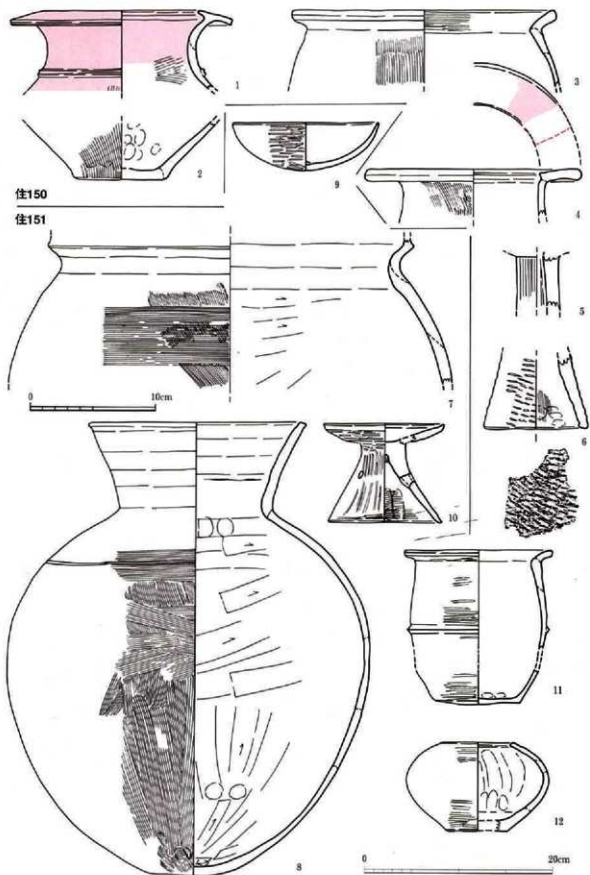
13~27は弥生中期甕。13・14は口縁上面がナデにより窪む甕口縁部。13は外面にススが付着。色は外白黄茶色~灰黄褐色、内灰黄褐色を呈する。14は頸部下に小さな三角突帯が付くもので、13より口縁上端面は窪み、内端部の突出度も強い。外面は二次加熱を受ける。色は橙褐色。15は鋤先口縁甕で、口縁外端部が垂れ下がるもの。色は灰黄褐色。16・17は跳ね上げ口縁甕。16は胴部内面は工具ナデのちナデ調整。色は黄橙褐色。17の外面には二次加熱痕あり。色は外灰黄褐色、内茶褐色。18の口縁内面には横ハケを施す。色は灰黄褐色。19の外面にはスス付着。色は灰黄褐色。20は頸部外面下に三角突帯を貼り付け、外面には黒斑が認められる。色は灰黄褐色。21は外面頸部下に2条の凹線を巡らすもので、一部3条になる箇所があるが、その凹線は細く、途切れ途切れであることから、凹線を巡らせる際に付いたキズの可能性が高い。色は橙褐色。22は頸部外面下に1条の凹線を巡らせるもので、口縁端部はやや下がるもの。色は外灰黄褐色、内黄褐色。23~27は甕底部。23・24・27は外面に二次加熱痕が、23・24は内面に炭化物が付着する。23は底部外面にハケ工具痕あり。色は外灰黄褐色~暗褐色、内こげ茶色。24は厚底のもので、色は灰黄褐色。25の色は外灰黄褐色、内灰褐色。26は外面に黒斑あり。色は灰黄茶褐色。27はやや上げ底のもので、色は外黄褐色~赤褐色、内灰黄茶色。

28は鋤先口縁高坏口縁部。色は橙褐色。29~31は鼓形の器台下部で、30は外面に二次加熱痕あり。29は黄褐色、30は黄褐色、31は灰黄褐色を呈する。32~34は支脚で、いずれも外面はタタキで調整。33の内面はハケ調整。色は32茶褐色、33灰黄褐色、34黄褐色を呈する。

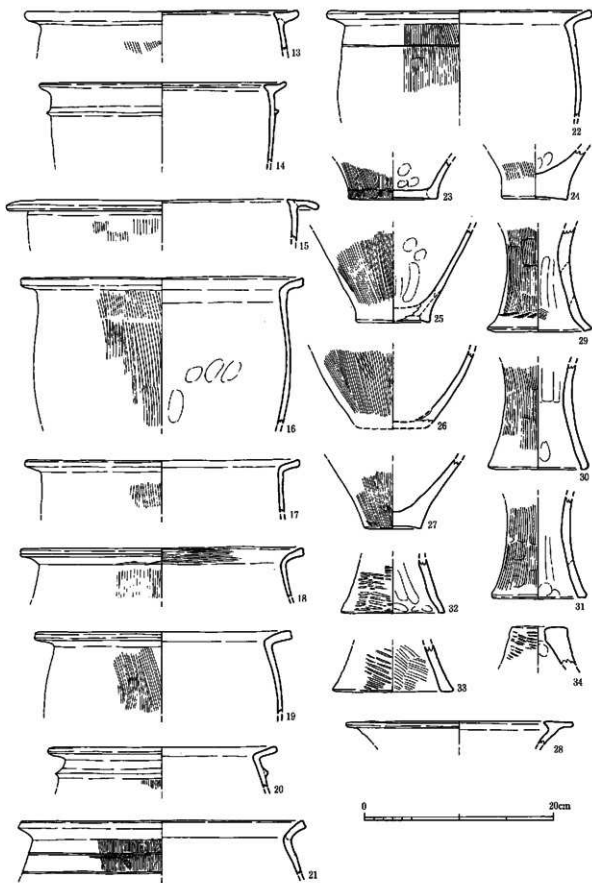
出土土器は弥生時代中期末と古墳時代前期中頃の2者に分かれるが、出土土器が混じってしまった切り合う44号土坑が弥生時代中期末であることから、当住居跡は古墳時代前期中頃のものと考えられる。



第100图 150・151号整穴住居跡実測图 (1/60)



第101图 150・151(1)号竖穴住居跡出土土器实测图(7~10は1/3、他は1/4)



第102图 151号竖穴住居跡出土土器実測図(2)(1/4)

152号竪穴住居跡（図版40・45・46、第103図）

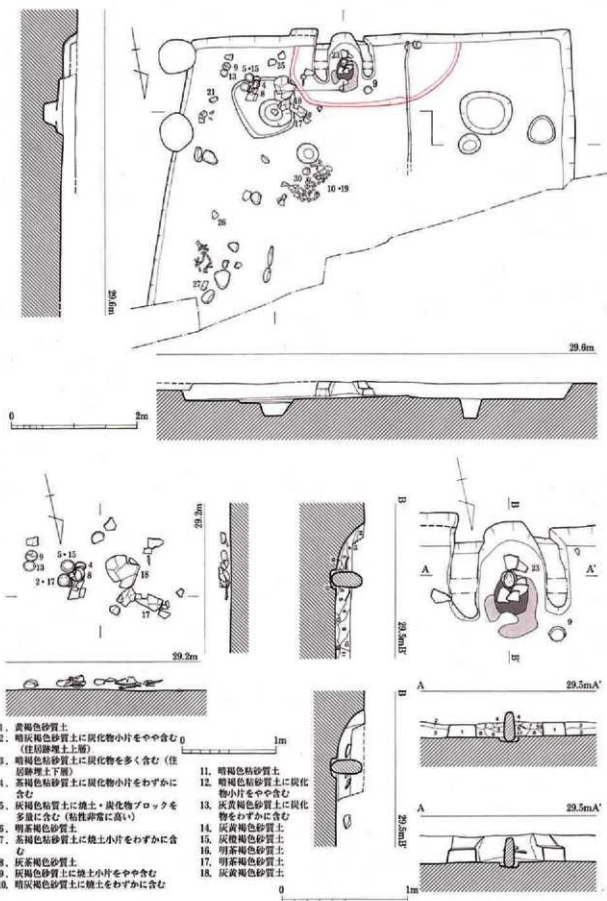
2区の東側にあり、北側の調査区外に住居跡の半分ほどが広がる。153号住居跡と切り合い関係を持ち、これより新しい。50・51号土坑とも切り合い関係を有し、これらよりも新しい。堂知遺跡には珍しく南側の壁の中央部にカマドを付設するタイプの住居跡である。住居跡の残存状況は比較的良く、壁は深さ30cm弱が残っていた。住居跡の床面のほぼ直上から、多くの土器が出土した。出土状況を概述すると以下の通りである。まず、22の甕と28の甎がカマドの右手前方から出土し、これらは一部欠損するもののほぼ完形の状態であった。また、22の甕の胴上位には意図的な打ち欠きによる穿孔が認められた。さらに、2・5・6・8・11・15・16・17の椀と25の甕胴部片がカマドの右側からまとまって積み重ねられた状態で出土したほか、その右手から9・13・14が伏せられた状態でまとまって出土した。このうち25の甕胴部片は椀と同様に扱われたものであろうか。さらに、20の甕や30の鉢なども住居跡の北東部からまとまって出土したが、これらはおおよそ半分ほどが残存していて完形に復元することはできなかった。カマドからは支脚が立ったままの状態で出土し、その周囲の灰層のほぼ直上から23の甕が割れた状態で復元したが、この資料はおおよそ1/3しか残存しておらず、当初から割れた破片の状態でおかれた可能性が高い。カマドの埋土や、支脚・土器などの出土状況から、本住居跡の埋没は使用状況と大きく変化がない状況で起きた可能性が高い。注目されるのは22の甕に意図的な穿孔が施されていたことであり、本住居跡の埋没直前に何らかの儀礼行為を行った可能性を考えさせる。しかし、椀や甕、一部の甕をのぞいて床面直上から出土した遺物の多くは完形に復元されず、埋没前に破片資料の廃棄行為も行われていた可能性が高い。また、床面直上に少量の炭化木材がまとまって出土したほかは火を受けた痕跡は認められず、小さな火程度は行ったものの住居に火をかけるような行為は行わず、生活環境を残したまま意図的に埋没させた可能性が高い。主柱穴は2基確認し、深いものは30cmほどを測る。出土土器等から、6世紀中頃に位置づけられよう。また、覆土から白玉（第265図40）が出土している。

カマド（図版46）当初住居跡の南側にカマドがあることを想定しておらず、支脚が露出し、ある程度掘り下げて焼土が出始めた段階でここにカマドがある可能性に思い至り、トレンチを掘って確認したところ焼面を確認してカマドがあることを認識できた。カマドは内接型で、南壁の中央部に二本の軸を付設して造り付けていた。平面形は□字形を呈し、中央部に支脚が使用時の状況のまま残されていた。支脚の前

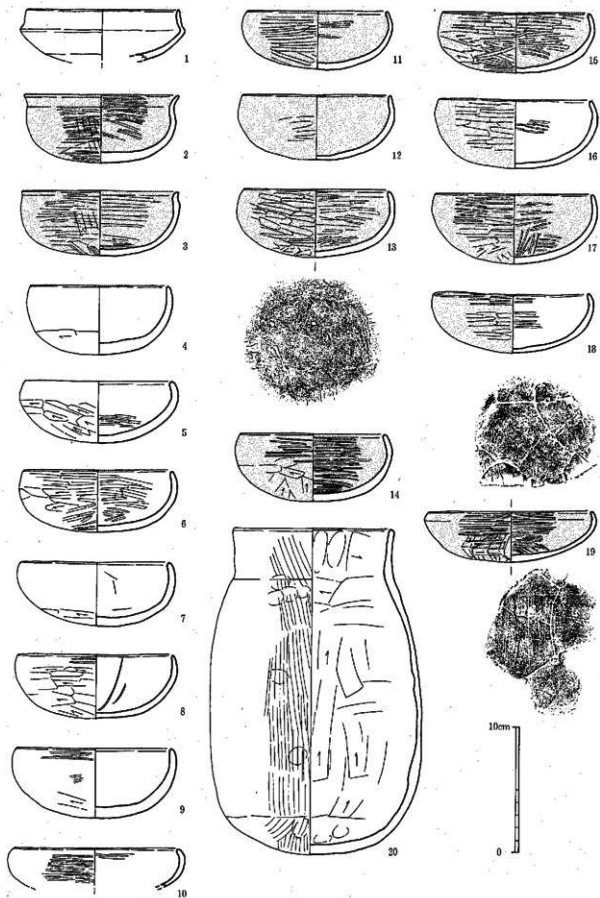
面には強い熱を受けて形成された硬化面が確認でき、その周囲には赤変部（焼面）も認められた。支脚の周囲からは甕形土器の破片が出土したが、完形には復元できなかった。カマドの埋土は大きく2層に大別でき、1～4層は住居跡の埋土とこれに焼土小片が混じったものである。カマドの天井部の崩落土は認められなかった。また、最下層の5層は灰層の堆積と考えられるが、この層は中央部の堆積が薄くなっており、中途半端な掻き出しが行



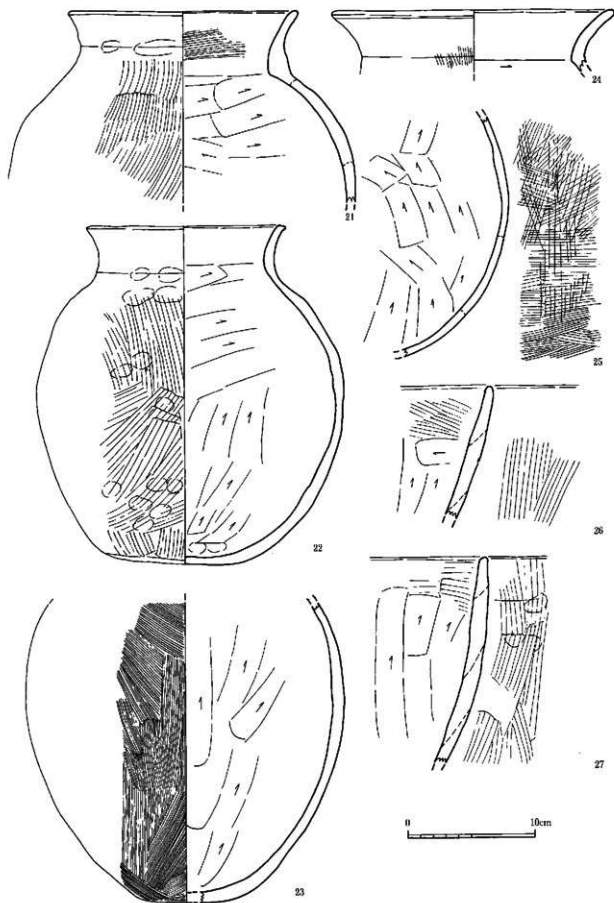
152号住居跡カマド東側出土状況（北から）



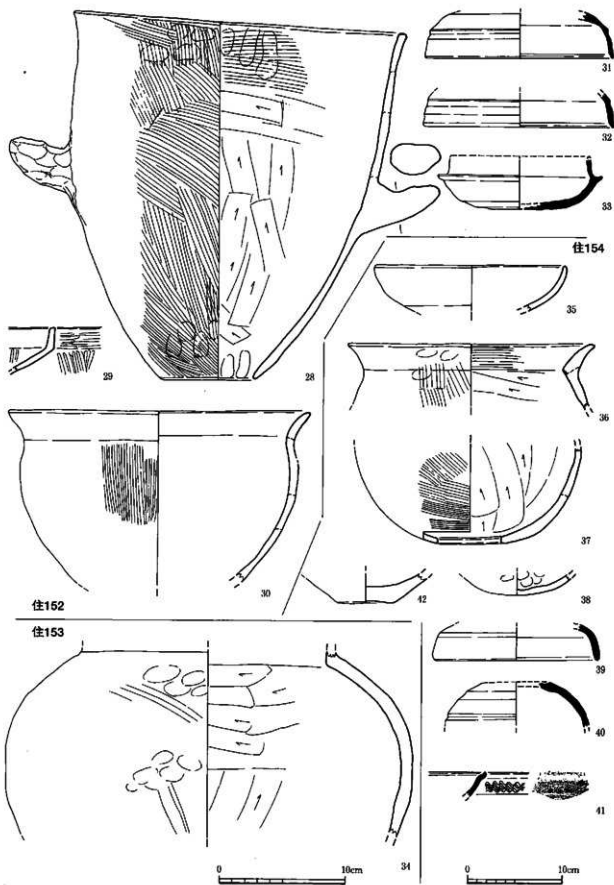
第103図 152号竅穴住居跡・カマド東側土器出土状況・カマド実測図 (1/60・1/40・1/30)



第104图 152号竖穴住居跡出土土器実測图(1)(1/3)



第105图 152号竖穴住居跡出土土器実測图(2)(1/3)



第106図 152(3)~154号竪穴住居跡出土土器実測図(32・33・42は1/4、他は1/3)

われた可能性もある(この灰層は樹種同定を行い、コナラ類アカガシ亜種と同定された。詳細はIV-1参照)。

出土土器(図版112・113・114、第104～106図1～33) 1～30は土師器である。1は須恵器模倣杯である。底部を欠失するが、丸底であろう。底部から緩やかに立ち上がり、段を形成し、口縁部は内傾しながら外湾する。口縁部径は11.8cmを測る。2～19は小形の碗である。口縁端部をわずかに外反させるものに2・3があり、深さがやや浅いものに10・19があるが、その他はほぼ同様の器形を有する。調整が判明するものの多くは外面へラナデあるいは板ナデ、内面はへラナデ調整を施す。口径もほぼ一致し、器高の低く平坦な10・19を除くすべてが11～12.5cmの範囲に収まる。20～25は蕨形の底・胴部と如意状に外反する口縁部を有する大形の甕形土器である。20は細身で、頸部の縮りが小さく、口縁端部は直立する。21・22は器高が低く、胴部が比較的球形に近い。23・25も同様の器形を持つものである。また、21・24は頸部内面に明瞭な稜を形成する。いずれも内面はよくケズリ込んで器壁を薄くし、外面ハケメ調整、口縁部付近は横ナデを施す。26～28は甕である。26・27は口縁部の小片であり、いずれも径は不明である。28はほぼ全形が判明する資料である。両側に2つの把手を有し、底部には大きな穴が空く。外面ハケメ、内面ケズリ、口縁部のみ横方向のハケメを施す。29は小形の碗あるいは高杯の杯部であろうか。内・外面にへラケズリ痕が認められる。弥生土器の可能性もある。30は鉢形土器である。半球状の底・胴部と、如意状に外反する口縁部を有する。外面ハケメ、内面ケズリ、口縁部は横ナデを行うが、全体的に摩滅が著しい。

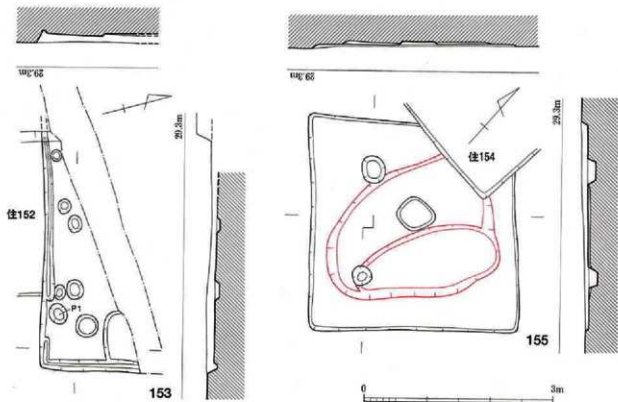
31～33は須恵器である。31・32は杯蓋である。平坦な天井部から、直角に近い角度で湾出して、口縁部へと至る。いずれも屈曲部のやや下方に段を形成する。33はかえりを有する杯身である。口縁部は直立して上方にやや長く伸びる。以上の出土土器は、ほぼすべて6世紀前葉～中葉に相当する。

153号竪穴住居跡(図版45、第107図)

2区東側の北端にあり、住居跡の大半が北側の調査区外に広がる。上層は152号住居跡に完全に破壊されていた。堂畑遺跡の住居跡のなかでは珍しく壁溝が検出された住居跡である。住居跡の壁は10cm程度が残っており、壁溝は底から約5cmほど深く掘り下げられていた。床面からは小ピットが多く検出されたが、支柱穴と判断できるものはなかった。出土土器と切り合い関係から、6世紀代と考えられよう。

出土土器(第106図35～42) 35～38は土師器である。35は小形の碗である。器高の低い半円形状を呈し、口縁端部を丸く収める。口縁部径は15cmを測る。36は甕形土器である。蕨状の底・胴部を有するものであろう。屈曲して如意状に外反する口縁部片が残る。37は球胴の短頸甕あるいは甕の底部を大きく穿孔したものである。甕として利用したものであろうか。38は小形の碗の底部片であろうか。外面・内面の双方に指頭圧痕が残る。

39～41は須恵器である。39は杯蓋であろうか。天井部が平坦で、口縁部にむけて垂直に伸びる。高さは比較的低い。39は蕨の胴部上半であろうか。胴部最大径よりやや上部に沈線を一条めぐらせる。上端部には縦口縁が残る。上方に伸びる頸部が接合していたものであろうか。41は蕨の口縁端部であろうか。外面に5条の櫛形波状文を施す。以上の土器群はやや時期幅があ



第107図 153・155号竪穴住居跡実測図(1/60)

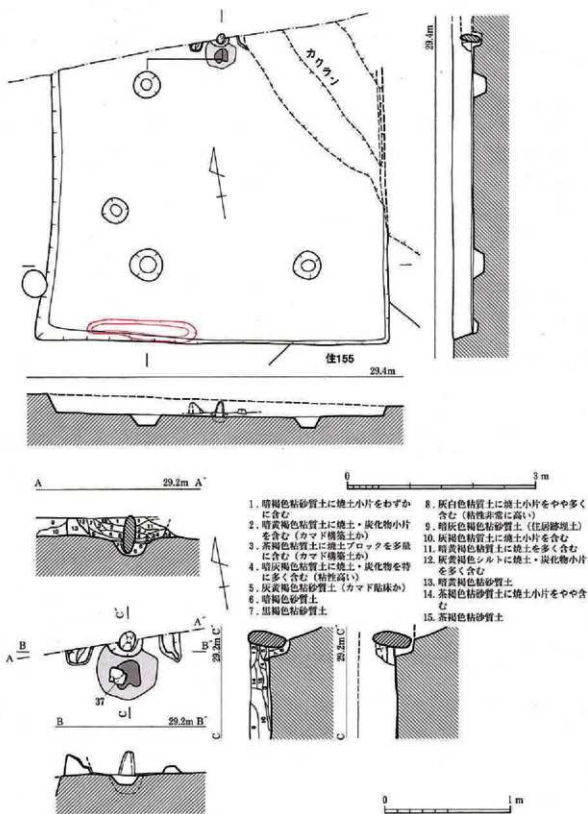
るが、6世紀代か。

154号竪穴住居跡(図版154、第108図)

2区最東端の北端で検出した。住居跡の北壁は調査区外に広がる。また、北東コーナー部も攪乱により破壊されており、南東コーナー部では155号住居跡を破壊する。北壁に付設されていたカマドの一部を検出したが、その大半は調査区外に広がっていた。住居跡の規模は東西幅のみが判明し、およそ5.4mを測る。南北長は、カマドの位置から考えて少なくとも5.2m以上になり、規模の大きな住居跡である。壁は比較的良く残っており、30cm以上の深さがあった。支柱穴は3基が確認され、いずれも20cmほどの深さがあった。

カマド(図版154) 北壁のほぼ中央部と考えられる場所にカマドの一部を検出したが、その大半は北側の調査区外に広がっている。検出した部分は支脚と袖の一部であり、おそらく内接型のカマドになるものであろう。支脚の前面に焼面が広がっていた。埋土は大きく3層に分けられ、1層は住居跡の埋土とよく類似する。2～4・6～8層はカマド天井や袖の崩落土、最下層の5層はカマド床の直上に堆積した灰層と考えられる。

出土土器(第106図34) やや扁平な球胴の壺の胴部片である。頸部で屈曲して斜め上方に広がる口縁部を持ち、短頸壺であろう。外面は指頭圧痕をよく残しナデ、内面はヘラケズリ。時期的な位置づけは難しいが、7世紀以前であろう。



第108図 154号整穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30)

155号竪穴住居跡（図版47、第107図）

2区最東端の北側にあり、154号住居跡と切り合い関係にあって本住居跡が新しい。平面形は3.4m×3.3mのほぼ正方形で、北東コーナー部を154号住居跡に破壊されるほかは全形を良く残す。住居床面からやや浮いた状態で、炭化物をまとめて確認した（図版47）。この炭化物は樹種同定結果ではシイ属に同定されている（詳細はIV-1参照）。床面からはピットを何基か検出したが、いずれも非常に浅く、本住居跡に伴うかどうかは疑わしい。また、中央部から不整形の床下掘り込みが確認された。本住居跡からは土師器の小片のみの出土であり、時期的な位置づけは難しい。

156号竪穴住居跡（図版48、第109図）

156号住居跡は2区東の西寄り南、148号住居跡南に位置し、161号住居跡・20号溝を切る。住居中央・カマド西側は第1面21号溝（カクラン）により大きく壊され、住居北西隅はピットにより壊される。北壁中央にカマドを付設し、南北3.5m×東西4.2m、深さ8cmのやや東西に長い住居跡となる。床面ではピット4基検出し、P1～3は主柱穴となる（P3に切られるピットは161号住居跡主柱穴）。住居北側の大部分で掘り込みを確認した。住居埋土は黄灰色粗砂。

カマド（図版48）北壁中央に位置し、左袖はカクランにより大きく壊される。右袖は壁から60cm突出し、袖先端部はやや内向きになる。奥壁から27cmの場所に径10cm、深さ6cmの支脚抜き取りピットがあり、この部分を中心に反転すると燃焼部幅は36cmほどの幅狭く、平面形態が長方形の燃焼部となる。このピットより15cmほど南に離れた場所で焼面を確認した。右袖に近くなるほど良く焼けている（図中の濃いトーン）。燃焼部床面より7cm上から、長さ18cm、幅14cmの短い煙道部が伸び、煙道部床面は北側に向かって緩やかに上昇する。

出土土器（第111図1～3） 1・2は小形土師器甕。1の内面頸部下はケズリのちなデ調整。色は黄褐色。2は口径8.4cmの口径が小さい甕口縁部で、外面にはスス付着。色は外こげ茶色、内茶褐色。

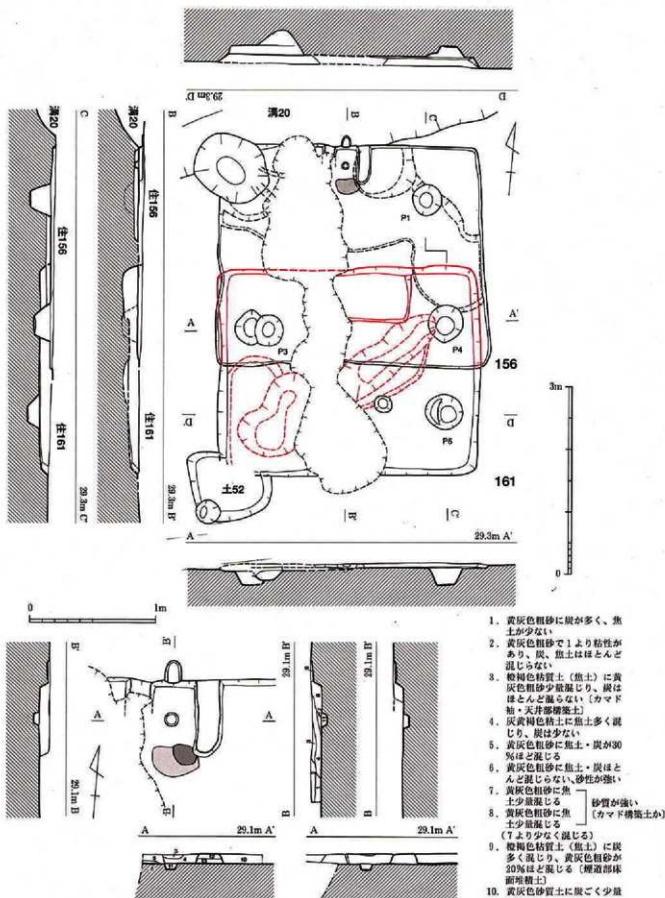
3は須恵器杯身で、底部にはヘラ記号があるが、1本線のみ残り全形は不明。色は灰色。

当住居跡は出土土器から古墳時代後期後半のもの。

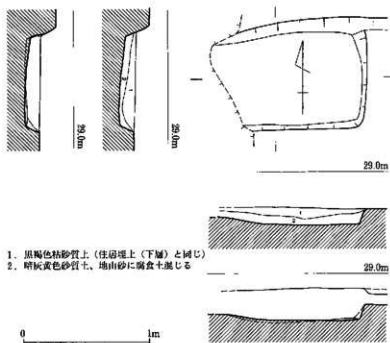
157号竪穴住居跡（図版48、第112図）

157号竪穴住居跡は2区中央西寄り、148号住居跡東に位置し、9号掘立柱建物跡に切られ、20号溝を切る。南北4.4m×東西4.4m、深さ12cmの正方形住居跡。住居北壁中央より東にずれた位置にカマドを付設する。床面では4基のピットを検出し、いずれも当住居跡主柱穴となる。P2と9号掘立柱建物跡P8が切り合うが、調査時の不注意で両者の土器が混ざってしまった。住居北側の掘り込みを赤で図示するが、20号溝の上層を掘ってしまった可能性が高い。住居埋土は黄灰色粗砂。住居東壁北でカマド煙道部と考えられる遺構を確認したが、この遺構に伴う住居は検出できなかったため、157住居跡東煙道状遺構として報告する。この遺構埋土には焦土はなく、炭が混じるのみである。

カマド（図版49）住居北壁中央の東寄りに位置するカマドで、壁から両袖が22cm突出する。カマド奥壁から18cmと近い位置に石製支脚が存在し、その前面には焦土が広がる（焼面）。この石



第109図 156・161号竪穴住居跡、156号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)



第110図 161号竪穴住居跡北壁十坑実測図 (1/30)

製支脚もビットを掘り固定していたと考えられるが、ビットを確認する前に掘り下げてしまったため、ビットの有無は不明。土師器甕胴部片(6)が支脚を囲むように出土し、左袖から10cmほど南側で土師器杯蓋(4)が出土した。燃烧部は支脚部分で幅28cm、奥壁から袖先端までが70cmと非常に細長い形態となり、石製支脚やや小さめのもの。燃烧部幅30cmを切るような例は当遺跡では当住居跡のみである。燃烧部床面から8cmほど上がった部分から北に長さ28cm、幅18cm、深さ2cmの短い煙道が付く。

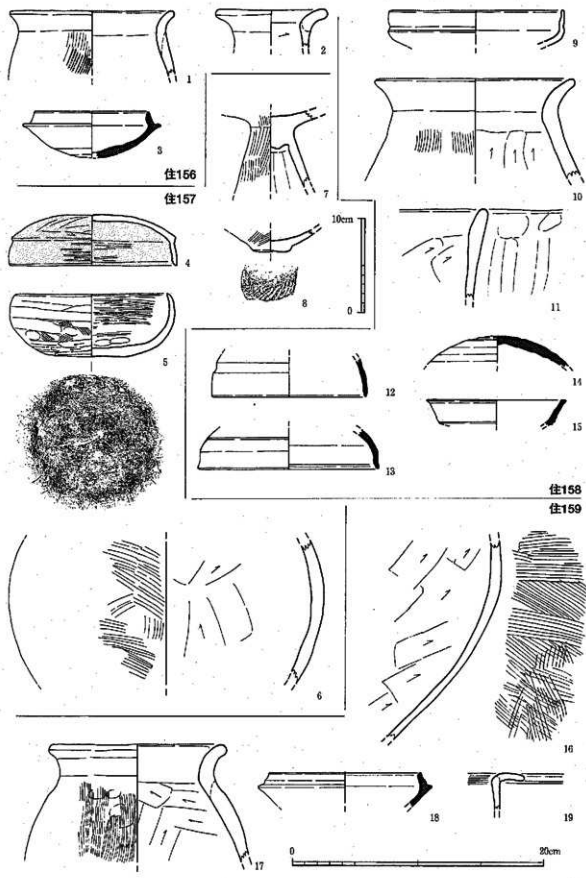
出土土器(図版114、第111図4~8) 4は完形の土師器模倣杯蓋。内外面黒塗りで、天井部と口縁部との境には鈍い稜を持つ。外面天井部は手持ちヘラケズリ、口縁内外面は横ミガキ調整。外面には二次加熱痕あり。色は橙褐色。5は器壁がやや厚めの完形の杯。外面底部は手持ちヘラケズリ、口縁部外面はハケのちヘラナデ、口縁部内面は粗い横ミガキ、内面底部はナデを施す。外面底部には焼成後鋭利な工具により横3本線中央に縦1本線が交わったヘラ記号を刻む。色は淡黄褐色~橙褐色。6は土師器甕胴部で、外面にはスス付着。同一個体片が多くあるが、接合しなかった。色は茶褐色。7は土師器高杯脚柱部で、外面・杯部内面はハケ、脚柱部内面は工具絞り・ケズリで調整。外面には二次加熱痕あり。色は灰黄褐色。

8は弥生後期壺か鉢底部で、内面底部には工具痕あり。色はこげ茶色。

出土土器から古墳時代後期後半の住居跡となる。

158号竪穴住居跡(図版49、第113図)

2区東端部の南側で検出した住居跡である。南側は調査区外に伸び、北側で159号住居跡と切り合い、これに後出する。北壁の中央部に内接型のカマドを有する。壁の残存深さは極めて浅く、数cm~10cm弱程度であった。床面からは4基の支柱穴を検出した。いずれも25cm程度の深さを有する。また北西隅で直径1m弱の楕円形の掘り込みを検出した。当初別の遺構かと



第111図 156~159号竪穴住居跡出土土器実測図 (8・19は1/4、他は1/3)

考えたが深さが床面から数cmほどしかなく、床下掘り込みと判断した。住居跡の埋土中から、第270図6の鉄刀子片が出上した。また、石製紡錘車(第265図35)磨製石包丁(第264図25)が出上している。出土土器と切り合い関係から、6世紀後半に位置づけておきたい。

カマド(図版49) 北壁のほぼ中央部に、内接型のカマドを検出した。右袖の検出に失敗して半分以上削ってしまったが、本来は先端部がやや内側に湾曲して燃烧部を囲い込んでいたものであろう。燃烧部は幅60cm、奥行65cmほどを測り、埋土はほぼすべてに焼土と炭化物を含むが、最上層の1層はほぼ全体が焼土であり、これがカマドの崩落土層であろう。

出土土器(第111図9~15) 9~11は土師器である。9は須恵器模倣杯である。比較的平坦な底部を持ち、口縁部に向けて屈曲して、短く垂直に伸びる口縁部を持つ。口縁部の基部に段を形成する。10はやや小さい甕の口縁部片である。菌形の胴部を持つものであろう。内面ヘラケズリ、外面ハケメ調整。11は甕の口縁部片である。直線的に伸びてわずかに外湾する。内面ケズリ、外面ナデ調整。

12~15は須恵器である。12・13は口縁部が直立し、天井部が比較的平坦な杯蓋である。12は肩部に沈線を施す。14は天井部が丸い杯蓋である。口縁部は欠失しており全体形は不明。15は竈の口縁部片であろうか。斜めに伸びる口縁部のみが残っており、下方で屈曲するようであった。屈曲部に沈線を施す。これらの資料はやや時期的な幅があるが、主体は6世紀後半であろう。

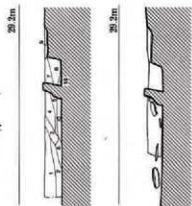
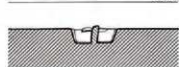
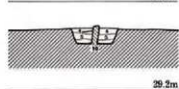
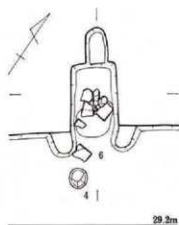
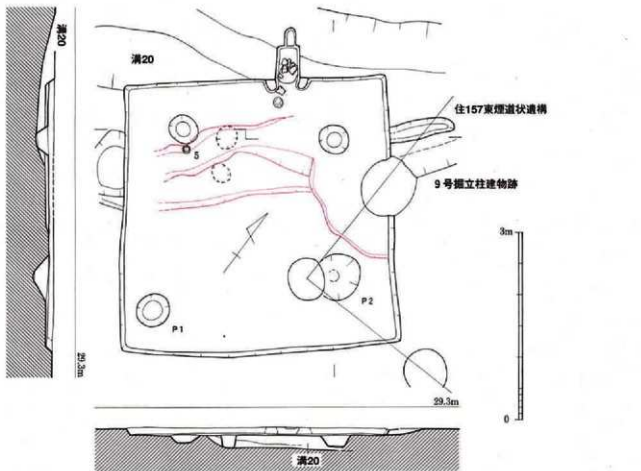
159号竈穴住居跡(図版49、第114図)

2区東端部の南側に検出した住居跡である。南側の半分ほどを158号住居跡によって破壊されているが、本住居跡の方が床面が深かったために壁や支柱穴等は検出できた。住居跡の残存深さは20cm弱を測る。北側に内接型のカマドを検出した。カマド位置から主軸を南北方向とすると、住居跡の規模は長さ3.9m、幅4.0mのほぼ正方形を呈する。支柱穴は4基とも確認でき、いずれも20cm以上の深さを有していた。また、カマドの前面と南東部の支柱穴の周辺に不整形の床下掘り込みを確認した。出土土器と切り合い関係から6世紀後半に位置づけたい。

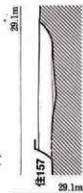
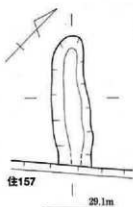
カマド(図版50、第114図) 住居跡の北壁ほぼ中央部に、内接型のカマドを検出した。カマド袖は住居跡の壁と直角について平行して直線的に60cmほど伸びる。袖間の距離は70cmほどを測る。奥壁に煙道部と思われる掘り込みを確認した。この掘り込みはカマド床面から一段高いところから斜め上方に向けて伸びており、検出できた長さは30cm弱であった。埋土は大きく3層に分けられ、最上層の1・2層は住居跡埋土、中間の3~5・7層は焼土を多く含むカマド天井部や袖の崩落土、6・8・9層はカマド天井が崩落する前に堆積した土層と考えられる。出土土器(第111図16~19) 16は球胴の甕の胴部片であろう。外面ハケメ、内面ケズリ痕が明瞭に残る。17は小形の甕である。菌状の胴~底部を持つものと考えられ、如意状に外反する口縁部付近が残る。胴部外面ハケメ、内面ケズリ、口縁部は内・外面ともに横ナデ。

18は須恵器の杯身である。かえりを有する口縁部付近が残る。口縁部径は12cm。

19は弥生中期須玖Ⅱ式の屈曲口縁甕の口縁部片である。口縁端部を丸く収める。



1. 黄灰色細砂に炭・焦土ほとんど混らない
 2. 暗黄灰色細砂に焦土少量混じる
 3. 黄褐色粘質土に炭少量混じる
 4. 暗黄褐色細砂に焦土・炭多く混じる
 5. 灰褐色粘土に炭・焦土多く混じる
 6. 黄褐色細砂に炭・焦土混じる
 7. 黄灰色細砂に焦土・炭混じる
 8. 黄灰色細砂に炭・炭混じらない
 9. 黄灰色細砂に炭・焦土少量混じる
 10. 黄褐色細砂で炭・焦土ほとんど混じらない
- 住居層土と同じ
- カマド天井・壁
- カマド構築土



1. 炭（ブロック状でない）
2. 暗黄褐色細砂に炭少量混じる
3. 黄灰色細砂に炭少量混じる

157号住居跡東煙道状遺構



第112図 157号竪穴住居跡・カマド・住居跡東煙道状遺構実測図 (1/60・1/30)

160号竪穴住居跡（図版50、第115図）

2区東端部の北側で検出した竪穴住居跡である。168号住居跡と切り合い関係を持ち、これより新しい。また2号円形周溝状遺構とも切り合い関係を持ち、これより新しい。内接型のカマドを北壁に付設し、主軸を南北方向とすると長さ5.4m、幅4.9mを測る大形の住居跡である。住居跡の壁は15cmほどが残存していた。床面からは支柱穴を4本確認した。深さにはややばらつきがあり、15cm程度のものから30cm以上のものまでである。また、支柱穴のほかにも何基かのピットを検出したほか、床下掘り込みも2箇所を確認した。出土土器から、6世紀中葉に比定できようか。

カマド（図版50、第115図）住居跡の北壁ほぼ中央部で、内接型のカマドを検出した。右側の袖の検出に失敗して大きく破壊してしまったが、本来は左袖と同様45cm程度は存在していたものと思われ、平面形は口字形を呈するものである。埋土は大きく2層に分けられ、上層の1層がカマド天井の崩落土、下層の2～5層は住居跡の埋土と天井・袖の崩落土が混じったものと考えられる。

出土土器（第116図1～4） 1・2は土師器で、球胴と短く如意状に外反する口縁部を持つ甕であろう。1が口縁部片、2が胴部片である。胴部外面はハケメ、内面はケズリで一部指頭圧痕が残る、口縁部は内・外面ともに横ナデ。

3は須恵器の杯身である。端部をやや肥厚させる形態を持ち、口縁基部に沈線を施す、特徴的な資料である。

4は弥生中期須玖Ⅱ式土器で、以東系の無頸壺の口縁部片である。鋤先口縁状を呈する。

161号竪穴住居跡（図版51、第109・110図）

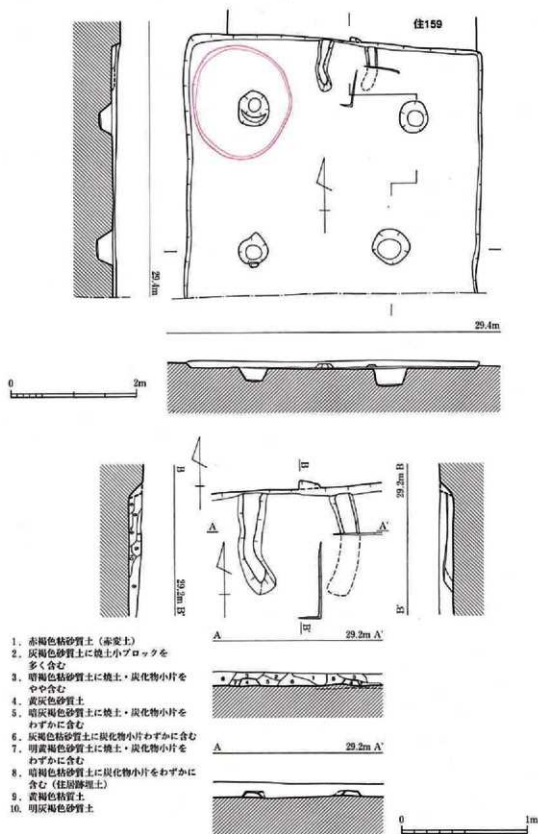
調査区やや東よりの中央部に位置し、20号溝と25号溝に挟まれた場所にある住居跡である。北側の半分ほどを156号住居跡により破壊されるほか、中央部を攪乱により大きく破壊され、南西部ではコーナー部分を52号土坑により、南西の支柱穴の付近をピットにより破壊される。その他の支柱穴は、南東部に完全な形のものが1つ確認されたほか、北西部のものも156号住居跡の支柱穴と切り合うものが確認された。また、北東部の支柱穴については、156号住居跡のものとはほぼ同じ場所につくられたものと考えられ、他の本住居跡に付属する柱穴は確認できなかった。北壁中央部に長方形の掘り込みを検出した。深さは床面から10cmほどと浅い。本遺構を破壊する住居跡が7世紀初頭頃のものであり、出土土器片等から、6世紀後半に比定して大過あるまい。また、覆土から磨製石包丁（第264図26）が出土している。

出土土器（第116図5・6） 5は土師器で、甗状の底～胴部を有する甕の口縁部片であろう。如意状に外反した口縁部のみが残る。

6は弥生中期須玖Ⅱ式の鉢形土器の屈曲口縁部片である。端部は跳ね上げ状を呈する。

162号竪穴住居跡（第118図）

2区東側の南隅で検出した。住居跡の両側の大半は調査区外に広がっていた。165号住居跡と重複し、これを破壊する。当初、本住居跡と165号住居跡を同一の住居跡と考えて調査を進めていたが、カマド付近を精査したところ、これが図示したような位置にある突出型のカマドで



第113図 158号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

あることが判明し、再度住居跡のラインを精査した結果、2つの住居跡が重複していることが確認できた。このため、先行して調査を進めていた本住居跡の西側半分については、壁を破壊してしまっただけでなく、北壁に突出型のカマドを持ち、このカマドを中央として折り返すと、東西推定幅は3.2ほどを測る計算になる。出土土器から時期を比定するのは困難であり、時期を明確にすることはできないが、カマドの形態等から6世紀後半以降であろう。埋土中から鉄製手鎌(第270図18)が出土している。

カマド(第118図) 北壁に突出型のカマドを検出した。住居跡の西側の壁を破壊してしまっただけでなく、本カマドが北壁の中央部に位置するかどうかは不明である。また、上述した調査時の不手際により、本カマドの袖を完全な形で検出できなかった。突出部の掘り込みは幅40cm、奥行30cmの小形のもので、残りの良かった左袖の長さが25cmほどを測る。この袖の先端部の燃焼部前面に赤変した焼面を検出した。また、奥壁・側壁奥側の中位以上にススの付着による黒変部を確認した。埋土は4層に分層でき、最上層が住居跡の埋土、2層がカマド天井の崩落土、3層が床面直上に堆積した灰層で、最下層には地山に類似した堆積層が薄く認められた。この層はカマド使用時にすでに形成されていたものであろう。したがって本カマドは灰の掻き出しが行われず、廃棄後すぐに天井部が崩落し、その後住居跡とともに埋没したものと考えられる。カマド付近から祭祀用の土器が出土しており、本カマドは意図的に天井部を崩落させた可能性がある。

出土土器(図版114、第116図7～9) 7～9は土師器である。7は大形の壺の底部片である。おそらく歯状の胴部と如意状に外反する口縁部を持つものであろう。8・9は小形の手握り碗で、カマド付近から出土しており、カマド廃絶時の祭祀に使用されたものである可能性がある。

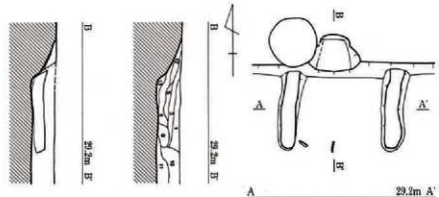
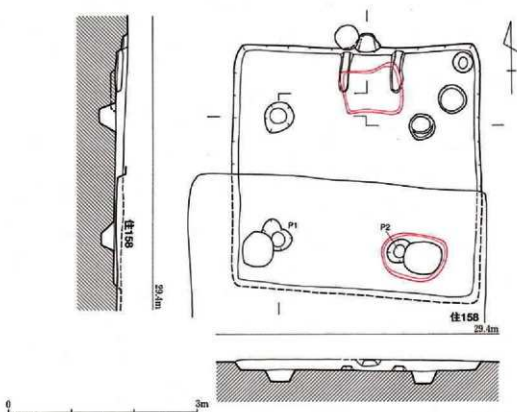
163号竪穴住居跡(第118図)

2区東側の南隅で検出した。上述162・165号住居跡の東側の隣接するが、切り合い関係は確認できなかった。南側の半分以上が調査区外に広がっており、東西幅のみが確認できておおよそ3.8mほどを測る。北壁の中央やや西よりに、隅丸長方形の土坑を確認した。この土坑の上位から弥生時代中期の土器が集中して出土しているのが確認できたが、土坑内からの出土は認められず、埋没後の廃棄であろう。したがって本土坑が住居跡に伴うものかどうかは明確にしたい。ほかに床面からは遺構は検出できなかった。住居跡の壁は20cmほどが残存していた。出土土器から弥生時代中期後半～末に位置づけたい。

出土土器(第116図10～13) 10は鋤先口縁壺の口縁部片であろうか。端部を上方に引き出して跳ね上げ状の意匠を施す点が特徴的である。11～13は甕である。11は口縁部片、12はほぼ全体形が判明し、13は底部片である。11・12の口縁部はいずれも端部を丸く収める屈曲口縁部であるが、11の口縁部上面は強いナデによりわずかに凹面を形成する。12は頸部に4条の浅い沈線を巡らせる。以上の土器はいずれも弥生時代中期須玖Ⅱ式のやや新相に属し、中期後半～末に比定できよう。

164号竪穴住居跡(図版51、第118図)

調査区東側の南隅で検出した住居跡である。163号住居跡の北側に位置し、10号掘立柱建物



1. 暗灰褐色粘質土に焼土・炭化物ブロックわずかに含む
2. 黄白色粘土ブロック
3. 暗褐色粘質土に焼土ブロック多く含む
4. 茶褐色砂質土
5. 赤褐色粘砂質土（焼土ブロック）
6. 暗褐色粘砂質土に焼土細片がわずかに含む
7. 赤褐色砂質土に焼土小片を多く含む
8. 茶褐色砂質土
9. 暗褐色砂質土に炭化物小片わずかに含む
10. 暗褐色粘砂質土に焼土・炭化物わずかに含む（住居跡土上層）
11. 暗茶褐色粘質土に焼土小片わずかに含む（住居跡土下層）
12. 黄灰褐色砂質土
13. 暗黄灰褐色砂質土
14. 赤褐色砂質土
15. 暗茶褐色砂質土にわずかに焼土を含む
16. 暗茶褐色砂質土



第114図 159号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

跡と切り合い関係があってこれに先行する。東西にやや長い長方形を呈し、規模は4.5×3.4mを測る。壁の残存深さは10cmほどである。埋上は古墳時代遺構のものと比較して砂質分が多く、弥生時代の遺構と考えられる。床面からは多数のビットを検出したが、柱穴としてよいと考えられるものはない。中央やや南寄りから、浅いビットを検出したが、このビットの埋土中に炭化物の小片が多く含まれていた。炉跡であろう。出土土器はすべて弥生中期須玖Ⅱ式土器であり、中期後半に位置づけられる。埋土から磨製石鎌（第264図14）が出土（写真）。他に扁平片刃石斧（第264図19・20）磨製石包丁（第264図27）が出土。

出土土器（図版114、第116～117図14～32）すべて弥生土器である。14は壺形土器の底部片であろうか。胴部下半にまで丁寧な横方向のナデを施しており、以西系の無頸壺の可能性が高い。15は壺の胴部片である。胴部最大頸部分に断面三角形の突帯を付し、突帯の裏面には突帯貼り付け時の指頭痕が残る。その他は内・外面ともにナデ調整。16～23は甕形土器の口縁部片である。いずれもバケツ状で上半部がやや膨らむ底～胴部を有し、口縁部は鋸先あるいは屈曲口縁で、端部の仕上げにはいくつかのバリエーションがみられる。胴部調整は外面ハケメ、内面ナデで、口縁部はすべて横ナデである。16は鋸先口縁を有する。17・19～23は程度の差こそあれすべて口縁端部上面に強いナデを施して口唇部上側を引き上げ、弱い跳ね上げ状に処理するものである。18は口唇部を四角く収めるものである。24～30は同じ甕形土器の胴～底部片である。底径や底部厚さにやや幅はあるが、すべて外面ハケメ、内面ナデを施し共通性が高い。31は器台である。外面ハケ、内面ナデ調整。32は椀である。外面は幅の広い原体によりヘラミガキ調整（あるいは半乾燥時の強い板ナデ）、内面はナデ調整を付し、内・外面の全体に丹塗りを施す。これらの資料はすべて弥生中期須玖Ⅱ式のやや新相に属し、中期後半～末に位置づけられよう。

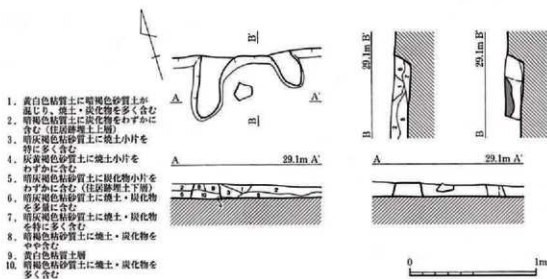
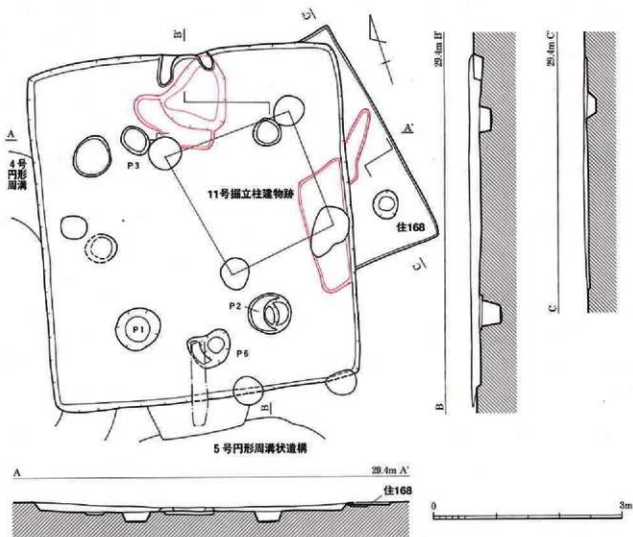
165号竪穴住居跡（第118図）

2区東側の南隅部で検出した。南側のほとんどが調査区外に広がるほか、調査区内で検出された部分の大半も162号住居跡により破壊されていた。おそらく東側で163号住居跡と切り合い関係を持つと考えられるが、調査時の不手際で先後関係を確認できなかった。東西幅を確認でき、約3.4mを測る。壁の深さは20cm弱が残る。床面からビットを1基検出したが、非常に浅く主柱穴と考えるには無理であろう。土師器の小片をわずかに出土したが、時期は不明であり、切り合い関係から6世紀代以前と考えられる。

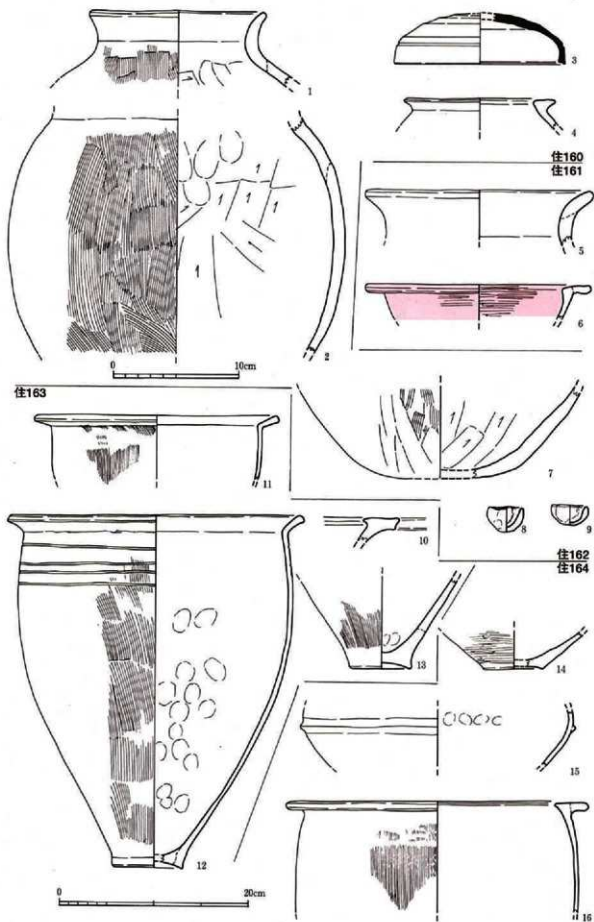
166A号竪穴住居跡（図版51、第119図）

2区最東端で検出した。東側の半分弱が調査区外に広がっており、西壁のすべてと北・南壁の一部が残る。この残りの良い西壁の中央部付近に、内接型のカマドが検出された。166B号住居跡と切り合い関係を持ち、本住居跡が新しい。床面からは、主柱穴の可能性のあるビットを4基検出した（P1～4）。いずれも30cm以上の深さがあるが、位置関係がややいびつであり疑問も残る。住居跡の壁は大きく削平されており、10cm程度が残るのみであった。また、埋土から鉄鎌（第270図2）が出土している。出土土器等から7世紀初頭の所産であろう。

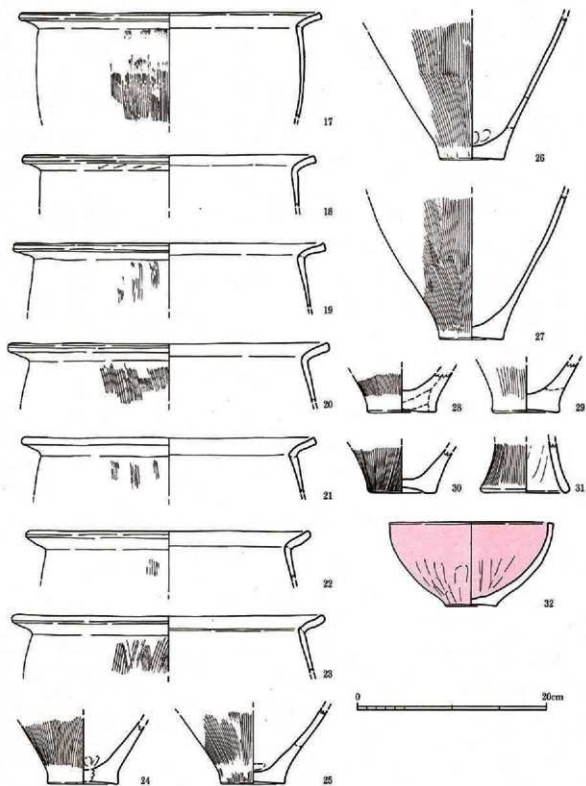
カマド（図版52）住居跡の西壁中央部やや北寄りに、内接型のカマドを検出した。長さ50～60



第115図 160・168号竪穴住居跡、160号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)

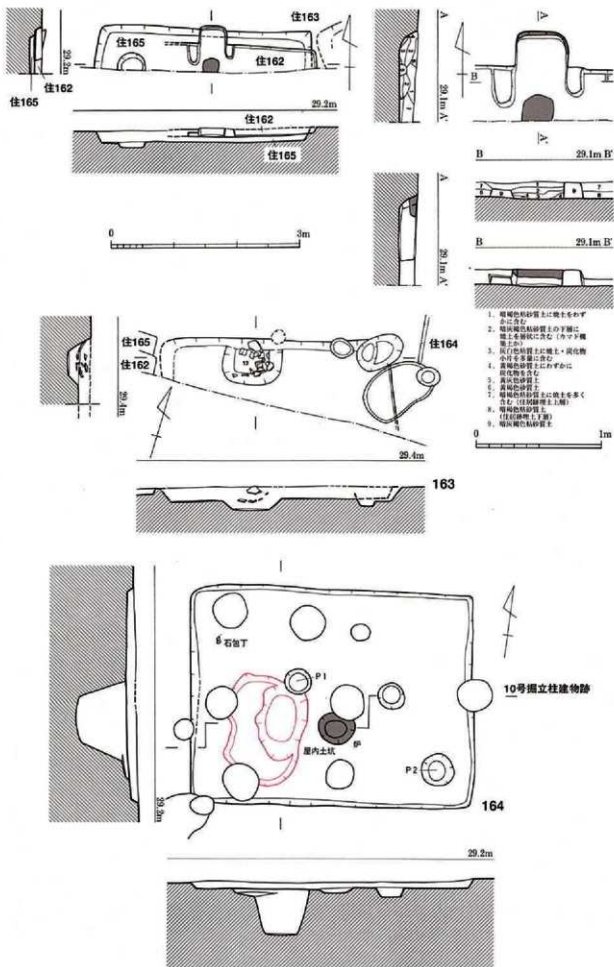


第116图 160~164(1)号竖穴住居跡出土土器実測図(1~3・5・8・9は1/3、他は1/4)

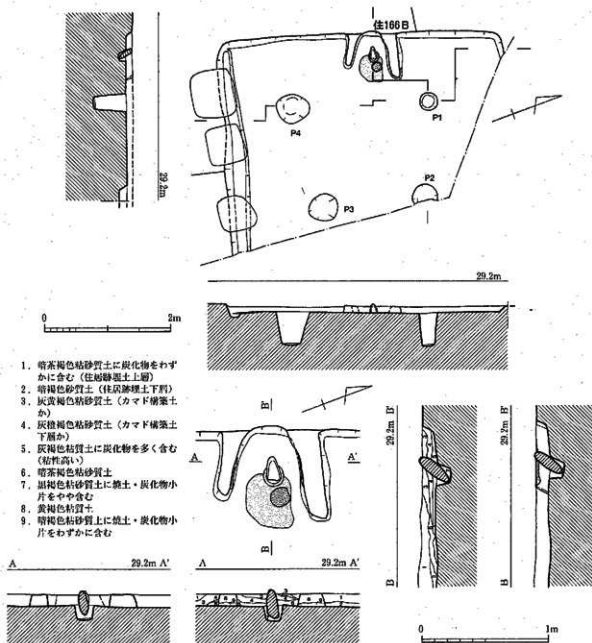


第117図 164号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(1/4)

cm 程度を測る二本の袖が「ハ」字状に造り付けられており、袖間の間隔は奥壁部分で35cm、開口部付近で65cm 程度を測る。燃焼部のほぼ中央部で、立てられたままの状態の支脚を検出した。遺構面検出時に重機により先端を引っかけられて斜めに傾いているが、本来は直立している



第118図 162~165号竪穴住居跡・162号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)



第119図 166A号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30)

たものであろう。支脚の前面には被熱による赤変部が広がり、その中心部には硬化面が形成されていた。埋土は大きく3層に分けられ、最下層にはカマド床直上に堆積した灰層が堆積し、その上にカマド構築土と考えられる焼土や炭化物を大量に含む層(3・4)が堆積していた。この層はカマド前面部に広く広がっており、このカマドの天井部は前面に引き倒されたような形でつぶれたものとみられる。さらに、この上層から住居跡の埋土が堆積していた(1層)。出土土器(図版114、第121図1~3) 1・2は土師器である。1は高杯の杯部である。中位で屈曲して直線的に斜め上方に伸びる器形を有し、内・外面ともにヘラミガキ調整を行う。口縁端部がわずかに内側に湾曲する。2は甗状の胴部を有する甗形土器の胴・口縁部片である。頸部の締まりが比較的緩い。内面ヘラケズリ、外面ハケメ調整を施す。

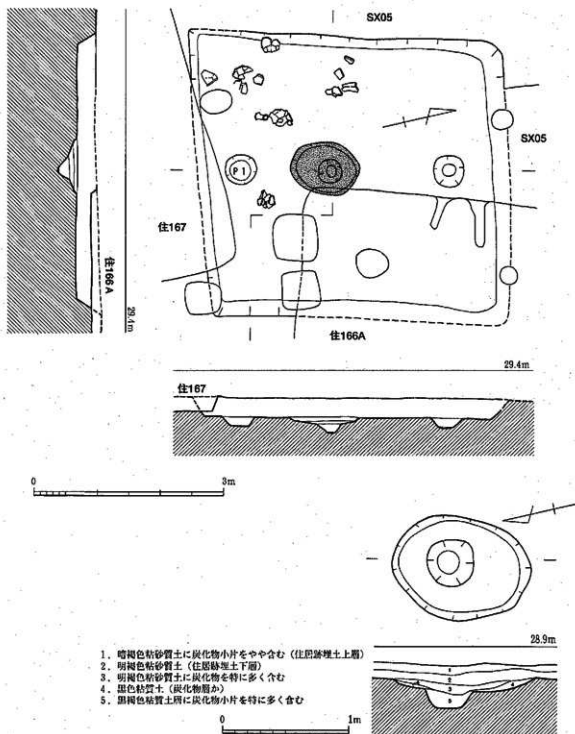
3は須恵器の杯蓋である。平坦な天井部から緩やかに屈曲して口縁部に至る。口縁部内面には小さな段を形成する。径は13.1cmを測る。以上の土器は7世紀初頭に位置づけられよう。

166B号竪穴住居跡（図版52、第121図4～15）

2区最東端部で検出した。166A号住居跡と東側で切り合い関係にあり、本住居跡が先行する。また、南側で167号住居跡にも切られる。西側で性格不明遺構SX05と切り合い、本住居跡が新しい。本住居跡の埋土は隣接する166A・167号などは異なり地山によく似た砂質分が多く、住居ラインの確定が困難で、北側の壁の検出に失敗して一部を飛ばしてしまった。平面形は南北に長いややびつな長方形で、長軸5m、幅4.5mを測り、長軸方向の中心ラインに沿って2基の主柱穴が検出された。また、この主柱穴に挟まれた中央部で炉跡を確認した。住居跡の壁の残存深さは30cm程度と比較的深く、主柱穴は15cm程度と浅い。炉跡は住居跡の長軸方向に長い楕円形状を呈し、中央部がさらに一段深く掘り込まれている。この掘り込まれた部分には炭化物の小片が集中していた。住居跡の南西部の埋土中から多くの土器片が出土したが、床面直上から出土したものは認められず、埋没時に投棄されたものであろう。出土土器から、弥生時代後期中葉に位置づけられる。

出土土器（図版114・115、第121・122図4～15）5を除き、すべて弥生時代後期の土器群である。5は甕蓋の天井部片である。天井端部が外側に強く張り出す。これのみが弥生中期後半須玖Ⅱ式に比定できる。

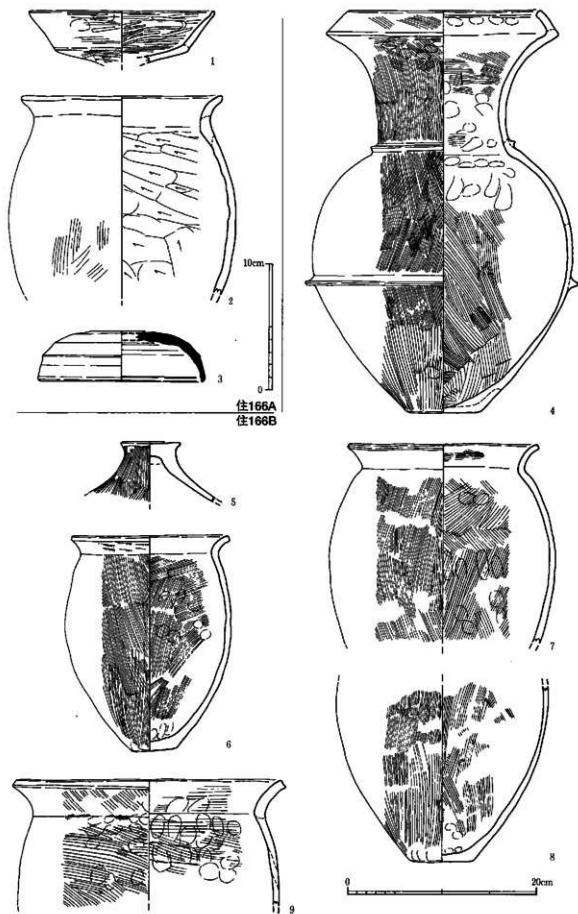
4はほぼ完形に復元できた二重口縁甕である。底部はわずかにレンズ状を呈し、胴部最大径はわずかに上部にあって、最大径よりやや下半に断面三角形の突帯を付す。胴～頸部境にも突帯を付し、そこから大きく湾曲しながら開いて口縁屈曲部まで至り、鋭く反転してわずかに内湾しながら短く上方に伸び、口縁端部は四角く収める。胴～頸部外面と胴部内面はハケメ、胴部内面上半から頸部内面下半に指頭圧痕を多く残し、頸部内面もハケメ調整を施す。口縁部は外面にハケメ、内面に指頭圧痕を残しながら横ナデを施す。6～11は「く」字状口縁を有する甕形土器である。いずれもわずかにレンズ状を呈する底部と上半部がやや強く膨むバケツ状の胴部、「く」字状に外反する口縁部を有し、内・外面にハケメ、口縁部には横ナデを施す。胴部上半の膨らみは個体によりやや差が見られ、強く孕む7やあまり膨らまない9などが見られる。底部形態にもわずかにバリエーションが認められ、ほとんど平坦なものとして8が、やや丸底化しつつあるものとして10が挙げられる。12～14は高坏である。12は脚部のみが残る資料で、外面にヘラミガキ後丹塗りを施す。13は坏部下半までが残り、坏部内面はヘラミガキ、脚部内面はナデ、外面は坏・脚部ともにヘラミガキを施す。おそらく14と同様坏部に段を有するものであろう。14は坏部が残存し、坏部に段を形成して口縁部がやや短く伸びるものである。調整は13と同様に外面全体と坏部内面がヘラミガキ、脚部内面はナデを施し、口縁部は内・外面ともに細いへら状原体により縦方向に暗文を施す。15は短頸甕である。底部はわずかにレンズ状化し、口縁部は「く」字状を呈する。内・外面ともにハケメ調整を施す。以上の土器群は弥生後期高三濤式の最新段階～下大隈式の古段階に比定できる良好な資料群であると考えられよう。



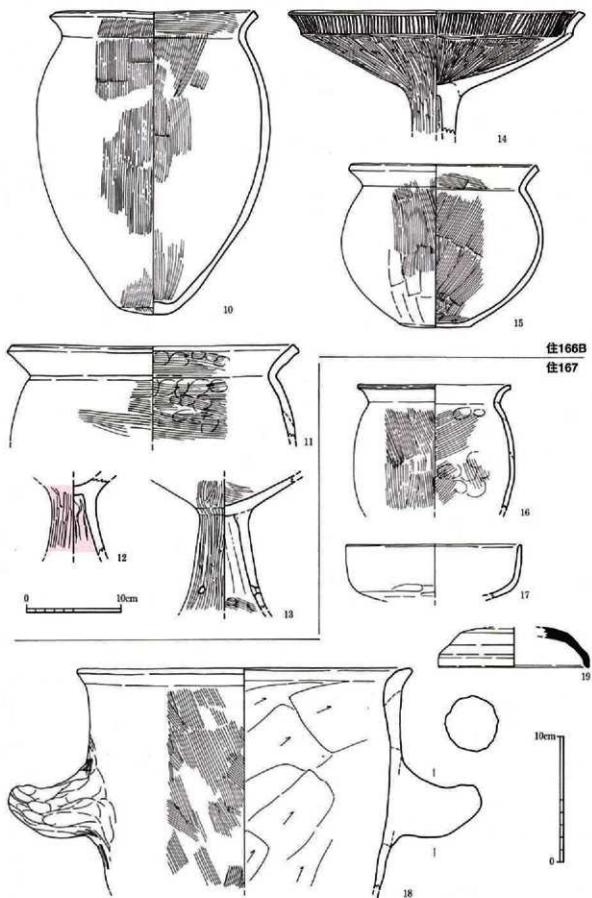
第120図 166B号竪穴住居跡・炉跡実測図（1/60・1/30）

167号竪穴住居跡（図版53、第123図）

2区最東端部の南端で検出した住居跡である。南側の大部分が調査区外に広がっており、北壁がすべて把握できたほかはほとんど調査できなかったが、この北壁の中央部付近に内接型のカマドが付設されていた。北側で166B号住居跡・性格不明遺構SX05と切り合い、本住居跡が後出する。住居跡の深さは深いところで30cm 近くが残っていた。床面からは主柱穴の可能性の



第121图 166A・B(1)号整穴住居跡出土土器実測図(1~3は1/3、他は1/4)



第122図 166B(2)・167号竪穴住居跡出土土器実測図(17・18は1/3、他は1/4)

あるピットを2基検出したが、いずれも15~20cm程度と浅く、位置がコーナー部付近に寄りすぎていてやや疑問が残る。出土土器から、7世紀初頭に位置づけられる。

カマド(図版53、第123図)北壁中央部付近に内接型のカマドを付設していた。住居跡の壁への掘り込みは認められず、二本の袖を「八」字状に作り付けて構築するタイプのカマドである。両袖の長さは50cm程度を測り、袖間の距離は奥側で50cm、開口部で65cm程度を測る。両袖の先端部の中央に被熱による赤変部を確認した。さらにその中心部は高温の影響によって硬化面を形成していた。埋土は大きく4層に分層でき、最上層の1層は住居跡の埋土(上層)と共通する。2層は下部に焼土を帯状に含み、カマドの天井部が崩落したものであろう。4層はカマド使用時に堆積した灰層である。さらにこの下層に炭化物や焼土を含む5層が堆積しており、この層はカマドの使用中に天井部が剥落するなどによって堆積した層であり、廃棄前のカマド床面を形成した層と考えられる。

出土土器(第121図16~19)は弥生後期高三瀬式の変形土器である。「く」字状口縁を有する。内・外面ともにハケメ調整を施し、口縁部のみナデ仕上げ。

17・18は上師器である。17は底面が平坦で口縁部がやや長く上方に伸びる杯である。底部内面はケズリあるいは板ナデを施す。18は甔の上半部である。比較的短い把手を2つ付す。口縁端部は短く如意状に外反する。外面ハケメ、内面ケズリ調整。

19は須恵器の杯蓋である。全体に湾曲する器形である。以上の土器群はおおよそ7世紀初頭に位置づけられよう。

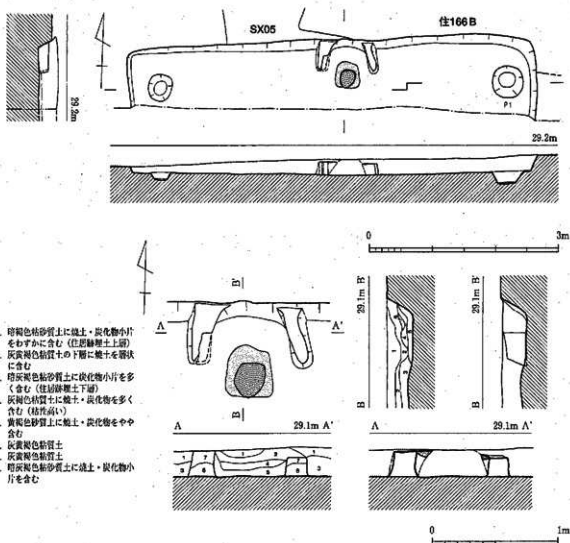
168号竪穴住居跡(第115図)

2区東隅のほぼ中央部に位置し、160号住居跡に西半分を大きく破壊される住居跡である。残存深さは浅く、壁の深さは数cm程度であった。土器はほとんど出土しておらず、時期は明確にできないが、切り合い関係から6世紀中葉以前に位置づけられよう。

b. 掘立柱建物跡

9号掘立柱建物跡(図版53、第124・125図)

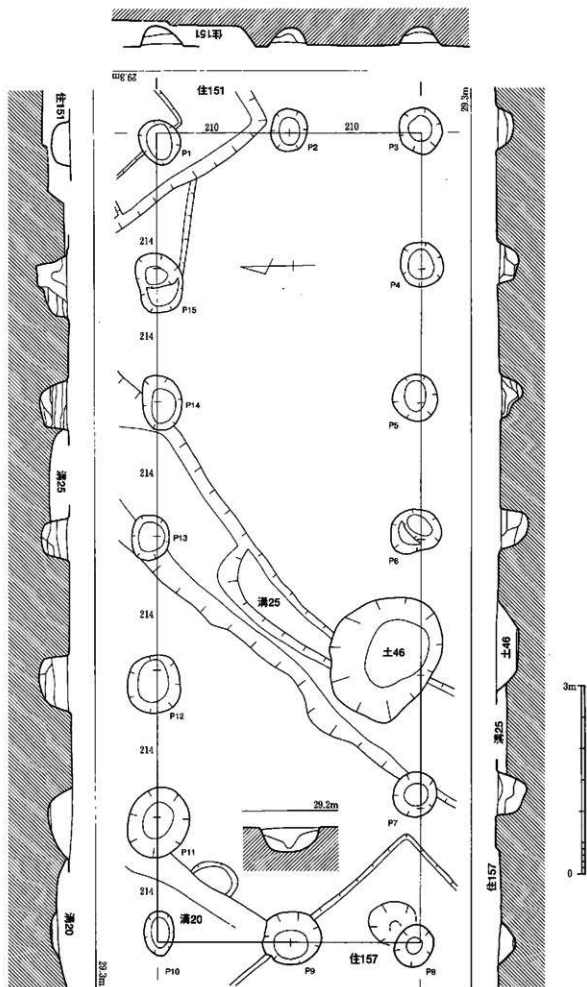
9号掘立柱建物跡は2区東中央に位置し、46号土坑にP6-P7間の柱穴1基を切られ、151・157号住居跡、20・25号溝を切る、梁間2間、桁行6間の東西棟建物。検出段階では2×4間程度の建物と考えて調査を行ったため、切り合い関係を間違えたものや、ただのピットとして調査したために土層断面を観察できなかった柱穴もある。建物主軸方位は北に対して1.25°東を向く。桁行総長が1.284cmで、柱間寸法は心々距離で214cm(7尺)の等間、一尺30.6cm前後の尺度となるが、柱掘方中心位置と柱推定位置とがずれる柱穴も存在する。梁行総長は420cm、柱間寸法は心々距離で210cm(7尺)の等間、一尺30.0cmの尺度となり、桁行の尺度とほぼ同じになる。床面積は53.9㎡を測る。堂畑遺跡1次調査1区1号掘立柱建物跡に次ぐ規模となる。柱穴掘形は径0.8m前後の円形で、深さは0.3~0.6m前後の建物規模にしてはやや小さめの柱穴。柱痕跡は土層観察したすべての柱穴で認められず、P15の土層からも柱はすべて抜いたものと考えられる。柱抜き取り後はP14の土層を見ると黄褐色系砂質土で丁寧に埋めたことが観察でき、他の柱穴埋土も黄褐色系の土であることから、全ての柱穴で柱抜き取り後に埋めた



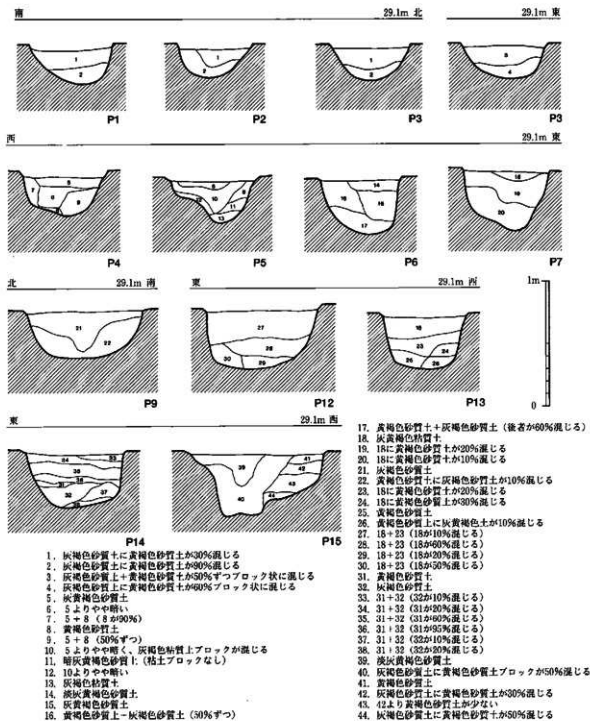
第123図 167号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

ことが分かる。当建物跡南には1×4間以上の東西棟建物である10号掘立柱建物跡が存在するが、建物主軸方位や形態・柱間寸法等が当建物跡とは異なるものの、埋土の色・質は近いため、あまり年代的に隔たるものではない。切り合い関係から7世紀初頭～7世紀後半という時期に限定されるが、出土土器からは時期を決定できない。当建物跡の方位はほぼ真北であり、7世紀末～8世紀後半の当住居跡上層(第1面)住居群とほぼ同じ軸を示すことから、7世紀後半の建物跡と考えられる。とすると1次調査1号掘立柱建物跡も7世紀後半と想定されているが、1号建物跡は柱穴が方形で、規模も大きく、当建物跡より後出する可能性が高いことから、当建物跡は7世紀後半直前段階と位置づけておきたい。

出土土器(第126図1～11) 1は土師器小形甕口縁部。色は黄橙色。P13出土。2・3は土師器把手。2は外面をハケ調整するもので、色は橙褐色。P7出土。3は把手先端下部に棒状工具による刺突が認められる。内面はケズリ調整。色は褐色。P12出土。4は小形須恵器杯蓋で、弱く外反する口縁部との境には鈍い稜を持つ。色は青灰色。P6出土。5は須恵器杯身口縁部。色は暗灰色。P12出土。6は須恵器甕胴部で、外面は平行タタキのち雑なカキ目を施す。



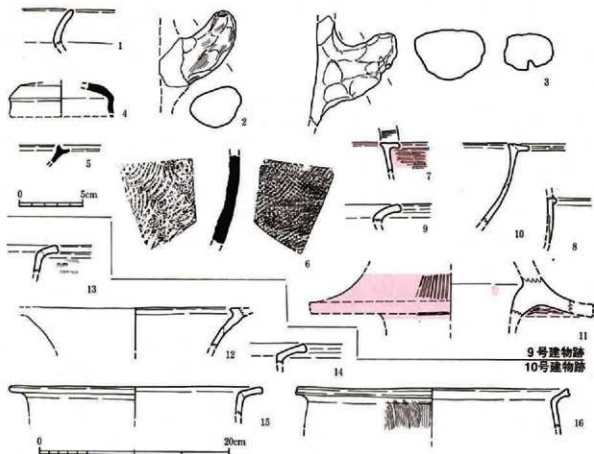
第124图 9号掘立柱建物跡実測图 (1/60)



第125図 9号独立柱建物跡柱穴断面実測図(1/30)

外面には灰がかかり、色は外黒色、内灰色。P15出土。

7は弥生中期小形鎌先口縁鉢口縁部。外面には横ミガキのち丹塗り、口縁上端部は暗文状のミガキ、内面は横ミガキで、口縁内端部付近のみ丹塗り。外面にはススが付着し、色は外黒色、内黄褐色。P15出土。8は1条の三角突帯を貼り付けた壺腹部。外面には黒斑あり。色は黄褐色～黒色。P12出土。9は小形壺か鉢口縁部。色は黄褐色。P1出土。10は口縁部がやや外傾する鎌先口縁鉢で、外面には黒斑あり。色は黄褐色～橙色。P13出土。11は筒形器台胴部。罫



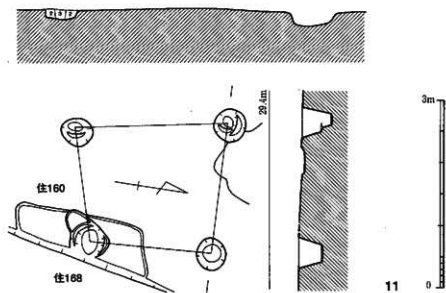
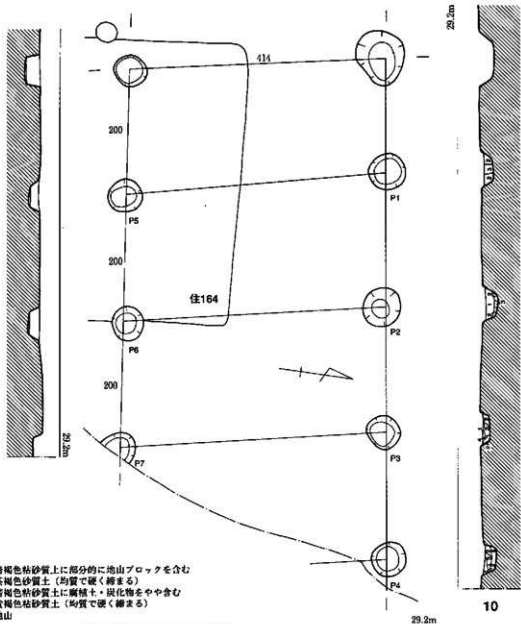
第126図 9・10号掘立柱建物跡出土土器実測図（1～6は1/3、他は1/4）

部外面上部は暗文状の縦ミガキ、胴部下部もミガキを施し、外面全体には丹塗りが認められる。生地は灰黄褐色。

出土土器はいずれも柱掘り方埋土からの出土であり、時期決定できる状態の土器等の出土はない。

10号掘立柱建物跡（図版51、第127図）

2区東側の南端で検出した掘立柱建物跡である。東西棟で、梁行は1間。東側は調査区外に続いており、桁行は検出した範囲内で4間を測る。柱穴の位置が北列と南列でややずれており、これを同一の建物とするのにややためらいもあり、当初は二列の櫛列の可能性も考えたが、北側に隣接して同様の大形掘立柱建物である9号建物跡が検出されており、埋土の色、質が近く軸もややずれるもののほぼ並行する位置にあることから、同様の掘立柱建物跡と判断した。削平が著しく、柱穴の深さは20cm弱程度しか残っていない。164号住居跡と切り合いを持ち、本建物が新しい。柱穴間距離は梁行が4.2m前後、桁行が1.8～2.2mを測る。出土土器はすべて弥生土器であるが、埋土からは弥生時代の遺構である可能性は低い。9号建物跡で前述したが、当建物跡は7世紀後半直前段階と考えられる9号建物跡とあまり時期的な隔たりにないと考えられることから、7世紀代に収まる建物跡である。9号建物跡とは梁間は1間と2間の違いはあるものの縦長は同じであり、北、南の柱穴列がややずれることから、9号建物跡より前



第127図 10・11号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

の段階の建物跡の可能性が高いか。

出土土器（第126図12～16）12は鋤先口縁壺の口縁部片である。口縁端部が欠失している。13～16は屈曲口縁を持つ壺形土器の口縁部片である。端部を四角く収める13・15と、わずかに跳ね上げ気味に仕上げる14・16が認められる。これらの資料はすべて弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式土器のやや新相に位置づけられ、本建物と切り合い関係を持つ164号住居跡からの混入と考えられる。

11号掘立柱建物跡（図版50、第127図）

2区東隅で検出した1×1間の掘立柱建物跡である。160号住居跡と切り合い関係を持ち、本建物跡が新しい。平面形はややいびつな方で、柱間距離は東西、南北両方ともに2～2.1mほどを測る。竪穴住居跡の柱穴のみが残存したものである可能性が高いが、確実ではないため、ここでは掘立柱建物跡として報告しておく。柱穴の残存深さは40cmほどを測り、残存状況は比較的良い方であるが、埋上には大きな変化は認められなかった。柱穴からは土師器の小片が出土したのみでいずれも図示できなかった。切り合い関係から6世紀中葉以降に位置づけられる。

c. 土坑

38号土坑（図版54、第128図）

38号土坑は2区西中央やや北寄り、146号住居跡西に位置し、15号溝に切られ、上坑北東部を壊される。またこの付近は第1・2面の検出面レベル差がないため、第2面の遺構の残りは総じて悪く、北壁は削平されて、壊されている。現状で長軸242cm以上×短軸173cm以上の東西に長い楕円形土坑となるか。残りの良い南壁部分で深さ14cmを測り、床面は弱い凹凸が見られる。床面や残存する壁の状況から壁は緩やかに立ち上がることが予想される。埋土は良く締まる暗黄褐色粘質砂。覆土から多量の石・土器が床面からは浮いた状態で出土した。土坑形態と遺物の出土状況は1区17号土坑・2区第1面37号土坑と似る。

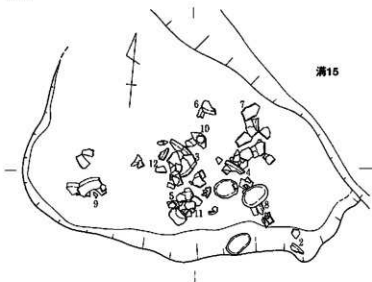
出土土器（図版115、第129図）1は弥生中期丹塗広口壺胴部。内面は工具ナデで調整。生地は茶褐色。2～9は弥生中期壺。2は口縁端部がやや垂れ下がり、器表は荒れ内外面の調整不明。色は茶褐色。3は口縁上端部が窪むもので、口縁内端部がわずかに突出する。外面には黒斑あり。色は暗黄褐色～茶褐色。4～6は跳ね上げ口縁壺。4は器壁が薄いもので、色は茶褐色。5は口縁内端部がわずかに突出するもので、外暗褐色、内橙褐色を呈する。6は頸部外面からやや下がった位置に1条の凹線を巡らすもので、外面には二次加熱痕がある。色は橙褐色。7はくの字状の口縁部で、頸部外面下に2条の凹線を巡らす。色は橙褐色～灰褐色。8は頸部外面下に2条の凹線を巡らす。色は灰黄褐色～黄褐色。9は頸部外面下に1条の凹線を巡らす。始点と終点が繋がっていない。外面には二次加熱痕・スガが認められる。色は灰黄褐色～黄褐色。10は弥生中期甕蓋で、内面には工具痕、外面には黒斑あり。色は黄褐色～橙褐色。11は弥生中期甕下部で、外面は二次加熱のため器表が荒れ、調整不明。色は外赤褐色～黒色、内灰褐色～黄褐色。

12は弥生中期鋤先口縁丹塗高環部で、環部内面は横ミガキ、外面は摩滅しているがミガキ



91層

29.3m



溝15

29.3m



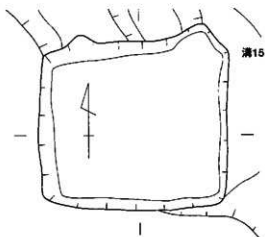
〈土39土層〉

1. 黄褐色細砂に1mm位の炭ブロック少量混じる
2. 1より炭がやや多い
3. 黄褐色細砂に炭ブロック多く含み、ややしまる
4. 黄褐色細砂+灰黄色細砂(炭ブロックで含まない)
5. 明灰黄色細砂+灰黄色細砂に炭ブロックが30%ほど混じる
6. 灰黄色細砂に炭ブロックが80%混じる
7. 黄褐色細砂に炭ブロックが30%ほど混じる
8. 灰黄色細砂に炭ブロック少量混じる
11. 8より炭ブロック多く含む(半分粒炭ブロック)
12. 灰黄色細砂+黄褐色粘質砂に炭ブロック70%混じる
13. 灰黄色細砂で8よりやや炭の量が多い

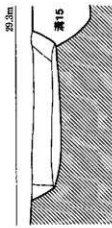


38

29.1m



溝15

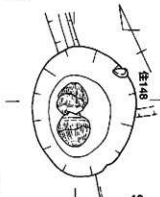


溝15

29.3m

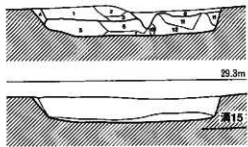


29.1m



40

29.3m 39



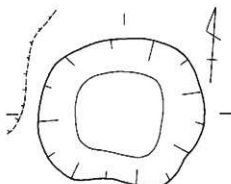
29.3m



29.3m 溝15 39



29.2m



41

29.2m



第128図 38~41号土坑実測図 (1/30)

で調整したものか。口縁上端部には暗文状にミガキを施す。13は鼓形の器台で、口縁・底部端部ともナデにより凹線状に窪む。色は橙褐色～灰黄褐色。

当土坑の時期は弥生時代中期末。

39号土坑（図版54・55、第128図）

39号土坑は2区西中央やや北寄り、146号住居跡西、38号上坑南東に位置し、15号溝を切る。土坑検出段階から覆土に多量の炭化米が混じることが確認できた。出土した炭化米の自然化学分析については、IV-2をご覧いただきたい。長軸149cm×短軸134cm、深さ23cmの方形土坑で、北東と北西端は北に若干突出する。床面はほぼ平らで、壁はやや傾斜のある立ち上がりとなる。土層からは少なくとも2回の堆積が認められ、床面近くは炭化米が多量に混じる土（太線下の部分）と上層の炭化米があまり混じらない土（1～4・8）に分けることができる。下層では6・11・13層のように炭化米がブロック状にまとまって存在することから、貯蔵形態や米を入れたまま廃棄した状況が推測できる。土坑形態から貯蔵穴として使用されたもの。出土土器で図示できるものはないが、15号溝を切ることや、周辺の住居跡との関係から古墳時代後期後半に属する可能性がある。

40号土坑（図版55、第128図）

40号土坑は2区東中央西寄り、20号溝北に位置し、148号住居跡を切る。148号住居跡ベッド状遺構と竪穴部との境を壊して造られた土坑で、長軸105cm×短軸84cm、深さ16cmの長楕円形を呈する。上坑中央では口縁部を打ち欠き、胴部を半分に分けて、北側を南側の胴部片上に被せた直口壺を確認した（1）。出土状態から壺の下に何かを置いて、被せたものと予測できるが、被せた壺の下からは何も検出できなかった。148号住居跡出土土器との時期差はないことから、同じく148号住居跡を切る365号ピットと合わせて、住居廃絶行為と何らかの関係がある可能性がある。埋土は黄灰色砂質土。

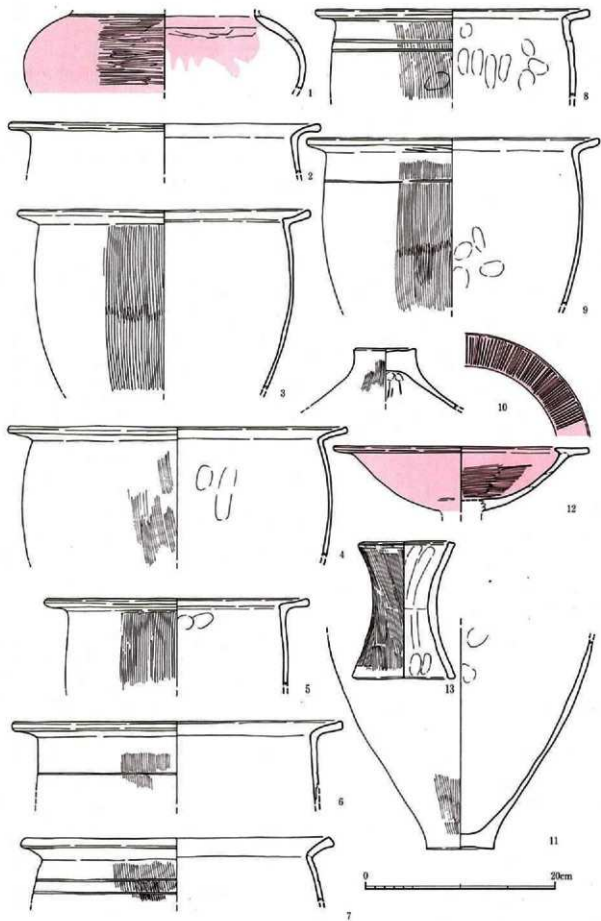
出土土器（図版115、第130図1）1は北・南側の壺片が接合したもので、継ぎ目部分にはほとんど隙間はないもの。在地系と畿内系を折衷した器形で、打ち欠いた口縁部以外は完形となる。最大胴部径24.8cm、頸部径10.0cm、残存高27.2cmを測る。内面ケズリは頸部から下がった位置から施されるが、雑なもの。色は外黄橙色～橙褐色、内灰黄褐色。出土土器から古墳時代前期中葉の土坑となる。

41号土坑（図版55、第128図）

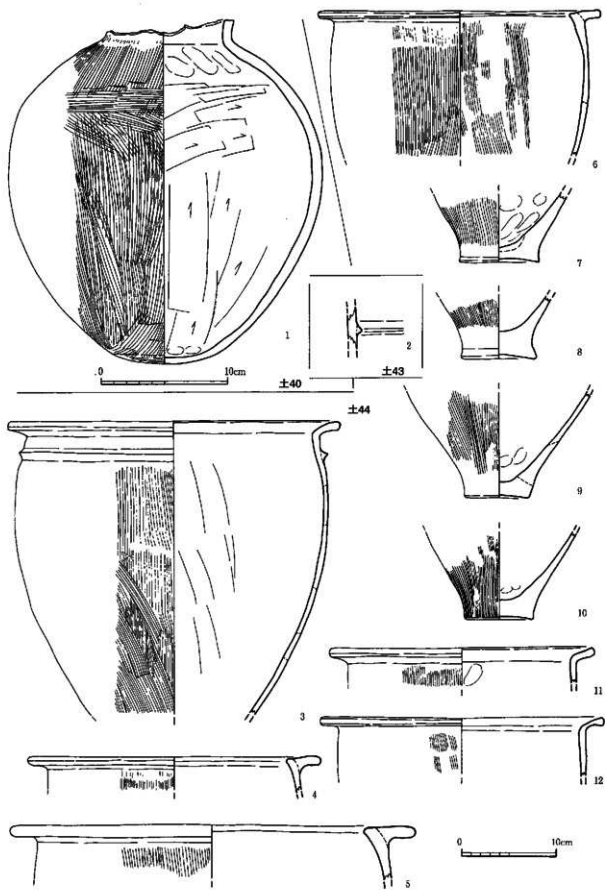
41号土坑は2区東中央西寄り北、148号住居跡北に位置する。長軸132cm×短軸116cm、深さ18cmの南東隅が若干広がる楕円形土坑となる。床面は平らで、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は暗黄灰色細砂。出土土器で図示できるものはないが、覆土から土師器甕片・弥生土器が出土している。

42号土坑（図版56、第132図）

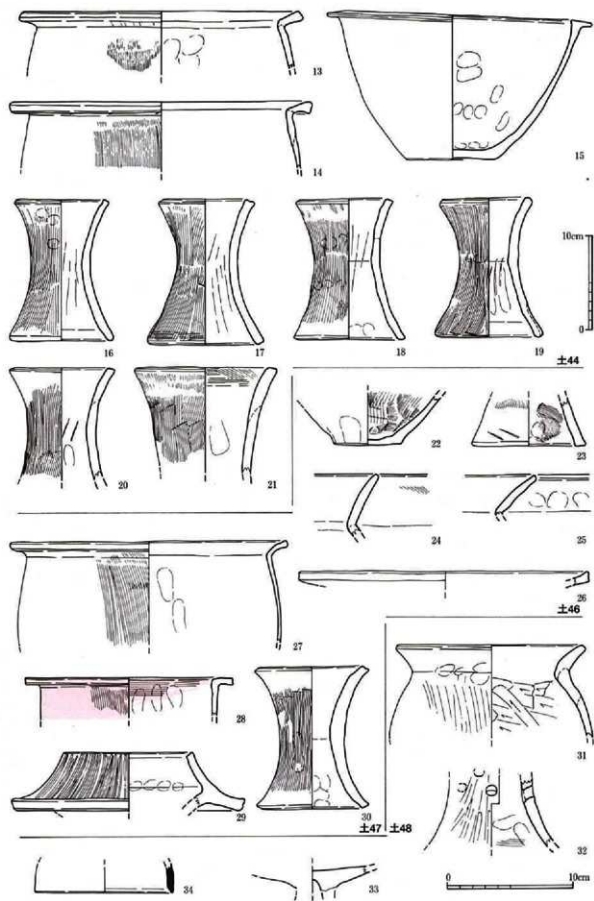
42号土坑は2区東中央やや北寄り、20・25号溝に挟まれた場所に位置し、上坑北西隅を20号



第129图 38号土坑出土土器实测图 (1/4)



第130图 40・43・44 (1) 号土坑出土土器实测图 (1は1/3、他は1/4)



第131图 44(2)・46~48号土坑出土土器实测图(22~26・31~34は1/3、他は1/4)

溝に切られる。長軸272cm×短軸180cm、深さ27cmの長方形土坑となる。床面は平らで、壁の傾斜は北壁以外はあまり急ではない。埋土は暗黄褐色細砂。出土土器で図示できるものはない。

43号土坑（第132図）

43号土坑は2区東中央北端、20号溝北に位置する。150号住居跡を切る土坑となるが、切り合い関係を間違え、150号住居跡を先に掘ってしまっている。長軸120cm×短軸102cmの楕円形土坑で、西壁で深さ27cmを測る。床面は平らで、壁の立ち上がりは比較的緩やかなものとなる。出土土器（第130図2）図示できるものは1点のみである。1は弥生壺胴部で、低平な三角突帯を貼り付ける。胎土には細粒が多く、焼成は甘い。色はこげ茶色。

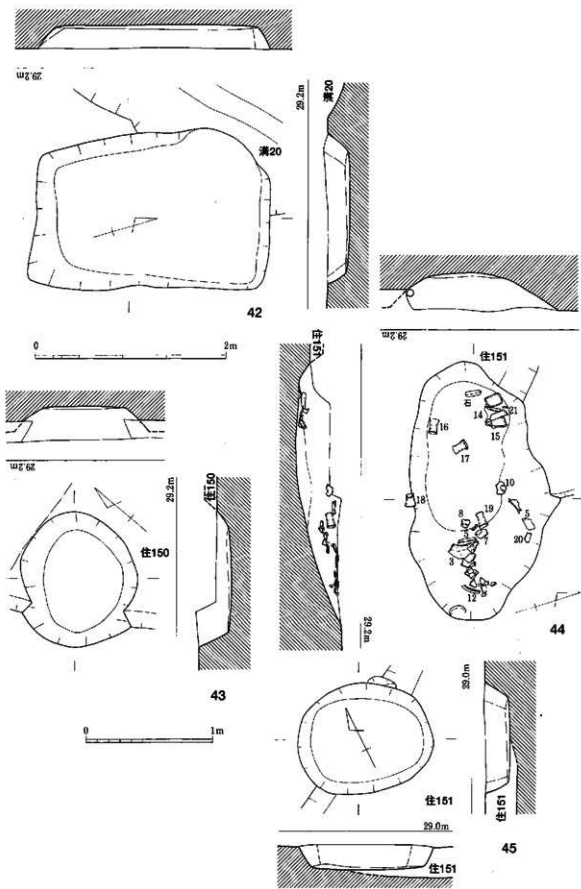
44号土坑（図版56、第132図）

44号土坑は2区東中央、9号掘立柱建物跡東に位置し、151号住居跡に切られる。調査当初は151号住居跡との切り合い関係が分からず、土坑西壁は結局151号住居跡床面まで下げてやっと切り合い関係が判明したために、151号住居跡出土土器に当土坑住居跡出土土器が混ざってしまっている。長軸304cm×短軸175cmの大型の長楕円形土坑となり、残りが良い土坑東壁上端と床面で最も高さが低くなる上坑中央との高さの差は54cmを測る。床面は平らであり、壁は床面からかなり緩やかに立ち上がる。埋土は暗黄灰色細砂。覆土からは多量の土器・石を検出した。床面近くから出土した西端の土器・石以外は、床面からかなり浮き、土坑中央に向かって落ち込んだ状態で出土した。

出土土器（図版115・116、第130図3～21） 3～14は弥生中期甕。3は口縁端部がやや下がり、頸部外面下に三角突帯を貼り付けたもの。外面は上部縦ハケが下部斜めハケに切れ、内面は工具ナデのちナデ調整。外面にはスス付着。色は外暗黄茶褐色、内橙褐色。4～6は内端面の突出が弱い鑿先口縁甕で、4・6は口縁外端部がやや上がるもの。4の外面には二次加熱痕あり。色は灰黄色～白黄褐色。5の色は白黄色。6の内面はハケのちナデ調整。外面にはスス、内面には炭化物付着。色は黄褐色～暗褐色。7～10は甕底部で、いずれもやや上げ底になる。7・8は底部外端部を外に突出させるもの。7の色は黄褐色～白黄褐色。8は外面にスス、内面には炭化物が付着。胎土には細粒を多く含み、色は外橙褐色～褐色、内黄土色～褐色を呈する。9の外面には二次加熱痕、9・10の内面には炭化物が付着。9の胎土には細粒を多く含み、色は橙褐色～暗褐色。10の色は橙褐色～褐色。11～14は甕口縁で、11・13の外面にはスス付着。11は外褐色、内橙褐色。12～14は口縁外端部がやや下がるもので、12の胎土には細粒を多く含み、色は黄褐色。13の色は灰黄色～黄褐色。14の外面頸部には工具による刻目が3つ確認できるが、1/8しか残存していないため、ただのハケ工具痕かどうかは不明。胎土には金ウモンを多く含み、色は外灰黄褐色、内橙褐色。

15は口縁部が外傾する勳先口縁鉢で、口径28.1cm、底径9.6cm、器高15.9cmを測る。外面には黒斑あり。色は外白黄褐色、内黄褐色。

16～21は鼓形の器台で、16・19は完形品。16の内面にはナデ紋り痕あり。口径8.9cm、底径10.3cm、器高15.0cm、色は外黄褐色、内橙褐色。17の内面には工具痕が残り、外面には黒斑あり。色は黄褐色。18の内面は工具ナデのちナデ調整。外面には二次加熱痕・スス付着。色は黄



第132図 42~45号土坑実測図 (43は1/30、他は1/40)

橙色。19は口径8.9cm、底径10.6cm、器高14.9cmを測る。内面には工具痕が残る。色は黄褐色。20は胎土に細粒多く含み、色は黄橙色。21の口縁内面はハケ調整。外は黄橙色、内は橙褐色。当土坑の時期は出土土器から弥生時代中期末となる。

45号土坑（第132図）

45号土坑は2区東中央、9号掘立柱建物跡北に位置し、151号住居跡北壁中央を切る。長軸158cm×短軸132cm、深さ28cmの楕円形を呈する。床面は平らで、壁の立ち上がりはやや急である。埋土は暗黄褐色細砂。出土土器で図示できるものはないが、出土土器の主体は弥生土器で、土師器甕も1点出土する。

46号土坑（図版56・57、第133図）

調査区東側の中央部で検出した土坑である。平面形は不整楕円形を呈し、25号溝を切り込み、9号掘立柱建物跡に切られる土坑となる。ただし、検出段階では9号建物跡との切り合い関係を認識していなかったため、土坑として一緒に掘ってしまった。断面図には反映されていない。深さは60cmほどを測る。弥生後期中葉の土器が多く出土しており、この時期に比定できよう。

出土土器（第131図22～26）いずれも弥生土器である。22は壺形土器の底部片である。「く」字状口縁を持つものと考えられる。底部はわずかに丸みを帯びてレンズ状を呈する。23は器台の脚部である。直線的に上方に伸びる部分のみが残存する。胴部上半で強く屈曲して外反するものであろう。24・25は「く」字状口縁壺の口縁部片か。いずれも直線的に開く口縁部のみが残存する。26は素口縁壺の口縁部片であろう。口縁端部をわずかに上方に引き出しており、跳ね上げ口縁の影響が認められる。これらのうち26は弥生中期須玖Ⅱ式、他は弥生後期高三階式の最新段階に属する。

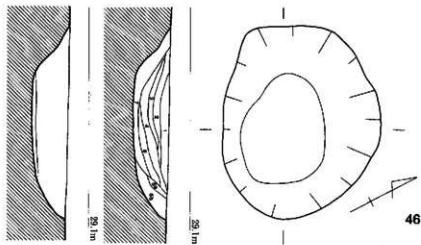
47号土坑（図版57、第133図）

2区中央やや西寄りのほぼ中央で検出した土坑である。20号溝と切り合い関係を持ち、これより新しい。平面形は南北2m、東西1.9mほどのほぼ正方形を呈し、深さは60cmほどであった。床面はほぼ平坦で、東西にそれぞれ幅10～20cmほど床面より一段高い段が形成されていた。埋土中からは土器がほとんど出土しなかった。埋土は最下層を除いて比較的色調の暗い粘質土系の土質であり、おそらく古墳時代後期以降の遺構と考えられる。

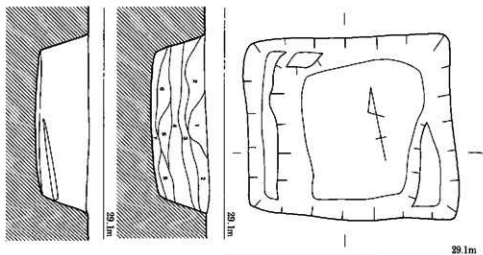
48号土坑（図版58、第134図）

48号土坑は2区東中央北端、20号溝西に位置し、149号住居跡に切られる。調査当初は149号住居跡床下掘り込みとして掘削したが、床面からの深さが95cmとなり、また埋土の違いから別遺構の土坑と判断した。長軸310cm×短軸290cmの隅丸方形の大形土坑となり、埋土は暗黄褐色細砂。床面は130cm×110cmの規模で、床面から壁が緩やかに立ち上がる。覆土下層から剥片石器（第263図8）が出土。

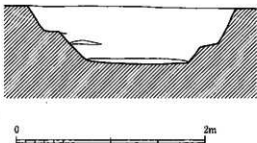
出土土器（第131図31～34）31は土師器甕。外面は粗いハケ、内面は細かいヘラケズリで調整。



1. 黄褐色粘砂質土（鉄分沈着が見られる）
2. 暗茶褐色粘砂質土
3. 明茶褐色粘砂質土
4. 暗褐色粘砂質土に腐蝕土を多く含む
- 1a. 灰褐色砂質土
- 2a. 暗灰褐色砂質土
6. 暗黄褐色粘砂質土に腐蝕土ブロックを含む
7. 黄褐色砂質土に腐蝕土ブロックを含む

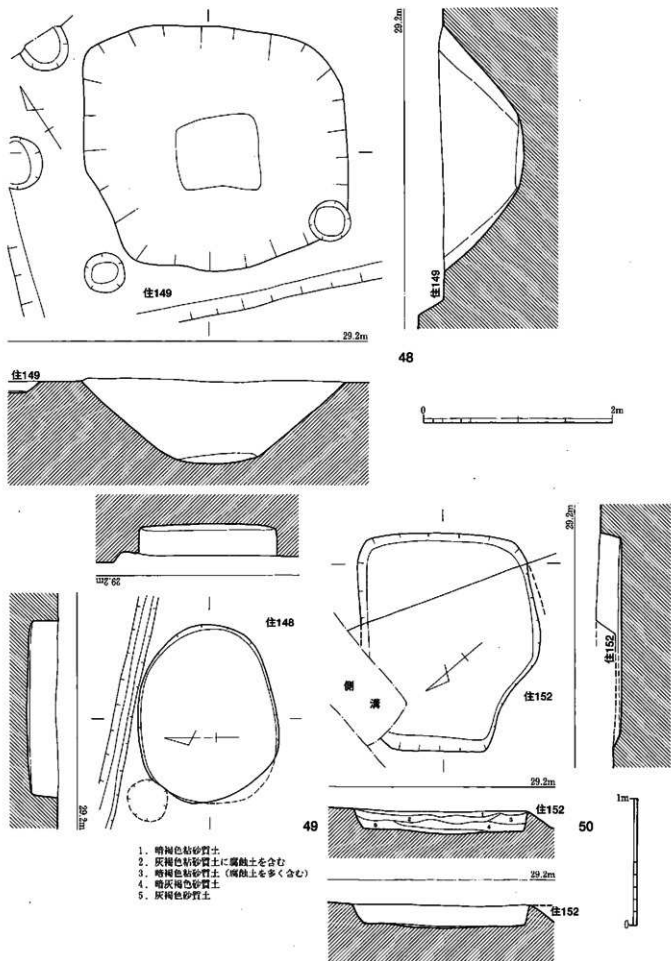


1. 暗灰褐色粘砂質土
2. 暗茶褐色粘砂質土
3. 暗褐色粘砂質土
4. 暗灰褐色粘砂質土に地山ブロックをやや含む
5. 黒褐色粘砂質土
6. 明茶褐色粘砂質土に地山ブロックをやや多く含む
7. 黄褐色砂質土（地山に類似）にやや暗褐色腐蝕土を含む

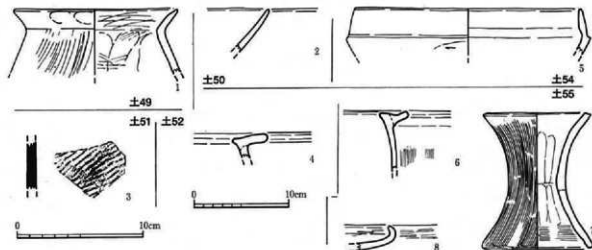


第138図 46・47号土坑実測図（1/40）

口縁部内面にはス付着。色は褐色～黒褐色。32は土師器高杯脚部。外面はケズリ状のミガキ、内面下部はハケのちナデ調整。焼成前に外からバラバラな位置に3ヶ所穿孔しているが、破片は1/4程度であることから孔数がさらに増える可能性がある。色は褐色。33は土師器高杯杯部底部。脚部内面側がナデにより窪む。色は外黄橙褐色、内灰黄色～黒色。



第134図 48~50号土坑実測図 (48は1/40、他は1/30)



第135図 49～52・54・55号土坑出土土器実測図（4・6・7は1/4、他は1/3）

34は小形の須恵器杯蓋口縁部。口縁内端部はナデにより窪む。胎土には細粒をやや多く含み、色は青灰色。出土土器から古墳時代後期後半の土坑になるか。

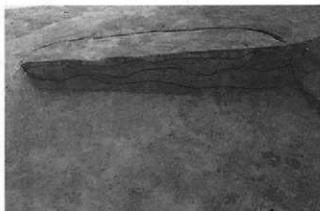
49号土坑（図版58、第134図）

49号土坑は2区東中央西寄り、20号溝北に位置し、148号住居跡を切る。調査当初は148号住居跡屋内土坑と考えたが、壁が直に立ち上がり、東壁は上端より内側に入り込む貯蔵穴に近い形態となったこと、また出土土器も古墳時代後期後半に属するため別遺構の土坑と判断した。長軸142cm×短軸112cm、深さ24cmの楕円形を呈する。床面は平らで、埋土は黄灰色細砂。出土土器（第135図1）図示できる土器は1点のみである。1は土師器甕で、内外面は粗いハケのちナデ調整。色は橙褐色を呈する。

50号土坑（図版58、第134図）

2区東側の北隅で検出した。152号住居跡に東側の2/3ほどが大きく破壊され、152号住居跡の床面に本土坑の壁の下端部がわずかに残る程度である。平面形はおそらく隅丸長方形を呈すものと考えられ、壁の残存深さは15cmほどと比較的浅い。床面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは直角に近い。出土遺物がわずかであり、時期的な位置づけは難しいが、152号住居跡に先行し、6世紀中葉以前に位置づけられよう。また、磨製石包丁（第264図28）が出土している。

出土土器（第135図2）土師器の高杯の口縁部であろう。屈曲部より上位が残り、直線的に伸びる形状を呈する。内・外面ともに摩耗が著しく調整は不明。



50号土坑（西から）

51号土坑（図版59、第136図）

2区東側の北隅で検出した。50号土坑の南に位置する。152号住居跡と切り合い関係を持ち、本土坑が先行する。このため、本土坑の西・南側の壁を大きく破壊されてしまった。平面形は、長軸1.7m、幅1.1mほどを測る隅丸長方形で、壁の残存深さは20cmほどを測り、床面はほぼ平坦である。切り合い関係から、6世紀中葉以前に位置づけられよう。

出土土器（第135図3） 須恵器の大甕の胴部片である。小片であり器形等は不明。内面ナデ、外面タタキ痕が良く残る。

52号土坑（図版59、第136図）

2区中央部やや東寄りの南側で検出した。161号住居跡と切り合い関係にあり、本土坑が新しい。平面形はいびつな隅丸長方形を呈し、南北1.1m、東西1.3mほどを測る。断面は船底状を呈する。壁は20cmほどが残存していた。出土土器は弥生土器、土師器の小片が検出されたが、弥生土器が1点図化できたのみである。切り合い関係から、6世紀代以降に比定される。出土土器（第135図4） 鋤先口縁甕の口縁部片である。口縁部上面の端部に強いナデを施しており、跳ね上げ口縁甕の口縁部形態の影響を受けたものと思われる。須玖Ⅱ式に比定できる。

53号土坑（図版59）

2区中央やや東寄りの南側で検出した。161号住居跡の南、54号土坑の北に位置する。平面形は52号土坑と同様いびつな隅丸長方形を呈し、南北0.9m、東西1.2mほどの規模を持つ。断面は船底状を呈し、壁の残存深さはおよそ25cm程度を測る。土師器の小片がわずかに出土したのみであり、時期は不明である。

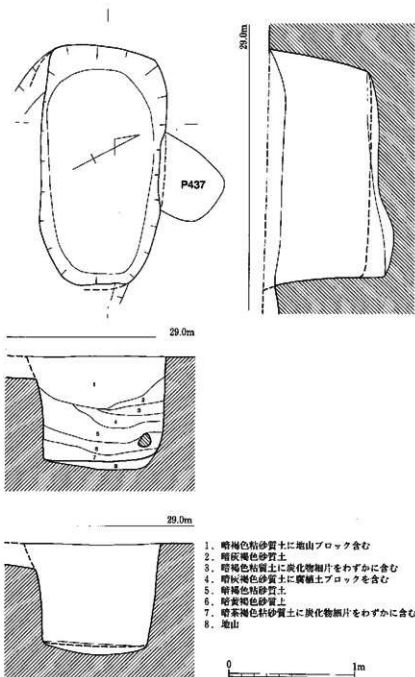
54号土坑（図版60、第136図）

2区中央やや東寄りの南側で検出した。53号土坑の南側に位置し、25号溝と切り合い関係にあってこれより新しい。平面形は縦に細長い台形状を呈し、東西長が1.9m、南北最大幅が1.1mほどを測る。底部はほぼ平坦である。壁の残存深さは最も深い部分で20cm弱を測る。出土土器はわずかであるが、図示した土師器から、7世紀初頭前後に位置づけられようか。

出土土器（第135図5） 5は土師質の須恵器模倣甕である。口縁部片であり底部は残存しないが、全体形は丸底の底部から緩やかに湾曲して、口縁部との境で段を形成し、口縁部はやや内傾しつつ真っすぐに伸びるものであろう。外面は板ナデ、内面はナデ、口縁部付近は内・外面ともに横ナデを施す。

55号土坑（図版60、第137図）

2区東側の南端で検出した土坑である。遺構検出時に南側の壁の検出に失敗してこの上部を破壊してしまった。平面形は長楕円形で、長軸1.9m、幅1mを測り、壁はほぼ垂直に下方に伸びる。床面はやや掘りすぎであったが、本来ほぼ平面的であったとみられ、深さは90cmを測る。出土土器は弥生土器と土師器が認められるが、埋土からおそらく古代の遺構と考えられ、8世紀代に位置づけられよう。



第137図 55号土坑実測図 (1/30)

出土土器 (図版116、第135図6~8) 6・7は弥生土器である。いずれも中期須玖Ⅱ式に位置づけられ、6は鋤先口縁甕の口縁部、7は器台である。

8は土師皿である。口縁部だけが残存する小片であるが、おそらく平坦な器形で広い平底を持ち、口縁部が短く湾曲するものであろう。8世紀代に位置づけられよう。

d. 溝

15号溝 (図版60・61、第138図)

15号溝は2区西に位置する北西—南東方向の溝で、141号住居跡、2区第1面20号土坑・38

号土坑、2区第1面16号溝を切り、39号土坑に切られる。第1面調査時には溝北半分のみ検出したため北半分のみ掘削したが、第2面調査時に溝南半分を検出したことから、調査区南北を縦断する溝と分かった。周辺の遺構の残存状況を含めて考えると第1面北側の地形が南側に比べて高く、第1面が大きく削平されたことにより、本来第2面で検出すべき溝を第1面で検出してしまったことによるもの。第1面で調査した溝北部分の床面も掘り足りなかったことから、溝北部分の土層は調査区北端でしか土層を凶化できず、溝に直行しない図面となる。当溝に切られる20号土坑・16号溝は他の第1・2面の遺構との関係上、第1面の遺構として報告しているが、本来は第2面で報告すべきもの。

溝南北は調査区外となるが、現状で長さ27.8m以上、最も広がる北端で幅220cm、平均幅は150cm前後、溝中央～南側で深さ10cmほど、1面目から検出できた北端で深さ30cmほどになる。床面レベルは溝中央が若干上がるものの、溝南北のレベルはほぼ同じである。断面は溝北端・中央の土層を凶化している。出土土器から古墳時代後期後半の溝となる。覆土から打製石鏝(第263図1)・剥片石器(第263図9・10)・磨製石包丁(第3・4表f・g)・投弾状土製品(第269図9)が出土。

出土土器(第139図) 1～9は弥生土器である。1～3は甕の口縁部である。いずれもバケツ形の胴部とやや窄まる頸部、直角に外側に折れ曲がって伸びる口縁部を持つ須玖式土器の一群である。口縁端部の処理には、端部上面にやや強い横ナデを施してわずかに跳ね上げる1・2と、端部を丸く収める3がある。2は口縁部下に沈線を1条巡らせる。いずれも胴部外面はハケメ、内面はナデ、口縁部は内・外面ともに横仕上げ。色調は全て橙褐色を呈し、口縁部径は1・2が30cm、3が35cmを測る。4は1～3の口縁部に組み合わせると考えられる甕形土器の底部である。底部径は小さくやや厚みがあって、須玖Ⅱ式の範疇の中でもやや古式を早する。端部は外側にわずかに張り出す。成形時の接合痕が確認される。外面はハケメ、内面は指成形時の凹凸を残すが、ナデ消す。色調は橙褐色。底部径は6.8cm。5は甕蓋である。天井部は厚みがあり、端部が強くと張り出す。胴部は急激に開く。天井部のみの資料である。調整は外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。天井部外面にハケメ様の工具痕を残す。色調は橙褐色、天井部径は6.4cmを測る。7・8は器台である。両資料とも天地はやや不明瞭だが、バランスや端部形態から図示した向きと判断した。いずれも器壁が1cm未満の通常の品であり、調整は外面がハケ、内面は縦方向のナデ仕上げで、脚部付近のみ内・外面ともに横ナデ仕上げ。脚部径は6が9.8cm、7が10.6cmを測る。9はやや判断に苦しむ資料であるが、ここでは弥生後期末の突出部付きの器台の突出部が失われたものとして図示した。外面ハケメ、内面はナデ調整で、外面上部のみ横ナデを施す。器壁は厚い。

10から16は古墳時代～古代の上師器である。10は甕形土器である。バケツ状の胴部から頸部にかけてわずかに窄まり、口縁部がやや外反する器形を持つ。調整は外面ハケメ、内面ケズリ、口縁部外面に指頭圧痕、内面にハケメ痕が残し、その上から横ナデを施す。11は甕の口縁部片か。直線的に上方に伸びる器形を有し、おそらく全体形はバケツ状を呈するものか。調整は摩擦により不鮮明。12は小形丸底甕。丸底から胴部中位に屈曲を有し、口縁部が緩やかに外反する。内・外面ともに丁寧なナデ調整を施し、器壁が薄い精製器種。13は碗形土器。胴部下位がやや直線的に延びる器形を有し、調整は内・外面ともに丁寧なナデを施す。14は杯の高台・底



〈15号溝北土層〉

- 1.赤褐色砂質土、明黄褐色砂質土の細かいブロック（地山?）を多く含む。硬くしまる
- 2.暗茶褐色砂質土、わずかに炭小片を含む。砂質分や少なく硬くしまる。やや粘性あり
- 3.暗褐色粘砂質土、明黄褐色粘砂質土（地山ブロック）を多く含む。粘性高く硬い
- 4.暗褐色粘砂質土、粘性高く、やや軟らかい。腐食し含むか、比較的均質で風通の流入増進土か
- 5.4と似るが若干明るい
- 6.暗黄褐色砂質土、砂質分多く含む。硬くしまる。やや粘性あり。均質

溝15北

西 29.5m 東



溝15南

西

29.5m 東



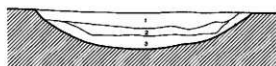
溝16

〈16号溝土層〉

- 1.黄味がかかった灰褐色砂質土
- 2.暗褐色砂質土（ごく少量の炭粒含む）

西

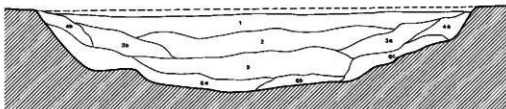
29.2m 東



溝20東

南

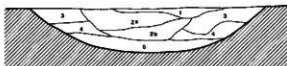
29.4m 北



溝20西

東

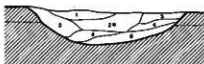
29.1m 西



溝25北

南

29.1m 北



溝25南

〈25号溝土層〉

- 1.暗灰褐色粘砂質土に炭化物小片を含む
- 2.灰黄褐色砂質土
- 3.暗褐色粘砂質土
- 4.暗黄褐色粘砂質土
- 5.暗灰褐色砂質土

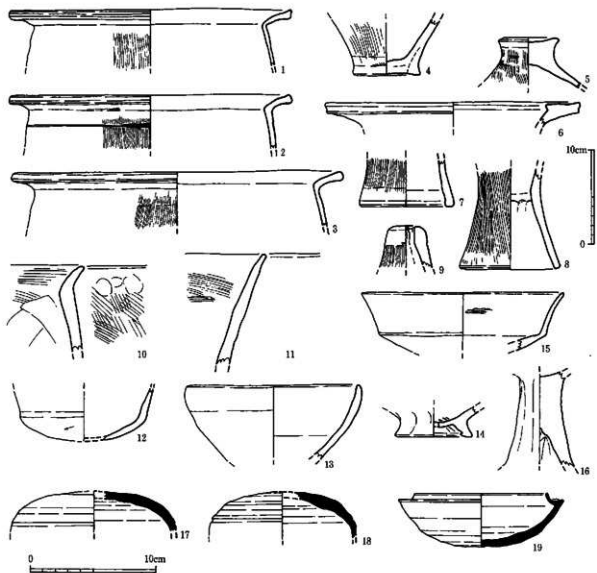
〈20号溝東土層〉

- 1.黄褐色細砂に黄灰色粘質砂ブロック50%混じる
- 2.1よりやや明るく黄灰色粘質砂ブロックが30%混じる
- 3.1.2より砂質が強く、黄灰色粘質土ブロック混じらない

〈20号溝西土層〉

- 1.黒褐色粘砂質土に炭化物・炭土の小片を含む
- 2.暗褐色粘砂質土に炭化物・炭土の小片をわずかに含む
- 3a.黄褐色粘砂質土
- 3b.黄褐色粘砂質土に灰色粗砂をわずかに含む
- 4a.茶褐色粘砂質土
- 4b.茶褐色粘砂質土
- 5.暗褐色粘砂質土
- 6a.茶褐色粘砂質土に地山ブロックを含む
- 6b.暗茶褐色粘砂質土（粘性高い）
- 6c.茶褐色粘砂質土（やや粘性高い）

0 2m



第139図 15号溝出土器実測図(1~9は1/4、他は1/3)

部と思われる。高台の断面形は外に開きながら端部が踏ん張る器形で、底部は丸底に近い。やや全体形を決しがたい資料である。15・16は高杯である。15は杯部の資料である。杯底部が直線的に外に開き、中位で屈曲して立ち上がりながら外反する器形を有する。器壁が薄く、内・外面ともに丁寧なナデ仕上げを施す。口縁部径は16cm。16は杯脚部の資料である。脚部境から脚中位までが残存し、外面は板ナデ、内面もナデ仕上げを施す。両資料とも胎土に砂粒をあまり多く含まず、調整も丁寧である。ともに淡褐色を呈する。これらの資料のうち、12は古墳時代前期、10・11は8世紀代の資料と考えられ、その他の資料もおおよそこれらの時期に該当すると考えられる。

17~19は須恵器である。17・18は杯蓋である。いずれも肩が張って口縁部付近に向けて湾曲するタイプで、17は全体に回転ナデを施すが、18は天井部外面に回転ヘラケズリ痕が残る。19は杯である。かえりを有するタイプで、かえりは細いが長く、上方に向かって伸びる。底部から口縁部にかけては緩やかに湾曲しながら立ち上がる。底部付近に回転ヘラケズリが残るが、

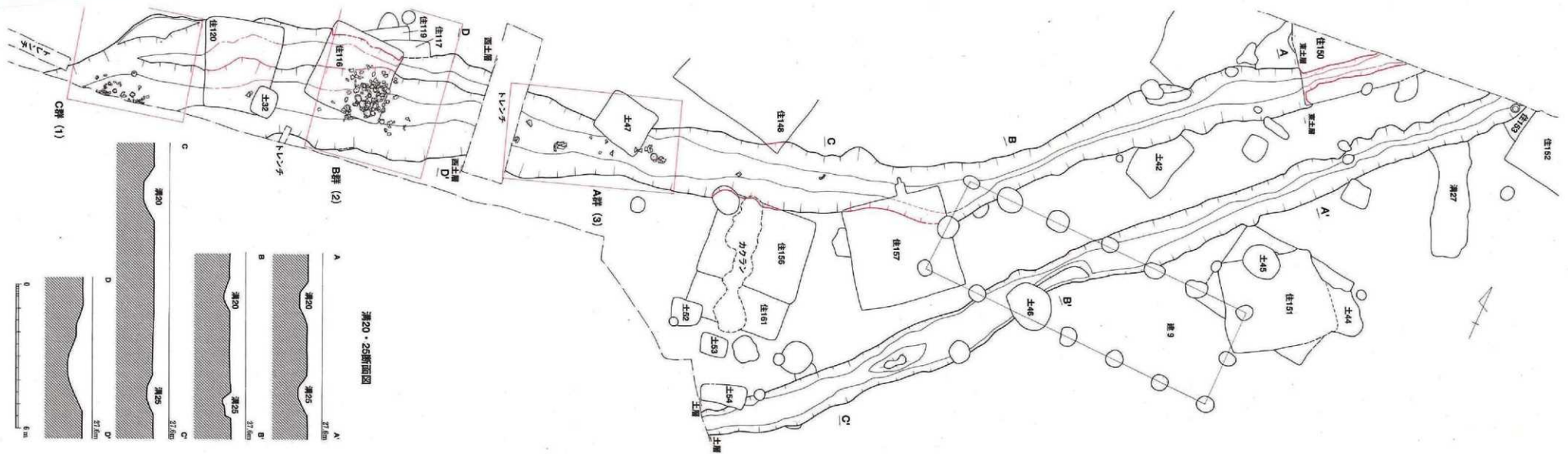
その他の部位は回転ナデ・横ナデにより丁寧な仕上げを施す。いずれも6世紀後半から7世紀代の資料であろう。

これらの資料のうち、4・10・14が下層から出土している。

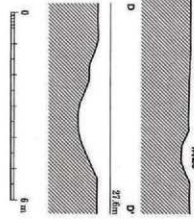
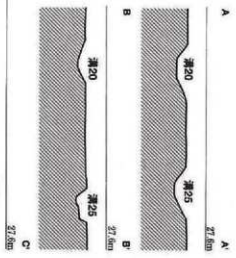
20号溝 (図版61・62、第140～143図)

2区第1面を調査中に、116・117・119号住居跡が切り合う付近で土器が集中的に出土した。当初は住居跡しか存在しないと判断していたが、この土器群と一連のものと思われる土器群が住居跡の外からも多く出土したので、付近の遺構面と遺構の壁部分、トレンチの壁などを精査したところ、幅4mほどを測る大規模な溝状遺構が略東西方向に走っているのが確認された。この溝は上述住居跡群のうち117・119号住居跡を大きく破壊しており、当初これらの住居群から出土したと考えていた土器群は、20号住居跡に伴うものであった。この溝は、西側では南側の調査区外に消えていたが、東側はさらに調査区内を伸びるものと考えられた。しかし、溝の東側延長部分はこの段階で明確に検出することができず、南北に掘削したトレンチの西側までこの溝の調査を一度うち切った。その後、重機で第1遺構面の表土を除去して第2遺構面まで下げ、再度遺構面を精査してこの溝の続きを確認したところ、2区中央部南側から東北部にかけて、調査区を弧を描くようにしながら横切る20号溝の続きが検出されるとともに、この溝の南側にこれに並行して走る新たな溝が検出されたため、これを25号溝として調査した。20号溝は最大深さ70cmほど、幅4mほどを測る断面逆台形状の溝である。地山が砂質分が多いこともあり、溝の斜面の傾斜は緩やかである。埋土は大きく上層(1～4層)、中層(5層)、下層(6層)に分けられ土器もほぼこの大別層に応じて取り上げたが、6a・c層から出土した土器の一部は中層として調査した資料の中に含まれる。本報告では上～中層出土遺物と下層出土遺物に分けて報告したい。また、これらの土器とは別に、溝の上～中層から土器が集中して出土した部分を3カ所確認し、これらをそれぞれ20-1、東、西としてナンバーを付して取り上げた。本報告では、これらの3群をそれぞれをA群、B群、C群として報告する。なお、A群は発掘中に大雨のため溝が一度水没してしまい、出土位置を記録するために出土状況のままおいていた土器群の多くが原位置から流れ出してしまった。本来はさらに多くの土器がA群から出土していたが、A群出土として報告できない結果となった。また、各土器群を除去したあと最下層を掘削していたところ溝底の直上から比較的大型の土器片が点々と出土した。調査時にはこれらにナンバーを付して各土器群とともに、あるいはまた新たに図面を作って取り上げていたが、報告では、これらを各土器群から抽出し、別に最下層出土として報告する。また、磨製石包丁(第264図30)、投弾状土製品(第268図10)が出土している。

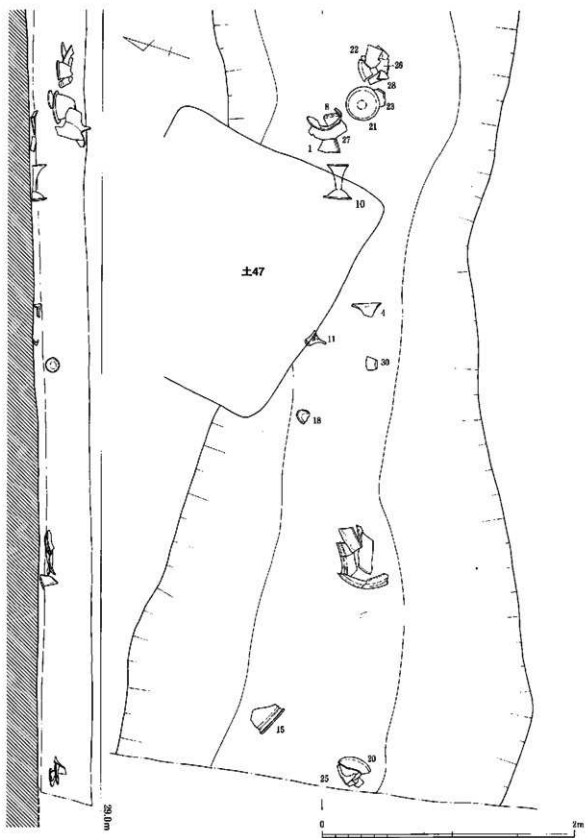
出土土器 (図版116～121、第144～156図) 1～12は最下層から出土し、出土位置を記録して取り上げた一群であり、全て弥生土器である。1～7は甕形土器である。いずれもバケツ状の胴部からやや窄まる頸部を経て、直角に外反して伸びる口縁部へと至る器形を有する須玖Ⅱ式の甕形土器である。これらのうち、1～4は口縁部上面に強い横ナデを施して口縁端部をわずかに跳ね上げた資料である。跳ね上げの程度にはやや差がある。また、5・6は口縁端部を四角く収める資料、7は丸く収める資料である。これらのいずれも、外面ハケメ調整、内面ナデ調整で一部に指頭痕を残し、口縁部は内・外面ともに横ナデを施す共通の調整痕を持つ。3・



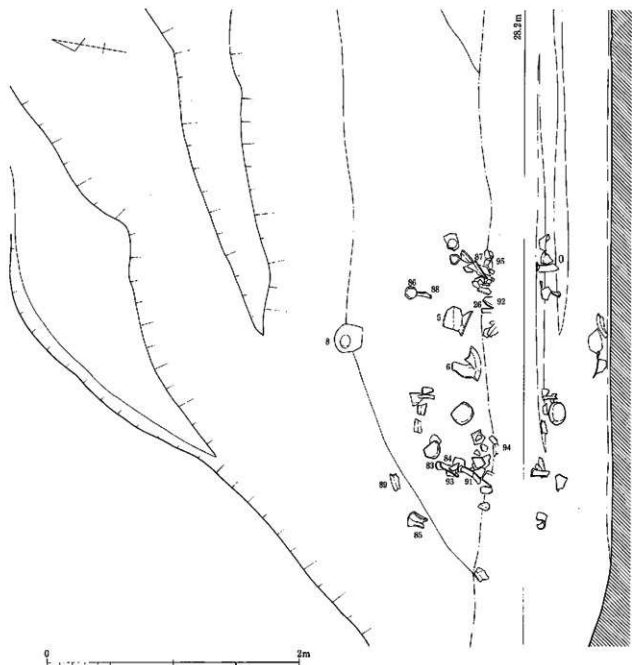
溝20・25断面図



第140図 20・25号溝実測図(1/120)



第141图 20号沟土器出土状况 (A群) (1) (1/30)



第143図 20号溝土器出土状況（C群）（3）（1/30）

5・6の胴部上半には一周する沈線を1条から2条施すが、これらの沈線は極めて浅い。1にも同様の浅い沈線が認められるが、一周するかどうかは定かではない。口縁部径は1～6がいずれも30cm内外であるのに対し、7はやや小さく27.5cmを測る。いずれも胎土には細砂粒をやや多く含み、色調は暗～茶・赤褐色を呈する。8は樽形甕の底～胴部であろう。ほぼ完形の資料であり、口縁部片のみ検出できなかった。外面は細かいヘラミガキを施し、内面は指頭圧痕が多く残るナデ仕上げである。残存部から判断すれば口縁部はおそらく鋤先口縁状を呈したものと考えられる。色調は黄～橙褐色を呈し、丹塗りの痕跡は確認できなかった。

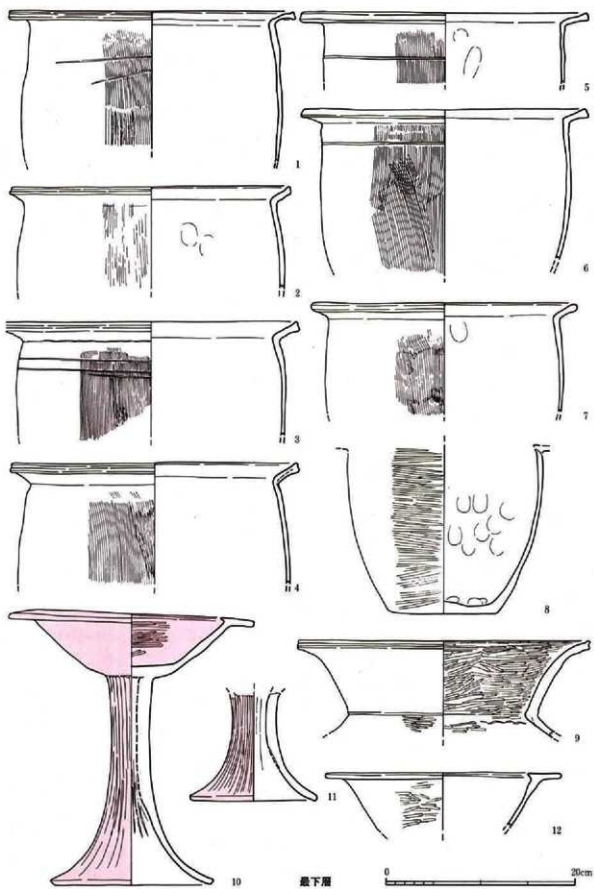
9は甕である。いわゆる素口縁甕で、内面には丁寧な磨きを施す精製品である。外面調整は口縁部が丁寧なナデ、胴部にはナデ痕跡が確認された。色調は橙褐色を呈し、丹塗りの痕跡は確

認められなかった。

10～12は高坏である。10は全形が確認される大きな破片である。坏部は半円状で口縁部は鋤先状を呈し、端部はわずかに跳ね上げる様相を見せて四角く収める。坏部内面は横方向のヘラミガキ、脚部外面には縦方向のヘラミガキを施す。坏部外面は剥離が著しく調整は不明瞭だが、おそらくヘラミガキを施していたと考えられ、外面はすでに剥離しているが、内外面ともに丹塗りを施していたものであろう。11は脚部のみの資料である。外面には縦方向に単位の長いヘラミガキ調整を行い、丹塗りを施す。内面はナデであろう。12は坏部のみの資料である。外面には横方向に丁寧なヘラミガキを施し、内面はナデ仕上げか。丹塗り痕は確認できなかった。口縁部形態は鋤先状を呈し、上面は平坦で端部をやや丸く収める。これらの資料はすべて須玖Ⅱ式の新しい段階であり、中期後半～末の資料群と考えられる。

13～30はA群出土土器群のうちナンバーを付して取り上げたものであり、全て弥生土器である。13～15は甕形土器の胴部上半～口縁部の資料である。いずれもやや丸みを帯びたバケツ状の胴部から直角に屈曲して真すく伸びる口縁部を有する一群である。調整も共通し、外面ハケメ、内面ナデ、口縁部付近は横ナデを施す。13は口径32cmほどの中形品、14は27.7cmのやや小形、15は38.9cmを測る大形品で、口縁部下に二条の三角突帯を貼り付け、端部を四角く収め、外面に赤褐色の化粧土のようなものを塗っており、比較的精製の範疇に入るものであろう。16～18は甕形土器の底部である。16は底部が厚く、径も小さく、比較的古式を呈する。17は底部が強く踏ん張るタイプである。18は外面の摩滅が著しい。18は調整が不明であるが、他は外面ハケメ、内面は指頭圧痕を残しナデで共通する。19・20は甕蓋である。19は天井部のみが残存する。径は7cmと小さく、上面がやや窪むが、端部の張り出しは小さい。20は全形が分かる資料であり、小さく丸い天井部から「ハ」字状に強く開いて直線的に端部まで伸びる器形を有する。天井部径は7cmと小さく、上面が窪んで端部の張り出しはわずかに認められる。口縁部径は28.8cmを測り、端部を四角く収める。ともに外面ハケメ、内面ナデ、天井部上面もナデ仕上げで、20は口縁端部を横ナデで仕上げる。21・22は鉢である。いずれも底部から逆「ハ」の字状に開いて口縁部を屈曲させる器形を有し、口縁端部を四角く収める。また、調整が外面ハケメ、内面ナデで口縁付近に横ナデを施す点も共通する。22は底部が失われているが、21の底部は平底で薄い。23は鉢、樽形甕またはひさご形壺の底部か。底部径が大きく、厚みが薄い。外面ハケメで内面ナデ仕上げ。24は樽形甕の底部であろう。底部から胴部にかけての立ち上がり角度がきつく、底部がわずかに丸みを帯びており、若干新しく後期初頭まで下る資料である可能性もある。

25～27は壺である。25は鋤先口縁壺の口縁部である。内・外面ともにナデ仕上げで、丹塗り痕跡は認められない。鋤先部はわずかに内傾し、端部上面に強いナデを入れて端部に変化を与え、跳ね上げと呼べるまでに明確なものではない。26は素口縁壺である。3つ大きな破片に復原でき、それぞれは接合しないが、出土位置や胎土等の特徴から同一個体と判断して差し支えなからう。口縁部と胴部の高さがほぼ等しく、口縁部が胴部最大径をやや上回る。胴部中位に1条のM字突帯を貼り付ける。外面は口縁部が縦方向の細長いヘラミガキを等間隔に施して暗文状とし、胴部は横方向の細かいヘラミガキ。内面には口縁部に横方向のヘラミガキを施し、胴部は指頭圧痕が多く残る指ナデ仕上げ。外面全面に丹を塗布し、内面の口縁部にも



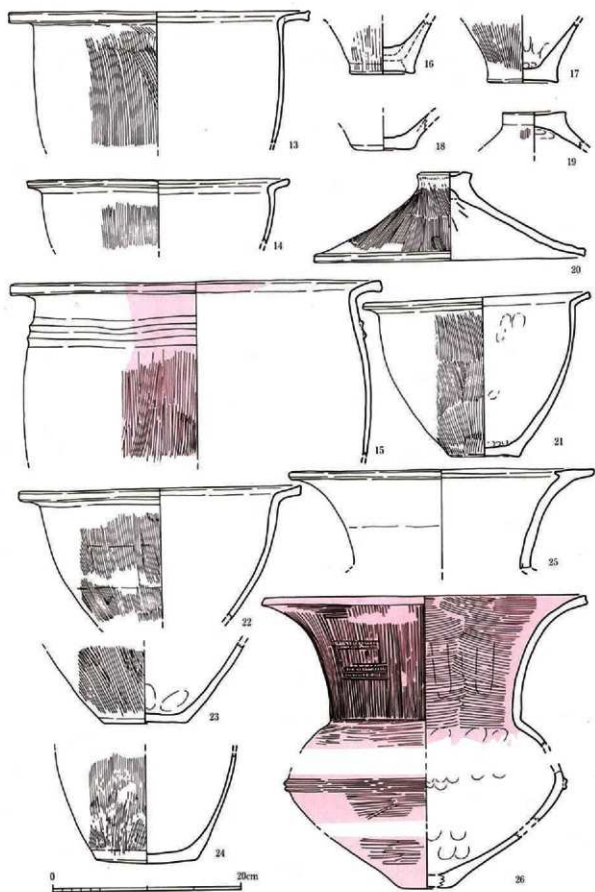
第144图 20号沟出土土器实测图(1)(1/4)

全面に塗布する。胴部内面上位には丹を塗布したときにハケが付いたり、下方に垂れた丹が液状に認められる。精製品である。27も素口縁壺であり、胴部上位から口縁部までが残存する資料である。胴部最大径と口縁部径がほぼ等しい資料で、調整は外面の口縁部にヘラミガキによる暗文を施し、胴部は横方向の細かいミガキを残す。内面の口縁部にも横方向に細かいミガキ、胴部はナデ仕上げ。外面全体と内面の口縁部に厚い丹塗りを施し、胴部上位には丹の付いた指で触れた痕跡が明瞭に残る。

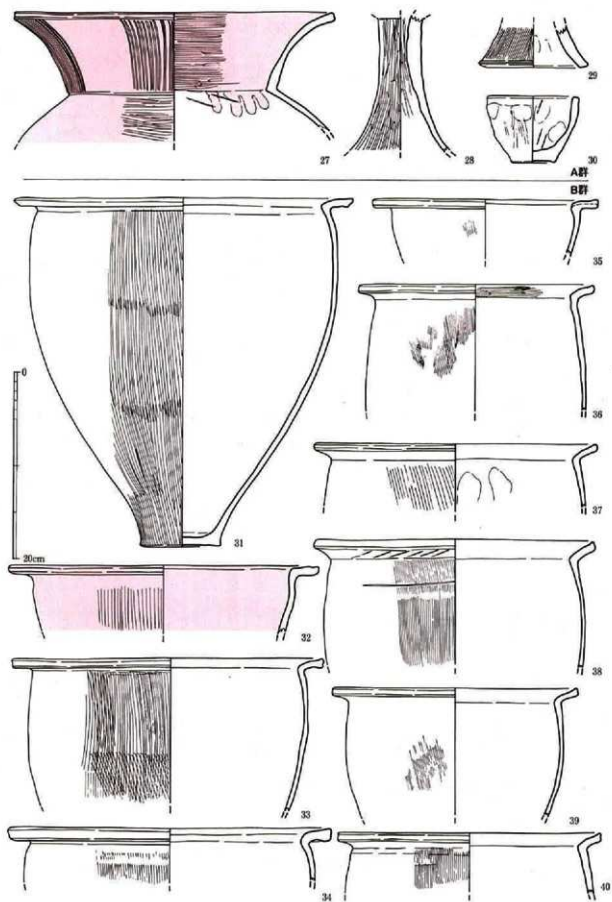
28は高環の脚部である。外面には縦方向にヘラミガキを施し、内面は指ナデ仕上げ。丹は塗布されないが色調は赤褐色を呈し、色調を意識して製作されたものか。29は器台である。外面ハケメ、内面指ナデ痕が残る。30は碗である。小形品で、器壁が厚く、指頭圧痕が各所に確認される。以上の資料はおおよそ須玖Ⅱ式の新しい範疇に入るものと考えられ、底面出土土器群とは時期差が認められない。

31～82はB群出土土器のうちナンバーを付して取り上げたものであり、全て弥生土器である。31は甕形土器の中で唯一全形が判明する資料である。薄い平底とバケツ状の胴部を有し、胴部上半でやや内湾して、直角に屈曲する全体形を有する。口縁部上面に強いナデを施して端部をわずかに跳ね上げ状にする。口縁部径は36cmを測る人形品である。32～52は甕形土器の胴～口縁部片である。全て31と同様の器形を有し、外面ハケメ、内面ナデ、口縁部が内・外面とも横ナデという調整を有し共通性が高い。31～42・44・47は口縁部上面に強いナデを施して窪ませ、端部をわずかに跳ね上げ状に仕上げる。一方43・46・48・49～52は口縁部上面にこの強いナデが認められないか極めて弱く、口縁端部が跳ね上げ状を呈さない。49～52は端部を丸く、他は端部を肥厚させるか四角く収める。41には口縁直下に三角突帯を一条巡らせる。また38・43には浅い沈線と同じ位置に刻むが、いずれも一周するかどうか定かではない。口縁部径は28cm～33cmに収まるものが大半を占め、それ以外に25cm程度の小形品として36・39・43が、36cm程度の大形品として31・49がある。53～60は甕形土器の胴～底部片である。いずれも平底で薄く、調整は外面ハケメ、内面ナデである点が共通する。ただし58は外面にヘラミガキを施し、丹を塗布しており、底部径も比較的小さいことから、精製の甕形土器であろう。61は鋤先状の口縁部を有するもので、内面にヘラミガキ調整を施す資料である。ただし、外面調整はハケメであり、赤褐色を呈するものの丹を塗布してはいない点などから、「半」精製品であろう。口縁部径は30cmを測る。62は大形甕棺の胴部であろう。突帯付近のみの資料である。突帯はやや台形状に近くなった三角突帯を2条施している。外面調整はハケメ、内面調整はナデ。

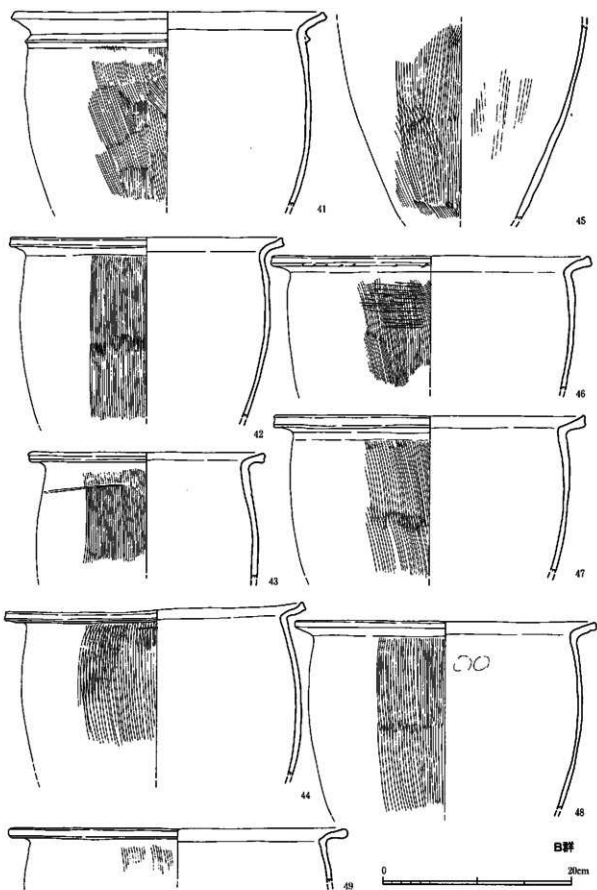
63・64は甕である。甕の底面中央部に焼成後穿孔を施す。いずれも底部付近のみの資料。ともに内面指ナデ調整、外面ハケメ調整と考えられるが、64は被熱による器壁の剥離が進行して外面調整は不明瞭。65・66は鉢形土器。65は底部に穿孔を施す。この穿孔は乾燥後、焼成前に行われたものか。穿孔部を除いて2点はよく似た形態をしており、調整もほぼ共通する。67も鉢形土器であるが、口縁部が鋤先状を呈し、65・66とは異なる。外面調整はハケメ、内面・口縁部付近は丁寧なナデ。内・外面に丹を塗布する。68は甕蓋。つまみ部から「八」字型に急激に広がる器形を有する。端部は四角く収める。外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。69は無頸壺の蓋である。天井を低く造り、明確なつまみ部を持たない。口縁端部に穿孔が1つ認められるが、本来は二つずつのセットが2箇所に、計4箇所施されていたものであろう。外面ハケメ、内面



第145图 20号溝出土土器実測図(2)(1/4)



第146图 20号溝出土土器実測图(3)(1/4)



第147图 20号溝出土土器实测图(4)(1/4)

はハケメ後ナデ仕上げ。70・71は碗形土器。70は立ち上がりが急でバケツ状の形態を持つ。作りは比較的粗く、ゆがみが見られる。内・外面ともにナデ仕上げ。71は浅い鉢状の形態を持つ碗である。器壁は薄く、丁寧に造られたもの。外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。

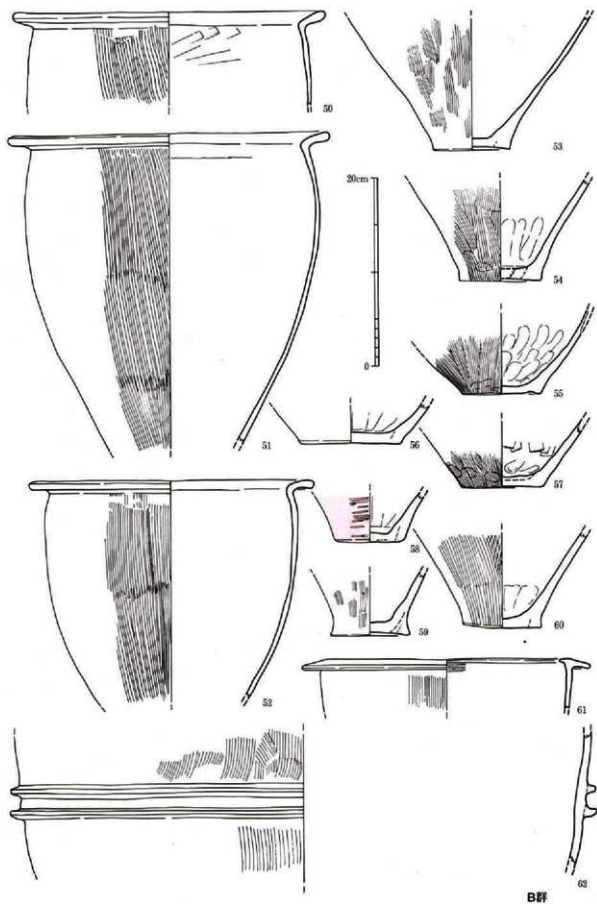
72～74は壺。72は素口縁壺の頭～口縁部片。口縁部最大径が胴部最大径よりもやや大きくなるタイプか。外面ハケメ、内面ナデ調整。口縁部径は37cmを測る。73は胴部片である。胴部最大頭部から胴下部までが残存する資料。中に断面M字の突帯を1条配する。外面ヘラミガキ、内面ナデ仕上げ。74は底部片である。立ち上がりがやや急角度で、鉢や樽形壺の可能性もあるが、外面調整として縦方向のやや幅の広いヘラミガキが施されており、精製器種であって壺か樽形壺の可能性が高い。内面には指頭圧痕がよく残り、ナデ仕上げ。

75～79は高環である。75は高環の脚部片である。外面調整は縦方向に細長いヘラミガキを施す精製品で、おそらく外面に丹塗りを施すものであろうが、剥離のためやや不明瞭である。76は高環の環底部～脚上部片である。脚部は外面縦方向のヘラミガキ。環部は内・外面とも横方向のヘラミガキである。全体に丹塗りを施す。77は全形が判明する短脚高環である。鋤先状の口縁部を有し、端部上面に強いナデを施してわずかに跳ね上げる形態を持つ。調整は環部内・外面、脚部外面をそれぞれ横方向、縦方向のヘラミガキ後丹塗り仕上げ、脚内面はナデ。78・79は環部だけの資料である。いずれも鋤先状の口縁部を持ち、外面に丹塗りを施す。調整は78の内面のみナデ、他は横方向のヘラミガキ。79には脚部との接合痕が確認できる。78の口縁部上面には3～4本がセットとなって放射状に配された非常に細いヘラによる暗文が認められる。

80～82は器台である。いずれも胴中位がくびれ、脚部と上部に向かって広がる形態のもので、外面ハケメ調整、内面ナデ調整を施す点など共通点が多く、定型化した器台である。以上の資料は須玖式土器の新しい段階に該当し、中期後半～末に比定できる。

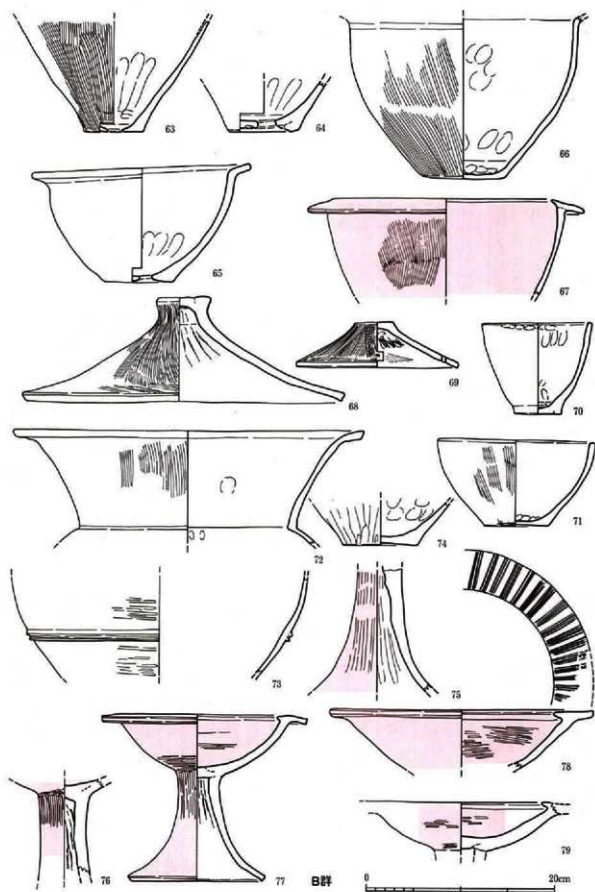
83～95はC群出土土器のうちナンバーを付して取り上げたものであり、全て弥生土器である。83～85は器台である。いずれも80～82と同様の器形を持つ定型化した器台である。84・85は破片資料のため天地が不明であるが、図示したように脚資料と判断した。86は壺形土器の底部片である。底は比較的薄く、端部がさほど張らない。87～94は壺形土器の口縁部片である。いずれもバケツ状の全体形を持ち、口縁部が直角に屈曲して外に伸びる器形を持つ。87～91は口縁部端部上面に強いナデを施すとともに、端部をわずかにつまみ上げるようにした、弱い跳ね上げ状の口縁部を持つ資料である。92～94は端部を丸く収める資料である。口径はおおよそ30cm内外に収まるが、94のみやや小さく27cmを測る。95は壺形土器の底～胴部片である。底部径は小さいが胴部の膨らみが大きく、比較的新相を呈する。内面には指頭圧痕がよく残り、外面はハケメ仕上げ。以上の資料はおおよそ須玖式土器の新しい段階に該当し、中期後半～末に比定できる。

96～172は番号を付さずに取り上げた土器群のうち、上～中層から出土したものである。96～169は弥生土器である。96～131は壺形土器の胴～口縁部片である。96～126は一般的な壺形土器の形態を持つものである。個別の資料ごとに胴部の膨らみや頸部の屈曲、口縁部の形状などやや違いが認められるが、大きく見ればいずれも胴部がやや膨らむバケツ状の器形を持ち、口縁部はほぼ直角に屈曲して伸びるといった共通した器形を持ち、外面ハケメ、内面指ナデ、11

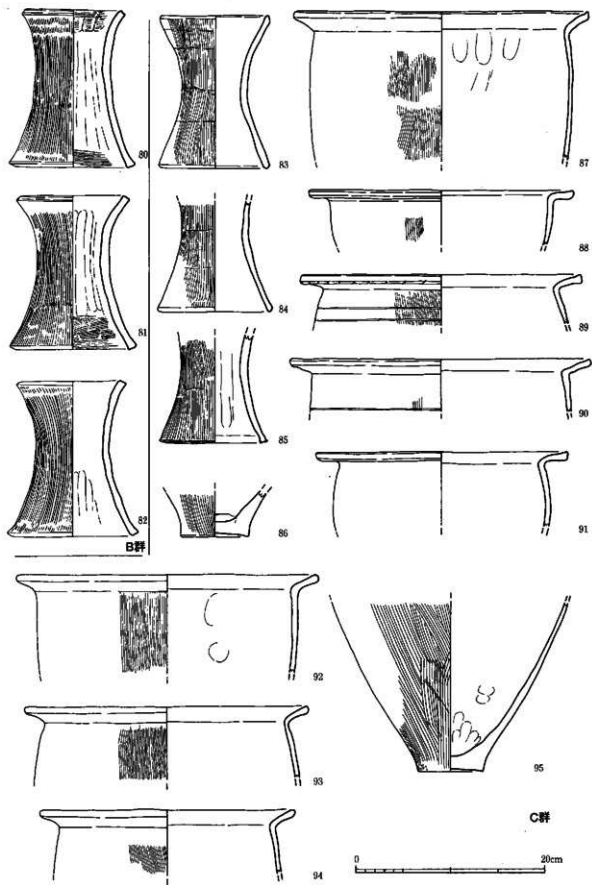


B群

第148图 20号溝出土土器实测图(5)(1/4)



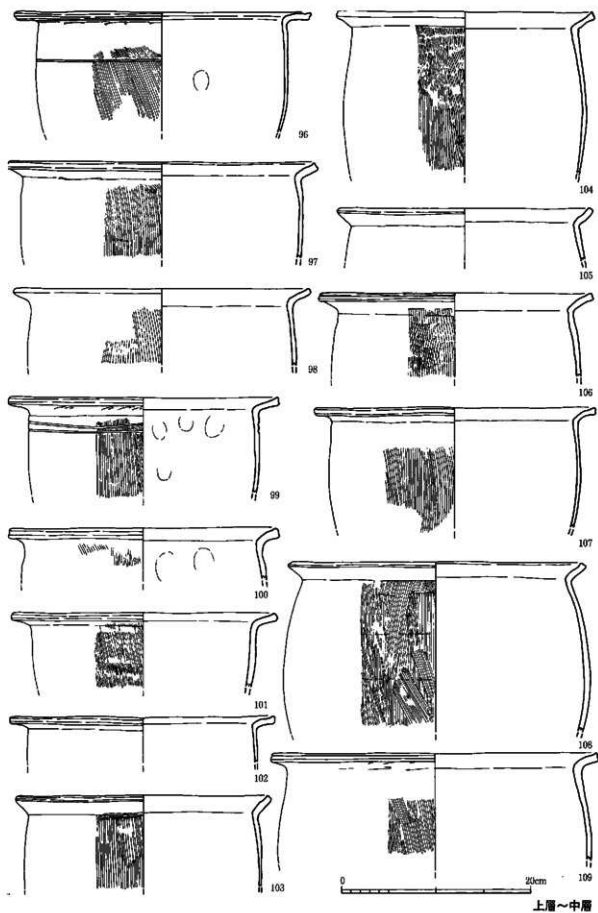
第149图 20号沟出土土器实测图(6)(1/4)



第150图 20号沟出土土器实测图(7)(1/4)

縁部付近は丁寧な横ナデを施すなどの調整も共通する。これらは口縁端部の形状によっていくつかの群に分類できる。96~109は口縁端部上面に強いナデを施すとともに、端部をやや上方につまみ上げて、弱い跳ね上げ口縁状に仕上げる一群である。跳ね上げの程度は資料によって異なるが、端部をさほど肥厚させずおおよそ四角に収める点や、跳ね上げの程度が以東地域の資料と比較するとほんのわずかであることなどが共通する。口縁端部の屈曲角度は資料によって異なり、かなり「く」の字に近いものも見られる。110~119は口縁端部を跳ね上げずに四角に収める一群である。先掲の一群のように、口縁端部上面の強いナデは認められず、112のように端部を肥厚させるものも認められるがわずかである。120~124は端部を丸く収める一群である。これは、端部を四角く収める一群と口縁部形状がほとんど変わらず、端部の形状のみが異なる。125・126は鋤先口縁を持つ壺である。屈曲部の内側を強く突出させ、水平に外に伸びて端部を丸く収める。これらの壺の口縁部の大半は口縁部径が27~31cmに収まるものであり、これより大きいものとして、33cm内外の大きさを持つ97・109・117・119・122・123が、小さいものとして、23cmの110がある。また、口縁部下方に沈線を巡らせる資料として96・99・120が、突帯を巡らせる資料として111が挙げられる。127は大形甕棺の口縁部片である。口縁部が強く締まる、いわゆる丸みを帯びた甕棺の系列であり、橋口編年のKⅢa~b式であろう。128~130は口径がおおよそ14~19cmと、非常に小さい甕形土器の一群である。128は鋤先状の口縁部を持ち、129は鋤先状ほどではないが屈曲部内面が強く突出する。129・130は胴部に1~2条の突帯を施す。やや特殊な器形である。131は口縁部は鋤先状で、外面に丹塗りを施し、胎土が精良であるといった特徴を持つ、精製の甕形土器である。口縁部の上面にヘラ状工具による放射状の暗文を施し、口縁端部の上端と下端に小さな刻み目を施す。132~141は甕形土器の底部片である。底部が比較的厚くて径が小さいものから、比較的薄く径が広いものまでバリエーションが豊富であり、時期的にはやや幅が広いものと考えられる。多くは外面ハケメ、内面ナデ仕上げだが、132・133・140は内面にもハケメ痕が残る。

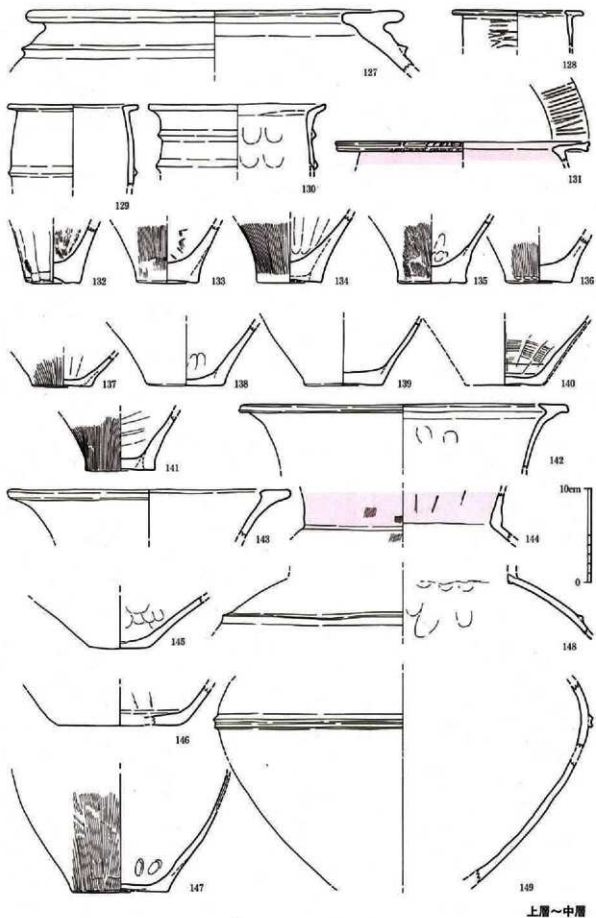
142・143は鋤先口縁部の口縁部片である。いずれも内外・外面調整がナデで、丹塗りが認められない。口縁部は短い、142は内側に大きく発達しており、須玖Ⅱ式の最新段階で鋤先口縁が退化傾向にあるものと理解できよう。144は壺の頸部片である。内・外面にナデ仕上げ後丹塗りを施す精製品である。145は壺の底部片である。外面は摩滅が著しく本来の形態を保っていない。146・147は樽形甕またはひさご形甕の底部片であろう。148・149は壺の底部片である。148は断面三角形の突帯を肩部に、149は断面M字状の突帯を胴部に施す。外面は丁寧なナデ、内面はやや指頭圧痕を残すナデで仕上げる。150・151は大形の無頸壺の口縁部片である。卵形の胴部と小さな平底、屈曲して短く伸びる口縁部を持つものであろう。いずれも外面に横方向のヘラミガキ、内面にナデを施す。胎土は精良である。150の口縁部形態は鋤先状、151は内側に稜を持たない「く」字状の屈曲部を持ち、端部は肥厚して四角く収める。152は小形の無頸壺である。口縁部は強く如意状に外反して四角く収め、焼成前穿孔が2つ確認された。やや平たい球形の胴部を持つものであろう。153・154は碗形土器である。153はやや細長く、154は平たい形状を持つ。155・156は甕蓋である。いずれもつまみ部の端部が強く張り、細く締まってから急激に「八」字状に広がる器形を持ち、155は天井部上面が大きく凹んで上げ底状になる。157・158は高坏の坏部片である。いずれも鋤先状の口縁部を有し、157が短いのに対し158は長



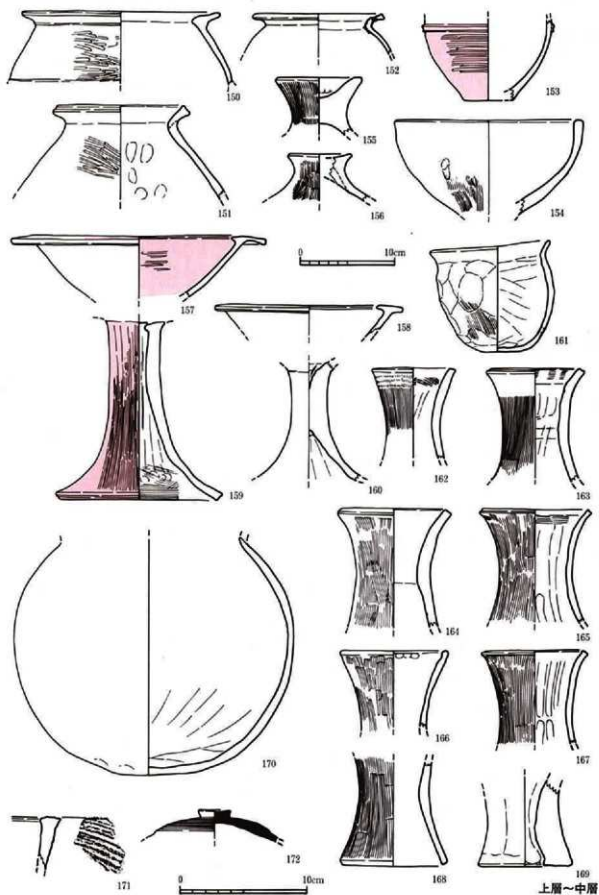
第151图 20号溝出土土器実測图(8)(1/4)



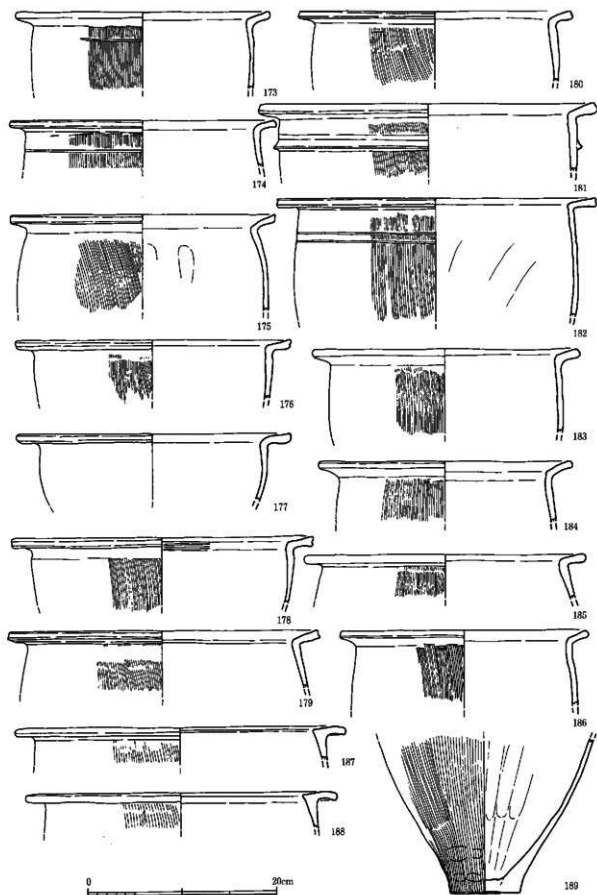
第152图 20号沟山出土土器实测图(9)(1/4)



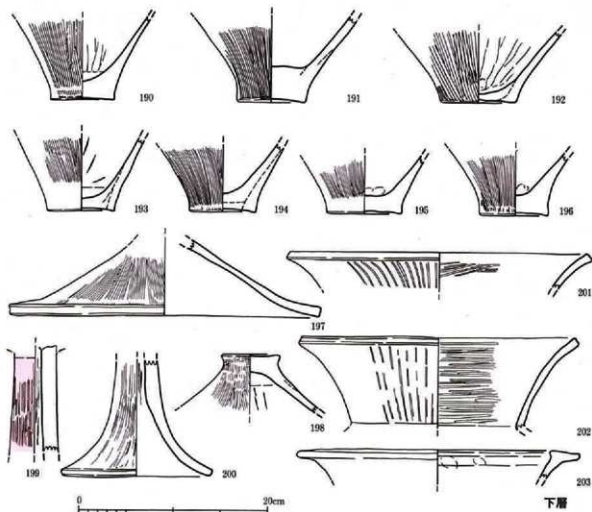
第153图 20号沟出土土器实测图(10)(1/4)



第154图 20号溝出土土器実測図(11)(170~172は1/3、他は1/4)



第155图 20号溝出土土器实测图(12)(1/4)



第156図 20号溝出土土器実測図(13)(1/4)

く伸びて端部をわずかに跳ね上げる。158は摩耗により調整が不明瞭。157も外面が摩耗しており、内面はヘラミガキで丹塗りの痕跡が確認される。159・160は高杯の脚部片である。159は比較的脚の長い資料である。外面は細いヘラミガキ後に丹塗り仕上げ、内面はナデ仕上げで一部にハケメ痕が残る。160は短脚高杯の脚部で、内・外面ともに摩耗しており調整等は不明。161は手捏ねの碗である。底部が丸く、古墳時代のものか考えたが、胎土や焼成、共伴土器等から弥生土器と判断した。内面は強いナデ、外面は板状工具により強くナデる。162～168は定形の器台である。いずれも外面ハケメ、内面ナデによって仕上げる。169は器壁が厚く粗製の器台である。外面調整は比較的丁寧で、指頭圧痕が残らない。これらはおおよそ須玖Ⅱ式の新しい段階の資料と考えられるが、一部にやや古手と見られる資料も含まれる。

170は古墳時代の短頸壺である。球形の胴部を有し、短く開く口縁部を持つものであろう。口縁部は失われている。外面はナデ、内面はケズリ痕が残る。171は鉢形土器か。小片のため傾き等にはやや自信がないが、図示した形態と判断した。外面に著しいタキキ痕を残す。172は須恵器の杯蓋である。平たいつまみを有し、天井部は丸みを帯びる。口縁部は失われる。以上の3点は混入であろう。

173～203は下層出土土器である。これらの土器は全て弥生土器である。173～186は甕の胴～

口縁部片である。いずれもバケツ状でやや胴が膨らみ、口縁部は屈曲して水平に伸びる器形を有する。これらのうち、173～179は口縁端部上面にやや強いナデを施して口縁端部を弱くつまみ上げた、跳ね上げ状の口縁部を有する資料である。174のように、跳ね上げが非常に弱く、端部を四角く収めようとする資料から、176のように強く上面をなでて端部を三角形に仕上げ、跳ね上げを強調するものまでバリエーションに富む。180～184は口縁部を跳ね上げず、端部を四角く収める資料である。184～186は端部を丸く収める資料である。187・188は口縁部を鋤先状に仕上げるものである。屈曲部が内側に強く突出し、ほぼ直角に屈曲して端部を丸く収める。これらのいずれもが、外面ハケメ、内面ナデ、口縁部付近を横ナデで仕上げる。口縁部直下に浅い沈線を施す資料として173・182があるが、これらはいずれも破片資料であり一周するかどうかは確定でない。また、同じ位置に断面三角形の突帯を付すものとして181が挙げられる。口縁部径は30cmを中心として27cmから32cmの幅に収まる資料が多いが、36cmを測る大形品(181)も見られる。189～196は壘形土器の胴～底部片である。底部径が小さく厚底で比較的古相を呈するものから、底部径がやや大きく薄底の新しいものまで、バリエーションに富む。いずれも外面ハケメ、内面ナデ痕を明瞭に残す。197・198は壘蓋である。197は天井部が欠損し、「八」字状に広がる裾部のみが残る。198は天井部のみの資料である。199・200は高坏の脚部である。199は長脚高坏の脚上部の資料である。円筒状にまっすぐ伸びる部分が残存する。外面に丁寧なヘラミガキを施し、丹を塗布する。200は「八」字状に広がる脚部が残る。やはり外面にヘラミガキを施すが、丹塗り痕跡は確認できない。

201・202は素口縁壺の口～頸部である。いずれも内面は横方向の緻密なヘラミガキ、外面には1cm間隔で細いヘラ工具により暗文を施す。ただし両者ともに丹塗り痕跡は確認されず、橙色に発色するように胎土や焼成を調整したものと考えられる。203は鋤先口縁壺の口縁部片である。鋤先部は良く発達していないが、これが退化によるものかは不明。調整もあまり丁寧ではなく、内面には指頭圧痕が残る。これらの資料はほぼすべて須玖Ⅱ式の新しい段階に位置づけることができ、中期後半～末であろう。

22号溝

22号溝は2区中央西に位置する南北溝である。本来は南北を縦断する溝であったが、2区中央部は浮羽バイパスで調査した堂畑遺跡の中で最も標高が高い場所であったため、著しい削平を受けており、溝床面の深い部分を北・南の2ヶ所で検出できたにとどまる。北溝は長さ6.4m、幅90cm前後、深さは北側で6cm、南側で4cmを測り、床面は若干北向きに傾斜する。南溝南端は調査区外であるが、現状で長さ5.0m以上、幅120cm、南側以外の三方向にテラスを持ち、深さは南端で10cmを測る。床面は北に向かって傾斜する。南溝北のビットも溝に伴うものか。埋土は北溝・南溝とも黄灰色細砂で、南溝のみ中央部分がやや暗いレンズ状堆積になる。

出土土器から弥生時代後期中葉の溝となるか。

出土土器(第158図1～3) 1・2は須玖Ⅱ式の壺の口縁部片である。1は端部を跳ね上げ気味に処理するもので、2は口縁部が短く、端部を四角く収めるものである。いずれも弥生時代中期後半の資料。3は二重口縁壺の口縁部片である。屈曲部の小片であり、傾きにはやや不安が残る。内・外面ともに屈曲部より上をナデ消し、以下にはハケメが残る。弥生時代後期中葉

の資料。

23号溝

22号溝は2区中央西に位置する北西—東南溝である。この付近は著しい削平を受けており、溝床面が深い部分を南北2ヶ所のみ検出できたにとどまる。北溝の北端は調査区外であるが、現状で長さ4.2m、幅70cm前後で、溝床面は南側に向かって若干傾斜し、南端で深さ15cmを測る。南溝は長さ2.6m以上、幅110cm、中央は掘り過ぎてしまい5cmほど一段深くなるため、本来の深さは7cm程度となる。北・南溝間を結ぶと溝の幅や軸などから別遺構の可能性がでてくるが、両方の埋土は暗黄褐色細砂であり、床面の土のしみが両溝を結ぶように検出できたため、同一の溝と判断した。

出土土器や15号溝とほぼ同じ軸を示すことから、古墳時代後期の溝となるか。また、覆土上層部から磨製石包丁（第265図31）が出土している。

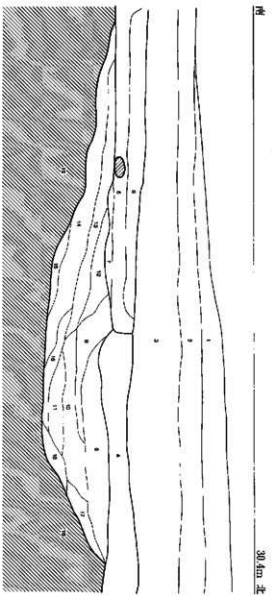
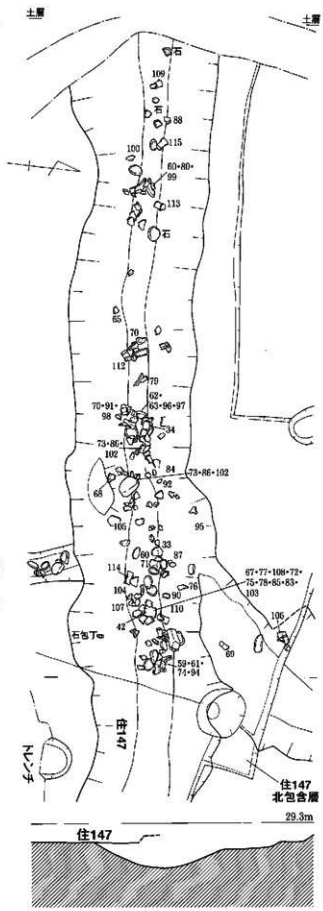
出土土器（第158図4～10） 4～9は弥生土器である。4・5は須玖Ⅱ式の甕の口縁部片である。4は口縁部を動先状に整形し、5は口縁部上面を跳ね上げ口縁と同様に強いナデによってわずかに窪ませるが端部は四角く収める。4の口縁部径は35cm、5は28cmを測る。6は甕の底部片である。外面だけでなく内面にもハケメを施す点が特徴的である。底部自体は残存しないが、かなり薄く造られたものと見られる。7は鋤先口縁壺の口縁部片である。鋤先部がほぼ水平に伸び、上面はわずかに窪む。端部は四角く収める。内・外面ともにナデ仕上げ。8は甕蓋の天井部片である。つまみ部を左右に張り出し、天井部の厚さは比較的薄くつくられる。9は高坏の坯底部～脚上部片である。幅の狭いヘラ磨きを脚外面には縦方向、坏部内・外面には横方向に丁寧に施し、丹塗りをを行う。脚部内面はナデ調整。以上はいずれも弥生時代中期後半～末の資料である。

10は土師器の甕の口縁部片である。菌状の胴部を持つ甕で、如意状に外反する口縁部のみが残る。11縁部は内・外面ともにナデ、胴部は外面ハケメ、内面ケズリ調整。11縁部径は19.8cmを測る。

24号溝（図版62・63、第157図）

24号溝は2区南西隅に位置し、147号住居跡に切られる。調査当初は溝埋土と地山の区別が非常に難しく、何回も下げては検出するという作業を行った。そのために溝南北に段が付き、また北側の支流溝部分上部を掘り過ぎてしまっている。147号住居跡中央で溝東壁の立ち上がりを検出し、また床面レベルから東から西方向に流れた溝となる。溝南北では床面が南に向かって傾斜し溝本体に流れ込む支流溝を確認した。溝西端は調査区外となるが、1区南東隅の調査当初は土坑とした遺構は、当溝と同じく壁が緩やかな傾斜を持つもので、埋土も当溝と非常に近く、溝の北同一の溝と判断できる。よって、24号溝は2区では東西方向に流れるが、1・2区との間の未調査部分で南西方向に向きを変えることが想定できる。

溝は現状で長さ26m以上（1区で検出した箇所まで含む）、幅は200cm前後、深さは2区西端で36cmを測り、北側の支流部分は長さ5.0m、幅120cm、最も深い溝本体と合流する部分で深さ15cmを測る。溝土層は先述したような調査方法のため、西壁部分でしか図化できず、溝本体と



1. 赤褐色粘質土(赤土)
2. 灰褐色粘土層(粘分が多い)の50%程度に腐葉土(腐土)
3. 灰褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
4. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の50%程度に腐葉土(腐土)
5. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
6. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
7. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
8. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
9. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
10. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
11. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
12. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
13. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
14. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
15. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
16. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
17. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
18. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土
19. 赤褐色粘質土に赤褐色粘質土の70%程度に腐葉土

第157図 24号溝・土層実測図 (1/60・1/30)

直交していない図となる。土層や遺物の出土状況から溝埋土はレンズ状に堆積するものの、溝埋土は黄褐色系の粘質砂が主体となること、出土土器が須玖Ⅱ式に収まることから、土器・石の継続的な廃棄によりあまり時間がかからずに埋まったと考えられる。

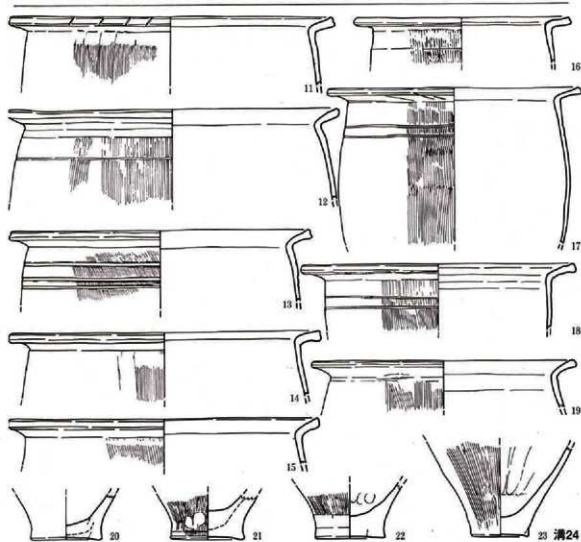
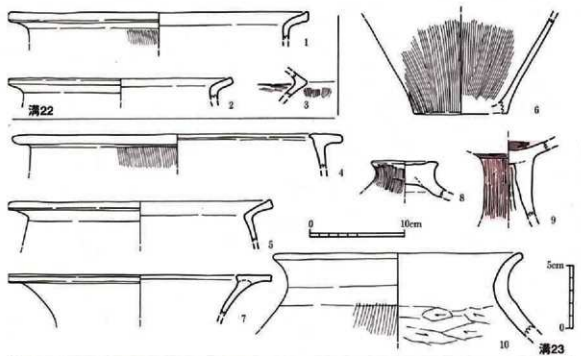
溝内から多量の土器・石などが出土したが、いずれも床面から数cm浮いた状態で検出し、床面上から出土した遺物は小破片数点のみである。出土土器は混入品として古墳時代後期後半の須恵器・土師器が少量認められるが、大半が弥生土器であり、当溝の時期は弥生時代中期末と考えられる。また、南側の支溝と考えられる小溝出土土器も中期後半であり、また埋土も類似することから当溝と関係する可能性が高くなる。

溝南壁に接した覆土上層から磨製石包丁(第265図32)、石皿(第267図63)・砥石(第266図53)が出土した。

出土土器(図版121~123、第158~164図11~134) 11~58は上~中層出土、あるいは出土位置が記されない資料である。このうち、11~55が弥生中期須玖Ⅱ式土器である。11~19、24~27は甕形土器の口縁部片である。いずれも胴部上半に膨らみを持つバケツ状の全体形を有し、口縁部が直角に折れ曲がって短い平坦な口縁部を持つ資料群である。外面ハケメ、内面ナデ調整を施す。11~16・18は口縁端部が跳ね上げ気味になる資料群である。また、17・26・27は端部を四角く、19・24・25は丸く収めるものである。これらのうち、12・13・17・18には、口縁部下に1条または2条の浅い沈線が巡る。また、11は口唇部に鋭いヘラ状工具によりやや間隔の広い刻目が施される。これらの資料の大半は口径が30cmを中心に上下3cm程度の幅に収まるもので、最も大きい資料として26の34.4cmが挙げられるが、この資料には口縁部下に断面三角形の突帯が張り付けられている。20~23、29~32は同じく甕形土器の胴~底部片である。底部径はいずれの資料とも6cm~7cmとやや小さめであり、厚さにはややばらつきが認められる。いずれも外面ハケメ、内面ナデ調整を行う。28はやや小形ではあるが成人用甕棺の丸みを帯びた系列に該当する資料で、橋口編年のKⅢb式の範疇に入るものか。33~36は樽形甕あるいはひさご形甕の底部片であろう。いずれも通常の甕の底部よりも幅が広く薄底で、底~胴部境のくびれがほとんどない点の特徴である。35は立ち上がり角度がやや緩やかで、調整も内・外面ともにナデを施すなどの特徴があり、甕よりは壺の可能性が高いか。これ以外の資料は外面ハケメ、内面ナデ調整を行う点で共通する。37は甕蓋の天井部片であろう。端部が外側に弱く張り出し、天井部上面を窪ませる。

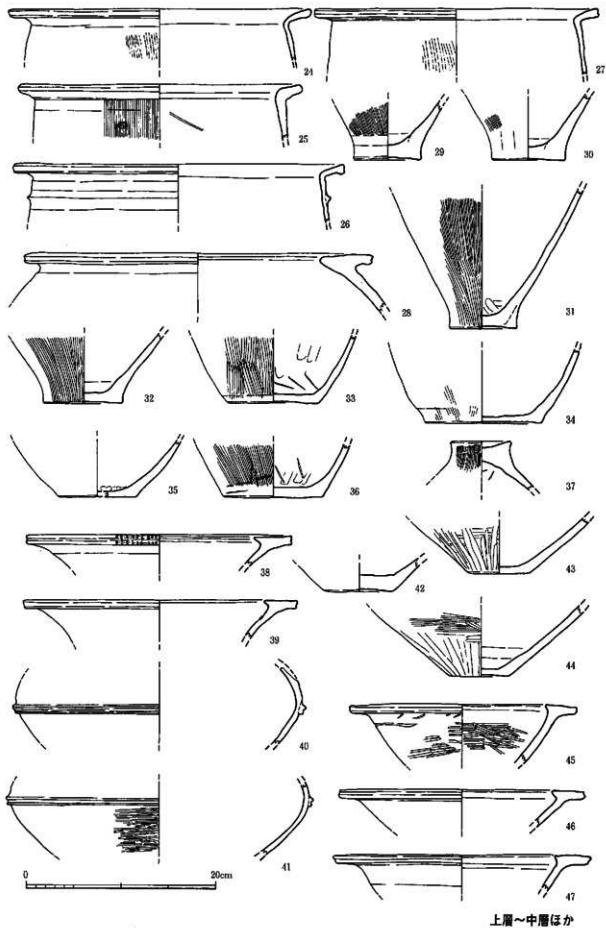
38・39は鋤先口縁壺の口縁部片である。38は口縁部上面にやや強いナデを施して端部をわずかにつまみ上げる。口唇部には上・下端に小さな刻目を連続して施す。いずれも内・外面ともに横ナデ調整で丹塗り等は認められない。40・41は壺の胴部片である。共に胴部最大径付近が残り、胴部最大径のやや下に断面M字状の突帯を1条巡らせる。40は摩耗により調整がやや判然としませんが、41は内面と外面の突帯より上をナデ、突帯より下に横方向のヘラミガキを施す。42~44は壺の底部片である。42は摩耗により本来の形態がやや損なわれており、調整も不明瞭である。43・44は調整が良く類似し、ともに外面下方には幅の広い原体による縦方向のヘラミガキ、その上には幅の細い原体による横方向のヘラミガキが施される。

45~47は高坏の坏部片である。いずれも鋤先口縁を持ち、径が24~27cm程度と類似する資料群である。調整は46が内・外面ともにナデ仕上げ、45は内・外面ともに横方向のヘラミガキ、

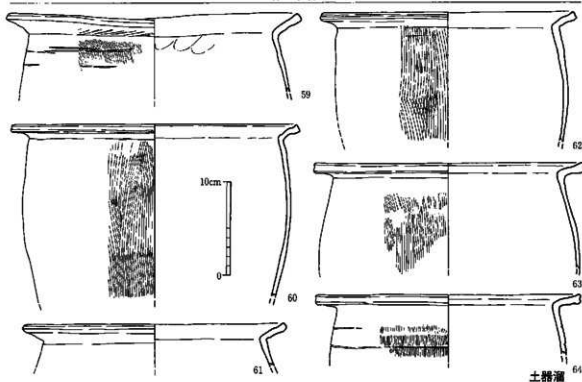
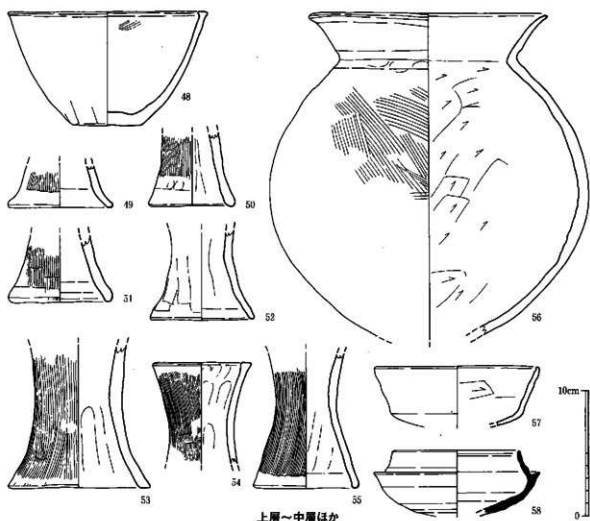


上層～中層ほか

第158图 22・23・24 (1)号清出土土器実測図 (10は1/3、他は1/4)



第159図 24号溝出土土器実測図(2)(1/4)



第160図 24号溝出土土器実測図(3) (53・56~58は1/3、他は1/4)

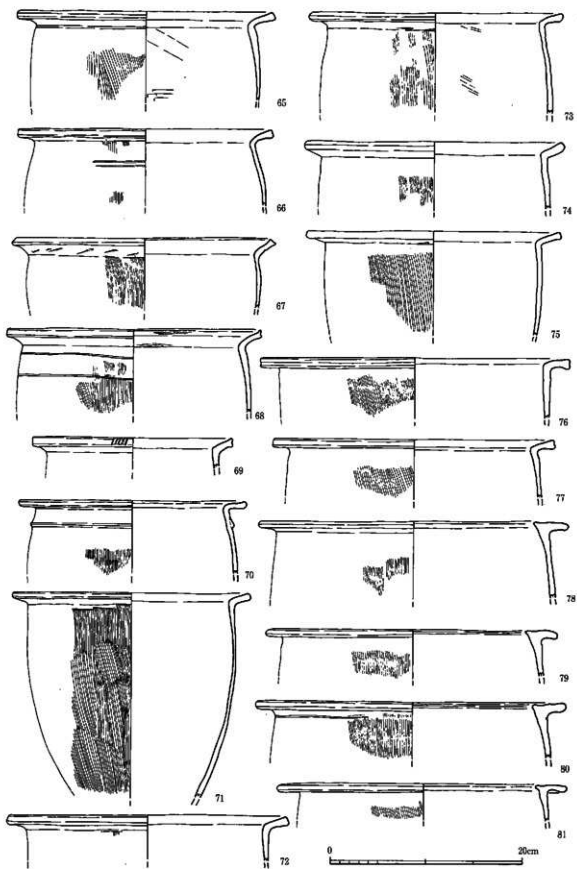
47の外面上にもヘラミガキ痕跡が認められる。48は碗形土器である。平底から比較的直線的に外反する器形を有する。口縁端部をやや肥厚させ、口唇部にナデを施して凹ませる。調整は摩耗によりやや不明瞭だが、外面下方には板状工具によるナデが認められる。49～55は器台である。いずれも須玖式に通有の器台であり、52を除いて外面ハケメ、内面指ナデ調整で仕上げる。52のみ外面が板状工具ナデで仕上げられる。これらの資料はいずれも弥生時代中期後半～末に比定される一群である。

56は古墳時代前期の短頸壺である。球状の胴部と短く外反する口縁部を有する。頸部屈曲部には指頭圧痕が良く残り、これより上は内・外面ともにナデ仕上げ。胴部外面はハケメ、内面にはケズリ痕が残る。57は高杯の杯部片であろうか。外面ナデ、内面ハケメを施す。古墳時代後期のものか。

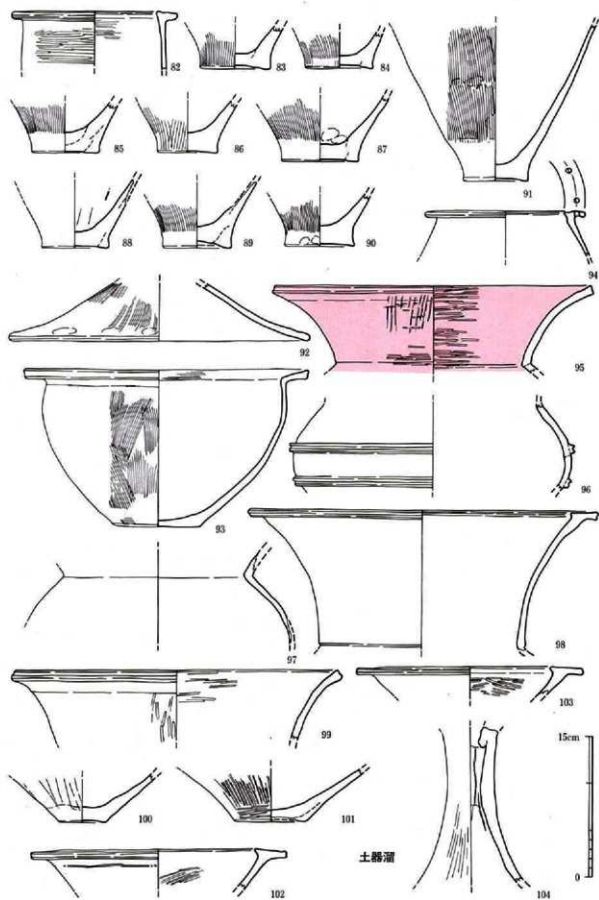
58は須恵器の蓋杯杯身である。かえりを有し、口縁端部が上方にかなり長く伸びるタイプである。底部外面に回転ヘラケズリ調整が認められる。

59～115は土器溜まりからナンバーを付して取り上げた資料であり、すべて弥生土器である。59～81は甕形土器の胴部～口縁部片である。いずれも胴部上半が膨らんだバケツ状のプロポーシオンを持ち、口縁部は外側に屈出して短く伸びる全体形を有する。また、大半は外面をハケメ、内面をナデ調整、口縁部付近のみヨコナデで仕上げる。これらの資料のうち、59～70は口縁端部の上面にやや強いナデを施して端部を上方に引き上げる、跳ね上げ状の口縁部を有する。これらの資料の中でも、口縁端部の形態には若干のバリエーションがあり、59や66のように上面のナデは施すものの端部をほとんど引き上げず、四角に収めようとするものや、端部を上方とともに下方にも引き出して肥厚させる63や64のような資料、上方に強く引き上げる68のような資料もある。71・72・75～77は端部を四角く収める資料、また73・74は端部を丸く収める資料である。この中には、跳ね上げ口縁のように口縁部上面の端部に強いナデを施す72・74のような資料もあるが、上面を緩やかに湾曲させる71・73のようなものも認められる。78～81は鋤先口縁を有するものである。屈曲部の内側を大きく突出させ、水平あるいはやや垂れ下がりが気味に外に延ばして、端部を丸く収める。この中で、80は口縁上面のナデに特徴があり、おそらく跳ね上げ口縁の製作法に影響を受けたものであろう。これらの資料の口縁部径は、おおよそ30cmを中心に上下3cmほどの範囲内に収まるが、一部に小形品があり、69が22cm、70が25cm、71が26.2cmである。82も甕形土器の胴～口縁部片である。口縁部は鋤先状を呈する。この資料は調整に特徴があり、内・外面ともに横方向のヘラミガキを施す。胎土も精製であり、樽形甕の可能性はあるが、全体的なプロポーシオンからはやや疑問が残る。83～91は同じく甕形土器の胴～底部片である。底部径や底部の厚さはさほどばらつきがなく、時期的にまとまりのあるものと見てよいか。外面が摩耗して調整が不明な88を除き、いずれも外面ハケ、内面ナデ調整を施す。92は蓋である。天井部を欠失しており、「八」字状に開く部分のみが残る。93は鉢である。口縁部をわずかに跳ね上げ気味に処理する。

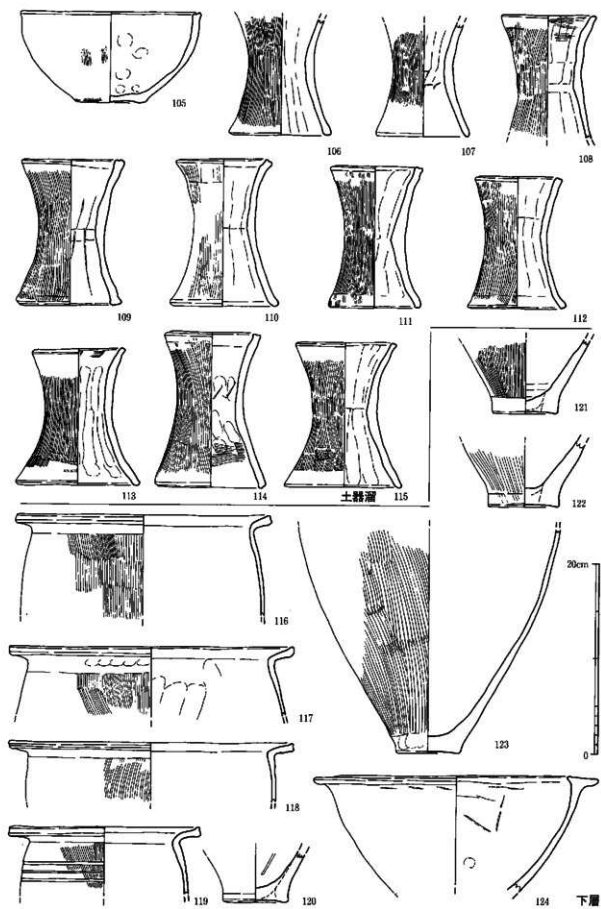
94は無頸壺である。口縁部のみの残存で、口縁部を鋤先状に処理する。残存部に2箇所焼成前穿孔が認められる。95は素口縁壺の口縁部片である。内・外面ともに横方向の細かいヘラミガキ、丹塗りを施す。外面には工具痕が筋状に残る。96は壺の胴部片である。断面M字状の突帯を2条付す。内・外面ともに丁寧なナデ仕上げで丹塗りは認められない。97も壺の胴～頸



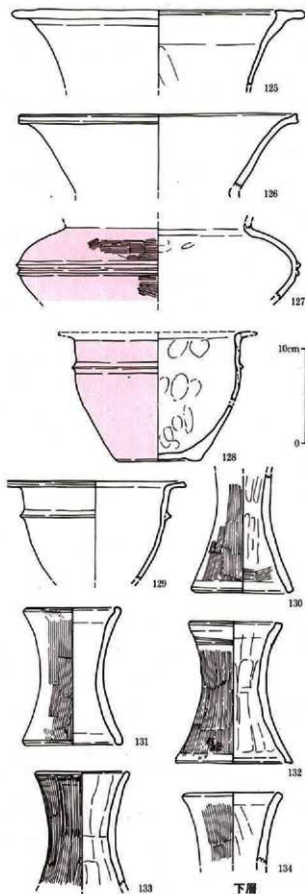
第161图 24号沟出土土器实测图(4)(1/4)



第162图 24号溝出土土器実測图(5)(1/4)



第163图 24号溝出土土器実測图(6)(1/4)



第164図 24号溝出土土器実測図(7)(1/4)

部片である。全体に摩擦しており調整は不明。98は鋤先口縁壺の口縁部片である。頸部から直立気味に上方に伸び、鋤先部はさほど発達しない。内・外面ともにヨコナデ仕上げで丹は見られない。99は素口縁壺の口縁部片である。口縁端部をやや肥厚させる。調整は内面横方向、外面縦方向のヘラ磨きだが、摩擦しており詳細は不明。丹は認められない。100・101は壺の底部である。100は外面を幅の広いヘラ状工具、101の外面は非常に細い工具で縦ミガキ、内面は指ナデ。いずれも丹は確認されない。102・103は鋤先口縁を有する高環の坏部片である。ともに内面にはヘラミガキ痕が残る、外面は摩擦のため明瞭ではないがヘラミガキか。102には細いヘラ状工具を強く押し当てて引いた浅い沈線状の痕跡が残る。

104は高環の脚部である。摩擦が著しいが外面は縦方向のヘラミガキ、内面は指ナデ調整か。105は碗形土器である。半球状の坏部と平坦な底部を有し、口縁端部をナデで、やや窪ませる。外面ハケメ、内面は指頭圧痕の残る指ナデ。106~115は器台である。いずれも須玖式土器にしばしば認められる器壁の薄い器台である。外面はハケメ調整、内面には指頭圧痕を残すナデ調整が認められる。これらの資料はいずれも須玖Ⅱ式土器の中でも比較的新しい段階の資料群であり、中期後半~末に位置づけられよう。

116~134は下層出土の土器群である。116~118は甕形土器の胴~口縁部片である。116は端部を四角に収め、117・118は跳ね上げ状に仕上げる。いずれも口縁部径は30cm内外で、調整は外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。119は小形の甕形土器。口径は約20cmほどと小さい。口縁部は跳ね上げ状に処理し、胴部上位に3条の沈線を巡らせる。120~123は甕形土器の胴~底部片である。いずれも底部径が小さく、須玖Ⅱ式の中でもやや古相に位置づけられるか。外面ハケ

メ、内面ナデ調整。124は鉢形土器。口縁部を鋤先状に仕上げるもので、口縁上面を強くなくて、窪ませる。胎土は精良であるが調整は内・外面ともにナデ仕上げ。125は鋤先口縁壺である。鋤先口縁の端部を丸く仕上げる資料で、内・外面がナデ調整で内面には指頭正痕が残るなどやや粗雑な仕上げである。

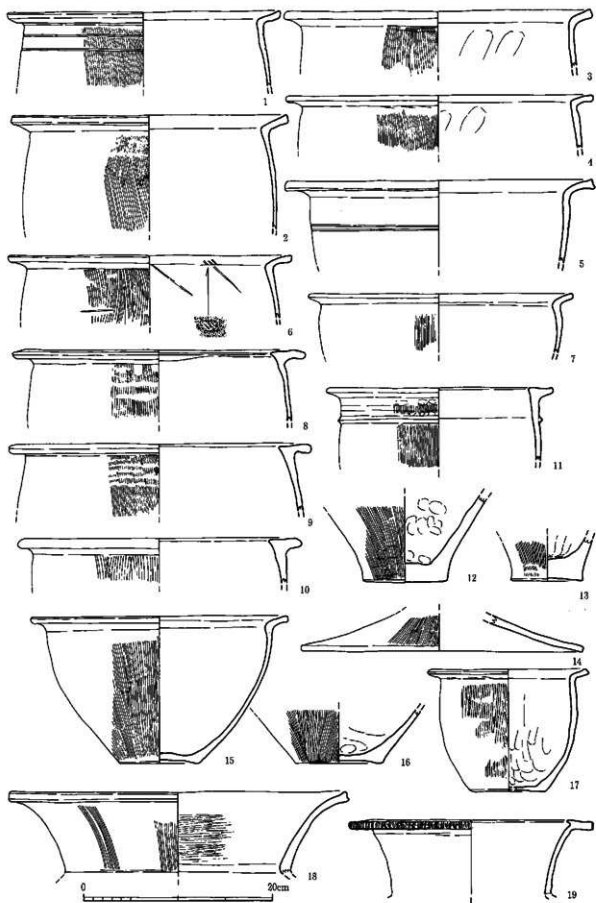
126は素口縁壺である。口縁端部を肥厚させ、口唇部にナデを施してやや窪ませる。調整は内・外面ともにナデ仕上げで丹塗り痕跡は認められないが、橙褐色に発色している。127は壺形土器の胴部片である。胴部最大径から上が残る。扁平な胴部であり、おそらく口縁部が朝顔状に広く開くものであろう。128・129は碗形土器である。いずれも屈曲口縁と突帯を有する精製品であるが、128のみに丹塗りが施される。調整はともに内・外面にナデが施される。130～134は器台である。いずれも須玖式に通常の器台であり、外面ハケメ、内面ナデ調整によって仕上げられた一群である。以上の資料はすべて弥生時代中期須玖Ⅱ式土器の中でもやや新相を呈し、中期後半～末に位置づけられよう。

25号溝 (図版63、第138・140図)

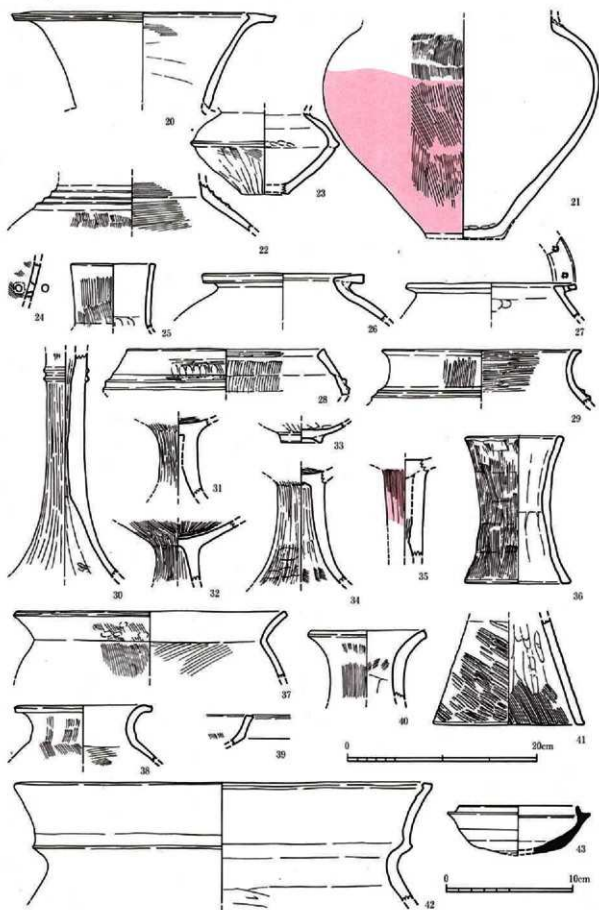
25号溝の位置等については、20号溝の部分で述べたとおりである。20号溝とはほぼ並行しており、同時期の遺構と考えられる。25号溝は最大幅2.5mを測る、断面逆台形状を呈する溝である。削平が著しいため溝の深さは浅く、深いところでも20cmほどしかない。埋土は5層に分層できるが、各層の土質は大きくは異ならない。土器の出土量はさほど多くなく、20号溝のようにまとまって出土する部分も認められなかったが、削平により失われた可能性もある。出土遺物は大半が弥生土器であり、20号溝と同じく弥生時代中期後半～末に埋没したものであろう。また、磨製石包丁が出土している。

出土土器 (図版123・124、第165～166図) 1～41は弥生土器である。1～11は甕形土器の胴～口縁部である。1・2・5はわずかに口縁端部を跳ね上げ状に処理したものである。3は口縁端部を四角に、4・6・7は丸く収めるものである。8～11は鋤先口縁である。これらは胴部が丸みを帯びたバケツ状の器形を有するもので、外面ハケメ、内面ナデ、口縁部付近を横ナデによって仕上げたものである。1・5は口縁部下に2条の浅い沈線を巡らせる。また11は断面三角形の突帯を巡らせており、樽形甕の可能性もある。12・13は同じ甕形土器の底部片である。外面ハケメ、内面ナデを施す。14は甕蓋の端部片である。「八」字状に広がる端部が残る。15は鉢形土器である。器形は精美で、外面ハケメ、内面ナデ仕上げを施す。16は鉢あるいは壺形土器の底部である。外面ハケメ調整であり、精製品ではない。17は小形の樽形甕である。口縁端部は四角く収め、上面を強いナデによって窪ませる。

18は素口縁壺の口縁部片である。内・外面ともにハケメ調整で、外面には5～6本が一単位となる細いヘラ状工具による暗文が認められる。19は鋤先口縁壺である。頸部は直立に近く、口縁部は内側によく発達し、口縁端部には刻目が施される。20も鋤先口縁壺である。口縁端部上面に強いナデを施してやや跳ね上げ気味に仕上げる。21は壺の胴部片である。底部付近が摩耗しているが、その他の部分の調整は良く残り、外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。22は長頸壺の肩部片である。頸～胴部境に3条の断面三角形の突帯を施す。調整は内・外面ともにハケメ。23は小形壺の胴部片である。胴部最大頸部に断面三角形の突帯を1条付す。胴部上半はナデ、



第165图 25号清出土土器实测图(1)(1/4)



第166图 25号溝出土土器実測図(2)(42は1/3、他は1/4)

下半は幅の広い工具によるヘラミガキ。24は小片のため不明だが、直口縁壺の頸部片か。焼成前穿孔が一つ施される。25は直口縁壺の口縁部である。口縁部がわずかに開きながら真っすぐ伸びて口縁部に至る。26は大形の短頸壺の口縁部である。口縁部は鋤先状に仕上げるが、内面の突出はほとんど認められない。27は小形の短頸壺の口縁部である。胴部が細長い東系の器形である。口縁部に2つの穿孔が認められる。調整は摩耗により不明。28は鉢形土器の口縁部か。屈曲して内傾する口縁部のみが残るが、接合痕から鉢状の胴部の上に付いていた可能性が高い。類例がなく全体形は不明である。外面はミガキ、内面はハケメ調整を施し、端部も磨きで丁寧に仕上げる。29も壺形土器の口縁部であるが、類例が少なく全形は不明である。壺の胴部が付くものであろうか。頸部に2条の断面三角形の突帯を付し、調整は外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキによって仕上げる。

30は長脚高環の脚部片である。外面ヘラミガキ、内面ナデによって仕上げる。上部に断面三角形の突帯を2条付す。31・32・34は高環の環部付近の破片である。いずれも短脚の高環と見られ、内・外面ともにヘラミガキ調整が施される。33はやや不安があるが、高環の環部片か。35も長脚の高環の脚部片である。外面に縦方向のヘラミガキを行ったあとに丹塗りを施す。36は器台である。これらの資料はいずれも須玖Ⅱ式土器の中でもやや新しい様相を呈し、中期後半～末に比定される。

37は「く」字状の口縁を持つ壺形土器である。内・外面ともにハケメ調整を施す。38は長脚壺の口縁部であろう。39は瀬戸内系の高環の口縁部である。やや外傾して端部を四角く収める。40は器台の上半部、41は下半部であろう。40は外面ハケメ、内面ナデ調整、41は外面にタタキ痕跡が明瞭に残る。これらはいずれも弥生時代後期の資料であり、おそらく中葉前後のものと考えられる。

42は古墳時代前期の二重口縁壺の口縁部片である。口縁部径が33cmと大形のものである。内・外面ともにナデ調整を施し、胴部内面のみケズリを行う。

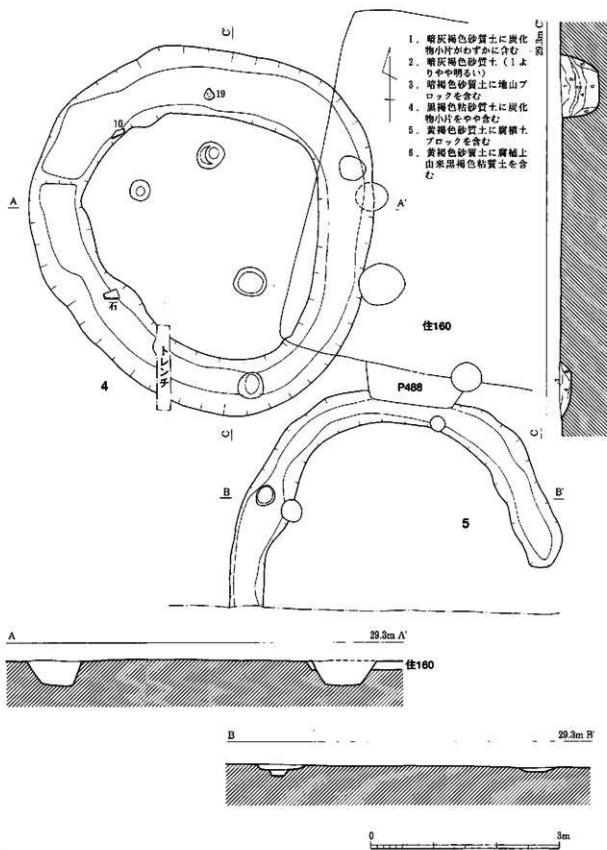
43は須恵器の杯身である。口縁部にかえりを有するもので、口縁部径は11.2cmを測る。7世紀初頭頃の資料である。

26号溝

26号溝は2区中央北端に位置する東西溝。2区中央部は削平が著しく、溝床面の深い部分を4ヶ所に分かれた状態で検出できたとどまる。溝北側は調査区外であるが、現状で長さ17m、幅70～90cm前後、深さは8cm前後と浅い溝で、東西にさらに延びるものと思われる。溝床面は凹凸があるが、床面レベルから東から西に流れたと考えられる。埋土は暗黄灰細砂。出土土器で図示できるものはない。

27号溝

27号溝は2区東中央北寄りに位置する北西—南東方向の溝で、25号溝に切られるが、同溝西側までは延びない。現状で長さ4.7m以上、幅1.5m、深さ13cmを測り、溝床面は北西方向に向かって低くなる。出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係と埋土から弥生時代中期後半の溝となるか。



第167図 4・5号円形周溝状遺構 (1/60)

e. 円形周溝状遺構

4号円形周溝状遺構(図版64、第167図)

2区東側で検出した。5号円形周溝状遺構の北にあり、160号住居跡と切り合い関係にある本遺構が先行する。平面形は外径4.8mほどを測るやや歪んだ円形で、幅は50cmほどを測る。床面には傾斜があって南側に行くほど浅く、北側に行くほど深い。最浅部は深さ20cmほどに対し、最深部は60cmほどを測る。溝に囲まれた内側からはピットが3基検出されたが、いずれも本遺構に伴うものであるかどうか明確ではない。出土土器から、弥生時代中期後半～末に位置づけられよう。また、周溝埋土から磨製石鎌(第264図15)が出土している。

出土土器(図版124、第168図1～23) 出土した土器はすべて弥生土器である。1は壺形土器の胴部片である。胴部最大径は28cmを測る。外面ハケメ、内面指頭圧痕を残すナデ調整。2も壺の底部片である。比較的薄い底部片である。外面ナデ、内面指頭圧痕の残るナデ。3は壺または樽形甕の底部片であろう。底部の厚さがかなり薄いものである。外面は横方向にヘラミガキを施したのちに丹塗りを行う。内面はナデ。

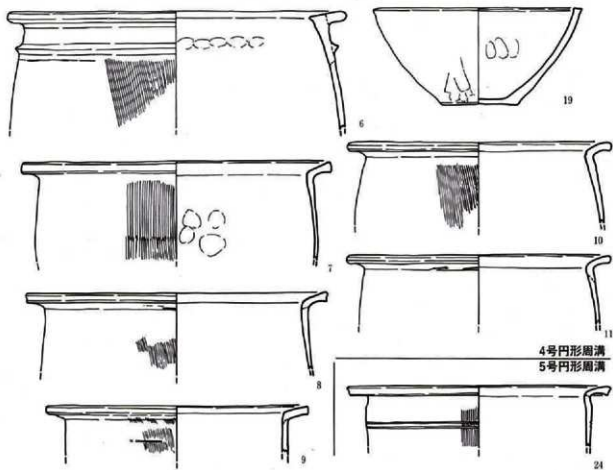
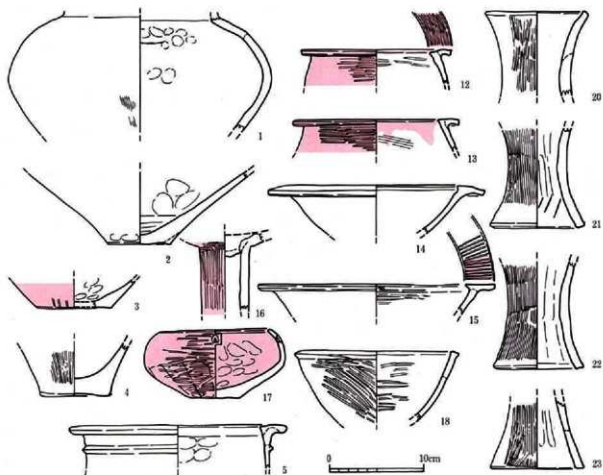
4は甕の底部片である。底径は8cmほどを測る。外面ハケメ、内面ナデ。5は小形の甕の口縁部である。口縁は鋤先状で、口縁部下に1条の三角突帯を付す。6～11は須玖式土器に通用の甕形土器の胴上半～口縁部片である。いずれも調整は内面ナデ、外面ハケメを施す。6は鋤先状の口縁部を有する。7は端部をわずかに跳ね上げ状に処理する。8は口唇部を上下に肥厚させる。9は口唇部を方形に処理する。10・11は口唇部を丸く収める。12・13は無頸甕の口縁部であろう。口縁部を鋤先状に処理しつつ、端部をわずかに上方に引き出して跳ね上げ状に処理する。口縁部の平坦部上面と胴部外面はヘラミガキ後丹塗り、胴部内面はナデのちにヘラミガキを施す。

14・15は高坏の坏部片である。いずれも坏上半～口縁部が残る資料である。14は口縁部は鋤先状に処理し、端部は下方によく伸びて口唇部上面をわずかに上方に上げる。坏部は内・外面ともにナデ仕上げ。15は鋤先部を平坦に延ばし、上面に細い原体によるヘラミガキにて放射状の暗文を施す。内面にもヘラミガキの痕跡が認められる。上面の一部に丹塗りの痕跡が認めら



4・5号円形周溝状遺構(上から、上が南)

れ、おそらく内・外面にも塗布した可能性が高い。16は高坏の脚上部片である。外面は縦方向にきめの細かいヘラミガキを施し、丹塗りを行う。内面は筒状になっており、ナデ仕上げ。17は口縁部が強く締まる椀形土器である。甕の口縁部を欠失したような器形を呈し、外面に塗りで下方に板ナデ痕を残し、内面には指頭圧痕が多く残るナデを施す。内・外面に丹塗り痕跡が認められる。18も椀形土器であるが、口縁部が広く開く器形を有する。こちらも外面ヘラミガキ、内面にもヘラミガキ痕がかすかに認められる。20～23は器台である。いずれも外面ハケメ、内面ナデを行う。これらの資料の多くは須玖Ⅱ式でも比較的新相を呈する。



第168图 4·5号円形周溝状遺構出土土器実測図(1/4)

5号円形周溝状遺構（図版64、第168図）

2区東側で検出した。南側の調査区外に半分ほどが広がっており、本調査区内ではその北側半分のみを調査した。溝の深さは5cm前後と極めて浅く、一部では溝が途切れてしまっていたが、本来は4号と同様完周するものであったのだろう。出土土器から、中期後半に比定できよう。

出土土器(第168図24) 24は弥生中期須玖Ⅱ式の甕型土器の口縁部片である。屈曲口縁を有し、端部を強くなでて窪ませる。

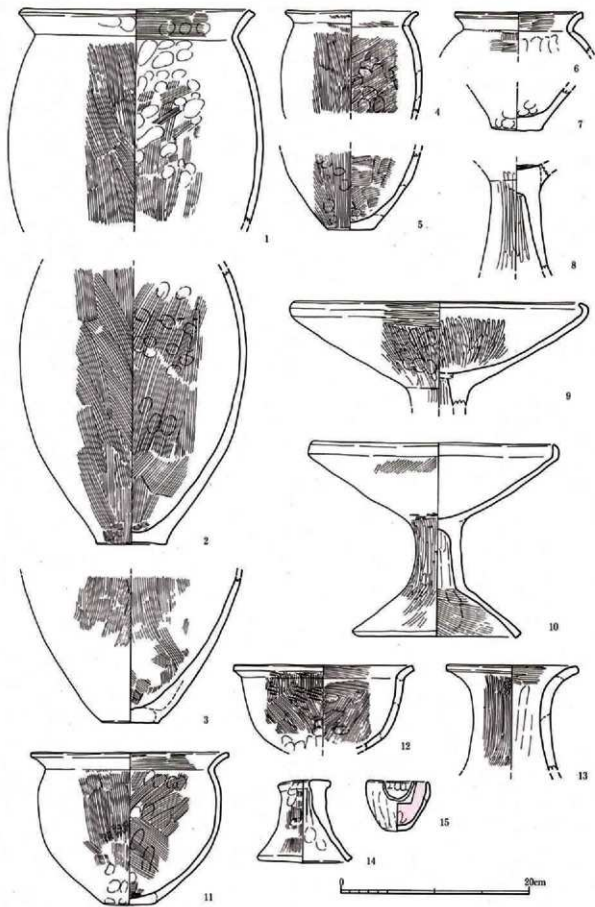
SX05（図版51）

調査区の東隅で検出した不整形の落ち込みである。東側を166B号住居跡に、南側を167号住居跡に破壊される。壁は傾斜が緩く、谷状の落ち込み様を呈するが、底面は平坦である。弥生時代後期前半の中でも新相に位置づけられる土器群が出土し、この時期に比定できよう。また、土主（第268図15）、石皿（第267図65）が出土している。

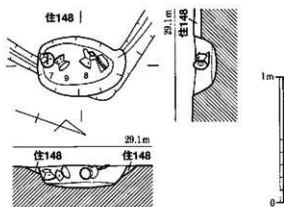
出土土器（図版124・125、第169図） 1～3は大形の甕形土器である。いずれも「く」字状の口縁部を有するものと思われるが、口縁部は1のみに残る。また底部が残る2・3の底部形状はほぼ平底（わずかに上げ底か）で未だレンズ状を呈さない。4・5は1～3と同様の器形を持つ小形の甕形土器である。特徴は共通する。すべて調整は内・外面ともにハケメを施し、しばしばハケメの下部に指頭圧痕が残る。6は長胴短頸壺であろう。口縁部は如意状に短く外反し、上部だけが残る胴部は大きく湾曲しながら開く。7は甕形土器の底部片である。底部はわずかにレンズ化しているようであるが未だ非常に厚く、底・胴部境の外側は強く内湾する。

8～10は高坏である。8は脚上部片である。内・外面ともに縦方向のヘラミガキ痕が認められる。わずかに残る坏下部の角度は比較的立っており、坏部は段を有するものであろう。9は坏部片である。坏部形状は、斜めに直線的に伸びたあと強く内湾するもので、以東地域にしばしば認められるものである。坏部は内・外面ともに縦方向のミガキを施し、口縁部外面は横方向のミガキ、内面はナデ調整。10はほぼ全形が分かる資料である。脚は中位で強く屈曲して下方が大きく開き、坏は斜め上方に開いた後屈曲して、短く直立する口縁部へと至る。瀬戸内系の高坏の口縁部形態に影響された可能性が高いがそのものからは大きく逸脱している。脚部は外面の屈曲より上が縦方向のミガキ、下半はハケメ。内面は屈曲より上がナデ、下半はハケメ。坏部は摩耗しており調整は不明瞭だが、外面の一部にハケメ痕、内面の一部にナデ痕が残る。

11・12は鉢である。いずれも屈曲して短く外湾する口縁部を有する。11は底部が残る、わずかにレンズ状化する。いずれも内・外面ともに指押し整形後ハケメを施し、12の胴上位にはハケメ前のタタキ、下位にはハケメ後の板ナデ調整痕が残る。13は器台である。上半のみが残る、強く湾曲しながら開く。外面ハケメ、内面ナデ調整。14も器台であろう。破片資料であり全形は不明で、上方に突き出す噴状の突出部を持つものの可能性もある。15は小形の手捏ね碗である。全体にナデ調整を施すが、比較的雑で、ゆがみも大きい。口縁部の一部が欠失するが、形状や欠失部の状況から、意図的な打ち欠きである可能性が高い。内・外面を赤褐色に発色させているが、丹塗りは認められない。これらのうち、1・3・6・7が下層から出土している。以上の土器群は弥生時代後期前半高三瀬式の新相に該当する資料群であり、一括性が高いもの



第169图 SX05出土土器实测图(1/4)



第170図 365号ピット実測図 (1/30)

と考えられる。

(4) 2区第2面ピット・遺構面

a. ピット

365号ピット (図版64、第170図)

2区東中央西寄り、20号溝北に位置し、148号住居跡北東隅を切るピット。長軸70cm×43cm、深さ18cmの楕円形を呈し、床面はやや丸みを帯び、壁は急に立ち上がる。ピット内ではほぼ完形の小型器台3個と弥生土器壺胴部片が床から少し浮いた状態で出土した。南側の小型器台は直立、北側2個は寝せた状態で検出し、北の弥

生土器はピットが埋まる際に混入したもの。埋土は黄灰色砂質土。

148号住居跡西壁を切る40号土坑と住居北東隅を切る当ピットは、住居の存在を意識して掘られたと考えられるものであり、また148号住居跡と40号土坑・当ピットはあまり時期が変わらないことから住居廃棄行為と何か関係すると思われる。

出土土器 (図版125、第171図7～9) 7～9は畿内系小形器台。7・8は内外面に二次加熱痕、9の外面には黒斑あり。7は浅い杯部で、外面は細かい横ミガキ、杯部内面は摩滅のため調整不明、脚部内面はハケ調整。生乾き状態で外から4つ穿孔。色は外黄褐色～赤褐色～灰褐色、内赤褐色～黒色。8・9は底径が口径より小さい器形となる。8は完形品で、口径10.8cm、底径9.9cm、器高9.6cmを測る。外面・杯部内面は不定方向のミガキ。脚部には生乾き状態で、外から4つ穿孔。色は橙褐色～赤褐色。9は杯部内外面に横ミガキ、外面脚柱部以下は縦ミガキを施すもの。脚部には生乾き状態で外から3つ穿孔。色は橙褐色。

出土土器から当ピットの時期は古墳時代前期末になる。

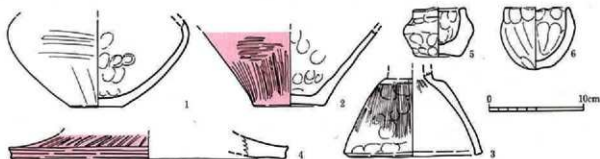
ピット出土土器 (図版125、第171図1～6)

1は弥生中期壺胴部。外面上部は横ミガキ、下部は縦ヘラナデで調整。外面には黒斑あり。色は外黄褐色、内暗黄褐色。2は丹塗精製甕底部で、外面は縦ミガキのち横ミガキで調整。外面はスス、内面は炭化物が付着。色は外赤褐色～黒色、内橙褐色～黒色。

3は逆碗形を呈する脚部。当初は高環部とも考えたが、内面はやや粗いナデ調整であることや脚端部が摩滅していないことから脚部であると判断した。脚端部は内側にやや突出させ、内面上部には工具痕が残る。脚柱部は内外面ナデ調整の中空の細長いものになると思われるが、杯部や全形は不明。底径は13.4cm。弥生中期に属するものと考えられるが、類例を探すことができなかったで、ご教示いただきたい。色は橙褐色。

4は筒形器台胴部。外面上部は2条を1単位とする暗文を施し、端面・下部はナデ調整。外面全体には丹塗りを施し、生地は黄褐色。

5は完形の弥生中期ミニチュア甕で、口径5.4cm、器高5.4cm。直口縁で、器壁は厚い。色は橙褐色～暗褐色。6は内外面ナデ調整のミニチュア鉢で、外面には黒斑あり。色は灰黄褐色。



2区第2面ピット
ピット365



第171図 2区第2面ピット・365号ピット出土土器実測図(6~9は1/3、他は1/4)

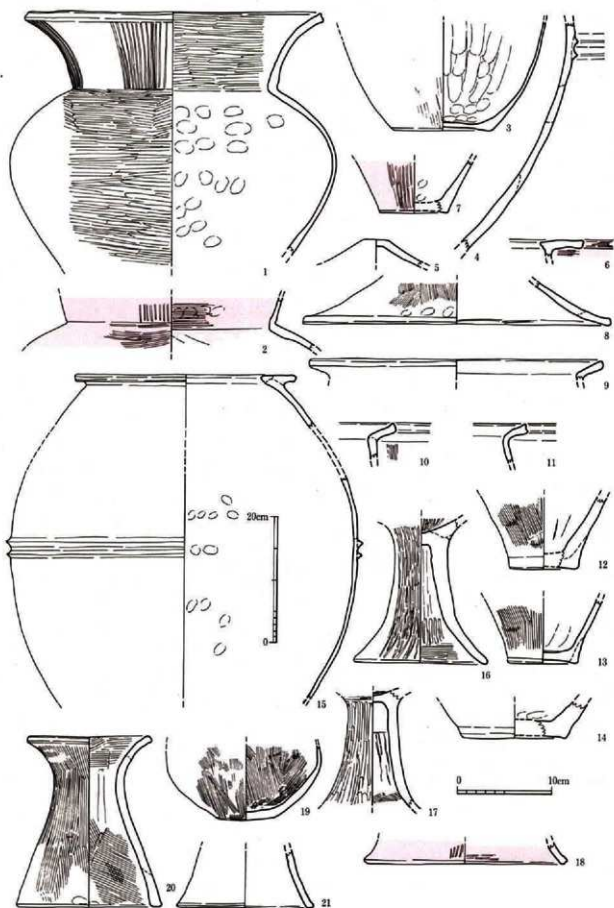
b. 遺構面

遺構面等出土土器(図版126、第172・173図)

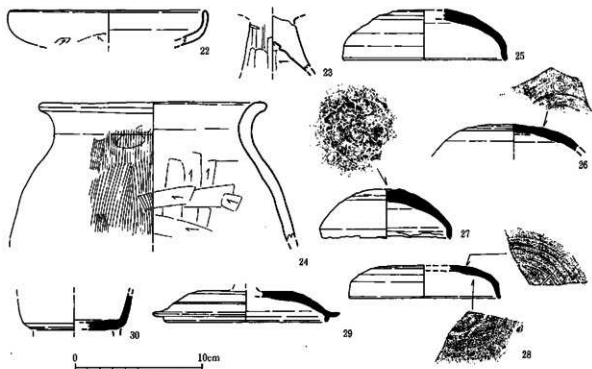
1・2は弥生中期広口壺。1の口頸部外面には13条を1単位とする分割暗文を施し、胴部外面・口頸部内面は密な横ミガキ調整。色は黄褐色～橙色。2は頸部片で、口頸部外面には分割暗文、胴部外面・口頸部内面は横ミガキを施す。胴部内面以外は内外面丹塗りを施す。生地は橙褐色。3は壺か鉢底部。外面は工具によるハケ状の擦過のちナデで調整。内面には指ナデ痕が良く残る。外面にはスス付着。色は外黄褐色～暗褐色、内橙褐色。4は胴部最大径の位置に2条の三角突帯を貼り付ける大形壺胴部で、色は黄土色。5は壺蓋。胎土には細粒を多く含み、色は外灰黄褐色～黒色、内橙褐色。

6は外面丹塗りの精製鋤先口縁甕で、外面はミガキ調整。生地は黄褐色。7は丹塗精製甕底部で、外面縦ミガキ調整。生地は褐色。8は甕蓋。内面口縁部にはハケ目が残る。色は黄褐色。9～11は弥生中期跳ね上げ口縁甕口縁部。9の色は黄褐色。10の色は灰褐色～灰黄褐色。11は口縁外端部がナデにより凹線状に窪む。色は白褐色。12～14は甕底部で、12・13の外面には二次加熱痕あり。12は内面に工具痕が残る。色は灰黄褐色。13は底部内面に炭化物あり。色は淡茶褐色。14は大形甕底部で、器壁が厚いもの。色は橙褐色。15は寸胴の大形甕。水平な鋤先口縁で、胴部最大径部分には2条の三角突帯を貼り付ける。口径35.0cm、最大胴部径57.0cm、残存高52.0cmを測る。色は灰黄褐色。

16～18は高环脚部。16は外面ハケのち縦ミガキ、环部内面下部は縦ミガキ、脚部内面上部は工具ナデのちナデ、下部は縦ミガキのち横ミガキを施す。色は灰黄褐色。17の脚部外面は縦ミガキ、内面上部は工具ナデのちナデ、下部はハケ目が残る。外面には黒斑あり。色は褐色。18は精製丹塗高环脚部部であるが、内外面は丹塗りを施すことから高环脚部として不安が残る、かなり小片のため径も自信がない。外面には縦ミガキ、内面は横ミガキで調整。



第172图 2区第2面遺構面等出土土器実測図(1)(15は1/6、他は1/4)



第173図 2区第2面遺構面等出土土器実測図(2)(1/3)

19は弥生後期鉢胴部で、内外面は細かいハケで調整。外面には二次加熱・黒斑あり。色は茶褐色。20・21は弥生後期器台。20は口径13.2cm、底径15.6cm、器高18.7cmを測るもので、内外面ハケ調整。色は茶褐色。21は内外面摩滅のため、調整不明。色は白灰黄色。

22は土師器杯で、杯下部は手持ちヘラケズリで調整。色は淡橙色。23は高杯脚部。内外面はケズリを施す。色は淡黄橙色。24は土師器甕で、外面には二次加熱痕・黒斑あり。色は茶褐色。

25～29は須恵器杯蓋。25の口縁端部はわずかに外反させる。色は外黒色、内灰茶色。26は天井部外面に竹管文を施し、後に短い1本線を交差させたヘラ記号を施す。色は暗灰色。27の外面は赤焼けて、口縁端部は打ち欠いたもの。天井部外面には×のヘラ記号を施す。色は外褐色、内黒灰色。28は口縁端部をわずかに外反させた低平な蓋で、天井部内外面にはヘラ記号がわずかに残るが、全形は不明。外面には灰がかかり、色は灰色。29のかえり端部はかなり外に突出させたもの。色は青灰色。30は須恵器杯身で、底部は回転ヘラケズリを施す。外面には灰がかかり、色は灰色。

a. 竪穴住居跡

169号竪穴住居跡 (図版66、第175図)

169号竪穴住居跡は3区東端中央、12号掘立柱建物跡南西に位置し、170・179号住居跡を切る。住居西半分は調査区外になるが、北壁に付設されたカマドが住居中央に位置したと考え、南北4.5m×東西6.4m(推定)、深さ10cmの大形長方形住居跡になる。埋土は灰褐色粘質砂に黄褐色砂質土が混じる土。床面では10基のビットを検出したが(黒線ビット)、切り合う170号住居跡床面と当住居跡床面とがほぼ同じ高さのために、170号住居跡に属するビットもあると考えられる(赤破線ビットは170号住居跡ビット)。位置と深さからP6・P12は主柱穴となる。住居床下で多数の掘り込みを確認した。住居付近遺構面から砥石2点が出土した(第266図51・52)。

カマド(図版66)北壁中央に位置したと考えられるカマドで、両袖とも壁から70cmほど突出し、右袖はカマド燃焼部を囲むような形態になる。燃焼部幅は断面を取った場所で42cm、奥壁部分で幅24cmと次第に狭くなる。奥壁部は壁から若干突出した図になるが、奥壁部をやや掘り過ぎてしまったもの。埋土には焦土・炭とも余り含まず、焼面は形成されていない。3はカマド内出土。

出土土器(第176図1～7) 1は土師器壘口縁部。色は橙褐色。2は土師器壘把手。内面はヘラズリを施す。外面には黒斑あり、色は褐色～焦げ茶色。3は口縁端部がわずかに外傾する土師器杯。色は橙色。

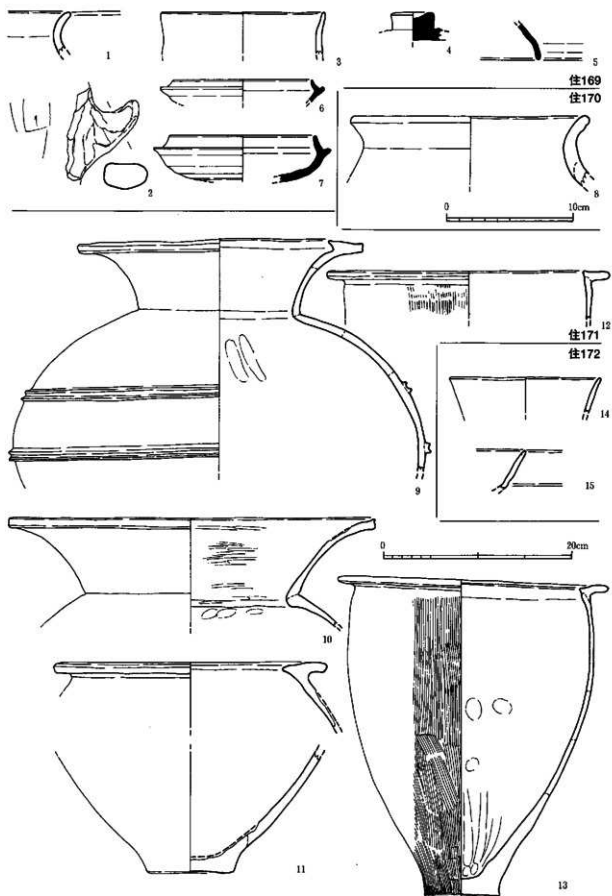
4は須恵器杯蓋つまみ。中央部が窪み、外面には灰がかかる。色は灰黒色。5は須恵器杯蓋口縁部。口縁端部はやや肥厚する。色は暗灰色。6は須恵器杯身口縁部。色は青灰色。7は須恵器杯身で、外面受部下には灰がかかる。胎土には細粒をやや多く含み、色は灰色。

当住居跡の時期は、出土土器から古墳時代後期末になる。

170号竪穴住居跡(第175図)

170号竪穴住居跡は3区東端中央、171号住居跡北に位置する。169号住居跡に切られ、174・179号住居跡を切る。住居の大部分は169号住居跡により壊されるが、東・南壁、西壁の一部が生きており、現存部分で南北3.7m×東西3.5m、深さ10cmを測り、平面形態は北側に壁が広がる住居跡となるか。床面では6基のビットを検出(169号住居跡内の赤破線ビット(3基)も当住居跡に属する)したが、169号住居跡床面と高さがほぼ同じため、169号住居跡で検出したビットの中にも当住居跡に属するものも存在すると思われる。主柱穴はP1・2・4・5の4本柱の住居跡となる(南北方向の断面図は169号住居跡と重なり煩雑となるため、図示していない。赤破線ビット内の数字は床面から深さを示す)。埋土は黄褐色細砂。

出土土器(第176図8) 8は外湾する口縁部を持つ土師器甕。色は外黄褐色、内灰褐色～茶褐色。



第176图 169~172号整穴住居跡出土土器実測図 (9~13は1/4、他は1/3)

171号竪穴住居跡（図版66、第177図）

171号竪穴住居跡は3区東端中央、169号住居跡南に位置し、172号住居跡に切られる。住居西側は調査区外であり、現存部分で南北3.9m×東西2.8m以上、深さ15cmを測る。床面では7基のピットを検出し、位置的にP1～3、6は主柱穴になると当初考えたが、調査区際で弥生土器がまとまって出土したことから当住居跡西壁は調査区西端からまだ少し離れた箇所に存在すると思われる。また、このことからP2・3が東壁に近い場所に位置するのに対し、P1・6は住居中央近くに位置することになるなど、P1・6を主柱穴とするには不安が残る。床面掘り込みは確認できなかった。埋土は黄褐色細砂に暗黄褐色粘質砂ブロックが混じる土。

出土土器（図版126、第176図9～13・第178図）9は口縁部が若干外傾する以東系の弥生中期鋤先口縁甕で、胴部にはM字突帯が2条残存する。口縁上端部～口頸部内面にかけてスガが付着し、何かに転用した可能性がある。胴部下には黒斑あり。色は外黄灰色、内淡褐色。10は広口直口甕で、内外面は二次加熱を受け、器表は荒れており、口縁部内面にミガキが残るのみ。外面には黒斑あり。色は赤褐色～黒色。

11は大形鋤先口縁甕口縁部と底部片で、同一個体のもの。外面は二次加熱を受け、器表は荒れており調整不明。色は黄褐色。12は口縁内端部がわずかに突出し、口縁上端部が水平な鋤先口縁甕。胎土には細粒を多く含み、色は橙褐色。13は口径28.5cm、底径8.0cm、器高33.7cmを測る、口縁部が内傾する鋤先口縁甕。外面には黒斑あり。色は白黄褐色。

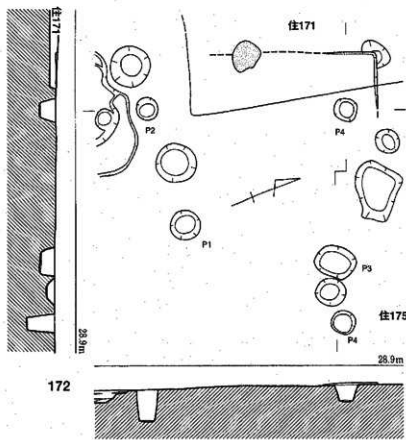
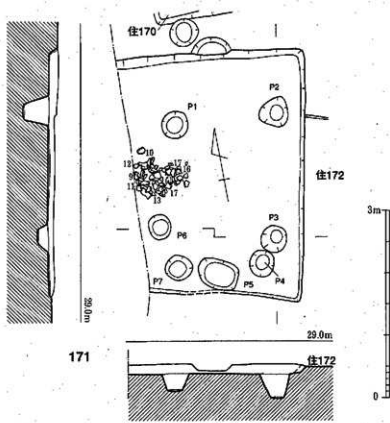
16・17は弥生中期筒形器台。いずれも胴部と脚裾部の一部残存する。16の胴部上部は分割暗文、胴部下は縦ミガキを施し、内面はナデで調整。17と同様、透かしは4ヶ所入れており、透かし断面両端部はヘラによる面取りを行い、3つの面を形成する。外面全体と内面胴部、透かし断面に丹塗りを施す。生地は明橙色。17は16に比べ、胴上が長く、裾部も大きく開く新しい様相が見られるもの。胴部上下には縦ミガキ、内面には指押さえ痕が良く残る。透かしは16と同じ4ヶ所に入れているが、16より幅広い。丹塗りは外面全体のみ施す。生地は黄褐色。

出土土器から弥生中期後半の住居跡になる。

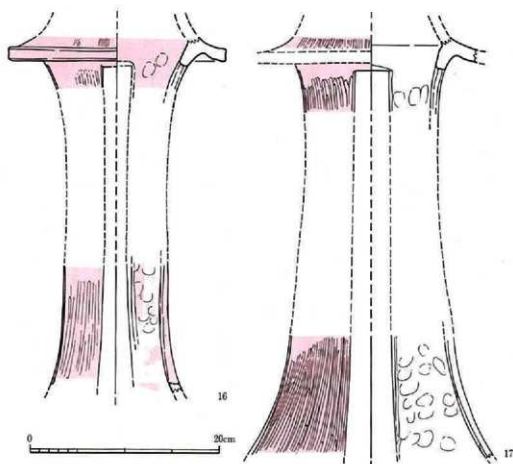
172号竪穴住居跡（第177図）

172号竪穴住居跡は3区東端中央やや南寄りに位置し、171号住居跡を切るが、175号住居跡との切り合いの前後関係は不明。当住居跡は削平が激しく、北西隅で壁が2cmほど残存している以外は、壁を検出できなかった。住居西側にはトーンで示した範囲に魚上・炭が広がり、カマド焼面になると思われる。焼面が壁より突出することから、燃焼部が壁から突出するタイプのカマドになると考えられる。周辺のどのピットが当住居に属するかは分からないが、P1～4は位置と深さから主柱穴と判断した。

出土土器（第176図14・15）14は上師器杯口縁部。色は淡黄褐色。P2出土。15は上師器高杯口縁部で、杯下部との境には弱い稜を持つ。色は橙褐色。P2出土。



第177图 171・172号竖穴住居跡実測图 (1/60)

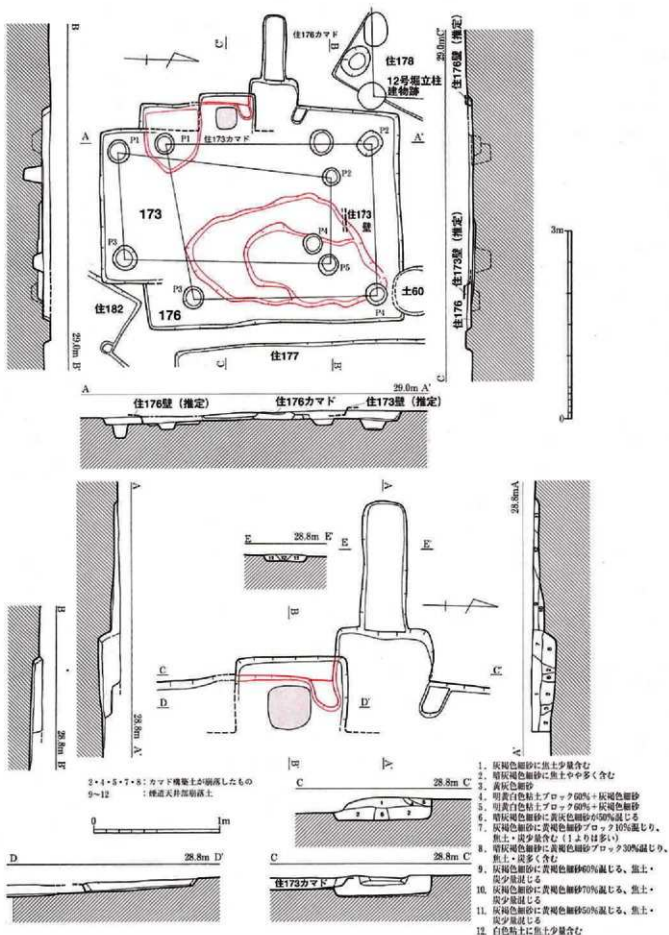


第178図 171号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(1/4)

173号竪穴住居跡(図版67、第179図)

173号竪穴住居跡は3区東中央に位置し、176・182号住居跡を切る。調査当初は176号住居跡との切り合いを間違え、176号住居跡を先に掘ってしまったため、住居北側の大部分を壊してしまい、遺物も混ざってしまった。176号住居跡は南北のベルトを残して調査したことから、そのベルト部分で北壁の一部を確認したため、住居規模が確定できた。西壁中央にカマドを付設し、東西2.5m×南北3.9m、深さ5cmの南北に長い長方形住居となる。床面では5基のピットを検出したが、176号住居跡床面は当住居跡より深く、176号住居跡レベルまで全体的に下げた(5cmほど掘り過ぎ)ために、主柱穴以外のピットはどちらの住居跡に属するかは不明。位置・深さからP1～3・5が主柱穴となるが、壁に非常に近い場所に主柱穴が位置する新しい様相のもの。埋土は暗黄褐色砂質土に黄褐色細砂が混じる土(176号住居跡と比べ、砂性が強い)。カマド(図版67)住居の項で記述するように切り合い関係を間違えたために、袖や南壁の一部を壊してしまった。燃烧部幅82cmと非常に広く、その中央に33cm×34cmを測る隅丸方形の硬化面がある。奥壁からこの硬化面まで20cmと近いことと、広い燃烧部幅と何らかの関係するものであろうか。カマド構築の際は176号住居跡カマド袖を完全に壊さず、当カマド床面レベルまで壊す。断面図では南側に傾斜するカマド床面となるが、南側は掘り過ぎてしまったことによるもの。

出土土器(第180図1～4) 1・2は土師器甕口縁部。1は器壁の薄いもので、内面頸部から



第179図 173・176号竪穴住居跡、176号住居跡、176号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)

下はケズリを施す。色は白黄橙色。P1出土。2の内面頸部下は横ハケのちケズリを施す。色は茶褐色～黄土色。3は土師器屈曲鉢。体部外面はケズリを施す。色は黄橙色。

4は口縁端部を下に肥厚させる弥生中期甕で、外面には二次加熱痕あり。胎上には細粒を多く含み、色は橙褐色。P2出土。

173・176号竪穴住居跡出土土器（第180図5～11）

前述したように、調査時に両住居跡出土土器が混じってしまったため、まとめて報告する。

5は土師器高杯脚裾部で、内面はケズリで調整。色は黄橙色。6は胴が張らない土師器甕口縁部。色は黄橙褐色。7は口縁部内面もハケ調整を行い、内面頸部下のケズリ幅は狭いもの。外面には二次加熱痕・ススが付着。

8は口縁端部を丸く取める須恵器杯蓋。色は灰色。9・10は須恵器杯身口縁部。9の内外面には灰がかかる。色は灰黒色。10は口縁端部を打ち欠くもので、色は暗灰色。11は須恵器高杯杯底部で、外面には工具による凹線を施し、その直上にハケ工具による短軸斜線文を密に施す。色は外灰色～黒色、内は暗灰色。

この両住居跡出土土器は古墳時代後期末におさまるものであり、両住居の前後関係は切り合いで判断するしかない。

174号竪穴住居跡（図版68、第181図）

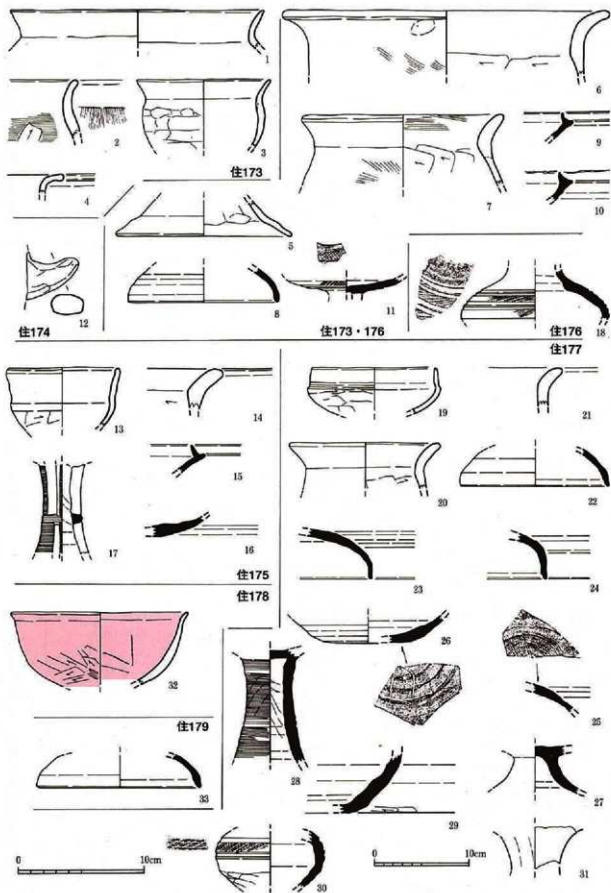
174号竪穴住居跡は2区東端中央に位置し、170号住居跡に切られるが、172・175号住居跡との切り合いの前後関係は不明。172・174・175号住居跡付近は削平が著しいことから、当住居跡も当初はトーンで示した焦上の広がり（カマド焼面）を検出し、この焼面に伴うピットがあったために、住居跡と判断した。住居規模は不明であるが、P1～P4が主柱穴となる4本柱の住居跡である（主柱穴内の数字は地表からの深さを示す。床面の高さは遺構面とほぼ同じかやや高くなると思われる）。

出土土器（第180図12）12は土師器甕把手で、甕本体との接合部は平坦なもの。胎土は精良で、色は黄橙色。P1出土。

175号竪穴住居跡（第181図）

175号竪穴住居跡は2区東端中央に位置する。182号住居跡に切られるが、172・174号住居跡との切り合いの前後関係は不明。174号住居跡と同じく、当住居跡もトーンで示した焦上の広がり（カマド焼面）を検出し、周辺に当住居跡に属すると考えられるピットを確認したため、住居跡として報告する。住居規模は不明であるが、P1～3が主柱穴となる4本柱の住居跡になると思われるが、南東部の主柱穴は検出できなかった。住居北東隅では掘り込みを確認した（黒破線で示す、また主柱穴内の数字は地表からの深さを示す。床面の高さは遺構面とほぼ同じかやや高くなると思われる）。

出土土器（第180図13～17）13は土師器杯。口縁部が屈曲するもので、端部は内向きに弱くつまみ出す。色は外淡赤褐色、内淡黄褐色。P2出土。14は土師器甕口縁部で、外面にはススが付着。色は黄茶褐色。P2出土。



第180図 173~179号竪穴住居跡出土土器実測図(4・31は1/4、他は1/3)

15は須恵器杯身口縁部で、色は灰色。P5出土。16は須恵器杯身底部。色は灰色。P1出土。17は須恵器高杯脚部で、外面にはカキ目を施し、脚柱部には上下2段、それぞれ3ヶ所ずつ透かしを入れる(上の段の方が幅広い)。内面には絞り痕が残る。色は灰色。P1出土。

出土土器から古墳時代後期後半の住居跡となる。

176号竪穴住居跡(図版67、第179図)

176号竪穴住居跡は3区東中央、177号住居跡西に位置し、173号住居跡・60号土坑に切られる。現状では切り合っていないが、地表面が現在より高かった当時は切り合い関係を有していた178・182号住居跡との前後関係は不明。調査当初は173号住居跡との切り合いを間違え、当住居跡を最初に掘ってしまったため、当住居跡出土土器と173号住居跡出土土器が混ざってしまった。南壁の大部分は173号住居跡により壊されるが、東西3.2m×南北4.2m、深さ15cmの南北に長い長方形住居となる。西壁中央にカマドが付設され、住居跡埋土は暗黄褐色砂質土に黄褐色細砂が混じる細砂(173号住居跡と比べ、砂性が弱い)。床面では4基のピットを検出したが、173号住居跡と当住居跡のどちらに属するか不明なピットも1基ある。位置からP1～4が主柱穴となり、173号住居跡主柱穴と同じく、壁に近い場所に位置する。住居南西隅と東側で住居掘り込みを確認した。

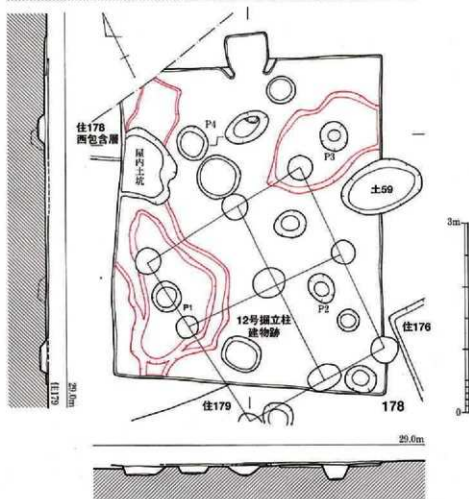
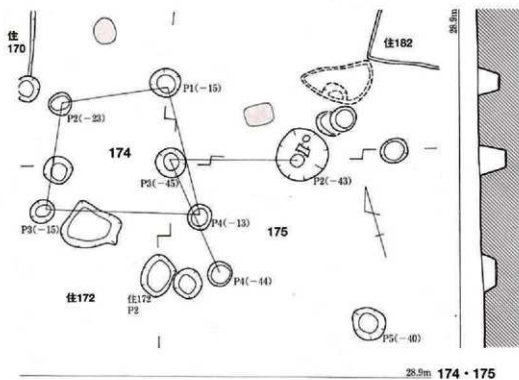
カマド(図版67) 西壁中央に付設され、左袖と左壁の一部が173号住居カマドにより壊される(切り合う部分は赤で示す)。袖は壁から25cmほど内向きに突出し、燃焼部は断面図を取った箇所幅75cm、奥壁で幅68cmと燃焼部が若干丸みを帯びた平面形態となる。燃焼部床面では焼面は検出できず、埋土も全体的に焦土・炭の混ざる割合が少ない。煙道部は燃焼部床面の8cmの高さから北に105cm延び、幅は37cmと先端部まで同じ幅である。煙道部床面は燃焼部から煙道部先端へと緩やかに上昇する。173号住居跡カマドとともにカマド規模が他の住居跡のカマドに比べて大きいことは注目される。18はカマド内出土。

出土土器(第180図18) 18は須恵器甕体部で、外面には工具による凹線で囲まれた中に、上下2段ハケ工具による短軸斜線文を施す。色は青灰色。

177号竪穴住居跡(図版68、第182図)

177号竪穴住居跡は3区中央西寄りに位置し、184号住居跡を切る。北壁中央にカマドを付設し、南北の長さは東側で4.4m・西側で4.7m、東西4.6m、深さは北壁で18cmを測る西側がやや広がる住居跡。北から南に遺構面が傾斜するため、南壁の深さは6cmと残りが悪い。カマド前面では75×65cmの楕円形の硬化面を検出し、当住居内に収まる小形の住居跡が存在した可能性を考えて床面を精査したが、この硬化面に伴うピットは検出できず、また床面もこの硬化面と同じレベルになったことから、当住居跡に伴うものと判断した。床面ではピット5基検出し、P1～4が主柱穴となる。住居埋土は暗黄褐色細砂。住居中央と南東隅で掘り込みを確認した。

またカマド西のトーンで示した箇所は、非常によく焼けていることから、カマド硬化面の可能性が高いと考え周辺を精査したが、伴うピット等は検出できなかったため住居としては報告していないが、削平された住居跡カマドの焼面である可能性もある。



第181图 174・175・178号斃穴住居跡実測图 (1/60)

カマド(図版68) 北壁中央に位置し、壁から25cmほど突出する内向きの袖を持つカマド。燃烧部幅は断面図作成箇所で58cmを測るが、奥壁では49cmと狭くなる。奥壁から袖先端までが60cmを測る。床面では烧面を検出できず、カマド前面の硬化面が当カマド使用形態と何らかの関係があるものか。

出土土器(第180図19~31) 19は土師器模倣杯身で、小片のため径は不安。底部外面は手持ちヘラケズリを施し、色は黄褐色。20・21は小形土師器甕。20の外面には二次加熱痕、内面はススが認められる。色は外褐色、内黒褐色。21の外面には二次加熱痕がある。胎土には細粒多く含み、色は茶褐色。P2出土。

22~25は須恵器杯蓋。22・23の外面には灰がかかる。22は口縁端部をわずかに外反させるもので、色は灰色~暗灰色。23は丸く取める口縁端部をわずかに外反させるもので、色は暗灰色。24は口縁内端部がナデにより窪むもので、色は青灰色。25は天井部外面にヘラ記号がわずかに残るが、全形は不明。色は青灰色。26は須恵器杯身底部で、底部外面に「U」に横1本線足した形のヘラ記号を施す。色は灰色。27は須恵器高杯脚部で、色は灰色。混入品か。28は長脚の高杯脚部で、外面にはカキ目を施し、中央に工具による凹線を2条施す。内面にはナデ絞り痕あり。色は外紫灰色、内暗灰色。

29は須恵器蓋底部で、外面はヘラケズリのちナデで調整。内面には灰がかかる。色は青灰色。P4出土。30は須恵器甕で、体部外面中央には工具による3条の凹線の中にハケ工具による短軸斜線文を施す。体部外面下部は手持ちヘラケズリ。色は外灰黒色、内黒色。

31は弥生中期高坏脚接合部片。外面にはケズリ痕、二次加熱痕あり。色は橙色~黄褐色。

当住居跡は出土土器から古墳時代後期後半の時期になる。

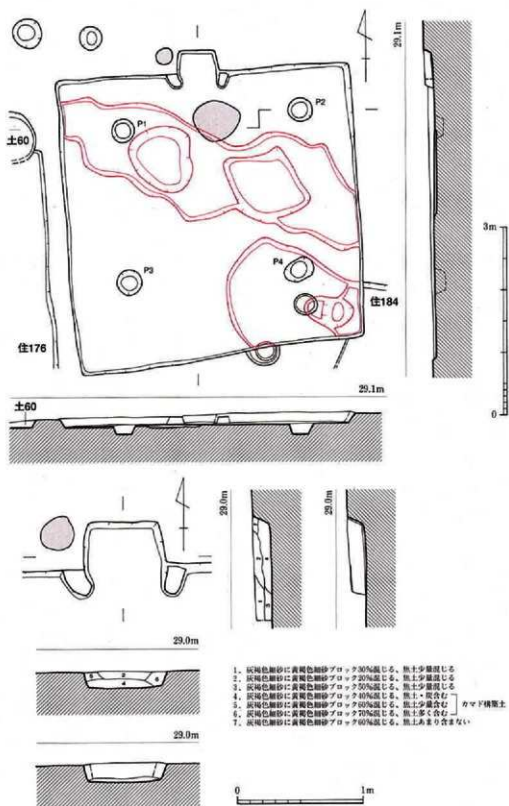
178号竪穴住居跡(図版69、第181図)

178号竪穴住居跡は3区北東隅に位置し、12号掘立柱建物跡・59号土坑に切られ、179号住居跡を切る。住居跡北西隅は調査区外にあたり、削平がひどく壁が4cmほどしか残っていない。北壁中央にカマドを付設し、住居規模は南北5m×東西4.3mの南北に長い長方形住居となる。床面では11基のピットを検出したが、P1~4が位置・深さから主柱穴となる。住居西壁やや北寄りには110m×85cm、深さ15cmの屋内土坑が存在する。屋内土坑埋土は黄灰色細砂。住居跡埋土は黄褐色細砂に暗黄褐色細砂が混じる上。32は屋内土坑内出土。

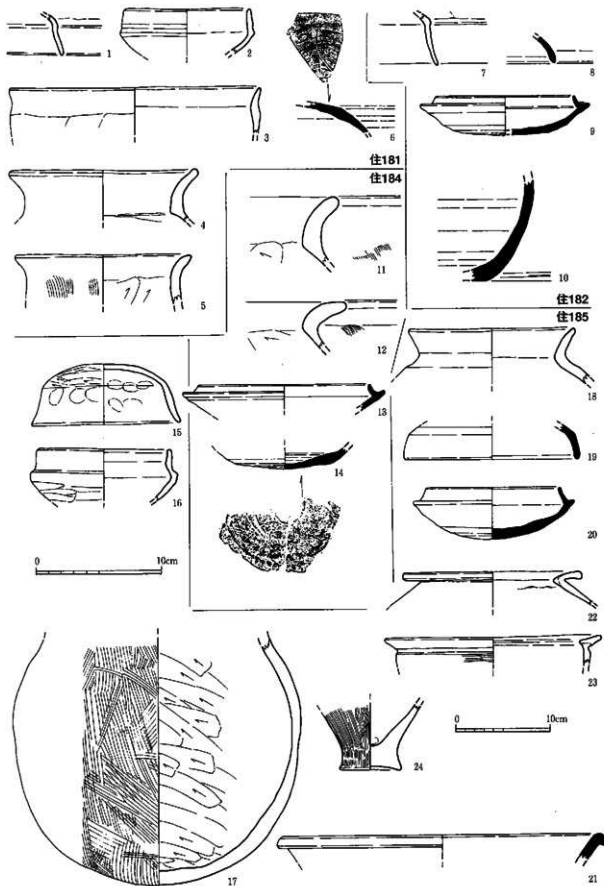
住居北西隅では面積が狭いため包含層としたが、住居跡の可能性のある178号住居跡北包含層が存在する。

カマド 住居北壁中央に位置するカマドで、高さが4cmと住居跡壁と同じく残りが非常に悪い。両袖とも壁から20cmほど内向きに突出し、燃烧部は幅60cmとやや幅広く、袖先端部から奥壁までが66cmを測る。烧面はなく、カマド埋土は焦土・炭が少量混じる程度である。

出土土器(第180図32) 32は口縁端部を外反させる土師器高杯杯部か。外面下部はハケのちケズリ、内面には工具痕あり。内外面ともスリップ状の粘土をかけたもの。色は外黄褐色~褐色、内黄褐色~赤褐色。屋内土坑内から出土。



第182図 177号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第184図 181・182・184・185号竪穴住居跡出土土器実測図 (22~24は1/4、他は1/3)

できず、全形は不明。北壁に接するように径60cmほどの焼面と考えられる焦土・炭の広がりを検出したが、カマドの痕跡はこの焼面のみである。床面には当住居跡に伴うピット4基確認し、P1～3が当住居跡の支柱穴となり、169号住居跡P11も位置から当住居跡の支柱穴となる可能性が高い。

出土土器（第180図33） 33は須恵器杯蓋口縁部。肥厚させる口縁端部は丸く収め、色は外灰黒色～黒色、内暗灰色。出土土器から当住居跡は古墳時代後期後半の時期の住居跡になるか。

181号竪穴住居跡（図版69、第183図）

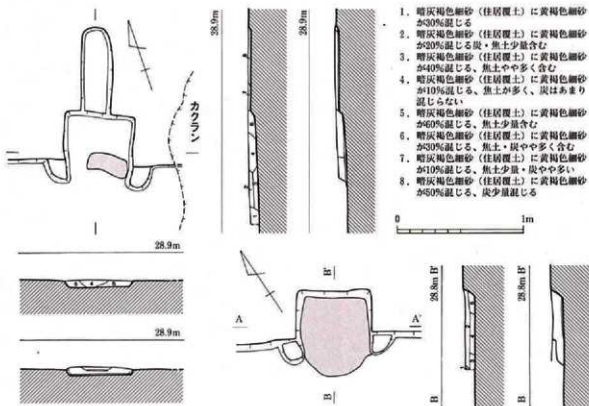
181号竪穴住居跡は3区中央やや西寄り、177号住居跡南に位置する。当住居跡付近は切り合いが激しく、当住居跡は182・183・184・186号住居跡を切るこの付近の住居群で切り合いが最も新しい住居跡となる。住居東は南北に長いカクランにより大きく壊されるものの、カクラン下から当住居の支柱穴を確認した。北壁中央にカマドを付設し、住居規模は南北3.6m×東西5.6m、深さ8cmの東西に長い長方形住居となる。床面ではピットを12基検出し、P1～3は深さ・位置から支柱穴となるが、南東部の支柱穴は精査したが検出することができなかった。住居中央で床下掘り込みを確認した。埋土は暗灰褐色細砂に黄褐色細砂ブロックが混じるもの。カマド（図版69、第185図） 北壁中央に付設されるカマドで、両袖とも壁から20cmほどやや内向きに突出する。右袖寄り、奥壁から27cmの場所で横長の非常に良く焼けた硬化面を検出した。その硬化面に接した奥に土器等を使用した支脚があったと考えられる。この支脚推定箇所では焼部幅48cmを測り、奥壁側でも同じ幅を測る。焼部床面から3cmと余り高低差がない位置から煙道が北に67cm延び、幅はほぼ一定で煙道部先端に至る。煙道部床面は先端部までほとんど傾斜しない。

出土土器（第184図1～6） 1は土師器模倣杯蓋。わずかに稜が残り、天井部外面にはヘラケズリを施す。色は橙褐色。2は模倣杯身で、受部は痕跡が残る程度。底部外面にはヘラケズリを施す。色は黄褐色。3は口縁端部をわずかに外反させる土師器甕口縁部。胴部外面はヘラケズリで調整。色は白黄褐色。4・5は土師器甕口縁部。外面にはスス、内面には炭化物が付着。色は外褐色、内褐色～黒褐色。5は外面にスス付着。色は外こげ茶色～茶褐色、内こげ茶色～黒褐色。

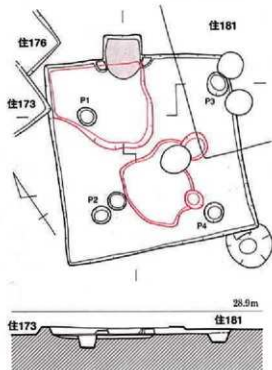
6は須恵器杯蓋で、天井部外面にはヘラ記号がわずかに残るが、全形は不明。色は暗灰色。出土土器から古墳時代後期末の住居跡となる。

182号竪穴住居跡（図版70、第185図）

182号竪穴住居跡は3区中央西寄り、177号住居跡南に位置し、173・181号住居跡に切られ、175・186号住居跡を切る。住居北西隅で176号住居跡と接するが、切り合いの前後関係は不明。181号住居跡により北東部分を大きく壊されるが、181号住居跡床面が当住居跡床面より高かったため、壁を検出でき、住居形態が判明した。北壁中央やや西寄りにカマドを付設し、東壁部分で南北2.8m、西壁部分で南北3.2m、東西3.0m、深さ10cmの西側が広がる小形住居跡。埋土は明灰褐色細砂に黄褐色細砂ブロックが混じるもの。床面では5基のピットを検出し、P1～4が当住居跡の支柱穴となる。住居北西・中央で掘り込みを確認した。



181号住居跡カマド



182号住居跡カマド

1. 灰褐色細砂 (住居覆土)
2. 灰褐色細砂 (住居覆土) に黄褐色細砂ブロック20%混じる。炭少量含む
3. 灰褐色細砂 (住居覆土) に黄褐色細砂ブロック50%混じる。焦土少量含む
4. 灰褐色細砂 (住居覆土) に黄褐色細砂ブロック20%混じる。焦土・炭多く含む (カマド構築土が崩壊したもの)
5. 灰褐色細砂 (住居覆土) に黄褐色細砂ブロック70%混じる。炭少量含む
6. 灰褐色細砂 (住居覆土) に黄褐色細砂ブロック30%混じる。焦土少量含む

第185図 182号竪穴住居跡、181・182号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)

カマド（図版70）北壁中央やや西に位置するカマドで、20cm内向きに突出する短い袖を持つ。床面全体に焦土が広がるが、明確な硬化面はない。カマド埋土には焦土・炭の混じる割合は少ない。断面図の箇所で燃焼部幅が54cmを測り、奥壁はやや幅が狭くなる平面形態となる。煙道部は削平されたためか確認できなかった。

出土土器（第184図7～10）7は土師器模倣杯蓋口縁部で、天井部との境には鈍い稜が残る。色は黄褐色～橙色。

8は口縁端部を肥厚させる須恵器杯蓋で、色は暗灰色。9は須恵器杯身で、色は暗灰色。10は須恵器壺底部で、底部外端部はケズリのちカキ目を施す。外面には灰がかかる。胎土には細粒を多く含み、色は外灰黒色～青灰色、内青灰色。

出土土器から古墳時代後期後半の住居跡となる。

183号竪穴住居跡（図版69、第183図）

183号竪穴住居跡は3区中央やや西寄りに位置し、181・184号住居跡に切られ、186号住居跡を切るもの。181・184号住居跡により、住居北側の大部分は壊されてしまっており、現状で東西5.1m×南北3.6m以上、深さ18cmを測る。当初は本来の床面より上で止めたが、2面日調査時に床面が10cmほど下がることに気づき再調査を行ったが、床面からは赤破線ビットを含む4基のビットを検出したが、いずれも主柱穴とはならない。北・西壁の検出も試みたが第2面検出時に重機により、第1面遺構の土のしみをさけるため下げすぎたためか検出できなかった。この再調査中に住居北東部の床面上から石製紡錘車（第265図36）が出土した。出土土器で図示できるものはない。

184号竪穴住居跡（図版69、第186図）

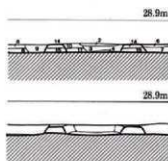
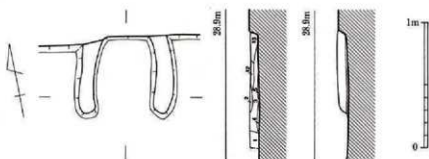
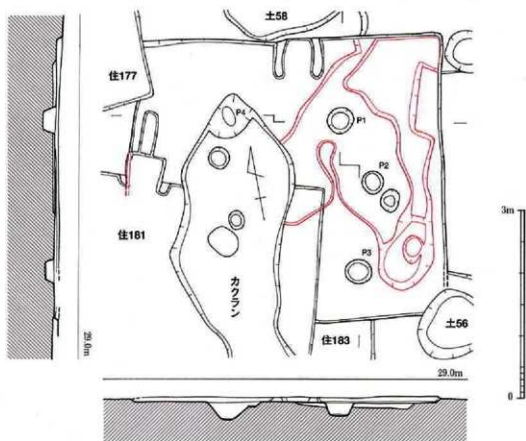
184号竪穴住居跡は3区中央やや西寄り、28号溝西に位置し、177・181号住居跡・56号土坑に切られ、183号住居跡・58号土坑を切る住居跡。住居南西側は181号住居跡・カクランにより大きく壊されているが、住居規模は南北4.5m×東西5.0m、深さ8cmのやや東西に長い住居跡となり、北壁中央やや東寄りにカマドを付設する。住居床面ではビット7基検出した（カクラン内のビット2基を含む）。P1・3・4は主柱穴となるが、南西隅の主柱穴は検出できなかった。埋土は暗黄褐色細砂。住居東では掘り込みを確認した。

カマド（図版70）北壁中央のやや東に位置するカマドで、壁から両袖が65cm突出し、袖が燃焼部を囲む形態となる。床面には焦土・炭が広がるが、明確な焼面は形成しない。カマド埋土にも焦土・炭の割合は少ない。燃焼部幅は断面図を作成した箇所40cm、奥壁で30cmを測る。袖はやや明るく粘性のある土で構築する。

出土土器（第184図11～14）11・12は土師器壺口縁部で、11の外面にはスガが付着。色は橙褐色。12はかなり強く外湾させた口縁部で、色は褐色。

13は須恵器杯身口縁部で、受部以下の外面には厚く灰がかかる。色は外灰色～黒色、内暗灰色。14は須恵器杯身底部で、外面には横1本線に縦2本線が交わるヘラ記号を施す。色は灰色。

出土土器から当住居跡は古墳時代後期末の時期になる。



1. 暗黄褐色細砂に炭少量含む
2. 黄褐色細砂
3. 灰褐色細砂に炭・焦土少量混じる
4. 明黄褐色細砂
5. 明黄褐色細砂に灰褐色細砂が50%混じる
6. 暗黄褐色細砂
7. 暗黄褐色細砂に黄灰色細砂50%混じる
8. 暗黄褐色細砂に黄灰色細砂30%混じる
9. 暗黄褐色細砂に黄灰色細砂10%混じる、炭少量混じる
10. 暗黄褐色細砂に黄灰色細砂10%混じる
11. 暗黄褐色細砂に黄灰色細砂40%混じる、炭・焦土少量混じる
12. 暗黄褐色細砂に黄灰色細砂70%混じる、炭多く混じらない
13. 暗黄褐色細砂に黄灰色細砂80%混じる
14. 黄褐色細砂ブロックと暗黄褐色細砂が20%混じる、やや粘性あり
15. 黄褐色細砂ブロックと暗黄褐色細砂が50%混じる、やや粘性あり

第186図 184号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

185号竪穴住居跡 (図版71、第187図)

3区中央北端、28号溝西に位置する住居跡で、周辺に住居跡はなく、東に63・64土坑が存在する。北壁中央にカマドを付設し、南北4.6cm×東西3.3cm、深さ13cmの南北に長い長方形住居

跡となる。カマド東・西側のカマドと少し離れた位置から上器が出土した(15・17・20)。床面では7基のビットを検出し、位置からP1～3・7が支柱穴となる。住居北東隅では掘り込みを確認した。埋土は明灰褐色細砂。

カマド(図版71)北壁中央に位置し、壁から両袖が70cmほど直線的に突出する形態となるが、燃焼部幅が40cm弱であることはやや狭い印象を受ける。燃焼部に明確な焼面はなく、支脚痕跡は確認できなかった。カマド埋土は明灰褐色細砂に焦土・炭が少量混じるもので、袖は黄褐色細砂に灰白色粘質土ブロック少量混じるもので構築される。カマド30cmほど東では削平される前は完形品であったと考えられる土師器甕(17)と小形土師器甕(整理の段階で行方不明)、須恵器杯身(20)が床面上に存在し、カマド20cmほど西では完形の土師器模倣杯(15)が床面上から出土した。これらの土器群は住居廃絶時に意図的に置かれたと考えられる。

出土土器(図版127、第184図15～24)15・16は土師器模倣杯。15は口縁部が外反する杯蓋で、天井部には手持ちヘラケズリを施す。色は橙茶色。16は杯身で口縁端部をわずかに内上方につまみ出す。内外面には二次加熱痕あり。色は灰黄褐色。17は土師器甕胴部で、胎土には細粒多く含む。外面2ヶ所に黒斑あり。色は茶褐色。18は土師器甕口縁部で、色は白黄橙色。

19は口縁端部を丸く収めた須恵器杯蓋で、色は暗灰色。20は完形の須恵器杯身で、口径10.6cm、器高4.1cmを測る。焼成はやや甘く、胎土も細粒をやや多く含む。色は外赤茶色～灰白色、内赤茶色を呈する。21は口縁端部を外に折り曲げる須恵器甕口縁部。外面には灰がかかる。色は暗灰色。

22は弥生中期無頸重口縁部で、外面は二次加熱のため、器表は荒れる。胎土には細粒を多く含む、色は暗灰色～茶褐色。

23・24は185号住居跡北包含層出土土器。3は弥生中期鉢か鋤先口縁小形甕。口縁外端部が上がり気味で、上端部はやや窪む。頸部外面には工具による凹線が1条巡る。胴部外面はミガキ調整。色は灰黄褐色。24は厚底の甕底部。やや上げ底で、外面にスス、内面に炭化物付着。色は灰黄褐色。

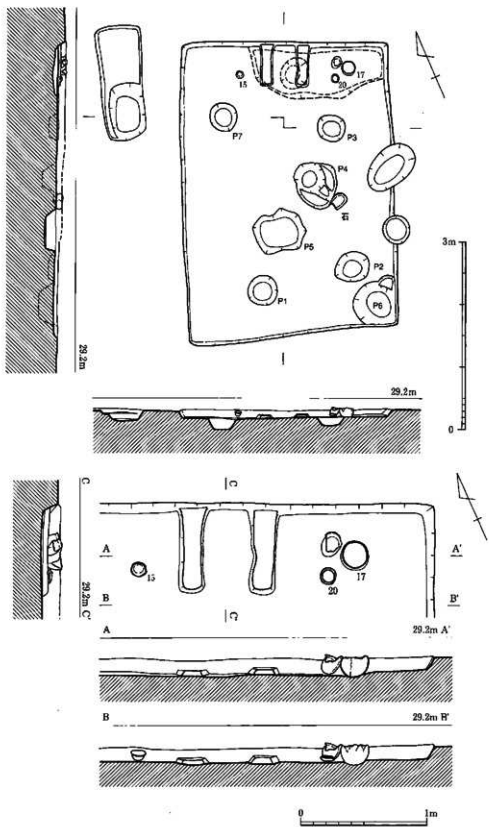
出土土器から古墳時代後期後半の住居跡となる。

186号竪穴住居跡(第183図)

186号住居跡は3区中央やや南西に位置し、181～183号住居跡に切られる。182・183号住居跡間で硬化面を検出したことから周辺を精査したところ、当住居跡に伴うビットを検出したため住居跡と判断した。検出段階で硬化面が見えていたことから、壁は既に削平されており、痕跡も確認できなかった。P1～4は当住居跡に伴うと考えられるビットであり、P1～3は支柱穴となるか。出土土器で図示できるものはないが、P1・2より土師器甕片、P3より弥生土器が出土している。

187号竪穴住居跡(図版71、第188図)

3区中央部に検出した。28号溝に西側を破壊される。また東側で188・189号住居跡を破壊する。東壁の中央部やや北寄りに突出型のカマドを有する(カマド1)。またこのカマドの南側に、これに破壊されたカマドを検出した(カマド2)。カマド2は本来別の住居跡に付属してお



第187図 185号整穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

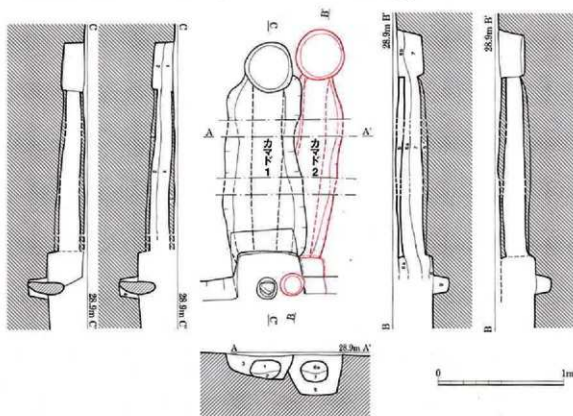
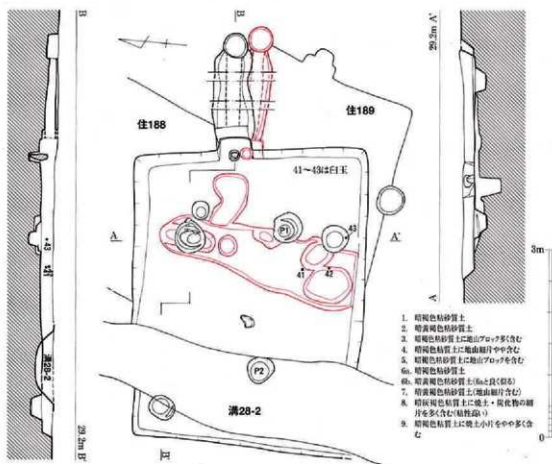
り、本住居跡の竅穴掘削時にこの住居跡が完全に破壊されてしまった可能性もあるが、本住居跡に確実に付属するカマド1と床面レベルが同一であり、カマド1の位置がカマド2を避けるように東壁中央部からわずかに北にずれていることなどから、元々本住居跡にはカマド2が付設されており、ある時点でカマドのみ新しく造り直してカマド1を掘り込んだものと考えた。住居跡の平面形は長軸方向に長く、長さ5.1m、幅4mを測るが、突出型のカマドを有する住居跡で長軸方向に長いものは類例が少なく、やや疑問が残る。28号溝の西側に検出された部分が他の住居跡の一部である可能性も否定できない。床面からは主柱穴と考えられるピットを3基検出し、その他にも3基の小ピットを確認した。中央部には溝状の床下掘り込みを検出し、その中にピット状の掘り込みが認められたが、これは下層遺構の可能性もある。壁の残存深さは20cm、主柱穴の深さは20cm程度を測る。出土土器はやや古相を呈するが、切り合い関係から7世紀初頭～前半に位置づけられよう。また、白玉(第265図41・42・43)が出土している。カマド1(図版72) 東壁の中央部に突出型のカマドを検出した。南側に隣接するカマド1を埋め戻して新たに造り付けられたカマドである。切り合い関係が複雑な部分にあったため軸の検出に失敗したほか、奥壁部分も大きく破壊してしまったが、その他の部分は良好に残存していた。突出部の掘り込みは幅55cm、奥行40cm程度を測る。燃焼部の中央に立った状態の支脚を検出した。奥壁から煙道部が伸びていたが、残存状況は良好で、トンネル状の煙道部を140cmにわたって検出することができた。また、煙道付設時に幅広く掘り込んだ部分も平面的に検出することができた。煙道の先端部には径40cmを測るピットを検出した。煙突の基礎部分であろう。燃焼部の埋土は確認できなかった。煙道部の埋土は上下に層に分かれ、住居跡の埋土と共通していた。

カマド2(図版72) カマド1の南側に隣接しており、これに大きく破壊される。主軸はカマド1とほぼ並行するがややずれる。燃焼部はカマド1に大きく破壊されており、カマド1の床面に本カマドに付属していたと考えられる支脚基礎の小ピットを検出した。煙道部は良好に遺存しており、トンネル状に長さ160cmほどが確認できた。煙道の先端では径40cm弱のピットを検出した。煙突の基礎部分であろう。

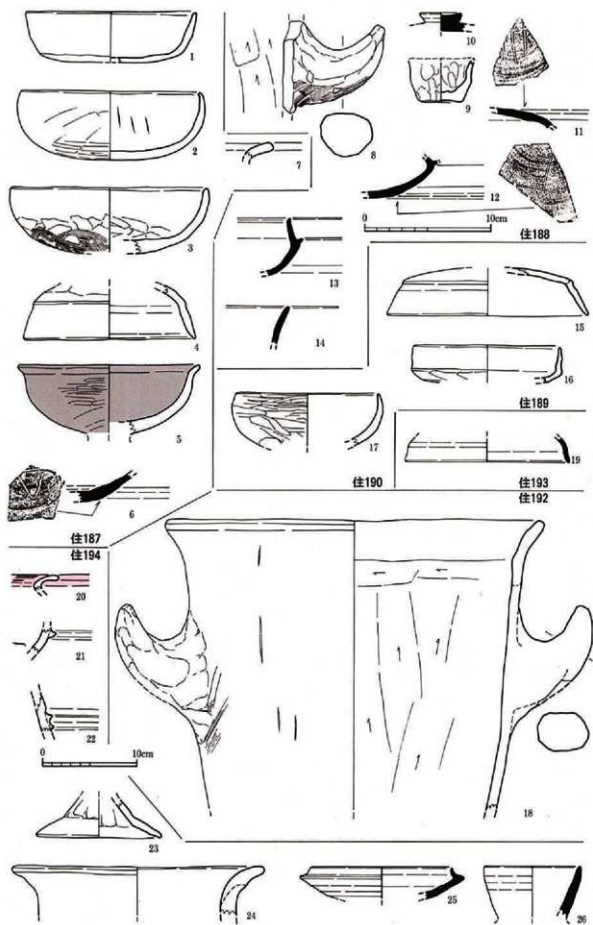
出土土器(図版127、第189図1～6) 1～5は土師器である。1～3は椀である。1は底部が平坦で口縁部が直立する形態を持つ。口縁部は横ナデ調整、底部外面はケズリ調整、内面はナデ調整か。口縁部径は13.6cmを測る。2・3はやや扁平の半球形を呈する椀である。底部はケズリあるいは板ナデ調整を施し、口縁部は内・外面ともにナデ、内面は2はナデを施し、3は板ナデあるいはケズリ。4は須恵器模倣杯蓋である。天井部は失われているがおそらく丸みを持つもので、口縁部との境界で段を形成し、口縁部は直線的に広がる。口縁部径は13.6cmを測る。5は高杯の杯部片である。底部を欠損する。杯部は半球形を呈し、口縁部が短く外反する。外面はヘラミガキ、内面はナデ、口縁部は内・外面ともに横ナデを施す。

6は須恵器の杯身である。口縁部を欠失し全体形は不明である。丸底の部分だけが残存する。外面にヘラ記号を施す。以上の資料はおおよそ7世紀初頭～前半のものである。

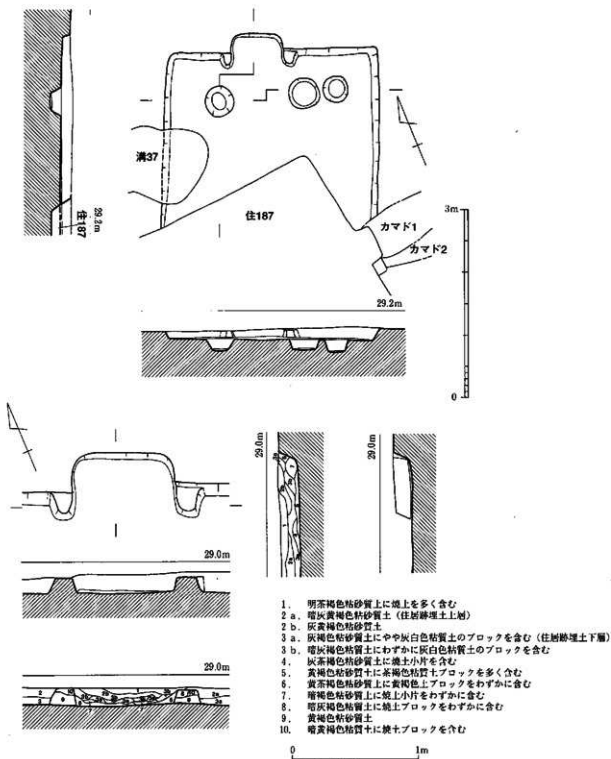
7は弥生中期須玖Ⅱ式の甕形土器の口縁部片である。混入であろう。



第188図 187号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第189图 187~190・192~195号竖穴住居跡出土土器実測図(7・20~22は1/4、他は1/3)



第190図 188号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

188号竪穴住居跡 (図版71、第190図)

3区中央部で検出した。187号住居跡に南側を大きく破壊される。37号溝 (第2面) とも切り合い関係を持ち、本住居跡が新しい。北壁のほぼ中央部に突出型のカマドを配する。住居跡の規模は南側が破壊されていて東西幅のみ判明し、3.5mほどを測る。床面からは主柱穴と考

えられるピットを2基と、その他にもピットを1基確認したが、いずれも深さは20cm弱を測る。住居跡の深さは15cm弱である。切り合い関係から7世紀初頭～前半以前と考えられる。

カマド 北壁の中央部に突出型のカマドを検出した。突出部の掘り込みは幅80cmを測り、奥行は30cmほどを測る。長さ20cm弱の袖が両側に確認された。埋土は1層と2～7層の上下2つに大別でき、上層は多量の焼土を含みカマド天井部の崩落層、下層は住居跡の埋没土と類似している。従って本住居跡は、カマド天井部が崩落する前に住居跡の埋没がある程度進行していたものと考えられる。

出土土器（第189図8～14） 8・9は土師器である。8は甔の把手である。9は祭祀用の小形の手握ね土器である。椀形を呈する。

10～14は須恵器である。10は杯蓋の天井部片であり、ボタン状のつまみが残る。11も杯蓋である。緩やかに湾曲する肩部のみが残る。上面にヘラ記号を有する。12はかえりを有する杯身である。底部から緩やかに湾曲する形態を持ち、かえりは斜めに伸びる。底面にヘラ記号を付す。13も口縁部にかえりを持つ杯身であるが、12よりも古相を呈し、かえりが上方に長く伸びる。14は高台を有する杯身の口縁部片であろう。以上の資料はやや時期幅が認められ、10・14は8世紀代、13は6世紀前半～中頃、12は7世紀初頭のものである。

189号竪穴住居跡（図版71、第191図）

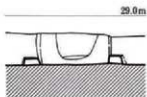
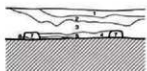
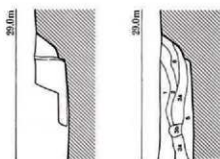
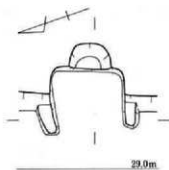
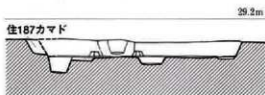
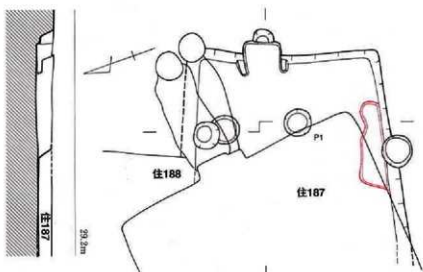
3区中央部で検出した。187号住居跡に西壁を、またそのカマド煙道部に北壁を大きく破壊されており、残った東壁に突出型のカマドを付設していた。住居跡の規模は南北幅のみが判明し、正確でないがおよそ3.3mほどを測る。壁の深さは30cm弱と比較的深い。床面からは主柱穴の可能性のあるピットが1基と、このほかに2基の小ピットが検出された。出土土器や切り合い関係から、7世紀初頭と考えられる。

カマド（図版73） 東壁に突出型のカマドを付設していた。突出部は幅55cm、奥行30cmほどの横に広い長方形を呈し、20cmほどの袖を付設していたが、袖の上部は調査時に検出に失敗して大きく削平してしまった。奥壁から斜め上方に短く抜ける煙道部を検出した。燃焼部の埋土は大きく2層に分層され、上層の1～3層は住居跡の埋土と共通する。最下層も住居跡が埋没したときの堆積層であろう。

出土土器（第189図15・16） 15・16は須恵器模倣杯であり、15は杯蓋、16は杯身である。15はほぼ平坦な天井部から明瞭に屈曲して口縁部は斜めに伸び、屈曲部に段を形成する。16は平坦な底部から直角に屈曲して短く上方に伸びる口縁部を持ち、屈曲部に小さな段を形成する。以上の資料は7世紀初頭に位置づけられよう。

190号竪穴住居跡（図版73、第192図）

190号竪穴住居跡は3区中央やや南寄り、193号住居跡南に位置し、197号住居跡を切る。東壁中央にカマドを付設する3区第1面では珍しいもので、調査当初は北か西にカマドがあると考え掘削したために、右袖は壊してしまった。東西3.3m×南北3.6m、深さ6cmの方形住居で、埋土は明灰褐色細砂に明黄色粘質土ブロックが混じるもの。床面では4基ピットを検出し、いずれも主柱穴となる。住居床下では掘り込み、ピット2基を確認した。



1. 暗黄褐色粘砂質土に地山ブロック小片をやや含む (住居跡埋土上層)
2. 暗黄褐色粘砂質土に地山ブロック小片を多く含む (住居跡埋土中層)
- 3 a. 黒褐色粘砂質土 (住居跡埋土下層)
- 3 b. 腐植土ブロック (暗褐色粘質土)
4. 暗黄褐色粘砂質土
5. 暗黄褐色粘砂質土に地山ブロック小片を含む
6. 暗褐色粘砂質土に焼土・炭化物小片をやや含む
7. 黄褐色粘砂質土に黒色粘質土をわずかに含む
8. 黄褐色粘砂質土



第191図 189号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

カマド(図版73) 東壁中央に位置し、右袖は誤って壊してしまった。左袖は壁から15cm突出し、右袖も同様の形態であったものか(土のしみから推定した袖下端ラインを破線で示す)。奥壁から25cmの場所に径18cm、深さ6cmの支脚抜き取りピットを確認した。ピット上端が下端に比べて広がる状況は、支脚を抜き取る際に起因するものと考えられる。燃焼部幅は支脚抜き取りピット部分で幅60cm、奥壁で幅55cmと若干奥壁側が狭くなる。支脚抜き取りピット前面には焼面はなく、カマド埋土は暗黄灰色細砂に炭が少量混じるもの。

出土土器(第189図) 図示できる土器は1点のみである。17は土師器杯で、外面底部は手持ちヘラケズリ、外面体部はヘラナデで調整。色は橙色。

192号竪穴住居跡(第192図)

3区北東端、177号住居跡北に位置し、177・178号住居跡に切られる。この付近は削平が激しいため、検出段階ではトーンで示した焼面のみを確認し、周辺を精査したところ、支柱穴と考えられるピットを確認したため住居跡として報告する。南北断面図で示すピット2基は位置から当住居跡に伴う支柱穴と考えられるが、西側の支柱穴2基は検出できなかった。焼面西の浅いピットは当住居跡の掘り込みの可能性がある。またこの掘り込み上ではトーンで示した範囲で焦土の広がりを確認したため、当住居跡を切る住居跡の存在を考え、周辺を精査したが、この焦土に伴うピット等の遺構は検出できなかったため、住居としては報告しない。

出土土器(第189図18) 18は住居東の焼面付近から出土したもので、当住居跡に確実に伴うかどうかは不明な土師器瓶。外縁する口縁部を持ち、外面は工具ナデのちナデ、内面はヘラケズリを施し、把手との接合部にはハケ工具を使用。外面には二次加熱痕あり。色は黄橙色。

193号竪穴住居跡(図版74、第193図)

193号竪穴住居跡は3区中央に位置し、194号住居跡を切る。住居主軸が座標北と一致する住居跡で、北壁中央にカマドを付設し、住居埋土は暗黄褐色細砂。南北3.8m×東西4.3m、深さ13cmのやや東西に長い方形住居となる。住居床面ではピットを6基検出し、P1・3～4は位置・深さから支柱穴となる(赤で示したピットは194号住居跡ピット。194号住居跡の方が若干床面は低いが、ほぼ同じレベルのため、194号住居跡に属するピット赤で示したピット以外にも存在する可能性がある)。住居北西隅で掘り込みを確認した。

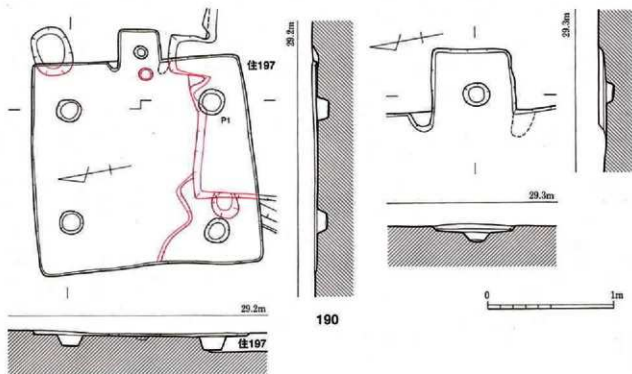
カマド(図版74) 北壁中央に付設されるカマドで、右袖は左袖よりは長さが短く、焼面の位置からもやや掘り過ぎた可能性が高い。焼面は壁から30cmの箇所に位置し、18×50cmの楕円形状を呈する。燃焼部幅は焼面奥で計測すると65cmとやや幅広いことは、燃焼部奥行が左袖先端から45cmと短いことと何らかの関係があるか。煙道部は削平されたため検出できなかった。19はカマド内出土。

出土土器(第189図19) 19はやや強めに外反する須恵器杯蓋口縁部。色は青灰色。

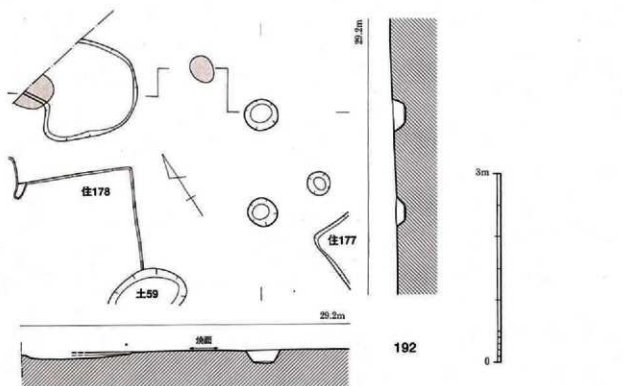
出土土器から古墳時代後期後半の住居跡となる。

194号竪穴住居跡(図版74、第193図)

194号竪穴住居跡は3区中央に位置し、193・200号住居跡・62号土坑に切られる。住居大半



190



192

第192図 190・192号竪穴住居跡、190号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)

を193号住居跡により壊されており、現存部で南北3.8m×東西3.6m、深さ14cmを測る、やや北側が広がる住居跡になる。床面からはピットを6基検出し(193号住居跡床面下で検出したピットは赤で示す)、P1～4が主柱穴となる。埋土は暗黄灰色細砂。住居南西隅では掘り込みを確

認した（赤破線）。

出土土器（第189図20～22） いずれも床下掘り込み出土の弥生土器。20は内外面丹塗りの無頸壺口縁部。21は突帯が付く壺胴部片。外面には黒斑あり。色は黒褐色。22はM字突帯を貼り付ける壺胴部。色は外黄褐色～褐色、内黄灰色。出土土器は弥生時代のものであるが、埋土から193号住居跡に先行する古墳時代後期の住居跡になるか。

195号竪穴住居跡（第194図）

195号竪穴住居跡は3区中央南端、181号住居跡南東に位置し、28-2号溝を切る住居跡。この付近は重機による表土剥ぎの際に下げすぎてしまった場所であり、遺構の残りは悪い。検出段階でトーンで示した範囲で焦土・炭の広がりを確認したため、周辺を精査したところ主柱穴となるP1～4のピットを検出し、住居下端と考えられる痕跡を確認したため住居跡と判断した。住居規模は壁下端部分で南北3.8m×東西3.2mを測るが、住居掘り込みが住居中央に存在し（黒破線で示す）、その西端が壁下端より若干西に出ることから、西壁はもう少し西側に広がる可能性がある。また南壁は南北の断面図で見ると、床面ラインは南壁想定箇所では残っておらず、やや不安が残るが、主柱穴の位置などからほぼこの規模になることは間違いないであろう。

出土土器（第189図23～26） いずれも床下掘り込み出土。23は土師器高杯脚部で、脚柱部内外面はケズリ調整。色は橙褐色。24は強く外湾する土師器壺口縁部で、色は淡黄褐色。

25は須恵器杯身口縁部。色は黒灰色。26は須恵器提瓶口縁部。色は灰黒色。

出土土器から古墳時代後期後半の住居跡となるか。

196号竪穴住居跡（図版74、第194図）

196号竪穴住居跡は3区中央北端、28号溝東に位置し、住居北側は調査区外になる。カマドは西壁に付くが、カマドが西壁中央にあったとすると、住居規模は東西3.9m×南北4.0m（推定）、深さ10cmの正方形住居となる。カマド前面では袖石が抜かれた状態で検出され、瓶や壺など完形の土器も多く出土した。住居床面からは3基ピットを確認し、いずれも主柱穴となる。住居南壁、西壁で掘り込みを確認した。住居埋土は明黄灰色細砂に暗黄褐色細砂ブロックが混じるもの。

カマド（図版75、第195図） 住居西壁中央に付設されたと考えられるカマドで、右壁基部は調査区外となる。両袖とも壁から50cmほど突出するが、右袖横で出土した完形の土師器瓶（12）は一部右袖上に置かれていること、左袖石は掘り込みピットから抜かれた状態で左袖上置かれていたことから、両袖とも先端部はほぼ床面の高さまで壊されて、廃棄されたことが分かる。右袖は40cm×23cmほどの石を深さ8cmの掘り込みピットで固定し袖石としており、左袖も40cm×30cmほどの石を深さ16cmのピットで固定して袖石としていた（左袖石掘り込みピット北東側の張り出しは石を抜き取る際にできたもの）。右袖石の下で出土した石も下側が非常に良く焼け赤変しており、焚き口の天井石と考えられる（良く焼けた箇所はトーンで示す）。右袖横の完形瓶内の胴部中位内面で、石製紡錘車（第265図37）を検出したことは、カマド廃棄の行為と何らかの関係があるものと思われる。左袖外と接する位置で、45×30cm、深さ13cmの埋土に炭を

非常に多く含むビットを検出しており、カマド使用形態と関連するものか（左下に個別図と土層図あり）。そのビット上には完形品であったと考えられる胴部中位以下は完形の土師器甕（5）、その左では小形土師器甕2個体（3・4）が床面上から出土した。



196号竈穴住居跡カマド復原写真

カマド内では両袖の袖石掘り込みビット間中央よりやや左側に、小さな硬化面を確認し、その奥壁側では15cm×13cm、

深さ10cmの支脚抜き取りビットを検出した。カマド内では支脚と考えられる石は確認できなかったが、右袖から30cmほど東の位置で30×15cm、厚さ8cmの石を床面上で検出した。若干焼けていたため支脚の可能性があると思い、この石を支脚抜き取りビットにはめるとききれいに取まったため支脚であると判断した。袖石・支脚を復元したものが文中の写真である。

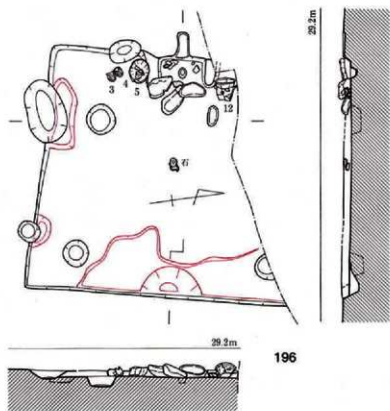
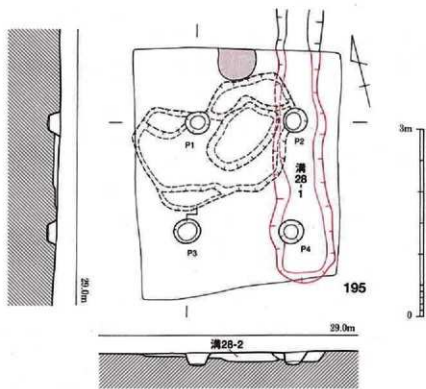
カマド内の寸法は、奥壁から支脚までが13cmと短く、幅が65cm、煙道部と燃焼部床面との差が10cmとなり、袖石部分で燃焼部幅が55cmと焚き口部がやや狭くなる形態となる。支脚奥には厚さ1cm未満の薄い石が4個確認できるが、この石は2区90・134号住居跡カマド内で検出した石と同様のものであり、火の使用に何らかの関係があると考えられる。煙道部は長さ40cm、奥壁部で幅22cm、深さ3cmを測り、先端に向けて少し幅狭くなる形態となる。煙道部床面はほぼ平らとなる。

出土土器（図版127、第197図・198図13） 1・2は低平な土師器杯。いずれも底部は手持ちヘラケズリ調整。1は口径20.9cm、器高4.1cmを測り、色は橙褐色。2の色は橙褐色。3・4は小形土師器甕。いずれも口縁部はやや強めに外反させ、胴の張りは弱く、内面は頸部までヘラケズリを施し、口径約12cm、器高約15cmとほぼ同じ器形・大きさのもの。外面には二次加熱・ススが認められる。3の色は外黄褐色～褐色、内橙褐色～黒褐色。4は完形品で、色は外白黄橙色～こげ茶色、内白黄褐色～こげ茶色。5は胴の張りが弱い長胴甕で、口径15.5cm、器高40.0cmを測る。外面には黒斑あり。色は暗茶褐色。6は土師器甕口縁部。色は橙褐色～茶褐色。7は土師器甕底部で、カマド付近出土。外面にはスス付着し、色は褐色。

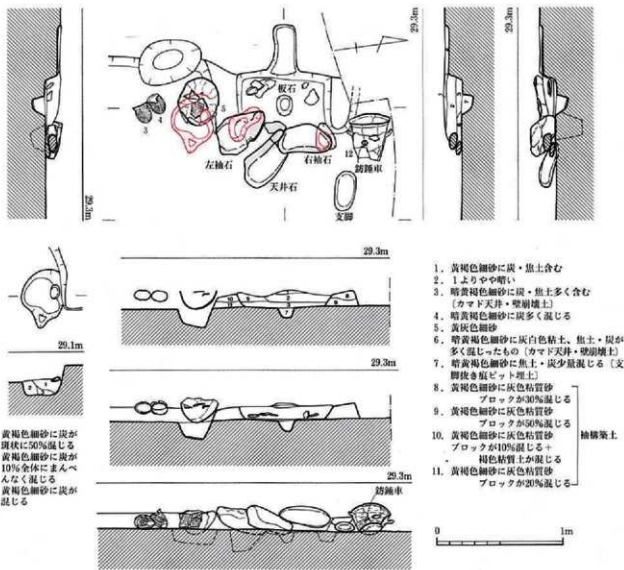
8は須恵器杯蓋口縁部で、外面には灰がかかる。住居床下出土。9は須恵器杯蓋で、天井部外面には横1本線に縦線を2本交わらせたヘラ記号を施す。焼成はやや甘く、色は淡灰色。10は高台がよく踏ん張る形態の杯身。底部にはヘラ切り痕残る。色は暗灰色。11は須恵器杯身口縁部で、端部は若干外反する。外面には薄く灰がかかる。色は外黒色、内暗灰色。12は赤焼け須恵器短頸甕で、口縁外端部を外にわずかにつまみ出したもの。外面胴部最大径以下はケズリを施す。焼成は甘く、一部器表が剥離する。色は茶褐色。

13は完形の土師器甕で、口径29.1cm、底径14.3cm、器高33.6cmを測る。外面はタキのちケズリを施し、内面上部は工具ナデのちナデ。色は黄橙色～橙色。

出土土器は7世紀後半の良好な一括資料となる。



第194図 195・196号竪穴住居跡実測図 (1/60)



1. 黄褐色細砂に炭が塊状に50%混じる
2. 黄褐色細砂に炭が10%全体にまんべんなく混じる
3. 黄褐色細砂に炭が混じる

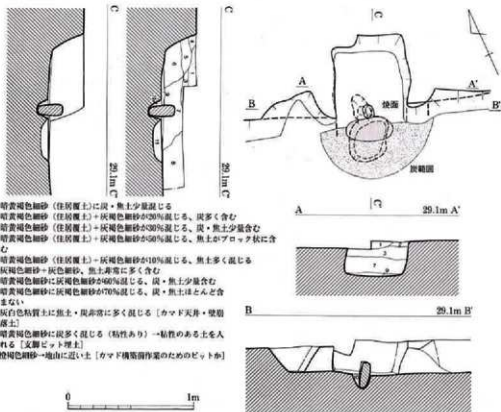
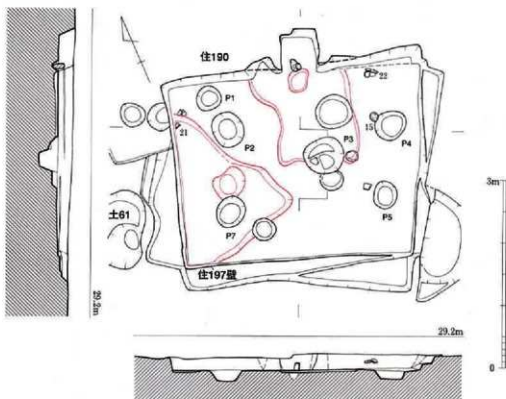
1. 黄褐色細砂に炭・焦土含む
 2. 1よりやや暗い
 3. 暗黄褐色細砂に炭・焦土多く含む
〔カマド天井・壁崩壊土〕
 4. 暗黄褐色細砂に炭多く混じる
 5. 黄灰色細砂
 6. 暗黄褐色細砂に灰白色粘土・焦土・炭が多く混じたもの〔カマド天井・壁崩壊土〕
 7. 暗黄褐色細砂に焦土・炭少量混じる〔支脚抜き灰ピット埋土〕
 8. 黄褐色細砂に灰色粘質砂ブロックが30%混じる
 9. 黄褐色細砂に灰色粘質砂ブロックが50%混じる
 10. 黄褐色細砂に灰色粘質砂ブロックが10%混じる＋褐色粘質土が混じる
 11. 黄褐色細砂に灰色粘質砂ブロックが20%混じる
- 袖構築土

第195図 196号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

197号竪穴住居跡(図版75、第196図)

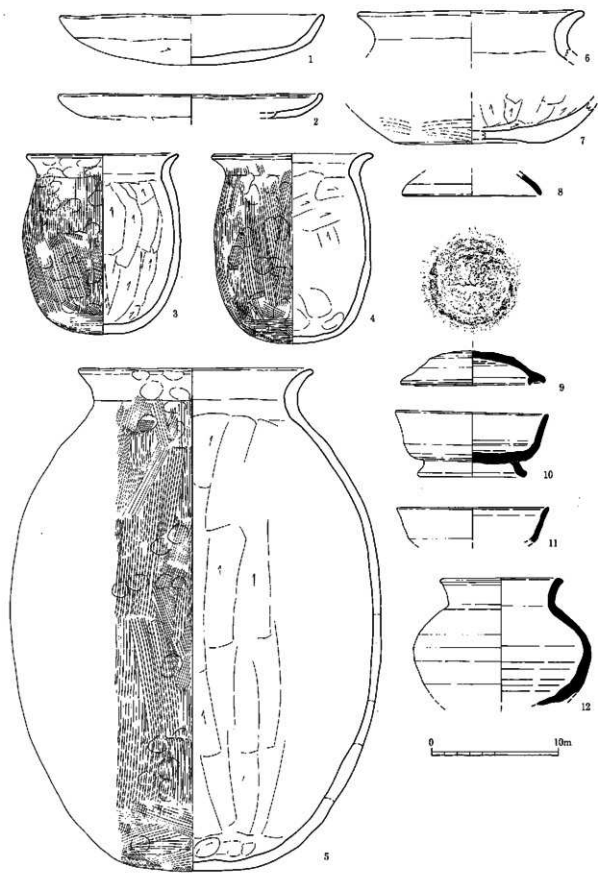
197号竪穴住居跡は3区中央南に位置し、190号住居跡に切られる。地山と埋土の区別が非常に分かりにくく何度も掘り間違えてしまった結果、住居周辺には掘り間違いの段が多数存在する。北壁中央にカマドを付設し、南北3.0m×東西4.1m、深さ24cmの東西に長い長方形住居となる。床面ではピットを9基検出し、P2・4・7は位置・深さから支柱穴となるが、南東隅の支柱穴は検出できなかった。カマド付近と西壁で掘り込みを確認した。18・22は床面直上出土。また、床面付近から白玉(第265図44)が出土している。

カマド(図版76)北壁中央に位置し、上層に190号住居跡が存在したため、カマド左奥壁側上部は壊される。調査当初はカマドがこの場所よりまだ西側に位置すると考えて一部掘削したために、左袖やカマド西の住居壁を掘り過ぎてしまった。右袖は基部のみわずかに残り、焼面の位置から袖が南に延びていたと思われるが、カマド前面の炭の広がりが(薄いトーンで範囲を示す)袖推定部まで広がることから、カマド廃棄の際に袖を壊しており、右袖の残存状況は廃

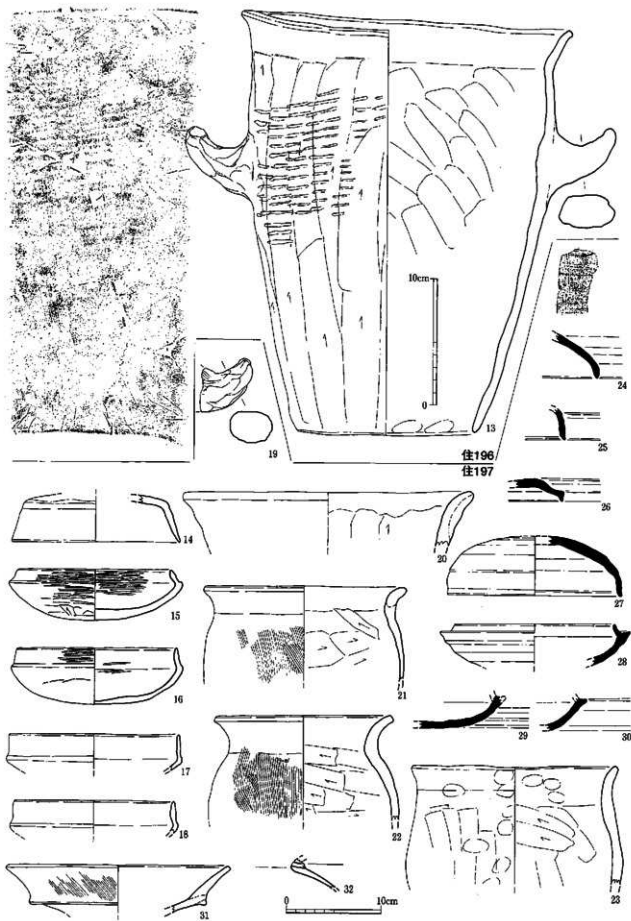


1. 暗黄褐色細砂（住居層土）に炭・焦土少量混じる
2. 暗黄褐色細砂（住居層土）→ 灰褐色細砂が20%混じる、炭多く含む
3. 暗黄褐色細砂（住居層土）→ 灰褐色細砂が30%混じる、炭・焦土少量含む
4. 暗黄褐色細砂（住居層土）→ 灰褐色細砂が50%混じる、焦土がアローナ状に含む
5. 暗黄褐色細砂（住居層土）→ 灰褐色細砂が10%混じる、焦土多く混じる
6. 灰褐色細砂→ 灰色細砂、焦土非常に多く含む
7. 暗黄褐色細砂に灰褐色細砂が60%混じる、炭・焦土少量含む
8. 暗黄褐色細砂に灰褐色細砂が70%混じる、炭・焦土ほとんど含まない
9. 灰白色粘質土に焦土・炭非常に多く混じる【カマド天井・壁筋層土】
10. 暗黄褐色細砂に炭多く混じる（粘性あり）→ 粘性のある土を入れる【支脚ビット埋土】
11. 暗黄褐色細砂→ 地山に近い土【カマド構築前作業のためのビットか】

第196図 197号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）



第197图 196号竖穴住居跡出土土器実測图(1)(1/3)



第198图 196(2)・197号整穴住居跡出土土器実測図(31は1/4、他は1/3)

棄の状態を表していると思われる。

奥壁から40cmとやや離れた場所に、石製支脚が20×15cm、深さ10cmの掘り込みビットにより固定されて存在する。この掘り込みビットが北西側に延びるのは、支脚をビットに入れる際のスロープ状の役割が想定される。支脚前面には38×18cmの焼面があり、その下には破線で示しているが、覆土に焦土のみ混ざるビットがある(11層)。その11層上の9層は支脚前後の床面に張ったような状態を示し、焦土・炭を非常に多く含むことから、カマドの補修の際に張られた粘土と考えられ、焼成面は2層存在することになる。燃焼部幅は支脚部分で53cm、奥壁部では48cmを測る。残りの良いカマドであるが、煙道部は検出できなかった。

出土土器(図版128、第198図14~32)

14~18は土師器模倣杯。14は天井部が低平な杯蓋で、弱い稜が付くもの。天井部外面にはケズリを施す。色は黄褐色。15~18は杯身。15は内外面黒塗りを施し、11縁部は短く立ち上がるほぼ完形品。底部外面は手持ちヘラケズリ、その他は細かいミガキを施す。外面には黒斑あり。色は明褐色~橙褐色。16も内外面黒塗りの杯身で、内外面にはわずかに細かいミガキが残る。色は橙褐色~黄褐色~黒色。17は小片のため、径に不安が残る。色は黄褐色。18の色は黄褐色。

19~23は土師器甕。19は接合面が平らな把手。色は淡褐色。20は口縁部が弱く外反するもの。色は橙褐色。21・22はやや強く外反する口縁部を持つ甕で、いずれも二次加熱痕・スガが付着。21の色は外黄褐色~暗褐色、内灰色~褐色。22は内面頸部までヘラケズリを施し、色は褐色~こげ茶色。23は弱く外反する口縁部を持つ甕で、外面は工具ナデを施す。口縁部内面にはスス付着。色は外灰茶色、内茶褐色。

24~27は須恵器杯蓋。24は天井部外面にヘラ記号が残るが、全形は不明。外は暗灰色、内青灰色。25は天井部との境に非常に弱い稜を持つもので、口縁外端部は外につまみ出し、内端部はナデにより窪む。26は嘴状の口縁端部を持つ蓋口縁部。外面には灰がかかり、色は青灰色。混入品。27は口縁端部をわずかに外反させる杯蓋で、焼成はやや甘く、色は白灰色。28~30は須恵器杯身で、29・30は立ち上がり欠ける。28の色は灰色、29の色は暗灰色、30の色は灰色を呈する。

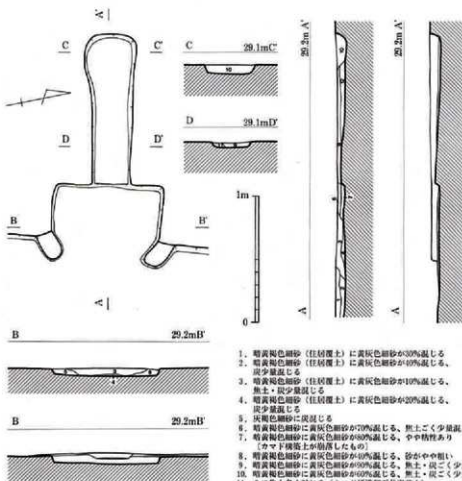
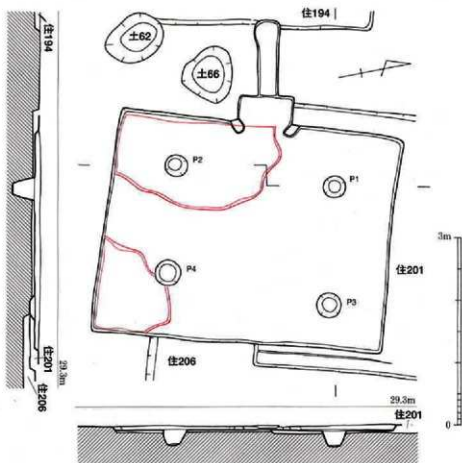
31は古式土師器内系二重口縁壺口縁部。外面にはスス付着。色は橙褐色。

32は弥生中期無頸壺頸部で、生乾き状態で内から外に穿孔するが、何孔あったかは小片のため不明。色は褐色。

出土土器のほとんどは古墳時代後期後半に属することから、26の杯蓋は埋土に混入したものと思われる。

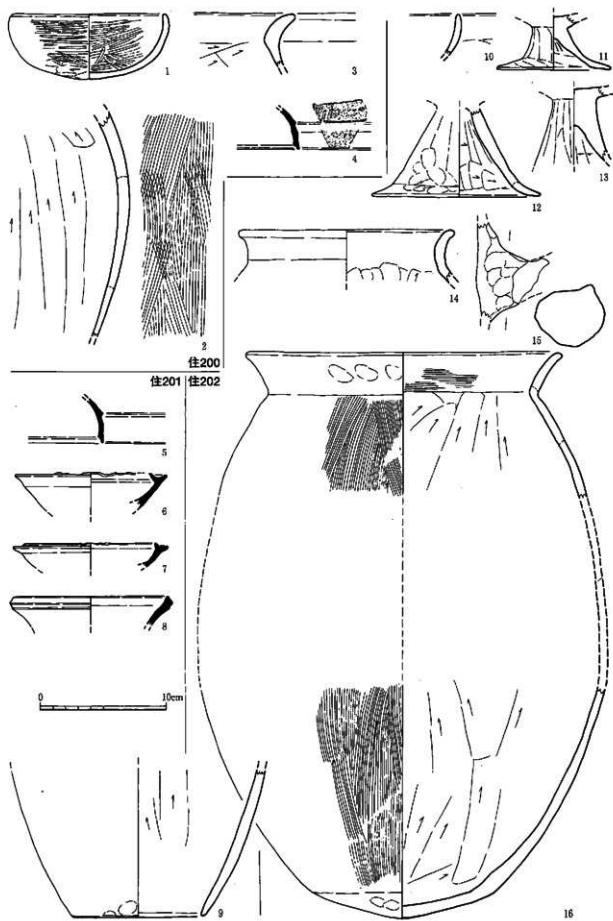
200号竪穴住居跡(図版76、第199図)

200号竪穴住居跡は3区中央東に位置し、194・201・206号住居跡を切る。切り合い関係から3区中央東の住居群の中で最も新しい住居跡となる。西壁中央に大形カマドを付設し、東西3.6m×南北4.6m、深さ10cmの南北に長い長方形住居となる。切り合う201・206号住居跡とは住居主軸が一致する。床面では4基ビットを検出し、いずれも支柱穴となると考えられるが、北東のものは他より深さがないためやや不安が残る。埋土は暗黄褐色細砂。埋土中より図版136

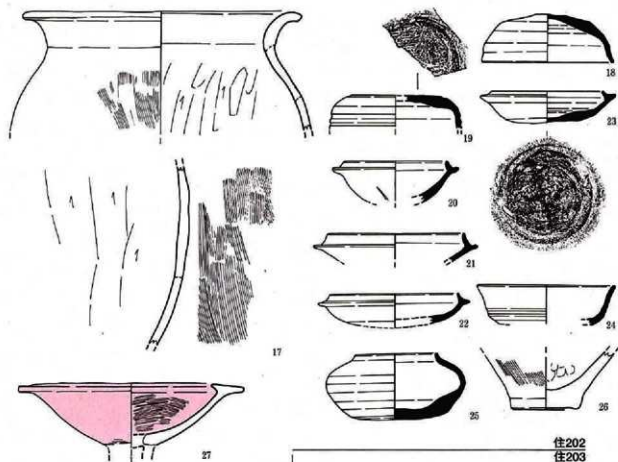


1. 暗黄褐色細砂（柱状層土）に黄灰色細砂が30%混じる
2. 暗黄褐色細砂（柱状層土）に黄灰色細砂が40%混じる、灰少混じる
3. 暗黄褐色細砂（柱状層土）に黄灰色細砂が10%混じる、無土・灰少混じる
4. 暗黄褐色細砂（柱状層土）に黄灰色細砂が20%混じる、灰少混じる
5. 灰褐色細砂に灰混じる
6. 暗黄褐色細砂に黄灰色細砂が70%混じる、無土・灰ごく少混じる
7. 暗黄褐色細砂に黄灰色細砂が80%混じる、中や粒性あり
〔カマド環状土が脱落したもの〕
8. 暗黄褐色細砂に黄灰色細砂が40%混じる、砂の中や粒性
9. 暗黄褐色細砂に黄灰色細砂が60%混じる、無土・灰ごく少混じる
10. 暗黄褐色細砂に黄灰色細砂が60%混じる、無土・灰ごく少混じる
11. 9に無土多く混じる〔カマド環状土天井層土〕
12. 9に灰・無土の塊非常に多く混じる〔カマド使用時堆積土〕

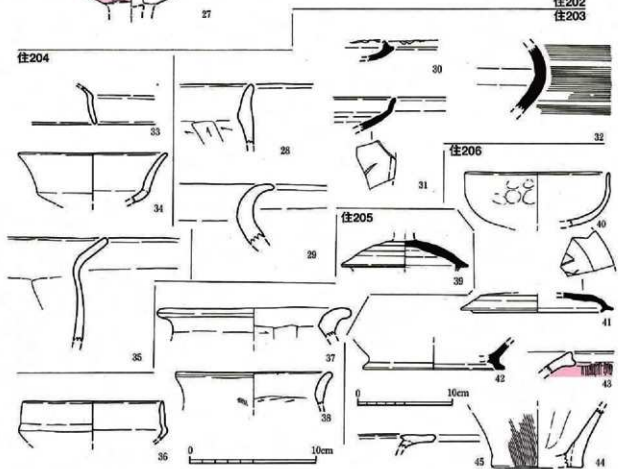
第199図 200号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）



第200图 200~202 (1) 号整穴住居跡出土土器実測图 (1/3)



住202
住203



第201图 202(2)~206号竖穴住居跡出土土器実測図(26・27・43~45は1/4、他は1/3)

～260の鉄滓が出土した。住居南西・南東で掘り込みを確認した。

カマド(図版76) 西壁中央に付設された大形カマドで、壁から20cmほど両袖が突出し、袖が燃焼部を囲むように内側を向く形態となる。焼面は確認できず、カマド埋土にも焦土・炭の割合は少ない。断面図を取った箇所では燃焼部幅が86cmと非常に幅広く、奥壁でも80cmの幅を測り、奥壁から袖先端部までが65cmの奥行となる。燃焼部床面から4cmほど上がった位置から、煙道部が西側に120cm延びるが、幅が燃焼部側で30cm、最も広くなる先端部近くで41cmと先端部に向かって徐々に広がる形態となる。煙道部床面は先端部に向かって緩やかに深くなり、先端部は煙道口ピットとなっていたことが土層から分かる(10は煙道口として地表面上ではピット状になっていたことから、煙道部土層を切るような土の堆積を示すと考えられる)。2は煙道部出土。

出土土器(図版128、第200図1～4) 1・3・4は床下掘り込み出土。1は土師器杯で、内外面ミガキで調整。色は橙褐色。2は土師器甕胴部。外面にはスス付着。色は外暗茶褐色、内灰茶褐色。3は土師器甕口縁部。外面には二次加熱・ススが認められる。色は橙茶色～灰褐色。

4は須恵器杯蓋で、弱い稜を持ち、その稜上に3本線の工具痕が残るが、へう記号になるかどうかは小片のため不明。口縁内端部はナデにより窪む。色は青灰色～灰色。

出土土器は古墳時代のものが多いが、住居形態や切り合いから7世紀初頭～前半の住居跡となるか。

201号竪穴住居跡(図版76、第202図)

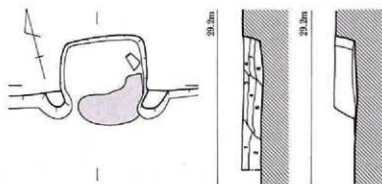
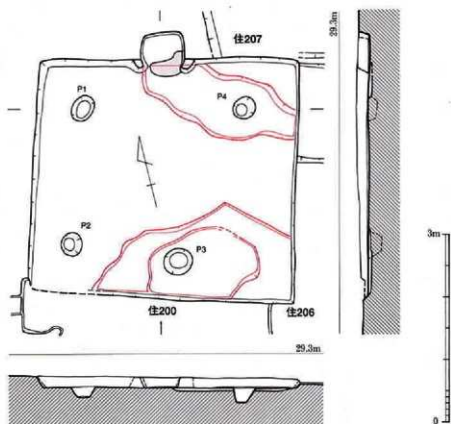
201号竪穴住居跡は3区中央西に位置し、200号住居跡に切られ、206・207号住居跡を切る。住居南側は200号住居跡の下層にあたり、住居南東部は206号住居跡の上層となる。200号住居跡により南西隅は壊される(推定を破線で示す)。カマドは北壁中央に付設され、南北3.8m×東西4.2m、深さ16cmのほぼ正方形住居となる。埋土は暗黄灰色細砂。床面では4基のピットを検出し、いずれも土柱穴となると考えられるが、南東ピットは位置が東に寄りすぎであるため、不安が残る。住居北東、南東の2ヶ所で掘り込みを確認した。

カマド(図版77) 北壁中央に付設されるカマドで、袖は壁から20cmほど内向きに突出する。奥壁から40cmほどの位置に比較的良く焼けた焼面が広がり、この焼面が奥壁に向かって右側が突出する形状は支脚に甕などのピットを掘り込まないものを使用したことを表している。燃焼部幅は断面図の箇所では62cm、奥壁部で55cmを測り、やや奥壁側が狭くなる形態となる。9はカマド内出土。

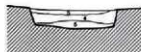
出土土器(第200図5～9) 5は須恵器杯蓋。弱く突出する稜を持ち、口縁内端部はナデにより窪む。外面には灰がかかる。色は白灰色～灰色。6・7は須恵器杯身で、いずれも口縁端部を打ち欠く。6の色は青灰色。7の外面には灰がかかり、色は青灰色。8は須恵器提瓶口縁部。内外面に灰がかかる。色は外黒色、内灰色。

9は土師器瓶底部で、外面は工具ナデのちナデを施したものか。外面には黒斑あり。色は橙茶色。

出土土器は古墳時代後期後半の時期であるが、206号住居跡との切り合い関係から7世紀初頭～前半の住居となる。



29.2m



29.2m



1. 暗黄灰色細砂に黄褐色細砂が30%混じる、炭土・炭少量含む
 2. 暗黄灰色細砂に黄褐色細砂が20%混じる、炭土・炭少量含む
 3. 灰褐色細砂に黄褐色細砂が40%混じる、炭土・炭少量含む
 4. 灰褐色細砂に黄褐色細砂が20%混じる、炭土ブロック状に混じる
 5. 灰褐色細砂に黄褐色細砂が10%混じる、やわらかあり、炭・炭土多く含む
 6. 灰褐色細砂に黄褐色細砂が30%混じる、炭含む
 7. 灰褐色細砂に黄褐色細砂が15%混じる、炭含む
 8. 灰褐色細砂に黄褐色細砂が10%混じる、炭多く含む
- 4～8はカマド構築土が崩落したもの

0 1m

第202図 201号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

202号竪穴住居跡（図版77、第203図）

202号竪穴住居跡は3区北東端に位置し、203号住居跡を切る。この付近は地山に礫を含むが、住居中央部を中心に覆土内から拳大の礫を多量に検出した。いずれも床面から少し浮いているものが多く、住居廃絶時に投棄されたものと考えられる（断面図では石を図化するが煩雑なため省いている）。住居北壁中央やや東寄りにカマドを付設し、南北5.0m×東西4.9m、深さ14cmの正方形住居になる。カマド東の北壁沿いに段が存在するが、3cmほどこの付近の床面を下げすぎてしまったために付いた段である。床面ではビット7基検出し、P1～4が柱穴となる。住居中央では大きな掘り込みが存在する。

カマド（第203図）北壁中央よりやや東に位置するカマドで、右袖前面は床面を掘りすぎてしまい段差が付く。両袖とも壁から23cmほど燃焼部を囲むように内向きに突出する。奥壁から30cmの場所に焼面があり、燃焼部幅はこの部分で67cm、奥壁部でも67cmと同じ幅である。カマド北には地山の石を図示しているが、カマド床面の炭の広がる状態から、カマド使用時も奥壁側の側面のみ一部露出していた可能性が高い。14はカマド内出土。

出土土器（図版128、第200・201図10～27）10は土師器杯で、外面体部はヘラケズリで調整。色は白橙褐色。P1出土。11～13は土師器高杯脚部。11はやや低脚のもので、脚柱部内外面はケズリ、脚裾部外面はナデの稜が良く残る。焼成はやや甘く、色は橙褐色。12の外面はナデの稜が良く残る。色は茶褐色。13は内外面ケズリで調整。色は赤褐色。

14は土師器壺口縁部で、口縁端部は玉縁状にわずかに肥厚する。色は外淡灰黄褐色、内黄茶褐色。15は土師器壺把手。色は淡赤褐色。16は土師器長胴壺で、口縁部内面はハケ調整で、内面頸部までヘラケズリを施す。外面にはススが付着。色は灰黄褐色。17は土師器壺で、下の胴部片も同一個体。口縁部は強く外湾し、外面は細いハケで調整。外面には黒斑あり。色は茶褐色。

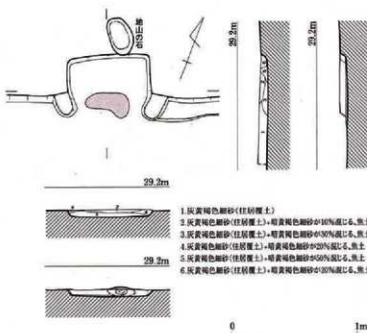
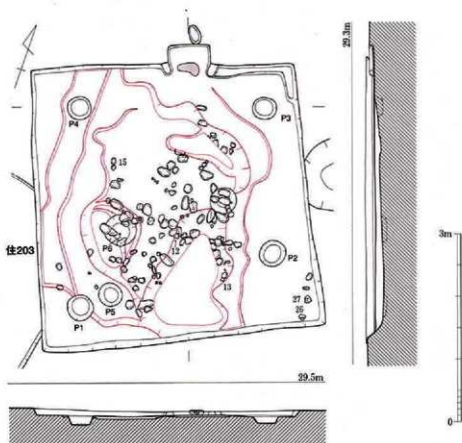
18・19は須恵器杯蓋。いずれも色は灰色。18の口縁端部は弱く外反し、天井部外面頂部はヘラ切り後ナデ調整。19は天井部との境に工具による2条の凹線を巡らすもので、天井部外面にはヘラ切り痕が残り、その上に「×」のヘラ記号を施す。20～23は須恵器杯身。20は底部が丸く、口径が小さいもの。底部外面にはヘラ記号が1本残るが、全形は不明。色は淡茶色～灰色。21は外面に灰をかぶる。色は暗灰色～黒色。22は低平なもので、色は淡青灰色。23は完形品で、口径8.9cm、器高2.5cmを測る。底部外面はヘラ切り後に雑なナデを施し、その後「×」のヘラ記号を施す。色は青灰色。P5出土。24は須恵器高杯杯部。体部下部に工具による1条の凹線を施す。色は灰色。25は完形の小形須恵器短頸壺。口径6.4cm、器高5.3cmを測り、底部は回転ヘラケズリを施す。色は灰色。

26は弥生中期壺底部。外面には二次加熱度あり。色は灰黄褐色。27は弥生中期鋤先口縁高杯環部で、口縁部は若干外傾する。外面は二次加熱により器表は荒れるが、内面には横ミガキが残る。内外面には丹塗りが残り、牛地は黄褐色。

出土土器から当住居跡の時期は古墳時代後期末のもの。

203号竪穴住居跡（図版78、第204図）

203号竪穴住居跡は3区北東端に位置し、202号住居跡に切られる。住居北東部は202号住居跡により壊される。住居北壁中央にカマドを付設し、南北4.1m×東西4.5m、深さ6cmのほぼ



1. 灰黄褐色細砂(住居覆土)
2. 灰黄褐色細砂(住居覆土)・暗黄褐色細砂が10%混じる。黒土・灰多量混じる
3. 灰黄褐色細砂(住居覆土)・暗黄褐色細砂が30%混じる。黒土・灰少量混じる
4. 灰黄褐色細砂(住居覆土)・暗黄褐色細砂が20%混じる。黒土・灰ほとんど含まない
5. 灰黄褐色細砂(住居覆土)・暗黄褐色細砂が50%混じる。黒土・灰ほとんど含まない
6. 灰黄褐色細砂(住居覆土)・暗黄褐色細砂が30%混じる。黒土・灰少量混じる

第203図 202号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

正方形住居跡となる。床面ではピット7基確認し、P4～6が主柱穴となる。カマド左袖前面には埋土に焦土・炭が混じるピットが、住居西壁中央に83cm×100cm、深さ10cm、埋土が暗黄褐色細砂の屋内土坑が存在する。住居埋土は暗黄褐色細砂。住居南西隅で掘り込みを確認した。

カマド(図版78) 住居北壁中央に位置し、壁から右袖で23cm、左袖で17cm内向きに突出する袖を持つカマド。焼面はなく、焦土・炭が床面に若干広がる程度である。燃焼部幅は断面図の箇所75cm、奥壁も同じ幅で、奥行は袖先端部から奥壁まで長さ80cmを測る大形のカマドとなる。カマド左袖前面には60×55cm、深さ17cmの焦土・炭が覆土下層に多く混じるピットが存在し、カマドと関係するピットと考えられる(土層図を掲載)。28はカマド内出土。

出土土器(第201図28～32) 28・29は土師器甕口縁部。28はわずかに口縁端部が外反する直口甕で、外面には二次加熱痕あり。色は茶褐色。29は口縁端部が強く外湾する口縁部で、色は淡橙色～褐色。

30は口縁端部を打ち欠いた須恵器杯身で、色は灰色。31は口縁部が体部から屈曲し、口縁端部が外反する須恵器高杯口縁部。外面にはヘラ記号が1本残るが、全形は不明。色は灰色。32は須恵器壺体部で、外面にはカキ目を施す。色は灰色。

出土土器と切り合いから古墳時代後期後半の住居跡となるか。

204号竪穴住居跡(図版78、第205図)

204号竪穴住居跡は3区西端中央に位置し、207・213号住居跡を切り、29号溝に切られる。西壁中央にカマドを付設するが、調査段階ではカマドの存在に気づかず掘り進め、207号住居跡調査時によりやくカマド硬化面の存在に気づいたため、207号住居跡とのベルト部分のみカマドとしての調査を行っている。29号溝に切られるため、住居東部分は壊されているが、現状で東西3.6m以上×南北4.2m、深さ14cmの住居跡となるが、主柱穴の位置から考えると東へは余り延びない長方形住居となると予想される。床面ではピット4基確認し、P2～4は主柱穴となる。埋土は暗黄褐色細砂に灰白色粘質土ブロックが混じるもの。

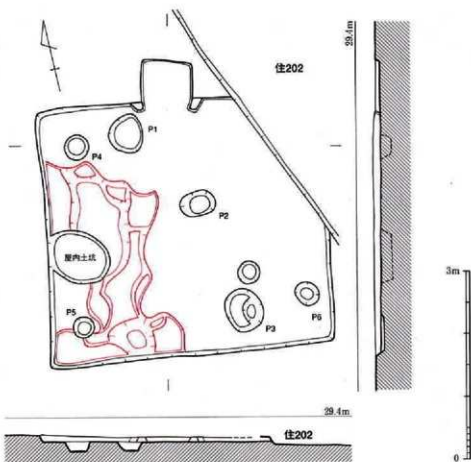
カマド 住居西壁中央に位置し、燃焼部が壁から突出するタイプのカマドとなる。先述したように燃焼部壁の一部調査したのみであるが、焼面が燃焼部全体に広がることから、カマドは壁から50cm突出し、燃焼部が幅50cmとなることが分かる。やや奥壁に近いことは気になるが、右壁の一部がかなり焼けており、硬化面を形成する。カマド床面近くの土は焦土・炭を多く含み、粘性も強いことから、カマド・壁・天井部構築土と考えられる。

出土土器(第201図33～35) 33は土師器模倣杯蓋で、弱い稜を持つ。色は白茶色。34は土師器高杯杯部で、外面にはスス付着。色は淡桃色。35は土師器甕口縁部で、内面頸部下はヘラケズリを施したもの。色は黄橙色。

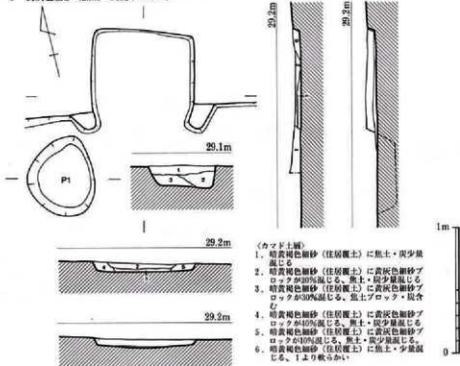
出土土器から古墳時代後期後半の住居跡となるか。

205号竪穴住居跡(図版79、第206図)

205号竪穴住居跡は3区東端中央に位置し、208・213号住居跡を切り、29号溝に住居東側を大きく壊される住居跡となる。29号溝東の214号住居跡と切り合う可能性もあるが、前後関係は不明。住居主軸が座標北と一致する。北壁中央にカマドがあると考え、南北3.4m×東

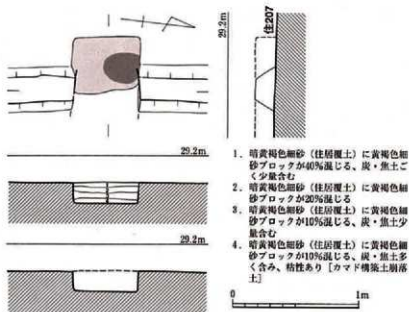
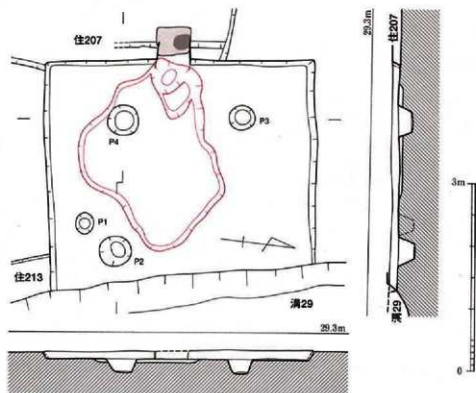


- (P1土層)
- 1 暗黄灰色細砂に魚土・炭少量混じる
 - 2 暗黄灰色細砂に魚土・炭多く混じる(ブロック状に)
 - 3 黄灰色細砂(魚土・炭混じらない)



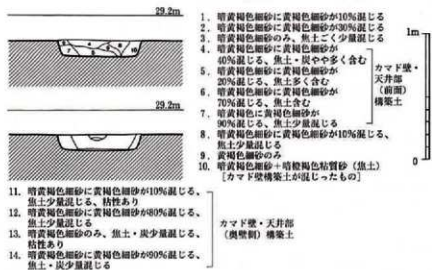
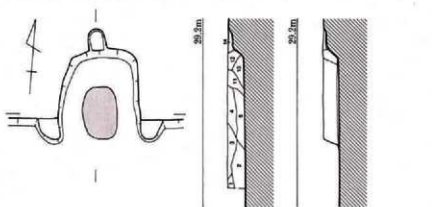
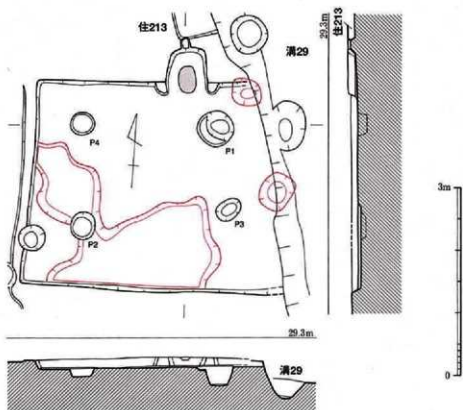
- <カマド土層>
1. 暗黄褐色細砂(住居覆土)に魚土・炭少量混じる
 2. 暗黄褐色細砂(住居覆土)に黄灰色細砂ブロックが30%混じる。魚土・炭少量混じる
 3. 暗黄褐色細砂(住居覆土)に黄灰色細砂ブロックが30%混じる。魚土ブロック・炭含む
 4. 暗黄褐色細砂(住居覆土)に黄灰色細砂ブロックが40%混じる。魚土・炭少量混じる
 5. 暗黄褐色細砂(住居覆土)に黄灰色細砂ブロックが30%混じる。魚土・炭少量混じる
 6. 暗黄褐色細砂(住居覆土)に魚土・炭少量混じる。1より軟らかい。

第204図 203号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

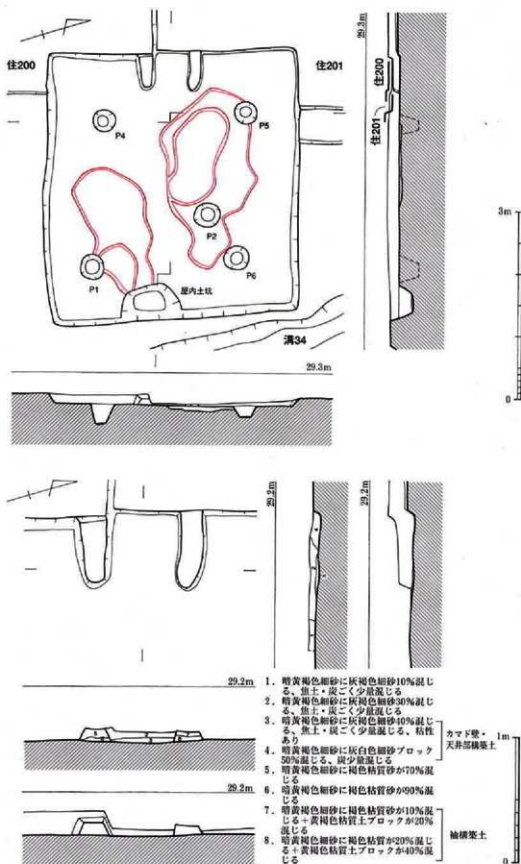


第205図 204号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

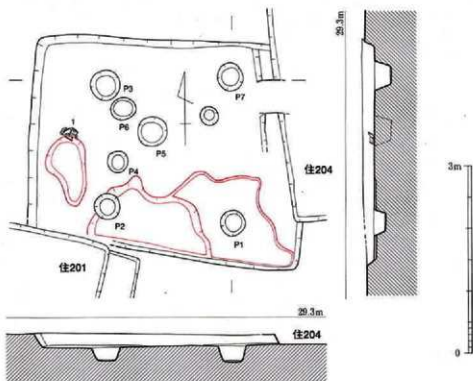
西4.8m (推定)、深さ17cmの長方形住居となるか。床面ではピットを4基検出し、当初この4基が主柱穴になると考えたが、東のP1・3の位置が西により過ぎ、またP3がカマドに近いことからP1・3は主柱穴ではなく、主柱穴はP2・4のみ残ると判断した。住居埋土は黄褐色細砂と灰褐色粗砂が混じったもの。住居床下から2基のピット(下層のピット)と、住居南側で掘り込みを確認した。



第206図 205号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第207図 206号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第208図 207号竪穴住居跡実測図 (1/60)

カマド (図版79) 北壁に付設されたカマドで、20cmほどの短い袖を持つ。奥壁から23cmの場所で42×23cmのあまり硬化しない焼面を検出した。支脚の位置はこの焼面奥にあったとすると奥壁から近いと、土層から支脚の位置は焼面中央に近い奥壁から30cmの場所にあったことが推測できる。この場所の燃焼部幅は55cmで、燃焼部平面形は逆「U」の字状に奥壁側が丸くなる形になる。燃焼部床面8cm上から、北に長さ16cm、幅14cmの短い煙道が付く。煙道部床面は先端部に向けて緩やかに上昇する。

出土土器 (第201図36~39) 36は土師器模倣杯身で、色は淡褐色。P3出土。37・38は小形土師器壺口縁部。37は強く外湾する口縁で、口縁部内面には炭化物が付着する。色は暗茶褐色~こげ茶色。38は弱く外反する口縁部で、色は橙褐色。P1出土。39は須恵器杯蓋で、つまみと口縁端部は欠ける。色は灰黒色~黒色。

出土土器から古墳時代後期末の住居跡になる。

206号竪穴住居跡 (図版79、第207図)

206号竪穴住居跡は3区中央東に位置し、200・201号住居跡に切られる。34号溝と切り合いがあると考えられるが前後関係は不明。西壁中央にカマドを付設するが、住居西側は200・201号住居跡により削られてしまっているため、カマドも含めて残りは良くない。東西4.3m×南北4.0m、深さ15cmのほぼ正方形住居跡となる。200・201号住居跡と住居主軸は同じである。当住居跡は200・201号住居跡よりも床面が深い。床面からは5基ビットを検出し、P1・4~6が主柱穴となる。カマドに対面する東壁には94×60cm、深さ23cm、埋土が暗黄褐色細砂のカマド対面土坑が存在する。住居埋土は暗黄褐色細砂と黄灰色細砂が混ざったもの。住居中央の南北

2ヶ所に掘り込みを確認した。

カマド(図版80) 住居西壁中央に位置するが、上層に200・201号住居跡があるため上部を壊されてしまい、右袖で高さ7cmしか残っていない。壁から若干内向きに70cmほど突出する袖で、燃焼部幅は断面図の箇所50cm、奥壁で48cmとほぼ同じ幅になる。明確な焼面はなく、カマド埋土にも焦土・炭はかなりの少量しか混じらない。

出土土器(第201図40~45) 40は土師器杯。内外面摩滅のため、調整不明。色は灰黄褐色~淡橙色。41はかえりの付く低平な須恵器杯蓋口縁部。天井部外面にはへら記号が残るが、全形は不明。色は外灰黒色、内青灰色。42は高台が踏ん張る杯身であるが、調整・成形は須恵器、焼成・色調は土師器の特徴を示すため、須恵器の生焼けのものであると判断した。焼成は悪く、色は灰黄色。41・42は混入品。

43は弥生中期広口壺口縁部。外面には暗文状の縦ミガキを施し、丹を塗布する。生地は黄茶色。44は弥生中期甕底部。外面には二次加熱痕あり。色は外灰黄色、内黒色。45は鋤先口縁高坏の口縁部。色は橙色。P2出土。

出土土器は7世紀後半代のものであるが、切り合い関係から古墳時代後期後半の住居跡となると考えられる。

207号竪穴住居跡(図版80、第208図)

207号竪穴住居跡は3区東中央やや北寄りに位置し、201・204号住居跡に切られる。新しい住居跡により南西隅と東壁の大半が壊されるが、現状で南北3.5m×東西4.4m、深さ23cmの東側がやや広がる長方形住居となる。炉は検出できなかったものの、床面からは8基のピットを検出し、P1~3・7が主柱穴となる4本柱の住居跡となる。住居埋土は黄褐色細砂に暗褐色細砂(炭状のもの)が多く混じることから、焼失住居ではないものの、住居廃棄の際に火を焚く行為を行った可能性がある。住居西・南壁で掘り込みを確認した。住居西壁近くの床面直上から土師器甕(1)が出土した。

出土土器(図版128、第209図1~5) 1・2は布留系甕。1は口縁内端部を上方につまみ出し、外面にはスス付着。色は黄橙色~灰褐色。2は頸部片で、外面肩部には1条の波状文があるが、全周しない。頸部付近のケズリは下方向に行う珍しいもの。外面には二次加熱痕、内面には炭化物が付着。色は灰黄褐色。

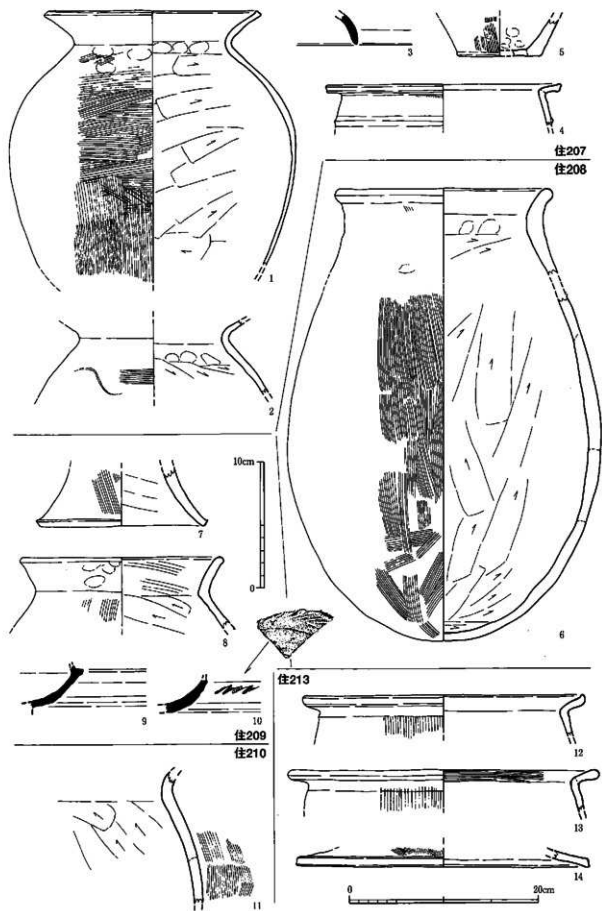
3は須恵器杯蓋口縁部で、混入品か。色は灰色。

4・5は弥生中期甕。4は口縁端部がナデにより凹線状に窪み、外面頸部下に低平な三角突帯を貼り付けたもの。外面頸部下にはハケが残る。色は淡橙色。5は外面に二次加熱痕あり、色は外灰黄褐色、内灰白色。

出土土器から古墳時代前期中頃の住居跡となる。

208号竪穴住居跡(図版80、第210図)

3区東側の中央部で検出した。東側半分を29号溝により大きく破壊され、北側の一部も205号住居跡により破壊される。北壁に内接型のカマドを付設していた。床面からは主柱穴と考えられる2基のピットを検出し、また29号溝内からも2基検出したが、位置がややずれておりこ



第209图 207~210・213号竖穴住居跡出土土器実測图 (4・5・12~14は1/4、他は1/3)

れらが主柱穴となるかどうか疑問が残る。このほかに浅い小ピットを2基検出した。住居跡の残存深さは15cmほどを測り、規模は南北長だけが判明して3.9mほどを測る。出土土器や切り合い関係から7世紀後半以前の7世紀代に位置づけられよう。また、磁石(第266図49)が出土している。

カマド(図版81) 北壁中央に内接型のカマドを検出した。平面形は「 \cap 」字型をなし、すべての部分が住居跡の掘削後に塗り付けられていて、壁を掘り込んだ部分は認められない。袖で囲い込まれた燃焼部の規模は奥行55cm、最大幅50cmほどを測り、両袖の先端部中央に支脚が立てられていたと見られる小ピットを検出した。燃焼部の埋土は4層に細分したが、いずれも住居跡の埋土とよく類似している。また、下層から中層にかけて土器が出土したが、いずれも支脚を抜き去った後に置かれたもの。

出土土器(第209図6) 6は土師器の壺形土器である。ほぼ全形が判明する。長卵形の胴部と緩く如意状に外湾する口縁部を有する。胴部外面ハケメ、内面ケズリ調整、口縁部は指頭正痕を残したナデ調整を施す。

209号整穴住居跡(図版81、第211図)

3区中央部の南側で確認した。住居跡東壁のほとんどが調査区外にあり、北東コーナー部分は210号住居跡によって破壊されている。北壁に内接型のカマドが付設されていた。住居跡の規模は長軸を南北に取ると長さ約3.3mを測る。また幅は東壁が検出できなかったために正確ではないが、カマド部分で折り返すとおよそ4.4mほどになるものと考えられる。住居跡の床面からは小ピットをいくつか検出したが、どれも主柱穴とするには位置が悪い。他に床面からは不整形の床下掘り込みを2カ所確認できた。出土土器や切り合い関係から、6世紀代に位置づけられようか。

カマド(図版82) 北壁に突出型のカマドを確認した。短い袖がやや閉き気味に2本付けられており、住居跡本体への掘り込みは認められない。袖によって囲まれた燃焼部の規模は、幅50cm、奥行20cm程度の小さな長方形を呈する。燃焼部の埋土は大きく2層に分層でき、上層の1・2層は住居跡の埋土と共通し、下層の4層はカマド使用時にすでに堆積していたものである可能性が高い。奥壁の右側をやや掘りすぎて破壊してしまったが、ここに煙道部等の痕跡は確認できなかった。

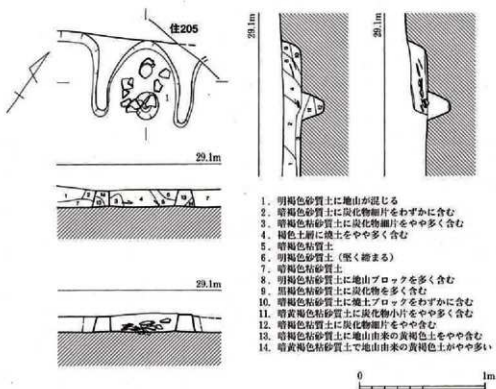
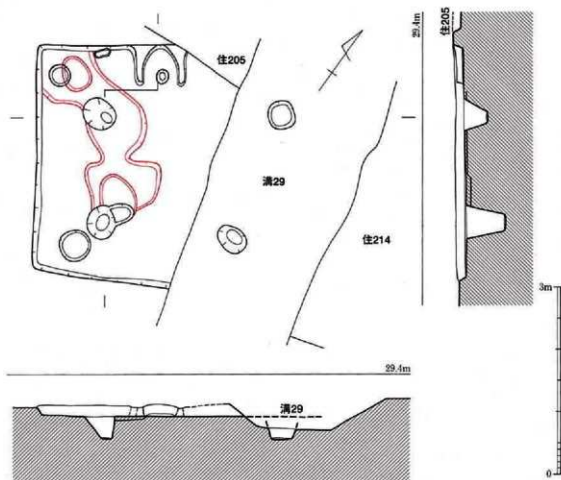
出土土器(第209図7~10) 7は弥生時代中期後半須玖Ⅱ式の器台である。外面ハケメ、内面ナデ調整を施す。

8は土師器で、長卵形の胴部を有する壺形土器である。口縁部のみ残存し、屈曲して如意状に外反する形態を持つ。胴部内面はケズリ、外面はハケメ調整を施す。

9・10は須恵器である。9はかえりを有する高杯杯部の口縁部片である。かえりは退化して短い。10は壺の胴下部の小片であろう。下部に波状文を施し、沈線が付す。以上の資料は期的にやや幅があり、9は7世紀後半の資料、10は6世紀代のものであろう。

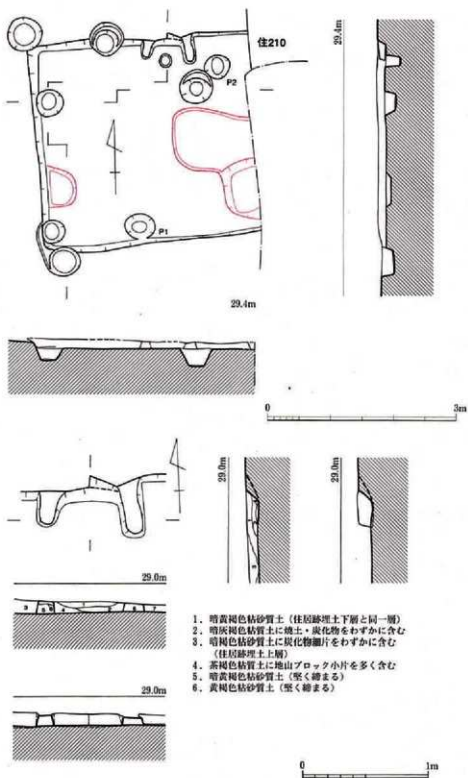
210号整穴住居跡(図版82、第212図)

3区中央部の南側で検出した住居跡である。南側の半分が調査区外に広がっており全形は不



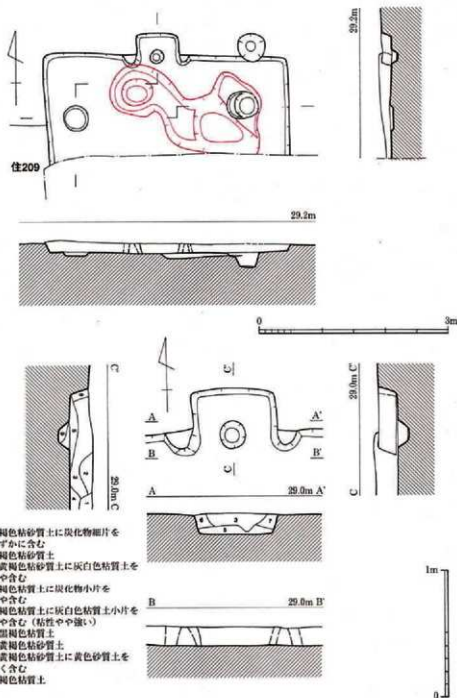
1. 明褐色砂質土に地山が混じる
2. 暗褐色砂質土に炭化物細片をわずかに含む
3. 暗褐色粘砂質土に炭化物細片をやや多く含む
4. 褐色土層に焼土をやや多く含む
5. 暗褐色粘質土
6. 明褐色砂質土（強く締まる）
7. 暗褐色粘砂質土
8. 明褐色粘砂質土に地山ブロックを多く含む
9. 暗褐色粘砂質土に炭化物を多く含む
10. 暗褐色粘砂質土に焼土ブロックをわずかに含む
11. 暗褐色粘砂質土に炭化物小片をやや多く含む
12. 暗褐色粘質土に炭化物細片をやや含む
13. 暗褐色粘砂質土に地山由来の黄褐色土をやや含む
14. 暗褐色粘砂質土で地山由来の黄褐色土がやや多い

第210図 208号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第211図 209号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

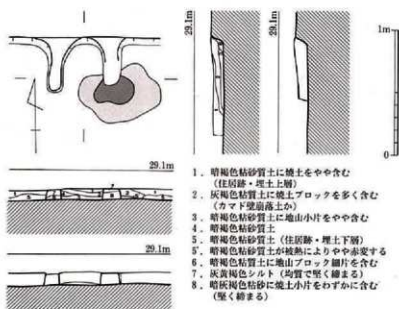
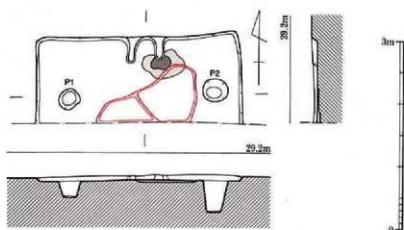
明である。西側で一部が209号住居跡と切り合っており、本住居跡が新しい。北壁のほぼ中央部に突出型のカマドを付設する。住居跡の残存深さは20cm弱を測る。床面からは支柱穴の可能性のあるピットを1基と、極めて浅いピットを1基検出し、このほかに不整形の床下掘り込みを検出した。出土土器等から、古墳時代後期から古代の遺構と考えられる。



第212図 210号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30)

カマド(図版82) 住居跡の北壁に突出型のカマドを検出した。振り込み部は幅60cm、奥行30cm弱を測り、長さ10cm弱の短い袖が燃烧部を囲い込んでいる。袖間のほぼ中央部に支脚を立てていたと考えられる小ビットを検出した。カマドの埋土は大きく2層に分層でき、2・3・6～8層は住居跡の埋没と同時に堆積した層、最下層の5層はカマド床面直上に堆積した灰層と考えられる。

出土土器(第209図11) 長卵形の胴部を有する土器の甕形土器の胴上部片である。如意状に



1. 暗褐色粘砂質土に焼土をやや含む
(住居跡・埋土上層)
2. 灰褐色粘質土に焼土ブロックを多く含む
(カマド壁面落下土)
3. 暗褐色粘砂質土に地山小片をやや含む
4. 暗褐色粘砂質土
5. 暗褐色粘砂質土(住居跡・埋土下層)
6. 暗褐色粘砂質土が焼熱によりやや赤変する
7. 灰黄褐色シルト(均質で堅く締まる)
8. 暗灰褐色粘砂に焼土小片をわずかに含む
(堅く締まる)

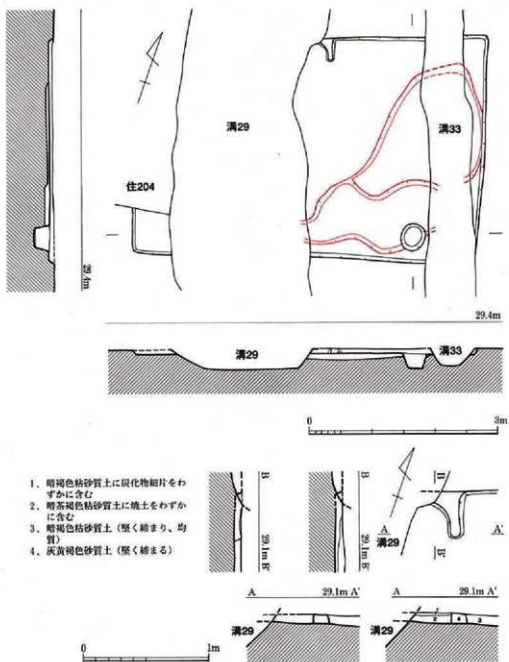
第213図 211号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30)

外湾する口縁部がわずかに残存する。胴部外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。

211号竪穴住居跡(図版83、第213図)

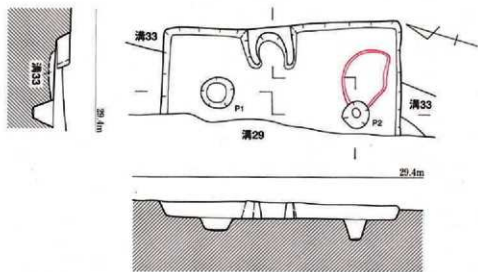
3区南東隅で検出した。北壁のほぼ中央部に、内接型のカマドを付設する。住居跡の南半分は調査区外に広がっており、全形は不明。東西幅のみが判明し、3.2mほどを測る。壁の深さは非常に浅く、10cm以下である。床面から2基のビットを検出した。その位置から、住居跡の主柱穴と考えられる。また、ほぼ住居中央部から不整形の床下掘り込みを検出した。土器はほとんど出土せず、時期は不明だが、カマドの形状から6世紀代のものか。

カマド(図版83) 住居跡の北壁中央部から、内接型のカマドが検出された。平面形状は「 \square 」字状を呈し、その全てが粘質土系の土で付設されている。袖で囲まれた燃焼部は奥行40cm、最大幅30cmほどを測る。右袖の先端部を中心としてそこからカマドの内外に、被熱による赤片部と高温による硬化面が形成されているのを確認した。カマド燃焼部の中心からは大きく右側に

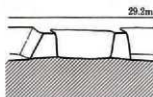
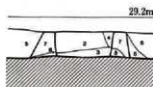
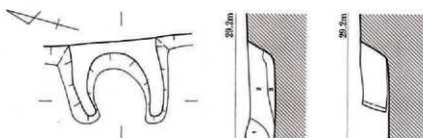


第214図 213号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

ずれており、本カマドに伴うものとは考えがたい。おそらく、本カマドに破壊された古いカマドの床面が、本カマドの床面とほぼ同レベルにあったためにこれを検出したものと考えられる。なお、この古いカマドが本住居跡に伴うものかどうかは定かではない。カマド埋土は大きく3層に分かれ、薄く堆積した最下層は住居跡の埋土とよく類似し、その直上にカマドの天井部の崩落土が認められることから、本カマドの天井が崩落する前にわずかながら住居跡の埋土が堆積していたと考えられる。



0 3m



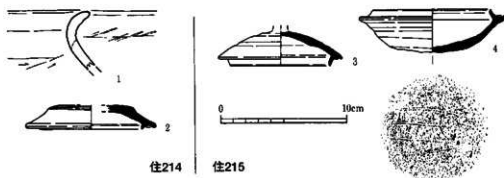
1. 暗灰褐色粘砂質土に黄白色粘質土を多く含む
2. 暗赤褐色粘砂質土に焼土・炭化物をわずかに含む
3. 暗灰褐色粘質土に黄白色粘質土を多く、焼土・炭化物をわずかに含む
4. 暗褐色粘砂質土に焼土をわずかに含む
5. 暗赤褐色粘砂質土に炭化物をわずかに含む
6. 暗赤褐色粘砂質土に焼土・炭化物をやや多く含む
7. 暗赤褐色粘砂質土に焼土・炭化物細片を含む
8. 暗灰褐色粘質土に焼土・炭化物をわずかに含む

0 1m

第215図 214号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

213号竪穴住居跡 (図版83、第214図)

3区東側の中央部やや南寄りで見出した住居跡である。北壁の中央部に内接型のカマドを配する。29・33号溝によって住居跡の中心部分を大きく破壊され、西側の壁も204号住居跡によって破壊されているが、かろうじて規模は判明し、南北の長さが3.5m、東西の幅が5.5mの幅広い長方形の平面形を呈する比較的大形の住居である。住居跡の深さは極めて浅く、数cm程度であった。床面からは支柱穴と考えられる深さ20cmほどのピットを1基検出した他、南東部に不



第216図 214・215号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

整形の床下掘り込みを検出できた。切り合い関係等から、7世紀初頭以前(6世紀代)に位置づけられる。また、土製勾玉(第268図16)が出土している。

カマド(図版84) 北壁のほぼ中央部に、内接型のカマドを検出した。ほぼ半分が29号溝によって破壊されており、右袖部分のみが残存していた。カマド袖はすべて粘質土を材料とした造り付けで構築されており、袖の長さは30cmほどを測る。平面形はおそらく「U」字形を呈すると考えられる。埋土は大きく2層に分けられるが、いずれも住居跡の埋土とよく似ていた。

出土土器(第209図12~14) いずれも弥生土器である。12・13は屈曲口縁の甕形土器の口縁部片である。12は端部を跳ね上げ状に処理し、13は端部を丸く収める。14は高坏の脚端部片である。いずれも中期須玖Ⅱ式に比定できる。混入であろう。

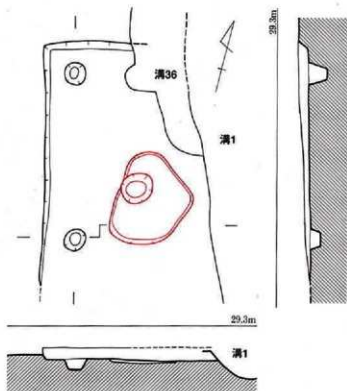
214号竪穴住居跡(図版84、第215図)

3区南東隅で検出した竪穴住居跡である。29号溝により住居跡の西側半分が破壊され、第1面の調査時には33号溝とも切り合い関係を持ちこれよりも新しいと把握したが、第2面の調査時に33号溝の調査をやり直した際の所見に従えば、切り合い関係を持たない。全体が残った東壁のほぼ中央部分に内接型のカマドを付設していた。床面からは支柱穴と考えられる2基のビットと、不整形の床下掘り込みを1カ所確認した。住居跡は比較的深く残っており、壁の深さは30cm弱を測る。支柱穴の深さにはやや差があるが、20~35cmを測る。出土土器と切り合い関係から、7世紀後半前後になるか。覆上から剥片石器(第263図7)が出土している。

カマド(図版84) 住居跡の東壁ほぼ中央部に、内接型のカマドを検出した。袖はすべて粘質土で造り付けられており、平面形は「U」字型を呈するが、袖の先端が内側に湾曲して燃焼部を囲い込んでおり、燃焼部の平面形は不整形な円形を呈する。燃焼部の埋土は3層に分層できるが、いずれも炭化物や焼土をあまり含まず、住居跡の埋土とよく類似する。カマドの右袖の右側に焼土・炭化物をやや多く含む層が認められ、このカマドの天井部は右側に引き倒されたものであろうか。

出土土器(第216図1・2) 1は土師器で、長卵形の胴部を有する甕形土器の如意状に外反する口縁部の破片である。

2は須恵器の杯蓋で、口縁端部にかえりを持つタイプである。天井の平坦部外面に回転ヘラケズリ痕が明瞭に認められる。以上の資料は7世紀後半代のものであろう。



第217図 215号竪穴住居跡実測図 (1/60)

215号竪穴住居跡 (第217図)

3区最東端の1区との境界部付近の南側で検出した。住居跡の東半分を1区検出の1号溝によって大きく破壊され、南壁も削平によって失われており、北壁と西壁のそれぞれ一部分のみが確認された。近接する33号溝の検出に失敗していたことが第2面の調査時点で判明したため、確認することはできないが、両者の位置関係から本住居跡と33号溝とが切り合い関係を持っていた可能性がある。出土土器は33号溝が8世紀初頭前後を示しており、これが本住居跡よりも後出する可能性を示しているが、第1面の検出時にこれを確認することができず、切り合い関係は本住居跡が後出する可能性を示

している。床面からはピットを2基検出した。深さは20~30cmとやや幅があるが、いずれも支柱穴と考えられる。壁は北側が良く残り、15cm程度が残存していた。また、住居中央から不整形の床下掘り込みを確認した。

出土土器 (図版129、第216図3・4) いずれも須恵器である。3は口縁部にかえりを持つ杯蓋である。つまみ部が欠けているが宝珠型つまみを有するものであろう。かえり部は下方に垂下する。口縁部径は9.8cmを測る。4は口縁部にかえりを有する杯身である。かえり部は斜めに内側に伸びる。口縁部径は9.4cmを測る。

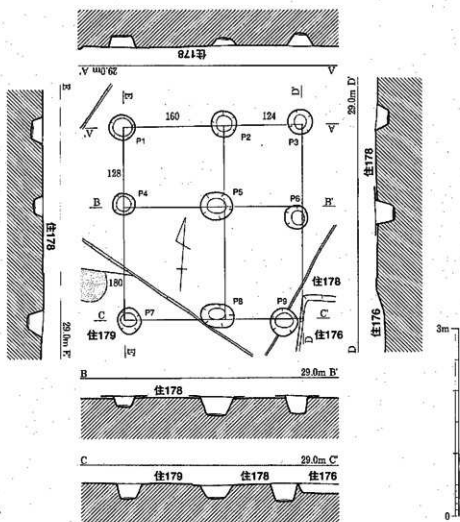
以上の資料はおおよそ7世紀後半代に属するものである。

b. 掘立柱建物跡

12号掘立柱建物跡 (第218図)

12号掘立柱建物跡は3区北西隅に位置し、178・179号住居跡を切る2×2間の小形総柱建物跡。178号住居跡とP9で接するが、切り合い関係は不明。建物主軸方位は北に対して4.5°西を向く。東西方向の総長が284cmで、柱間寸法は東から心々距離で124cm(4尺)、160cm(5尺)、南北方向の総長は408cmで、柱間寸法は北から128cm(4尺)、180cm(6尺)を測る。東側のP6・9は想定企画から少しずれたものとなる。柱穴掘方は径0.4m前後の円形で、深さは30cm前後である。全ての柱穴で柱痕跡は認められず、柱穴覆土は灰黄褐色細砂の単純埋土。

出土土器 (第219図) 1は口縁端部を外反させる土師器高杯杯部。外面はヘラナデ、内面は横ナデ調整。色は茶褐色~黒色。P2出土。2は土師器瓶胴部か。内面はハケのちケズリ。生乾



第218図 12号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

き状態で、外から穿孔した孔は、瓶の棧として使用した可能性もある。色は黄橙色。P8出土。3は須恵器杯蓋で、色は灰白色。P8出土。

出土土器は古墳時代後期末であるが、切り合い・主軸・方位からも後期末の可能性が高い建物跡である。

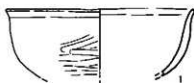
c. 土坑

56号土坑 (図版85、第220図)

56号土坑は3区東中央、28号溝西に位置し、184号住居跡南東隅を切る。長軸118cm×短軸110cm、北壁で深さ17cmを測る円形土坑。床面は北に緩やかに下降し、壁の立ち上がりはあまり急でない。埋土は暗黄褐色細砂。出土土器で図示できるものはないが、土師器甕・弥生中期甕底部片が出土している。

58号土坑 (第220図)

58号土坑は3区東中央、28号溝西に位置し、184号住居跡に南西側を切られる。長軸580cm×



短軸152cmの東西に長い土坑。南西側には一段高いテラスがあり、床面東側にはピット2基（深さそれぞれ10cmほど）がある。床面は南側に傾斜し、深さは土坑中央で20cmを測る。埋土はやや明るい暗黄灰色細砂。



出土土器（第221図1～4）1・2は上師器高杯口縁部。1の色は橙褐色。2の色は外白黄褐色、内淡橙褐色。3は土師器壺口縁部。色は灰橙褐色。4は須恵器杯蓋口縁部。色は灰色。5は須恵器杯身口縁部。外面に灰がかかり、色は外灰色～白色、内灰色。出土土器から古墳時代後期末の土坑になる。



59号土坑（図版69、第220図）

59号土坑は3区北西隅、12号掘立柱建物跡東に位置し、178号住居跡東壁中央を切る。削平のためこの付近の遺構の残りは良くない。長軸130cm×短軸84cm、北壁で深さ17cmを測る。床面は北向きに傾斜し、壁の立ち上がりはあまり急でない。埋土はやや粘性のある暗黄褐色細砂。出土土器で図示できるものはないが、上師器杯片が出土している。

第219図 12号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）

60号土坑（図版67、第220図）

60号土坑は3区東中央やや北寄り、177号住居跡西に位置する。176号住居跡の北東隅を切るが、調査では切り合いの前後関係を間違え、土坑南側を壊してしまったが（図中の破線は推定ライン）、径80cmほど円形土坑になると思われる。深さ8cmで、床面は平らである。埋土は暗黄褐色細砂に焦土・炭が少量混じるもの。

出土土器（第221図6）6は小形須恵器杯蓋で、外面には灰がかかる。色は灰色。

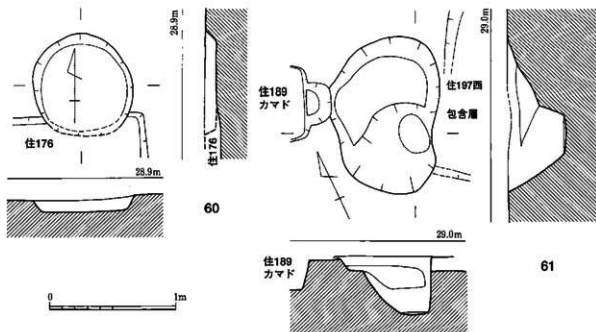
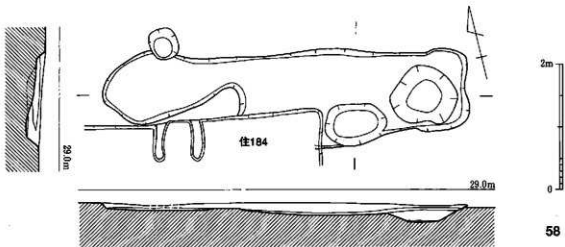
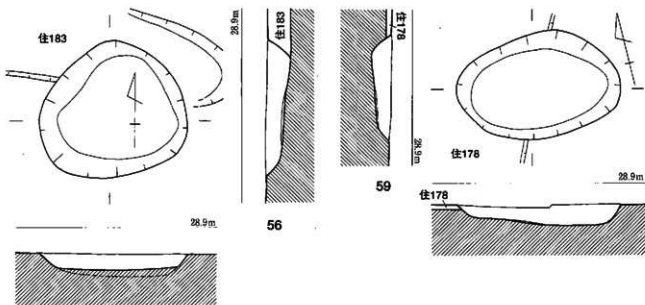
61号土坑（第220図）

61号土坑は3区東中央やや南東寄り、187号住居跡東に位置し、西壁を189号住居跡カマドに切られる。長軸122cm×短軸92cm以上の長楕円形を呈する土坑。土坑北側には南に傾斜するテラスがあり、そのテラスから一段下がった東壁沿いに狭いピット状の床面が存在する。深さは南壁で45cmを測り、東壁は直に立ち上がる。埋土は暗黄褐色細砂。出土土器で図示できるものはない。

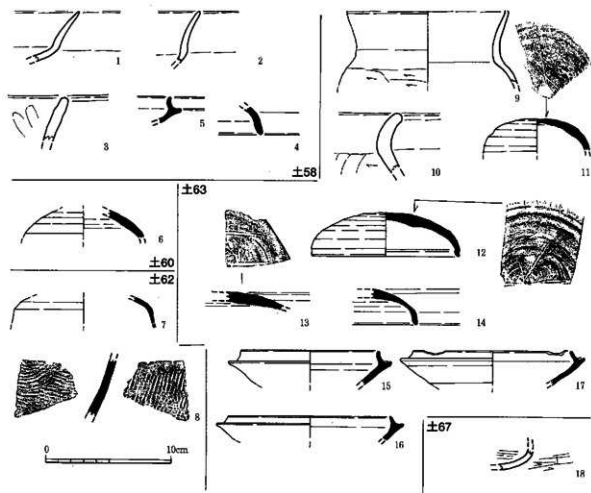
62号土坑（図版85、第222図）

62号土坑は3区中央東寄り、193号住居跡南に位置し、194号住居跡南東隅を切る。長軸90cm×短軸72cm、深さ40cmの楕円形小形土坑で、埋土は暗黄褐色細砂を呈する。床面は平らで、壁は急に立ち上がる。

出土土器（第221図7・8）7は器壁が薄い須恵器杯蓋。内面には灰がかかるため、杯蓋としては不安。色は灰色。8は須恵器甕胴部片。外面は縦の平行タキのち一部横ナデ、内面には



第220网 56・58～61号土坑実測図 (58は1/60、他は1/30)



第221図 58・60・62・63・67号土坑出土土器実測図 (1/3)

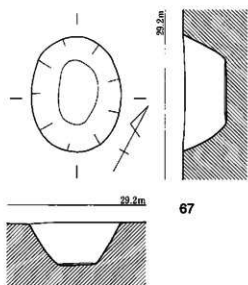
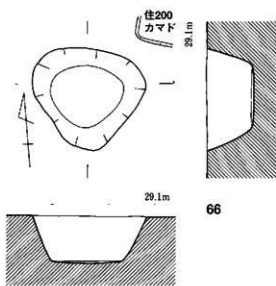
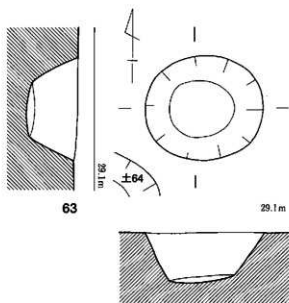
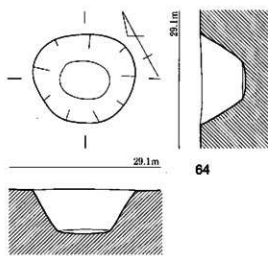
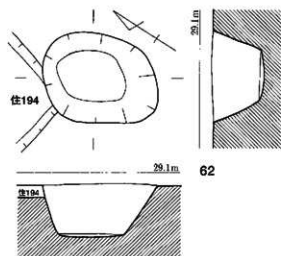
当て具痕が残る。色は灰色。

63号土坑 (第222図)

63号土坑は3区中央やや北寄り、28号溝と185号住居跡の間に位置し、南には64号土坑が存在する。長軸93cm×短軸83cm、深さ39cmの小形円形土坑で、64号土坑と同じ暗黄褐色細砂が埋土となる。床面はやや丸みを帯び、壁はやや急に立ち上がる。

出土土器 (第221図9~17) 覆土から比較的多くの土器が出土した。9・10は土師器甕口縁部。9は口縁端部を弱く内側につまみ出し、胴部外面はケズリ調整。色は淡橙褐色。10は外面に黒斑あり。色は灰黄色~橙褐色。11~14は須恵器杯蓋。11はナデ浅い凹線が巡る。天井部外面には「×」のヘラ記号あり。焼成は甘く、色は灰白色。12はナデによるやや鋭い凹線が巡り、外面には灰がかかる。口縁端部は短く強めに外につまみ出したもの。外面天井部には「×」のヘラ記号あり。色は灰色~灰白色。13の天井部外面はヘラ切りのちナデ調整で、その後2本線のヘラ記号が残るが、全形は不明。色は外暗灰色、内暗紫色。14は口縁端部を弱く外反させ、色は灰色。15~17は須恵器杯身。15の色は灰色。16・17は外面に灰がかかる。16の色は黒色。17は口縁端部を打ち欠くもので、色は黒色。

出土土器から当土坑の時期は古墳時代後期末になる。



第222図 62~64・66・67号土坑実測図 (1/30)

64号土坑（第222図）

64号土坑は3区中央やや北寄り、28号溝と185号住居跡の間に位置し、北には63号土坑が存在する。長軸81cm×短軸70cm、深さ36cmの小形円形土坑で、63号土坑と同じ暗黄褐色細砂が埋土となる。床面は平らで、壁はやや急に立ち上がる。出土土器で図示できるものはないが、63号土坑と近い時期の土坑になるか。

66号土坑（図版86、第222図）

66号土坑は3区中央やや東寄り、193号住居跡と200号住居跡の間に位置し、南には62号土坑が存在する。長軸90cm×短軸82cm。深さ37cmの三角形土坑で、埋土は暗黄褐色細砂を呈する。床面は平らで、壁は急に立ち上がる。出土土器で図示できるものはないが、須恵器・土師器杯身片が出土している。

67号土坑（第222図）

67号土坑は3区中央北、196号住居跡南に位置する。長軸91cm×短軸71cmの楕円形土坑。床面は平らで、壁はやや急に立ち上がる。埋土は暗黄灰色細砂。

出土土器（第221図18） 18は低平な土師器杯で、内外面はヘラナデ調整。外面は二次加熱あり。色は外淡橙褐色～赤褐色、内淡橙褐色。

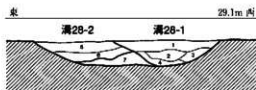
d. 溝

28号溝（図版86、第223図）

28号溝は3区中央に位置するやや東に振れた南北溝で、195号住居跡に切られ、187号住居跡・31号溝を切る。溝本体は調査区外の北まで延び、中央部で2股に分かれる（分かれた溝西側を28-1号溝、東側を28-2号溝とする）。2股に分かれる箇所て記録した上層図からは、28-1号溝が28-2号溝を切るが、両溝の埋土はほぼ同様の土であり、溝の形態からも時期差はあまりないと考えられることから、28-1、-2号溝各々の堆積の違いによる可能性がある。溝床面は南に傾斜し、28-1号溝と比べ、28-2号溝の方が床面が低い。溝の規模は現状で長さ24m以上、溝本体（北側）幅で1.4m・深さ23cm、28-1号溝で幅80cm・深さ15cm、28-2号溝で幅100～140cm・深さ30cmを測る。28-1・2号溝南端は浅くなり溝が消えた状態となるが、この付近は表土剥ぎ段階で下げすぎたため、溝を壊してしまった可能性があり、溝は更に南側に続くと思われる。出土土器から古墳時代後期後半の溝となる。

出土土器（図版129、第224図） 1・2は弥生時代須玖Ⅱ式の壘形土器である。1は底部片、2は口縁部片である。1は端部が弱く張り出す。2は口縁端部を四角く収める資料である。いずれも外面ハケメ、内面ナデを施す。これらは弥生時代中期後半に比定できる。

3～11は古墳時代～古代の土師器である。3は壘形土器である。頸部の締まりが緩く、バケツ状の全体形を有するやや新相のものであろう。口縁部は内・外面ともにナデ、胴部外面ハケメ、内面ケズリ調整。4は球形の胴部を持つ壘形土器である。口縁部が短く直立する特徴的な器形を有する。外面ハケメ、内面ケズリ調整。5は鉢形土器である。底部は丸底で器形はやや浅く、口縁部が短く外反する。6は球形の胴部と短く外反する口縁部を有する小形壘である。



溝28-1・2

〈溝28-1・2〉

1. 灰褐色細砂に暗黄褐色細砂が30%混じる
2. 灰褐色細砂に暗黄褐色細砂が10%混じる
3. 灰褐色細砂
4. 灰褐色細砂に暗黄褐色細砂が50%混じる
5. 明灰褐色細砂に黄灰色細砂が30%混じる
6. 明灰褐色細砂に黄灰色細砂が20%混じる
7. 黄灰色細砂（地山）



溝28-1南

〈溝28-1南〉

1. 灰褐色細砂に暗黄褐色細砂が40%混じる
2. 灰褐色細砂に暗黄褐色細砂が70%混じる



溝28-2南



溝32

〈溝32土層〉

1. 暗褐色粘砂、均質
2. 暗黄褐色粘砂、粘性やや低い
地山層が混じるか



溝29北



溝33

〈溝33土層〉

1. 暗褐色粘砂、均質、堅い
2. 暗灰褐色シルト、均質、粘性やや中、炭化物混じる
3. 暗褐色粘砂、やや砂質多い
4. 暗灰褐色砂質土、均質、わずかに炭化物混じる



溝29南

1. 黄白色細砂に灰白色粘質砂が50%混じる（鉄分なし）
- 2a. 黄白色細砂に灰白色粘質砂が60%混じる（鉄分多くなる）
3. 灰白色粘質砂に暗茶褐色土（鉄分がほとんど）80%混じる
- 4a. 灰白色粘質砂に暗茶褐色土（鉄分がほとんど）50%混じる
5. 暗黄灰色細砂（鉄分なし）
- 2b. 鉄分があまり多くない
- 4b. 暗茶褐色土（鉄分あまり見られない）
6. 黄褐色粘砂（地山）



溝34

1. 暗茶褐色砂質土、暗褐色粘砂を多く含む
2. 暗黄褐色砂質土、焼上・炭化物をわずかに含む
3. 暗灰褐色砂質土、炭化物をわずかに含む



第223図 28・29・32～34号溝上層実測図（1/30）

これらはいずれも内・外面ともに指ナデ仕上げを行う。7は甌の把手部分である。胴部との接着部分をハケメ調整で仕上げ、本体は指ナデ。比較的大形の甌であろうか。8は高杯の杯部片、9は脚部片である。ともに内・外面ともにナデ調整を施す。10は須恵器模倣杯である。胴部中位で屈曲して内傾しながら直線的に上方に伸び、屈曲部に不明瞭な段を形成する。底部外面はケズリ、その他は丁寧なナデ調整を行い、器壁も薄い。11は須恵器模倣杯蓋と判断した。天井部が比較的平坦で、屈曲部に段を形成して斜めに広がりながら伸びる器形。天井部にケズリ、他はナデ調整が認められ、器壁が薄い。以上の資料は、大半がおおよそ6世紀後半～7世紀初頭に位置づけられよう。

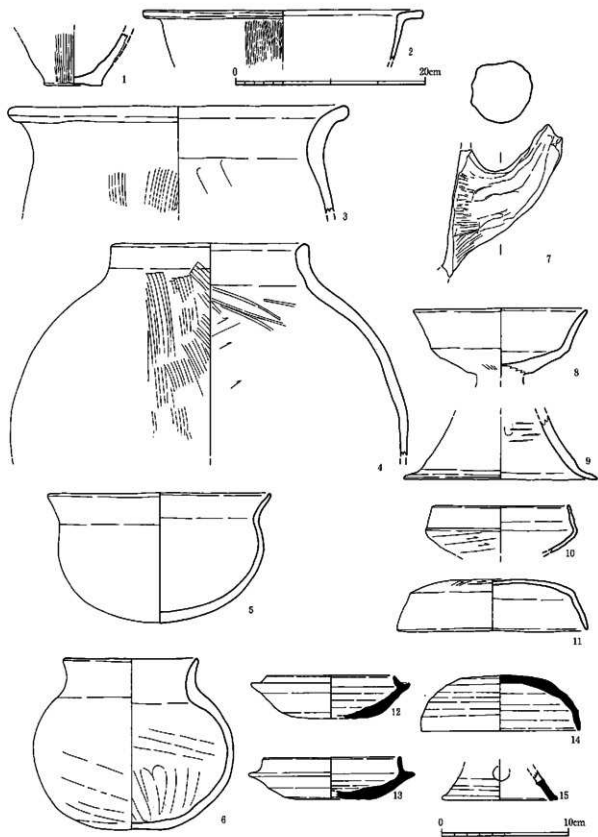
12～15は須恵器である。12・13はかえりを有する杯である。いずれも胴部が浅い。12はかえりがやや斜めに伸び、13は上方に伸びる。いずれも灰がかかって外面調整がやや不明瞭だが、底部外面はケズリ、口縁部はナデと思われる。口縁部径は12が10cm、13が10.4cmを測る。14は杯蓋である。天井部は平坦だが狭く、肩部から口唇部にかけて緩やかに湾曲する器形を持つ。天井部にケズリが認められるが他はナデ調整。口径は12.4cmを測る。これらの資料はいずれも7世紀初頭のものと考えられる。15は高杯の脚部片である。脚部に円形の透かし穴をあけるもので、脚端部は肥厚してやや外に張り出す。

29号溝 (図版87、第223図)

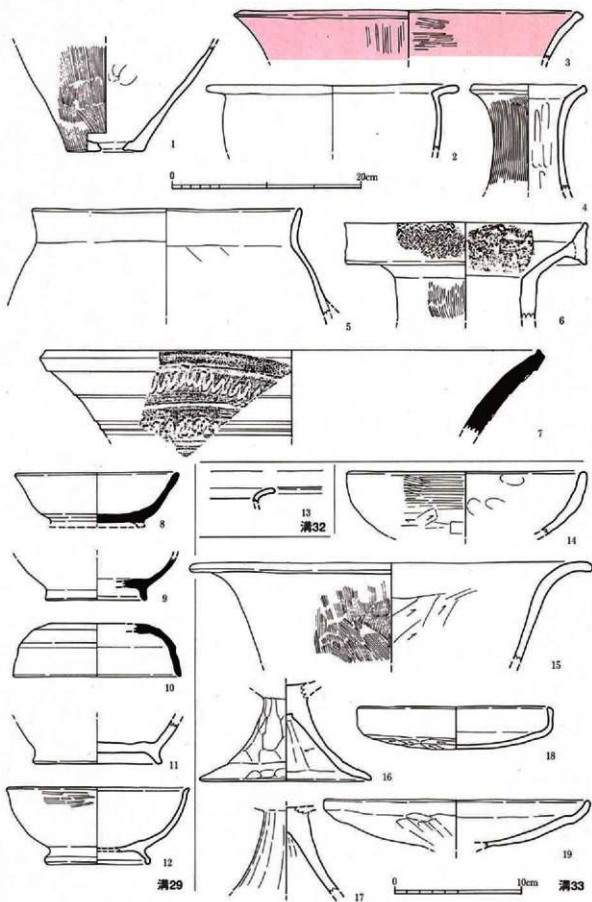
29号溝は3区東に位置するやや西に振れた南北溝で、204・205・206・208・213・214号住居跡、30号溝を切る。1・33・36号溝と溝主軸が同じであり、出土土器からいずれも同時並存していたと考えられる。1号溝が8世紀中頃、33号溝が8世紀末の埋没時期と思われ、当溝も10世紀前半の12が出土するものの主体は8世紀末の土器が多いこと、掘り直し後の1号溝埋土と当溝埋土が類似していること、また集落の形成が8世紀末に終了することから、8世紀末に埋没したものと考えたい。溝は調査区外の南北まで延び、溝の規模は現状で長さ21.5m以上、幅は2m前後である。溝床面は平らであり、壁の立ち上がりはさほど急でない。溝の壁には鉄分が多く付着することから、長期間の帯水作用の影響が想定され、また上層から溝埋没についてはさほど時間がかかっていないことが分かる。深さは北28cm、中43cm、南35cmを測るが、遺構面自体が南に傾斜しているため、溝床面レベルでは北が南より15cmほど高いことから北→南に流れた溝となる。また、溝埋土より砥石(第266図54)が出土している。

出土土器(図版129、第225図1～12) 1～4は弥生土器である。1は甌の胴～底部片で、底部中央に焼成後の穿孔が施されており、甌として使用したものか。外面ハケ、内面指ナデ調整。2は甌の口縁部片。屈曲は直角で、内側に明瞭な稜を有し、口縁端部は丸く収めるもの。やや小形で口径は26.6cmを測る。3は素口縁壺の口縁部片。外面は摩耗のためやや不明瞭だが、3～4本を一単位とする縦方向の細いへら磨きで暗文を施すか。内面は横方向のへら磨き。内・外面に丹塗りを施す。これらはいずれも須玖Ⅱ式土器に比定される。4は器台である。くびれ部から上方への開き具合が急で、時期的にやや新しいものの可能性もある。

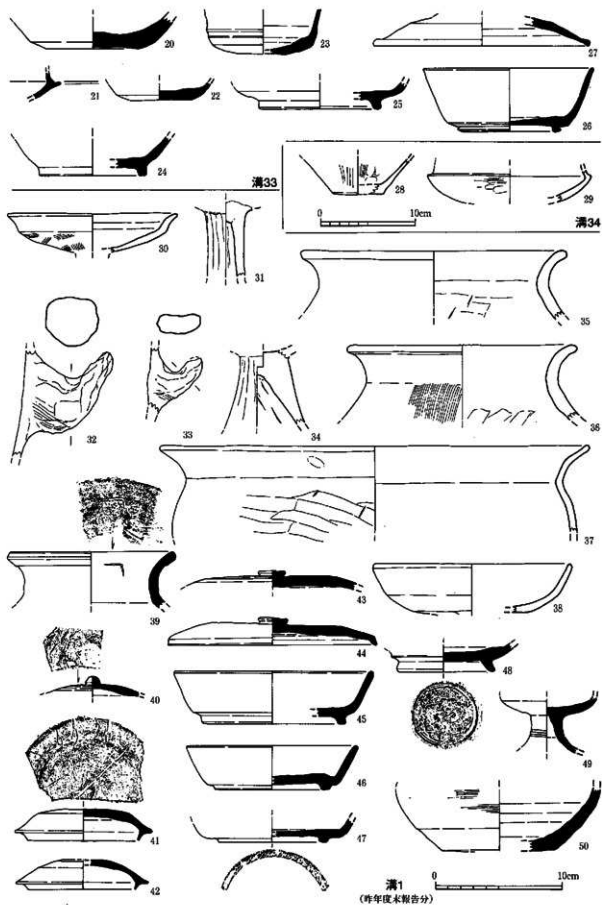
6は古墳時代の土師器で、二重口縁壺の胴～口縁部片である。口縁部は肥厚させて外面に面を形成し、そこに細かく平行する波状文を描く。内面の上方にも同様の波状文が認められる。古墳時代前期のもの。



第224图 28号溝出土土器実測図 (1・2は1/4、他は1/3)



第225图 29·32·33 (1)号溝出土土器实测图 (1~4·13は1/4、他は1/3)



第226図 1・33(2)・34号溝出土土器実測図(28・30・31は1/4、他は1/3)

7～10は須恵器である。7は人形甕の口縁部片である。口縁端部をやや肥厚させ、内側をわずかに上方に引き伸ばす。外側には沈線で区切った幅2cmほどの文様帯が2つ認められ、1条の波状文が描かれる。径は40cmと非常に大形品である。8・9は高台付の杯である。8は全形が分かる資料、9は底部と口縁部が欠ける。8の高台は断面平行四辺形状を呈し、9は細長く伸びる。9がやや古相を呈する。これらはいずれも7世紀後半～8世紀前半段階の資料か。10は6世紀後半の須恵器杯蓋である。

11は古代の土師器で、須恵器模倣杯であろうか。高台は斜めに細く伸び、底部は平坦である。9に近い器形を有するものか。

12は古代の黒色土器（碗）である。内・外面ともにヘラ状工具による磨きを施す。器形は半円形で、斜めに細く伸びる高台が付く。10世紀前半代の資料であろう。

30号溝

30号溝は3区東端北寄りに位置する北東―南西溝で、北側を29号溝に切られる。204号住居跡と接し、切り合い関係があると予想されるが、現状では不明。溝規模は現状で長さ4.0m以上、幅90cm前後、深さ15cmで、床面は北東側に若干下降する。29号溝東では当溝を検出できなかったが、埋土から29号溝との関係は薄いか。埋土は暗黄灰色細砂。

出土土器で図示できるものはないが、須恵器甕胴部、土師器杯身、弥生土器が出土している。

31号溝

31号溝は3区中央や北寄りに位置し、28号溝に切られる北東―南西溝。溝南端を28号溝に切られるが、28号溝西側では当溝を検出できなかった。現状で長さ6.6m以上、幅80～130cmと北側が広くなり、深さは南側で10cmと浅い溝である。溝床面は南西に傾斜する。28号溝とは埋土が異なるため、28号溝との関係は薄いか。埋土は暗黄褐色細砂。

出土土器で図示できるものはないが、土師器甕片が出土している。

32号溝（第223図）

3区南東部で検出した南北方向に伸びる溝状遺構である。最大幅60cmほどを測り、長さは調査区内で完結して6.5mほどを測るが、深さは最も深い部分で15cm程度と極めて浅く、本来は南北にさらに長く伸びていたものが削平されたものであろう。埋土は大きく2層に分けられ、上層が暗褐色粘砂質土、下層が地山に近い暗黄褐色粘砂質土である。弥生土器が出土したが、小片で混入の可能性が高く、時期は明確にできない。

出土土器（第225図13）13は須玖Ⅱ式土器の甕形土器の口縁部片である。屈曲してやや湾曲しながら開く口縁部のみが残存する。口縁端部は丸く収める。

33号溝（図版87、第223図）

3区東端部で検出された南北方向に長く伸びる溝である。北端・東端とも調査区外に続いており長さは不明。幅は最大で80cmほどを測り、深さは20～30cm程度が残存していた。213号住居跡と切り合い関係を持ち、33号溝が新しい。また、本溝は、第1面で検出した際に、調査区

南部で西に湾曲して南端部を214号住居跡により破壊されると把握し、そのように調査した。しかし、第2面において、湾曲部より南側に第1面で調査した本溝の続き部分と思われる直線的に伸びる溝状遺構が検出されたため、これを精査したところ、第1面の33号溝の下層部分と土層が一致した。従って、第1面で調査した33号溝のうち西に湾曲する部分より南側は調査時の誤認であり、本来は第2面で検出したように南に直線的に伸びていたものと考えられる。したがって、214号住居跡とは切り合い関係を持たない可能性が高い。こう理解した場合、第2面検出の232号住居跡と切り合い関係を持ち、本溝が新しい。出土土器と切り合い関係から、7世紀末～8世紀初頭に位置づけられよう。

出土土器（図版129、第225・226図14～30）14～19は古墳時代～古代の土師器である。14は碗である。半球形の器形の口縁部のみ残る。外面上位は横方向のハケメ調整、下位は板ナデ調整が認められる。内面には指頭圧痕が残る指ナデ仕上げ。15はバケツ状の器形を持つ壘形土器である。如意状に大きく外反する口縁部のみが残る。外面ハケメ、内面ケズリ調整。16・17は高杯の脚部である。いずれも「八」字状に開いて端部が小さく屈曲するものであろう。調整は16の外面は細かい単位の板ナデ調整、内面はナデ調整を施す。17も外面は板ナデ調整だが上下方向に長い単位、内面はナデ。18・19は浅い杯である。17は平坦な底部から屈曲して短く直立する口縁部へと至る器形を持ち、18は丸底の底部から緩やかに斜めに伸び、口縁部が短く湾曲する器形を持つ。いずれも口縁部と内面全体がナデ、外面底部は板ナデ調整。

20～27は須恵器である。20は小形の短頸壺の底部であらうか。厚みがある不整形な底部片である。21はかえりを有する杯身の口縁部片である。かえり部付近のみが残り、全体形は不明である。22は高台のない杯の底部片である。底部調整はヘラ切りのままで、底部の周囲に一部回転ヘラケズリ痕が認められ、口縁部にかけてはナデ仕上げである。23も同じく杯身である。11径が非常に小さい。底部は平坦で屈曲部が直角に近く口縁部は直立する。底部付近に回転ヘラケズリ痕が認められるがその上から軽くナデている。24～26は高台付の杯身である。24・25はいずれも底部片で、断面平行四辺形の高台を屈曲部付近に付ける。調整は双方とも丁寧なナデ仕上げである。26の高台の断面形はやや外側への張り出しが認められる。全体形が判明する資料で、外傾しながら上方へ伸びてわずかに外反する口縁部を有する。口縁部径は13.6cmを測る。27は杯蓋の口縁部片である。ボタン型のつまみがつくものであろう。端部は小さく折り曲げて丸く肥厚させる。径は17cmとやや大形である。大半が7世紀末～8世紀初頭に位置づけられよう。

34号溝（第223図）

3区南東部にあり、南北方向に直線的に伸びる短い溝状遺構である。調査区内で完結し、延長は3.5mほどを測る。南に行くほどに太く、最大幅は1.4mほどを測るが、深さは浅く最深部で20cmほどしかない。南部の幅広の部分では、底面にやや凹凸が認められる。出土土器には弥生時代～古代の遺物が出土し、弥生土器と古代の土師器を1点ずつ図示した。土師器の時期は7世紀初頭に位置づけられる。また、溝埋土から石皿（第267図64）が出土している。

出土土器（第226図28・29）28は弥生時代須玖Ⅱ式土器の壺の底部片である。薄い平底で、外面ハケメ、内面ナデ調整を施し、内面の一部にハケメ痕が残る。

29は須恵器模倣杯である。丸底から緩やかに立ち上がり、最大径部分で屈曲して段を形成する部分までが残る。胎土は精良で丁寧な調整を施し、外面板ナデ後ヘラミガキ、内面はナデ仕上げ。色調は褐～黒褐色を呈する。

1号溝出土土器（第226図30～50）

これらはいずれも1区1号溝出土土器で、昨年度未報告分である。実測図のみ掲載する。

(2) 3区第1面ビット・遺構面

ビット出土土器（第227図1）

1は須恵器杯身口縁部。受部には灰がかかる。色は黒灰色。

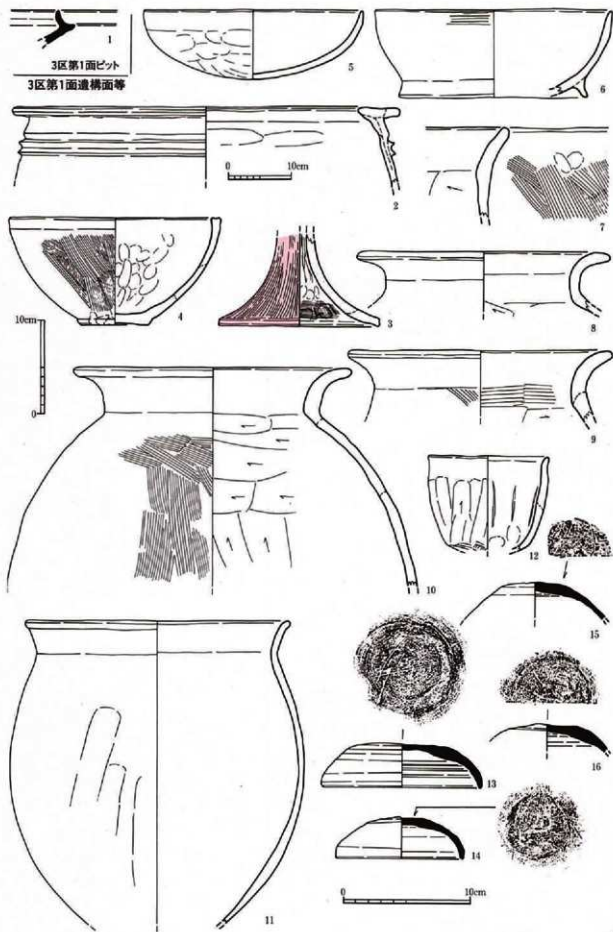
遺構面等出土土器（図版131、第227図2～16・第228図）

2は弥生中期鑄先口縁甕の口縁部。口縁上端部は水平で、外面頸部下にはやや大きめのM字突帯を貼り付ける。外面は二次加熱により器表が荒れ、内面頸部付近は工具ナデ後ナデ調整。色は外橙褐色～茶褐色、内灰褐色。3は丹塗高坏脚部で、内面上部には絞り痕あり。生地は橙褐色。4は弥生中期直口鉢。口縁端部をナデで面取りし、内面には指押さえ痕が良く残る。外面には黒斑あり。色は灰黄褐色。

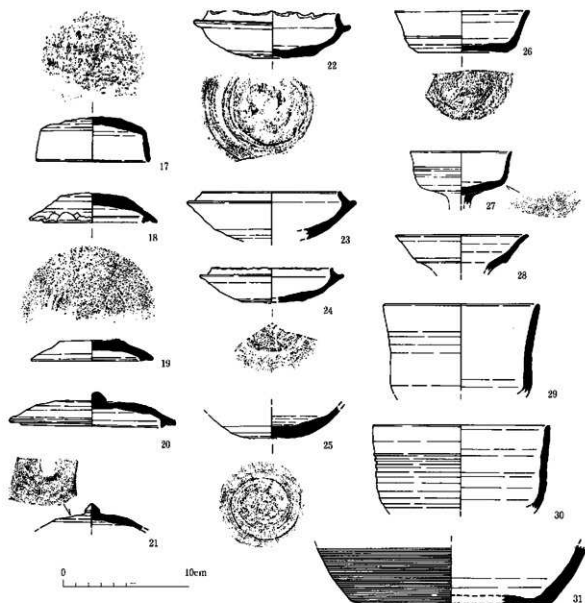
5は土師器杯で、外面下部は手持ちヘラケズリを施す。色は橙色～淡橙色。6は杯部が椀状の土師器高台付杯。口縁端部はわずかに外反させ、口縁外面にはハケ工具を施したのか。色は橙色。7～11は土師器甕。7・8は178号住居跡付近出土。7は弱く外傾する口縁部で、色は黄橙褐色。8は強く外湾する口縁部で、胎土には角閃石を多く含み、色は灰黄橙色。9の内面頸部下は横ハケ後右方向のケズリを施す。外面にはスス付着。色は黄橙褐色。10は内面頸部までヘラケズリを施す。外面には二次加熱痕あり、色は外橙褐色、内黄茶褐色。11は弱く外傾する口縁部で、口縁端部を玉縁状に肥厚させる。胴部外面は工具ナデ調整か。胎土は精良で、色は橙色。12は口縁端部を弱く外反させる土師器鉢で、外面口縁部以下はケズリ、底部外面はハケのちケズリ、内面は工具ナデ後ナデ調整。色は淡黄橙色。

13～21は須恵器杯蓋。13～16・19・21は外面に灰をかぶり、13・14は天井部外面に「×」のヘラ記号を施す。13の色は灰色～黒色。14は口縁端部をわずかに外反させる。色は淡黒色～灰色。15の天井部外面はヘラ切り後のナデ調整、後「Y」字状のヘラ記号を施す。色は外暗灰色～茶灰色、内茶灰色。16の天井部外面頂部はヘラ切りのままで、「×」のヘラ記号を施したか。色は外青灰色～黒色、内青灰色。17は口縁部をわずかに外反させるもので、天井部外面には「キ」状のヘラ記号あり。胎土には細粒を多く含み、色は黒色。18～21はかえりの付く杯蓋。18はかえり端部を打ち欠く完形品で、天井部外面はヘラ切り後ナデ調整。焼成はやや甘く、色は灰色。19は低平な小形杯蓋で、器壁は厚い完形品。天井部外面には「U」に縦1本線を交わらせたヘラ記号を施す。色は灰白色。20は丸く鈍いつまみが付く杯蓋で、胎土には細粒をやや含み、色は灰色。21は小さな宝珠つまみが付き、天井部外面には「V」状のヘラ記号を施す。色は灰色～黒色。

22～26は須恵器杯身。22・24は口縁端部を打ち欠く。22の底部外面中心部はヘラ切り後ナデ



第227図 3区第1面ビット・遺構面等 (1) 出土土器実測図 (2は1/6、3・4は1/4、他は1/3)



第228図 3区第1面遺構面等出土土器実測図(2)(1/3)

調整。底部外面に「U」に縦1本線を交わらせたヘラ記号を施す。色は灰色。23の色は外暗灰色、内灰褐色。24は外面底部にヘラ記号を施すが、全形は不明。色は暗灰色。25は口縁端部をわずかに外反させたもの。外面底部に「キ」状のヘラ記号を施す。色は青灰色。26は平底杯で、底部外面はヘラ切り後ナデ調整、その後ヘラ記号を施すが全形は不明。外面下部には工具による2条の凹線を施す。外面には灰をかぶり、色は青灰色～暗灰色。

27は口縁端部を外反させる須恵器高杯杯部で、体部中央には2条のナデ凹線を施す。底部外面には「N」字状のヘラ記号を施す。外面には灰がかかり、色は黒灰色～黒色。

28は須恵器甕口縁部。外面口縁屈曲部にはナデ凹線を施し、内面全体には灰がかかる。色は灰黒色～黒色。29・30は椀状の須恵器杯で、いずれも体部外面はナデによる凹凸が顕著である。29は口縁部がやや外傾するもの、色は灰色。30は外面に薄く灰がかかり、色は灰色。

31は須恵器壺底部。外面にはカキ目を施し、色は灰色。

(3) 第2面の遺構と出土土器

3区第2面の遺構は第1面と比べ格段に少なく、検出した遺構は竪穴住居跡8棟、竪穴状遺構1基、土坑10基、溝2条のみである。第1面と第2面の遺構面の高低差が少なく、遺構全体図では第1面の遺構が第2面まで残っており、複雑な図となっている。3区第1面と同様、3区南西側には遺構が少ないことから、集落の南端にあたりと考えられる。この状況は4区第1・2面においても北側に遺構が集中することから、調査区北側が集落の中心であると推測される。3区第1面からの遺構番号が連続しないが、4区第1面を当面より先に調査したことによるもの。なお、昨年度報告の1号溝に切られる36号溝は本来なら第1面で検出すべき溝であるが、第2面で調査を行っている。第1面と同様北東→南西に傾斜する地形であり、調査区南は美津留川に向かって緩やかに傾斜する地形であると推測できる。



3区第2面全景(南から)



226号竪穴住居跡調査状況(南から)

a. 竪穴住居跡

226号竪穴住居跡(図版88、第229図)

226号竪穴住居跡は3区東中央やや北寄りに位置し、227号住居跡を切る。北壁中央に袖が突出するタイプのカマドを付設し、南北3.6m×東西4.8m、深さ13cmの東西に長い長方形住居跡となる。住居床面ではビット16基を確認し、P4～7が位置・深さから主柱穴となると考えられる。主柱穴は住居四隅に近い位置にあるもの。切り合う227号住居跡と床面の高さが余り変わらないため、このビット群の中には227号住居跡に属するものがある可能性がある。カマドから40cm南のトーンで示したものは227号住居跡カマド焼面。住居床下では掘り込み・ビットを確認した。埋土は灰褐色粘質砂。

カマド(図版89) 北壁中央に位置し、右袖は43cm、左袖は58cm、壁から直線的に突出する袖を持つカマド。右袖先端部上に乗った状態で土師器甕片(8)を検出したため、右袖先端部は壊された後に甕を置いており、またカマド東西方向土層を見ると、両袖とも袖上部が壊されていることが分かった。このことからカマド廃絶時には両袖上部を意図的に壊し、甕もその際に置いたものと考えられる。壁から18cmの場所に26×15cm、深さ4cmの支脚掘り込みビットを確

認し(南北に長い形態は支脚を抜く行為によるものか)、その前面に焼面を確認した。この支脚掘り込みピット部分で燃焼部幅は48cm、奥壁で幅44cmを測る。3・6～10・12はカマド内出土。出土土器(図版130、第230図1～13) 1・2は土師器模倣杯。1はほぼ完形の蓋で、口縁端部はわずかに内側につまみ出す。口縁部内外面はミガキ、天井部外面は手持ちヘラケズリのち、工具により「V」の字を繋げたような形態のミガキを施し、このミガキはヘラ記号になる可能性もある。天井部外面には黒斑あり。色は橙褐色～黒色。2は短い立ち上がりの杯身で、内外面には細かいミガキを施す。色は暗褐色。3は土師器高杯杯部で、杯部下部はヘラケズリを施す。色は橙色～黄褐色。4は土師器高杯脚部。成形や調整は須恵器であるが焼成は土師器そのものであるため、須恵器の焼きが悪いものか、須恵器を似せて造ったもの。脚柱部外面はカキ目、内面はナデ紋りで調整し、嘴状の底部端部は弱く外反させる。色は黄褐色。5は模倣杯身受部片。色は橙褐色。P3出土。6～9は土師器甕。6は口縁部が弱く外傾する。色は灰黄褐色。7は小形甕で、外面には二次加熱痕あり。色は茶褐色～黒色。8は胴が張らない長胴甕で、外面には黒斑、二次加熱、ススが認められる。色は灰黄褐色～こげ茶色。9は口縁部がわずかに外傾し、外面にはスス付着。色は灰黄褐色。

10～12は須恵器杯蓋。10は口縁部と天井部との境にナデによる弱い凹線を巡らせるもので、口縁内端部は若干窪む。色は暗灰色。11は器壁が厚いもので、焼成は良くなく、瓦質を呈する。色は明灰色。12の内面は不定方向のナデで調整。色は青灰色～黒色。

13は弥生中期高坏脚部で、杯部内外面、脚部外面はミガキ、脚部内面にはナデ紋り痕が認められる。坏部内面及ぶ外面にはスス付着。色は淡橙色～橙色。

出土土器から古墳時代後期末の住居跡となる。

227号竪穴住居跡(図版88、第229図)

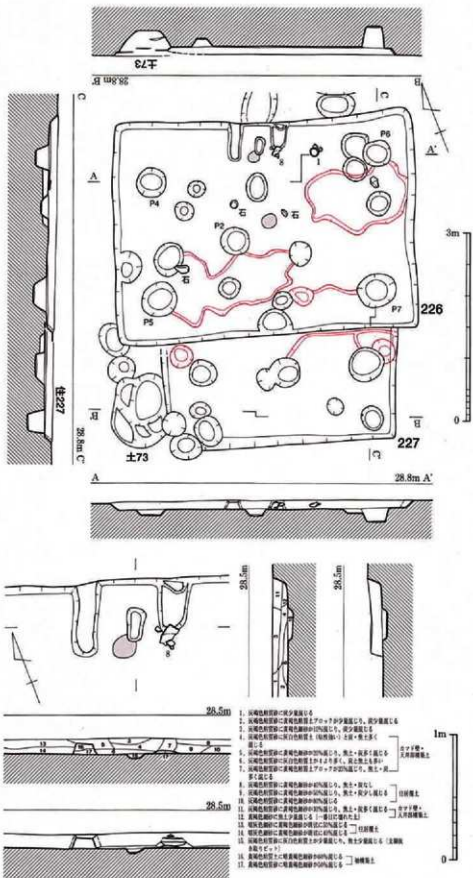
227号竪穴住居跡は3区東中央北寄りに位置し、226号住居跡に切られ、73号土坑を切る。住居北側の大部分は226号住居跡に壊されているが、226号住居跡中央のトーンで示したものが当住居跡カマド焼面であり、おおよその規模は推測できる。南北4.0m程度×東西3.7m、深さ13cmの南北にやや長い住居跡となる。床面ではピット6基検出したが、位置・深さからP4は主柱穴になると考えられる。他の主柱穴は226号住居跡床面と当住居跡床面の高さがほぼ同じであるため、226号住居跡床面で検出したピット群の中に、北側の主柱穴が存在する可能性もあるが、主柱穴と確定できるピットは確認できなかった。住居床下で掘り込み・ピットを確認した。埋土は灰褐色粘質砂。

出土土器(第230図14～16) 14は土師器模倣杯身で、口縁端部はわずかに外反する。底部外面はヘラケズリを施し、外面にはスス付着。色は灰黄褐色。15は土師器杯で、底部外面は手持ちヘラケズリのち粗いミガキを行う。外面には二次加熱痕あり。色は灰黄褐色～暗褐色。16は土師器高杯杯部で、口縁端部はわずかに内上方につまみ出す。色は灰褐色。

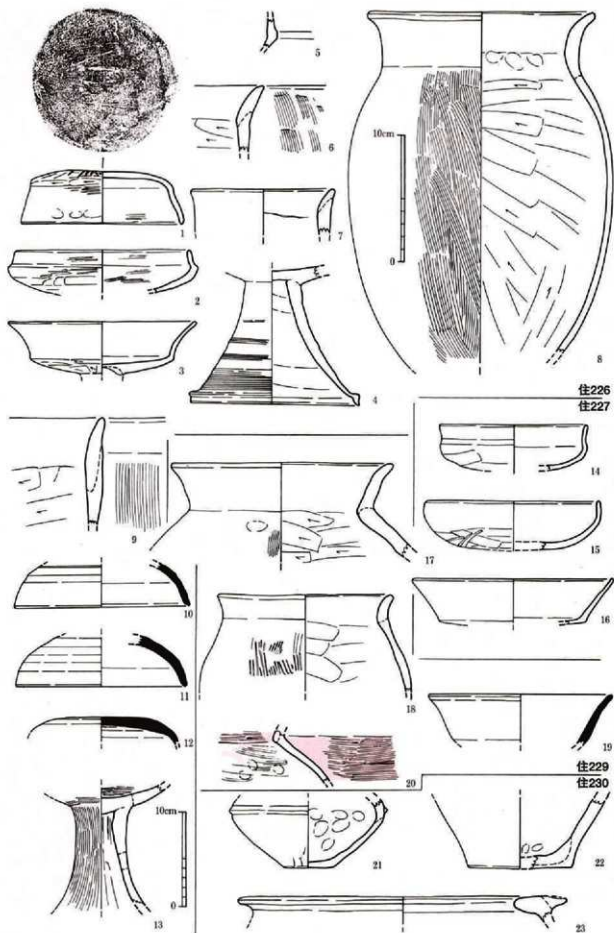
出土土器から古墳時代後期末の住居跡となる。

228号竪穴住居跡(第231図)

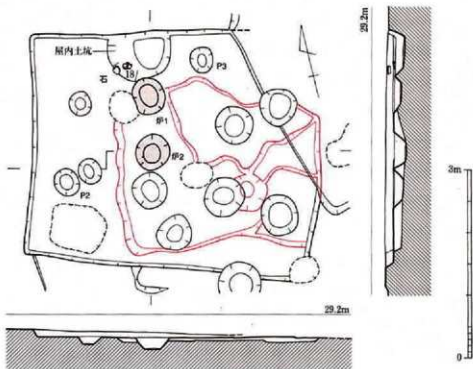
3区のほぼ中央に位置し、37号溝と切り合い関係にあってこれより新しい。また、74号土坑



第229図 226・227号竪穴住居跡、226号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)



第230图 226・227・229・230号竪穴住居跡出土土器実測图 (13・20~23は1/4、他は1/3)



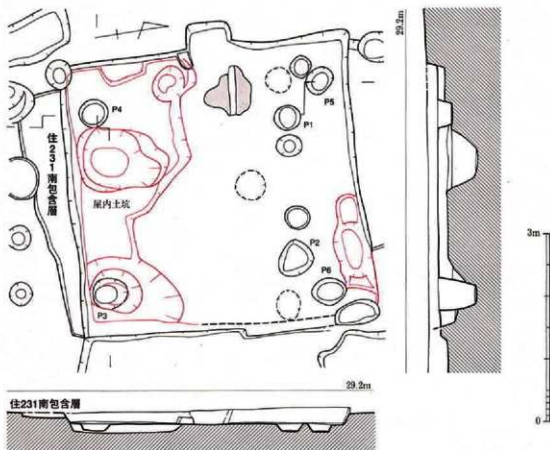
第232図 229号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ドを付設しており、本遺構を住居跡と判断する決め手となった。住居跡の残存状況は極めて悪く、残存部でも数cm程度しか残っていない。床面からはピットを1基検出した。深さはおおよそ20cm弱を測り、本住居跡の北西部の主柱穴となろう。出土土器に図示できるものはなく、切り合い関係やカマドの形態から6世紀代に位置づけたい。

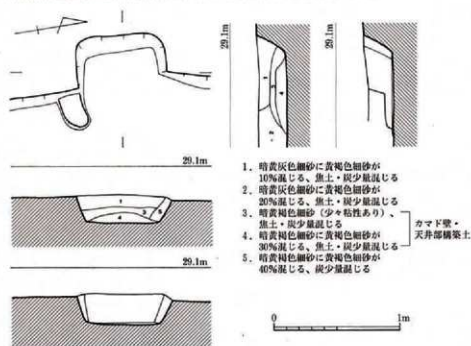
カマド(図版89) 西壁に内接型のカマドが付設されていた。西壁自体が74号土坑によって破壊されており、また住居跡の半分ほどは第1面調査時に遺構によって破壊されていたため、カマドの奥壁と左袖の大半が破壊されていた。唯一残りのよかった右袖の形状等から、本カマドはすべて竪穴掘削後に造り付けられたもので、平面形は「ハ」字形を呈すものと考えられ、燃焼部の規模は奥行50cm、最大幅55cm程度を測るものと考えられる。燃焼部の中央に径15cmほどの支脚を立てるためのピットが検出され、その前面に焼面が広がっていた。焼面の中央部には高熱により形成された硬化面が形成されていた。燃焼部の埋土は3層に分層でき、最上層はカマド天井の崩落土、中層がカマド床直上に堆積した灰層と考えられる。したがって最下層はカマド使用時にすでに堆積していた可能性が高い。

229号竪穴住居跡 (第232図)

3区中央北端やや東寄りに位置する。当初は第1面203号住居跡の掘り残しと考えたが、平面プランの相違や床面上でピットを検出したことから下層住居であると判断した。住居北東部は第1面202号住居跡により壊されるが、床下掘り込みが確認できたため、おおよその規模が分かった。南北3.8m×東西4.6m、深さ13cmの東西に長い長方形住居跡で、埋土は暗灰黄色細砂。床面ではピット12基検出したが、いずれも主柱穴とするには深さ・位置ともに決め手はなく、



住231南包含層



第233図 231号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

確定できない。住居北壁中央には80cm × 100cm、深さ29cmの屋内土坑がある。住居中央で掘り込みを確認した。

出土土器・切り合いから古墳時代後期の住居跡の可能性が高く、カマドは東壁に付設されて

いたものか。

出土土器（図版130、第230図17～20） 17・18は土師器甕。いずれも外面は二次加熱・ススが認められる。17は口縁端部を外反させるもので、色は茶色～茶褐色。18は短く外反する口縁部で、胴部内面にはこげが付着。色は外褐色、内暗褐色～黒色。

19は須恵器杯口縁部。口縁部内外面にはススが付着。色は淡橙色～灰色。

20は弥生中期広口壺頸部で、外面、口縁部内面は横ミガキのち丹塗り、胴部内面はハケのちなデで調整。生地は橙色。

230号竪穴住居跡（図版90、第231図）

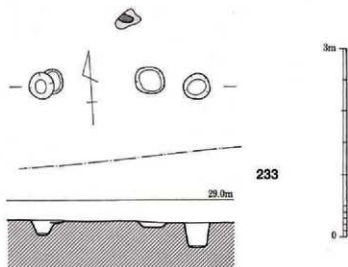
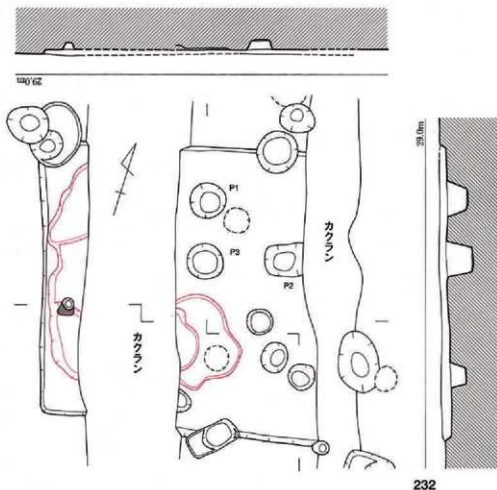
3区のほぼ中央部に位置する。南側に隣接して228号住居跡・74号土坑・37号溝があるが、本住居跡の南側は削平によりほとんど失われていて、これらの遺構との切り合い関係は調査では確認できなかった。平面形は東西にやや長い長方形を呈し、南北長が4.4m、東西幅が5.4mほどを測る。床面からは多数のピットが検出されたが、確実に本住居跡に伴うと判断できるものはない。出土土器はすべて弥生土器であり、弥生時代中期の住居跡である可能性もあるが、いずれも破片資料であり断定はできない。

出土土器（第230図21～23） 21は小形の壺形土器の胴部片である。鑄先口縁あるいは素口縁を持つものであろう。胴部最大頸部に断面三角形の突帯を付す。外面ナデ、内面頂頭圧痕が残るナデを施す。22は壺形土器の底部片である。平底で薄い。23は径35cmとさほど大形ではないが、成人用甕棺の丸みを帯びた系列に属すると思われる甕の口縁部片である。口縁部は鋸先状を呈する。

231号竪穴住居跡（図版90、第233図）

3区中央やや東寄りに位置し、75・77・79～81号土坑が当住居跡を囲むように位置する。西壁中央に壁から燃焼部が突出するカマドを付設し、東西4.6m×南北4.6m、深さ25cmの正方形住居跡となる。東壁は上層住居により壊され、推定ラインを破線で示す。床面ではピット9基検出し、P3～6が支柱穴になると考えられるが、北側のP5・6は深さが浅いため自信がない。住居南壁沿いには床下掘り込み調査時に100×144cm、深さ48cm、埋土が暗黄褐色細砂の屋内土坑を確認した。この土坑は下層遺構の可能性も考えられるが、南壁沿いに位置することや埋土などから当住居跡屋内土坑とした。カマドから20cmほど東で、床面直上でかなり焼けた硬化面を検出したため（トーンで示す）、別の住居跡が存在する可能性を考え精査したが伴う遺構は確認できず、また床面レベルが同じであるため、当住居跡に伴うと判断した。カマド内に焼面はなく、カマド右壁際まで焦土・炭が薄く広がることから、袖を造り直した可能性が考えられる。住居北・南壁沿いで掘り込みを確認した。埋土は暗黄灰色細砂。

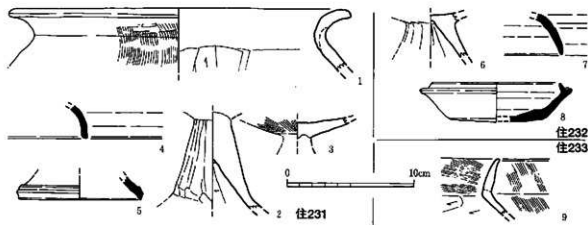
カマド（図版90） 西壁中央に位置するカマドで、先述したように焦土・炭が右壁際まで広がっていたために、袖は壊されたものと考え、右袖は全て掘り飛ばしてしまった。しかし、左袖が壁から32cm、内向きに突出する形態で検出し、右袖も残っていたことが予想される。このことからこの焦土・炭の広がりとは当カマド構築以前のもので、カマド袖の造り直しの可能性が考えられる。カマド内には焼面はなく、カマド埋上に焦土・炭が混じる割合も低い。燃焼部は断



第234図 232・233号竪穴住居跡実測図 (1/60)

面図の箇所まで60cm、左袖先端部から奥壁までの奥行きが70cmを測る。燃焼部壁の高さは24cm残るが、煙道部は確認できなかった。

出土土器 (第235図1～5) 1は非常に強く外湾する土師器甕口縁部。口縁部内外面には黒斑あり。色は灰黄褐色～灰色。2は土師器高杯脚部。色は淡褐色。3は高杯杯部で、外面には二



第235図 231～233号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

次加熱痕あり。色は橙褐色～橙色。

4は口縁外端部を外につまみ出す須恵器杯蓋口縁部。外面は灰がかかる。色は灰色。5は須恵器高杯脚部。外面に灰がかかる。色は外暗灰色、内明灰色。

出土土器から当住居跡は古墳時代後期後半になる。

232号竪穴住居跡(図版91、第234図)

3区東側の中央部で検出した。上層の第1面で検出した29・33号溝に中央部と東壁を破壊されており、残存状況は良くない。東壁は完全に失われているがおおよその規模は判明し、南北4.6m、東西4.6～4.8mのほぼ正方形状を呈する。床面からは多数のピットと不整形の床下掘り込みが検出されたが、いずれも本住居跡に伴うものかどうかの確証はない。削平が著しく、壁は10cm程度しか残存していなかった。出土土器から7世紀初頭に位置づけられよう。

出土土器(第235図6～8) 6は上師器の高杯の杯底部から脚上部片。脚部は杯部直下から広く開き、短脚のものであろう。

7・8は須恵器である。7は天井部がやや平たく、肩部で丸く湾曲する杯蓋の口縁部片である。8は口縁部にかえりを有する杯身である。底部の一部以外は全形が判明し、やや丸みを帯びた平底の底部から屈曲して斜め上方に伸びて口縁部に至る。

233号竪穴住居跡(第234図)

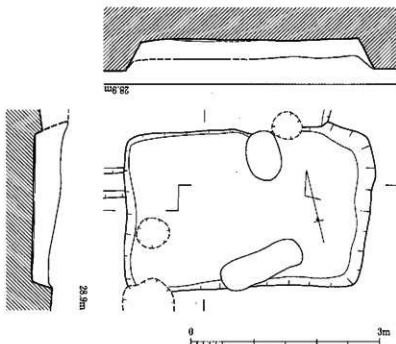
3区東寄りの南側で検出した。当初、カマドに付属すると考えられる焼面のみが検出されたため、周囲を精査したが住居跡と考えられる遺構は明確には把握できなかった。しかし、本調査区における住居跡のカマドの多くが北あるいは西向きであることから、住居跡本体がおそらくこれと反対方向の南あるいは東側に存在していたものと考えて、付近から検出したピット群を検討し、主柱穴として位置的にも好都合であり、埋土や規模などが類似しているものを抽出した結果、南側に住居跡の本体が広がっていたと想定するに至った。ただし、図示できたのはあくまで先述の焼面とピットのみであり、これらが本当に同一の住居跡を構成していたものかどうかは明らかではない。

出土土器（第235図）9は球形の甕形土器の口縁部片で、屈曲して比較的直線的に伸びる形態を持つ。6世紀代のものであろう。

b. 竪穴遺構

1号竪穴遺構（図版91、第236図）

3区中央部南端で検出した遺構である。検出当初は竪穴住居と考えていたが、平面形が東西に長い不整形な長方形であること、床面に柱穴やカマドあるいはか跡などが認められないことなどから、竪穴



第236図 1号竪穴遺構実測図（1/60）

住居と考えるにはやや難が多いと考え、性格不明の竪穴遺構として報告することとした。上述のように平面形は東西に長い長方形を呈し、規模は東西3.8m、南北2.4mほどを測る。壁の残存深さは40～50cmと比較的深い。床面はほぼフラットで、ビット等は検出されなかった。埋土は砂質分が多く、弥生時代の遺構と共通する。土器はほとんど出土せず、時期は不明。

c. 土坑

72号土坑（第237図）

72号土坑は3区西端中央、226号住居跡西に位置する。長軸145cm×短軸130cmの方形土坑で、形態から貯蔵穴となるものか。床面は平らで、南西隅には検出面からの深さが35cmを測るビットがあり、そこから一段上の床面の深さは12cmを測る。壁の立ち上がりはあまり急でない。土坑埋土は暗黄灰色細砂。

出土土器（第238図1・2）1は須恵器杯蓋口縁部。色は灰色。2は須恵器杯口縁部。色は暗灰色。出土土器から古墳時代後期後半の土坑になる。

73号土坑（第237図）

73号土坑は3区西端中央、226号住居跡南西に位置し、東壁を227号住居跡に切られる。長軸119cm×短軸90cmの楕円形を呈する土坑で、東壁の一部はカクラン（1面日ビット）により壊される。土坑南・西側には4つのテラスがあり、床面は平らで壁の立ち上がりはやや急である。埋土は暗黄褐色細砂。出土土器で図示できるものはないが、覆土から須恵器甕・杯、土師器片が出土している。

74号土坑（図版91、第237図）

3区中央部で検出した土坑である。228号住居跡、37号溝と直接的な切り合い関係にあり、これらに後出する。また、直接的な切り合い関係にはないが、230号住居跡に後出し、第1面188号住居跡に先行すると考えられる。平面形は長楕円形を呈し、深さは最も残りの良い部分でも10cm程度と極めて浅い。底面はほぼ平坦である。土層は2層に分層でき、上層が暗茶褐色粘砂質土、下層が暗褐色粘砂質土であった。

出土土器や切り合い関係から、6世紀代以降に位置づけおきたい。

出土土器（第238図3） 3は土師器で、甕形土器の口縁部片であろうか。小片で全形は不明である。



74号土坑土層（南から）

75号土坑（図版92、第237図）

75号土坑は3区中央、231号住居跡北、77号土坑東に位置する。南壁はカクランにより壊されているため、現状では長軸131cm以上×短軸80cm、深さ43cmの長楕円形土坑となる。床面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。出土土器で図示できるものはないが、土師器甕片が出土している。

76号土坑（第239図）

76号土坑は3区西中央、226号住居跡東に位置する。長軸138cm×短軸78cm、深さ17cmを測り、西側が狭くなる長楕円形土坑となる。床面は平らで、南北壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は暗黄褐色細砂。

出土土器（第238図4） 4は須恵器壺胴部。内外面に灰がかかる。色は灰色～白灰色。

77号土坑（第239図）

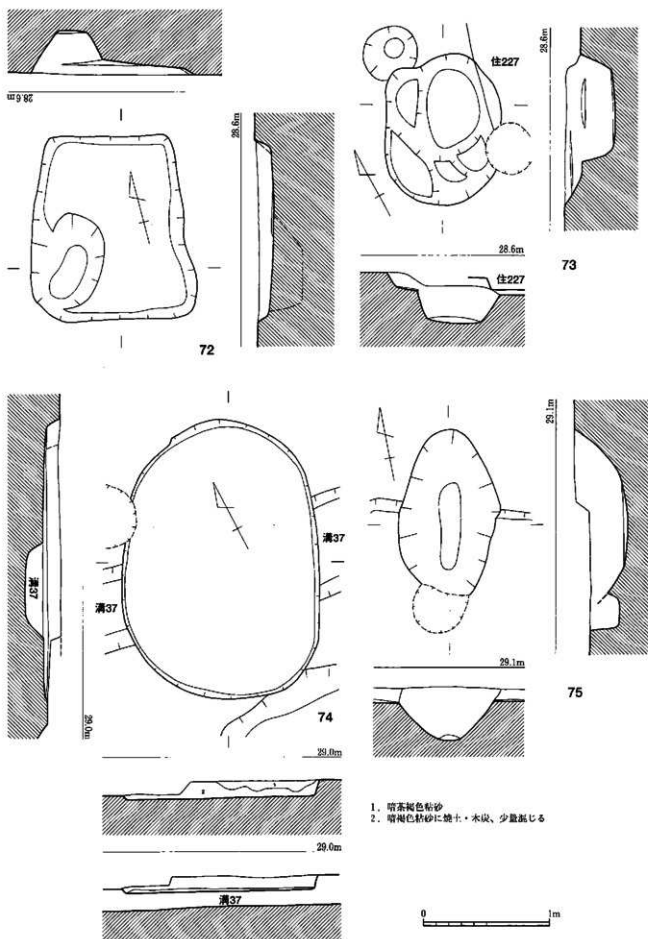
77号土坑は3区中央、231号住居跡北、75号土坑西に位置する。長軸154cm×短軸88cmの北側が広がる形態の土坑で、埋土は暗黄灰色細砂。床面はほぼ平らで、壁は緩やかに立ち上がる。出土土器で図示できるものはないが、土師器甕・杯片が出土している。

78号土坑（第239図）

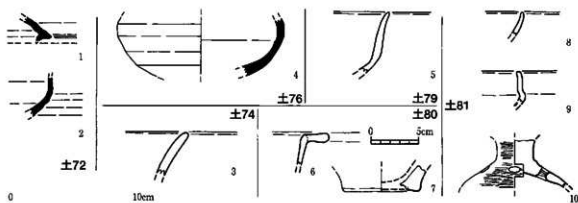
78号土坑は3区西端中央やや北寄り、226号住居跡北西に位置する。長軸129cm×短軸95cmの楕円形を呈する。床面は丸みを帯び、そこから壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗黄灰色細砂。出土土器で図示できるものはないが、土師器甕が出土している。

79号土坑（第239図）

79号土坑は3区東中央南寄り、231号住居跡南、38号溝東に位置する。長軸114cm×短軸83



第237図 72～75号土坑実測図 (1/30)



第238図 72・74・76・79～81号土坑出土土器実測図（6・7は1/4、他は1/3）

cm、深さは最も深い北壁部分で22cmを測る精円形土坑。床面は南から北に傾斜し、壁の立ち上がりはあまり急でない。埋土は暗黄灰色細砂。

出土土器（第238図5） 5は土師器高杯口縁部。口縁部はゆるやかに外反し、色は橙褐色。

80号土坑（第239図）

80号土坑は3区東中央や南寄り、231号住居跡東に位置する。東壁をビット、南壁をカクランによって壊されるため、現状で長軸102cm以上×短軸100cmのやや南北に長い円形土坑となる。形態から貯蔵穴となるものか。床面は北側にゆるやかに傾斜し、壁の立ち上がりはあまり急でない。埋土は灰褐色細砂。出土土器から弥生時代中期後半に属する可能性が高い。

出土土器（第238図6・7） 6は弥生中期壺か鉢口縁部。口縁上端部は水平で、外面にはススが付着。色は暗灰黄褐色。7は弥生中期壺底部で、外面には二次加熱痕あり。色は淡赤褐色～灰色。

81号土坑（図版92、第240図）

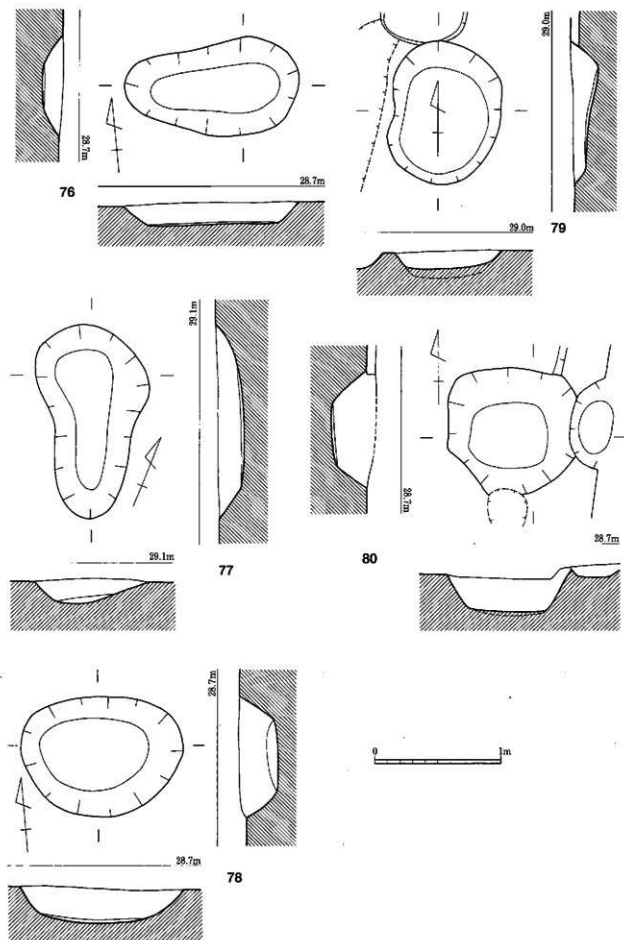
81号土坑は3区東中央、231号住居跡東に位置する。調査当初は中央部の一段深い部分のみの土坑と考えたが、上段部分と下段部分の埋土が灰褐色細砂と同じであり、また上段の床面が一段下がる部分に向かって緩やかに傾斜することから、一つの土坑であると判断した。長軸196cm×短軸194cmの北西側が突出する方形に近い形状で、一段下がる部分は長軸105cm×短軸92cm、深さ36cmを測り、西側に突出部とテラスを持つ。北東隅はビットに切られ、土坑外東の段は検出時に掘り下げた段である。一段下がった部分の床面は平らで、壁の立ち上がりは急になるが、上段の壁は緩やかに立ち上がる。

出土土器（第238図8～10） 8は土師器杯。色は灰黄褐色。9は土師器模倣杯身。焼成は甘く、色は橙褐色。10は小形器台脚柱部。外面は横ミガキ、脚部内面はハケ後ナデ調整。生乾き状態で外から4つ穿孔する。色は灰黄褐色。出土土器から古墳時代後期後半の土坑になるか。

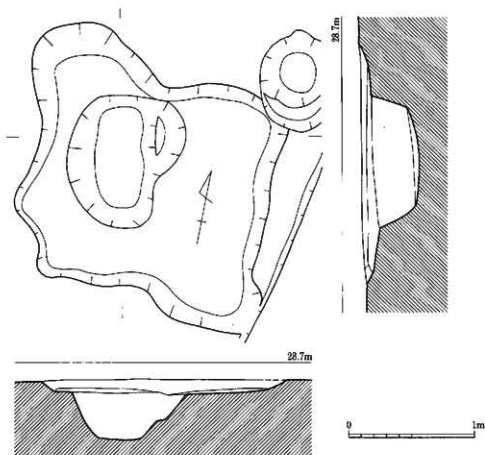
d. 溝

37号溝（図版92、第241図）

3区のほぼ中央部で検出した、東西方向に伸びる溝である。長さ13mほどが確認され、西端



第239图 76~80号土坑实测图 (1/30)



第240図 81号土坑実測図 (1/30)

部は28号溝に破壊されてその先方には続かず、東方でも次第に浅くなって消滅する。当初第1面で本溝の西端部を検出したが、28号溝に延長部分を破壊されておりその先には続いていなかったため、土坑として調査した。その後、隣接する188号住居跡を調査した際、床面からこの上坑に続くと思われる暗褐色の埋土が帯状に広がるのを確認し、この遺構が溝であるとの認識に至った。しかし、第1面では完全に検出するに至らなかったため、本格的な調査は第2面検出後に行っており、第2面に属する遺構としてここで報告する。切り合い関係は、第1面の28号溝・188号住居跡と切り合い、これらよりも古く、第2面の228号住居跡・74号土坑・38号溝とも切り合い関係を持ち、これらよりも古い。埋土は3層に分けられ、最上層は暗褐色粘砂質土、中層は暗黄褐色粘砂質土、下層は黄褐色砂質土に暗褐色粘砂質土をブロック状に含む。いずれもレンズ状堆積で、最下層は非常に薄い。出土土器・切り合い関係から、6世紀代以前と考えられる。

出土土器(第242図1・2) 1は弥生時代須玖Ⅱ式土器の甕の底部片である。薄めの平底部分だけが残る。端部はわずかに外側に張る。

2は古代の土師器である。バケツ状の器形を持つ甕の口縁部片と思われる。調整は全体的に摩耗しており判別しがたいが、内面にハケメが残る。

38号溝 (第241図)

調査区東寄りの中央部で検出した浅い溝状遺構である。最大幅1m、長さ4mほどを測る小規模なもので、深さも最大で15cm程度と極めて浅い。37号溝と切り合い関係を持ち、これより新しい。埋土は大きく3層に分かれ、上層から暗黄褐色粘砂質土、暗褐色粘砂質土、暗黄褐色粘砂質土(暗褐色粘砂質土含む)に分層できる。弥生土器が出土したが、切り合い関係や埋土から弥生時代の遺構の可能性は少なく、古墳時代後期～古代のものである。出土土器(第242図3)は弥生中期須玖式土器の器台である。「八」字状に広がる裾部のみが残る資料である。外面に縦方向のハケメ、内面は指ナデ整形のち横方向のハケメ調整を施す。

(4) 第2面ビット・遺構面

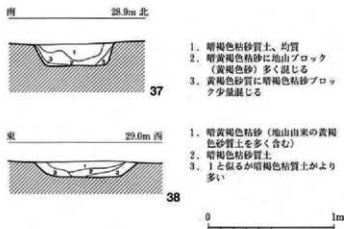
ビット出土土器(図版125、第243図)

1は弥生中期壺底部。外面には黒斑あり。色は淡橙色～こげ茶色。

遺構面等出土土器(図版131、第243・244図)

2は土師器模倣杯蓋。天井部外面はケズリ、その他は横ミガキで調整。外面には黒斑あり。色は外赤褐色～黒色、内黄褐色。3・4は土師器杯。3の杯部体部以下は手持ちケズリを施し、色は淡橙褐色。4は37号溝付近出土。色は黄褐色。5は土師器小形丸底壺。外面下部はケズリのちハケ、口縁部内面はハケで調整。胴部内面は工具ナデが残る。色は暗灰黄褐色～黒色。6は土師器小形壺口縁部で、焼成はやや甘く、色は白黄桃色。7は土師器鉢で、口縁端部は内上方につまみ出す。底部外面はヘラケズリ、体部外面は縦ハケ後ヘラナデを施す。焼成は甘く、色は橙色。

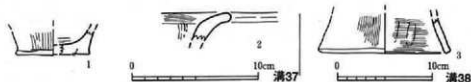
9～13は土師器甕。9は口縁部を水平まで外湾させる器壁の厚い甕で、頸部外面にはスス、



第241図 37・38号溝土層実測図(1/30)



38号溝土層(南から)



第242図 37・38号溝出土土器実測図(1・3は1/4、2は1/3)

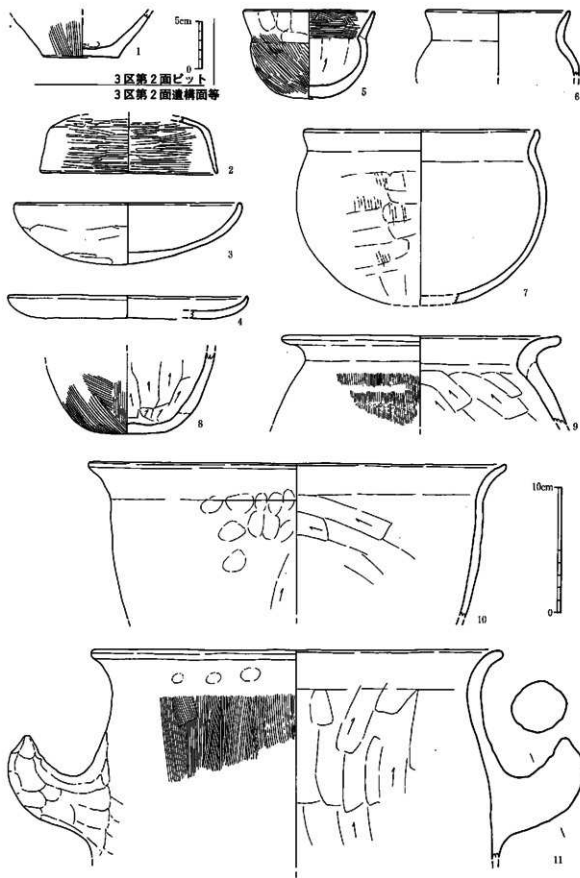
胴部内面には炭化物付着。色は橙色。10の外面中位以下はケズリ調整。頸部外面には指押さえ痕が良く残る。色は黄褐色。11は外湾する口縁部を持つ把手付甕で、外面のハケは細かいもので、焼成は非常に良く、色は淡褐色。12は胴が張らない甕で、内面頸部下は縦方向のケズリ。外面には黒斑、二次加熱痕、ススが認められる。色は橙褐色。13はやや器壁が厚すぎ、大形になることが気になる甕底部。外面底部付近は一部ハケをナデ消し、内面は横方向のナデ調整。色は橙褐色。



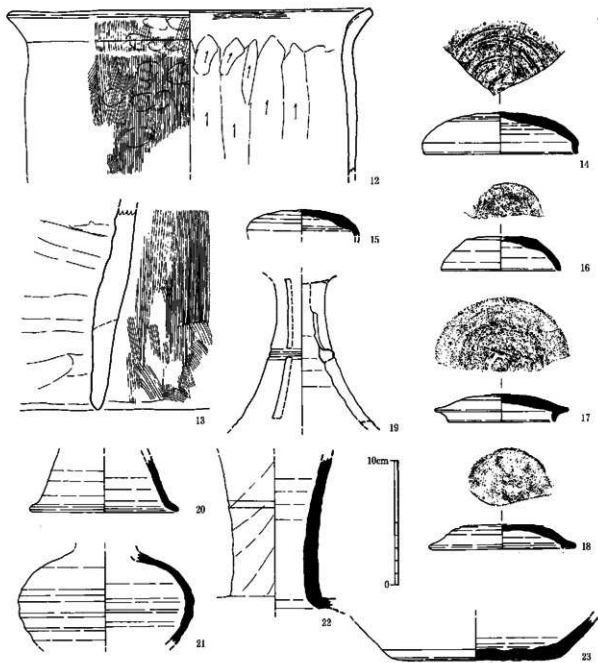
堂知遺跡調査後工事状況

14～18は須恵器杯蓋。14は口縁端部をわずかに外反させ、天井部外面には「×」のヘラ記号を施す。外面口縁部付近は灰をかぶり、色は青灰色。15の色は暗灰色。16は小形の蓋で、天井部外面には「×」のヘラ記号あり。色は灰色。17は口縁部の立ち上がり強い蓋で、天井部外面には横1本線に短い縦2本線を交わせたヘラ記号を施す。色は灰色。18の天井部外面は、ヘラ切り後ハケ工具による擦過を行う。焼成は甘く、色は褐色。

19は須恵器高杯脚柱部で、中央部にナデによる2条の凹線を施し、上下2段3ヶ所に長方形透かしを入れる。外面は厚く灰をかぶる。色は灰色～黒色。20は須恵器高杯脚部。色は外暗灰色、内黒灰色～黒色。21は須恵器甕体部。内外面はナデによる凹凸が顕著である。外面全体に灰をかぶり、胎土には細粒を多く含む。色は外灰黒色～暗灰色、内紫褐色。22は須恵器長頸甕口頸部で、外面中央には工具による1条の凹線を施し、外面にはナデによる鈍い絞りが認められる。外面と内面の一部が灰をかぶる。色は暗灰色～黒色。23は須恵器甕底部。外面全体は灰をかぶる。胎土には細粒を多く含む、色は外黒色～暗灰色、内暗灰色。



第243図 3区第2面ビット・遺構面等出土土器実測図(1)(1は1/4、他は1/3)



第244图 3区第2面遺構而等出土土器実測图(2)(1/3)

3. 4区の検出遺構と遺物

(1) 第1面の遺構と出土土器

4区第1面は県道吉井恵蘇宿東に位置する。南北30m×東西13m、面積300㎡の南北に細長い調査区であり、3区との間には用水路が存在したことから、調査できなかった。また調査区外北側も工事対象地であったが、すでにアスファルトを敷いた駐車場として使用されていたこと、土捨て場の問題があったことから、南半分のみ調査することとなった。



4区第1面全景（南から）

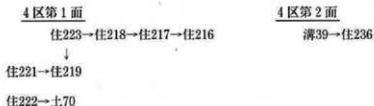
3区が南西に傾斜する地形であり、4区も同じく南西側に傾斜することから、3・4次調査区の中で最も深い調査区となる（県道から1.1m下がる）。検出した遺構は竪穴住居跡7棟、土坑5基であり、遺構は北側に集中して確認されたことから、3区と同様、検出した遺構は集落の南端部にあたると考えられる。

a. 竪穴住居跡

216号竪穴住居跡（図版93、第246図）

216号竪穴住居跡は4区北東に位置し、218号住居跡を切る。住居東側の大部分が調査区外であり、削平により北・西壁の一部しか残存しない住居跡。西壁に接するように焼面があり（トーンで示した範囲）、この焼面が西壁の中心にあったと考え、南北3.2mほどを測る住居跡になる。この焼面は焦土が薄く広がるものであり、カマド焼面としては西壁と近すぎることで、当住居跡より古い218号住居跡が突出するカマドであることを考えると、壁から突出する形態のカマドであったと考えられる。P2・3は主柱穴になる。

出土土器（第247図1）1は須恵器杯身。色は灰色。切り合い関係で周辺の状況から古墳時代後期末の住居跡になる可能性が高い。



第245図 4区第1・2面遺構切り合い関係図

217号竪穴住居跡（図版93、第248図）

217号竪穴住居跡は4区北端中央に位置し、216号住居跡に切れ、218・223号住居跡を切る。住居北東隅は216号住居跡に壊される。北西壁中央やや南寄りに壁から突出するカマドを付設し、3.4m×4.2mの長方形住居となる。床面ではビット9基検出し、P1～4が主柱穴となる。切り合う218号住居跡と床面の高さが余り変わらないため、当住居跡で検出したビットの中にも218号住居跡に属するものもあると考えられる（P5は218号住居跡の主柱穴）。埋土は黄褐色細砂。住居北隅、中央より南の2ヶ所で掘り込みを確認した。覆土より石製紡錘車出土（第265図38）。

カマド（図版94、第246図）北西壁中央やや南寄りに位置するカマドで、袖は左袖基部が若干残るのみであり、土層から右袖も若干残っていた可能性が高い。奥壁から27cmの場所にかなり焼けた硬化面（32×37cm）を検出したため、両袖とも南東側に延びていたものと考えられるが、袖推定位置の床面には焦土・炭が薄く広がっており、両袖とも廃棄の際に壊している可能性が高い。奥壁中央は上層ビットに切られる。燃焼部幅は硬化面奥で60cm、奥壁で55cmと奥壁側がやや狭くなり、右壁が左壁に比べ短い燃焼部となる。

出土土器（第247図2～6）2～4は須恵器杯蓋。2・3は口縁端部を弱く外反させるもの。2の色は暗灰色。3の色は白灰色。4は天井部外面に「×」のヘラ記号を施したものか。色は青灰色。5・6は須恵器杯身。5の焼成はやや甘く、色は赤茶色。6はカマド付近出土。色は灰色。

出土土器から古墳時代後期末の住居跡となる。

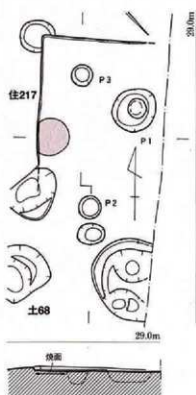
218号竪穴住居跡（図版93、第248図）

218号竪穴住居跡は4区中央北端に位置し、217号住居跡に切れ、223号住居跡を切る。219号住居跡と住居北西隅でわずかに切り合うが、前後関係は不明。北西壁のやや北寄りにカマドを付設する。住居南東部の大半は217号住居跡により壊される。217号住居跡床面の方が当住居跡床面よりわずかに低いため、当住居跡のビットも217号住居跡で検出したビットの中に存在する可能性があったため検討したところ、217号住居跡P5は位置的にも当住居の主柱穴であろう。住居規模は2.8m×4.0m、深さ13cmの小形長方形住居になる。床面からはいずれも主柱穴となるビット2基を検出し、主柱穴は住居中央近くに配置される。埋土は暗灰褐色細砂。

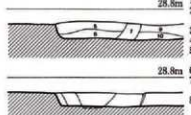
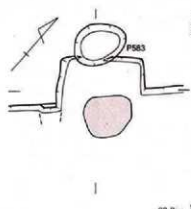
なお、住居北西には当初住居と考え調査したが、床面がはっきりしなかったことから包含層とした、218号住居跡北包含層が存在する。

カマド（図版94）北西壁中央よりやや北側に位置し、両袖とも壁から65cmほど直線的に突出する形態のカマド。左袖が上層ビットにより一部壊され、217号住居跡カマドと接して位置するために、土層縦断面図は十分なものでない。焼面はなく、カマド埋土にも焦土・炭の混じる割合は少ない。断面図の箇所では燃焼部幅が48cmを測る。9はカマド内出土。

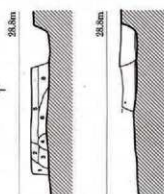
出土土器（第247図7～13）7は土師器模倣杯身口縁部で、色は白橙色。8は土師器高杯脚部で、外面はケズリ、内面は工具ナデのちなデ調整。色は白黄褐色。9は口縁部が外反する土師器甕で、外面には黒斑・二次加熱痕・スス、内面には炭化物が認められる。色は暗黄褐色。10は口縁外端部を外につまみ出す小形土師器壺口縁部で、外面は二次加熱痕、内面には炭化物



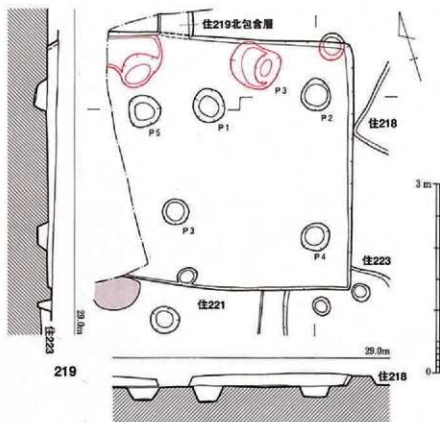
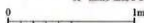
216



217号住居跡カマド



1. 黄褐色細砂に暗黄褐色粘質砂10%混じる
2. 黄褐色細砂に暗黄褐色粘質砂80%混じる、炭多く含む
3. 黄褐色細砂に暗黄褐色粘質砂70%混じる
4. 黄褐色細砂に暗黄褐色粘質砂30%混じる
5. 黄褐色細砂に暗黄褐色粘質砂50%混じる、炭多く含む
6. 暗黄褐色細砂に炭含む
7. 暗黄褐色細砂+褐色粘質砂、炭・無土炭層に多く含む〔カマド構築土〕
8. 暗黄褐色細砂に黄褐色細砂が50%混じる、炭少量混じる
9. 暗黄褐色粘質砂に黄褐色細砂が50%混じる、炭・無土多く含む
10. 暗黄褐色粘質砂に黄褐色細砂が20%混じる、炭・無土少量混じる



219

第246図 216・219号竪穴住居跡、217号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)

が付着。

11は須恵器高杯底部で、底部端部を下につまみ出したもの。色は外黒灰色、内白灰色。

12・13は218号住居跡北包含層出土の須恵器杯身口縁部。12の色は青灰色、13の色は灰色。出土土器から古墳時代後期後半の住居跡となるか。

219号竪穴住居跡（岡版93、第246図）

219号竪穴住居跡は4区北西隅に位置し、221・223号住居跡を切るが、218号住居跡とわずかに切り合うが、前後関係は不明。住居西側は調査区外であり、現状で南北4.0m×東西3.9m以上、深さ20cmの住居跡となる。調査当初は2棟の住居跡の切り合いとして調査し、北側に焦土が混じる土があったためカマドとして掘ったが（北壁の四角形の掘り込み部分）、焦土の割合などからカマドではなく、また柱穴も2棟分確認できなかったため、1つの住居跡と判断した。床面ではピットを6基検出し、P1～4が主柱穴と考えられる。出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられるので、カマドは住居西の調査区外にあるものか。住居床下では掘り込み・ピットを確認した。P5は下層の遺構の可能性がある。

出土土器（第247図14～32）14は土師器模倣杯蓋口縁部で、鈍い稜を持つ。天井部外面はケズリ調整。色は橙色～黄橙色。15は口縁部を外反させる土師器高杯杯部か。体部外面下部はヘラケズリ、外面には二次加熱痕あり。焼成はやや甘く、色は黄橙色。

16～19は土師器壺口縁部。16は外面に工具痕が残る。色は白橙色。17は強く外湾するもので、色は白橙色。18の外面は二次加熱痕、内面はスガが認められる。色は外橙茶色、内黒茶色。19は外面に二次加熱痕、内面に炭化物が認められる。色は灰茶色～黒茶色。

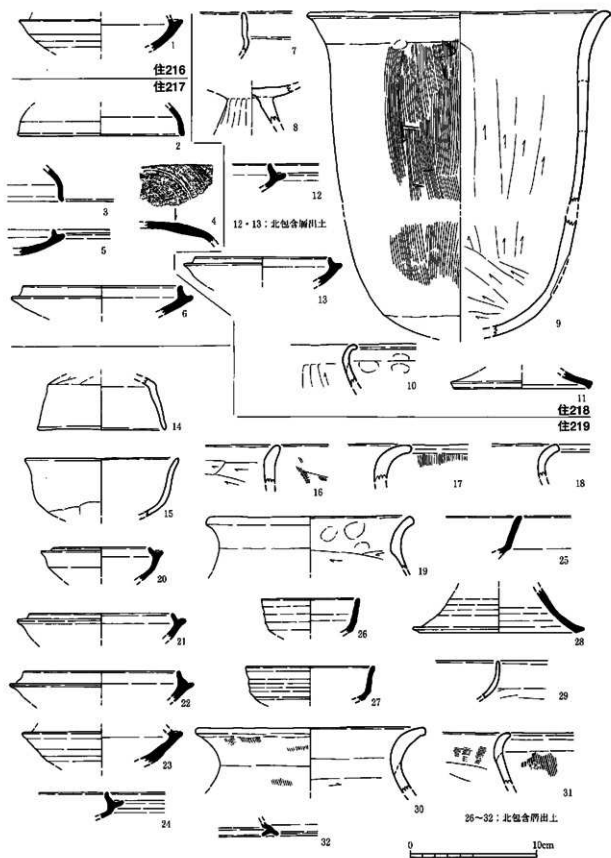
20～24は須恵器杯身口縁部。20は小形杯身口縁部で、外面には灰がかかる。色は外白灰色、内茶褐色。21～23の色は灰色。24の色は暗灰色。25～28は須恵器高杯。25は口縁部が屈曲する杯部で、色は濃紫灰色。26・27は須恵器高杯杯部か。いずれも外面はナデによる凹凸が顕著である。26の杯部外面底部には工具痕あり。色は黒灰色。27は口縁端部を外反させるもので、色は外黒色、内暗青灰色。28は須恵器高杯脚部で、底部端部内外面は灰がかかる。色は灰色～黒灰色。

当住居跡は出土土器から古墳時代後期末の住居跡になる。

29～32は先述したように、当初カマドとして調査した部分（住居北側の四角形の掘り込み箇所）から出土したもので、219号住居跡北包含層として報告する。29は土師器杯で、体部外面下部はヘラケズリを施す。色は橙色。30・31は土師器壺。30の色は外黄茶色、内橙茶色。31は外面二次加熱痕が認められ、色は橙茶色。32は須恵器杯蓋口縁部。色は灰色。

221号竪穴住居跡（第249図）

221号竪穴住居跡は4区北西隅に位置し、219号住居跡に切られる住居跡。この付近は削平が激しく、当住居跡も東壁の一部、高さ3cmしか残存していない。この東壁から西へ2.3m、トーンで示した範囲に焦土・炭が広がり、カマド焼面と思われるが、削平されたため袖などは全く検出できなかった。この焼面の存在は住居北壁があまり北側まで延びないこと、焼面中心部を北壁中心とすると東西4.6mを測る住居跡になることが推測されるものとなる。床面ではピット



第247图 216~220号竖穴住居跡出土土器実測図(1/3)

5 基検出し、P1・3～5が主柱穴となる4本柱の住居跡となる。住居中央には120cm×100cm、深さ12cm、埋土が暗黄褐色粘質砂の土坑が存在し、位置的にやや疑問が残るが、出土土器から当住居跡と同じ古墳時代後期後半になると考えられることから、屋内土坑として報告する。4は屋内土坑出土。



221号竪穴住居跡屋内土坑（南から）

出土土器（第251図1～5） 1は土師器模倣杯身口縁部。外面受部以下はヘラケズリを施す。色は橙褐色。P1出土。2は土師器高杯脚部で、色は淡褐色。3は口縁端部が垂れ下がる土師器甕で、色は外淡褐色、内灰黄褐色。P1出土。4は小形土師器甕で、外面～口縁部内面まではススが付着し、胴部内面下位は炭化物が付着する。色は灰黄褐色～こげ茶。

5は弥生中期甕口縁部。色は灰黄褐色。P1出土。

222号竪穴住居跡（第249図）

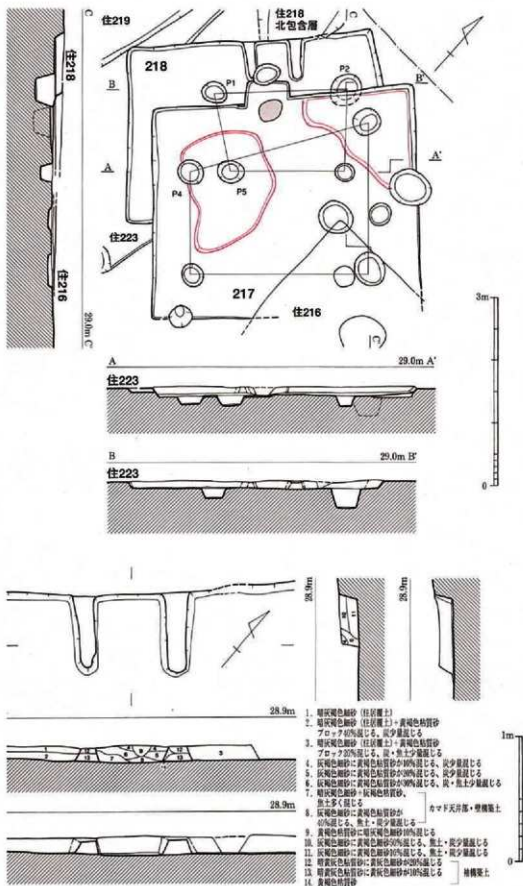
222号竪穴住居跡は4区中央やや北寄りに位置し、71号土坑に切られ、70号土坑と切り合うが前後関係は不明。この付近は削平が激しく、検出段階においてトーンで示す範囲に焦土の広がりを出したため住居の存在を予想し、周辺を精査したところ、住居に伴うと考えられるピットを検出したため住居跡とした。P1～3が主柱穴の4本柱の住居跡となると考えられるが、南東ピットは検出できなかった。P1・2はやや焼面に近く、北に寄りすぎることは気になる。P3は71号土坑に切られることから、71号土坑の方が新しくなる。赤で示したものは当住居跡の床下掘り込みになると考えられるもの。出土土器で図示できるものはないが、床下掘り込みより土師器甕片、P1より土師器杯身・甕片が出土している。

当住居跡北東のトーンで示した場所にも焼面があり、当住居跡と同じく周辺を精査したが、伴うピットは確認できなかったことから、住居跡としては報告しない。

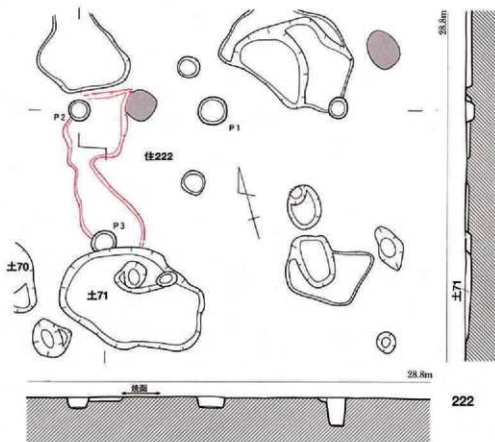
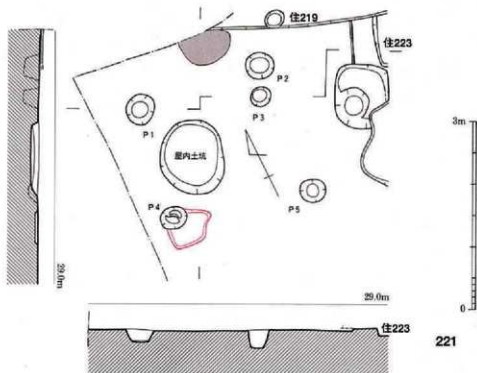
223号竪穴住居跡（第250図）

223号竪穴住居跡は4区中央北寄り、217～219号住居跡に切られる、この付近の住居群の中で最も古い住居跡。住居壁は東壁の一部が3cmほど残るのみであるが、南・東壁沿いに掘り込みがあることから、おおよその住居規模は把握できた。東西3.8m×南北3.6m以上の住居跡になる。床面ではピット6基検出したが、P3は主柱穴、南西の主柱穴はP1・2のいずれかになる。住居床下3ヶ所で掘り込みを確認した。切り合い関係と出土土器から古墳時代後期後半の住居跡になるか。

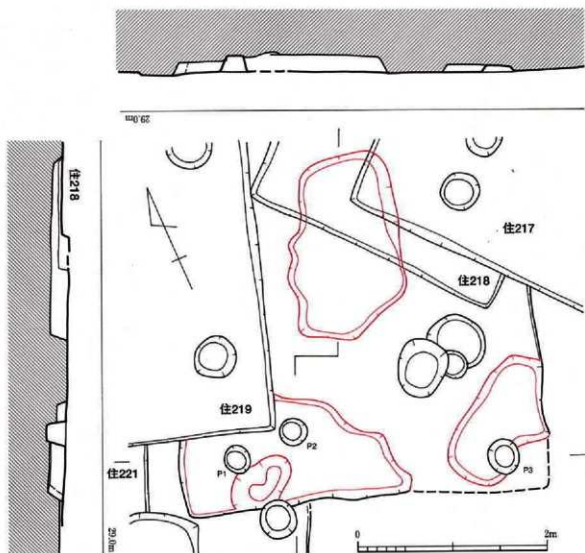
出土土器（第251図6～9） 6・7は住居床下出土。6は土師器把手。把手はソケット状に差し込む形態のもの。内面は黒化する。色は黄褐色。7は須恵器杯蓋で、天井部外面には「×」のヘラ記号を施す。外面には灰がかかり、色は灰色。8は口縁部が直立する須恵器杯蓋口縁



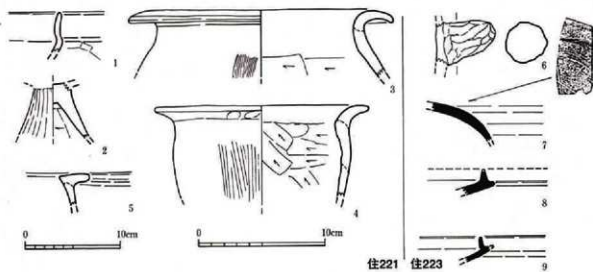
第248図 217・218号竪穴住居跡、218号住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)



第249图 221・222号竖穴住居跡実測图 (1/60)



第250图 223号竖穴住居跡実測图 (1/40)



第251图 221・223号竖穴住居跡出土土器実測图 (5は1/4、他は1/3)

部。色は灰色。混入品か。9は須恵器杯身口縁部で、外面に灰がかかり、焼き膨れの箇所もある。色は青灰色。

b. 土坑

68号土坑（図版94、第252図）

68号土坑は4区中央やや北東寄り、216号住居跡南に位置する。216号住居跡と切り合う可能性もあるが、削平により不明。長軸89cm×短軸81cm、深さ49cmの隅丸方形土坑で、北側にはテラスを持つ。床面は平らで、壁は急に立ち上がる。出土土器で図示できるものはない。

69号土坑（第252図）

69号土坑は4区中央やや北東寄り、217号住居跡南に位置する。北壁の先端部を217号住居跡に切られる。長軸175cm×短軸83cm、深さ32cmの長方形土坑で、埋土は暗黄褐色細砂に焦土・炭が少量混じるもの。床面は平らで、壁の立ち上がりはあまり急でない。

出土土器（第253図1～3） 1～3は土師器甕口縁部。1は口縁部を強く外湾させるもので、色は灰黄橙色。2は口縁端部を外折させるもの。色は橙褐色。3はやや器壁が厚い布留系甕口縁端部か。口縁内端部を上方につまみ出し、外面には工具痕が残る。色は外灰黄褐色、内薄こげ茶色。

70号土坑（図版94、第252図）

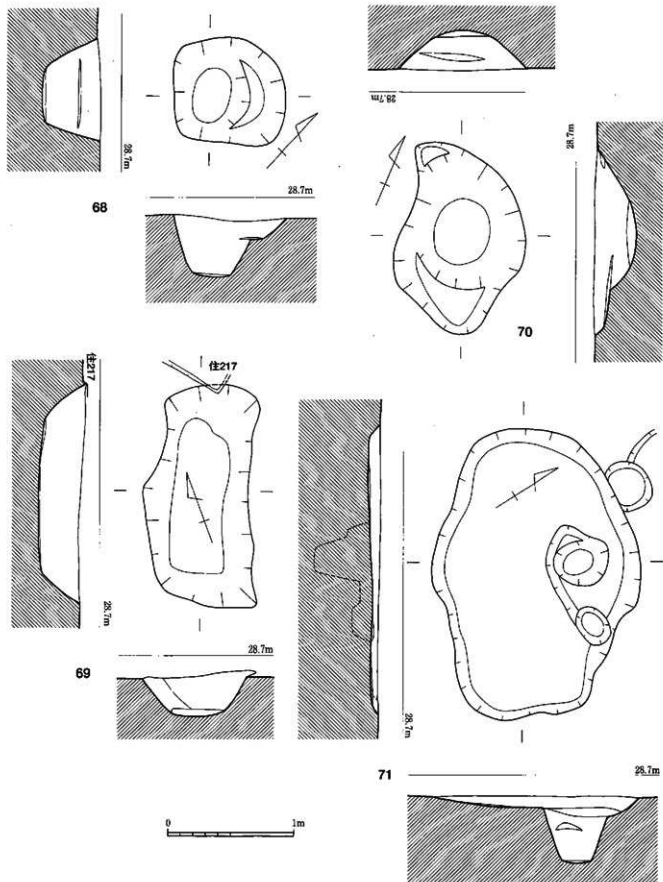
70号土坑は4区中央西寄り、221号住居跡南に位置する。222号住居跡との切り合いの前後関係は不明。長軸148cm×短軸100cm、深さ33cmの南北端が細くなる形態の土坑で、北側と南側にはテラスが存在する。床面は円形を呈し、丸い床面から壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗黄灰色細砂。

出土土器（第253図4） 図示できた土器は1点のみ。4は土師器甕口縁部。内面は横ハケのちケズリ調整。外面には二次加熱を受ける。色は外淡赤茶褐色、内褐色。

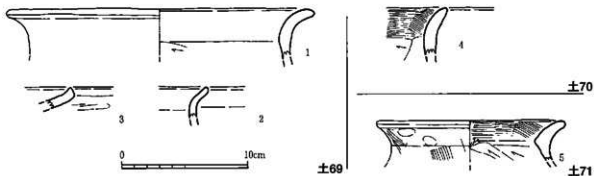
71号土坑（第252図）

71号土坑は4区中央、70号土坑東に位置する。222号住居跡と切り合うと考えられるが、前後関係は不明。長軸230cm×短軸165cm、深さ8cmの長楕円形土坑で、床面は中央に向かって緩やかに傾斜し、壁も緩やかに立ち上がる。床面東側には深さ43cmと8cmの2基のピットが存在し、南側のピットは上層からの切り込んだピットの可能性がある。埋土は黄灰色細砂に灰白色粘質砂が混ざったもの。

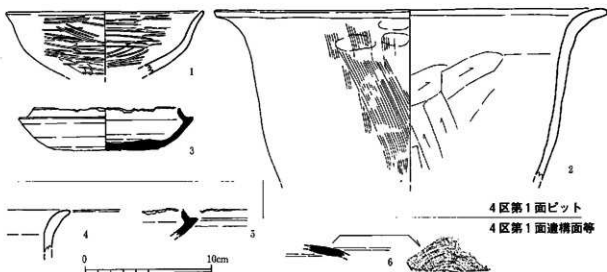
出土土器（第253図5） 5は土師器甕口縁部。内面頸部以下はケズリを施し、口縁部との境には稜ができる。口縁内面はハケ調整。外面には二次加熱、ススが認められる。色は外赤茶褐色、内褐色。



第252図 68~71号土坑実測図 (1/30)



第253図 69～71号土坑出土土器実測図 (1/3)



第254図 4区第1面ビット・遺構面等出土土器実測図 (1/3)

(2) ビット・遺構面

ビット出土土器 (第254図1～3)

1は土師器高杯杯部。口縁端部はゆるやかに外反し、内外面粗いミガキで調整。色は橙色。
2は口縁部を水平近くまで外湾させる土師器甕。外面には黒斑・ススあり。色は外こげ茶～黄橙色、内黄橙色。3は須恵器杯身で、口縁端部は打ち欠いたもの。外面には灰がかかり、色は暗灰色～灰色。

遺構面等出土土器 (図版131、第254図4～6)

4は土師器甕口縁部。外面は二次加熱痕あり。色は外淡橙色、内灰黄色～黒色。5は須恵器杯身口縁部。口縁端部は打ち欠きし、外面には灰がかかる。色は青灰色。6は須恵器杯蓋天井部で、外面に3本線のヘラ記号が残るが、全形は不明。色は青灰色～暗赤褐色。

(3) 第2面の遺構と出土土器

第2面で検出した遺構は竪穴住居跡1棟、溝1条のみである。遺構は調査区北で確認される第1面と同様の状況であり、集落の南端部にあたる。

県道西側の1・2次調査区でも南東側が遺構が少ないことが確認されており、県道下部分の交差点付近は美津留川に向かって谷状に窪んだ地形であったことが推測できる。

a. 竪穴住居跡

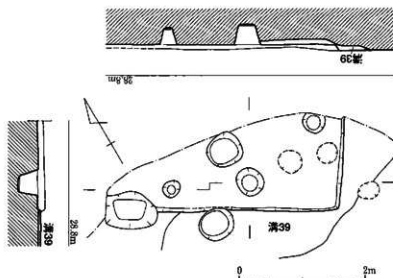
236号竪穴住居跡（図版95、第255図）

4区の北隅で確認した。大半が北側の調査区外に広がっており、南東のコーナー部分を確認したのみである。39号溝と切り合い関係にあり、本住居跡が新しい。住居跡は著しく削平されており、壁は数cmを残すのみであった。床面からは多くのピットが確認されたが、いずれも支柱穴とするのは難しい。出土土器のうち図示できるものはなく、時期は不明である。

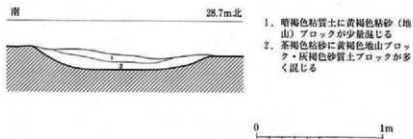
b. 溝

39号溝（図版95、第256図）

4区北端部で検出した溝状遺構である。調査区北西部の調査区外から始まり、緩やかに北に湾曲しながら調査区の北側に抜けていく。溝は大きく波打ち不整形であるが、溝の深さが20cm程度と極めて浅く、大きな削平を受けていること、溝の斜面の傾斜が緩やかで断面が皿状を呈することに起因するものであろう。溝底や周囲から多くのピットを検出したが、いずれも本溝に伴うものかどうかは不明である。236号住居跡と切り合い関係を持ち、本溝が古い。土器は上師器等の小片が少量出土したが、図示できるものはなく、時期を明確にすることはできない。



第255図 236号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第256図 39号溝土層実測図 (1/30)

4. 5区の検出遺構と遺物

5区では3面の遺構面が確認された。5区は堂畑遺跡の南西端部にあり、三津留川の北岸に形成された自然堤防の斜面に当たるため、いずれの遺構面も北側が高く南西側に向かって傾斜する自然地形を持っていた。このため、遺構は主に北半分で認められ、大半が地形に沿って大略東西方向に走る溝状遺構であった。



5区調査風景

(1) 第1面の検出遺構と出土土器

第1面では、4条の溝が切り合った状態で検出された。いずれも遺構面を東西方向に横断しており、下層から44号溝、43号溝、42号溝、41号溝の順番に重なり合っていた。溝状遺構のほかに、ピットをいくつか検出した。

a. 溝

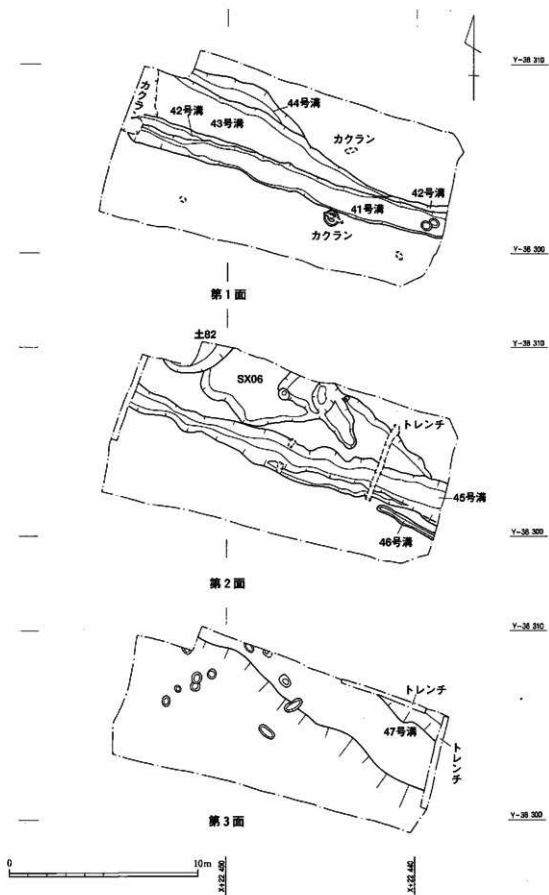
41号溝 (図版96、第257・258図)

調査区を東西方向に走る溝状遺構である。42・43号溝と直接的な切り合い関係にあり、これらより新しい。また、第2面で検出した45号溝とも切り合いを持ち、これより新しい。溝の幅は1.5m、深さは最深部で20cmほどを測る。長さは19m、調査区内から検出され、さらに東西に伸びる。埋土や断面形態、位置関係などから、東側に隣接する平成8年度調査の第1区(1次調査分)第1面で検出した2号溝の延長部分と考えられる。底面からピットを検出したが、本溝に伴うものかどうか明確でない。出土土器のうち1は混入、2は小片であり、時期は断定できない。

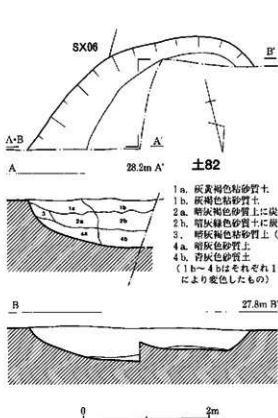
出土土器 (第259図7・8) 7は須恵器の大形壺の頸~口縁部片である。口縁部外面に2条が一単位となる波状文を3つ巡らせる。口縁部は下端・上端をわずかに引き出して肥厚させる。8は小片であるが、おそらく黒色土器の椀の口縁部片と思われる。

42号溝 (図版96、第257・258図)

41号溝とほぼ重なり合って東西方向に伸びる溝である。41号溝により大半を破壊され、43号

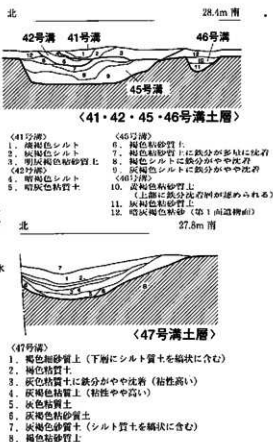


第257図 5区遺構配置図 (1/200)



土82

- 1 a. 灰黄褐色粘砂質土
 1 b. 灰褐色粘砂質土
 2 a. 暗灰褐色粘砂質土に炭化物をやや含む
 2 b. 暗灰褐色粘砂質土に炭化物をやや含む
 3. 暗灰褐色粘砂質土(粘性高い)
 4 a. 暗灰色粘砂質土
 4 b. 青灰色粘砂質土
 (1 b ~ 4 b はそれぞれ 1 a ~ 4 a 層が帯水により変色したものと)



<41・42・45・46号溝土層>

- <41号溝>
 1. 黄褐色シルト
 2. 灰褐色シルト
 3. 暗灰褐色粘砂質土
 <42号溝>
 4. 黄褐色シルト
 5. 暗灰色粘砂質土
 <45号溝>
 6. 褐色粘砂質土
 7. 褐色粘砂質土に鉄分が多量に含む
 8. 褐色シルトに鉄分がやや沈着
 9. 灰褐色シルトに鉄分がやや沈着
 <46号溝>
 10. 黄褐色粘砂質土
 (上層に鉄分沈着層が認められる)
 11. 灰褐色粘砂質土
 12. 暗灰褐色粘砂質土 (第1面遺構面)

<47号溝土層>

- <47号溝>
 1. 褐色粘砂質土(下層にシルト質土を塊状に含む)
 2. 褐色粘砂質土
 3. 灰褐色粘砂質土に鉄分がやや沈着(粘性高い)
 4. 灰褐色粘砂質土(粘性やや高い)
 5. 灰色粘砂質土
 6. 灰褐色粘砂質土
 7. 灰褐色粘砂質土(シルト質土を塊状に含む)
 8. 褐色粘砂質土

第258図 82号土坑実測図、41・42・45・46・47号溝土層実測図(1/60)

溝の南壁を破壊する。第2面の45号溝と直接的な上下関係にあり、本溝が上層に位置する。溝の南側が41号溝によって破壊されているために幅は不明であるが、調査区壁部分で80cmを測る。深さは20cmほどである。延長は41号溝同様、19m以上になるものと考えられる。3は7世紀代の須恵器であり、切り合い関係から混入と考えられる。中世黒色土器が出土しており、これを本溝と伴うものとすれば12世紀代に位置づけられよう。これは切り合い関係とは矛盾しない。

出土土器(第259図9・10) 9は須恵器の杯身である。口縁部付近が残存する資料である。かえりを有する杯身で、かえり部はかなり倒れて短い。径は10.8cmを測る。

10は中世黒色土器の碗の高台付近の破片である。断面が丸く、低い高台を有し、全体形はやや不明ながら半円状になるか。12世紀代の資料であろう。

43号溝(図版96、第257図)

調査区東壁部分では41・42号溝とほぼ重なり合ってこれらに破壊され、西に行くほどに北向きに湾曲する溝状遺構と考えられる。41号溝の床面に本溝の南方の一部を検出できたため、本遺構を溝状遺構と断定した。南肩が完全には残っていないが、幅は最大で2.4mほどを測るものと考えられ、底面は広い平坦面を形成する。深さは15cm程度、長さは19m以上を測る。点数は少ないが8世紀前半～中葉前後の土器が出土しており、この時期に比定しても大過なからう。

出土土器(第259図11・12) 11は須恵器の杯蓋である。ボタン状のつまみ部付近のみが残る。残存部はすべて横ナデ仕上げである。

12は土師器の杯である。平坦な底部と急激に内湾する口縁部からなり、非常に浅い器形である。胎土は比較的精良で、内・外面ともにナデ仕上げである。

44号溝(図版96、第257図)

調査区東側では43号溝に破壊され、西側半分の壁のみが遺構面に現れる遺構である。南壁が検出できなかったが、41～43号溝に破壊されて残っていないものと考えて溝状遺構と判断したが、南壁がない「落ち」状の遺構である可能性も残る。ただし底面が平坦であり、溝状遺構と判断の方が妥当と考えた。幅は最も残りのよい部分で1.2mほどを測り、これよりも確実に大きい。深さは15cm程度である。出土土器は小片であるが、8世紀初頭～前半に位置づけられ、切り合い関係からみても妥当であろう。

出土土器(第259図13) 13は須恵器の杯蓋の口縁部片である。おそらくボタン状のつまみがつく平坦な器形のものであろう。端部を丸く肥厚させる。

(2) 第2面の検出遺構と出土土器

第2面も北から南東にかけて緩やかに傾斜していた。傾斜しはじめる変換点付近から、第1面と同様に溝状遺構を検出した。45号溝は第1面の41～44号溝とほぼ重なり合う位置にある。その他に、土坑1基と性格不明な落ち込みも検出した。

a. 土坑

82号土坑(図版97、第258図)

調査区北西隅にある平面円形を呈する土坑である。本上坑を大きく破壊するように、排水管が付設されており、この排水管から漏れた汚水が土坑の埋土にしみ出して、埋土を青灰色に変色させていたが、変色部分は埋土の下位のみであり、上層部分は本来の色調を維持していた。底面は船底状を呈し、直径は4m、深さは80cmほどを測る。性格不明の落ち込み状遺構SX06と切り合い関係にあり、本土坑が新しい。埋土中から、図版136-28の鉄滓が出土した。出土土器から、7世紀後半代とみられる。

出土土器(第259図1～6) 1は土師器の皿である。平坦な底部からわずかに湾曲しながら開き、口縁部を短く上方に湾曲させる。口縁部径は14.6cmを測る。

2～6は須恵器である。2～4はいずれも口縁部にかえりを持つ杯蓋である。2・4はかえり部が口縁部より下方に伸び、3はかえり部が退化して短くなり、口縁部よりも上方で止まる。5は口縁部にかえりを有する杯身である。口縁部だけが残る小片で、径は不明。6も杯身である。平坦な底部から直角に屈曲して短く直立する口縁部へと至る。径は9.8cmと小さい。

b. 溝

45号溝(図版98、第257・258図)

調査区の中央部を東西に横断する溝状遺構である。第1面の41・42号溝とほぼ重なる位置に

あり、土層図においても直接的な上下関係にあり、上層の41・42号溝は本溝を破壊して作られる。埋土中に、多量に鉄分が沈着している層が何枚か確認された。埋土は大きく4層に分けられるが、いずれも砂質土あるいはきめの細かくやや粘性を持つ砂質土（シルト）であり、水成堆積であろう。埋土中から7世紀後半の土器が多量に出土しており、おおよそこの時期に比定できるものと考えられる。また、図版136-28・29の鉄滓が出土した。

出土土器（第259図14～23） 14・15は古代の土師器である。14は甗状の胴部を持つ大形の甕の口縁部で、縮まる頸部と如意状に外反する口縁部が残る。口縁部は横ナデ、胴部外面ハケメ、内面ケズリ仕上げ。口縁部径は20cmを測る。15は浅い皿である。器高は低く、平坦な底部からわずかに上方に湾曲しつつ開き、短く内湾する口縁部を持つ。口径は16.8cmを測る。

16～23は須恵器である。16は大形の壺の口縁部片である。端部を上・下方に引き出して肥厚させる。調整は内・外面ともにナデ仕上げ。口径は19.2cmを測る。17は鉢の胴部片である。小片であり、傾きはやや自信がない。肩部から胴上半部にかけて残存し、肩部の外面には沈線で区切られた文様帯の中に連続短斜線文を刻む。内・外面ともにタキキ痕が残る。13～18は杯蓋である。18～20は口縁部付近が残る資料であり、いずれもかえりを有するものである。天井部は丸みを帯びるものだろう。径は18が9.6cm、19が15.0cm、20が12.0cmを測るがいずれも小片でやや自信がない。これらの破片に対応すると思われるつまみ部片が21である。宝珠型のつまみ部のみが残る。22・23は杯身である。22はかえりを有するもので、底部が平たくかえりが比較的上方に伸びるが、胴部は浅い。23は底部片であり全体形は不明である。底部外面にヘラ記号を有する。これらの資料はおおよそ7世紀後半を前後するものである。

46号溝（第257・258図）

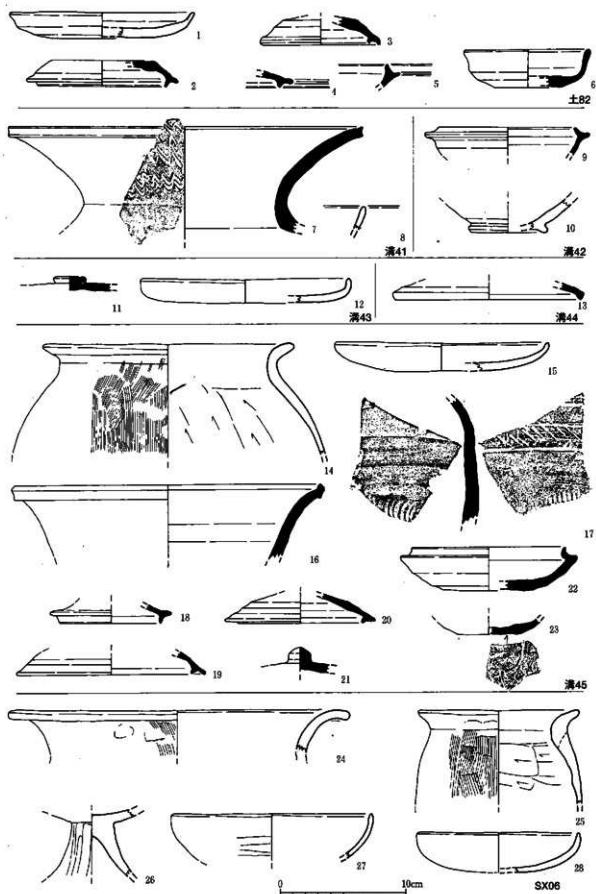
45号溝の南側に、これと並行して伸びる小規模な溝が確認され、46号溝とした。調査区の東側部分でのみ確認され、長さは3.4mほどである。幅は細く50cm程度で、深さも15cm程度と浅い。土器は確認されず、時期は不明である。

SX06（図版97、第257図）

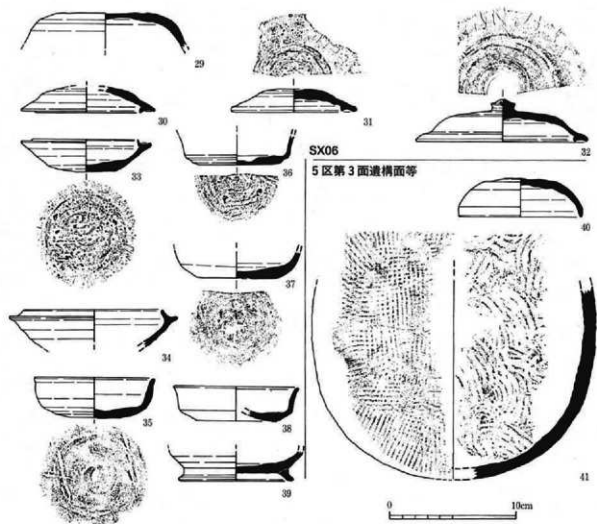
45号溝の北側に、不整形に広がる性格不明の落ち込みを検出した。深さは最も深いところで30cm以上を測り、平面形態・断面形態ともに不整形であるが、大きく南東から北西に伸びる。埋土中から、図版136-30の鉄滓が出土した。出土土器には7世紀後半代のもが多く認められ、この時期に位置づけられるものか。

出土土器（第259・260図24～39） 24～28は土師器である。24はバケツ状の胴部と丸底を有する大形の甕形土器である。如意状に緩やかに外反する口縁部が残る。25は甗状の胴部を持つ小形の甕の口縁部片である。頸部の縮まりはさほど強くなく、口縁部は強く外反する。26は高杯の杯底部～脚上部片である。杯部は内・外面ナデ、脚部は外面縦方向の板ナデ、内面もナデを施す。27・28は半球状の器形を持つ椀である。27は口径16cm、28は13cmを測る。

29～39は須恵器である。29は口縁部にかえりを持たない杯蓋と思われるが、口縁部が残存しておらず全体形は不明。30～32は口縁部にかえりを持つ杯蓋である。32のみ宝珠型のつまみを持つ。いずれも口縁部形態はよく類似しており、かえり部が口縁端部よりもやや下方に出る。



第259图 82号土坑、41~45号溝、SX06 (1) 出土土器实测图 (1/3)



第260図 SX06 (2)・遺構面等出土土器実測図 (1/3)

口径は30が10.6cm、31が10cmと小形で、32は13.6cmとやや大きい。31・32の天井部外面にはヘラ記号が認められる。33・34は口縁端部にかえりを有する杯身である。いずれも丸底から緩やかに湾曲しつつ立ち上がり、口縁部に至る器形を持つ。かえりはやや湾曲しながら斜め内側に伸びる。ともに底部外面にヘラ記号を付す。35~38は平坦な底部へ強く屈曲して斜め上方に短く直立する口縁部を持つ小形の杯身である。口縁部が残る35・38はともに端部を弱く外反させる。径は35が9.6cm、38は9.8cmを測る。35・37の底部にはヘラ記号が認められる。39は杯身で高台部は踏んばる形態となる。



(3) 第3面の検出遺構と出土土器

第3面もやはり第1・第2面と同様に美

5区トレンチ掘削状況

津留川北岸の傾斜地にあって、最も顕著に南側に向かって傾斜していた。変換点は調査区中央部にあり、遺構面のほぼ半分が斜面と言っていい状況であった。この変換点の北側部分に、47号溝が確認された。このほかにピットが何基か確認されたが、何らかの遺構を構成するものではない。

47号溝（図版99、第257・258図）

調査区の北東端部で検出した溝状遺構である。確認した当初は傾斜面に沿って形成された堆積土と認識していたため、南側の壁を大きく重機によって削り取ってしまったが、本来はもう少し残りが良かったものと考えられる。調査区隅を東西方向にかすめるように検出された。位置や方向などから、埋土はやや異なるものの平成8年度調査の1区（1次調査）で検出した10号溝の延長と考えられる。埋土はシルト質土を締状に含む均質な砂質土が大半を占めており、度重なる洪水等によって徐々に埋没していったものであろう。特に、最上層である7層は溝の埋土となるばかりでなく遺構面の上部に厚く堆積していた。これは、本溝がおおかた埋没してわずかに窪み状になって残っていた段階に、大規模な洪水が起きて遺構面もろとも地中深く埋没してしまったものと考えられ、この溝の埋没過程を象徴するような土層である。土器はほとんど出土しなかったが、第1区10号溝の調査成果から7世紀初頭前後と考えられ、これは土層とも矛盾しない。埋土中から、図版136-27の鉄滓が出土した。

遺構面等出土遺物（第260図40・41）ともに第3面検出時に出土した須恵器である。40は口縁端部にかえりを持たない杯蓋である。天井部には比較的広い範囲にケズリを施す。径は9.8cmを測る。41は球胴の甕形土器の胴～底部片である。最大径は22.4cmを測る。外面には平行タタキ痕、内面には青海波文が良く残る。

5. 表採・側溝等出土土器

ここに掲載した土器のほとんどは2区の北・西・南端に掘削した側溝内からの出土である。1区調査時には水の処理に苦勞したため、2区は東以外は側溝を掘り水対策を行うと同時に、側



1次1区第2面全景（東から）

溝壁により面の把握を行った。その際には住居跡カマドを壊してしまうなど遺構を壊した箇所も多くある。

出土土器（図版131、第261・262図）

1は弥生中期広口壺口縁部。口縁上端部を跳ね上げる。外面はハケ目、内面は横ミガキで調整。色は灰黄褐色。2は鋤先口縁広口壺。外面はナデ、内面はミガキ調整。色は灰黄褐色～黄褐色。3は壺蓋。外面はミガキのち丹塗り、内面は工具ナデ後ナデ調整。焼成前に外から穿孔した孔が1個残存する。生地は黄褐色。4は弥生中期無頸壺。頸部には焼成前に内から外へ1ヶ所穿孔する。内面には工具痕が残る。外面には黒斑があり、色は灰黄褐色。

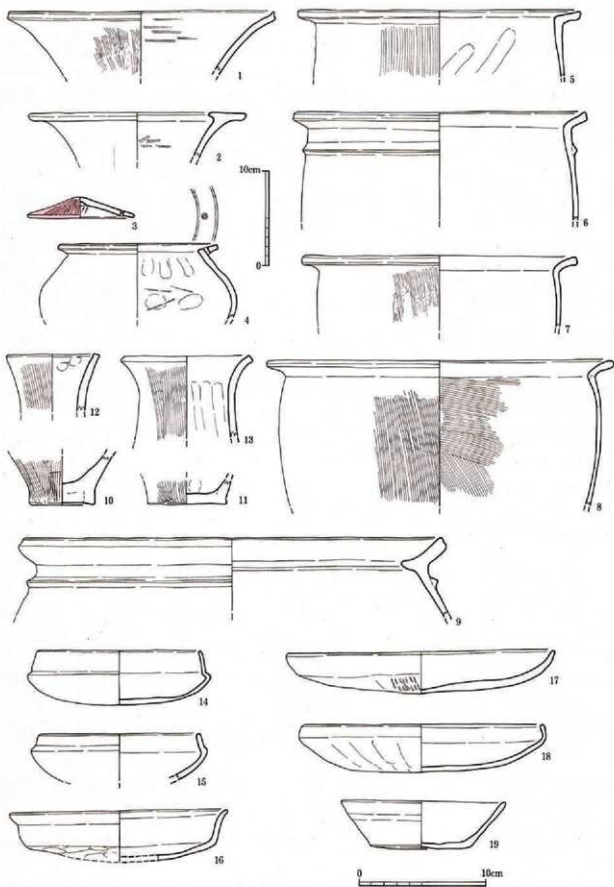
5～8は弥生中期甕。5は口縁部を強く外折する甕で、内面には炭化物が付着。胎土には細粒を多く含み、色は橙褐色。16は跳ね上げ口縁甕で、外面頸部下には低平な三角突帯を貼り付ける。胎土には細粒を多く含み、色は茶褐色。7は口縁端部がやや下がり、色は黄褐色～灰黄褐色。8は内面頸部下にもハケ調整を行う。外面にはスス付着。色は灰黄褐色～黒色。9は内傾する口縁上端部が窪み、内端部が大きく突出する甕口縁部で、外面頸部下には三角突帯を貼り付ける。胴が張る器形で、外面は二次加熱を受ける。色は橙褐色～黄褐色。10・11は弥生中期甕底部。10の色は灰黄褐色～こげ茶。11の色は白黄褐色～灰黄褐色。12・13は弥生中期器台上部片。12の外面にはススが付着。色は橙褐色。13の色は灰黄褐色。

14・15は土師器模倣杯身。14の色は白黄茶色。15の色は赤茶色。16は口縁端部が外反する土師器屈曲鉢。底部は手持ちヘラケズリで調整。色は明橙褐色～橙褐色。17・18は低平な杯。17の底部外面はタキ後手持ちヘラケズリを施す。色は橙褐色。18の底部外面は手持ちヘラケズリを施し、内面底部にはハケ工具痕あり。色は橙褐色。19は平底杯で、底部はヘラ切り後ナデ調整。外面は二次加熱痕、ススが認められる。色は灰黄褐色～暗灰色。20・21は土師器甕。20の色は茶褐色～黄褐色。21は口径14.5cm、器高16.2cmの甕で、口縁部内面はハケ調整。外面には黒斑あり。色は茶褐色。注記ミスでどの遺構から出土したか分からなくなってしまったが、おそらく3区第1面185号住居跡カマド東側出土土器の可能性が高いか。

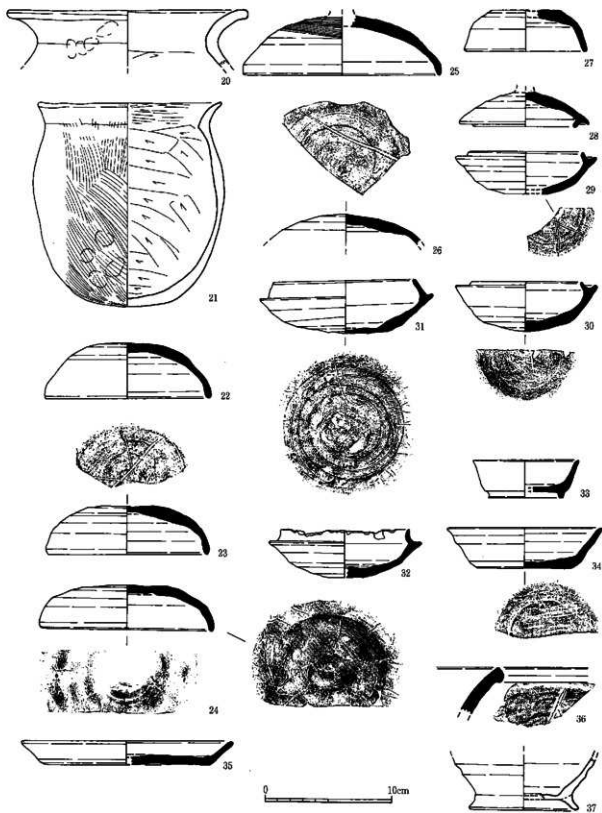
22～28は須恵器杯蓋。22の焼成はやや甘く、色は白灰色。23は天井部外面に「×」に横1本線入れたヘラ記号を施す。色は灰色。24は天井部外面に「×」のヘラ記号を施し、天井部内面には当て具痕が残る。色は灰色。25はつまみが欠けたもので、天井部外面にはカキ目を施す。外面は灰をかぶり、胎土には細粒を多く含む。色は外暗灰色、内青灰色。26は天井部外面に1本線のヘラ記号を施す。色は暗灰褐色～黒色。27の色は灰茶色。28はつまみが欠けた杯蓋で、色は明灰色。

29～34は須恵器杯身。29は底部外面に「×」のヘラ記号あり。色は黒灰色～灰色。30は底部に欠のヘラ記号を施す。色は青灰色。31は底部外面に1本線のヘラ記号を施す。底部内面には当て具痕が残る。外面全体は灰がかかる。色は暗灰色～青灰色。32は口縁端部を打ち欠くもので、色は灰紫色。33は小形高台付杯身で、外面全体に灰がかかる。色は灰色～黒色。34は底部外面に縦3本線に横1本線を交わらせたヘラ記号を施す。色は灰色。

35は須恵器皿。色は灰色。36は須恵器甕口縁部で、口縁端部を外に折り曲げて肥厚させる。頸部外面にはヘラ記号があるが、全形は不明。色は青灰色。37は瓦器椀。体部外面はナデによる凹凸が顕著である。色は灰黄色～暗灰色。



第261図 表採・側溝等出土土器実測図(1)(1~13は1/4、他は1/3)



第262图 表採・側溝等出土土器実測図(2)(1/3)

6. 石器・土製品・金属器（一覧表も作成 第3・4表）

（1）石器・石製品（図版132・133）

打製石器（第263図）

1・2は打製石鏃である。1は鋭い先端から直線的な側縁を持ち、基部は非常に浅く丸みを持って収まる。先端部はわずかに欠け、側縁部の押圧剥離は粗いもの。表面中央2ヶ所で研磨痕を確認し、やや丸みを帯びる断面から、頁岩製の磨製石包丁片を再加工した石鏃であると考えられる。2区第2面15号溝出土で、重さは1.4gを測る。2は鋭い先端から丸みを帯びた側縁を持ち、基部は浅く台形状を呈する。側縁部の押圧剥離は丁寧で、基部の一方は欠ける。3区第1面P501出土で、重さは1.1gの黒曜石製。

3～11は剥片石器である。遺構に関するものや特徴のあるものは図化し、その他の剥片石器は計測値を第3表に収めた。

3は下端部を石鏃として使用した剥片で、両側縁とも刃つぶしを行っている。下端先端は欠け、下端部近くの2面には自然面が残る。2区第1面遺構面出土で、重さ3.1gの黒曜石製。

4は縦長剥片素材で、ナイフ状を呈す。左側縁に微細剥離を有し、2面には自然面が残る。2区第1面120号住居跡出土で、重さ3.4gの黒曜石製。5は両側縁に微細剥離を有し、上端には自然面が残る。2区第2面149号住居跡出土で、重さ2.0gの黒曜石製。6はやや幅広厚手の剥片で、右側縁に微細剥離を有する。左側縁上端部は刃つぶしを行っており、自然面も残る。2区第2面151号住居跡出土で、重さ5.1gの黒曜石製。7は両側縁に微細剥離を有する厚手の不整形剥片で、下端部と右側縁上端は刃つぶしを行う。下端部と右側縁の一部に自然面が残る。3区第1面214号住居跡出土で、重さ4.3gの黒曜石製。8は両極剥離の剥片で、下端部には打点が残る。上端には微細剥離を有し、左側縁は刃部調整を行っている。2区第2面48号土坑覆土下層出土で、重さ1.6gの黒曜石製。9は3面に自然面が残る、厚手幅広の台形状の剥片で、両側縁に微細剥離を有する。2区第2面15号溝出土で、重さ7.9gの黒曜石製。10は右側縁に微細剥離を有する剥片で、左側縁の突出する部分はドリルとして使用したものか。表面は刃部調整を行う。2区15号溝覆土下層出土で、重さ2.1gの黒曜石製。11は幅広厚手の不整形剥片で、右側縁に密な微細剥離を有し、下端部をドリルとして使用したものか。左側縁と上端面には自然面が残る。5区第2面SX06出土で、重さ8.7gの黒曜石製。

12は刃部寄りの全体の1/3程度のみ残る局部磨製石斧。刃部両面は丁寧に研磨するが、身部表面はやや粗い研磨であり、身部裏面は一部のみ研磨しており、大部分が素材面を残す。刃部には微細剥離を有する。2区第1面81号住居跡出土で、重さは60.5gの蛇紋岩製。13は片岩製の扁平打製石斧で、長さ12.0cm、幅5.8cm、厚さ1.0cm、重さ150.2gを測る。全体的にかなり風化したものであるが、刃部全体に使用剥離が見られる。身部表面は研磨するが、身部裏面は素材剥離面を大きく残したままである。側縁・上端面とも敲打調整を行う。2区北側溝内出土。

磨製石器（第264図）

磨製石鏃

14～17は磨製石鏃である。14はやや丸みを帯びる両刃部で、右刃部の方が鋭い。鏃はなく、

身表面は平らであるが、身裏面はやや丸みを帯び、先端・基部は欠ける。長さ2.1cm、厚さ1.8mmの非常に薄いもの。2区第2面164号住居跡出土で、重さは0.8gの緑色片岩製。15は先端、右基部が欠け、両刃部には微細剥離を有するもの。身表面は平らで、丁寧に研磨されているが、身裏面には敲打痕が残る。2区第2面4号円形溝状遺構出土で、長さ3.4cm、幅2.8mm、厚さ2mm、重さ2.6gの凝灰岩製。16は先端・右刃部が欠けるもので、両刃部は面取りするもの（2次調整で行ったものか）。身表面には敲打痕が残り、身裏面は丁寧に研磨を施し、断面は丸みを帯びる。鋒には両面ともわずかな錆が見られる。2区第2面遺構面出土で、長さ4.5cm、身幅1.6cm、厚さ2.8mm、重さ2.6gの片岩製。17は右半分以上欠けるもので、基部には浅い抉りがある、身裏面には敲打痕が残る。1区遺構面出土で、長さ1.7cm、重さ0.4gの片岩製。

柱状片刃石斧

18は刃部が広がる形態となる柱状片刃石斧で、刃部欠損後、砥石として4側面及び欠損した刃部も再利用したもの。基部表面には柄取り付け時の痕跡と考えられる擦痕が残る。2区第2面146号住居跡出土で、長さ6.8cm、身幅2.3cm、厚さ1.4cm、重さ39.0gの珉岩製。

扁平片刃石斧

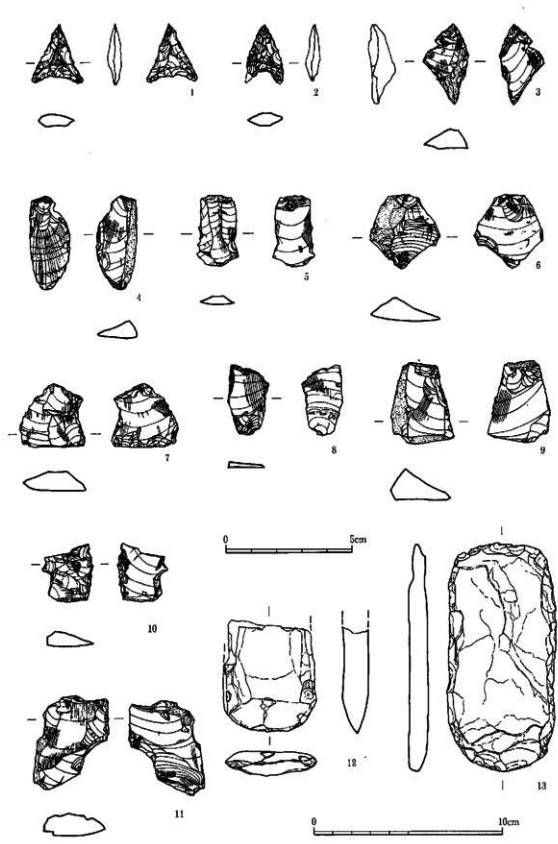
19は扁平片刃石斧で、刃部には使用に伴う大きな剥離及び線状痕、基部には着柄時の衝撃で割れた剥離が残る。側面には丁寧な研磨を施し、丸みを帯びる。2区第2遺構面出土で、長さ6.3cm、身幅2.4cm、厚さ1.1cm、重さ33.3gの粘板岩製。20は頁岩製の扁平片刃石斧で、基部には剥離面が残ること、刃部側が狭い形態などから、現在の基部は元々の基部が割れてしまった後に再研磨して基部を造り出していること、刃部側の側面には剥離面ができ、この剥離面をなくすために研磨した結果、刃部が狭い形態となったと考えられる。刃部にはわずかに線状痕が認められる。2区第2面164号住居跡出土で、長さ4.7cm、身幅2.7cm、厚さ1.1cm、重さ25.4gを測る。

磨製石包丁

21～33は磨製石包丁で、使用石材は21・24・26～32は輝緑凝灰岩、22は凝灰岩、23・25は粘板岩、33は安山岩、34は片岩となる。

石包丁は以下で説明するもの以外でも10数点出土しているが、いずれも小破片であるため、部位が判断できる9個体の計測値を第3表に収めている。

21はほぼ完形品で、表面体部には粗い研磨痕が残る。両面背部の欠損部及び表面体部の窪みは使用によるものではなく、粗加工段階のものである。刃部には微細剥離と線状痕が認められる。両紐孔には回転痕がわずかに残り、表面の紐孔には2つの紐孔を結ぶ方向が、裏面の紐孔には背部と結ぶ方向がわずかに摩擦する。1区第2面66号住居跡出土で、長さ10.0cm、幅3.7cm、厚さ7mm、紐孔間3.2cm、重さ39.0gを測る。22は背部と紐孔の一部のみ残るもので、裏面は剥離する。表面には研磨痕がわずかに残り。外孔径が1.0cm、内孔径が4mmと差があるが、裏面の外孔径は残存状況からあまり大きくならないと思われる。2区第2面83号住居跡出土。23は刃部・背部の一部のみ残り、紐孔は残存状況から外孔径が9mm程度となるもの。表面には研磨痕がわずかに認められるが、裏面には粗加工段階の凹凸が存在する。2区第1面93号堅穴住



第263図 石器・石製品実測図 (1) (12・13は1/2、他は2/3)

居跡出土。24は2区第1面116号住居跡出土で、刃部一部しか残存していないもの。刃部には微細剥離が認められ、裏面体部には研磨痕が良く残る。25は左紐孔1つが残り、右側の割れ面には右紐孔の痕跡がわずかに残る。右紐孔は外孔径が9mm、内孔径が4mm×3mmのやや楕円形を呈する。両孔間の距離的に近く、位置的にも平行していないため、いずれかの紐孔は再穿孔している可能性もある。右紐孔には表面右側と、裏面背部側がわずかに摩滅する。2区第2面158号住居跡出土で、厚さ4.0mm。26は厚さ8mmと厚めのもので、孔間は3.1mmを測る。再加工された刃部右側には微細剥離が認められる。裏面の紐孔には2つの紐孔を結ぶ方向に、表面の左紐孔には背部と結ぶ方向に紐ずれ痕が明瞭に残り、使用形態としては図の裏面が表となる。2区第2面161号住居跡出土。

27は左刃部が二次使用され、大きく剥離する。両面体部には粗い研磨を、両刃部には丁寧な研磨を施す。長さ14.7cm、幅4.7cm、厚さ6mmで、外孔径は4.0cm前後、内孔径は3mm前後、孔間は3.5mmを測る。両紐孔とも敲打により窪みを造った後に穿孔するもの。2区第2面164号住居跡出土で、石材の質は悪い。重さは64.6g。

28は2区第2面50号土坑出土で、二次使用のため刃部は剥離が多く認められる。表面は丁寧に研磨されるが、裏面には敲打痕が残る。孔間は2.6mmとやや狭く、裏面側に孔間を結ぶ方向に摩擦痕が存在することから、使用形態としては図の裏面が表となる。紐孔は敲打により窪みを造った後に穿孔するもの。幅4.6cm、厚さ7.5mm。

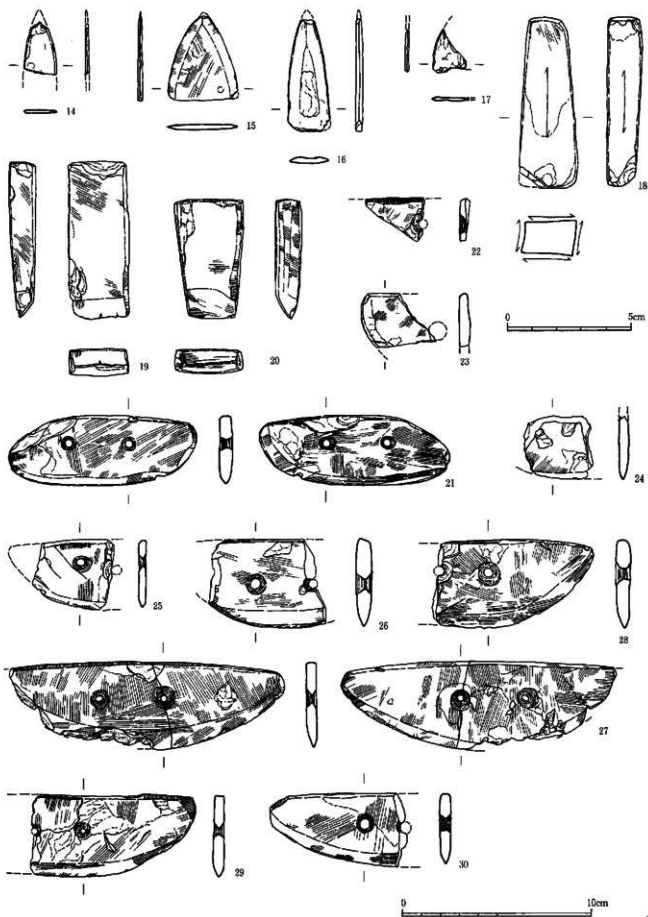
29は刃部に二次加工が認められる、2区第1面116号溝出土品。両面とも敲打痕が残り、表面の方が研磨は粗い。右刃部裏面には二次使用による剥離が存在し、刃部全体も微細剥離が認められる。幅4.2cm、厚さ0.6mm、孔間2.6mmで、裏面側に孔間を結ぶ方向に摩擦痕が存在することから、使用形態としては図の裏面が表となる。30は刃部に微細剥離が認められ、裏面側は研磨が粗い。孔間は2.25cmで、孔内には回転痕が良く残り、孔間を結ぶ方向に摩擦痕が存在する。幅3.9cm、厚さ5.5mmで、2区第2面20号溝出土。31は2区第2面23号溝覆土上層出土で、石包丁の再加工品。孔は外孔径1.1cm、内孔径2mmで、敲打により窪みを造った後に穿孔するもの。右刃部は丸く再加工し、刃部から体部下側は抉りを入れるが、使用形態は不明。長さ4.2cm、幅5.3cm、厚さ10mmで、重さ25.5g。

32は2区第2面24号溝出土の完形品で、両側縁は二次加工する。刃部には微細剥離を有し、長さ9.6cm、幅4.4cm、厚さ7mm、重さ55.1gを測る。孔間は2.4mmで、表面には孔間を結ぶ方向に摩擦痕が存在する。紐孔は敲打により窪みを造った後に穿孔するもの。

33は背部を刃に再加工したもので、再加工時に右側縁部の刃つぶしを行っている。刃部・背部の刃とも微細剥離を有する。孔間は2.8cm程度で、幅3.7cm、厚さ7mmを測る。2区第1面遺構面出土。34は石包丁製作工程の研磨段階前の穿孔段階において割れてしまったために廃棄したものか。背部・刃部も敲打により大まかに形を整えており、敲打により窪みを造った後に穿孔する。厚さ7mmで、2区側溝出土。

石製紡錘車（第265図）

35～39は石製紡錘車で、いずれも滑石を使用したもの。35は断面が台形状になるもので、径4.4cm、厚さ1.4cm、孔径6mm、重さ46.8gを測る。上面端沿いには工具による刻みを3/4周、下



第264図 石器・石製品実測図(2) (14~20は2/3、他は1/2)

面には上面より長く細い刻みをやや粗に施す。側面は丁寧に研磨する。孔は上面方向から穿孔したもので、孔内には縦方向の擦痕が認められる。2区第2面158号住居跡出土。36は1/2ほど残存するもので、すべての面が丁寧に研磨される。孔は上面から穿孔したもので、孔内には縦方向の擦痕が認められる。3区第1面183号住居跡出土で、径4.0cm、厚さ1.5cm。孔径5mmで、重さは18.2g（復元推定総重量36g）を測る。37は3区第1面196号住居跡カマド右袖前の甔内出土で、径4.0cm、厚さ1.2cm、孔径8mm、重さ37.7gを測る。上面には新しいキズも多く存在するが、35下面と同様の細い刻みを施す。下面には35上面と同様の工具によるやや細めの刻みを3/5周させる。孔は上面から穿孔し、孔内には縦方向の擦痕が残る。38は石質の悪い滑石を使用しており、研磨痕はあまり認められない。孔は上面から穿孔したもので、孔内には縦方向の擦痕が残る。4区第1面217号住居跡出土で、径4.7cm、厚さ1.0cm、孔径5mm、重さ42.6gを測る。39も質の悪い滑石で、表面には自然面が多く残る。2区側溝出土で、径4.7cm、厚さ0.8cm、孔径9.5mm、重さ31.0gを測る。孔上面は穿孔による剥離のため、広くなる。

玉類（第265図）

すべて滑石製のものであり、白玉の計測値は第2表を参照していただきたい。40～44の白玉は古墳時代後期後半の竪穴住居跡から出土している。

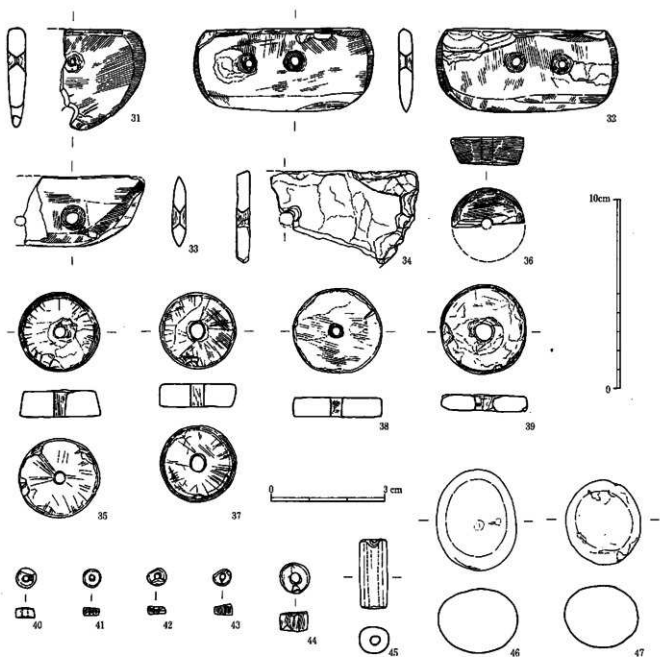
45の滑石製管玉は2区第1面129号住居跡付近遺構面出土で、上下面とも平らではない。上下2方向から穿孔したと考えられるが、孔中心部には土が詰まっており、不明。長さ1.8cm、厚さ0.75cm、孔径3.0mm、重さ1.49gを測る。

投弾状石製品（第265図）

当遺跡からは投弾状土製品も出土しており、46・47も形態的に投弾としての機能を果たすと思われることから、投弾状石製品として報告するが、自然礫の可能性もある。46は2区第1面95号住居跡出土で、長さ5.3cm、幅4.2cm、厚さ3.4cm、重さ103.4gの玄武岩製。47は2区第1面240号ピット出土で、長さ4.5cm、幅4.1cm、厚さ3.2cm、重さ81.3gの玄武岩製。

砥石（第266図）

48はややきめが細かい砂岩製の中砥石で、下端面近くしか残存していない。元々は板状砥石であったと考えられるが、左側面側が割れてしまい、残った3面を砥石として再使用した結果、裏面中央部が大きく窪み現在の形となる。2区第1面90号住居跡出土で、最大厚3.5cm。49は細粒砂岩製の仕上げ用の棒状砥石で、両面には溝が認められるが、刃物等を研いだ溝の可能性が高い。3面を砥石として使用。3区第1面208号住居跡出土で、厚さ2.5cmを測る。50はかなりきめが細かい、仕上げ用の粘板岩製の棒状砥石で、下端面近くしか残存していない。4面を仕上げ用砥石として使用した結果、中央部が大きく窪む。2区第1面104号住居跡付近遺構面出土で、幅4.5cm、厚さ3.1cmを測る。51はきめが細かい砂岩製の仕上げ用板状砥石で、上部は欠損する。4面を砥石として使用するが、裏面は石質が弱く、表面は剥離が進んでおり、キズもよく残る。表面・裏面は使用により窪み、表面下端面には、金属工具による線状のキズが入る。3区第1面196号住居跡付近遺構面出土で、長さ9.9cm、幅4.8cm、厚さ2.2cm、重さ208.7gを測



第265図 石器・石製品実測図(3)(40~45は実大、他は1/2)

標記番号	区・面	出土遺構	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	置き(g)	断面	孔内形状	備考
264-40	2区第2面	152号住居跡	5.5	2.8	2.0	0.11		あり	調査時に削られる
264-41	3区第1面	187号住居跡	4.5	2.0	1.0	0.06		あり	かなり弱い痕あり
264-42	3区第1面	187号住居跡	4.0	1.8	1.0	0.06		あり	かなり弱い痕あり
264-43	3区第1面	187号住居跡	4.5	2.8	1.5	0.05	あり		粗加工面残る、孔上面に凹凸あり
264-44	3区第1面	197号住居跡床面	7.0	5.0	3.0	0.46		あり	

第2表 白玉計測表

る。52はややきめの細かい砂岩製の板状砥石で、上端部及び裏面は欠損しているが、欠損後も表・両側面は砥石として利用しており、中央部は窪む。右側面は刃物等を研いだと思われる段が付き、裏面には金属等の刃先痕が存在する。一部は赤変・ススが付着するため、廃棄後に火を受けたものと思われる。3区第1面169号住居跡東遺構面出土で、長さ8.3cm、幅6.4cm、厚さ2.7g、重さ201.3gを測る。仕上げ砥石。53は非常にもろい砂岩製の砥石で、下端部のみ残る。下端部を敲打により成形し、4面を砥石として利用する。2区第2面24号溝上層出土で、長さ8.6cm、幅3.3cm、厚さ3.6cm、重さ126.2gを測る。粗砥石。54は上下端・表面が欠損する棒状砥石で、きめの細かい砂岩製の仕上げ用砥石である。特に右側面は使用のため大きく窪む。3区第1面29号溝北出土で、幅2.8cm。

敲石（第266図）

55は2区第2面16号溝出土の玄武岩製の敲石で、先端部を敲打による不整形剥離が認められる。長さ8.4cm、幅5.4cm、厚さ3.2cm、重さ245.4g。

凹石（第266図）

56は長楕円形を呈する凹石で、両面中央部が窪み、表面は2ヶ所凹部がつながった状態となる。表面側は1cm程度窪むが、裏面側は3mm程度しか窪まない。上端には敲打痕が認められる。2区第1面121号住居跡出土で、長さ13.5cm、幅10.1cm、厚さ5.5cm、重さ830.7gを測る玄武岩製。57は両面中央部が窪む凹石で、長さ8.5cm、幅9.0cm、厚さ5.5cm、重さ408.7gを測る玄武岩製のもの。敲打により表面は5mm、裏面は3mmほど窪む。2区第1面遺構面出土。

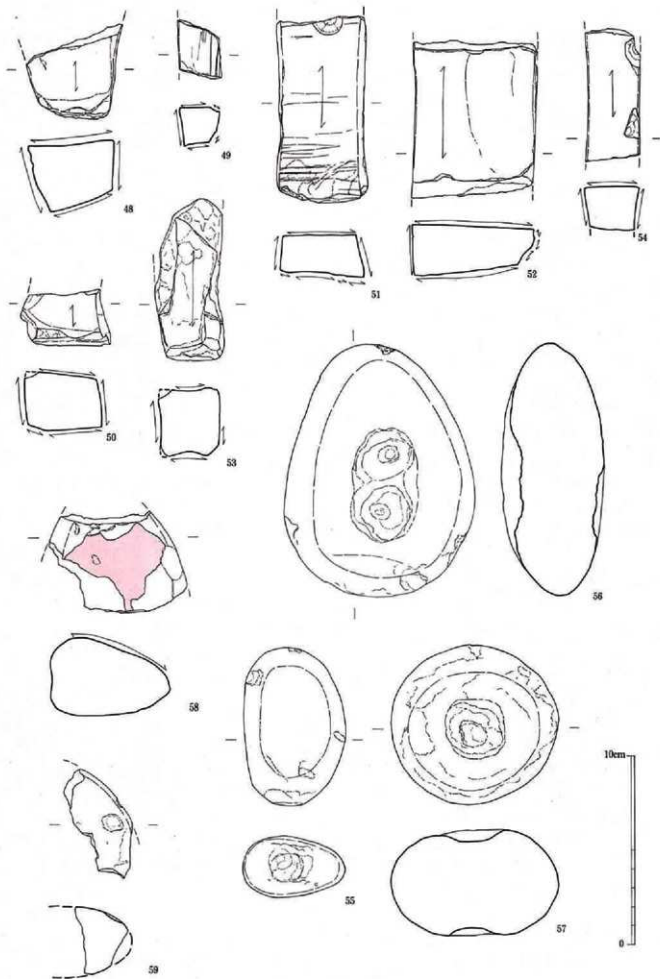
磨石・台石（第266図）

58は断面が隅丸三角形になる磨石か。表面のトーンで示した範囲には朱が付着するため、朱を磨り潰す際に使用したもの。台石としては非常に小さく、また擦過面が斜めであることは、固形化させた朱の特徴を表しているものか。表面には敲石による擦痕が認められない。2区第1面108号住居跡出土で、現状で長さ5.0cm、幅6.5cm、厚さ4.1cmの玄武岩製。

59は径1cm、深さ2mm程度の浅い窪みが右側縁端に敲打によって造られているが、用途・機能とも不明。2区第1面35号土坑出土の玄武岩製。

石皿（台石）（第267図）

60～65は石皿（台石）である。60は1/4強残存するもので、表面中央部は使用により窪む。2区第1面121号住居跡出土で、玄武岩製。62は表面中央部に敲打痕が残るもので、表面全体も良く摺れている。裏面中央部も摺れた痕跡が認められるため、この面も使用したと思われる。2区第2面150号住居跡出土で、長さ26.1cm、幅20.5cm、厚さ7.2cm、重さ6.086gの玄武岩製。62は表面中央部にわずかな敲打痕が残るもので、両面は全体的に摺れている。2区第1面16号溝出土で、長さ18.0cm、幅15.4cm、厚さ4.9cm、重さ2.109gの玄武岩製。63は両面が摺れており、表面には径3.0cmの円形の敲打痕が存在するが、この敲打痕の使用形態等は不明。2区第2面24号溝出土で、長さ21.0cm、幅9.0cm、厚さ5.3cm、重さ1.694gを測る玄武岩製。64は3区第1面



第266图 石器·石製品実測图(4)(1/2)

34号溝出土の玄武岩製の石皿で、両面中央部は使用により窪むが、表面の方がより顕著な窪みとなる。左側面の欠損部は火を受けた際に割れたもの。長さ20.1cm、幅18.7g、厚さ7.8cm、重さ3.730gを測る。65は2区第2面SX05出土の片岩製の石皿で、両面とも非常に良く揃れている。上端部は欠損したもの。長さ25.0cm、幅10.3cm、厚さ3.5cmで、1.956gを測る。

(2) 土製品 (図版133・134、第268図)

土鍾

1～8は管状土鍾である。個々の計測値は第4表に掲載しているので、参照いただきたい。1は下膨れ、8は円錐状になる以外は、すべて中央部が最大径を測る平面形態となる。全長は、4・7は5cm前後、それ以外は4cm前後になり、幅はすべて1.2cm前後、孔径は4が2.0cm、6が5.0cmを測るが、3.0cm前後のものが多い。重さは2・3が3g、1・5・6が4.5g前後、4・7・8が7gほどになり、ややばつぎが見られる。胎土はいずれも良く、色は1～4が灰黄褐色、5・6が橙褐色、7・8が黄褐色を呈する。

投弾状土製品

9～11は投弾状土製品で、いずれも胎土は精良、焼成も良好、色は灰黄褐色を呈する。9は下半分を欠損するが、復元推定全長は6cmほどになるもの。黒斑がある。厚さ1.7cmの2区第2面15号溝出土。10は2区第2面20号溝出土の完形品で、長さ5.0cm、厚さ2.5cm、重さ25.5gを測り、黒斑も見られる。11は一部が欠損し、表面には調査時のキズが残るもの。長さ4.8cm、厚さ2.3cm、重さ19.8gで、表面には黒斑が認められる。

不明土製品

12・13は投弾状土製品かとも考えたが、紡錘形ではなく、形態が異なるため不明土製品として報告する。いずれも焼成は良く、色は灰色～黒色で2区第2面96号住居跡出土。12は半円形で、径2.5cm、厚さ1.5cm、重さ8.4gを測る。13は長楕円形で、表面には凹凸が顕著である。長さ2.8cm、幅2.3cmで、重さ14.3g。

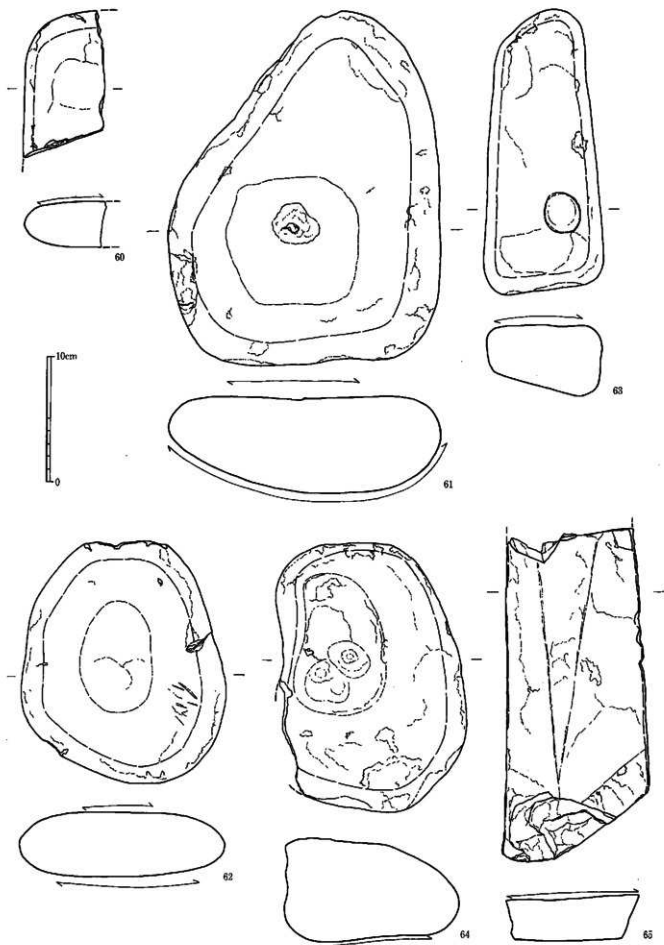
土製玉類

14・15は土玉。14は2区第1面94号住居跡出土で、径1.1cm、厚さ0.9cm、孔径2mm、重さ0.9gを測る。胎土・焼成は良く、色は灰黒色を呈する。15は径1.8cm、厚さ1.6cm、孔径は2mmを測り、下端の孔は上端に比べ、やや狭くなる。2区第2面SX05出土で、胎土はやや砂を含み、焼成は良く、色は灰橙褐色を呈する。

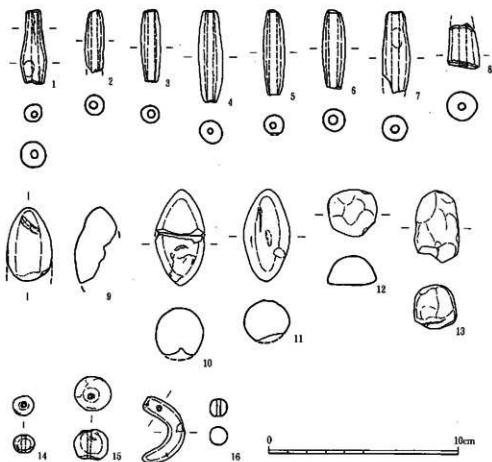
16は土製勾玉で、平面形はU字状、断面は正円形を呈するもの。3区第1面213号住居跡出土で、長さ3.6cm、径9mm、重さ5.1gを測り、胎土には細粒を若干含み、焼成は良好、色は灰褐色を呈する。

製塩土器 (図版134、第269図)

1～14は製塩土器であり、その多くは外面に二次加熱痕、器表の剝離や荒れが認められる。



第267图 石器・石製品実測图(5)(1/3)



第268図 土製品実測図 (1/2)

器形と内外面の調整、器表の状態などから以下14点を製塩土器としてピックアップしたが、当遺跡では多量の土器が出土したために見逃してしまったものや、他の器種を製塩土器として転用したものも存在すると思われるが、断定できる例は確認できなかった。

14点の製塩土器は器形と調整から大きくは3つに分類でき、昨年度報告した『堂畑遺跡Ⅱ』の製塩土器もすべてこの3つのタイプに当てはまる。

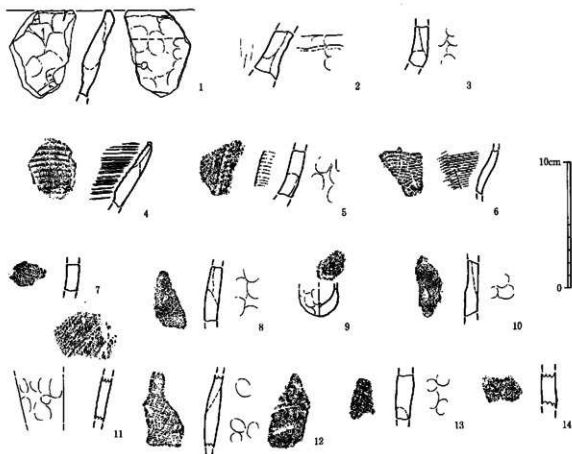
I類 砲弾型の器形（底部は9のような丸底）で、外面はナデ調整、内面には布目痕が残るもの（7～14）。

Ⅱ-1類 器形は鉢形（底はおそらく尖底）となるが、外面はナデ調整、内面は二枚貝腹縁かハケ状工具で擦過するもの（4～6）。

Ⅱ-2類 器形は鉢形（底はおそらく尖底）で、口縁部内外面をナデ調整するもの（1～3）。

以下では個別に説明を加える。

1は2区第1面104号住居跡出土で、口縁端部は上につまみ出し、内面口縁部近くには工具によるナデを施す。2は1区22号住居跡出土で（昨年度未報告分）、厚さのある屈曲部片。1・2の胎土・焼成とも良く、色は橙褐色。3は1区遺構面出土で（昨年度未報告分）、胎土には細粒多く含み、内外面は二次加熱の痕跡が残る。色は暗赤褐色。



第269図 製塩土器実測図 (1/3)

4は内面を幅4mmほどの二枚貝腹縁で擦過するもので、口縁部に近い部位のもの。胎土には細粒を多く含み、色は橙褐色を呈する。2区第1面110号住居跡カマド煙道部ビット内出土。5は内面の一部に幅4mmほどの二枚貝腹縁による擦過が残る。外面は火を受けたため荒れる。胎土には細粒を多く含み、色は黄褐色を呈する。1区遺構面出土。6は内面を幅3mmほどのハケ工具で調整するもの。胎土・焼成とも非常に良く、色は黄褐色を呈する。1区1号溝覆土中層出土。

7は2区第1面90号住居跡出土で、内面には幅1.5mmの布目が残る。色は橙褐色。8は2区第1面110号住居跡カマド煙道部ビット内出土で、内面下部には布目痕がわずかに残る。胎土には細粒を多く含み、外は橙褐色、内は黄褐色。9は2区第1面114号住居跡出土底部片で、内面には幅1mmほどの布目と、布端が残る。胎土・焼成とも良く、色は橙褐色。10は2区第1面113号住居跡出土で内面には布目痕がないが、器形からこの類に含めることができる。胎土は細粒を多く含み、外は橙褐色、内は黄褐色。11は2区第1面319号ビット出土で、外面は火を受け器表が荒れ、内面には幅1×2mmほどの布目痕と布閉じ合わせ痕が残る。焼成は良く、外は灰褐色、内は褐色を呈する。12は2区第2面遺構面出土で、口縁部に近いもの。内面には幅1×1.5mm布目痕が残り、内面上部まで二次加熱痕が認められる。色は橙褐色。13は1区遺構面出土で、外面には指おさえ痕が残り、内面は布目痕がわずかに残る。胎土には細粒を多く含み、色は橙褐色。14は2区カクラン出土で、内面は摩滅するが、布目痕がわずかに残る。胎土

には細粒を多く含み、色は橙褐色を呈する。

今回報告した製塩土器はいわゆる焼塩土器である。焼塩土器とは玄界灘式製塩土器やその他の方法で採取したなお潮解性のある塩をさらに加熱し、塩解性を除く作業のために使用された土器であり、また土器を使用することで、塊状に固化する作用を果たすことから固形塩を得ることができたとされるものである。当遺跡出土焼塩土器については、内面は布日痕や擦過、外面は指押さえ痕が顕著なことから、これまで指摘されている焼塩土器と同様の型づくりによる成形を行っていたことが確認できる。特に二枚貝を使用したものが4点(4・5)出土していることは(3次調査1区1号溝出土資料を含む)、海岸部での焼塩土器製作を推測させる資料であり、胎土からも他地域(遺跡)の上が多く、海岸部で塩を土器内につめて当遺跡に搬入した可能性が高い。このことは、玄界灘沿岸の製塩遺跡(海の中道遺跡等)では煎熬用の製塩土器に対する焼塩土器の出土割合が低いこともこのことの裏付けとなろう。なお、内面をハケ状工具で擦過したもの(6)については、胎土が在地のものである。甘木市塔ノ上遺跡出土製塩土器について伊崎俊秋氏は、器形の様相から在地産のものもかなり存在する印象を受けると指摘していることから(伊崎1987)、今後土器の詳細な出土状況の検討や胎土分析などを進めて行く必要があろう。

次に出土状況や時期を検討すると、当遺跡では焼塩土器が7世紀末～8世紀中頃の堅穴住居跡・溝などから出土し、中でも3次調査1区1号溝では当遺跡出土量の45%もの割合で出土し、このほとんどがⅠ類に分類される。仁右衛門畑遺跡では7世紀末～8世紀中頃の堅穴住居跡・溝等からⅡ類1点以外はすべてⅠ類の焼塩土器が出土しており、特にカマド内からの出土割合が高い。このカマド内からの出土について、伊崎氏は塔ノ上遺跡でもカマドから焼塩土器が出土した例が23棟分あり、焼塩処理をカマドで行っていたと想定する。当遺跡においても2区第1面110号住居跡カマド内から2点の焼塩土器片が出土しており、焼塩土器に見られる二次加熱痕とカマドによる二次加熱を受けた土器の二次加熱痕の色調が似ていることも、伊崎氏の想定を支持する傍証になろう。

また大宰府出土の焼塩土器を検討した森田勉氏は、同土器の出土時期が8世紀～9世紀前半に限定され、出土量から8世紀中頃～後半頃が最盛期と位置づけており(森田1983)、当遺跡も大宰府での在り方とほぼ一致する。

器形から型式分類したⅠ・Ⅱ類は固形塩製作の有無や塩の使用法による差などが考えられ、また運搬員としての利便性はⅡ類がⅠ類に勝り、出土量もⅡ類の方が多という指摘もある(小田1996)。このことについては類例の増加や良好な出土状態の検出を待って判断したい。

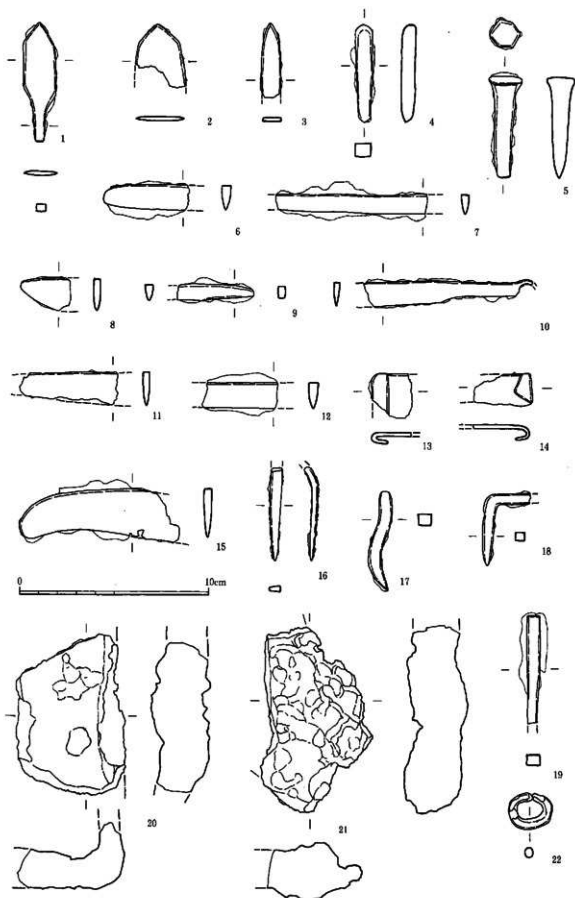
参考文献

- 森田 勉 1983『焼塩壺考』『大宰府古文化論叢』下巻 古川弘文館
伊崎俊秋 1987『VI. 総括 2 焼塩土器について』『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告9』福岡県教育委員会
山崎純男 1994『福岡県』『日本土器製塩研究』青木書店
小田和利 1996『製塩土器から見た律令期集落の様相』『九州歴史資料館研究論集21』九州歴史資料館

(3) 金属器

鉄器 (図版134・135、第270図)

1は3区表土出土の有茎の鉄鎌である。完形で、全長6.3cm、最大幅1.7cm、鎌身部厚0.2cm、茎部厚0.4cm、重さ10.7gを測る。鎌身部がほぼ六角形をなす鉄鎌であり、関節は斜関で、左右が若干非対称である。また、茎部の断面は方形である。鎌身部は0.2cmと扁平であるが、茎部の方はそれよりも厚く作る。2は2区166号住居跡出土の鉄鎌である。下半部を欠損し、残存長3.4cm、最大幅2.7cm、最大厚0.2cm、重さ3.3gを測る。鎌身部下部から先端に向けて徐々に幅を減じながら、先端部より約1cmの部分で稜をなし、さらに幅を減じて先端部にいたる。厚さは約0.2cmと扁平である。3は試掘トレンチ出土のヤリガンナである。先端部の破片で、残存長3.9cm、最大幅1cm、最大厚0.2cm、重さ3.3gを測る。先端は上方にやや反りあがる。4は2区第1面出土の小形のノミ状工具である。ほぼ完形で、全長5.2cm、最大幅8.5cm、最大厚0.8cm、重さ8.9gを測る。断面は方形で、基端部から約4cmの部分より徐々に厚みを減じ、刃は片刃をなす。また、基端部は丸みを帯びる。5は1区第1面表採の鉄鑿である。完形で、全長5.4cm、身部最大幅1cm、最大厚1cm、頭部径約1.8cm、重さ17.4gを測る。頭部は平面六角形状に作り出す。断面形状はサビのため不明瞭ではあるが、ほぼ方形をなすものと思われる。6は2区158号住居跡出土の刀子である。残存長4.5cm、最大幅1.3cm、最大厚0.5cm、重さ9.3gを測る。先端部を含む部分の破片で、茎部側を欠損する。7は2区第1面出土の刀子である。残存長8cm、最大幅1cm、最大厚0.5cm、重さ17.9gを測る。茎部側および先端部を欠損する。使用による研ぎ減りのためか、幅が約1cmとかなり短い。8は1区遺構面に出土した刀子である。先端部の破片で、残存長2.6cm、最大幅1.7cm、最大厚0.4cm、重さ5.1gを測る。9は2区147号住居跡出土の刀子である。残存長4.1cm、最大幅0.9cm、最大厚0.5cm、重さ5.2gを測る。茎部は長さ2.6cmで、断面は方形である。身部の幅は約0.9cmとかなり短い。10は2区西側溝出土の素環頭刀子である。残存長8.9cm、最大幅1.3cm、最大厚0.4cm、重さ9.3gを測る。身部先端側および素環頭部の一部を欠損する。関節はあまり明瞭ではない。11は1区第1面25号住居跡出土の刀子である。先端部および基部を欠損し、残存長5.2cm、最大幅1.8cm、最大厚0.4cm、重さ10.6gを測る。12は2区145号住居跡出土の刀子である。残存長4cm、最大幅1.4cm、最大厚0.5cm、重さ16.2gを測る。茎部側および先端部を欠損する。13は2区162・165号住居跡出土の手鎌である。残存長2.2cm、残存幅2.4cm、最大厚0.2cm、重さ6.1gを測る。折り返し部分の破片である。14は2区120号住居跡出土の手鎌である。残存長3.2cm、最大幅1.8cm、最大厚0.2cm、重さ4.6gを測る。折り返し部を含む破片で、折り返し部の下方は閉じる。15は2区西側溝出土の鉄鎌である。残存長8.5cm、最大幅2.5cm、最大厚0.4cm、重さ30.2gを測る。先端部を含む部分の破片で、基部側を欠損する。刃部が内湾するいわゆる曲刃鎌である。16は2区114号住居跡カマド出土の鉄釘である。完形で、全長4.9cm、最大幅0.6cm、最大厚0.3cm、重さ2.5gを測る。断面は長方形で、先端部は尖る。また、基端部より約1cmの部分で若干湾曲する。17は試掘トレンチ出土の鉄釘である。完形で、全長6.4cm、最大幅0.7cm、最大厚0.8cm、重さ4.8gを測る。断面は方形で、身部は湾曲する。18は試掘トレンチ出土の鑿と思われる鉄器である。長さ3.8cm、最大幅0.5cm、重さ4.2gを測る。断面は方形で、先端部は尖り、もう一方は欠損する。19は1区第1面遺構面出土の鉄釘と思われる鉄器である。残存長5.8cm、最大幅0.7cm、最大厚0.6cm、重さ12.7



第270图 鉄製品実測图 (1/2)

gを測る。先端部を欠損し、断面は方形である。20は2区第1面遺構面出土の耳環である。長径2.3cm、短径1.9cm、厚さ0.4cm、重さ7.1gをはかる。腐食が進んだ部分は白色を呈し、残りの部分は褐色を呈する。(能登原)

鉄滓 (図版135・136、第270図20・21)

20は2区133号住居跡から出土した。炉壁のコーナー部分か。重さ108.9gを測る。21は2区98号住居跡から出土した。重さ212.8gを測る。23は2区109号住居跡から出土した。重さ19.5gを測る。24は2区120号住居跡から出土した。重さ16.4gを測る。25は2区128号住居跡から出土した。4つの破片に分かれており、総重量は102.9gを測る。26は3区200号住居跡から出土した。重さ38.6gを測る。27は5区82号土坑から出土した。4つの破片で、総重量は33.4gである。28は5区45号溝から出土した。3つの破片に分かれており、総重量は52.6gを測る。29は5区48号溝から出土した。重さは18.5gを測る。30は5区SX06から出土した。9つの破片に分かれており、総重量は269.3gを測る。31は2区第1面遺構面出土である。重量は38.3gを測る。

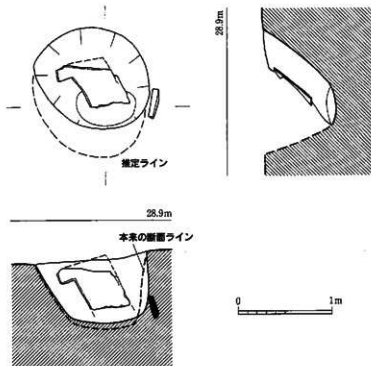
青銅器 (図版136、第271・272図)

この青銅器は1区第2面116号ピットより出土したもので、昨年の報告書で出土状況実測図・写真、出土状況の解説のみ掲載した(『堂畑遺跡Ⅱ』p159・160)。

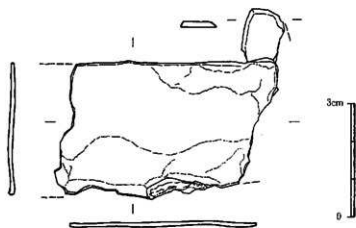
116号ピットは1区東中央南端の弥生時代中期後半の5号土坑を切る南北12cm×東西14cm、深さ8cmを測る小規模なピットである。青銅器は床面から3cm浮いており、やや西に傾いた状態で出土した。青銅器とピット壁の傾斜はほぼ同じであり、青銅器の大きさに合わせて、ピットは掘られたものと考えられる。埋土は灰黄褐色砂質土である。出土土器はないが、ピット横から弥生時代後期壺片が出土している。

以上が出土状況の概要であるが、青銅器片の時期が不明であったため、鉛同位対比分析を行い、その成果を当報告書に収録している(IV-3参照)。ここではその成果と合わせて実測図を掲載し、所見を述べたい。

調査段階では形状から青銅製鋸先と考えていたが、厚さが1mm程度であることから青銅製鋸先ではない不明の青銅器である。



第271図 116号ピット実測図(再録)(1/4)



第272図 青銅器実測図（実大）

この青銅器は1×1.4cmの長方形突出部が付くもので、長さ6cm、幅5cm（突出部も含む）、厚さ1.0～1.5mmと非常に薄い造りのもの。上部部はすべて生きており、やや先端部を尖らせた面調整を行う。右側縁は検出段階で削り取ったもので、鋤先のような直角になる形態になるものか。下部部は上とは異なり、やや上方に捲れ、また表面に力が加わってきたと考えられる窪みが存在することから、力が加わったためにこの形状

になった可能性がある。下部部はほぼすべての面が生きおり、また端部が丸いことから再加工した可能性が高い。左側縁も下部部と同じ状況であり、同じく再加工した可能性がある。青銅器の断面は微妙な凹凸がある小さな波状を呈する。裏面は表面と対応する凹凸がある以外は、平滑な面である。表・裏面とも使用痕や研磨痕は確認できなかった。銅質は淡緑色で、あまり質はよくないもの。重さは7.3g。

IV-3の分析結果から、当青銅器は華北産材料を使用したことが判明し、弥生時代後期～末に属する可能性が高いという結果になった。

ピット周囲には後期中頃の25・71～73号住居跡が存在することなど、弥生後期段階でも集落が継続していたことが分かるが、問題は非常に薄い当青銅器の器種及び使用方法である。このように非常に薄い製品が弥生時代後期に属するかという疑問もあるため、類例があればご教示いただきたい。

押出番号	種類	区画	出土場所	長さ(m)	幅・径(m)	厚さ(m)	孔距・孔間(m)	重量(g)	材質	備考
第264回-1	打製石鏝	2	2 15号溝	2.3	2	0.5		1.4	頁岩	磨製石包丁の転用品
第264回-2	打製石鏝	3	1 P501	2.3	1.5	0.55		1.1	黒曜石	
第264回-3	石鏝	2	1 遺構南	3.2	1.8	0.8		3.1	黒曜石	両側縁刃つよし
第264回-4	湖片石鏝	2	1 120号住居跡	3.7	1.6	0.7		3.4	黒曜石	
第264回-5	湖片石鏝	2	2 149号住居跡	2.8	1.6	0.35		2	黒曜石	
第264回-6	湖片石鏝	2	2 151号住居跡	3	2.8	0.8		5.1	黒曜石	
第264回-7	湖片石鏝	3	1 214号住居跡	2.5	2.6	0.75		4.3	黒曜石	
第264回-8	湖片石鏝	2	2 48号十枚屋土下洞	2.8	1.5	0.6		1.6	黒曜石	
第264回-9	湖片石鏝	2	2 15号溝	3.3	2.4	0.75		7.9	黒曜石	
第264回-10	湖片石鏝	2	2 15号溝覆上F層	2.3	2	0.55		2.1	黒曜石	ドリルとして使用?
第264回-11	湖片石鏝	5	2 S X 05	3.8	2.6	0.9		8.7	黒曜石	
	湖片石鏝	2	1 遺構南	3.9	2.2	0.8		5.2	黒曜石	2 側縁使用
	湖片石鏝	2	1 遺構南	2.7	2.6	0.3		2.6	黒曜石	1 側縁使用
	湖片石鏝	2	1 遺構南	3	3.3	0.7		9	黒曜石	1 側縁使用、2 面自然面残る
	湖片石鏝	2	表採	3.5	2.7	0.4		4.8	黒曜石	2 側縁使用、1 面自然面残る
	湖片石鏝	1	表採	2.6	2.1	0.8		3.9	黒曜石	2 側縁使用、1 面自然面残る
第264回-12	磨製石斧	2	1 81号住居跡	6	5	1.3		60.6	軟岩質	
第264回-13	打製石斧	2	2 B 北側溝	12	5.8	1		150.2	片岩	
第265回-14	磨製石鏝	2	2 164号住居跡	2.1	1.3	0.18		0.8	融泥片岩	
第265回-15	磨製石鏝	2	2 4号円形溝	3.4	2.8	0.2		2.6	凝灰岩	
第265回-16	磨製石鏝	2	2 2区第2面遺構南	4.5	1.6	0.38		2.6	片岩	
第265回-17	磨製石鏝	1	1 1区遺構南	1.7	1.3	0.15		0.4	片岩	
第265回-18	柱状片刃石斧	2	2 146号住居跡	6.8	2.3	1.4		39	頁岩	底面に転用・基部に磨痕
第265回-19	扁平片刃石斧	2	2 164号住居跡	6.3	2.4	1.1		25.4	粘板岩	
第265回-20	扁平片刃石斧	2	2 164号住居跡	4.7	2.7	1.1		33.3	頁岩	基部・側面再加工
第265回-21	磨製石包丁	1	2 65号住居跡	10	3.7	0.7	3.2	39	輝緑凝灰岩	
第265回-22	磨製石包丁	2	1 83号住居跡P 2	3.1	2.2	0.5		3.5	凝灰岩	
第265回-23	磨製石包丁	2	1 93号住居跡	4	2.9	0.55		8.4	粘板岩	
第265回-24	磨製石包丁	2	1 116号住居跡	3.6	3.4	0.5		10	輝緑凝灰岩	
第265回-25	磨製石包丁	2	2 158号住居跡	3.5	3.8	0.4		11.3	粘板岩	内穿孔ありか
第265回-26	磨製石包丁	2	2 161号住居跡	6.2	4.7	0.8	3.1	39.8	輝緑凝灰岩	再研磨痕あり
第265回-27	磨製石包丁	2	2 164号住居跡	14.7	4.7	0.8	3.5	64.6	輝緑凝灰岩	2次使用痕あり
第265回-28	磨製石包丁	2	2 50号七塔	8.2	4.6	0.75	2.6	45.6	輝緑凝灰岩	2次使用痕あり
第265回-29	磨製石包丁	2	1 18号溝	8.7	4.2	0.6	2.6	45.1	輝緑凝灰岩	2次使用痕あり
第265回-30	磨製石包丁	2	2 20号溝	6.2	3.9	0.55	2.25	25.5	輝緑凝灰岩	
第266回-31	磨製石包丁	1	2 23号溝覆上上層	4.2	5.3	1		25.5	輝緑凝灰岩	再加工品(缺りあり)
第266回-32	磨製石包丁	2	2 24号溝	9.6	4.4	0.7	2.4	55.1	輝緑凝灰岩	再研磨痕あり
第266回-33	磨製石包丁	2	1 遺構南	5.8	3.7	0.7	2.8	24	安山岩	野部を刃部に再加工
第266回-34	磨製石包丁	2	1 割溝	7.7	4.9	0.7		41	片岩	未製品
	磨製石包丁	2	2 15号溝	4.6	3.8	0.5	10.1	輝緑凝灰岩	刃部一部残る、刃部使用痕あり	
	磨製石包丁	2	2 15号溝	3.3	3.5	0.2	0.5	3.6	*	孔一部残る
	磨製石包丁	2	2 25号溝	4.5	2.6	0.6	0.5	8	片岩	孔1つのみ残る
	磨製石包丁	2	1 遺構南	5	4.6	0.8	0.4	20.5	輝緑凝灰岩	孔・背部一部残る、鋭い研磨痕よく残る、孔部若干磨い調整
	磨製石包丁	2	2 遺構南	6.8	4.1	0.8		20	輝緑凝灰岩	背・刃部一部残る、背部も若干調整
	磨製石包丁	2	2 遺構南	7	4.2	0.8	0.45	32.2	*	背・刃部一部残る、背部も若干調整、孔部丁寧に調整、刃部使用痕あり
	磨製石包丁	2	表土	7	3	0.8	0.4	14	*	刃部・孔1つ残る。孔一つは半分欠、刃部使用痕あり
	磨製石包丁	2	表土	6.6	3.6	0.7	0.4	14.6	*	刃・背部一部残る、孔1/3残存
	磨製石包丁	3	2 遺構南	4.4	5	0.75		19.3	*	刃・背部一部残る、刃部には使用痕あり
第266回-35	石製紡錘車	2	2 158号住居跡	4.4	1.4	0.6	46.8	滑石		工具による上下面の削みあり
第266回-36	石製紡錘車	3	1 183号住居跡	4	1.5	0.5	18.2	滑石		
第266回-37	石製紡錘車	3	1 196号住居跡カマド	4	1.2	0.8	37.7	滑石		工具による上下面の削みあり
第266回-38	石製紡錘車	3	1 217号住居跡	4.7	1	0.5	42.6	滑石		
第266回-39	石製紡錘車	2	1 西側溝	4.7	0.8	0.95	31	滑石		
第266回-40	白玉	2	2 152号住居跡	5.5	2.8	0.2	0.11	滑石		
第266回-41	白玉	3	1 187号住居跡	0.45	0.2		0.1	0.06	滑石	
第266回-42	白玉	3	1 187号住居跡	0.4	0.18		0.1	0.06	滑石	
第266回-43	白玉	3	1 187号住居跡	0.45	0.28		0.15	0.05	滑石	
第266回-44	白玉	3	1 187号住居跡東面付道	0.7	0.5		0.3	0.48	滑石	
第266回-45	青玉	2	1 129号住居跡付西遺構南	1.8	0.75	0.75	0.3	1.49	滑石	
第266回-46	投擲状石製品	2	1 95号住居跡	5.3	4.2	3.4	103.4	玄武岩		
第266回-47	投擲状石製品	2	1 P240	4.5	4.1	3.2	81.3	玄武岩		
第267回-48	砥石	2	1 90号住居跡	4.6	4.8	3.5	115.7	砂岩		
第267回-49	砥石	3	1 208号住居跡	2.5	2.1	2.5	19.7	融粒砂岩		中砥石

第3表 石器・石製品・土製品・金属器一覽表(1)

標記番号	種類	区	区	出土場所	長さ(m)	幅(m)	厚(m)	孔径・孔距(m)	重量(g)	材質	備考
第267区-50	砥石	2	1	184号住居跡付遺構南	3	4.5	3.1		65.8	粘板岩	住上付砥石
第267区-51	砥石	3	1	189号住居跡付遺構南	9.9	4.8	2.7		208.7	砂岩	住上付砥石
第267区-52	砥石	3	1	169号住居跡東遺構南	8.3	6.4	2.2		201.3	粘板砂岩	住上付砥石
第267区-53	砥石	2	2	24号溝掘土層	8.6	3.3	3.6		126.2	砂岩	板砥石
第267区-54	砥石	3	1	29号溝	6.9	2.8	2.3		58.2	砂岩	住上付砥石
第267区-55	砥石	2	1	18号溝	8.4	5.4	3.2		245.4	玄武岩	
第267区-56	砥石	2	1	131号住居跡	13.5	10.1	5.5		880.7	玄武岩	
第267区-57	砥石	2	1	遺構南	8.5	9	5.5		408.7	玄武岩	
第267区-58	砥石か	2	1	108号住居跡	5	6.5	4.1		159.5	玄武岩	朱付青
第267区-59	磨石	2	1	35号土坑	5.8	2.5	3.6		63.2	玄武岩	
第268区-60	石皿	2	1	121号住居跡	9.7	6.3	3.6		443.8	玄武岩	
第268区-61	石皿	2	2	159号住居跡	26.1	20.5	7.2		6096	玄武岩	
第268区-62	石皿	2	1	18号溝	18	15.4	4.9		2109.2	玄武岩	
第268区-63	石皿	2	2	24号溝	21	9	5.3		1694.8	玄武岩	
第268区-64	石皿	3	1	34号溝	20.1	18.7	7.8		3730.4	玄武岩	
第268区-65	石皿	2	2	SOX05	25	10.3	3.5		1956.9	片岩	
第269区-1	土鏃	2	1	93号住居跡	3.9		1.3	0.3	4.6		
第269区-2	土鏃	2	1	184号住居跡付遺構南	3.3		1	0.4	2.4		
第269区-3	土鏃	2	1	P275	3.8		0.9	0.35	2.9		
第269区-4	土鏃	2	1	P276	4.8		1.2	0.2	5.6		
第269区-5	土鏃	2	1	西側溝	4.5		1	0.25	4.4		
第269区-6	土鏃	2	1	南側溝	4.2		1.2	0.5	4.3		
第269区-7	土鏃	2	1	遺構南	4.3		1.3	0.3	7		
第269区-8	土鏃	2	1	試掘トレンチ	2.4		1.6	0.3	5.5		
第269区-9	投擲状土製品	2	2	15号溝	3.9		2.5		13		
第269区-10	投擲状土製品	2	2	20号溝	5		2.5		25.5		
第269区-11	投擲状土製品	2	1	2区北側溝	4.8		2.3		19.8		
第269区-12	不明土製品	2	1	96号住居跡	2.5		2.6		8.4		
第269区-13	不明土製品	2	1	96号住居跡P1	2.8		2.2		14.3		
第269区-14	土瓦	2	1	94号住居跡			1.1	0.9	0.2	0.9	
第269区-15	土瓦	2	2	SOX05			1.8	1.6	0.2	3.5	
第269区-16	土製勾玉	3	1	213号住居跡	3.6		0.9		5.1		
第270区-1	製塩土器	2	1	104号住居跡	6.9						II-2類
第270区-2	製塩土器	1	1	22号住居跡P3	3.7						II-2類
第270区-3	製塩土器	1	1	遺構南	3.2						II-2類
第270区-4	製塩土器	2	1	110号住居跡カマド	4.9						II-1類
第270区-5	製塩土器	1	1	遺構南	3.6						II-1類
第270区-6	製塩土器	1	1	1号溝掘土中層	3.5						II-1類
第270区-7	製塩土器	2	1	90号住居跡	2						I類
第270区-8	製塩土器	2	1	111号住居跡P1	4.3						I類
第270区-9	製塩土器	2	1	114号住居跡	2						I類
第270区-10	製塩土器	2	1	113号住居跡P1	4.5						I類
第270区-11	製塩土器	2	1	P310	3.8						I類
第270区-12	製塩土器	2	2	遺構南	5.8						I類
第270区-13	製塩土器	1	1	遺構南	3.5						I類
第270区-14	製塩土器	2	1	カクラン	3						I類
第271区-1	鉄鏃	3	1	表土	6.3	1.7	0.2		10.7		
第271区-2	鉄鏃	2	2	166A号住居跡	3.4	2.7	0.2		3.3		
第271区-3	鏃			試掘トレンチ	3.9	1	0.2		3.3		
第271区-4	ノミ状工具	2	1	遺構南	5.2	8.5	0.8		8.9		
第271区-5	鉄鏃	1	1	表土	5.4	1	1		17.4		
第271区-6	刀子	2	2	158号住居跡	4.5	1.8	0.5		9.3		
第271区-7	刀子	2	1	遺構南	8	1	0.5		17.9		
第271区-8	刀子	1	1	遺構南	2.6	1.7	0.4		5.1		
第271区-9	刀子	2	2	147号住居跡	4.1	0.9	0.5		5.2		
第271区-10	素燧燧刀子	2	2	西側溝	8.9	1.3	0.4		9.3		
第271区-11	刀子	1	1	25号住居跡南西隅	5.2	1.8	0.4		10.6		
第271区-12	刀子	2	2	145号住居跡	4	1.4	0.5		16.2		
第271区-13	手鏃	2	2	162号住居跡	2.2	2.4	0.2		6.1		
第271区-14	手鏃	2	1	120号住居跡	3.2	1.8	0.2		4.6		
第271区-15	鉄鏃	2	2	西側溝	8.5	2.5	0.4		30.2		
第271区-16	鉄釘	2	1	114号住居跡カマド	4.9	0.6	0.3		2.5		
第271区-17	鉄釘			試掘トレンチ	6.4	0.7	0.8		4.8		
第271区-18	鏃?			試掘トレンチ	3.8	0.5	0.5		4.2		
第271区-19	鉄釘	1	1	遺構南	5.8	0.7	0.6		12.7		
第271区-20	耳環	2	1	遺構南	2.3	1.9	0.4		7.1		
第273区	青銅幣	1	2	P116	6	5	0.1		7.3		

第4表 石器・石製品・土製品・金属器一覧表(2)

報告書抄録

ふりがな	どうはたいせき							
書名	堂畑遺跡Ⅲ							
副書名	福岡県うきは市吉井町新治所在遺跡の調査							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第23集							
編集者名	大庭孝夫(編集)・小澤佳恵・能登原孝道・柳古環境研究所・平尾良光・淀川奈緒子・谷水雅治・柳元興寺文化財研究所							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8375 福岡市博多区東公園7番7号 電話095-651-1111(代表)							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〇.〇	〇.〇			
堂畑遺跡	福岡県うきは市吉井町 新治字堂畑		40225	33°20'55"	130°45'28"	2000.11.13 ? 2001.3.7 2001.4.9 ? 2002.3.19 2003.4.15 ? 2003.10.31	10,500㎡ (1~4次調査 表地面積 14,000㎡)	道路建設 (一般国道 210号浮羽バ イパス建設)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
堂畑遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 中世	(1~4次調査総計) 竪穴住居跡 253棟 孤立柱建物跡 16棟 土坑 95基 溝 58条 円形周溝状遺構 5基 竪穴状遺構 1基 不明遺構(SX) 2		弥生土器 土師器 須恵器 石器 石製品 土製品 製塩土器 鉄器 小形仿製鏡 青銅器片 瓦 白磁 青磁 瓦質土器 磁器		・弥生時代中期後半 環壕集落 ・古墳時代前期 畿内系土器 ・古墳時代後期~ 奈良時代カマド付 住居跡が密集 ・円面硯、転用硯	

福岡県行政資料

分類番号 J II	所属コード 2 1 1 4 1 0 7
登録年度 16	登録番号 12

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第23集

堂畑遺跡Ⅲ

平成17年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

発行 凸版印刷株式会社
福岡市中央区薬院1-17-28